THE CENTRAL REVIEW

中央公論

三月號

大正十三年二月廿一日印刷納本
大正十三年三月一日發行(每月一回一日發行)

第三十九年 第三號 第四百三十二號

翻譯者（ABC順）

東北大學教授 青本正兒（支那童話）
浦和高等學校教授 馬場吉信（伊太利）
慶應大學教授 茅野蕭々（獨逸童話）
早稲田大學教授 日夏耿之介（亞剌比亞）
學習院教授 金田鬼一（獨逸）
楠山正雄（劇）
文學博士 松村武雄（印度日本 英吉利）
慶應大學教授 及川恒忠（支那）
陸軍大學教授 岡野馨（劇）
慶應大學教授 小山内薫（劇）
早稲田大學教授 西條八十（佛童謠）
第六高等學校教授 山宮允（愛蘭）
浦和高等學校教授 須川彌作（佛 和蘭 西班牙）
高等師範學校教授 竹友藻風（北歐 英童謠）
山崎理學博士夫人 山崎光子（トルコ、ペルシヤ、ギリシヤ、ローマ）
陸軍大學教授 米川正夫（露西亞 露童謠）
早稲田大學教授 中村白葉（露西亞）

◉全二十二卷の要目◉

第一■希臘、羅馬 伊太利 イソップ物語 外五篇
第二■獨逸(1) グリム童話集
第三■獨逸(2) ハウフ童話集
第四■北歐 アンデルセン童話集
第五■露西亞(1) アファナーシエフ童話集
第六■露西亞(2) クルイロフ、トルストイ、ソログープ
第七■英蘇格蘭 ハートランド ダグラス
第八■愛蘭 グレーブス イエイツ
第九■佛、和、蘭 西班牙 ラ、フオンテーヌ ペロール、グリッフイス、セゴヴイア
第十■印度 ジヤータカ、パンチヤタントラ
十一■土耳古 波斯 クノッス、オルコット、フイルヅン
十二■亞剌比亞(1) アラビヤンナイト
十三■亞剌比亞(2) アラビヤンナイト
十四■亞剌比亞(3) アラビヤンナイト
十五■支那童話集
十六■日本 日本、朝鮮、アイヌ童話集
十七■世界童謠集（上）
十八■世界童謠集（下）
十九■童話劇(1) 花嫁の冠 外十篇
二十■童話劇(2) ピッパ踊る 外十一篇
廿一■童話劇(3) 小さい夢 外十篇
廿二■童話劇(4) 森の輪舞 外九篇

略

體裁 形體―菊判新型。表紙―最上布製。裝幀―金文字典雅。印刷―鮮明正確。紙質―最上等。製本―機械嚴堅牢。

會期 期間―二十二ヶ月―大正十三年五月ヨリ向フ二十二ヶ月間
配本―毎月一回―毎卷ノ紙數平均七百頁以上トナル。

會費 申込金四圓八十錢（毎月拂―金四圓八十錢 申込金は最終回の費に當つ 一時拂―金壹百[illegible] 送料市内六錢地方十八錢）

内容見本 無料進呈 これだけにても世界童話の概觀と日本童話の發達とが分る

豫約締切 三月卅一日限

申込所 東京市京橋[illegible]相[illegible]第一 **近代社** 振替東京六二一九八番

發行所 東京市京橋區[illegible] **世界童話大系刊行會**





見られて

面白くて爲になる……


日本一の

時事新報!!

朝刊八頁、夕刊四頁

東京 時事新報社

賣捌所全國到る所にあり


鷹印
野に花
新人の頭上に最も良く調和せる
純品質主義
鷹印春帽子
新型―實質―技術―に於て斯界の雄！
株式會社高橋製帽所

紛々擾々たる政界の歸趨如何

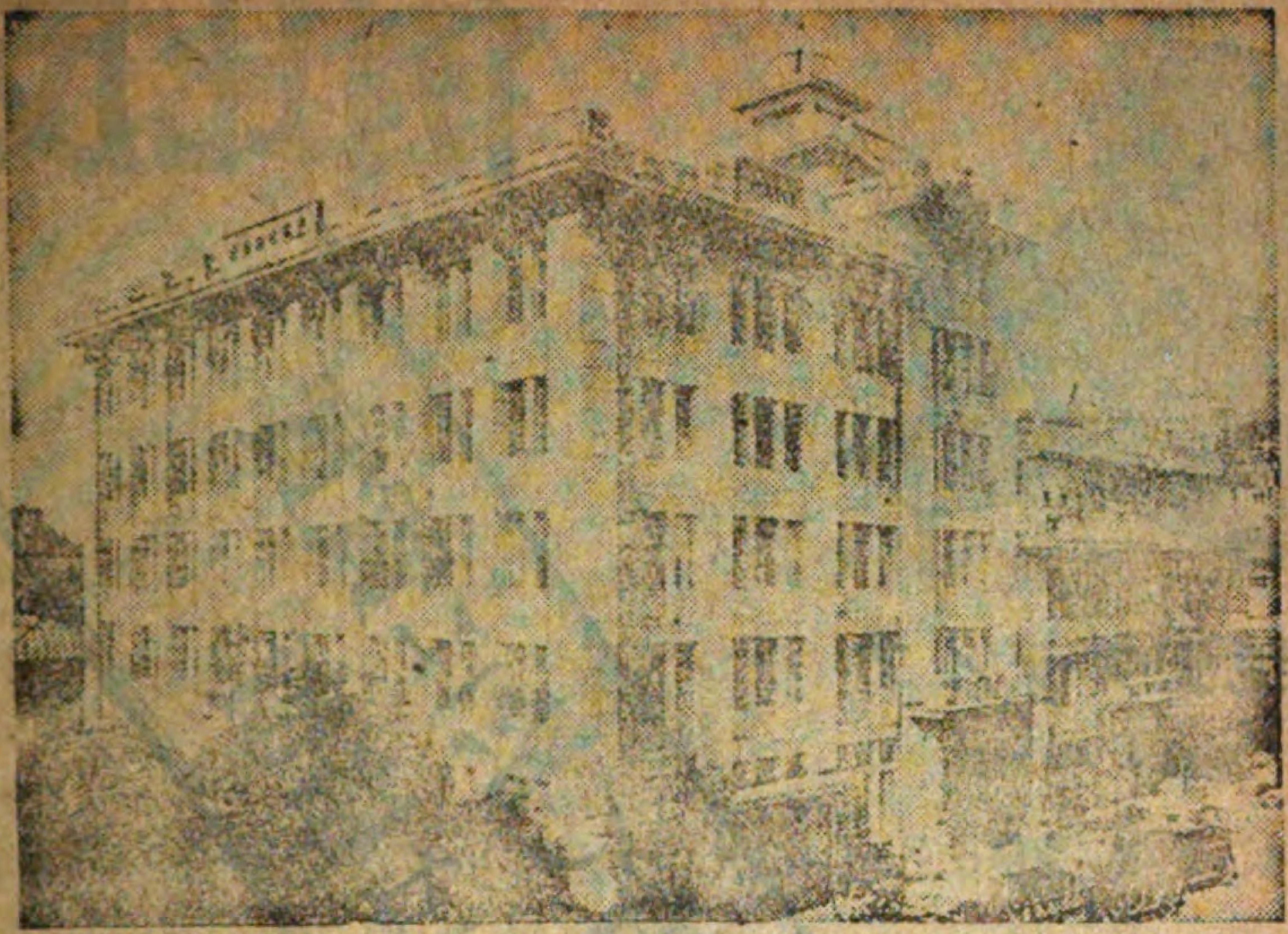
▼説苑

貴族氣質の研究



桃　源　圖　　　　小杉未醒筆

卑猥なる廣告の申込は謝絶す　中央公論社



朝夕刊

◇『東京日日』は極りなき多忙な世相の映寫幕(スクリーン)です殊に震災後帝都新聞界の先驅者です通信網の完備と報道の迅速と記事の正確とそして批判の穩健――政治問題に、社會問題に、經濟に、外交に、學藝家庭方面に世界のあらゆる方面の出來事を最新式高速度輪轉機モノタイプ其他優秀な文化機關によつてこれを讀者の前に提供するのです。『東京日日』はこれを誇りといたします。

東京日日新聞

◇『東京日日』は最も新らしい使命をもつて生れた『夕刊』によつて『朝刊』と並び立つて新聞界第一者の名を辱しめません、更にこの『東京日日』を母體とし背景として日刊『英文日日』があります。經濟界の好指針として定刊『エコノミスト』が發行されてゐます。新聞文化の完全な體系は實に我『東京日日』によつて表現されてゐるのです。

東京丸ノ内　東京日日新聞發行所　振替口座東京二八〇〇番

特命全權公使 川上俊彦氏序文
東京時事新報編輯次長 伊藤正德氏序文

◆ 白雲樓學人著 ◆

快傑レーニン

レーニン肖像及びレーニンに關する寫眞版二十葉挿入、四六版極美本、裝幀堅牢、紙質上等
定價金壹圓五十錢（郵税金八錢）◆

炎々としてウラルの彼方に立昇る焔を見よ！燎原の火は野を焼き山を焼き、爛々たる赤化宣傳の火の手は今汝の軒下に迫る。その焔の中に立つて革命の風雲を叱咤したるレーニンの眞骨頂を知らんとする者は讀め！

本書は年若き彼の生立、變幻出沒の革命運動の眞相、彼の思想、交友、嗜好等に亘り赤裸々のレーニンを解剖描出して餘蘊なく、その立籠れるクレムソン宮殿の神秘は一代の快傑たるレーニンの秘史と共に辛辣の筆に摘發せられて紙上に躍如たり。著者は帝大出身の俊才新進の評論家にして、嘗てロシア通の第一人者、曾てロシアにあつて革命の慘劇を目撃し、又近世外交の裏面に通曉する新人、本書の著者として右に出づるものなし。本社は充分の責任と確信を以て出版せるなり敢て一讀を乞ふ。

蓋世の偉傑が全面容は紙上に躍る！

川上公使曰く

今日までレーニンに對する研究としてこれ以上纏つたものを日本の出版界に見ない、本書の出版は社會の渴望を醫するに足るものである事を信じて疑はない。云々

伊藤正德氏曰く

日本に於ける代表的評論家たる氏が何故にかく匿名で發行されねばならないか。實に物足らぬ感を禁じ得ない。然しながらオーソリチーは匿名してもオーソリチーである

最新刊

東京市本郷區駒込坂下町
大日本雄辯會
（振替口座番號東京三九三〇番）

大正十三年

中央公論

三月一日發行

三月號

第卅九年第三號

第四百三十二號

公爭と私闘

政友會が分裂し、昨日の味方は今日の敵、甲乙兩派互に罵詈を交換する醜態は、人誰か之を堂々たる君子の爭と許すことが出來やう。政見の異同に依て分れたのなら、假令相手方の立場にどんな許し難い非理あるにせよ、辨難攻撃にも少しの禮讓を包んでもよかりさうなものだ。あゝまで罵倒するだけの相手方なのなら、今まで平氣で席を共にしたのが不明の譏りを免れまい、孰れにしても、分れてからあとの悪口の言ひ合は醜くきたない。

併し斯の如きは政友會ばかりのことではない。過去に於て同じ樣なことは下院の各黨派間に屢々あつたことだ。現に上院の研究會あたりでも昨今同じ事が始まつて居るではないか。要するに、政爭を正々堂々の公爭たらしめ得ず動もすれば私闘の列にまで墮落せしめるといふのが、我國政界の常態と謂はねばならぬ、而して斯の如くなるを世人が多く之を怪まない。が、しかし、憲政の理想より觀て——否極めて平凡なる常識より觀ても、考へて見れば、之れ程奇怪なことはないのである。

何事にまれ、意見は時に應じて變り得る。而して良心の鋭敏なもの程、意見の變に伴つて自ら其の態度を變へずには居れぬ。又正直に之を變へて行くものがあつてこそ社會も進歩して行けるのだ。若し、頑迷執拗な俗衆の反感を顧慮して正直に變へて行き難いとしたらどうなる。個人としては良心の壓抑であり、社會としては進歩發展の停止ではないか。だから、良心の確信に根ざす公事の論爭は、どこまでも自由に闘はしめなくてはならぬ。良心に根ざす限り、其の爭の動機は純だ。從て本來其間に醜悪なる私的憎悪の包藏さるゝ餘地はない筈である。

然るに怪むべし、獨り我國の政界に於て、公爭は常に墮して私闘と其の態樣を一にする。如何なる理由で斯くなるやと考ふるに、政客に道義的訓練を缺くと云ふも固より重な一因たらんも、最も主要なるは「政爭解決の不純」といふことに在らう。換言すれば、政客の思想行動の内面的價値が民衆良心の自由なる判斷に評價され、其結果として政界に於ける勝負の數が定まるのなら——所謂政爭なるものが、純粹に民衆の良心を地盤とする各政客の内面的價値の競爭であるのなら——勝て誇らず負て悔るさるを得やうも、よきものが勝つと決らずあしきものが却て時を得顔にはびこるとあつては、誰が眞面目に堂々の戰陣を張る氣にならう。今日我國に在て、政爭の

決は主として買收できまり叩頭できまり又利權できまる。一旦勝てば勝者は以上の悪德を行ふに有らゆる便利を享有することゝなり、其の地步は更に金城鐵壁の堅きを加へる。そこで相手方は尋常一樣の方法を以てしては到底敵の堅壘をおとし難しと知り、また有らゆる陰險手段を避けざるに至る。斯くては勝者も萬一の破綻に備ふる爲め敵の爲す所は一から十まで壓迫せずには居れぬといふことになる。平氏の盛時敵方源氏の殘黨を根ほり葉ほり探し出して其掃滅に鋭意したといふ心理狀態は、正に今日の政黨者流の政爭動因でないか。之等の點はくど〳〵しく述ぶるまでもなく讀者の夙に覺へ來れる所であらう。現代立憲制の治政に在ては本來「政敵」といふ者は少くとも他山の石でなければならぬ。否之に大に伸びる機會を與へて以て我が大を成す鑪戒たらしむべきものである。然るに今日の我國政界に於て、何處に敵に伸長の機會を與ふるを辭せざる雅量を認むることが出來るか。

相撲でも擊劍でも相手方に十分の機會を與ふるといふ公正の精神は凡そ競技に伴ふ第一の條件だ。獨り政界に此の德義の蔑にせらるゝは甚だ心外の至りである。而して更に奇怪に堪へざるは、啻に之を不可とせざるのみならず、斯の公爭私鬪混淆の謬想を前提として世上更に諸種の妄說を立つるものあることである。例へば夫が甲に黨し妻が乙に黨するの結果家庭の平和をやぶるの虞ありとして婦人參政權に反對するが如き、又は一町村の和平の爲に全村擧て今年は甲に投票し來年は乙に投票しやうなどゝ申合はすが如き之である。夫妻互に政見を異にしても猶家庭の平和は傷けられないと云ふ樣になつて居なければならず又さう導かなければならぬのである。甲黨に屬する家の嫁の實家が偶々乙黨の熱心な味方だといふ丈けの原因で、若夫婦が無理に離婚させられたといふ樣の悲劇も稀でないと聞いて、我々は公私混同の流弊の根深きに今更驚かざるを得ない。若し夫れ平和を名とする一町一村の一致の行動といふの類は、政黨の大量買收に利用せらるゝ最も顯著なる場合であつて、識者の特に警戒を要するものであるとやら。孰れにしても、公爭の爲に私交が棄されてはならぬ、斯かる憂ふべき變態は速に之を除却するに努むべきもの、這の實勢を基礎として果して如何の制を得策とするやは暫く別論として、之を始めから當然の事理の如く見做すに至ては、吾人大に其の昏迷を論さゞるを得ない。

要するに堂々たる公爭を醜陋なる私鬪の形に墮せしむるは、何と云つても我國政界の恥づべき特徵だ。而して其の由て來る所は、政客の個人的弱點のみにあるのではない。こゝに吾人は讀者の深刻なる注視を求めたいと思ふのである。

中央公論



第卅九年第三號
三月號
第四百三十二號

社會進歩の純粹原則（續稿）

杉森孝次郎

四、社會改良と輿論

ア、輿論の本質及び價値に關する豫備的知識

輿論といふことば及びそれに對當する他國語の歴史をばここでは問はない。輿論を一とつの不可能なもの、非實在なもの、無價値なものだとはなに人もついに考へえない。しかしながら、輿論の可能と實在と價値とは決して固定的でも、

一律的でもない。

輿論は、一面に於いては、それよりも氣まぐれなもの、移り變はりの易くして且つはやいもの、薄操なもの、無主義的なものはないといへるほどにも、表層深的、環境本位的なものだ。けれども、それは輿論の必然性でもなければ、全部質でもない。

輿論がいかにして發生し、いかにして成り立つてゐるかをしらべて見れば、それは、いはゆる群衆心理の一態として發生し、また成り立つてゐるにすぎないと概斷される場合はしば／＼ある。そして、その場合の群衆心理は、個々人の反省と熟慮的意志と責任意識とを甚だしく缺いたものである場合が同様にしば／＼だ。勿論、この場合の群衆心理に於いては、その群衆の構成單位としての各人は、むしろひとへに模倣本能及び群動衝動によつて代表される。その各人はかれの注意の焦點をかれの生活の外延上の或る側面にほとんど全然的に持つてゐる。かれの生活の内包的側面には、その場合に、或る著大なる不注意と無自覺が、在るべきものが不在のかたちに於いて、滿たされざる要件のかたちに於いて、存在する。

豫期される結果が自分一身のみに、あるひは自分一身に特に決定的に、有力に、切實に關係してゐると判斷されれば、通例、人の責任意識は强烈に、完全に發動する。その一身の代はりに一家であつても大差はない。しかし、普通人の場合に於てば、豫期される結果の關係範圍が廣ければ廣いほど、責任意識が薄らぐ。いはば、三千人と共に行動する場合には、その各人の責任意識は三千分の一人だけのものとなる。これが、群衆心理のたつとくない一面の可能を説明する一事情だ。勿論、事實としては、その三千人が平等に責任づけられてゐるといふことは滅多になく、そのうちの或るものは多少公認された總理株であつたり、他の或るものは幹事株であつたりするがゆゑに、三千人の多少組織的な、すな

はち多少無組織的な行動に於いて、その各人が三千分の一人だけの責任を意識するといふ文字通りの可能は先づない。ただ、結果が三千人に有利または有害なかたちに於いてふりかかつてくると豫期されるがゆゑに、責任意識を、その各人が、自分一身にそれがふりかかつてくると豫期される場合の三千倍だけの强さ、大きさに於いて持つ理想的可能は無論あるが、さうする現實的可能は、かならずしも常に期待されない。かへつて、多くの場合に於いては、現實的可能としては、責任意識は同志の人數に逆比例的に發動する。

けれども。輿論には、表層深的、環境本位的なものとしてでない發動及び成立の可能がある。眞の輿論、本質的輿論、在るべきかたちの輿論は、この可能の實現だ。一とつの社會の總成員のうちの、社會的といふ名を適當にあたひするほどの多數個人が、或る共通問題を意識し、しかもその意識しかたが或る程度に於いて共通であるとき、その意識の言論的表現を、あるひはその表現の內容としての意識そのものを、普通に輿論と呼ぶ。多數個人が一とつの問題を、同じしかたに意識するのではあるが、したがつて表現するのではあるが、實質的には、その多數個人の各者が、それぐに、獨立に自己の判斷力を使用した結果が、たまく一致してゐるといふ關係を、本質的輿論は具備してゐる。意味に於いては、かくして、本質的輿論の發生と成立とは、群衆と共にではなく、各個人と共にであるのだ。輿論が、その場合にも、群衆に於いて、群衆によつて、それの發生と成立を原因づけられ、機會づけられて觀えることは全然錯覺ではないが、それはその場合の根源的事實に對する眞認識ではない。根源的には各個人と共に發生し、成立してゐるものの一とつの派生的現象に對する眞認識を、それが全然錯覺でない場合には、それはそれの內容としてゐるのだ。輿論の最高形式は、最も發達した形式は、獨創の一致でなくてはならんのだ。

輿論が、現存の或る制度、慣習、したがつてまたそれらのものの思想的背景及び內容としての學說及び常識に對する

或る批判、或る不滿足、或る改良を內容とする場合がある。かかる場合に、その輿論が氣まぐれや、浮は氣しごとでない場合がある。經驗と共に、反省と共に、研究及び思索と共に、それが、いよ〳〵根づよく、要するにまた幅びろく、決意と實力を增したものとなる必然性的傾向を有するものである場合がある。かくの如き輿論は、その多數個人が各別的に有する人性が、それの自作の環境としての制度、慣習に對する多少の批判を伴うて、その環境下の生活を不滿足に思ひ、意識的に、すなはち理由を意識したかたちに於いて居心地わるく思ひはじめたことを意味する。そして、その場合に、その理由意識の內容は、現存の制度が可避的にわるいといふ意識だ。現存の制度を、他の或る可能的な制度にあらためさへすれば、現在の居心地わるさは取れて、居心地よくなれるに相違ないといふ意識だ。

經驗、反省、研究、思索、聰明及び氣力が增すにしたがつて消え去るやうな輿論は、輿論の名をあたひしない。しひてこれに輿論の名を付けるとすれば、それの一適稱は、似而非輿論だ。それは輿論として錯認された輿論以外、輿論以下の或るものであるのだ。それは、要するに、或る不まじめな群衆意識の發動であるのだ。眞に輿論の名をあたひするほどのものにあつては、現存制度の不完全に對する確認と、當在制度の可能と實現に對する知識及び要求が、足の裏にとげをささつた人が、それを拔かずには我慢が出來ないにも似た不安、焦躁の心狀をその輿論の當事者に形成する。眞の輿論は、決してあそびではないのだ。それは一とつの强烈なる必要意識の合成態だ。それの協働態だ。

およそ一とつの存在は、すなはち個的存在は、それの外延及び環境を、完全にそれの內包として持つ程度の高さに正比して位階づけられる。有意識的生類は、無意識的生類及び無生類に比して、かくして上位にあるが、有意識的生類のうちでも、高級者と低級者とが本質的に識別される客觀的條件はその程度の高低以外のものではない。

個人にとつて、かれの社會は、かれの或る外延であると同時に或る環境であるが、その社會を、かれが、いかに完全

にかれの內包以內のものとして所有してゐるかによつて、かれの本質的等級は啓示される。單なる模倣行動にすぎない群衆意識的行動は、その行動者の生活または存在の內包が、すくなくともその行動が關する限り、かれの外延に對して從屬的位置を形成してゐることの證據だから、それは、かれの自治主義、責任主義、及び創造主義が、それだけ不擴充であり、未發達であり、缺乏してゐることを意味する。本質的に個人意識または個人行動から獨立して、群衆意識または群衆行動が在りうるわけでは決してない。人は、個人的個人及び群衆人的個人の二元の混成ではない。人にとつて最も必要な一事は統一だ。そして、內包及び外延、自己及び環境の關係に於いては、その統一の本位と主體と原則と主義とは內包にある。自己にある。外延または環境を本位としての統一は、人にとつては根本的に不可能だ。統一欲そのもの、統一能そのものが、明確に內包または自己の特有だからだ。

各人にとつて、かれの社會は、それの空間的及び多少それに類似したその他の比較的に物質的な諸特徴に於いてこそ、かれのそとに存在するが、各人そのものが、背丈や肢手の長さなどを本質的內容とはせず、或る意識生活、或る精神生活を本質的內容とするものであるがゆゑに、そして社會の本質的內容も或る意識生活、或る精神生活以外のものではないがゆゑに、しかるに、意識生活や精神生活は、腦神經系統が生理的、物理的に各人によつて純粹に獨立に所有されてゐるといふ事實が徴示する通り、各人と共にのみ可能なものであるがゆゑに、すなはち各人と共に生起し、各人と共に進行し、各人と共に終熄するものであるがゆゑに、それは實に各人の內容として、作用としてのほか在りえないものであるがゆゑに、各人にとつて、かれの社會は、眞の關係と意味に於いては、かれのそとにでなく、かれのうちに存在する。ただその存在しかたが、常に多少不完全であるがゆゑに、各人は、かれの社會を完全にかれのうちに所有する努力の餘地を多少常に持つ。單なる群衆意識的行動は、したがつてまたそれの一種としての或る種類のいはゆる輿論は、そ

れの當事者たる各人が、かれの社會を頗る不完全にかれのうちに所有してゐる一形だ。一考して社會の統一を欲する努力だと判斷されるものは、實は、自己の生活内容の統一を欲する自治的努力にほかならない。一考して社會に對する責任だと判斷されるものは、實は、自己の生活内容を完全に組織づける餘地に對する認識、その餘地を充足する必要の意識にほかならない。一考して社會に對する創造的努力だと判斷されるものは、實は、自己の生活内容を豐富にし、幸福にする意志及び努力にほかならない。

輿論は、上述の如く、それの實在の根柢をば、また要するにそれの實在の全體をも、その當事者たる各人内に有するのだが、すなはち個々人が輿論の至實單位であるのだが、輿論にとつては、それの在りどころ、いひかへるならばそれの所有者が、孤立的、隔絶的に個々人であることは必然でもなく、必要でもない。かへつてその反對の極端が輿論にとつては必然でもあり、且つ必要でもある。その個々人が、孤立的、隔絶的複數人ではなく、交通、協働、合力を内容とする社會生活を或る程度にいとなんでゐるのだから、そして、輿論の内容たる、たとへば破壞的批判の對象としての惡しき現行制も、創造的批判の對象としての善き案件制も、その複數人を統一的に目的とし、且つ原因とすべきものだから、一とつの輿論は、それの輿論的形式の範圍内に於いて、すなはち或る社會善に對する要求、その要求の言論的表現といふ形式を逸脱しない階梯に於いて、現實の事情がゆるす限り十分に社會的に組織され、統一される自然可能と必要とを持つ。組織的、統一的要求及び表現は、輿論にとつて、無意識的、不完全意識的、完全意識的の三様式に於いて不可避及び不可缺だ。一とつの輿論が輿論として發達する方法は必然、當然、社會的であるのだ。

出版、講演、會合、通信、また主としてはそのうちの出版に屬する或る位置を占むる多數乃至諸新聞の協働並識、これらは、一とつの輿論が發達を與へられるために有用な或る社會的方法だ。勿論、パンフレットやリーフレットもこの

場合に多少聯想される。いはゆる宣傳ビラも、効果に於いてはあやしいが、目的のうちには一とつの輿論を刺戟的、激發的、そして瞬間的に發達させることを、甚だ不完全ながらしば〳〵含み持つ。

輿論といふ名は、或るものが、發生的には一とつの社會内の或る一人、あるひは或る少數人の意見及びそれの言論的表現であつても、それがその程度にとゞまるあひだ、それのあたひしない名だ。それが社會的に發達して、社會的または公的といふ名をあたひするほど社會的すなはち公的に發達するに及んで、はじめてそれのあたいする一名が輿論であるのだ。こゝで社會的または公的と呼んだ性質は、人數に於ける多大だけではない。その多大なる人數の間なる或る問題意識及びそれの言論的表現の組織的、統一的共通をもそれはそれの一要素とする。

しかしながら、輿論は、多くの場合に、或る社會的行爲を目的とするものであるから、概していへば、輿論が輿論としてどんなに發達しても、輿論の目的は未達成だ。その社會的行爲が或る制度の變改、或る制度の廢止、或る制度の新設であることもある。それはもつと臨時的、非原則的なものであることもある。現代の國家的社會に於ける開戰、不開戰、中立、講和、不講和の如きはそれの或る例だ。もしも將來に、軍備撤廢が一輿論を形成することがあるとすれば、それは直接に制度の或る變改を全部的または部分的目的とする輿論だが、現代のいはゆる主戰的輿論や非戰的輿論は、現存の制度の適用に關する輿論別にほかならない。しかし、一とつの輿論の目的は、一とつの輿論として完全に發達するにあると同時に、その發達の目的は、部分的には聰明または知識の社會的擴達そのことにあるが、代表的には、或る社會的行爲を出來るだけその社會民全體の自發的意志によつて、しかも出來るだけ研究と反省の具備された自發的意志によつて實現するにある。全社會民の聰明なる自由意志の發動のかたちに於いてその社會民の社會的行爲を實現することが輿論の道德的存在理由であるのだ。

イ、輿論形成の第一要件としての無組織的、非公制的教育、啓蒙、及び會合の先進

イの一、最初の注意

輿論の道德的存在理由の、すなはち輿論の目的の、中心部位を形成する要素は、代表的には、社會組織の或る原則的改善か、あるひはいはゆる時局問題の或る重大なるものゝ善き解決かのいづれかであるから、その輿論を喚起し、形成し、發達させる方法は、教育、啓蒙、會合の形式を主として必要とするのではあるが、その形式は、組織的、公式的のものではありえない。なぜかといふに、組織的、公式的形式の教育、啓蒙、及び會合は、それが組織的であり、公式的であるといふ事實によつて明示される通り、要するに、現存の制度の權威內の現象以外のものではありえない。現存の制度の權威內の現象にほかならない教育、啓蒙、會合の目的と努力すなはち方法が、現存の制度の權威を問題として扱ふ自由は必然的に、また當然的にも、甚だ微弱だ。

イの二、教育が關する部分

第一に、教育の社會的一方法としての學校について考へるに、官立、府立、縣立、市、町、村立乃至廣く公立の學校は、勿論善き意味に於いての輿論形成の、また勿論善き意味に於いての策源地として決して代表的有資格者ではありえない。またいはゆる私立にしても、意志と實質に於いて全部的に、あるひは全部的傾向を有するかたちに於いて部分的に、官立的、公立的である學校も、決してそれの代表的有資格者ではない。いなその種類の私立學校は、官、公立學校以上に無資格だ。不純と無力がその一層大的な無資格を構成する。

この原則的判斷及び立言は、小學校に代表される初等學校にも、中學校及び高等女學校に代表される中等學校にも、

高等學校に代表される階級の學校にも、大學に代表される部類の學校にも、多少の程度別だけを保つて、要するに例外なしに妥當する。

絶大の例では勿論ないが、松下村塾や、早期の慶應義塾は、輿論形成の一方法としての學校の資格を、すくなくとも傾向に於いて鮮明に看取しえられる程度に帶んでゐたものゝ部類に屬する。松下村塾は、それの物質的外形としては、六疊と八疊の二た間だけから成り立つた茅屋であつたさうだが、いはゆる設備の如きは、輿論形成の一方法としての教育にとつては、それ以下であつてさへも決して決定的問題とはならない。維新の改革と明治の文化は、輿論形成のかたちに於いても、いま注意した一塾と他塾とによつて、深甚にして發展力強大な原動力を供給されたのだが、その二塾ともに純然たる私塾であつたことは、決して偶然ではなかつたのだ。それは、かれらがあゝした社會的効果を持つためには、かれらにとつて本質的一必要件であつたのだ。路上の立ちばなしでも、電車のなかの交話でも、立派に輿論形成のための教育の機會たりうる。

教育の本質的定義は容易に構成されうる。そも〳〵教育は、それの在るべきかたちに於いては、第一に、對個人的には、人格的個性の完成を目的とする代表的、、他動的努力であり、第二に、對社會的には、文化の進化的保存を目的とする代表的、他動的努力であるのだ。勿論、教育は一全事だが、それには對個人的特徴と、對社會的特徴との二主要特徴が識別される。そして、その二特徴のおの〳〵の内容は右の通りであるのだ。

その二特徴は、文字通りに一全體の主要的二特徴にほかならないがゆゑに、その二特徴の間には、完全なる根柢的一致がある。そして、それは次ぎの事實によつて説明される。すなはち、人格的個性と文化との間には、決して二元的關係はないのだ。人格的個性と文化との間には或る本質的不離關係がある。人格的個性は、實に、文化の實體及び原因に

ほかならず、文化は、實に、人格的個性の作用及び結果にほかならないといふ關係が、人格的個性と文化との間なる本質的關係を確實に構成してゐるのだ。

文化内容の主もなる或るものとしての政治、經濟、結婚、教育、宗教、學問、藝術のどの一とつについて考へて見ても、その關係は明確に認識される。たとへば、立法的興味及び活動の結果が法律であり、研究的、思索的興味及び活動の結果が學說、理論であり、創作的興味及び活動の結果が藝術品であるといふやうにだ。この場合に、そのおの〳〵の興味及び活動は人格的個性の或る作用にほかならず、そのおの〳〵の結果は文化の或る内容にほかならない。

なぜ教育が、いふが如き對個人的努力の側面を有するかといふに、その理由は、すなはち、いふが如き教育の對個人的努力の當在理由は、それの存在の當然的理由は、比較的に自治能力の未發達な個人と、比較的にそれの發達した個人とが一とつの社會を共有してゐるがゆゑにといふにある。その場合に、その自治力高き人が、その自治力低きかれの隣人にむかつて、その隣人の成長力を條件として、その未發達の自治力に發達を與ふべく外部から出來るだけ助成することは、いく多の明知される理由によつて自然であると同時に當然だ。そのいく多の理由のうちには、いく多のかたちに於いての愛もある。またいく多のかたちに於いてのその教育者自身の自己保存、自己主張の意識的及び無意識的必要もある。

なぜ教育が、さきに定義した通りの對社會的努力の側面を當然有するかといふに、文化は、それが發達すればするほど、教育といふ特別の一社會的機能を、それの單なる保存のためにさへも、いはんやそれの進化的保存のためにはなほさら、必要とするからだ。いかなる文明社會のいかなる文明人の子でも、産まれたまゝ、産まれつぱなしの状態に於いては、いかなる野蠻社會のいかなる野蠻人の子にも、大體に於いて、要するに等しい。或る點に於いてはそれに劣りさ

へする無能者、低能者だ。もしも教育といふ私的及び公的努力が、一とつの社會の父母階級によつて、その社會の幼少年者階級にむかつてなされないならば、その社會の文化は、その父母階級の老衰、死亡と共に終絶する必然がある。

どんなに聰明な、そしてどんなに氣力旺盛な素質者として産まれ落ちた子供でも、かれが、教育的努力を加へられずに自然に成長する可能があるとしても、その成長は、かれの生物學的人格の成長以上のものでは要するにあり得ないかれの自然の經驗が、視まね、聽きおぼえ、失敗、それが機會づける反省、成功、それが機會づける自信等のかたちに於いて、かれを、かれの文化學的人格を、或る程度までは教育しえよう。しかし、この自然の經驗に依る自然の教育の能率には見え透いた、淺い、低い、小さい限度がある。例へば學問の深奧な、精細な研究、藝術や技術の精妙な、巧達な修得などは、通則としては、自然的自己教育の達しうる限度以上だ。師匠とか、先生とか、教授とか、指導者とか、學校とかいふたぐひのものを持つことが、人が一藝、一能に專門的に通達するためには、通例、必要だ。

教育的努力が、私的形式に於いて自由に、且つ多少强制的にも、行はれると同時に、それが公的形式に於いて、すなはち社會組織、社會機能の一部分、一要素として自由に、且つ多少强制的にも行はれることは、且つ、それが社會の進步、文化の發達、人格の成長と共に、いよ〳〵增進する理由は、かくして、容易に理解される。

教育の存在理由、教育の本質及び價値についての原則的理解は、上述の如くであるが、輿論形成の一方法としての教育の能力の問題となれば、研究と結論とは勿論もつと特殊的になる。

教育は、すでに注意した通り、一面に於ては、そして殊に現代に於ては、また殊に現代の比較的に高級文化の國家的社會に於ては、嚴然、亘然、その社會の公定制度の一をなしてゐるがゆゑに、一つの社會の制度殊にそれの比較的に根本的な種類のものを改正し、廢棄し、新作する努力の前線に立つ輿論が、それの養成が、その制度的教育の手に一任さ

れ、全部的に信頼され、その手によつて最も完全になされることを期待することが出來ない理由は、明白をきはめてゐるといはねばならん。實に、制度的教育は、その社會の原則的現存制度の一派生、一用具、一臣僕にさへもほかならないではないか。一とつの舟の中の一人が、その舟をくつがへすことがかりに出來るとしても、それは、かれ自身も同時にくつがへることを意味する。くつがへつても社會のために惜しくないやうな人でかれがあるならば、かれさへいやでない限り、かれがくつがへることは一更に問題でないが、その舟をくつがへすだけがかれの生存目的ではない場合には、先づ舟外の一層深い、大きい、自由な世界に身を置いて、くつがへすべき舟をばくつがへし、新造すべき舟をば新造し、なほその他の善をもなすにしくはない。

小兒は輿論の現實的生産者、所有者、また消費者たる資格には、現代が一般に想定し、制定してゐるほど酷烈には決して缺けてゐないが、なほかつ、青、壯、老年階級に比しては、その資格に於いて劣つてゐると判斷される。しかし、輿論の將來的生産者、所有者、また消費者たる資格に於いては、成人階級は必然的に、また當然的に、小兒に劣る。社會はとこしへにわかかるべきだ。それがなほ不盡の成長力を內具するといふ意味に於てだ。輿論の將來的責任者、決定者たる小兒をいかに教育するかは、小學校教育の一大注意事項であらねばならん。善き輿論の卵を孵化することが、小學校の先生の一責務であらねばならん。

しかしながら、この責務は、國設、公設の小學校の先生によつては、到底完全に果たされえない環境的制限がある。そして、現代の事實を見れば、いはゆる小學校の先生の多くは、その環境的制限に加ふるに自己の聰明及び良心及び勇氣の不足といふ內在的制限をもつてして、環境的制限が必要とする以上に、甚だしばしば、その責務を不完全に果たしつつある。

小學校の先生に無理なしに期待しうる限りを社會は、あるひはそのなかのいはゆる心ある人々は、小學校の先生に期待すべきであることはいふまでもない。しかし、社會は、善き輿論の卵を孵化する責務の一大部分をば、家庭の先輩、長者、先覺者に期待することが當然だ。いはば父母兄姉の階級が、それぞれの家庭に於いて、後進若者を善導する努力を拂ふべき餘地と、その餘地を滿たす必要とは、今日、實に絶大不可測とさへもいへる。

おの〳〵の家庭に於ける父母兄姉階級は、その家庭内の若年者に對して、本質的意義に於いての文明批評家及び哲學者であらねば無責任であると同時に、社會改良のための善き輿論の師表であらねば無責任だ。

家庭の根本要件の一は、實に、正しき意味、善き意味に於いての私秘すなはち英語のいはゆるプライヴシに對する協働的保護にある。それの良心的、純愛的共有互衛にある。それなき家庭は、單なる性的意識及び經濟的意識の混結にほかならない。それは、いはば色食の餓鬼の巣にすぎない。

いはゆる私秘は、それの外的關係に於いては多少のさしつかへを自明的に、そして現實的及び部分的に意味するが、それの内的關係に於いては或る深い、貴とい自由だ。眞に社會價ある思想、行動、事業は、すなはち創造は、自由の私秘境内に、そこにのみ、生まれ、且つ育つ。勿論自由の私秘境が家庭の特權や專有であるといふわけでは決してない。

官、公設の學校は、新設の制度に根柢を張らせ、枝葉を繁らせるための、もしもその程度の輿論を養成する餘地と必要があるとすれば、輿論を養成するためには役立つ。明治以來のわが小學校及び中學校は、それの著大なる一例だ。イエナ敗績後一世紀間にわたる普及び全獨の祖國崇信主義教育の深徹も同樣にそれの著大なる一例だ。普佛戰に於ける普の勝績は、普の小學校の先生が普の小學校の先生に勝つたのだと評されたことはきはめて妥當であつたと同時に、前世紀に於ける獨の制度的教育が、いかに完全に民族主義的、專制主義的、及び勿論すでに多少帝國主義的でもあつた輿論

の早く制度化されたものを、保護し、育成するにあづかつて力あつたかをかたる。近代の英の制度的教育が貴族主義的、資本主義的、及び比較的にまた教會主義的な輿論の早く社會組織化されたるものを、飽くまで堅牢に地がためする目的とかたちとに於てその社會民の心狀を感化し、決定するにあづかつて深絕、廣絕、强絕の力あつたこともまた一適例だ。

官、公設の學校教育は、制度改廢の輿論を養成する適能者ではなく、すでに改廢された制度を發達させるための輿論を養成する適能者であると同時に、その制度の價値を問ふかたち、あるひはそれを否定するかたちの輿論を豫防し、且つ顚壓する適能者だ。そして、その豫防されたり、顚壓されたりする輿論は、惡しき輿論であることもあるが、善き輿論であることもある。善惡混淆した輿論である場合が最も多い。制度的教育は、しかしながら、眞理の明判官たる條件を完全に滿たしうる位置と、事情と、關係とをば持ち合はせず、また持ち得ないがゆゑに、自己の立脚の礎たる現存の制度を純粹批判の對象とする立ち場をば、不問的、一掃的、獨斷的、專制的に否定する。制度的教育は、實に、勿論、官、公吏または官、公吏的であるのだ。

小學校の生徒が自治力に於いて最も不完全であるがゆゑに、小學校教育も、制度的教育體系內に於いて最も無自治的であつて當然だといふ論理は勿論決して成り立たず、かへつてその正反對の論理が成り立つのだが、現代の多くの國家的社會に於ける事實を見れば、その成り立たない論理が機會を得てゐる。大學と小學校とを比見すれば、教育的自治そのものに於いて、大學はいちじるしく老成であり、小學校はいちじるしく幼弱だ。過去及び現在の文化に莫大なる位置を占めてゐる原則的錯覺の一發現がここにもあるのだ。

名稱としても、小學校といふ名は適當でない。小學校教育は、文化保存のための、しかも文化の進化的保存のための唯一能力者としての新人格階級、新社會人階級を開發し、訓練する活動であるがゆゑに、且つ、それは、その能力者の

おの／＼を、一全人として教育の對象とするものであるがゆゑに、全體は部分よりも大だといふ形式論を無條件的に採用するならば、小學校こそ實は大學校であり、大學は、一科、一藝の專門教育を主とするがゆゑに、實は小學校だ。小學校を第一學校と呼び、中學校、高等女學校、高等學校あたりを第二學校と呼び、大學を第三學校と呼ぶ方が、わが國及び他の或る國々の現稱よりは正にして且つ善だ。

貴族といふ名稱は賤族の實存を豫想し、華族といふ名稱は、一とつの社會内に、單なる名譽的及び特權的階級と單なる實力的及び實功的階級との公存を想はせる。眞に貴なるものは、人間なかまの場合に於いては、その貴なるものが人である場合に於いては、人格の本質力の非常大と、社會を本質的に益する實行の非常大とのみによつて資格づけられ、また一とつの社會内の各人は、たとひ能力に於いては、たとへば幼、老、病、不具等のために制限されることはあつても、意志に於いては、すなはち主義としては、本質的社會價ある生活、すなはち廣義、眞義、全義の生産を代表位に確認し、確立すべきであるがゆゑに、現代文化に於ける不安當稱呼の、小學校の場合よりも多少罪深き姉妹的一二例として小學校の稱呼を問題とする多少原則的な意識に於いて、その邊の稱呼評も多少當然看過されない。

小學校教育者ともあらうものが、たとへば勳八等を甘受するといふこと、あるひは拒否しえない多少の制度的事情があるといふことは、かなしむべき事がらだと即斷されるが、しかし、いはゆる小學校が、制度的教育體系の一部を形成してゐることを忘れない限り、かくの如きも、まことによんどころない次第だとして淸くあきらめねばならんかも知れん。勿論、この場合、勳八等の代はりに公、侯爵であつても、それが教育者にとつて一とつのかなしむべき事がらだといふ意味も程度も絶對に同一でもあり、同等でもある。教育者殊にも小學校教育者ともあるものは、本質的、理想的には、文明批評家の實を具ふるものであり、哲學者及び社會改良家の實をも具ふるものであつてほしいのだ。聰明なる道德者

の實を具ふるものであつてほしいことはいふまでもない。

しかし要するに、制度的教育體系内の一部たる小學校にむかつて、殊にも現代の或る國々のそれにむかつて、その直接の社會の、すなはち自國の社會の、比較的に原則的な制度を改良し、改善するための輿論の養成を期待し、それの善き意味に於いての一策源地たることを期待しまたは希望することは、甚だしい無理、絶望に終はるべき、終はるにきまつてゐる期待、そらだのみ、あだのぞみを意味する希望であるといはねばならん。

一人の小學校教育者としての本質的教育者としての目的、自覺、責任意識と、かれの制度的、現象的教育者としてのそれとの間に、眞の一致が見いだされることは、かれの至願の一であらねばならん。この一致が多少とも見いだされないことは、かれの最深痛苦の一であらねばならん。たとへばわが國の近時の小學校教育者の内心の事實を觀察し、洞見して、この一致がいかに完全に、あるひはいかに不完全に存在してゐるとして見いだされるか。小學校教育者自身にとつての、その完全一致が意味する幸福と、その不完全一致が意味する不幸福とは、勿論決してかれ一己の幸と不幸とを意味する事がらではない。それは同時にその社會全體の或る健全と不健全とを意味する事がらだ。

良心を多少犠牲とせねば小學校教育者たる職責が果たされないといふ現實があるとしたら、その現實の意味は、その職務的教育者だけの心的不安にとゞまるであらうか。勿論斷じていな。

「道德教育及國民教育ノ基礎」は小學校教育に於ける支配的位置にある。これはわが國の小學校令の第一章總則の第一條にも明示されてある。同じわが國の小學校令施行規則第一章教科及編制の第一節教則の第一條のなかにも、「道德教育及國民教育ニ關聯セル事項ハ何レノ教科目ニ於テモ常ニ留意シテ教授センコトヲ要ス」といふ部分がある。修身科と歴史科とは、姉妹科的に小學校教育に於ける中心要位を形成してゐるのだが、そしてこれは原則として當然なことでも

るが、その修身科及び歴史科の設置及び教授の原則と方法とが、現代の各國の場合に於いて、多少とも重大なる反省を必要とする不完全なものとして存在してゐる。小學校教育に於ける修身科及び歴史科は、その後の教育に於ける精神科學及び社會科學の搖籃期でもあり、國民及び社會民の常識すなはち哲學すなはち宗教の最初の方向づけでもある。現代人にとつて、現代の國民と社會民とにとつて、これよりも重大なもの、これよりも意味深長なものは恐らくない。大抵の人は、かれの幼少時代に、かれ自身の精神生活内に形成した原則、信仰、理想を、たゞそれの擴大といさゝかの變形とを新たにそれに加へただけの差異に於いて、かれの墓穴にまで携帶する。小學校教育に於ける修身科及び歴史科を、原則意識の名をあたひしない淺い、薄い意識に於て設置し、教授することが、いかにその國民なり、社會民なりの將來を暗い、行きづまつたものにする一とつの大いなる原因及び方法であるかは、多く考へて見なくても明瞭だといはねばならん。一とつの國民なり、社會民なりの本質的發達は、その國家なり、社會なりが、それの小學校教育に於ける修身科及び歴史科を非本質的なものにして持つているといふ一事だけによつてもすでに十分に不可能にされる。

小學校教育に於ける修身科及び歴史科が原則意識を缺乏したものであれば、眞の客觀的意義に於いてそれを缺乏したものであれば、その生徒が成長するにしたがひ成長したあかつきに、かれは自然に、多少、輿論形成にあづかり、加はり、從事するにきまつてゐるが、その場合に、かれは、原則意識を缺乏したかたちに於いてのみさうする。したがつて、かれが、かれの國家なり、社會なりの比較的に原則的な位置にある制度、慣習、學說、常識等を、一層深い、一層正しい、一層進んだ、一層完全な原則意識にもとづいて、問題とするかたちの輿論にあづかり、加はり、從事する可能はない。その國家なり、社會なりの將來の輿論は、かくして、要するに現象意識、規則意識以内のものであつて、その輿論が赤くても、白くても、左傾的であらうが、右傾的であらうが、それは、要するに原則には無關係な、原則には觸れない、譬へて

いはば指相撲のやうなものであるのだ。その敵對兩派ともに、立脚地をば一とつの限られたる平面内、一とつの淺い表層上に持つてゐるのだ。その輿論は、その主張別、主義別、黨派別は、いかなる正しき意味に於いても根本的ではない。

一とつの制度は、それが當在的なもの、善きものである場合には、それの保存と發達が當然要求される期間がある。その制度は、直接にはその社會の或る有價なる安定を機會づけ、また原因づけ、間接にはその社會の或る有價なる進步を機會づけ、また原因づける。公制的教育は、その社會民の心狀をして、自發的にその制度の奉仕者たらしめる。その社會民は、公制的教育の努力によつて、その制度を、或る強制として意識せず、或る自由として意識する心狀を養成され、形式する。

およそ一とつの制度は、それが單なる、純然たる一とつの制度としてのみ存在するあひだ、すくなくともその社會民の或る部分に對しては、或る程度の強制をも意味する。しかしながら、強制は、いかなる場合にも、それ自身としては一とつの惡だ。もしも或る強制が道德的に必要とされる場合があるとするならば、それは、その強制がなければ、その強制以上の強制としての一層大なる惡が必至だと判斷される場合だ。たとへば、巡査が泥棒を追捕する強制を、その社會が單純に厭ひ避けるならば、泥棒が良民を侵害する強制が隨所に續發するだらう。泥棒が良民を侵害する強制は、質に於いて比較的に反社會的であると同時に、量に於いて比較的に社會的だ。すなはち、巡査が泥棒を追捕する強制は、質に於いて、いひかへるならば目的と結果とに於いて、公利、公福だが、泥棒が良民を侵害する強制は、それの目的に於いて單なる私利、私福だ。そして、それの結果に於いて公害と公禍だ。すなはち質的意義に於いて、泥棒の行爲としての強制は反社會的だが、巡査の行爲としての強制は社會的だ。これに加ふるに、量的關係に於いて、巡査が泥棒を追捕する數量と、その社會に巡査なき場合に於いて泥棒が良民を侵害する數量とは、私的と公的との差を形成するほどの懸多別、小大別を、現存の多くの社會の多くの場合に於いては、形成する可能が不幸にしてほとんど不可疑的に明確だ。

泥棒の自由が良民の自由を制限する量は、良民の自由が、警察制度設置のかたちに於いて、泥棒の自由を制限する量に比して、現代人の概般的品性を條件として考へる限り、多少遙かに小さいと推斷される。

公制的教育の發達は、その社會の惡しき、すなはち改革を要する制度を維持するにも、そのための心狀を平素的、不斷的に養成し、そのための輿論を臨機的、應變的に形成するにも、あづかつて大用をなすが、その社會の善き、すなはち保育を要する制度を維持し、保育するためにも、その方角にむかつての心狀を平素的、不斷的に養成し、その方角にむかつての輿論を臨機的、應變的に形成するためにも、あづかつて大用をなす。

善き公制的教育が善く發達すれば、善き制度がしたがつていよ〱保全されると同時に、現存の善き制度中の或る部分は、その社會民の品性化されることによつてそれの存在理由を善き意味に於いて失ふ。その或る部分とは、刑罰、懲戒を善き意味に於いて內容とする制度部分だ。善き意味の警察はそれの一だ。たとへば窃、姦、殺等は、それらが惡だと判斷される當然理由を有する限り、その社會に、それらを否定する法律と共に、それらを否定する公制的教育があるならば、その公制的教育の發達にいはば倒比して、その法律及び行政または權力は當然無用にされる。公制的教育の能率と効果が、その限りに於いて、制度の必要に取つて代はるのだ。公制的教育がその社會民に新習性を形成し、すなはち新品性を形成し、制度に於ける强制的部分を、外來力を內發力に移すことによつて、最も經濟的に、最も有効的に、最も道德的に、最も藝術的に、最も聰明に、すなはち最も有意義的に廢用にする。一とつの社會民の各員のたましひに錠が自設され、私設され、內設されれば、その社會の金庫に錠が公設され、他設され、外設されることは生活力のそれだけの浪費にすぎないこととなる。

善き公制的教育の善き發達は、かくして、その社會の單なる安定を目的として使用される精力を省いて、その社會の

進步に投資する餘力を生産する。

そして、社會民の善き品性を習性的に形成させる目的からいへば、そして公制的教育が關する限りに於いては、その教育をはじめる時期は早いほどいい。小學校教育は、かくして、その上の年度の學校教育に比して、その責任を一層大きく當然持つ。

一とつの社會に於ける公制的教育が、その社會内の權力階級によつて多少とも利己的、專制的に私用され、濫用され、壓迫され、買收されることとは、勿論わるい事だが、可能に於いてはほとんど必然だと知られる。公制的教育には、そのかたちの干渉や誘惑を避ける自由が或る程度までは本質的に缺けてゐる。

非公制的教育にあつては、然るに、これを避ける自由がある。非公制的教育は、必然的にこれを避けえないかたちに於いても可能だが、當然的にこれを避けうるかたちに於いても可能だ。これを避けうると、避けえないとは、非公制的教育にとつては、選擇を意味する問題だ。同じ私塾的學校のうちにも、過去の事實として、阿權的のものと、反權的のものと、純粹獨立的のものと、不純粹獨立的のものとがあつたこととは、これの例證に屬する。

要するに、しかしながら、公制的教育は、その社會の制度殊に比較的に根本的な制度が關する限り、それの保育に適し、それの改革には適しないといふ洞察と結論とが妥當に成り立つ。そして、この洞察と結論とは、公制的教育體系のうちに於いても、それの出發點としての位置を占むる小學校教育に於いて、そして、それに次いでは、中學校、高等女學校階級の教育に於いて、最も妥當に成り立つ。

現代に於いては、すくなくともわが國に於いては、中學校及び高等女學校は、或る意味に於いての教育的無思想の狀態にある。それは、善い教育風をも、わるい教育風をも持たない教育的無風帶に置かれてゐる。小學校に於いては、その

〳〵の科目とおの〳〵の教師は、生徒のおの〳〵を一各人として扱ふ。しかるに、男女中學校に於いては、この意味はすでに薄らいでゐる。さらにしかるに、その生徒の道德意識、社會意識は甚だしく未完成だ。未自治だ。またそこには、多少の例外を勿論條件とした通則的事實としては、一科、一藝の教師が、本質的教育者たる自覺、興味、能力に於いて小學校の教師に劣るのみならず、一科一藝の教授者としての本質的資格に於いて、大學の教師に劣る。かれらの多くは、教育者として小學校の教師ほどに深く、全く、純に專門的でなく、學藝者として大學の教師ほどに深く、全く、純に專門的でない。この事實が靑春期の男女、十五歳前後、十七歳附近の弱年者且つ若年者に及ぼす影響は恐らく絕大の反教育的、非教育的のものだ。わたくし自身が多少、直接的觀察の機會を持つたイギリス及び戰前のドイツの中學生などにも、なま意氣ざかりの若年者が手ばなしになま意氣にばかり成つてゐる點が目についた。わが國の中學生に於いて、この點が英獨以下だとは考へられない。中學校教育は、現制を相當に改革しない限り、輿論の苗の養成能には、善いかたちに於いても、わるいかたちに於いても、積極的形式に於いては、概括的にいふと、最も缺けてゐる。中學校時代に、若年者の常識と道德と哲學と宗教とは、現代の多くの場合に於ける實情としては、ひとへに荒廢に委されてすさむ。

善き制度を善く發達させるための善き輿論を、それの根柢及び苗芽のかたちに於いてなりとも準備する新努力が、公制的教育體系の一部としての中學校階級の男女の教育に加へられる必要が現代に於いて切實だ。そして、善き制度改革た原因づけ、機會づける爲めの輿論を養成するために、中學年代の男女のためにも、非公制的教育の出來るだけ完全なる設備が當然要求される。そして、それは、出版及び讀學の自由、講演及び聽學の自由、及び非公制的會合の自營的に、親切に創造し、保護することをそれの主要內容とし、代表的方法とする。

小學校教育者の世界には、近時のわが國の內實及び現象を觀察するに、或る不安が、かならずしも單一ならぬ種類に

於いて、看取される。不安の存在は問題の存在だ。中學校及び高等女學校の教育者の世界を見れば、しかるに、不安らしい不安、問題らしい問題はほとんど皆無に近い。轉じて大學を見れば、そこにては、教師の世界にも、學生の世界にも、殊にも法文科方面に於いては、或る不安が見える。中學階級だけに、たとひその教師の世界だけに期待すべき事からだとはしても、その教師の世界に於いてさへ、一身の問題のほか、社會不安、制度不安を直接に多少意味する問題がほとんど地を掃うてむなしいかたちになつてゐるといふことは、ちよつと考へて見ただけでも健全態でないといふ判斷が成り立つ。現代のわが國の事實としては、問題の持ちぬしは、公制的教育體系の範圍內に於いては、小學校の先生と大學の學生及び少數の先生らしい。その問題の內容、その問題に關する意識が、それらの持ちぬしにあつて、多少かれらの不聰明や不完全を意味するものであつても、無問題の人々にくらべては、かれらの方が聰明であり、完全であると結論される。勿論、當人自身の不まじめに原因を主として有する問題所有をば、ここでは問題所有とは見ない。まじめは、すべての人が持つべき一性質だから、或る人々が、かれらの持つべきものを持たないゆゑに、或るものを持つてゐるとするならば、或る人々が、かれらの持つべきものを持つてゐるがゆゑに、或るものを持つてゐないのとくらべて、前者は不完全であり、後者は完全だ。

　しかし、わが現代の小學校教育者に於ける不安と、中學校教育者に於ける無不安とは、決して、まじめの缺乏と富足とに原因を有する現象別ではないと判斷される。小學校の先生は、たとひ十分には及ばずながらもまじめであり、大學の學生及び或る先生は、やはりたとひ十分には及ばずながらも考へる。前者はともかくも自責し、後者はともかくも思索する。

　しかし、それは、中學校の先生や生徒が特にわるいわけでも、愚なわけでもない。第一責任者、主要責任者は制度

だ。中學年代の若者のための教育の制度と設備に不完全があるのだ。勿論、教師や生徒に不安を機會づけ、原因つけないがゆゑに、その教育の制度と設備が不完全だと判斷するわけでは決してない。ただ、現代の中學校及び高等女學校の場合に於いては、それの制度と設備との上に、在るべきものが無いがゆゑに、その結果として、それの教育者の世界に、またそれの生徒の世界に、發生もし、發達もすべき不安が發生もせず、發達もしないのだといふ關係が多少明確に現實的存在をなしてゐると知られる。

要するに中學校階級の男女の公制的教育に於ける修身、歴史、法制及經濟、教育等の諸科が、もつと十分に實質と内容と威力と精神とを與へられる必要がある。高等女學校に特に教育科が設けられてあることはよいが、本質的文化批評者、本質的哲學者、本質的社會改良者たる資格を必要とする母がどれほどそれに於いて豫想されてゐるか。勿論、社會は、それが公制的教育に期待しうる正當限度以外をば、非公制的教育に、一層根本的な努力をもつて求め、そして、それの手から與へられねばならん。社會改良すなはち制度改革のための輿論の種子の養成の如きをば、中學年代の男女の場合に於いても、ほとんど全然、非公制的教育の新設と發達に期待する當然的必要を社會は常に持つ。

公制的教育體系に於ける大學について考へて見る。大學は、小學校や中學校がそれぐ\にそれの生徒を目的とすべきであるが如くに、それの學生を目的とすべきであることは、大學の存在理由の公理的第一則といつていい。すなはち大學は學生を目的とすべきものであり、學生は學問を目的とすべきものであり、學問は眞理に對する純粹に知的な認識及び評價を目的とすべきものであると原則的、概斷的にいへる。勿論、ここでは、技藝の位置をば、學問の位置に對する理解と、或る特徴別だけを保つ、大要的同一の立ち場から認識した。

大學は、一面に於いては、その學生が普通教育既濟者であるがゆゑに、したがつてかれらは輿論に對する批判的、形

成的能力に於いてもすでに一とかどの、一人前の自治者であるがゆゑに、學校としての大學が、特に學生の輿論を、間接に養成したり、直接に形成したりする餘地、したがつて必要をば、自然、また當然、ほとんど極小限に持つ。大學は、しかしながら、他面に於いては、精神的、社會的學問の研究、教授を、あるひはそれの一部的、あるひはそれの全部的事業內容として持つがゆゑに、しかもその研究、教授が比較的に最も高級な、深奥な、原則意識的なものであるがゆゑに、輿論殊にもその社會の比較的に根本的な制度、慣習、及びそれらの觀念的背景としての學說、常識等に對する比較的に根本的な改革を內容とし、目的とする種類の輿論に對しては、間接に、また直接に、研究、批判、形成、指導、養成等を實現する必然可能と當然責務とをほとんど極大限に持つ。

しかしながら、一面に於いて、大學生に於ける對輿論的自治部分をば、かれらは、かれらの大學生としての資格に於いてのみ持つてゐるわけでは決してなく、かれらの社會の成人階級の或る成員として持つてゐるのだから、かれらの對輿論的態度は、研究のかたちに於いても、發表のかたちに於いても、その一層全體的な立ち場から決定されべきだ。かれらが、非公制的教育、啓蒙、會合に對して消極的、無關係的態度を取るべきでない理由がこゝに成り立つ。また他面に於いて、大學生中の精神的、社會的學問の專攻者でさへもが、第一に、その大學がその社會の公制的教育體系に於ける一要部である限り、それらの學問の研究、教授の上にも、多少の制度的制限が必然、また當然、有形的及び無形的に附帶されて存在し、作用する。研究、教授の自由が、それが公制的教育體系內のものであるといふ事情及び理由によつて、それでない場合に比して多少制限される側面を持つ。眞理に對する純粹に知的な認識及び評價の目的が、この側面に於いてそれの方法を持ちえない。したがつてその目的は、その側面が關する限り、實現されない。すなはちその目的は、その側面が關する限り、成り立たない。第二に、大學生中の精神的、社會的學問の專攻者でさへもが、現制に於い

ては、學問的目的と職業的目的とを完全に組織的に保護されてゐないがゆゑに、かれらの學問研究が、また或る程度までは教師の學問教授も、多少不純にされる。たとへば官吏、教員等としての制度的、官定的資格を目的としての研究、教授と、純粹の眞理愛、知識慾の滿足を目的としての研究、教授とは、現實の問題としては、かならずしも完全に一致しない。大學には、それゆゑに、學問部と職業部とを組織的に別設し、學生は、各自、かれの都合によつて、その兩部に兼屬することも、そのいづれの一部に專屬することも自由に出來るやうに、時間割その他を編成し、設備するがよいと考へられる。その學問部は、それの學生に、永久になんらの特典をも、特權をも、免狀をも、制度的資格をも與へない。その代はり、かれらは、かれらが本質的に相當の價値をみとめない時間や教場や學科や講義に學生として關係する責任や義務をば、道徳と秩序が必要とする以外には、負荷されない。試驗のため、すなはち資格や肩書を目的として出席し、聽講する事情と理由と必要からはかれらは全然自由だ。かれらは、職業部の學生に比して、愛眞、愛知の純粹目的以外の强制からはいちじるしく解放されてゐる。學生の目的を犧牲にして教師たる人の目的を目的とする弊に落ち入りやすき永任制及び專任制の如きも、學問部にあつては、一層困難すくなく輕減されあるひは絶廢されうる。純眞なる公的動機にもとづく輿論の如きは、この學問部の學生の環境及び心狀から、比較的に完全に期待される。けれども、一とつの輿論は、それが純眞なる公的動機にもとづくものである程度に正比例して、それが一とつの純眞なる輿論であるためのすくなくとも一要件、道徳的要件を滿たす。

　けれども、學問部の設備と努力が、どんなに完全にそれの最善可能を實現しても、精神的及び社會的學問の方法は、したがつて輿論を善作したり、指導したりする準備や機會も、すくなくとも現代に於いては、その方法、準備、機會として、全部的位置をば到底構成しえない。それは、非公開的教育、啓發、會合の完全なる設備及び努力と協働すること

によつて、はじめて全たいものとなる。

徹底的に考察すれば、社會が、公制的教育體系の一部たる大學に期待しうる主内容は、比較的に物的な、外的な、すなはち比較的に非精神的な、非社會的な學問の研究及び教授に限られる。理、工、醫、農科の如きは、かくして公制大學の適能範圍内の或るものだ。それから、制度的資格を必要とする職業教育、たとへば判、檢事、辯護士、開業醫、薬劑師、公制的教育體系の學校の教員等を養成する教育が、同樣にそれの適能範圍に屬する。精神的、社會的學問の研究及び教授のための方法と機會は、また學問技藝の純粹研究のため、純粹教授のための方法と機會は、公制的教育體系以外の社會範圍に、可能としては絶大に、現實としても或る著大なる程度に於いて、求められるにしたがつて與へ、叩かれるに應じて開く自由、非吝、愛、創造のかたちに於いて、確實に存在してゐる。たゞ現代人は、いまだにこれを求めず、叩かず、好んで學問的自己、したがつて輿論的自己をも、すべての年齡者を通じて、あまりにしばしば、あまりに甚だしい無自治、未自治、被强制、受專制、奴隷の位置と狀態に保存しつゝある。

イの三、啓蒙が關する部分

現代に於いて、啓蒙の方法と設備と機會とを、外的に特徴づける性質は、出版及び讀學の自由、講演及び聽學の自由、會合の自由の三要素に分解される。その三要素のうち、殊に出版及び讀學の自由と、講演及び聽學の自由との二要素については、わたくしは、この一作内の過去の或る部分に於いて、多少別の部分的目的にむかつて多少考察し、論說する機會を持つた。また會合の自由も、講演及び聽學の自由のうちには自然に多少含まれ、出版及び讀學の自由のうちにさへもしばしば多少含まれる。

公制的教育そのものに於いても、それの或る大いなる部分は、當然、出版及び讀學の自由、講演及び聽學の自由、會

合の自由から成り立つ。

しかしながら、この場合に、その自由の位置を十分に評價していふ限り、出版及び讀學、講演及び聽學、會合の三者ともに、その三者のいづれもが、非公制的であることを必要とする。あるひは一層完全にいひあらはせば、公制的及び非公制的兩方法が、その社會民の自發的所有、組織的所有、選擇的所有であることを必要とする。けれども、社會秩序改正のための輿論を目的とする限り、教育も、啓蒙も、會合も、主として非公制的でなくてはならんことは、社會秩序改正のための輿論といふ概念によつて論理的にかなり直接に明示されてゐるといはねばならん。

教育に於ける非公制的部分は、主としては啓蒙を内容とする。教育自身が、全體としては、廣義の啓蒙を意味しうることは勿論だが、特に啓蒙と呼ばれる事實は、その當代の權威に對する批判的否定を直接内容または直接特徴とする思想運動、教化運動を意味する。十八世紀のフランスを中心として歐米の社會に或る著大なる改革と進歩を原因づけ、機會づけた思想運動の名が「啓蒙」であることは、通則の一例だ。「啓蒙」は、時の政府に代表されたかたちの國家、時の教會に代表されたかたちの宗教、それから、或る程度まではクリスト教そのものに對する批判的破壞をも、それの主要特徴のうちに帶有した。經驗的、科學的、人間的要素を富有した新理想主義の實質と意識とに於いて、多少いちじるしく腐爛し、多少いちじるしく朽敗し、多少いちじるしく反社會的であり、要するに多少いちじるしく人性の本質的要求と社會の本質的存在理由とに離れ、そむき、遠ざかつた當代の外在的、惰力的、硬化的、時代錯誤的、不聰明的、無良心的諸權威を總統的、根本的に爆破することが、「啓蒙」の當面の目的であつた。それの本質的特徴は、制度及び廣く人間生活の進歩的再發見であつた。啓蒙の現象的特徴は時代により、社會によつて種々に異なりうるが、異ならざるをえないが、それの本質的特徴は一通してそれだ。たとへば、現代に於ける啓蒙には、經濟的自由の獲得、經濟の倫理化とい

ふ一新要素もある。國際、民族際、人種際新意識の確設といふ新側面もある。婦人の位置、小兒の位置の更改を直接關心事とする部面もある。わが國の社會に於ける啓蒙には、純粹政治の制度、慣習、學說、常識に對する根本的批判としての啓蒙も當然必要をきはめてゐる。わが國を亡國に顚陥し、わが民族を隸民に顚落する一真因が實にそこにある。國內政治のかたちに於いて純奴隸、すなはち精神的、道德的奴隸の位置を甘受し、妄信しつつある民族は、國際的に他國、他民族の有形的、身役的奴隸となる必然をさへも現代及び將來に於いては明確至極に持つ。人にとつての最惡事は意志に於いて自治であり、身體に於いて奴隸であるには存しない。それは、それとの比較に於いては、身體に於いて自由であり、意志に於いて不自由であるに存する。日本民族の政治的生活は、第一にそれの國內的關係に於いて、意志に於いての不自由であることを、なに人の理性か、それが理性の名をあたひするもの、すなはち純正真理意識である限り、ついに否定しえようぞ。

現代に於いて、輿論形成の第一線に立つ非公制的社會機能の一は新聞だ。現代の新聞は、概要的あるひは全般的に、賣ることを急ぐがゆえに、また甚だしばしばそれを主目的とさへするがゆゑに、それはそれの單なる報告的側面に於いても、多少不純なる報告者となつてゐる。賣るための都合が、單なる營利意識が、報告される材料の範圍と種類との選擇を決定するに多少あづかつてはたらく。時としては、いな通例はそれ以上の度數に於いて、その選擇された材料を報告するにあたつてさへ、忠實、眞實を多少犧牲として、讀者の一時的感興を刺戟すべく加減し、作爲する意志と習性を、現代の新聞は多少持つてゐる。

しかしながら、現代の新聞は、なほかつ大體に於いて、その社會の新鮮なる事實、事件の最も代表的な報告者であると妥當に判斷される。新聞の本質的社會價値はほとんど不可測的に大きい。大正十二年九月一日の大震災後の新聞紙に於

けろ京濟地方刊行の新聞の停絶のために、罹災地界隈の居住者及び國家が、いかなる損失と、不便と禍害とを忍ばねばならなかつたかを回想して見ただけでも、社會から見た新聞の用、すなはち新聞の社會價の一端は測知される。新聞なき社會は現代人にとつては、或るかたちの闇の世を意味する。

しかしながら、新聞は、現代に於いて、善かれ、惡しかれ、輿論界にその社會に於ける知的低級者の——そしてそれはいはゆる無教育者や、いはゆる頭のわるい人々のみをば意味せず、多少遠方の社會、異専門、別職業、深く自分が研究しなかつた問題については、社會が、それの外延に於いて擴大し、それの内包に於いて豐富に、複雜になつた今日、なに人も多少知的低級者だ——輿論を形成するにあづかつて甚大の力あるがゆゑに、現代の新聞は、この結果、すなはちそれの社會的結果に對して責任を負ふを至當とする。たとひ新聞作成者、新聞生産者の目的と動機は主として賣り擴めるにある、もしくは單に社會の現狀を社會人に報告するにあるとしてさへも、その作成、その生産の結果は、その社會人の輿論を大きく決定する必然と可能を持つがゆゑに、その作成、生産の目的、動機のうちには、この必然と可能を出來るだけ有意義にする、すなはち本質的に社會價あるものにする要素が帶ばれなくては、新聞生産者の社會人としての自覺と資格とはそれだけ不完全だといはねばならん。

現代の新聞にはいはゆる社說欄が通則的に特設されてある。また「近事片々」式の社評部も多少不確定的ながらに概在する。これらは、新聞が、單なる報告を目的とせず、同時に批判及び主張を、すなはち善導を目的とすることを意味する。これらの生産者にむかつて社會が、社會理性が當然要求する條件は、本質的意味に於いての文化批評者、哲學者、社會改良者、問題、專門、職業、地方に關する研究者、及び良心主義者または道德者たる意志と實力とをその社會の師表たりうる程度にかれらが所有し且つ實現することだ。

しかしながら、新聞生産者の批判的、主張的、すなはち善導的または教育的目的は、それを達成する方法は、いはゆる社說や「近事片々」のみによつては代表されない。新聞に於けるその他の部分が、むしろそれの主要部分、一層有力なる、したがつて一層責任ある部分だ。

新聞の場合に於いては、報告的記事の材料の範圍と種類との選擇そのものが、實は最も有力な批評であるのだ。選擇された限りの材料をば、或るかたちの藝術的加工、精製をば當然必要とするとしても、忠眞、忠實を犧牲とせずに新聞は報告すべきだ。しかし、いかなる材料を選擇するかを決定する動機のうちには、その社會に對する啓蒙的、教育的、善導的意志が壯健に自己を主張してゐなくては甚だしく飽き足らない。要するに、批判意識に於いて事實を選擇し、記叙することが、新聞にとつての第一要件であるのだ。理想主義的現實描寫、または實物教訓が、輿論形成の必然を有意義にする、すなはち倫理化する新聞の原則及び方法でなくてはならん。

先づわが國の新聞を見るに、本質的社會價の釣合を、プロポーションを途方もなくはきちがへた材料選擇、材料記述が多少いちじるしい。拾はれる價値のない事件を拾ひ、拾はれる價値のある事件を無視し、閑却し、あるひは篩ひ棄てる現實がそこに多少いちじるしいではないか。本質的社會目的から考へて、無視、閑却、篩ひ棄て、あるひは積極的批判攻撃を當然必要とする種類、性質の事件に、多大の注意、敬意、場面を供給し、有意義な事件、したがつて記事に機會を與へない弊風が、現代のわが國のどの一とつの新聞によつてさへも、當然問題とならぬ程度に進脫されてゐるとはなに人もついに結論しえない。

某名士が遊食、遊學、遊藝的生活の中毒症としてあそび的に情死したとあれば、都鄙の大小諸新聞が久しきにわたつてそれを社會の大問題扱ひする。同時に、他面に於いて、その社會の範圍内に、名もなき病母が、息子の失業に同情し

て、かれの生活苦を輕減すべく縊死したといふ事件があつても、それは大抵の新聞によつてほとんど問題とされない。本質的社會價から純正判斷をくだす限り、無益であつたり、不用であつたり、有害であつたりする人々や階級の事件でも、かれらが單なる、そして、甚だしばしば、その社會民の不聰明にもとづく現象的社會價に於いて大だとあれば、そのだれがどこへ旅行した、漕いだ、泳いだ、登山した、テニスした、戯語した、安眠した、善食したといふやうな記事までが、新聞内容の或る著大なる位置を與へられる。あるひは、その事件の直接關係者にとつてこそ或る重大なる意義を有する、しかしながら廣い、局外の社會からいへば問題として特に注意したり、意識したりする本質價なき、しかも人間にとつてきはめて普通な、平凡な事件でも、それが上述の如き現象的社會價に於いて大である人々や階級の事件だとあれば、新聞のこれに對する注意と意識とは特別と非常とをきはめる。

社會は、現代に於いては、それの外延に於いて實に廣大であり、それの内包に於いて實に豐富であるから、その社會内の人々の間に、思想、興味、趣味、意見、利害等の種類別も夥多だ、それゆゑに、一とつの新聞としても、その雜多の立ち場を多少各別的に、したがつてその新聞全體としては無組織的、無統一的、無主義的、無理想的に、すなはち單なる一時的、皮層的昌榮を支配則として、滿足させる努力を避けるわけにゆかんと考へる人があるかも知れんが、新聞が、賣ることを唯一目的とせず、啓蒙をも目的とする限り、そしてこの目的を徹底させる立ち場からいへば、新聞は、啓蒙的目的を犧牲とせずにしかも廣く讀まれる方法を常に發明するか、あるひは、啓蒙的目的を犧牲としない範圍の賣れ行きをもつて滿足するかすべきだ。

新聞生産にも多大の經費が必要だから、その生産者が商賣意識を全然持たないわけには無論ゆかないと推測するが、日本の現代の新聞を見るに、かれらは、多少必要以上に社會の愚におもねり、媚び、投合すべく、迎合すべくつとめて

ゐる形跡がある。現代の日本人の聰明は、かれらが想定してゐるらしいほどかならずしも低級ではないと考へられ、場合がしば／＼ある。もうすこし正直に、高級理想を紙面に實現しても、決して讀者の數を失なはず、かへつて増すだらうと考へられる場合がむしろあまりに多い。新聞生産者が、世間を多少錯覺的に不聰明視してゐるのではないかと疑はれる場合が繁い。そして、この事實は、結論としては、新聞生産者その人が自身不聰明であることを意味する。かれらは、恐らく、意識的に、故意に、世間の不聰明に適應してゐるのではなく、すなはちかれらは眼高手低であるのではなく、手低程度の眼高であるのだ。

新聞は、もつとまじめな、善い意味に於いてもつとアムビシヤスな、殉道的なものであつてほしい。そして、それがさうなるためには、先づ社會が新聞の社會價を十分に、完全に認識し、評價する必要がある。現代が缺くところの一大要件は、新聞觀すなはち對新聞意識だ。それの反省と發達だ。およそ一とつの社會内におろかなもの、狂へるものが、制度のかたちに於いてなり、慣習のかたちに於いてなり、公保され、公認されてゐることは、間接には、そして最も眞實には、その社會民全體がおろかであり、狂つてゐることを意味する。

現代の新聞は、それの功績に於いても、またそれの罪過に於いても、原因の原因をば現代の社會に持つ。

比較的に直接に個人的特徴を帶びる行爲や事業や性質をば、第一にその個人に原因づけて說明し、理解することが妥當だが、比較的に直接に社會的特徴を帶びる行爲や事業や性質をば、第一にその社會民全體に原因づけて說明し、理解することが妥當だ。たとへば加賀の千代の比較的に上作、純眞藝術價高き作に屬する各一句は、これをかの女の實質の或る表現と見ることが正しいが、一國の政府、議會、政黨、法律殊にも憲法の如きは、これをその國民全體の實質及び意志の或る表現と見ることが正しい。新聞は、社會的一全體現象としては、個々の新聞の個々の社長や部長や記者の頭

腦や、手腕や、品性を原因とするよりも、その社會民全體の識力と術力と德力とを原因とする。新聞は、それの通則的位置に於いて、たとへば加賀の千代の秀句と共通であるよりも、たとへば現代の日本の政治組織、それの內政的實行、それの外政的實行と共通だ。

各一人は、各他人からの多少の程度別及び種類別を保つて、獨自的創造すなはち獨創の單位であり、主體であるが、いかなる社會的行爲もが、したがつてたとへば國家的制度でも、國民的慣習でも、國家立法でも、國家行政でも、それの一としての國家外交でも、その社會の、したがつてたとへばその國家的社會の、大體に於いて成人的各成員の獨創力の或る合成すなはちリザルタントにほかならない。加賀の千代の一句は加賀の千代一人の獨創だが、日本の政治は日本國民總がかりの獨創だ。日本の新聞は、或る程度まで日本の政治と同樣に、日本國民總がかりの獨創だ。もしも日本の新聞が或る不聰明を示すならば、それは日本國民の國民的不聰明を直接に反映する依立的、派生的、現象にほかならないといふ意味を帶んでゐる。

殊にわが國に於いて、最近、新聞と雁行し、駢進して輿論形成の、及び養成の最前線に立つ非公制的方法の一は雜誌だ。或る種類の雜誌だ。新聞が報告を主とし、しかも日新の社會的事實の報告を主とし、批判をむしろそれの從位に置くに比して、雜誌の特徴は、多少根本的であり、したがつて永久的だ。殊にわが國の現今の雜誌は月刊をほとんど通般的條件としてゐるがゆゑに、その關係のみからしても、新聞よりは必然的にそれの內容が多少永久的な問題を扱ふかたちのものになつてゐる。わが國の現今の雜誌が、學說的及び多少永久的な敎養の時事問題をそれの主內容とする概況になつてゐることは、現實であると同時にそれの存在理由を多少暗示し、多少明示する。

いはゆる流行雜誌が、社會科學及びそれの根據としての、また廣く精神科學の特殊的研究と原則的研究とにそれの學

說的部分を特徵づけてゐることは、わが國が、最近、啓蒙的必要に、特に非常の程度に於いて、迫られてゐることの一表象だ。廣義の社會問題、思想問題がいはゆる流行雜誌の代表的內容を自然に形成してゐることは、わが國の社會に、制度不安、社會組織不安、及びそれの背景、基礎、內容、條件としての心狀不安が、かなり有力に、著大に發生し、發達しつゝあることを指標する。

雜誌の啓蒙力は、新聞のそれと共に社會的といふ名を確實にあたひするほどに著大なものだが、雜誌は新聞ほど廣く讀まれず、また新聞のやうに每日、しかも每朝及び每夕といふ無間斷的頻繁度數に於いては讀まれず、すなはち社會のたとひ或る表層深ながらゝの心層に食物の如く、空氣の如く連續的には觸れず、月のうち、週のうちに、善かれ、惡しかれ、かたのつくやうな問題、一、二、三旬の近き將來にどう變はるかも知れないやうな問題をば、雜誌は、「灼熱してゐるあひだにその鐵を打」つたり、「日が照るあひだに乾草を作」つたりする便宜を新聞に比してはしば〳〵絕望的に持ち合はせない。それらの問題のうちには、京濱大震災後、芝浦に停積された救急物資をどう處分すべきかといふやうな比較的に一時的意義のものもあるが、一九一四年八月はじめに、對獨宣戰すべきか、自重中立すべきかといふやうな、あるひは一九一九年はじめに、オムスク政府援護の出師すべきか、斷然非干涉の態度を取るべきかといふやうな、さらにあるひは、遲くとも一九二三年中に、露國に對する正式承認を先導的に敢爲すべきか、英、米の不承認を權威として不承認をつづけべきかといふやうな、決行に於いて瞬間的であり、意義すなはち結果に於いて永時的であるものもある。この後の種類の問題のためには、善き輿論の速作、急成の社會的必要は甚大だが、これは、新聞には期待しうべきも、雜誌には期待しうべくもない場合がしば〳〵ある。

しかしながら、なほかつ大體の可能としては、雜誌の輿論形成力は、新聞のそれよりも基礎的だといへる。その代は

り、雑誌としては、輿論の基礎的形成にむかつては、最も重大なる責任を自覺するを至當とする。

雑誌も、それの多く乃至すべては、多少商賣を無視しえない經濟的事情を有するがゆゑに、販賣政策が全然不必要にされるわけにはゆくまいが、新聞にむかつてと同樣に、啓蒙的誠意を犧牲とせずにしかも販路を擴げる努力、及び啓蒙的誠意を犧牲としない範圍内の賣れ行きに滿足するといふ精神的及び經濟的準備が、雑誌にむかつて社會理性の立ち場から當然要求される。

いはゆる個人雑誌と同人雑誌とにむかつては、その個人と同人とが啓蒙力を成るべく純粹に、そして高く、大きく持つ意志と實行を要求するほかに、社會から要求すべき事がらもないが、自由に原稿を廣い社會から選擇する性質を帶んでゐる非個人的及び非同人的雑誌にむかつては、すなはちそれの直接生産者としての經營者、編輯者にむかつては、かれもしくはかれら自身が、直接に筆をこそ執らね、直接にその社會民の意見、思想、批判、主張、研究の社會的發表を選擇的に、その意味に於いて自由にあるひは機會づけ、あるひは機會づけないかたちに於いて、間接に自己の對輿論的理想を實現する可能的及び必然的位置に對する社會人的自覺及び責任意識を飽くまで完全に、十分に持ち且つ示すことを、社會理性の立ち場からは當然要求せねばならん。非個人的及び非同人的雑誌は、原稿を社會の全範圍内から自由に選擇する意志をそれの一特徴、一條件とする點に於いて、個人的及び同人的雑誌よりも社會的だ。それだけに、それの社會的責任は、當然一層大きい。

新聞でも、雑誌でも、本でも、私立學校でも、およそこれらの非公制的教育、啓蒙、會合の方法と機會と設備と努力と企畫とが、それの直接生産者の心事として、現代の社會に於いて、すくなくともわれらの國の社會に於て、いまなほ、多少いちじるしく、あまりに大なる割合に於いて單なる私利的動機にもとづき、あまりに小なる割合に於いて純

なる公益的動機にもとづいてゐることは、物的社會價の生産者と分配者が、すなはちいはゆる富の生産者としての會社、工場の責任經營者や、それの分配者としての貿易、卸、小賣商人が、賣りをしみ、買ひ占め、生産制限、贅澤品生産の先きまわし、拂底高價策、暴利、輕薄品輸出等の單なる私利的動機にもとづいて、善かれ、惡しかれ、社會的意義の重大なるかれらの廣義の經濟的生産行爲を決定しつつある現狀と共に、それに劣らず、或る意味に於いてそれ以上に、社會的反省と社會理性の峻嚴なる批判的發動とを必要とする現狀だ。

いはゆる本が、輿論形成に關して、直接的及び間接的に、雜誌及び新聞と共に、或る甚大なる能力者であること、ありうることは、いはゆる國定修身教科書、歴史及び法制經濟の教科書の如きを多少例外として、その本が、社會問題、思想問題に、原則的にあるひは現象的に關係したものである限り、現代に於いては、すなはち殊に印刷と運搬の發達した現代に於いては、自明の一事實であり、一事理である。出版業者の社會的責任は不可測的に大きい。

社會理性が出版業者にむかつて當然要求する條件は、それが雜誌にむかつてする條件と原則的には同一性質のものだ。ただ、本は、多くの場合に於いて、廣義の教育または啓蒙に關して、したがつてまた輿論の形成及び養成に關して、雜誌よりも一層基礎的たりうる。したがつて相當に永久的たりうる。

現代のわが國の出版業者は、概しては、第一に時代の眞の必要を見うるための聰明に缺乏し、第二に眞の社會益を目的とする公的動機に缺乏してゐる。出版業の如きは、それが本の機會的生産であらうが、雜誌のそれであらうが、また勿論新聞のそれであらうが、その社會内の聰明及び良心に於いて最も卓越した人々の從事すべき選擇的一業だと明確に、深烈に、社會理性の立ち場からは斷言される。

へたに大學を創設したり、經營したりするよりも、いな、實に、いかに上手にさうするよりさへも、印刷、交通の發達

した現代に於いては、出版業者となる方が、教育、啓蒙、輿論善導の目的を達する方法として、どれほど優越であるか測り知られないほど絶大無限に優越だ。

しかしながら、他面に於いて、讀者としての社會の聰明の缺乏は、現代に於いて、實に、疑ふ餘地さらになく、出版物の機會的及び實質的すなはち執筆的生産者の聰明の缺乏以上に酷烈だ。現代の出版物の機會的生産者が愚な書物に公表の機會を與へることは、通則としては、それが世間に受けることを一豫期、一目的としての行爲であるし、執筆的生産者は、通例、自費出版の意志または能力なく、機會的生産者から機會を選擇的に呈供されることをその生産のための一先要件とするがゆゑに、愚な讀み物の社會的出現は、その社會民の愚を意味する。

そもそも現代人は、老いたるもののみならず若かきものも、聽學を偶像崇拜的に尊信し、讀學を錯覺的に輕蔑してゐる。その原則的心理にわれ知らず支配されてゐるがゆゑに、現代人にあつては、聽學的機會にのみ注意力が充實し且つ緊張し、讀學的機會には注意力が空疎であり、緩慢である。注意力の根柢的發動なしでは、肉眼は開かれてゐても心眼は閉ざされてゐる。どうも聽くとわかるが、聽かなくてはわからないが、讀んだんでは、讀むだけでは、わからないといふ現代人の一般の告白は、意味に於いて、原則に於いて、本質に於いて、眞價に於いて、コパーニカス以前の天體觀そのものだ。わが近古のラムプ亡國論そのものだ。フランス革命以前の歐洲諸國の政治組織そのものだ。教祖權威主義、經典權威主義、創世神權威主義、上天神權威主義の信仰そのものだ。尙古主義及び崇外主義の社會觀及び人生觀そのものだ。それらのいづれとも共通だ。

聽いてこそ完全にわからないが、讀めば完全に理解され、批判されるといふが學問者の眞の告白でなくてはならん。書き表はされてある思想ならば反覆讀も、精熟讀も出來るが、講義、講演、演說、討論、談話は、その音聲と共に比較

的に一度的、永久的に流れ去り、消えうせる。

讀み且つ聽くことは、讀むだけよりも、通例、上策だが、讀み且つ聽きうる事情下に生活しながら、聽くのみにして讀まないことは、百里、千里を遠しとせずに、山を越え、海を渡つてまではるばる笈を負うて碩學、先覺の人の居を訪ひ、住に入塾するほかなかつた印刷、交通未發達の時代の聽きうるのみにして、讀みえなかつた學問者の不便を、單なる習性的錯覺的强迫觀念のかたちに於いて、現代人が好んで忍ぶことだといふ以外の説明を成り立たせない現象だ。

勿論學問の種類によつて、たとへば機械、圖解、行動たとへば體操や舞踊が示すが如きもの、發音、文字通りの實物學たとへば農の或る部分の如きは、聽學を或る程度に必要とするが、直接的意義に於いては純粹に精神のみを方法とする種類の學問、すなはち、たとへば現代の大學の法文科が示す種類の學問は、耳をすます代はりに目をそそぎ、學校へからだを運ぶ代はりに書物を手もとへ取り寄せれば立派に研究される。

啓蒙、輿論が關する直接文化内容は、しかるに、比較的に純物的でなく、比較的に純心的だ。

講演の發達は、しかしながら、啓蒙の目的、及びそれの一層具體的、特殊的、直接當面的、瞬間的發現と見られる輿論形成の目的から考へて、或る大いなる存在理由を持つ。近時、わが國の社會に非公制的講演の開催の夏雲競ひ湧く概が見えることは、雜誌の景氣、新聞の部分的雜誌兼帶と共に、制度的及び思想的に、改革の社會的必要が押し寄せ、擡頭し來たつたことを徴表する社會的一現象だ。

讀み且つ聽くといふ目的からいへば、講演の發達は、常則的にそれの存在理由を有するが、讀まずして聽く慣習が巨在する現代にあつては、それは、常則的及び變則的にそれの存在理由を有する。

講演開催者にむかつて、すなはち講演の機會的生産者にむかつて社會理性が當然要求する條件は、それが出版業者に

むかつてする條件と原則に於いて大體同一だ。

比較的に偶然的、現象的、末梢的位置を占むる一特徴または一條件についていふならば、一日の講演、もしくは半日や一夕の講演に、講演者を複數ご揃へる如きは、啓蒙的目的の場合に於いては、通例、不賢明でもあり、不誠實でもあると概斷される。それはあまりにすくなく內包に注意し、あまりに多く外延に注意する一形だからだ。目的が眞の學問なり、啓蒙なりに存するならば、純と深とが、その講演の機會と設備にとつても必要だ。單に數量的に聽衆をむさぼる意志は、敎育または啓蒙の原則にそむく。一時には一事、そしてそれに深徹することが、時間的に適達する方法でもあり、空間的に擴充する方法でもある。創造は、それの最眞形と最初態に於いては、決してにぎやかではない。それは必然、當然、むしろさびしい。一とつのものがにぎやかであるといふことは、そのものが模倣であり、追隨であることの一證だ。寫眞でも複數は複製の一特質であり、名畫でも、多數は石版ずりの一特質だ。

あらかじめ相當の理解と興味をその講演者に對し、その問題に對して、持つてゐたいやうな人は、成るべく自發的にも、强制的にも、出席しない慣習が發達する餘地が現代のわが社會にはかならずしも小さからず發見される。またその講演者によつて公表された書き物でもすでにあるならば、それをば讀まず、それの存在をさへ知らずに、聽講にだけでかけるといふことなども、まじめな現象だとは到底考へられない。

現代のわが國の社會の最大必要事は、原則意識の缺乏にあるが、深く求めず、淺くあさる場合のうちには、原則意識の缺乏にそれの原因を有する場合がしば〳〵だ。浮薄に講演會を開催し、浮薄に聽講する如きは、この場合の範圍內だ。

選擇が代表する批判が、講演の機會的生產者すなはち開催者、及び講演の消費者すなはち聽者にむかつて、社會理性が當然要求する第一事であると同時に唯一的全事だ。講演の實質的生產者すなはち講演者に對する社會理性的要求條件

は、すでに說いた著作者に對するそれと同一性質を要するに持つ。

いつの時代、どの社會の場合に於いても多少あ[illegible]現象にきまつてゐるが、わが國の現代に於いても決して例外をなしてゐない一現象は、いはゆる講演者によつて代[illegible]される人々、すなはち概略的に學問、教化、啓蒙の指導者をもつてみづから多少ゆるし、他からも多少みとめられてゐる部類の人々が、或るいちじるしい程度までは、客觀的には、すなはち眞實には、自身が先づ啓蒙される必要を最も大きく持つてゐる人々であるといふ事實だ。清濁あはせ呑むと考へたり、となへたりして その實、濁のみを呑む可能がある如くに、玉石混用すると意識して、石のみを用ひたり、あつめたりする可能がある。この可能が、現代のわが社會に於ける講演會の開催者及び聽者によつて多少現實化されてゐる。勿論、いはゆる有名者または高名者を玉視し、いはゆる無名者または底名者を石視したわけでは決してない。

イの四、會合が關する部分

輿論の形成及び養成、啓蒙、教育、制度改革、社會改良、社會進歩等の多少共通的、互成的、相助的に相交錯した諸目的から考察して、會合殊に非公制的會合の存在理由は實に不可測大だ。一層直接には實に不可測深だ。

そも〳〵社會組織は、制度、慣習、組合、及び無組織的個人際協力の四要素から成るが、いはゆる非公制的會合は、この第四要素としての無組織的個人際協力の全形もしくは部分形だ。

無組織的個人際協力は、單なる現象的外形に於いて微小であり、單なる現象的實力に於いて薄弱であるけれども、意義に於いては、すなはち本質と論理とに於いては、抽象的にいふと、それは組織的個人際協力の直接形及び間接形（すなはち團體的協力）としての各種組合や、慣習や、制度よりも一層社會的たりうる

たとへば象山と松陰との多少の會合、小楠と南洲との多少の會合、レーニンとかれの少數同志との早期に於ける多少

の會合の如きは、非公制的會合がいかなる社會的意義を持ちうるかを例示する。長瀞以奥、秩父山中の荒川上流を見れば、人をして、天下、隅田川と最も異なる觀を呈するものはこれだとさへ先づ想像せざるをえざらしめるほどの質的及び量的別觀をそれは呈する。クリスト教、佛教、マホメット教の社會的發展を遡源して見ても、同樣の事實が發見される。たとへばマホメットの最初の志友はかれの第一妻としてすでに久しく同棲し來つたカヂジヤーに於いて發見された。その後十年間、かれの志友は遲々として牛歩よりも遲く增數した。

交通設備の發達した今日、非公制的會合の外的機會はほとんど完全に近いといはねばならんか、人性にははにかみ、うち氣、私生活愛着、プライヷシ、及び或るかたちのプライドの本能が深く固有されてゐるがゆゑに、現代に於いて、非公制的會合の機會は、ほとんど偶然的、自然的程度になほ依然として制限されてゐる。

しかしながら、啓蒙、改革の目的からいふ限り、現代人としては、それらの本能や深要求を保護しつつ、なほかつ非公制的會合を有意義に機會づける意志と努力とを必要とする。會、紹介、訪問の機會を賢明に、そして無論善良に愛育する私的及び公的方法が保護され、發明されねばならん。學校、クラブ、西洋に於ける敎會、學會、研究會、同志會、同業會、同鄕會、同窓會、親睦會の如きは、それらの或る部分的な、そしてかならずしも目的として十分に意識されない機能に於いて、多少不完全ながらその方法の現實形に屬する。しかし、これらのうち、ことばとして最も有資格なものは同志會だ。現代のいはゆる同志會は、しかしながら、甚だしばしば淺い、薄い、雜駁な意識の寄り合ひだ。學會と研究會は無論同志會のあるかたちだが、標榜がまじめなだけに可能として當然多くを期待される。

わが國の待合、料理屋は、まじめな人がまじめな目的をいだいて近寄れる場所では概してあるひは總じてないがゆゑに、無資格だが、喫茶、會食の或るかたちなどは、改革の先驅としての非公制的會合の一機會なりうる。

この問題を意識するにつけても、わが國に社交的精神及び實行が甚だしく未發達の狀態にあることは、社會改良、社會進步のための一大要件を缺いてゐることを、それの一側面的意義とする。

イの五　最後の基礎條件的注意

教育、啓蒙、會合の全形及び或るかたちが、輿論の養成及び形成にとつていかなる位置と關係にあるかは、以上に於いてほゞ考察されたわけだが、教育も、啓蒙も、會合も、第一に獨創力に對する完全なる保護と、第二に全社會民の文化的水準を高める努力と、第三に社會の外延すなはちそれの人口と生活地域とを保護し擴大する意志及び實行と、第四に社會民の生物學的根柢的元氣活力を增進する用意とを基礎的條件のうちに缺くならば、要するに水上の文字だ。

獨創は萬有の本質だ。たゞそれが人にあつて、人類の責任ある認識が到達する限り、他のなにものに於けるよりも高度に具備されてゐる。人の代表的特徵は獨創だ。

非公制的會合の或るかたちが、輿論形成、制度改革の發祥地だといふ理をわたくしは注意したが、會合の奧にはすくなくとも二人の人が、それの構成單位的根本實在としてのかたちに於いて、各別的に、自他獨立的に存在する。もしもその二人の兩者に多少の獨創力がないならば、あるひはすくなくともそのうちのいづれたりともの一方にその社會の文化的水準を多少高く抜いた程度の獨創力がないならば、その會合からして、なんらの善き輿論も、改革も、社會進步も期待される可能的理由も、必然的理由も、當然的理由も決して成り立たない。譬ふれば下流なくして江海はありえなく、中流なくして下流はありえなく、源流なくして中流はありえないが如き必然的因果關係が、獨創的個人と獨創的會合との間、またその會合と一層包全的な、外延的な社會との間には確實に發見されるのだ。

水前寺公園のもく〳〵と湧きいづる狹い、限られた個處の噴きで水が、數町もあるかないかといふ受け續きの流れと

なれば、兩岸かなりに相遠く、遊船、漁舟を輕く泛かぶるあるひは汪滿たる、あるひは漾洋たる一帶川を形成してゐる。碓氷峠の一側なる源水池を見れば、掬ひ汲すことも出來さうな細微なる湧き清水が、數間さきの續きとなれば、ほとんど太白の「崖を砯し石を轉じて萬壑雷る」を聯想させる、小さいながらの水勢を形成してゐる。井の頭公園内にも寸泉が町池となり、町池が遠流となつてゐる實景がある。社會に於ける獨創力高き個人の位置は、關係の或る譬喩的理解にしたがうたこれらの噴泉の一だ。

江川河海はなに人にも知覺され、意識される大きさと勢ひとを現實に、顯著に持つ。しかし源泉を知る人は稀れだ。最初のうちは、源泉を知るものは源泉自身だけだ。天才の密室に於ける深想と秘意が、多少の將來に於いて街頭の人、市の人、村の人、濱の人、森の人、山の人にかれらの考へたり、行なつたりする百事、萬事を、あたり前の事として考へさせたり、行はせたりするやうになるとが古來の常例だ。今日に於いて種痘することは獨創でない。けれども、それが一とつの獨創であつた場合が曾つてあつた。もしも今日、種痘せず、しかも天然痘にかからない一層簡易な方法を發明する人があつても、かれはしばらくはさびしいだらう。

深い獨創が表面へ浮びでるまでには多少のひまがいる。淺識にして短氣な社會は、それが表面へ浮かびでる前にそれを毛ぎらひし、異端視して沈滅させてしまふ。天才は天才だ。獨創は獨創だ。環境の保育を必要とするやうなものは、それが天才でない、獨創でない證據だ。人生と宇宙には價値保存の法則がある。眞價あるものが、眞に社會價あるものが、早晩社會から公認されないわけはないなどと簡單に考へ信ずるならば大ほまちがひだ。試みに想へ、いかなる船頭でも、とてもふなでの出來ないあれ天氣もあるでないか。いかなる帆船操縱の名手でも、無風にで遇つては航進することが出來ないでないか。太陽燈が消え、地珠が冷えてしまつたら、英雄も發明家もあつたものでないでないか。

近松を現代に生きさせたら、個性描寫も遺憾なく出來たらう。けれども、かれの最大傑作でさへもが、たとへば「心中宵庚申」の如きにしても、或る意味の類性には徹底しえたが個性には徹底しえずに終はつた。しうとめを描けば、いかにも眞にしうとめらしく、嫁を描けば、いかにも眞に嫁らしく、里の父母姉妹を描けば、いかにも眞に里の父母姉妹らしく、遊女を描き、子僧を描き、武士を描き、町人を描き、海賊を描き、道樂息子を描き、かたぎのおやぢを描き、筆端の觸るる限り眞實を活躍せざるはない。しかしながら、世にしうとめだけの人、嫁だけの人がないことは近松にもわかりすぎるほどわかつてゐたにきまつてゐるが、封建主義、階級主義の社會に産まれ、生き、そして死んだかれは、人性描寫に、それの理想的可能にしたがうて、十分なる徹底を示すことは出來なかつた。かれが描いた人情も、義理も、欲得も、理非、曲直、正邪、善惡も、賢愚でさへも、當時の社會の制度、慣習、教說、常識の成立層だけの深さに徹底したものであつて、さらに深く徹底して、當時の社會がまだ自覺もせず、意識もしない、しかしながら人性の深實在であるにきまつてゐる新生活、新道德、新社會を、かれは、戲曲がゆるす當然範圍に於いてさへ、活躍することは出來なかつた。おのづから有力に暗示することとすら出來なかつた。

同様の例はシエークスピーヤにもある。かれは封建主義の批判者ではなかつた。

ミルでさへ、福澤諭吉でさへ、そして、政治組織に對するかれらの意識と發表に於いてさへ、もしもかれらが現代に生きたなら、もうすこしちがつた考がへかた、ものの言ひかたをしたに相違ないと推斷される點がある。

プレトーやアリストートルも奴隷制度に對する批判者ではなかつた。セネカもその點に於いて例外者でなかつた。ヤソも帝國主義、專制主義、階級主義に對する批評家ではなかつた。

獨創力は、原動力であると同時に完成力だ。獨創力は、しかしながら機會力ではない。社會進步に於ける機會力はそ

の社會民の水準的文化だ。獨創力高き人、獨創力深き人は、かれの社會の現存文化、現存生活に刺戟されて、はじめてかれの獨創力を自覺する。かれの社會の現存文化、現存生活は、かれにとつて或る意味の材料だ。アリストートルが意味したかたちの材料だ。獨創力高き人は、材料自分が形成しえない材料自身の本質形を、その材料に代はつて形成する、材料自身の本質形は、材料自身の當在態だ。それはすなはち材料自身の理想だ。獨創者は理想の生産者だ。かれはかれの社會の理想を生産する自然的及び當然的分業者であるのだ。

材料をかたちづける可能は無限ではない。それは第一に材料自身の本質力によつて制限される。その本質力の最高限度、最善可能にしたがつてその材料を形成する人が、それの社會に於ける獨創者であるだけのことだ。材料が本質的に粗末であれば、いかなる獨創者も、粗末な形成を餘儀なくされる。なに人も麥の苗に稻の穗を結果づけることは出來ない。

いかなる獨創者の場合にあつても、社會に於けるかれの位置は、はなしたい事を持つてはなしかたを知らぬ人のために通辯する人の位置と共通だ。それはまた、なほしたい病まひを持つてなほしかたを知らぬ人のために治療する醫者の位置と共通だ。獨創者を持たぬ社會、獨創者を保護しない社會は、主觀的には自己保存を目的としつつ、客觀的には自己破壞を方法とする。素人考へで、拔かずに置きたい齒、拔かない必要のある齒を、醫者が拔くことの必要を說き、しひてまで拔き取らうとしたなら、拔き取つたなら、淺識にして且つ短氣な患者は、醫者を有害視し、制裁をかれに加へるだらう。かれが醫者の善意と聰明とを發見するのは、多少久しいあとになつてからの事だらう。社會進步の場合に於いては、そのあとさ加減が、自他の存命中のこともあるが、孫のまた孫の代であることもある。最近のわが國に一例をさがすならば、露國をば、英國よりも早く承認した方が、一層愛國的であつたのだといふ一適例が見つかる。

社會の文化的水準をすこしでも高めることが、社會が社會自身のために獨創者に機會を與へる眞の方法だ。明醫が見て拔くべき齒を拔かせずに短命したり、眞の親切によつて無理にも拔かうとする醫者を毆ぐりたふしたりする患者が、一つの國家であることもある。それは一つの民族であることもある。それが公刑のかたちを取ることもあれば、それが私刑のかたちを取ることもある。そして、かくの如きは、その社會のために、まことに悲しむべき事であるがゆゑに、その社會は、平素に於いて、さうした心得ちがひの起こる可能がないやうに、つとめて自分を啓蒙し、教育する必要がある。

一とつの社會の法律は、その社會民の水準文化を標準として作られる必要が、デモクラシが發達すればするほど高くなるし、一とつの社會民の水準文化は、その社會の公制的教育殊にも小學校教育によつて、終身的に方角づけられ、傾向づけられ、素質づけられる可能が通例不可避であるがゆゑに、教育の原則と方法を、それの初發的、基礎的早期態に於て、飽くまで本質的なもの、理想的なもの、道徳的なものにする社會的必要は、この關係から考へても眞に絶大だといはねばならん。

社會民の理解しない法律は、デモクラシさへ發達すれば、成り立たなくなる必然があるが、いかにデモクラシが發達しても、それが同時に文化の發達を意味しないならば、その社會民は、廣義の私刑及び公刑のかたちに於いて、獨創者を成り立たせない可能がある。すなはちその社會は進步しない可能がある。

一とつの社會が、獨創者を理解するといふことは、單純なかたちに於いては、十分に期待される理由はない。一とつの獨創的思想なり、行動なり、事業なり、製作なり、品性なりが、完全にその社會民によつて理解されるといふことは、勿論、それが獨創でないことを意味する。それが一とつの獨創である限り、獨創であるひだ、多少は社會民に理解

されても、完全に社會民の全體によつて理解されるといふことは、その概念の論理が否定する一命題だ。こゝに於いてか、獨創者が、或る程度のさびしさや、不遇を忍ばねばならぬといふ結論は、どんなに社會が進歩しても避けられないが、その獨創者の言論の自由をさまたげたり、かれの生存に危害を加へたりするやうな強制をば、社會は徹底的に否定する必要を持つ。勿論、社會が、獨創者を獨創者と知れば、かれの言論や、かれの生存に機會を許しむ筈はないから、通則的、原則的に、言論の自由が意味する限りの行動の自由、したがつて生存の自由をば、社會は、それの各成員に確實に許容する必要がある。それだけの雅量、謙遜、大度、寛厚、愛、プライドをば、いかに淺識にして且つ短氣に生まれついた社會民でも、社會道德の最低限的一要件として自認し、自守することを至當とする。

勿論、文化の水準を飽かず高めることを本質的一要件とするデモクラシが發達すれば、社會民自身が、善き輿論を形成する資格をしたがつて完全に持つ必然はある。たとへば、わが幕末の改革的意見は、少數の識者群の專有であつたが、今日ならば、相當の改革的意見は、もつと多數者の共有として發見される必然がある。そして、これが社會のために慶賀すべき一大祥事であることはいふまでもない。しかしながら、善き輿論が完全に全社會民の自發的純粹創始のかたちに於いて常に機會をえるといふことは、事實上、決してありえないのみならず、それは、單なる傾向としてあつてさへも、その社會のために最深戒懼を必要とする一大不祥事だ。なぜかといふに、それは、その社會民には、獨創が無限に必要とする各人の個性の發達が外因すなはち環境力か、内因すなはち素質力かのいづれかによつて、あるひはその兩者の協働によつて、低調にされ、無能にされ、不活潑になつてゐることを意味するからだ。いはばその社會民が、どん栗のせいくらべであり、羊群であることをそれは意味するからだ。

多少常にありうるこの不祥的傾向を救ふ一方法は、社會を、それの外延にしたがつて大きくするにある。一とつの社

會を　それの外延的關係に於いて大きくするとはなにをさしたのかといふに、それは、その社會の人口を有意義に增すことと、その社會の地域を有意義に擴げることとを、代表的、特徵的、選擇的、直接的には、さす。

一とつの社會が、どんなに完全にそれの內的組織　內的關係を形成し、保存し、進步させる努力を拂つても、もしもその社會が、人口に於いて小さく、地域に於いて狹いならば　その社會の生命は、それの人口がもつと大きく、それの地域がもつと廣かつたと假定した場合との比較に於いては、次第に硬化し、朽廢する可能が高い。支那が、人口と地域とに於いては比較的に大だが、生活と文化とに於いて、あまりにすくなく他の社會との接觸、交通、協力、競爭の機會を持つたがために、近代に及んで、その機會を豐富に持つた歐洲民との比較に於いて、いちじるしく委靡、停頓の狀を示す如きは、この原則の一例と見られる。日本が、小島にして大陸から隔在し、ほとんど文字通りに「みづからいふ先世秦亂を避け、妻子邑人を率ゐ、此の絕境に來たり、復た出でず、遂に外人と間隔す、問ふ今は是れ何の世ぞ、乃ち漢有るを知らず、魏晉を論ずるなし」といふ「桃花源記」のなかの記述を實示した狀態と傾向に大體に於いて古來あり、それに加へて德川氏の鎖國政策がその狀態と傾向に最後の助長を與へたといふ事實があつて、維新後、環境は一變したけれども、いまだ能く發明力を示すに至らない。これもまた小社會即亡社會の一例と見られる。

人口多く、地域廣き社會にあつては、しかも、それが社會といふ名をあたひするほどの接觸、交通、協力、競爭、組織を內具したものであれば、文化氣候も、自然氣候も、したがつて複雜だ。人口の多は人的個性の豐をそれの一意義とし、地域の廣は物的個性の富をそれの一意義とする。民族の體質と氣質とは、自然氣候に負ふところ深く、民族の思想と感情とは、あるひは最廣義に於いての學問と藝術とは、文化氣候に負ふところ厚い。人口の或る數は、人的個性のそれだけの種類數だ。その社會にあつては、各人の經驗が、小人口の社會に於けるよりも豐富であるにきまつてゐる。人

は經驗から學ぶ。人の進歩は反省を原因とするが、反省は經驗を機會とする。勿論、進歩は獨創を原因とするが、人の場合にあつては、獨創は反省によつて機會づけられる。小人口の社會が、進歩力に於いて、他の條件が同じなら、大人口の社會に劣ることは必然の理といはねばならん。自然氣候のうちには地理もある。地下、地面、地上のすべての自然量と自然質とがある。人は自然の一成長だ。一派生だ。大自然の一要部だ。それの最も發達した部分だ。廣義の自然氣候が、人性に、すなはち人身と人心とに、いかなる深大なる、密切なる關係を有するかは、それだけの抽象的認識からしても想像にあまる。地域狹小なる社會は、しかるに、この關係を相當に狹小に限られて持つ。それがその社會の進歩の一制限的原因となり、條件となるの理はあきらかだ。

人口すくなき社會は、そしてまた地域狹隘なる社會は　大量生産と多種生産とを、經濟的にのみならずしたがつて不可能にされる。なぜかといふに、そこには、人間同志のあひだの同質協力も、異質協力もしたがつて制限されるからだ。三人のみから成る社會は、百萬人の組織を必要とする事業を企てることも出來ないが、百通りの専門と職業を發達させることも恐らくは出來ない。地域に於いて窮屈に境界づけられてゐる社會は、自然資源の貧乏が例示する通り、たとひ大人口を持ちえても、そしてまたたとひその大人口が品性と氣力と聰明と技能とに於いてどんなに優秀でありえてさへも、大量式にも、多種式にも、生産することが出來ない。したがつて富足的にも、豐饒的にも、その社會は消費することとも出來ない。

そのことばの或る意味にしたがうての現代の階級主義は、その社會が、それが有意義に多く持ちうる人口を好んで無意義に、惡意義にすくなく持つ一制度、一慣習であり、そのことばの或る意味にしたがうての現代の民族主義と國民主義とは、その社會が　それが有意義に多く持ちうる人口と、同じく有意義に廣く持ちうる地域とを、好んで無意義に、

思意義にすくなく持ち、狹く持つ一觀念であり、一實行である。

教育も、啓蒙も、會合も、輿論形成も、制度改革も、社會進歩も、獨創力保護も、一とつの社會民の文化水準を高めることも、一とつの社會を、それの外延的關係にしたがつて大化することも、階級主義と國民主義及び民族主義とを、また人種主義とを、反省し、純化し、その反省的、純化的努力によつて無くなるものをば進んで無くし、それによつてなほ殘る、新たに發見される普遍價値的、本質實在的要素をば、それがある限り、あるならば、進んでこれを保護することを、その目的を達するための一大要件とする。

しかしながら、人類は生物の一種にほかならない。改革も、輿論も、啓蒙も、教育も、會合も、文化も、社會組織全體も、社會そのものも、獨創力も、天才も、一種の生物としての人類の或るかたち、或る部分、或る作用以外のなにものでもない。もしも一とつの社會が、その社會民の生物學的根柢的元氣活力を保護し、增進する努力を怠るならば、その社會の他のすべての目的と努力とは、それの成達の可能よりも先きにそれの存在理由が缺け、またそれの存在理由よりも先きにそれの存在原因が缺けてゐるのだと論斷される。

一人の一生涯中に、比較的に元氣活力の自然に旺盛な時と、それの比較的に自然に微弱な時とあるが如くに、また同時代の同社會の一人と他人との間にも、比較的に元氣活力の、それは素質的、獲得的種々の原因と事情とに勿論直接に、また間接に關係した現象であるには相違ないが、自然に旺盛な人と、それのほそく、飢ゑた人とあるが如くに、社會民の場合に於いても、同様の事實がある。社會の進歩的保存を可能にするために、したがつて輿論の理想的形成を可能にするためにも、その社會民の生物學的根柢的元氣活力を保護し、養成することが基礎的一要件だ。

この問題を意識すると共に、先づ注意される一事は種族改善學の研究及び實施に對する社會の努力を十分にすること

だ。生後の人格に對する廣義教育の能力には限度あるがゆゑに、生前にさかのぼり、生前期にむかつて、可能的出産に對する優質的、そしてそれを條件とする多數的選擇を加へる必要がある。善き種を選び、善き種を作りうる餘地ある限りはその餘地を滿たし、そしてこれを善く育てる學、術、策、政、興味及び意志の社會的徹底及び普及が必要だ。

ヨーロッパの歴史に於けるいはゆる闇黒時代は、その社會の民族群の元氣活力の水準の低下を恐らくはそれの一大原因として持つてゐた。いはゆる學藝復興は、それの一大部分的説明を、また恐らくはその際の關係諸民族に於ける元氣活力の滿盈、充張、したがつてそれの必然的爆發、開發、噴湧、迸發、横溢に見いだす。イギリスの歴史に於けるエリザベス時代の文化的、政治的非常創造、非常活躍も、また同様の説明を恐らくはゆるす。いな、恐らくはではない、以上のいづれの場合もが、不可疑の確實さに於いてさうであつたのだ。

發明よりも、創造よりも、すなはち獨創よりも深根なものはない。したがつてそれよりも遠達するものはない。元氣活力の人間的自然資源に缺乏した民族、社會民、それを濫費する、それを保護せず、愛惜しない民族、社會民からしては、發明、創造、すなはち獨創は決して期待されない。かれらが、いかに一生懸命に教育や、政治や、經濟や、科學や、藝術や、道徳や、宗教や、文化的意義あるなにや、かやに、骨折るらしく見えても、かれらの成功のたかはあらかじめ知れてゐる。それは模倣が上手に、巧者に出來る程度まで達すると同時に疲れ、諦らめ、得意、滿足、驕泰のかたちに於いて終熄するだけのものだ。そんな民族や社會民からは、原則意識にもとづくなにものもが、したがつて輿論もがそれの像影をだに示さない。「咽もと過ぎて熱さを忘れ」、「人の噂さも七十五日」程度の輿論しか、かれらからは期待されない。この文章が書かれつつある當時、日本に於いては、輿論に包擊された内閣が、衆議院の解散を斷行した。そして總選擧の期日を贅澤に、用心深く、七十五日よりも遥かに遠い將來にきめた。その社會民の心理が、その内閣によつて

自然に讀まれた觀を呈する。そして、その七十五日以上の長日月にわたつて、民意代表の國會議員を無一人にした政府の處置に對しては、まだ輿論らしいなにものもが見えない。元氣活力の根柢淺き社會民は、たとへばその社會に於ける時代錯誤的政治組織を輿論の對象として批評したり、攻擊したりしても、深いところには往つて觸れず、決して觸れようとはしない。その位だから、その淺い批評、攻擊の輿論も、永續きする根氣のほどが知れてゐる。根氣は、實に、根柢的氣力以外のなにものでもない。

しからば、どうしたら元氣活力は保護されるか、增進されるか、養成されるかと考へるに、本質的藝術主義の人生觀に徹底することが、それの支配則だと豫斷され、且つ、事理と論理を十分に豫想したかたちに於いて、結論される。

元氣活力保護の細規や現象則の問題となれば、注意事項はもとより萬殊にして盡きない。たとへば、それの可能的、根柢的、本元的形式に於いての性慾及び戀愛の本質的藝術化の餘地の考索、反省、充塞の努力の如きもそのうちの一つとして算へられる。科學や哲學は、知的形式に於ける本質的藝術に、もしくは本質的藝術活動にほかならず、政治、經濟、技術、工藝の如きは、行的形式に於けるそれにほかならないといふこと、藝術の一特質は自己目的、自足目的、目的價であるといふこと、それのなほ一とつの特質は、一擧にして自分をも、他人をも、すなはちそれの生產者としての自分をも、それの消費者としての他人をも、最も純眞なかたちに於いて、悅ばすにあるといふこと、藝術は發表であり、創造であるといふこと、そして性慾及び戀愛には、或る限られたるかたちに於いて、藝術のこれらの諸特質が本質的に帶具されてゐるといふこと、これらの事實及び論理も、元氣活力保護問題の解決意識に多少の深關係を持つ。

理想的、主義的形式に於いては、本質的藝術主義よりも積極的なものはない。そして、自然的、現實的形式に於いては、元氣活力よりも積極的なものはない。さらにそして、理想と自然との間、主義と現實との間の關係よりも密接なも

のはない。

ウ、輿論形成の第二要件としての當設的制度及び當行的政策の先進

ウの一、最初の注意

一とつの輿論は、或る制度改革を目的とするものであることもあり、或る政策改善を目的とするものであることもある。たとへば最近の日本の場合についていふならば、選擧權、選擧區、貴族院制、華族制、義務教育制の殊に經費及び年限に關する部分、未設定の勞働組合、小作制等に關する多少の輿論は制度改革を目的とする輿論と屬し、對露政策に關する多少の輿論の如きは、そして、そのうちの露國承認論の如きは、それは、勿論、輿論とまでは成らなかつたが、それがそれとまで成りえさへしたなら、政策改善を目的とする輿論に屬する。要するに、一とつの行爲が、比較的に原則的であらうが、比較的に運用的であらうが、社會的行爲である限り、すなはち、それの結果に於いて、方法に於いて、動機または目的に於いて、及び原因に於いて、要するに意義に於いて、社會的、公的といふ名をあたひするものである限り、それに先驅する、もしくはそれを目的とする、そして社會的といふ名をあたひするほどの多數一致の意見、思想、及びそれらの言論的發表は或る輿論であるのだ。

ウの二、本能または行動と理性または觀念との間なる主對從的、源對流的、全對部分的關係

最全義に於いての本能は、最全義に於いての理性以上だ。同樣に、最全義に於いての行動は、最全義に於いての觀念以上だ。最初にあつたものは「ことば」でもなければ「ロゴス」でもない。それは無意識的存在であつた。無意識的運動であつた。無意識的生活であつた。あるひはそれは多少不完全意識的な存在、運動、生活であつた。これは、なに人

にとつても、一とつの論理であるよりも先きに一とつの知識であるはづだ。なぜかといふに、人にとつて、これよりも直接な經驗、これよりも明確な事實はない。

すべての理性は本能の或るかたちにほかならず、すべての觀念は行動の或るかたちにほかならない。多少派生的な、多少部分的な本能及び行動としての性慾及び戀愛ですらもが、それの未發態に於いて聰明に保護されれば、一層深い、高い、あかるい、ゆたかな、大きいかたちの或るものとして、たとへば藝術的、科學的、道德的、宗教的、哲學的、政治的、經濟的、教育的興味、能力、活動として發達する可能を多少かならず持ちうるといふ事實でさへもが、この理を例說する。壯年にしてなほ獨身であつたヤソが、未婚者、探婚者、求婚者のわかさを、またそれの內容としての不安と焦躁と憧憬と戀慕と愛着と想像とを、觸るゝ限りの人と自然とに、且つそれの純眞態としての理想と實在とに、おのづから傾注せずにはをられなかつた概を、かれに關する多少不確實な史料をわれらが信用する限り、示す如きも、同じ理を多少暗示する。

無條件的に在るためには、考へることは必要ではない。しかし、無條件的にでさへも、すなはち、どんなにまちがつた、愚なしかたに於いてでさへも、考へるためには、在ることが必要だ。存在はかならず考へるといふ判斷が成り立たない如くに、非存在が考へるといふ判斷も成り立たない。五十萬年以前にも地球は在つたが、シヤカも、プレトーも、存在以內の或るものにほかならなかつた。生活は或る存在だが、本能または行動は或る生活だ。そして、理性または觀念は或る本能または行動にほかならない。

制度及び政策は、第一に或る行爲だ。そして、行爲は行動の一別名または或る部分名にほかならない。行動の代はりに行爲といふことばが用ひられることもあるし、意志的行動のみが行爲と呼ばれることもある。輿論は第一に或る思想

だ。そして、思想は、廣義の理性または觀念と一同義語であつたり、それの一部分稱であつたりする。

眞の意味に於いての藝術的創作に於いて、殊にも詩作に於いて、本能または行動と理性または觀念との間の關係は、一とつの最もあざやかな例證を見いだす。本質的意義に於いての詩作にあつては、したがつてそれが或る散文のかたちを取らうが、或る論文のかたちを取らうが、或る組織的著述のかたちを取らうが、それのことばと、そのことばの內容としての意味とは、その作者によつて、先づ完全に意識され、選擇され、そして生產されるといふ關係は決してない。思想が啓示または筆端の運動のあとを追ふといふ關係の方が、啓示または筆端の運動が思想の命にしたがふといふ關係よりも、その場合、一層根本的事實だ。その場合の純粹經驗は、比較的に、前の關係に於いて發見される。子供が、あるひはおとなが子供のやうな氣分になつて、ふとしたはずみに、ふし面白くうたひだし、うれしさのあまり手拍子、足拍子を取つて踊り浮かれ、なにげなしに調子づいて、音樂的に「茶碗を箸もてたたき」興ずる際の事實を奈觀せよ。次ぎの瞬間には、どつちの手を、どの方向へ、どれだけの距離のあひだ、いかなる速度に於いて、動かさうといふやうな意識が明確に必要だとしたら、馬鹿囃し一とつ、馬鹿踊り半分たりともが、出來たわけのものではない。そんな條件つきでは、藝は絕對に不可能だ。けれども、生活は藝だ。藝としての生活の反省が理性と觀念とを、それの未發達的狀態と、それの未成形的狀態とに於いて發見する。しかるのちに、それの發達した狀態、それの成形した狀態としての理想が產まれる。その產まれた理想が、さらにしかるのちに、その藝としての生活を、多少意識的に純化し、多少批判的に選擇し、多少意志的、努力的、熟慮的に進化させる。そして、その進化させられた生活が再びそれの反省を環境によつて機會づけられ、先回と同じ通りの順序を、ただ一層發達した、リファインドな形式に於いて繰り返へす。しかも、深觀すれば、その反省そのものさへもが、またそれの向外的成長としての理想そのものさへもが、廣義、全義の本

能、行動、生活、藝以外のものではない直接の特徴を本能、行動、生活、藝の或るかたちにほかならないものとして持つ制度や政策が、直接の特徴を理性、觀念、理想の或るかたちにほかならないものとして持つ輿論を、多少、原因づけ、結果づける必然と可能の說明の基礎的論理が上說のうちにある。

その三、發達的制度及び政策の原始的輿論に對する能動的、決定的位置

もしも一つの社會が、その社會民の完全なる意見の成熟と一致とを待つて、しかるのちに始めておの〱の制度を設定し、おの〱の政策を行果すべきだとするならば、その社會民の生存中には、その時期は決して到來しないだらう。どうしてかといふに、一とつの社會民の範圍内に於ける多少の聰明別は、一般的及び機能的兩形式に於いて、その社會民のデモクラシと文化の水準が高まるにつれて、鮮烈に、强銳に、明確にこそされるが、決して渾沌的または若和的一樣無差別にはされないからだ。眞のデモクラシと文化とは、各性能を解放する。それは各人に共通な必要に機會を與へると同時に、各人に特有な必要に機會を與へる。その兩機會の自由の組織的實現が、理想價あるデモクラシであると同時に眞の文化だ。

一とつの社會内の各地方、各職業、各專門、各團體、各個人の問題は、同時に多少、他のおの〱のそれの問題で、すくなくとも結果すなはち意義に於いては、あるにきまつてゐるが、社會民の各部が、その社會民の問題の全體を一樣に、平等に意識したり、解決したりすることは不可能であると同時に、これを企てることは生活の破壞だ。また機能的にも、一般的にも、各人の間に、多少の本質的すなはち生得的聰明別が、社會に進步力がある限り、必然、永久に機會を見いだす。

ここに於いてか、信用が必要となる。信用、信任、信賴、信衣、信仰は、社會保存の一要件だ。一とつの社會民のう

ちの或る部分が、その社會民の眞の目的と、その目的を達成する眞の方法とを、殘りの部分よりも早く、明きらかに、完全に意識して、全社會民に代はつて、公善を成るたけ早く爲す必要が、かくして成り立つ。そして、その公善が、或る制度改革を內容とするものであることもあれば、或る政策改善を內容とするものであることもある。

その先覺的部分者は、未覺的部分者からの信用を、現實に、當時に、期待しうることもあるが、多少の將來に於いてでなくては期待しえないこともある。この第二の場合に、先覺者が、その社會のために當然なすべき事は、甚だしばしば、信用を將來に期待して、多少の不信用を冒して、善き制度、善き政策を、多少の强制力を用ひて早く斷行するにある。

或る人が反省すべきだけ反省せず、思慮すべきだけ思慮せずに、自殺を決行せんとする瞬間に、かれの賢友は、かれの改心を即時に期待する可能をば絕望的に持たないことがある。その場合には、その賢友の賢は、擬首された短銃をかれの手からもぎ取ることによつて保存される。取りとめるいのちが社會の眞の全體的、本質的生命である場合のうちには、もぎ取られる短銃が、文字通りの短銃よりは、遙かに、無限に、たつといものである場合が過去に於いてしばしばあつた。將來に於いて、取りとめべきいのちをば取りとめ、もぎ取るべき短銃をば成るべく安價なものとして發見しうるための啓蒙的、教育的努力の餘地は、それを充塞する必要は、絕大だが、同時に、物がいのちに代へられないといふ原則は、いづれの場合にも不可易だ。

未覺者の頑冥と無頓着とは、多くの場合に、ほとんど全然習性的だ。しかるに、單なる淺層的習性は、その習性を營養する環境の徹底的、無間歇的斷絕によつて早く、容易に忘れ去られる。先覺者の聰明なる公的動機にもとづく勇敢なる改制と施策が、常に多少、時あつてか非常大に、當然要求される事情の一はここにもある。維新後、いかに早く、且つ容易に、原始的封建制及び領閥制に對する愛着が忘れ去られたかをわたくしはいま自然に想起する。(完結)

英國最初の勞働黨内閣と其政策

法學博士　米田實

一

本年一月二十二日、其領域日陽沒するの時なしと誇つてゐる世界の大國英吉利に於て、空前とも云ふべき政治的變動を見たのであつた。斯は言ふまでもなくラムゼー・マクドナルド氏を首相兼外務卿とする勞働黨内閣の實現である。其閣員の顔觸を見ると一九一五年アスキス内閣に於て文部大臣たり、又一九一六年ロイド・ジョージ軍事内閣の一員たりしアーサー・ヘンダーソン氏が内務卿となれるが如き。曾ては自由黨の名士として陸軍卿たり、又大法官（上院議長）として平和主義者親獨論者なりと一般に知られたホルデーン卿が大法官として、同内閣に列したるが如き。一九一七年より一九一八年にかけてロイド・ジョージ内閣の食糧省次官となり翌年樞密院議員に擧げられたクラインズ氏が、國璽尚書として入閣したる如き。又前印度總督として大いに自由政治を行ひ、近年勞働黨と共鳴せるチエルムスフォード子が海軍卿となつた如きは、別段世人の耳目を聳てしむる現象とは云へない。然れども彼の久しく猛烈に社會主義を鼓吹し、現に昨年春三月資本主義の失敗を呼號し漸次生産及び分配の國有並に國家監理を主張する英國としては類例なき驚くべき議案を議會に堂々提出したるフイリップ・スノーデン氏が大藏卿の重職に立つたが如き。又平素飽くまで帝國主義を罵り、母國の植民地壓迫を攻擊し、自治制の確立を呼號し居たるジエー・エチ・トーマス氏が、植民卿となつた如きは一般の人目を刺戟せしめずには措かない所であらう。其他經濟評論家として勝れた文士としてのシドニー・ウエッブ氏が商務卿となれるが如き、其他閣員個々に就て論評を下し、珍奇な點を擧げ來れば實に際限なき感がある。要するに今回の内閣變動は英國あつて以來の事件と言はねばならない、同時に又た其成立が今後如何

なる影響を同國の內政外交に及ぼすやは、吾々外人としても最も注目に値ひすべき所であるまい乎。

然らば斯の如き勞働黨內閣の出現を見たる所以如何と云ふに直接の形式的原因は同內閣組織の前日即ち一月二十一日、英國下院に於てボールドウイン氏を首相とする保守黨內閣に對する不信任決議案が二百五十六票對三百二十八票によつて可決せられたることであつた、然も斯の如き不信任案の採用を見せしむるに至つたのは、言ふ迄も無く昨年十二月六日執行せられた總選擧に於て、保守黨の計畫が一敗地に塗れたる爲めと云はなければならぬ。然らば昨年十二月の總選擧は如何にして行はれたのであるか、之に就ては吾人は先づ統一黨首領で、昨年五月以來首相の重職に在つた、スタンリー・ボルドウイン氏の公正なる進止行藏と、並に統一黨が能く英國憲政の主義を尊重せる、政治的道德の發達に對しては羨望せざるを得ない、即ち統一黨は總選擧に於てこそ一時敗北したれ、其精神的道德的に永遠に生きたと言つて善い、是吾人が竊かに深く感嘆せざるを得ない所である。蓋し統一黨內閣が昨年十一月十三日議會解散を聲明せる所以は、關稅改革植民地特惠關稅政策に就き、國民の判斷に問はんが爲めであつた。統一黨は恰も昨年八月頃に於て歐羅巴の形勢に鑑み、遙かに英國の對歐羅巴貿易を盛ならしめて以て自國の失業者救濟策の實行困難なるを看取するや、一轉自國植民地に對し特別恩惠を與へ以て、之との貿易を盛んにし之によつて頭痛の種なる英本國の失業問題を解決せんと考へた、ソコデ同年十月には英帝國會議席上に於て、該特惠關稅政策の或る程度に於ける採用を政府より聲明したのであつた。而して同政策を實行することゝなれば、假令議會の協贊を求めても、其贊否の頭數に於ては政府は決して不利ではなかつた、從つて必ずしも總選擧を行はねばならぬといふ窮境に迫つて居た譯ではない、何となれば當時下院は六百十二名の議席（二名の議席を除き）中統一黨三百四十三を占め、勞働黨百四十三名、アキスキス系自由黨六十七、ロイド・ジョージ系自由黨四十七名、無所屬八名、愛蘭系國民黨三名、共產黨員一名より成り、統一黨は裕に多數を占め居る點より見て、保護關稅政策を採用せんと欲すれば、案の通過敢て至難と云ふ程ではなかつたのである、無論統一黨中にはダービー卿、ロバートセシール卿などに共鳴する自由貿易論者もあつたが、其數は寥々殆ど論ずるに足らぬ有樣であつた。然も單獨でさへ四十名の多數を算え他の贊成者を加ふれば約七十名の多數を占め得たる議會を統一黨が何故に保護關稅問題により其解散を敢てしたのであつたか、這は誠意、政治道德の命ずる所に從へる同黨の公正な態度に出てたること、

恐らくは何人も異論無き所であらう。

蓋し一九二二年十一月總選擧執行の際、統一黨首領ボナーロー氏は植民地と母國間の接近を圖り、貿易助長の政策を採るけれども、其は決して關税改革によつて行ふものにあらざることを公約して居たのである、即ち統一黨は當分保護關税政策を採用せず、關税改革を行ふものにあらざることを天下に公約して選擧に臨み、議會に於て大多數を贏ち得たのであつた。從つて今や歐洲の形勢に餘儀無くせられ且英國利益の命ずる所により植民地との接近の爲めに、保護關税政策を採用することゝなれば、德義上更に民意に問はざるべからずとは、正直なるボールドウイン氏が當然考へざるを得ない所であつた、玆に於て乎彼は黨內に異論者ありしに拘らず之を排し、斷乎總選擧執行に決した。然るに愈總選擧となると、保護關税問題は統一黨の根據地に於てさへ多少の動搖を生ぜしめずば止まなかつた。彼の一部統一黨に聲望あるロバートセシール卿が、同總選擧に際して遙かに爵位を賜はり貴族に擧げられたのみならず、彼は自己が常に自由貿易主義を懷抱せる關係上、一時政界より引退せるが如きも亦同黨に對する打擊の一には相違なかつた、就中打擊の最も大なりしはランカシア地帶に於ける保護貿易反對であつた。ランカシアは一九二二年の選擧に際しては盛に統一黨議員を選出したが、一度關税改革案の問題となるや、同地方は遽かに自由黨及び勞働黨に傾くの形勢を呈した。其外統一黨に同情し居たる一般民衆中にも『保護貿易並に特惠關税制度を以て、植民地の御機嫌を取り、そこへ英國品を賣出すことに對しては、一應英國の利益なるかの如く見られる、併しながら其爲めに外國輸入品は却つて關税增率の結果、植民地品との競爭困難となり、此機に乘じ植民地商人は其有利なる地位を利用して、自輸出品の價格を高め斯くては結局英國人一般の生活費を高むるに過ぎず』とて、少かず苦情を並べるものが增加した。是等の事情により昨年十二月六日の總選擧に於て統一黨の頭數は激減し、一九二二年十一月選擧に於ける頭數三百四十六名に對し、又解散當時の議員數三百四十三名に對し今や僅かに二百五十八名の頭數を占め得たるに過ぎなかつた、即ち六百十五名の議會に於て僅か二百五十八名を算するのみにては、到底政府の勝利といふべくもあらず、政府當初の期待は遺憾なく裏切られて了つた。殊に其爭ひの焦點たる保護關税特惠關税問題に就ては、自餘の黨派即ち勞働、自由兩黨は內容の相違こそあれ其反對たる點に於ては一致し居たのである。玆に於てボールドウイン內閣が結局辭職の外なかりしかは當然と云はざるを得無い、必ずしも一月二十一日の不信任投票を俟つて始めて知るべきことで

はなかつたのである。

さりながら之のみを以て勞働黨が統一黨に代り、單獨に内閣を組織すべき理窟は生じなかつた、選擧の結果より觀れば、寧ろ勞働自由兩黨の聯立内閣實現を見るのが自然であつた、其第一事情は總選擧に於て、保護貿易自由貿易の爭ひ行はるゝと、統一黨は保護貿易論に始終せるに對し、勞働自由兩黨は前に言つた如く統一黨の主張に反對し、自由貿易を唱導するに於て一致せるが爲めである、然も一層兩黨の聯合を正當とすべき理由なるものは、其選擧の結果に於ける數字則ち議會に現はれたる議員の頭數であつた。蓋し昨年十二月に於ける英國有權者總數を見るに

英蘭	一千七百十二萬五千八百八十五人
ウエールス	百二十六萬一千三百四十四人
蘇格蘭	二百二十七萬七千八百五十二人
北愛蘭	六十五萬一千六百二十九人
合計	二千百三十一萬六千七百十人

であつた、然るに選擧に於て實際投ぜられたる票數は、選擧後一週間に於て判明せる所によれば約一千四百五十七萬八千三百〇五人にして、中統一黨の獲得せる投票數五百五十二萬七千五百二十二、勞働黨の獲得せるもの四百五十萬六千九百三十五、自由黨の獲得せる投票數は四百二十七萬八千四百二十八であつた、得票數の全體に就て見るも勞働黨は單獨を以て統一黨を破れるものではない、則ち自由黨の得票數を相合して始めて統一黨を破つたと云ひ得るのである。議員の當選數を見るに是亦統一黨の二百五十八名に對し、勞働黨は百九十二名、自由黨百五十六名を占め（無所屬九名あり）到底勞働黨のみにては議院に多數を占むることを能はず、自由勞働兩黨の聯合によつて始めて議會を制し得る立場にあつた。玆に於て若し勞働黨が政權を得るとすれば、自由黨との聯合を正當なりと見るのが多かつた倫敦に於ける當時の下馬評によれば勞働黨代表のラムゼー・マクドナルド氏を首相とすることには一致したが、大藏卿の椅子は之を前首相にして自由黨首領たるアスキス氏に與へ、外務卿若くは他の要職は自由黨領袖前首相たる、ロイド・ジョージに與ふべしとの議論も少からず唱へられて居た。然らばそれ程正當であるべき自由勞働兩黨の聯立内閣は如何にして其成立を見るに至らなかつたか、思ふに一は自由黨及び勞働黨間に於ける内政上の意見相違が、餘りに懸隔せるが爲めであつたと疑ひをいれ無い、蓋し勞働黨が主張する五萬圓以上の財産に對し、特別累進資本稅を課せんとする案の如き、又戰爭によつて得たる利益を少數富豪より急遽國家に收むる案の如き、或は相續稅激增

の如き、或は各種生産機關及び交通機關を國有とするの案の如きは、少くとも自由黨との協同を困難ならしめたるものがあつた、是れは自由黨首領アスキス氏が總選擧後始めて開かれた十二月十八日自由黨代議士會に於て同黨が他黨との聯合を排し單獨活動をなす可き旨公言した所以であつた。(序でながら一昨年の總選擧まではロイド・ジョージ系自由黨と、アスキス系自由黨とは互に分離し居たるが、昨年十二月總選擧前に於て、政爭が自由貿易對保護貿易の爭ひとなつたのを機として兩派の意見一致を見、玆に兩派は再び合同を約し、アスキス、ロイド・ジョージ兩氏は、一九一六年十一月以前の狀態に復歸したのである)而して此アスキス氏の公言に對してはロイド・ジョージ氏も亦同意であつたこと、其自ら喝采した事實に依つても知られるのである。併し單獨內閣組織を可とする事情は亦た勞働黨側にもあつたのである、何ぞや、成る程、議會を支配し政機の運用を期する一時的便宜より見れば、無論勞働自由兩黨の聯立內閣は有利であつた、然かも炯眼なるラムゼイ・マクドナルド氏等は勞働黨永遠の利益に考へ、一時的便宜を犧牲に供するの案に傾たのである、そは外でも無い、勞働黨にして此際一時的便宜の爲め、自由黨と聯合し內閣に立つことゝなれば、妥協の必要から其政治は不徹底となり、其主張は延いて灰色的に變らざるを得ない。資本家稅生産機關國有其他彼等が多年直截明瞭に主張し來れる主義及精神は、暫らく他の色に塗りかへられなければならぬ、一度聯立內閣を組織せば一切の行政振りも自から灰色にならざるを得なくなる。斯くては勞働黨が勞働者階級によつて支持せられたる多年の實際的關係に背き、領袖對味方勞働者の關係は玆に顚覆するの危險が來る、即ち自己の味方の間に自己を不信用ならしめはせぬかとの憂慮がある。然るに單獨を以て內閣を組織せば假令內閣の生命は短かくとも、其特色を比較的により多く發揮することが出來、その支持者たる勞働者の心を失はず、此方が遙かに勞働黨將來のために有利なりと考へられるのであつた、次ぎに勞働黨の氣勢を擧ぐる點より云ふも、此絕好機會に於て單獨勞働黨內閣を組織し、所謂勞働黨內閣てふ一の傳說と先例を、英國政史上に作ることも、或は彼等が自己の主義宣傳上にも、或は又黨將來の發展の上に於ても、頗る有利なりと考へられたのであつた。斯の如くにして遂に聯立案は破れた、無論勞働黨內にも、自由黨との聯立を希望するものも相當に多く、自由黨內にも勞働黨と聯立せんとする策士もあつたが、是等が以上述べたる大目的の立場より悉く失敗に歸した所以は、恐らくは聰明なる讀者が當さに首肯するに苦しまざる所であらう。

二

然らば則ち斯くの如くにして成つた勞働黨内閣の將來は如何、固より疑問に屬する所だが、今日吾々が同内閣に就て第一に考へざるべからざるは其勞働黨の政治的發展極めて急激で其進歩驚くべきものあることゝである。元來過去に於ける英國政界は所謂統一黨（保守）と自由黨との競爭場であり、其政權の如きも兩黨間に受授せらるゝの有樣であつた。勞働黨の政界活躍は極めて短期に屬し、勞働派として議員を選出するに至つてより、僅々二十三ヶ年に充たない、勿論其以前にも幾分は勞働派なるものは存在してゐた。蓋し一八六八年英國選擧法改正せらると共に其恩惠に浴して多少、勞働系の擡頭を見た、即ち一八七四年の總選擧に於て、始めてマクドナルド、バート兩名の議員を選出し、更に一八八〇年の選擧に當りては三名を選出した。一八八五年には十一名を、一八八六年には十名を、一八九二年には十五名を、又一八九五年には十二名を選出したのであつた、併し是等の勞働系は未だ獨立的黨派を形成するに至らず、多くは自由黨の一員として議院に出席するの程度に止まつて居た。新首相たるマクドナルド氏及び今や故人となれるキア・ハーデー氏、其他にバート、スマイリー氏等は最も熱心に、勞働系の新政黨を組織せんと呼號し、大いに努力する所あつたが其計畫は却々急速に實現すべくもなかつた。然るに一九〇〇年の總選擧に當り、初めて勞働系は勞働派として選擧場裡に立つに至つた、其前年即ち一八九九年プリマスに開かれし、勞働組合大會の決議によつて、勞働代表委員會なるものが設けられ、同會の名に於て勞働候補者を推薦し、始めて選擧場裡に競爭を行つたのである。然も其際當選したる議員は僅々六名を算するに過ぎず、從つて其勢力も微弱にして論ずるに足らなかつた、尤も其際他方に於て勞働系議員九名の當選を見た、之は勿論右勞働委員會に關係なく、勞働者が選定せるものでもなかつた、越えて一九〇六年の選擧に於ても約五十四名の勞働系議員當選したるに拘らず、眞に勞働系議員として當選したるものは二十九名を算し、他の二十五名は何れも自由黨系議員として當選せるものであつた。而して同年始めて所謂勞働黨なる名稱を附し、茲に今日の勞働黨は生るゝに至つた、其後一九一〇年一月の選擧に於て勞働黨所屬議員は四十名を數え（別に自由黨所屬勞働系議員六名あつた）更に同年十二月例の上院否認權問題に關して總選擧行はるゝや勞働黨は又四十二名を選出した（此時も別に自由黨所屬勞働系議員六名あつた）併しながら斯の如き少數の議員を以てしては、勞働黨として何事も爲し能はざるは無論で

あり、始終同黨は自由黨と結托し、バンナーマン內閣時代に於ても、アスキス內閣時代に於ても之を助けつゝ、其間に自己の主張政策を實行せんと努めて怠らなかつた。勿論彼等は政府を援くると共に、其內閣にも一員として大臣を送つた。彼のジョンバーンス氏の如きはそれである。又世界戰爭の最中アーサー・ヘンダーソン氏が、軍事內閣に列したのも其適例であると思ふ。斯る間に勞働黨は漸次勢力を增大し黨員の激增を加へた、就中近年に於て愈盛大の度を增して來た。

勞働黨內には職業組合と、社會主義者との二團があり、最も有力なる分子を爲して居る、今勞働黨員統計を擧ぐれば左の如くである。

年度	職業組合員	社會黨員	合計
一九〇二―一三	八四七、二九六	一三、八五四	八六一、一五〇
一九一四	一、五七八、八一七	三三、三三〇	一、六一二、一四七
一九二〇	四、三一七、五三七	四二、二七〇	四、三五九、八〇七
一九二一	三、九七三、五五八	三六、八〇三	四、〇一〇、三六一

右の數字によれば世界大戰後黨員增加の形勢は一層强くなり、戰爭前の十二ケ年間に於て約二倍近くに上つたものが、戰爭後の六ケ年間に於ては三倍の增加を示すに至つたことを看取せられる。尤も近來着々勞働黨が發展し來れる所以は、同黨領袖連の苦心尋常一樣ならざる結果にして、彼等の努力は大いに買つてやらねばならぬ。蓋し勞働黨員中に於ては最初種々の政治的活動に對して異論行はれ、就中職業組合に於ては吾々の目的は賃銀の增加、其他同盟罷業等で經濟的利益を獲得するを主眼とする、從つて吾々の活動は該方面に向けらるべきものなりと主張し、政治的活動を以て職業組合の義務にあらずと考へるものが多かつた、爲めに政治運動に對する費用支出に反對を表する聲高く、勞働組合に政治運動資金の醵出をなさしむる件につきても、勞働者の不平は決して尠くなく、遂には裁判事件などにも現はれたる程であつた。然るに其後勞働者も勞働黨領袖連の活動せる結果、設けられたる各種の立法によりて種々の便益を得るに伴ひ、漸次政治的活動の有難味を感ずるに至り、就中勞働黨の支持する自由黨內閣が、着々社會政策を實行し、從來職業組合によつて行はれつゝありし救濟的義務を國家に於て負ふことゝなれる等で、組合の財政狀態は鞏固を加へ、政治的活動の費用も容易に支出し得るまでに進んで來た。此一事も亦勞働黨の發達を援けたる原因といふべきである。其間に於ける同黨首領連の苦心は、當時は勿論今日に於ても識者が常に指摘し、且感服して居る點である。彼等の苦心と努力は遂に酬ひられて、漸次黨員を增加し、從つて黨としての政治的活動能力も

高まり來つた、是れ云ふまでもなく勞働黨領袖連に對する、多年の報酬と見るも過言ではあるまい。

さりながら勞働黨をして今日の如く、盛んなる狀態に至らしめたる最大原因は何であるか、吾々は玆に於て一九一八年の英國選擧法改正を顧みざるを得ないのである、一九一八年二月六日英帝の裁可せられたる、人民代表法律は、實に英國に於ける非常なる選擧權擴張であり、先づ男子に關しては普通選擧權を與へたものと云つても宜かつた、舊法では世人も知る如く財產上若くは生活上の資格を要求せるに反し、新法は悉く之を廢し（六ケ月間選擧區內の家宅に引續き居住せる）二十一歲以上の男子に悉く選擧權を附與することに規定した、家宅と云つてもそれは獨立家屋たることを要しない、其性質も價格も問はない、例へばホテルの中に數室を借受け居住して居ても差支ない、又六ケ月間引續き同一の家屋に居住することを要しない、一選擧區若くは之と隣接せる他の選擧區內であれば、其住所を變更しても差支ないのである。其他舊法に於ては種々複雜なる規定を以て、選擧權を喪失せしめて居たが、新法に於ては是等の制限規定を廢したのである。次に同法は婦人にも齊しく選擧權を附與した、婦人は是れまで地方政治に就てのみ幾分參政權を有して居たが、議會に於ては選擧權を有つて居なかつた、然るに右法律によつて自から家を構へて居るか、或は自身若くは其夫が年收價額五磅以上の不動產を借りて之を占め居る三十歲以上の婦人は、選擧權を附與せられたのである、這は實に選擧權の重大なる民衆化であつた。

顧れば一八三二年の選擧法大改革により、從來四十四萬なりし有權者を九十四萬に增加し、一八六七年の改革に於て百十萬なりし有權者を二百四十萬人に增加した、更に世界大戰末期の改正に於ては有權者の數二倍以上に增加した、即ち一九一八年以前にありては、英國有權者數は八百萬人であつたのが、今や少くとも二千萬人に激增せしむるに至つた。云ふまでもなく此有權者の增加は無財產階級、即ち勞働階級の參政權擴張を意味したのであつて、勞働者の政治的能力增加は則ち勞働黨の政治的勢力增加を意味したのであつた、而して此結果を直に現はし來れるものは、一昨年十一月及び昨年十二月の兩總選擧であつた、勿論同法律の下に選擧を行つたのは決して一昨年が始めではない、一九一八年十二月に於て既に總選擧を行つたのだが、當時は戰爭終了の間際とて、英國に於ける人民の思想は平和主義の勞働黨の發展を見せしむるには未だ不十分であつた、同時に新しく選擧權の擴張せられたるに對して同黨には有權者を動かすだけの組織的準備も整ふて居なかつた。當時選擧に於て勞

働黨は七十四名（聯立內閣贊成勞働黨十一名政府反對勞働黨六十三名）しか占め得なかつたが、一昨年十一月の總選擧に於ては最早勞働黨は十分活動の用意整ひ、戰爭によつて破壞せられたる黨內の平和、少くとも內部に釀成せられし紛紜も漸く解決を見、黨內の一致團結は實現され、銳意政治的活動をなすの好機會に接して來た。少しく其玆に至れる事情を述んに、世界大戰勃發するやアスキス內閣の一員たりし、ジョンバーンス氏は英國は本戰爭に參加すべからずとの主張を固執し、自由黨の平和論者モーレー卿と共に遂に辭職したのであつた。其後勞働黨は二派に分れた、一はアーサー、ヘンダーソン氏を首領とする戰爭遂行論者であり、同氏等はアスキス、ロイド・ジョージ兩內閣を援助したるに反し、久しく勞働黨の中堅であり又會長たり理事長たり夙に令名を馳せたるラムゼー・マクドナルド氏等は、平和論者にして英國の戰爭參加に反對した、其結果勞働黨は二分し、一九一八年頃にも未だ双方思想系の融和は具體化されなかつた、然るに一九二二年十一月選擧に先ちて始めて兩者の完全なる融和は成立した。又勞働黨は一九一八年舊法の改正せられたる當時に於ては、自黨の組織に關し新政策を執つて居た、それは筋肉勞働者にのみ最も重きを置ける從來の方計を一變し、頭腦的即ち精神的勞働者をも招き以て、自黨を盛大ならしめんとする政策に變遷して居た。勿論之に關しては一九一七年頃より、マクドナルド、ヘンダーソン、バーデー、ワードル、シドニー・ウェッブ氏等勞働黨幹部委員となり、黨の組織改正に就き講究審議を重ねて居た、此事は必ずしも一九一八年の選擧法改正後に起つたのではなく、既に選擧法の改正實行は前以て知られて居る所でもあり、之に順應すべく着々政策の改變を來せることは、疑ひなき事實である。而して黨の組織改正內容は、從來主として勞働組合を基礎とせるを改め、個人的會員の入黨を勸奬し、職業組合或は勞働組合以外の勞働者をも網羅すること及び、精神的勞働者（美術家、新聞記者、著述家、辯護士牧師等）をも含むやう所謂入黨資格を擴張したること、同黨幹部中に婦人會員代表者四名を加へること（新黨則によれば幹部二十一名より成り中會計一名とし殘餘の二十名は職業組合より十一名、地方團體より五名、婦人團體より四名を出すこととした）等重大なる變化であつた。斯の如くにして選擧法の改正と共に、黨の內容も改まり、遂に今日の成功を來せる所以に外ならないのである。

論者の多くは言ふ、今回（昨年十二月）の選擧に於て勞働黨は大勝利を得たと、併しながら予輩の觀る所を以てすれば、勞働黨の勢力增加は昨年十二月に於ける選擧にあらずして、寧ろ一昨年十一月執行されたる選擧に於てであると云ひたい、昨年

の總選擧を以て勞働黨は急速に勢力を增進したりと說くものは所謂表面に現はるゝ議員頭數のみを見て、更にそれ以上深く檢しないからである 今試みに一昨年及昨年の人民投票數に於ける、各政黨の得票數を見れば立ろに判明する、何となれば一昨年十一月の總選擧に於ては、勞働黨は百四十二名を占め統一黨の三百四十六名を得たるに對し、非常なる差違あるが如く見ゆるけれど、一度人民投票數を檢すれば、同年投票せられたる一千五百萬人中、統一黨が五百五十五萬四千票を占めたるに對し、勞働黨は四百二十萬二千票を獲得して居る、自由黨はアスキス系二百六十六萬三千票、ロイド・ジョージ系百四十七萬七千票を占めたのであつた。即ち統一黨は勞働黨に對して百三十萬票の差違を以て、二百二名だけ多く議員數を獲得したのであつた。然るに一轉昨年十二月の總選擧結果如何と見るに、統一黨の二百五十七名に對し、勞働黨は百九十二名を占め、議員數の非常なる接近を示したのであるが、其投票數を見れば統一黨の得票は前回同樣五百五十萬臺であり勞働黨の得票は約三十萬の增加を示して四百五十萬票となつたのみに過ぎ無い、即ち前回に於ける勞働黨の得票も、今回の選擧に於ける同黨の得票も、其增加は極めて微細なるものに過ぎない。唯問題は英國現在の選擧制度が毫も比例選擧主義を認めざる點（之に對しては學者政治家の齊しく時代遲れなりとして批評しつゝある）、及び三黨分立して相抵抗しつゝある狀態との爲めに、人民投票數に於ける少しの差違が議員頭數に於て、非常なる相違となつて現はるゝ所以である、無論昨年の選擧が一昨年のそれよりも、勞働黨の得票增加せるに見て、其進步なるは言を待さる所だが、要するに一九一八年彼の選擧法改正の結果、當然現はるべきものが一昨年及び昨年の選擧に於て、引續き現はれたに過ぎぬと斷ずるも敢て差支ないと思ふ。

併し勞働黨が斯の如き發展を見たるに就ては、予は更に一事を指摘しなければならぬものがある 即ち英國勞働黨は英國流の空氣の中に育成せられたる爲めか、比較的穩和であり、決して歐羅巴大陸流の革命的でないことである、勿論多くの黨員中には革命分子も含まれ、過激論者もないではない、併し大體より觀て英國勞働黨は、カールマルクスよりは寧ろゼボンの系統を引いて居る、這は公平なる英國の論者が屢指摘せる所に應する、勞働者中の所謂智識分子なるものにはフエビアンソサイテイの系統が多いことを忘れてはならぬ。無論其主張によつて見るも、英國勞働黨は大陸に於ける社會主義者系と異り、新社會の成立を遂ぐる法方として、猛烈なる革命といふが如き觀念を否認して居る、又彼等は生產機關其他の國有を主張して居る

が然も其主張なるものは適法の方法によつて、實行せらるべきものなりと考へてゐる、而して之を實行するには人民全體が、國有に贊成するに至つた後に於てする、人民多數の贊成ありし後に於て始めて之を行ふ、要するに其手段方法は革命的でなく進化的である　又國有を實行する方法も彼の大陸に於ける極端論者とは異り、財産沒收によつて行はんとするのではない。國家の買上げによつて遂行せんとするものである　現今歐羅巴大陸にては總同盟罷業によつて、革命を行はんとする觀念盛んなるに反し、英國勞働黨は總同盟罷業によつて革命を行はんとするものではない。是等の點に於て既に態度穩健なるを看取しなければならぬ、斯る事例は屢具體的に各種の場合に發現せられて居る、人も知る如く今回總理大臣となれるラムゼー・マクドナルド氏の如きは、國際關係の議論其他で、頗る極端なりとの批評がある、一九一四年八月世界戰爭開かるゝや、同氏は時の外務大臣サー・エドワード・グレー卿を猛烈に攻擊し、白耳義問題を口實に故らに吾々を戰爭の渦中に投ぜんと企つるものなりと非難した、又英國海軍省は戰爭の練習を爲さんが爲めに、此機會を捉へたるものなりとの惡口をさへ云つた。彼は或場合に於ては極端なる意見を有つことがあり、一度懷ける自己の所信に對しては決して動ぜぬ堅固なる意志の所有者である、然かも彼は社會主義的主張問題に對して、極めて穩和的である、其態度を最も明かに示せるものは、昨年六月共産主義系勞働黨議員ニユーボールド氏が、マクドナルド氏其他多數勞働黨より支持せられなかつたといふ點である　又昨年六月四日勞働黨議員が議會に於て猛烈なる騷擾を醸し、一日登院停止を命ぜられ、七月末に於て漸く議席を恢復するに至つたが、此爭論の時に當りてもマクドナルド氏は飽まで四名の議員の行動を非とする態度を執つたのである

殊に勞働黨は昨年頃より故らに、階級對階級の爭ひといふが如き思想を緩和し來つた、これは比較的社會主義系と見られたるスノーデン氏が、昨年「勞働黨が政權を執りたる時」なる題下に於て發表したる論文に就て檢するに、「勞働黨の政治は階級の政治ではない、寧しろ他の何れの政黨よりも一層階級的でない、全國民を基礎とする政治を行ふものである」と述べて居るに徴しても明らかである。斯の如く穩和であればこそ英國に於て其黨員を増加し、勢力を増大し行く所以であらう、殊に一月新内閣を組織するや、英國新聞紙は自由黨たると統一黨たるとを問はず、一齊に之を歡迎せることは外電の報ずる所、又株式市場の如きも爲めに好況を呈したと傳へられてゐる。是れ勞働黨が内閣を組織するも、急激なる革命を見ず、個人の事業及び財産に

對する危險少なきことを、多數英人が承知せる證據でなくて何であろう、此一事は勞働黨内閣の成立に就て、是非共明記しなければならぬ點ではあるまいか。

三

勞働黨の勢力並に同黨成立の事情は、以上述べたる如くであるが、玆に問題として考ふべきことは、此新しく成立したる空前の英國最初の勞働黨内閣なるものが、果して如何なる政治を執るであらうか、是れ同内閣の出現と共に吾々の重視すべき事柄であらねばならぬ。

勞働黨中には其内閣の成立を機會に、多年主張し來れる内治外政上に於ける政綱を、遺憾なく實行せんと考ふる者も尠くない、併し政局に精通せる同黨領袖連に至つては、恐らくは直に多大の希望を其政治の前途に寄すると能はずとの感を懷けるにはあらざるか、換言すれば勞働黨の希望は如何やうであつても、一度之を實行することとなれば議會に單獨にて多數を有せざる自黨の境遇より制限せられなければならぬのである、是に就き予の所見を淡泊に開陳すれば、勞働黨は其内政上の主張に於て思ふが儘に之を實現し得る場合は差當つて極少ではなからうか、之に反し外交政策に關しては、自己の主張少くとも英國の關する限りに於て、實行の途に就くことが容易ではあるまいかと思はれる。

然らば勞働黨の主張なるものは何々であるか、先づ内政より見んか、それには種々ある、一九二三年十一月總選擧に對して同黨が綱領として聲明したる中に於て、最も顯著なるものとしては、五千磅（五萬圓）以上の財産に對し、特別累進資本税を課し、之によつて目下七百五十億圓に達せる英國戰爭債務償却に充當せんとすることである、次は戰爭中多大の財産を蓄積せる大成金より、其巨利の一部を國家に返却せしめなければならぬこと、及び現在の相續税を更に增加しなければならぬこと、年額二百五十磅（二千五百圓）以下の所得に對して課税を免除すべきこと、失業者には大いに職業を與へ之を救濟すべきこと、農業政策を改善し、小作人若くは勞働者の收入を損せずして地主の取得即ち小作料其他を減少せざるべからざること、其他或は教育の發展、衛生狀態の改善及び住家を潤澤にするの策、土地税を改革して其收入を增加すること等主なるものである、其外には選擧制問題に關聯して、比例選擧制度を採用し、以て英國現在の選擧制度の缺陷を補ふこと、並に政治上男女の地位を均等ならしむること等がある。是等の主張は一九二三年十二月の總選擧に於ても繼續せられたのであつて、就中昨年の選擧に於ては、所謂生產機關の國有問題を最も強く呼號したのである、

政綱の一々を引用するは其煩に堪えざる所なるも、當時統一黨內閣が失業問題救濟策として、保護關稅を主張したるに對し、勞働黨は其政綱に於て之に反對し、先づ原則として失業問題が現在の如き經濟組織を有する各工業國に於ける共通の現象たることを指摘し、是れ保護關稅にも自由貿易にも關係を有せざることを說き、而して失業問題救濟案の一として、生產機關の國有急務なるを大いに高調した、勿論此中には電力の供給を國有とし、或は交通機關鐵道水道等を國家の監理下に置くこと、及び之と共に住家を潤澤にするの案、森林を擴張するの案、其他種々なる改善方法も含まれて居る、農業に關しては農民に最低賃金を保障し以て、其生活を安易に爲さんことを主張して居る、又例の五千磅（五萬圓）以上の個人財產に關して、特別累進稅を課し以て戰爭債務償却に充てんとする案の如き、世間に非常なる非難あり難問題たりしに拘らず、勞働黨は此主張を昨年の總選擧に於ても固執したのであつた、此主張の爲には自由黨より猛烈に攻擊せられ、統一黨よりも殆ど狂人なりとまで指彈せられ、勞働者中に於ても同案には多少反對の聲あり、爲めに勞働黨に味方しながら、勞働黨候補者に投票せざるものさへ生じた、此一事を以ても今回の總選擧に於て黨の打擊を構成したるに拘らず、又構成すべきことを領袖連自から承知せるに拘らず之を政綱として主張したのであつた。

勞働黨內閣としては無論是等の內政改革主張は、其總てを實現せんと希望するに相違ない、併しながら右の中住家問題、敎育問題、衞生問題、相續稅問題の如きは或は自由黨の贊成を得或程度に於て、今期議會に實現を見るべく期待せらるゝが、併し彼等が內政上の主張に於ける最大要項とも見るべき生產機關の國有及び、五萬圓以上の財產に關する特別累進稅に對しては恐らくは來るべき議會に於て實現の機會を得やうとは思はれない。何が故であるか、アスキス系自由黨の間には依然として國有に反對し、個人の自由競爭を以て最上の策なりと考ふるものが、傳統的に多いことである。從つて生產機關國有の如き問題に對しては、勞働黨は議會に於て自由黨の支持を得ること困難なるべく、反對派たる統一黨に於ては無論之に贊成する理窟はない。次に財產課稅問題に就ては、勞働黨側にて辯解して曰く「五萬圓以上の財產に對しては特別累進稅を課するも、之は唯一回限りである、度々繰返すものではない、之によつて約三百億圓程度の財源を捻出せんと考へてゐる。目下英國は七百五十億圓の債務を負擔し、今に於て之が償却の方途さへ決定して居ない、從つて何時償還し終るや不明である、此場合有產階級就中戰時中大いに財產を增加せるものに對し、累進稅を負擔せし

むることは寧ろ正當ではあるまいか、況や富の分配の不公平に行はれて居る今日、之を公平に變じて行く上に於ては最も便利なる政策ではあるまい乎」と、殊にラムゼイ・マクドナルド氏などは自由黨が曾て兩三年前、財産課税に賛成し居たる事實を指摘し、自由黨も亦之を支持すべき筈ではないかと說いて居る。又或勞働黨領袖は、此案は謂ば相續税の例に依るもので、相續税は一回限り徵收するが、資本課税は持主の變らない間に一回だけ適用せんとするに過ぎない、度々課税を繰返すものでないから、大いして私有財産に影響を及ぼすものとは思はれないと說いて居る。さりながら吾々は理論の上に於て勞働黨の主張が善いか惡いかを說くものではない、又自由黨が變節せるや否やを玆に於て檢する必要もない。要するに今日自由黨の特別財産税反對は明かなる事實である。同黨首領アスキス氏は昨年十二月四日即ち總選擧の前々日ペーズリーに於ける選擧演說中、盛んに之を攻撃し若し特別財産課税を實行するに於ては、却つて英國事業界を騷し、不景氣を招來し爲めに一般事業の縮少を來し、失業者を增加せしむるものにして、危險此上もなしと云つてゐる位ではないか。之によつて見るも資本家税は、今度勞働黨が政權を獲得したればとて直ちに實行せられやうとは思はれぬ。次に生産機關の國有、運輸機關の國有問題は、勞働黨の久しき主張であるに拘らず、是亦自由黨の贊成を得難きこと、彼のアスキス氏がペーズリーに於ける演說、その他の諸演說に徴しても明かに看取せらるゝ所では無い乎。そこで勞働黨内閣は今後新たに總選擧を行ひ、以て多數を制し議會を支配するに至つた後ならばいざ知らず、現在の如き議會の構成に於て、是等の政策實行は到底不可能と思はれる。由之觀之勞働黨は内政策上無論失業問題に努力し、教育を改善し且つ男女の政治上法律上の權利を均等に爲すが如き施政の幾分を、遂行され得るとするも、其根本主張として天下に呼號したる前述の二大問題に對しては、何等爲し能はざるものと想像せらるゝ、勞働黨に對しては誠に氣の毒ながら、現狀に於ては亦已むを得ざる次第と云ふべきであらう。

四

然らば勞働黨が廟堂に立つた結果、現在の議會組織の下に於て爲し得る政策は何であるか、恐らく外政方面に關することであらう。外交政策方面に於ては、勞働黨の議員數百九十二名に次で百五十六名を占むる自由黨の多數が、殆ど之に共鳴し贊助せる種類の政策に乏しくないからである、從つて外交方面に對する勞働内閣の活躍は、蓋し大いに注目に値する、否本論文

の稿を爲す今日に於ても、既に勞働黨は疾風迅雷の勢ひを以て多年自己が主張し支持し來れる外交的政綱の實現に努め、而して之を最近に起れる問題にも適用し、大いに同内閣存在の理由を中外に闡明しつゝあるではないか。然らば勞働黨の外政々策とは如何なるものであるか。其第一は國際的平和を促進し、國際聯盟を鞏固にして、且之を擴大して以て世界各國の協力を期するのにある、又國際紛議を戰争に愬えず、司法的仲裁の方法並に調停によつて解決すること、及び飽くまで軍備を縮小することなどであるが、是等に就ては無論大體に於て他政黨とも異存の程度少なく、唯だ軍備縮小問題に就てのみ政黨に依つて主張を異にする、例へば勞働黨と統一黨間には其主張に多大の逕庭あるを認めなければならぬ。之を外にして勞働黨の主張として重きを爲せるものは、露西亞を承認し同國と自由なる經濟的外交的關係を完全に復活することである。次には獨逸に對して相當の好意ある政策を執り、佛蘭西の壓迫を排し、彼の賠償問題負債問題に就ては、必要に應じヴエルサイユ講和條約の修正をも敢てせんと主張して居ることである。而して以上の對露政策對獨佛政策に就ては、自由黨亦勞働黨に共鳴して居り、勞働黨政府の活動を援助し、容易にす可き立場に在り、從つてそこに勞働黨内閣らしき眞の活動を見るべき狀態にあるのである。語を換へて云へば勞働黨内閣の成立したる結果、先づ第一に英國の軍備問題第二に對露問題、第三に對獨佛問題が影響を被るものではあるまいか、又被らなければならぬ問題でなからうか、此以外に於ても非帝國主義非膨脹主義の勞働黨内閣實現の結果、勢ひ英國の植民政策にも影響なければならぬ、先づ差當り目下英國が委任統治地として、國際聯盟より引受てゐる舊土耳其領メソポタミアの將來なども影響がなくては止まないであらう、英國内に於てメソポタミア撤退論の尠からざる今日、該問題が今後如何に成行くかは今より豫言することは出來ないが、漸次メソポタミアをしてアラビア人のメソポタミア化せしめて行く傾向を促進するに與つて力あるものではないかと想像せらるゝ所である。併し之は此末の問題に過ぎない、最も重大視せらるゝ軍備問題、露西亞問題、對獨佛問題の今後如何と見るに、先づ第一軍備問題に於ては勞働黨内閣は其成立と共に、頗る主張に忠實なる證據を示した、其證據とは何か、我日本にも甚大なる關係を有する新嘉坡海軍根據地計畫を放棄するに決定したること、極めて顯著なる事例ではあるまいか。抑も新嘉坡防備問題は決して最近に於て現はれた問題でない、無論一八八二年頃より論議且つ計畫せられしものにて、現在の新嘉坡と雖も何等海軍根據地にあらずとは云へない、現に立派なる要塞あり、多

年間英艦隊は其港に出入し、同所には相當程度に於ける修繕も爲し得る設備がある、併し最近之を擴張し大艦隊を容るゝに足る新設備を爲さんとする計畫は、一九二〇年に立案せられ、當時ロイド・ジョージ内閣の下に設けられたる英帝國防備委員會に於て同案の決定を見、翌二一年六月倫敦に開かれたる英帝國會議に於て可決せられたものである、其内容は大體一億圓を投じ一大艦隊を此處に容れしめ得るだけの根據地たらしめんとする計畫であつた、斯く英國が新嘉坡海軍根據地を擴張する案を決定せる所以は、當時日英同盟の終了に際せるが爲めであつた、蓋し日英同盟は元と對露關係より締結せられたるものであつたが、一九一二年の頃英國は其艦隊を歐羅巴北海に集中することゝなるや、便宜上地中海の防備は主に佛蘭西海軍に依賴すると共に、太平洋上の防備に至つては我日本艦隊に委し、英國は無力なる劣等軍艦を太平洋上に留め置けるに過ぎなかつた、然るに今や日英同盟の終了と共に、英國は自身の力を以て太平洋上植民地の防備に當らなければならなくなつた、之に對して適當なる根據地と認むべきものは新嘉坡を措いて外にない。一九二一年秋より二二年の春にかけて開かれた華盛頓軍縮會議に際し防備制限の約定を作り、日英米佛折或區域に亘りて防備の現狀維持を約束し、英國は其制限範圍中に香港を加へたるも、新嘉坡は故らに除外したのであつた、而して其新嘉坡防備大擴張理由はと言ふと、一は新嘉坡に海軍根據地を設定することは、印度の不平黨に對する大なる教訓となり威嚇ともなる點であるが、他の重なる點は、日本艦隊が濠洲を攻撃する場合に於て、側面より之を威嚇し其攻撃を阻止し得る利益ありと世界大戰の對獨經驗から考へられたからである。而して本案は昨年の英國議會に提案せられ、愈實行の運びに近いたが、其際反對を唱へたるは云ふまでもなく勞働黨及び自由黨議員であつた、就中勞働黨は新嘉坡海軍根據地擴張案が、華盛頓海軍制限協定の精神に背反するものなることを、最も強く呼號したのであつた。是に於て乎今回愈勞働黨が政權を掌握すると、一月下旬新内閣は政費節減の目的を以て、新嘉坡海軍根據地擴張案を放棄したといふ報道は、先づ第一英紙ウエストミンスター・ガゼットに現はれ、次で最近植民卿トーマス氏は同軍港案の修正を言明するに至つたのである、新内閣の此政策が吾々より觀て確かに日英親善關係に好結果を與へるのみならず、其影響の及ぶ所太平洋全體に現はれ、海軍制限國際平和の現狀を促進する上に、有効なるべきことも疑ひなき所である。併し吾人の觀る所を以てすれば、勞働黨内閣は獨り新嘉坡軍港問題の放棄聲明のみを以て、軍縮の主張終れりと速斷するものではない、恐らく其他の方面に於て

も同一の政策を行ふに躊躇せざることゝ思ふ、則ち英國は始めて帝國主義膨脹主義を放棄するの意を聲明した勞働黨內閣の下に於て世界の平和に貢獻する所大なるものあるは疑ふ餘地がない。

次ぎに勞働黨の外交政策として主なるものは親露政策である、今や此政策は新內閣の露國承認として現はれた、獨り承認に止まらず、一步を進めて露國に於ける英國の經濟的發展を來すに足る經濟的接近を促すに至れることも、吾々の推想するに難からざる所である。蓋し今日露西亞と其領土を接近せる諸國との間には、完全なる承認が成立し、若くは通商的協定の成立せるものが多いのである、一九二〇年二月エストニア先づ露西亞を承認し、一九二〇年十月には芬蘭が之を承認し、翌二一年三月波蘭が承認し、更に東すれば同年二月アフガニスタン、波斯が之を承認してゐる、土耳其も同年三月承認を與へた、又承認に至らずとも通商協定を爲せるものには、一九二一年六月チエツクスロヴアキアは露西亞と通商協定を結び、翌年四月には丁抹國亦通商協定を締結するに至つた、若しそれ伊太利に於ては一九二一年十二月羅馬に於て露西亞と通商協定を結び、翌二二年五月更に新たに通商條約を締結した、最近の形勢に於ては愈露西亞承認に決定、昨年十二月二日伊太利議會に於ける總理大臣ムツソリーニ氏の演說に於て之を言明し、本年二月三日露國承認の交涉は大體決定した。此外ユーゴースラヴイア國も昨年十二月より露西亞承認に步を進め、佛蘭西亦露西亞との間に此點に於ける交涉一步を進めたる如く認められる。然らば英國は如何、一九二一年三月露西亞との間に一度通商協定を結び、着々親善の策を進めて居たが、此間多少其進捗を妨げたるものは、英國亞細亞領土に對する露西亞の宣傳問題及び、露國領海近くに於ける英國人漁業問題であつた、殊に露西亞現外務卿チチエリン氏と親和し難き關係にあるカーゾン卿が英國外務卿たるに於て、兩國の交涉は相當に面倒を生じ、昨年モーレル、ケンウオーシー氏等が議會に於て、露國承認問題並に英露親善問題を呼號したるに拘らず、昨年の英露協議は寧ろ露國に於ける僧侶迫害問題、露國領海附近に於ける英國漁船の捕獲問題、並に露西亞の宣傳問題に關する交涉を以て、終始したと云ふも差支ない程である。然るに英人間には着々英露の親善の利益を了解するもの、日を逐ふて增加した、是れ一九二一年三月即ち露西亞と通商協定を成立せしめたる以前に於て、露西亞に對する英國貿易は僅々六千八十五萬圓の少額に過ぎなかつたのが、通商協定成立後の一ケ年間に於て、遙かに一億二千八百九十萬圓に增加し、約二倍を超ゆるに至つたのにも、依つたことゝ思はれ

る。然らば勞働黨は如何といふに、最初より露西亞との接近を主張し、常に露西亞に對しては好意を有して居たのである、先づ一九一九年に於て勞働黨は英國の露國出兵に反對し、一日も速かに撤兵せんことを呼號し、露國封鎖に對しては極力反對して居たのである。是より先き勞働黨所屬下院議員にして一般勞働者組合幹部であつたオグラデー氏（目下駐露英國大使に任命せらるべしとの說ある人）は英國を代表し、コペンハーゲンに於て勞農露國と俘虜交換協定を作りたる後、本國に歸り大いに親露論を主張し、勞働黨內に宣傳せることなども亦與つて力があつたと思ふ。同時に勞働黨の自由主義民主主義其他一般思想の傾向も、親露政策に關係深きものであると思はれる。一九二〇年勞働黨は波蘭問題の發生に際して、英國側よりする陸軍若くは海軍上の援助に反對した、即ち對露軍事行動に反對したものであつた、翌二一年に於ては勞働黨は露西亞との通商開始を主張し、共黨員は露西亞承認を呼號した、此主張は爾後も繼續せられ、昨年十二月の總選擧に於ては露西亞との自由なる經濟的外交的關係の復舊促進を綱領に於て聲明し、主張の一として堂々戰つたのであつた、されば此方面に向つて勞働黨內閣が、步數を進めつつあることも何等不思議とするには足らない、のみならず外國電報に見るに、勞働黨政府は愈々二月一日附を以て勞農露國に對し、露國承認を表示する公文を手交せりとある、之に關しては無論多少批評の餘地あるやも知れないが、特に感ずべき點は英國が露國承認に對して、殆ど何等對露交渉を行はず、一切の交渉案件を承認以後に讓つたことである、蓋し勞働黨政府の觀る所によれば、承認は其國家が安定し、其政府が國民を統治し行く能力の完全に證明せられたることを以て足るとし、若し兩國間の利益に關する交渉があるならば、それは別問題とすべきものであるとしたのである、又た同政府が露西亞承認を實行したる他の一理由は、更に進んで英露を通商上經濟的に接近せしめたいといふ政策にあることを忘れてはならぬ。蓋し今日露西亞との接近は英國の對外貿易發展上必要な問題である、勞働黨としては一は自己の獨立國對獨立國間の關係に關する觀念にも支配せられて行へる行動であるに相違ないが、又た之によつて英露の經濟的接近を齎らし、英國內の勞働者問題失業者問題の解決にも貢獻したいと考ふるは論ずるまでもないことであらう、唯今後吾々は之に關して注意すべき點は、英國勞働黨內閣が露國承認後に於て、如何に英露關係を發展せしめて行くか、之によつて如何に露國の利益を圖り、世界の平和に貢獻すると共に、英國自身殊に英國勞働者自身の利益にも貢獻せんとするか、這は確かに一の見物たるを失はないのである。

尙ほ此露國承認並に露國との親善關係促進問題に就て、英國勞働黨內閣は疾風迅雷的に步數を進め得たことに就ては、彼等が議會に於て自由黨の味方あることを考慮中に入れて居たことを、決して忘れてはならぬ、自由黨は夙に露國承認に賛成して居たことは昨年十一月十九日アスキス氏及ロイドヂョルヂ氏が露國を承認せざるべからざるを主張する連署宣明書を發表せるに徵しても、十分に知らる可きでは無い乎。

勞働黨の新外交政策として、吾々が以上指摘せる以外に、一層注目を以て望まざるべからざるは、其對獨對佛政策でなければならぬ、換言すれば獨逸の賠償金問題に對する英國政府の新外交であると思ふ、尤も英國は從來佛蘭西と異り獨逸に對して穩和政策に傾き居り彼の一九二一年春聯合國側が、獨逸を威嚇して遂に六百六十億圓一千三百二十億馬克の償金額を決定せる以來、佛蘭西は飽くまで該償金を誅求せんとし、英國は其後に於ける形勢に鑑み、寧ろ緩和的態度に出で、之が減額をも主張せんとする立場になつて來た、言ふまでもなく佛蘭西は獨逸の償金支拂に依つて獨逸軍の爲め破壞せられたる地域の恢復費を辨ぜんとせるのみならず、之に依つて財政的に人口六千萬を有する獨逸を弱國たらしめ、以て獨逸よりも人口少なく三千九百萬しか數えない佛蘭西に對し、獨逸が威嚇し來るべき機會を絕滅せしめ、若くは絕滅させ得なくとも、獨逸の國力恢復を遲からしめ威嚇の機會を遼遠にせんと考へて居る。所が英國は獨逸の海軍力絕滅に歸したる今日、獨逸を憂懼する必要なきのみならず、寧ろ自己の利益から考へると獨逸の經濟界財政界を健全の基礎に立たしめ、之によつて獨逸自身を安定し獨逸周圍の諸國にも其健全なる影響を及ぼし、歐羅巴大陸諸國をして、英國生產品を購買し得る狀態とすることが大切となつて來たのである、換言すれば佛蘭西は獨逸の安定若くは對獨逸の通商などよりは、寧ろ償金の誅求を以て主要なるものとしたが、英國は償金問題を第二とし獨逸の安定と通商の發展を以て第一要件とした、玆に於て兩國の利益は勢ひ衝突せざるを得ないけれど、戰爭終了後久しからざる時代に於ては、英國は從來の行懸上佛蘭西と容易に離隔すること能はず、兩國の疎隔に對しては大いに躊躇せざるを得なかつた、此現象はロイド・ジョージ內閣時代に於ても現はれたが、一昨年の秋統一黨內閣成立後に於ても續き甚しきは去年一月佛蘭西が單獨を以てルール地帶の占領を敢行せるに對しても英首相ボナーロー氏は依然曖昧なる態度を持し煮え切らざるものがあつた。所が昨年五月ボルドウイン內閣成立後昨年六月より八月にかけて英佛兩國政府の交換公文書に於て、始めて英佛兩國の衝突は明かにされて來た、然も八月末より九月

に亘り例の伊太利コルフ島占領問題起り、之に關聯して一時的ではあるが、佛伊兩國間に妥協成立の結果英國は强硬に佛蘭西に對するを躊躇した、又摩洛哥タンジエール問題に關する英、佛、西三國協定問題發生し、統一黨内閣内にも軟派を生じた結果、統一黨内閣は其矛盾だらけの外交政策裡に、遂に生命を終つたのである、然るに今日に於て、是等の問題に對し新政策を採り、英國外交に一大刷新を加へなければならぬ地位に立つたのが、即ち現勞働黨内閣である。それには二個の原因がある。第一は言ふまでもなく勞働黨自からの久しきに亘る主張である、同内閣は一九二一年六月サウスポートに開かれたる勞働黨總會に於て、ラムゼー・マクドナルド氏の提出せる決議案を通じて、既に對獨穩和政策を標榜し、償金問題に關聯する平和條約の苛酷なる規定の急速修正を呼號したものである、當時既にクラインズ氏（現國璽尙書にして下院政府黨代表）も之が討議に加はりたることも、人の知る所である、其後勞働黨は常に同一主張を繼續し、昨年十二月總選擧の場合に於ても、ヴェルサイユ講和條約修正の目的を以て、獨逸をも均等的待遇を以て參加せしむる、國際會議の招集を呼號する程である。從つて勞働黨内閣が成立したる以上、獨逸に對する賠償金額の低減並に之を實現せしむる爲めの國際會議開催を主張し、又其他の方法を以て講和條約の苛酷なる缺陷を緩和する態度に出づることは、同黨平常の主張に照らし寧ろ自然であらねばならぬ。然も勞働黨は此政綱の立場より離れて、更に新しき周圍の事情の爲めに、此問題の解決を促進せざるを得ざる境地に立つて居る、それは何故であるか、目下英國に於ける失業者の增加其者が重大なる原因を爲したる最近保護關稅政策に反對し、遂に總選擧に於て統一黨の主張を打破したる行懸りにも亦關係が深いのである。前に述べたる如く償金問題等の影響により、獨逸の馬克紙幣は大下落を見、經濟的不安絕えず、延いて周圍の諸國にも影響を及ぼし、爲めに英人が豫め希望したるが如く、英國生產品は歐洲大陸に於て販路を擴大すること能はず、一昨年來國内の失業者は百七八十萬人を算し最近に於ても百四五十萬の失職を有する英國としては、失業救濟問題は愈面倒なるものとなつた、勿論之に處するの策として、種々の企圖が講ぜられた、其一は一九二一年倫敦に於ける植民地代表者の協定により、植民地への英人移住を奬勵とする策である、政府は之が爲め一九二二年度に於て一千五萬圓の奬勵費を支出し、翌年更に三千萬圓を加へ合計四千五百萬圓を支出したけれども、事實上利用されし金額は三百八十萬圓に過ぎず、之によつて移住せる人員は僅か三萬人足らずであつた、其中二萬餘は濠洲に他は新西蘭及加奈陀に赴いたも

のである。僅か三萬人の移住を以てしては到底失業問題の解決には資せられない、統一黨政府は更に別案を立て運輸省に於て約七千萬圓を投じ失業者に仕事を與ふると共に、海軍省及遞信省に於ても各五百萬圓宛を支出して、職業を與ふるの案を立てた、然も之が利益を受ける數は三十萬人にしか達して居ない。斯の如き案を以てしても尚失業者問題に貢獻すること能はざるを知りし統一黨内閣は、玆に於てか他に何等かの方策を廻さざるを得なくなつた、即ち歐羅巴大陸に對する問題が急に解決すべくも見えず、歐羅巴方面の市場が英國生産品を購買すること困難なりとすれば、之に代るべき案として、從來英本國輸出品の三割以上を吸收せる英國殖民地に對して、特惠關税の便を與へ、双互の接近を圖つて一層殖民地から英本國の貨物を購買せしめ之により英國の事業界を盛んにせんと考へた、是れ即ち最近に於ける保護關税問題特惠關税問題の發生せる原因である。

然るに統一黨が折角立案したる關税改革は總選擧に於て自由黨に援助せらるゝ勞働黨の大活動によつて、破碎せらるゝに至つたのである、而して同案破碎の責任者たる勞働黨は今や新内閣を組織し、以て政局當面の責任に當つて居る、同黨の立場より見ても速かに他の方法に依つて失業問題救濟を策しなければならぬ、殊に勞働黨本來の性質に鑑みても、失業者救濟に對しては一層注意し活動するを必要とする立場に在る、而して失業者救濟に關聯して、勞働黨の云ふが如く現在の資本制度下に於ては失業者の續出は自然のことに屬し止むを得ざる點であるが、然かも此資本制度の根柢的改革は直ちに行はれるであらうか、決して急速の改革實現は望まれ難いとすれば、やはり失業救濟の別案として、歐羅巴大陸に於ける英國貿易の發展策を講ずる必要を生じて來た、即ち此立場よりして勞働黨は獨逸償金問題に對しては、後歸りして行かなければならなかつた、而して之を實行するには自然佛蘭西に對する強硬外交獨逸に對して好意ありとも認めらるゝが如き政策を取らざるを得ざることゝならう。況んや此立場は恰も積年勞働黨は主張し來れる、償金問題其他に關し一旦條約決定されたる、ウエルサイユの修正さへも敢て行はんとせる、強硬なる主張と相合する譯では無い乎、又た況んや自由黨もアスキス氏ロイド・ジョージ氏共に、本問題に就ては同一主張を持せること既に言明して居る所では無い乎。

併しながら勞働黨が縱しや自由黨及び他黨の支持ありとするも、果して能く完全に此政策を實行し得るや否やは、曾て行政的實際政治に携はつた經驗を有せざる彼等に取つては、將に一大試金石であらねばならぬ、即ち勞働黨の主張は甚だ善しとするも、之を佛蘭西との間に如何にして實行せんとするや、佛

[illegible]として英佛の完全なる乖離を得てまでも、之を實行するであらうか、若くは兩國間に疏隔なくして實行し得るの妙策を有するや否や、ラムゼー・マクドナルド氏は一月八日倫敦アルバートホールに於ける演說にて、佛蘭西との親善關係を促進せんとする態度を示して居るが、之とその新政策との兩一が果して加能なるや吾人に取つては好個の觀物であると思ふ。啻にそれのみではない、勞働黨の議會に於ける薄弱なる他位より生づる政變の加能性である、何となれば勞働黨は右の親獨外交即ち賠償問題の解決を玆四五ヶ月の間に於て實行し得るや否や甚だ疑ひがある、無論勞働黨としても長日子を費せば該問題の解決も實現し得らるべきも、それまで現在の政權を維持し行くことが出來るかどうか、尤も勞働黨が一切の問題を犧牲にし就中內政上の主張を犧牲にしてまでも、政權を維持せんとすれば敢て不可能のことでもあるまい。併しながら勞働黨は或一定の時期までこそ內政上に其主張を異にする自由黨との議會に於ける提携により、內政上に關する政綱の實行を延期し得るとしてもそれが無限に延期逡巡するに於ては、黨內に不平不滿の聲の勃發するは必然であらねばならぬ、要するに現在六百十五名の英國議會に於て百九十二名の少數を以て政權を長く支持することは變態である、本年の八月頃か或は其後に於て行ふかは別問題とするも、勞働黨は何れの時か決然として更に議會を解散し、第二の總選擧を行ふに決心しなければならぬ時期の到來も、餘り遠くはあるまいと思ふ、若し然らざれば勞働黨は徒らに政權に戀戀として自己の主張を放棄するものなりとの不評を受け、その支持者たる勞働者の心を失い、恐らくは政黨的生命に對し、永久的創傷を受くることになるであらう。又若しも議會を解散するが如き時期來るとすれば、それは對露對佛外交の成功するに先つてではあるまいかと思ふ。

以上は勞働黨の政治に對する予の考を述べたのであるが、終りに臨み一言附加したきは、大體に於て勞働黨の非帝國主義平和主義、軍備縮小主義なることは、以上に說示したる問題以外に於て內政上外交上に種々なる現象を示し來るや想像に難かさざる點である、例へば其對支外交に於て、印度附近の國境外交に於て或は太平洋上の外交に於て、同樣新政策の現はれ來ること疑はぬ、這は問題々々によつて表現の形式を異にするであらうが我日本等に取りても亦大いに興味ある問題であると思ふ、今や軍備費の負擔に苦める國家多き時代に於て、英國の如き強國に斯の如き政策を有する、新內閣の出現せることは、眞に喜ぶべき現象ではあるまいか。以上を以て一應本論を打切る、局面の進展によつては更に亦論するの機會もあらう。（完）

獨逸復興問題に就て

法學博士 農學博士 高岡熊雄

今や我が國に於ては朝野擧つて帝都の復興問題に就て大に論議し且つ努力しつゝある間に世界の耳目は獨逸の復興問題に集注しつゝある。帝都復興問題は對內的の問題であつて獨逸復興問題は世界的の大問題である。帝都復興問題の起因は地震なる自然的の破壞力であるが獨逸復興問題の夫れは戰爭なる人爲的の破壞力であつた。前者は今日迄の科學の進步の程度では到底之を避くることが出來ないが後者は充分に之を除くことを得たのである。而かも此の人爲的の破壞力と其の結末たるヴェルサイユ平和條約とに依りて獨逸の政治的及び經濟的生命は大打擊を被つたのである。此の偉大なる人爲的の破壞力たる世界戰爭の勃發せしはまだ昨今の如く考へらるゝも既に早や十ケ年の歲月を經過した。千九百十四年七月より千九百十八年十一月まで約四ケ年半に亙る大戰爭であつた。此の戰爭も歷史上最長の戰爭ではあらざりしも何しろ之に參加せし國の多數なりしと戰場の區域の廣かりしと且つ世界經濟が發達して列國が經濟上極めて密接なる關係を有するに至れる時代に起りたるものなればあらゆる方面に種々なる影響を及ぼし其の結果は戰敗國は勿論のこと戰勝國及び中立國と雖も多くは急に治療すべからざる創痍を被りて實に悲慘なる狀態に陷つたのである。文化の發展の上から見又人道の上より考へても避くべきものは戰爭である。過般の大戰爭に於て獨逸は戰爭は往時の如く單に軍人の戰爭であるとのみ考へ政治家の戰爭であり國民の戰爭であることに餘り注意を拂はなかつた。今春余は獨逸に再遊し舊師を伯林大學に訪問せし際談は直ちに政治談に落ちた。其の際教授は「日本には善い政治家が居つた。獨逸よりはより善い政治家の居つたのは幸である」と言つて褒めて居たのも必ずしも一片の御世辭ではない、實際若し獨逸が最初よりして世界戰爭はヒンデンブルヒ將軍やフオツシユ將軍杯の戰爭でなくクレマンソーやロイド・ジョージやベートマン・ホルヴェツヒ等の戰爭であることに氣付きカイザー自からも戰線に立つて萬軍を指揮することを

なく伯林の宮城に籠つて常に天下の形成を達觀し活動したならば戰爭の結果は如何になりしや計り知ることが出來ない。然しながら戰爭は幸にも聯合軍の勝利に歸し多年宇内に雄飛し、個々橫紙破りの如き行動をすらなして世界の政治舞臺に我儘をなしたる、さすがの獨逸も策盡きて如何ともなす能はず遂に千九百十八年十一月十一日に休戰條約を締結するの已むなきに至つた。十一月十一日はセント・マーチンの祭日で獨逸の歴史上記憶すべき日である。即ち有名なるスタイン及びハーデンベンヒの農政大改革は此の日を期して實行せられたるもので獨逸の國運隆興の記念日である、此の祝福すべき十一月十一日が百十一年の後獨逸の最大屈辱の記念日となつた。

越えて翌千九百十九年六月二十八日にはヴエルサイユ宮殿に於て平和會議は開かれ聯合國に依りてのみ起草せられたる條約文に對して獨逸は何等の喙を容るゝことを許されず條約を其の儘承認するか若くは之を拒絶するか二者其の一を選ぶより外なからしめた。是れ從前の平和會議と全然其の趣を異にした所であつた。平和條約は嘗てウヰルヘルム第一世が第一代の獨逸皇帝として即位式を擧げたる鏡の間に於て調印せられた、是れ實に十一月十一日の記念日と相並んで獨逸國民に取りては不思議なる廻り合せであつて有爲轉變の世の中なりと言はざるを得ない。

平和條約は當時世界に於ける衆智を集めて起草せるもので條約文は四百四十條の多きに及び頗る微細を極めて居る。蓋し平和條約中最も廣汎なるものでウヰルソンの理想主義とクレマンソーの現實主義とを能く調和するが爲めには苦心の存する所を見る。平和條約が世界列國に影響を及ぼすこと極めて多かりしは言を俟たない。殊に戰敗國たる獨逸の運命は全然之に依て支配せられたのである。今余は先づ此の條約が獨逸の經濟界に如何なる結果を齎したるかを特に觀察せんとするものである。何となれば現今世界に於て最も重要なる問題たる獨逸の復興問題を論議するには此れが起因たるヴエルサイユ平和條約が斯國の經濟界に如何なる影響を及ぼせるやを充分に了解する必要あるが爲めである。

余は今回二十年振りに獨逸に再遊したのである。此の期間に於ける獨逸の國情は實に驚くべき一大變化をなした。便宜上此の期間を千九百四年より千九百十四年に至る十ケ年と千九百十四年より今日に至る十ケ年の二期に區分して考ふることが出來る。第一期は獨逸の全盛期にして政治に經濟に科學に其の他あらゆる方面に於て旭日昇天の勢を以て進歩發展したものである。之に反して第二期に於ては獨逸が急轉直下奈落の底に落ち

たる感がある。尚此二期を簡單に對照すれば第一期は帝政の時代にしてカイゼル・ウヰルヘルム第二世の統治時代にして第二期は大戰爭の時代及び共和政治の時代である。第一期は軍國主義及び帝國主義に依りて支配せられたる時代であつて第二期は社會主義が全勢力を占めて居る時代である。先年伯林に遊學せし頃には五月一日の勞働日の如き警察の極度なる干涉の下に社會民主黨のものが淋しく市中を練り步けるに過ぎざりしも今や聯邦中には此の日を以て公休日となせるものがある。伯林に於ては多數の社會主義者が衛宮城前の廣場に集合して此の日を祝福した。露國大使館の屋上高く赤旗の飜へるを目擊した。帝國銀行の發行する紙幣には勞働者の像が印刷せられ、大學教授中講壇に立つて社會主義を論ずるものもある有樣である。僅かに二十ケ年間に獨逸の國情の斯くも激甚なる變化をなしたるには實に今昔の感に耐へなかつた。斯くの如きも畢竟主として世界戰爭及び其の結果たる平和條約の齎したる結果である。然らば平和條約が獨逸の經濟界に及ぼしたる影響は如何。項を分つて之を論究せん。

第一　獨逸本國の領土に及ぼしたる影響。戰爭前に於ける獨逸帝國の總面積は五千四百萬町步であつたが平和條約に基いて獨逸は鑛及び加里に富み且つ獨逸民族の努力に依りて發展したる種々の工業を有するエルサスロートリンゲン州や石炭亞鉛其の他の鑛產物の主產地たるシユレジア州の一部や豐饒なる農耕地を有する西及び東普魯西兩州の大部分ポーゼン、ポルメルン州や其他ライン州、シユレスヴツク・ホルスタイン等に於て總面積七百〇五萬町步即ち全國の一割三分を佛蘭西、波蘭土、丁抹に割讓しなければならなかつた。而して此の面積は比耳義、和蘭及びルクセンブルヒの三ケ國を合したる面積即ち六百七十二萬町步よりも廣く恰もライン川の右岸に在るバイエルン自由國の總面積六百九十九萬町步と相匹敵するのである。斯くして獨逸の本國は今や四千七百萬町步に其の面積を縮小せられた。

第二　人口に及ぼしたる影響。前述せる如く領土が縮小すれば當然の結果として人口も亦減少するのである。獨逸の總人口は六千四百萬人であつたが其の內割讓せし地域內に居住するものは約六百五十萬人即ち總人口の一割を占めて居るが故に事實上それ丈けの人口の減少を見たのである。六百五十萬人の內三百八十五萬人は波蘭土に百八十七萬人は佛蘭西に而して殘りの七十五萬人は其の他の國の國民となつた。斯くして獨逸が失つた人口の總數は恰も和蘭の人口六百八十四萬人葡萄牙の六百四十萬人墺太利の六百十三萬人瑞典の五百九十萬と伯仲の間に在る。是に由つて之を觀れば平和條約に依りて獨逸が失ひたる土

地積人口とは優に歐洲大陸内に於て一の獨立國を建設するに足る丈けのものである。

第三　植民地の割讓。平和條約の結果として獨逸は本國の一割三分に相當する領土を他に割讓したのみならず植民地の全部をも失つた。元來獨逸は他の强國に比すれば遙かに遅れて植民事業に着手した國である。獨逸の植民事業は英國より五十年を遅るゝ故に大に努力せざる可からずとは常に彼等が宣傳する所であつた。其の結果僅かの年月の間に各地に植民地を設け戰爭前には其の面積は二億九千五百萬町歩となりて本國の面積の五倍半に上り人口も千二百三十萬と云ふ大植民地を有するに至り英露佛に次ぎて第四の植民國となつた。

獨逸は遅れて植民界に現はれしかば何れかと云へば諸國の殘り物を占領したのであるが故に之を英佛の植民地に比すれば天然の狀況は頗る不良で到底問題にならない程であつた。然るに熱心なる獨逸國民の努力に依りて植民地の生産力は年と共に增加し經濟的實力も充實した。今貿易の狀況を見るに千九百〇三年には植民地の輸入は七千七百萬麻克輸出は四千萬麻克に過ぎなかつたが十ケ年の後である千九百十三年即ち戰爭の前年には輸入は二億三千八百萬麻克輸出は二億六千九百萬麻克に達したと云ふ著しき發展をなし獨逸の國民經濟上重要なる一要素たるに至つたが平和條約の結果此等植民地の全部を失ひ一點の殘す所なきに至つたのは一大損失である。

第四　獨逸國内に於ける一時的の土地占領。聯合國の軍隊は平和條約に依つて獨逸が條約に規定せる義務を履行し終るまでの保證としてライン川の左岸一帶の土地を一時占領した。又ザール地方は國際聯盟に依つて管理して居り十五ケ年の後に住民の一般投票に依つて獨佛何れに所屬すべきやを決定するのである。而して此等の地方に在る石炭坑は此期間内佛蘭西が之を採掘し他日若し一般投票の結果此等の地方が獨逸の領土と確定する場合には獨逸は佛蘭西の鑛山採掘權を賠償するの責任を負ふて居る。

此等の地方は平和條約に明記せる所に依りて他國の爲めに一時占領せられつゝあるが尙此の外に本年一月十一日佛蘭西及び比耳義は獨逸が條約上の責任を充分に遂行せざるの理由の下にルーア及びライン川右岸地方の一部を更に占領したのである。ルーア地方は獨逸の工業の中心地であつて獨逸國内の石炭の七割二分鐵の五割四分鋼鐵の五割三分は此の地方に於て生産せられ斯國國民經濟の心臓とも稱せらるゝ所である。斯かる大切なる地方を占領せられたるは獨逸に取つては實に咽喉を抑へられたる以上の苦みである。

斯くして獨逸國内に於て聯合國の爲めに目下占領せられつゝある土地の總面積は三百五十萬町歩以上で人口は千二百萬人に上り恰もスカンジナビア三國の夫れと相等しいのである。

以上四項に亘つて陳述せし所を總括すれば獨逸は平和條約の爲めに他に割讓し或は他國に依りて一時占領せられて居る土地の總面積は無慮三億〇五百萬町歩の多きに上り人口も三千一百萬人を算ふるのである。戰爭の爲めに何時全治し得べきとも知れざる重傷を負へる其の上に斯かる莫大なる土地と人口とを或は永久に或は一時的に失ひたることとなれば獨逸の國民經濟の根柢が如何に動揺し如何に劇變したるやは何人も容易に想像し得る所である。

第五　物資の賠償。獨逸は平和條約に依りて種々なる物資の賠償をなし又千三百二十億金貨麻克なる巨額の償金を支拂ふの責任を負はしめられた。此等の物資の賠償をなすが爲めには外國に在る國有財産は勿論の事私有財産に至る迄總て皆な聯合國の爲めに沒收せられた。是は從來國際法上先例を見ざる處置であつた。獨逸は條約に基きて今日までに物資の賠償をなしたるが其の額は幾何に上るやに就ては債權國と債務國と其の立場を異にするに從ひ其の評價に多大の相違がある。獨逸政府の調査に依れば昨年末までに賠償せし總額は無慮五百億金麻克の多きに上れりと云ふ。此の額の内には割讓せし土地の價額の如きは含まれて居ない。賠償額の主なるものは左の通りである。

	百萬金麻克
外國に於ける私有財産	一一、七四〇
同盟國に對する債權の強制的放棄	八、六〇〇
商船	五、八二五
内外國に於ける國有財産	五、五〇八
占領費	四、五〇〇
石炭及びコークス	二、四一四
現金賠償	二、一三〇
家畜染料藥品機械木材等	、六一八
機關車其の他鐵道用品	、六一六

等である。

此賠償金額は獨逸政府の評價に基けるものなれば多少高く見積れるものなることは推測することが出來る。實際獨逸の負擔に係る物資の供給中には吾人の想像以外のものが少なくない。例へば占領費としては占領軍隊に關係ある軍人の俸給や直接軍事に要する經費食糧等は勿論室内の裝飾等にまで及んで居る。獨逸政府の報告に依れば千九百二十年より二十二年に至る一年九ケ月の間のみにても千四百の客室、二千六百の男子用室、五千の食堂、一萬三百の寢室、四千六百の廚房等に要せし家具

や八百の舗入用卓子、五百の剃克具、一萬八千の敷物、三萬六千のコーヒー茶碗、四千の茶碗、七萬二千の白葡萄酒コップ、五萬一千の赤葡萄酒コップ、一萬五千のポートワインコップ、四萬五千のセクトコップ、五萬八千のリキユーコップ、二萬六千の麥酒コップや又寝具用及び食卓用として約三百萬メートルの麻地を提供したと云ふ。斯る負擔は吾人の一寸考へ及ばざる所である。千九百二十二年末までに至る此の種の負擔額が四十五億金麻克に及びたりと云へば恰も普佛戰爭の際佛蘭西の支拂ひたる償金の全額たる五十億フランに相當する。而して連合軍の占領期間は平和條約に依れば十五ヶ年なれば蓋し此の種の經費も莫大なる額に上るならん。

翻て佛蘭西側の評定價格を見るに十一月七日の大阪朝日新聞に掲載せし四月發倫敦電報に依ればブリーヴヱーに於ける演説にて首相ポアンカレーは獨逸は五百五十億麻克に相當する物資を引渡したりと盛んに宣傳せるも事實に於ては去る六月三十日までに引渡された物資の總價額は僅かに八十八億四千九百四十一萬三千麻克に過ぎないと言つて居る。如何に獨佛兩國の利害關係が互に相反するとは言へ物資の賠償價額に關する評價は餘りに其の差異が甚しく、局外者は到底其の何れが果して眞なるやを判斷するに苦しむ。是れ嚴密なる調査の必要なる所以である。

從來獨逸の富力に關しては種々なる調査があるが戰爭前ヘルフエリツヒが公にせし結果に依れば斯國の富力は千八百九十五年には二千億麻克なりしが千九百十三年には三千億麻克に増加したと、即ち十八年間に一千億麻克を増加したる割合である。然るに千九百二十年米國の一經濟雜誌は日本の富力を四百億弗と評價し獨逸の夫れは僅かに二百億弗即ち八百億麻克なりと見積つた。斯る富力の減少せし所以は四年有半の長き間に莫大なる軍事費を支辨したるが主因なりとは言へ其の後獨逸が多額の物資を賠償して大に國力の疲弊を來したが爲めである。獨逸の近狀を親しく目撃せし吾人は物資の賠償額に對しては佛蘭西の評價よりは獨逸の夫れが寧ろ事實に近きものであると想像するのである。

第六　農業界に及ぼした影響。先きに述べし通り獨逸が平和條約に基きて他國に讓渡せし土地は國内に於ては總面積の一割三分に相當して居る。而して其の大部分は農業用地であつて割讓せし土地の面積七百〇五萬町歩の内には四百九十六萬町歩の農業用地を含んで居る。是れは全農業用地の一割四分二厘である。其の内農耕地は三百九十三萬町歩で全農耕地の一割五分四厘に當る。農耕地を更に栽培する作物の種類に依りて區分すれ

ば左の通りである。

小麥	二九二、四五八町	即全小麥栽培地の一割四分八厘
裸麥	一、一三三、四〇五	即全裸麥栽培地の一割七分七厘
夏作大麥	二七〇、八二九	即全夏作大麥栽培地の一割六分四厘
燕麥	四九六、六七四	即全燕麥栽培地の一割一分二厘
馬鈴薯	五八六、七〇九	即全馬鈴薯栽培地の一割七分二厘

農業用地と云ひ農耕地と云ひ其の他各種重要作物の栽培面積と云ひ何れも皆な獨逸が割讓せし人口の總人口に對する割合たる一割を超過するを以て獨逸の國民經濟の基礎が變化した即ち

（一）從前獨逸は一の農業國たりしが十九世紀の最後の四分半世紀頃よりして工業次第に隆盛に赴き既に千九百〇七年の職業調査では農業林業及び漁業に從事するものは有業者總數の三割五分二厘なるに工業及び鑛業に從事するものは四割となり商業及び交通業も一割二分四厘に上つた。獨逸は最早一の商工業國となつた。然るに平和條約の結果として人口よりは割合多くの土地而かも農耕地を失ひたるが爲め從前よりも更に一層商工業國となつたのである。

（二）獨逸は歐洲に於ける政治的地理的關係等からビスマルク以來常に食糧の自給自足を以て目的として經濟政策を實施し來たが尙戰爭前に於ても充分に國民の要する食糧を自給することが出來ず幾分か之を外國よりの供給に待て居つた。然るに平和條約に依つて獨逸の穀倉と稱せらるゝ東北地方の土地をポーランドに讓れるを以て食糧の自給自足は更に一層困難となつた。例へば千九百十三年即ち大戰爭の勃發せし前年には獨逸全國に於ける麵麭用穀類即裸麥及び小麥の人口一人當收穫量は翌年の種子量を除き二百三十九瓩なりしが東及び西普魯西及びポーゼンの三州の平均は五百七十瓩馬鈴薯は全國にては一人平均七百二十八瓩なるに東普魯西外二州にては二千三十二瓩の多きに及んで居つた。實際此等三州は他の地方に對する重要なる食糧供給地であつたが今や他國の領土となつた。更に又割讓地全部と現在の獨逸とに於ける重要農產物の一人當生產額を見るに種子量を除きて左の通りである。

	裸麥	小麥	燕麥	馬鈴薯（單位瓩）
割讓地	二八九、三	八五、二	一三三、二	一、三五五、三
現在の獨逸	一六〇、〇	四四、三	三七、六	六〇二、四

されば獨逸は農耕地の單位面積よりしてより多くの生產を上るにあらずんば外國よりして益多くの農產物を輸入しなければならない。是れ貨幣價値の下落せる現時の獨逸に於ては極めて憂慮すべき大問題である。而も戰時中には土地には充分の肥料を施さず勞力の投入も不充分であり且必要なる機械の修繕の如

き兎角爲り勝ちとなれる等種々なる原因は重なり重なつて土地の生産力は戰爭前に比して却つて衰へるに至つた。重要農作物の一町歩當の生産數量は明かに之を示して居る。

	小麥及裸麥	大麥	燕麥	馬鈴薯
千九百十三年	二〇、三	二二、二	二三、三	一五〇、七
千九百二十一年	一七、〇	一七、一	一六、八	九八、八
減	(一)一六%	(一)二三%	(一)二八%	(一)三四%

今此等減退せる土地の生産力を再び恢復せんとするには資本の投入を必要とするも是獨逸の現狀にては之を解決するに困難なる問題である。

(三) 領土の割譲の食糧供給上に及ぼした影響は獨り農作物許りでなく畜産物に對しても同樣である。割譲せし地方に在りし家畜の頭數は千九百十三年十二月一日の現在調査では

	頭	全國に於ける總頭數に對する割合
馬	七〇一、四九九	一五、五%
牛	二、三四六、〇七三	一一、二
豚	二、八八四、〇二〇	一一、一

何れも皆な人口の減少せし割合以上の割合を示して居る。爲めに人口に對する家畜の頭數は其の割合を減少した。即ち人口千人に對し

	馬	牛	豚
割譲地	一〇八	三六三	四四六
現在の獨逸	六六	三一九	三九〇

である。

第七　領土の減縮が工業原料及び補助原料の生産に及ぼした影響。戰爭前に於ける獨逸の工業の主なるものは化學工業と機械工業等であつて鐵及び鋼鐵の産額の如き既に英國を凌駕し漸次米國に接近せんとする勢を示して居つた。而して之が原料の殆んど大部分は平和條約に依りて割譲したる領土内に於て生産せられた。今千九百十三年に於ける鑛物の採掘額を見るに左の通りである。

	舊獨逸全國	割譲區域内	割合
亞鉛鑛	六四五、〇〇〇	四四一、〇〇〇	六八、三%
鉛鑛	一四五、〇〇〇	三八、〇〇〇	二六、二
鐵鑛	二八、六〇八、〇〇〇	二一、三三九、〇〇〇	七四、五

人口は約一割領土は約一割三分を減じたるに此等鑛物の生産額は二割六分乃至七割五分を減少して現在人口一人に對する生産額は大に減退した割合である。

戰爭前に於てすら獨逸の製鐵業等は何れも自國内に於て生産せる原料丈ては尚不足を告げ常に外國よりして多額の輸入を仰

いだ。例へば鐵鑛の輸入超過額は千百四十萬噸錫鑛は二十六萬八千噸鉛鑛は十三萬八千噸に上つた。然るに戰爭後に於ては自國内に於ける生産が顯著なる減少をなせしにも拘はらず貨幣價値の下落の爲めに外國よりの輸入は增加せず却つて大に減少した爲めに製鐵業の如き大に其の生産額を減じ鐵の如き千九百十三年には千二百二十八萬七千噸の生産があつたが千九百二十年には殆んど半減して僅かに六百六十五萬噸となり鋼鐵の如きも千三百六十六萬噸より八百十四萬噸に減じた。其の結果として從前は鐵及び鋼鐵の如き自國内に於ける需要を滿足し尙其の餘れるものを國外に輸出したりしが今や却つて輸入超過を來すに至つた。即ち千九百十三年には鐵の輸入の十二萬四千三百噸に對し輸出は七十八萬二千九百噸で差引き六十五萬八千六百噸輸出超過であつたが千九百二十二年には輸入は二十九萬四千三百噸に增加せしに輸出は僅かに十五萬七千八百噸となりて十三萬六千五百噸の輸入超過となつて戰爭前とは其の狀況を一變した。

工業原料の生産が平和條約の爲めに前述の如き大打擊を受け其の復活は中々容易ならざる狀態に在るが之が補助原料たる石炭の生産もシユレジア地方の割讓ザール地方の國際聯盟の管理及び賠償委員會に對する石炭の提供等の爲めに等しく困難なる境遇に陷り、其の産額を著しく減少した。即ち千九百十三年には一ヶ月平均千七百四十萬噸の石炭及び褐炭を採掘したが千九百二十二年の下半期では一ヶ月平均千二百八十萬噸となり四百六十萬噸を減じた。本年一月ルーア地方の占領以降石炭の生産が更に一層減少を來したるは申す迄もない。其の結果從前は一ヶ月平均二百五十萬噸位の輸出超過を示した獨逸も本年に入りてよりは一ヶ月二百萬噸位を主として英國よりして供給を受けねばならぬことゝなつた。

第八　海運業に及ぼした影響。元來獨逸の海運業は他の强國に比し後れて發達したものである。ウヰルヘルム二世が獨逸の將來は海上に在りと高唱し盛んに斯業を奬勵した結果短年月の間に顯著なる發展をなした。千八百九十六年には總噸數尙約百九十七萬噸に過ぎなかつたが十ヶ年後の千九百〇六年には三百七十三萬噸に增加し戰爭前には五百七十一萬噸を數へて英國に次ぎて世界第二の海運國となつた。然しながら平和條約の結果商船の大多數を聯合國に讓渡した。現今世界に於て最大商船と稱せらるゝ米のレヴアサン號や英のマゼスチツク號の如き或は又我が太洋丸の如き何れも皆元は獨逸の商船であつた。此外獨逸は戰爭中に失つたものも少なからず其の結果千九百十八年には獨逸の有する商船は僅かに六十萬噸即ち戰爭前の約十分の一

に過ぎなかつた。而かも何れも皆な速力の遲き小型のものである。其の後獨逸は舊船を買ひ戾し或は新船を建造して努めて海運業の復興を計り遂に昨年末には二百二十萬噸に增加した。然し尚戰爭前の商船の三分の一を有するに過ぎない。

第九　海外貿易に及ぼした影響。戰爭前は獨逸の國運の最も隆盛を極めた時代であつて海外貿易の如きも歲と共に發展し輸出入何れも其の額を增加した。即ち左表の通りである。

	千九百〇九年	千九百十年	千九百十一年	千九百十二年	千九百十三年 億麻克
輸入	八五	八九	九七	一〇七	一〇八
輸出	六六	七五	八一	九〇	一〇一
計	一五一	一六四	一七八	一九七	二〇九
輸入超過	一九	一四	一六	一七	七

前表の示す如く千九百〇九年より千九百十三年に至る戰爭前の五ヶ年間に輸入は八十五億麻克より百〇八億麻克に又輸出は六十六億麻克より百〇一億麻克に增加し貿易總額は百五十一億麻克より二百〇九億麻克となつた。而して斯國の海外貿易は輸入は常に輸出を超過して受働の狀態にあり其の額は年に依りて異なるも十九億乃至七億麻克の間に在つた。斯る現象は英國の海外貿易に於て等しく認むることが出來る。然し戰爭前に於ては獨逸に輸入超過の爲めに別に苦痛を感じなかつた。何故なれば獨逸は所謂見えざる輸出として獨逸人の外國に於ける企業或は外國に對する債權等より生ずる收入、海運業銀行業等の外國關係より生ずる收入若くは外國旅行者が獨逸に齎らす金等に依りて裕に貿易上輸入超過額を支拂つて尙餘りがあつたからである。例へば千九百十三年には輸入超過額は七億麻克なりしが之に對して當時獨逸人の外國に於ける企業及び彼等の有する外國公債等は約二百億乃至二百五十億麻克と稱せられ之より生ずる利子を年五分と見積るときは其の額約十億乃至十二億五千萬麻克あり。之に加ふるに外國關係の銀行業及び海運業よりの收入約十億麻克を以てするときは所謂見えざる收入は二十億乃至二十二億五千萬麻克に上り之よりして外國の期節勞働者が獨逸よりして自國に携へ歸へる賃銀約四億麻克を差引くも尙十六億乃至十八億五千萬麻克を餘し物資の輸入超過額を償ふて尙餘りありて當時は外國貿易上の不權衡も獨逸に取りては何等苦痛の種とならなかつたのである。

然るに戰後に於ては獨逸の生產力は非常に減退し外國貿易に必要なる諸機關例へば船舶銀行商店等の如きは平和條約の結果何れも皆な破壞せられ國民の購買力も亦衰へたる等種々なる原因よりして外國貿易は大に衰退を來し千九百二十二年を以て千九百十三年と相對照すれば半ば以上を減少し就中輸出は輸入より

りも更に一層甚しく減退し輸入超過は依然として繼續すると共に一層其の額を增加した。即ち左表の如し

	千九百十三年	千九百二十二年
輸入	一〇八、(五一、七%)	六二、(六〇、八%)
輸出	一〇一、(四八、三%)	四〇、(三九、二%)
計	二〇九、	一〇二、
輸入超過	七、	二二、

輸入超過に對する所謂見えざる輸出は戰後に於ては事實上其の姿を隱して見えざる輸出となりて之を償ふこと出來ず其の上戰爭中の輸入超過額は百五十億金麻克の多きに及びたれば戰爭前と異なり現時の輸入超過は獨逸の國民經濟に動搖を來し斯國の信用を毀損し貨幣價値の下落の一大原因となつた。

第十　財政上に及ぼした影響。平和條約は獨逸の財政上にも甚著なる影響を及ぼした。戰爭前には斯國政府の支出の主なるものは言ふまでもなく軍事費であつた。例へば千九百十四年の歲出總額二十五億二千六百萬麻克の內十八億七千九百萬麻克即ち七割四分四厘は軍事費であつた。其の內陸軍費は五割五分二厘で海軍費は一割九分二厘を占めて居る。獨逸帝國が軍國主義の最も盛んに唱道せられ且つ實行せられたる國であつたことを有力に證明して餘りがある。然るに戰爭後に於ては財政上の狀況が一變し昨年度の豫算總額は三千二百七十九億紙幣麻克なりしが其の內軍事費は僅かに六十四億麻克即ち一分九厘を占むるに過ぎない。是れ常備兵の如き平和條約に依りて十萬人と制限せられ獨逸が事實上軍國主義を放棄したが爲めである。

軍事費の縮少せるに反し現時政府歲出の主要部を占むるものは獨逸が平和條約に依れる責務を遂行するが爲めに要する經費である。其の額は昨年度に於ては二千二百六十四億麻克なる巨額に上り總歲出三千二百七十九億麻克の六割九分を占めて戰前の軍事費と其の割合殆んど相等しい。更に又昨年度の政府の總歲出額を同年四月の麻克相場たる七十紙幣麻克を一金麻克として改算するときは四十六億八千四百萬金麻克となる。其の內三十二億三千四百萬金麻克がヴエルサイユ平和條約の實行費であつて戰爭前の總歲出を超過すること實に七億八百萬金麻克の多きに及んで居る。政府は殘りの十四億五千萬金麻克を以て其の他の一般經費を支辨しなければならない。亦以て平和條約が獨逸の財政上極めて重き負擔であることを知るに足る。

獨逸の財政は尙ほ貨幣價値の變動及び物價の騰貴の爲めに極めて不安なる狀態に陷つて居る。極言すれば豫算は在つて無きが如き有樣である。假令議會の協贊を經て豫算を制定しても物價の變動が餘りに甚しきが爲めに既定額を以てしては到底豫定

の事業を遂行することが出來ず豫算を變更するの必要に迫られ昨年度の豫算の如きも兩回議會の協贊を經て更正した。而かも物價の變動は直ちに支出に影響を及ぼすも之に應じて歳入に關する規定を改正するには相當の時日を要するので歳入は常に歳出に伴ふことが出來ず政府は巳むを得ず一時借入金の方法を採つて居る。即ち政府は短期の證券を發行して帝國銀行に對して借款を申込み帝國銀行は此の要求に應ずる爲めに紙幣の增發を餘儀なくせらる。紙幣の增發は通貨の膨脹を來して物價の騰貴を促がす、物價騰貴すれば更に又政府の支出を增加せしむる等常に循環して其の停止する所を知らないのである。昨年度の政府豫算の如き最初は總歳出三千五百二十二億紙幣麻克であつたが第一回の修正に依つて一兆三千三百四十七億麻克となり第二回の修正にて八兆二千四百三十五億麻克となつた。而して此の歳出に對する歳入に於ては最初二千三百三十三億紙幣麻克の臨時借入をなす計畫なりしが第一回の修正にて此の借入金額は八千四百三十三億麻克に增加し第二回の修正にては更に增加して五兆八千〇九十二億麻克となり尙且つ一兆三千百三十五億麻克の歳入不足であつた。斯る不安なる財政狀態に陥れる歳出の六割九分は平和條約に基因するものであれば此の條約が獨逸の財政に及ぼす影響は甚大なるものであると言はさるを得ない。

第十一　通貨及び貨幣價値に及ぼした影響。此の問題は日常生活とも極めて密接なる關係を有するものである。二十年前余の歐洲に在りしときは伊太利を除くの外は何れの國に於ても硬貨幣が流通して居つたが今回再び歐洲を視察せしときは遂に一回も金貨幣を見ることを得ざりしには驚いた。英佛瑞士等にては銀貨の流通を見るも獨伊其の他バルカン諸國にては只紙幣の流通するのみである。是れ財界に於ける顯著なる變化であつた。戰爭前獨逸に於ては六十億麻克の通貨が流通して居つた。其の內金貨二十七億五千萬麻克、銀貨及び其の他の補助貨幣が七億五千萬麻克兌換券二十二億麻克であつたが戰時中よりして硬貨幣は全然其の影を隱くし只紙幣のみが流通した。而かも其の全部が皆な不兌換紙幣となつた。

通貨の流通高は驚くべき勢を以て增加し千九百二十二年末に於ては紙幣の流通額は一兆二千九百五十億麻克となり其の後は左の如く劇增した。

千九百二十三年三月	三六、三六〇
五月	六〇、〇〇〇
七月	三、〇八〇、〇〇〇
八月	六、二二〇、〇〇〇
九月	三一、八三六、八〇〇

即ち本年九月には戰前に比し五十萬倍となり最近二ケ月間に十倍となり一ケ月間に五倍に增加した。九月以降更に一層通貨は膨脹したのである。然らば通貨が斯くも著しく膨脹せし理由は何處にありやと云ふに其の理由は戰時中に於けるものと戰後に於けるものとに分けて考ふることが出來る。

戰時中に於ける理由としては（一）政府及び帝國銀行が貨幣制度の基礎を强固にするため出來得る丈け硬貨幣を回收して再び之を市場に出すことゝなり之を準備として兌換券の發行を繼續したが巨額なる軍事費の支辨の爲め遂に不兌換券紙幣の增發となりたること（二）商業界に於て信用行はれず主として現金取引となりたること（三）物價及び勞銀等が騰貴したること（四）戰爭は主として敵國内に於て行はれ獨逸の貨幣の流通する區域が擴大したること（五）政府は軍事費を支出するに租稅や公債のみに依ることが出來ず帝國銀行よりして多額の借入をなしたこと等を擧ぐることが出來る。而して戰後に於ける通貨膨脹の理由は（一）戰後に於ても政府の財政は常に膨脹し常に銀行よりの借入金を增加したること（二）平和克復後敵國が獨逸の封鎖を解くや獨逸は外國よりして一時盛んに食糧品や原料等の輸入を爲したるも之に對する輸出は增加せずして益輸入超過となり取引の決濟上爲替相場は獨逸側に不利益となりたること（三）平和條約に基く責任を履行するため多額の支出を必要とし之が爲めに財政上の基礎を危うし國家の信用を害したること（四）佛比兩國がルール地方を占領したること等である。殊に最後に述べたる原因は本年に入りてより麻克相場の激落を來さしめた主なるものである。ルール地方の占領は佛蘭西の軍國主義の發揮の結果であると言はざるを得ない。僅かに十萬の常備兵を有するに過ぎざる獨逸は大陸軍國たる佛蘭西に對しては今日到底兵力を以て抵抗することが出來ないが爲め遂に受働的防禦手段に出でたのである。玆に軍人と勞働者との戰爭が開かれたのである。ラインランド及びルール地方に於ける多數の勞働者鐵道從業員等は相携へて其の職を去つた。之が爲めに佛比兩國は豫期に反して充分に生産事業を擧ぐることが出來ないか獨逸政府も亦此等失業者に對して絶えず俸給や賃銀を支拂つて其の生活を維持せねばならぬ、其の支出は頗る多額に上り遂に益紙幣の濫發となり激甚なる通貨の膨脹を來して貨幣價値の大暴落をなすに至つた。

貨幣價値の變動甚だ激を以て現今伯林、ハンブルグ、ケルン等の取引所に於て每日二回宛麻克の取引が行はるゝに至つた、而して其の相場は主としてニューヨーク市の相場によつて左右せられて居る。麻克相場の變動が近時餘りに甚だしくなりたる

爲め倫敦の如きは最早麻克の公定相場を立てることを止め獨逸以外の國にては獨逸貨幣の兩替をなす銀行も極めて少なくなつた。麻克相場の變動は獨り財政家及び實業家許りでなく一般國民の日常生活にも甚大の影響を及ぼし國民は常に之が變動に惱まされて居ることは世人の熟知する所である。本年春余は瑞士の首都ベルン市に滯在中一夕或る寄席に行つた時の話に「戰爭前獨逸に於ては Guten Morgen, Wie Geht es Ihnen ? お早よう如何ですかと言つて朝の挨拶をなしたものであるが此頃は Guten Morgen Wie hoch steht der Doller お早う、弗の相場は幾許ですかと直ちに問ふ樣になつた」と言つて聽衆を笑はして居つたが能く實情を現はしたものである。

貨幣の用の一は價値の尺度たるにあるから假とひ其の價値は下落しても若し變動少なきときは割合其の弊害は少ない。本年一月頃までは英國に於て 若し獨逸の貨幣相場が下落して一ポンドに對し五萬麻克以上となれば獨逸は破産するであらうとの説が廣く行はれて居つたがルール地方の占領後麻克相場は急激に下落し二月頃は一時二十五萬麻克にまで下つた。其の後相場は稍恢復して三月及び四月頃には十萬麻克内外に留まりて餘り大なる變動が無かつた。爲めに物價も稍安定して取引も比較的穩當に行はれたが五月以降再び麻克相場が下落し始め遂には殆んど停止する所を知らざるが如き有樣となつた。

今麻克相場の下落及び變動が獨逸の財界に及ぼした影響の二三に就て考へて見ん、

（一） 貨幣價値の下落は物貨の騰貴を促し物貨の騰貴は生活費を上騰せしめた。昨年の十二月頃に於ける生活費を以て平和時代に比すると六百八十五倍となり本年の二月には二千六百四十三倍となつた。八月頃の新聞電報に依れば四千倍となつたと云ふ。現今は更に一層騰貴したることは何等疑を容るる餘地がない。

（二） 生活費の騰貴と反對に國民の消費は大に減退した。獨逸の經濟的實力は破壞せられ國民の購買力は減退したにも拘はらず物價が騰貴した自然の結果は消費の減退となつたのである。即ち人口一人當の消費量は左の如く減退し行つた。

	肉類	麵麭用穀類	馬鈴薯
千九百十三年	四九瓩	二四九瓩	七〇〇瓩
千九百二十一年	三三、一	一八一	三四〇
減少の割合	三二、五%	二七%	五一%

右は只二三の例を示したるに過ぎざるが其の他のものの消費の狀況も大同小異である。戰前に比し生活に最も必要なるものの消費量が三割乃至五割の減退となり國民は從前　不

良に陷るといふ狀態である。本年四月余の舊知なる某ボン大學教授を訪問せしとき教授の曰く「物價は今や戰前に比し三千倍に騰貴したるにも拘はらず大學教授の俸給は僅かに三百倍の增俸であるから結局俸給は十分の一に減額せられたると同樣になり獸肉を多く食膳に上すことが出來ず漁肉を以て滿足せざる可らざるは非常に苦痛である」とは同情に値する。斯かる事情よりして戰後の獨逸にては所謂中產階級が非常に困難なる境遇に陷つた。例へば戰前に於ては一百萬麻克の貯金があれば年五萬麻克の收入ありて裕に中產階級の生活をなし得たる者も今日では此の收入を以ては最早一月も支ふる事が出來ない。所謂 Reutier 階級はプロ階級に陷り只彼等の所持品を一つづつ賣拂つて辛うじて日日の生活をなしつゝあるのである。今春伯林滯在中陸軍省內に開會せる內國植民展覽會を縱覽せしに展覽會の出品と相駢んで多數の小 Reutier が之を機會に集りて所持品を陳列して販賣せるを見ては眞に氣の毒の感に打たれたのである。

（三） 資本造成の減退。資本は貯蓄より生ずとは一般經濟學者の論ずる所であるが獨逸の現狀にては貨幣價値の下落が餘りに甚だしく例とひ貯蓄をなすも殆んど其の效果なき有樣である。されば收入あれば之を以て直に品物を買ひ入るるか或は目前の消費に供するのである、今日獨逸の財界が疲弊して居るにも拘はらず尙且つ商品の取引が盛んに行はれ劇場料理店杯が常に顧客を以て滿さるる原因の一は茲に在るのである。獨逸民族の特質である勤儉貯蓄の精神が動搖しつゝあるは斯因の爲めに實に悲しむべき現象である。戰爭の起りし前年末には貯蓄金庫には百九十七億麻克の貯金ありしが千九百二十二年即ち昨年末には五百二十九億麻克となつた、一見するときは貯蓄額が大に增加したるが如き觀あるも若し之を金麻克に改算するときは僅かに七億五千萬麻克となり戰前の貯金額の十六分の一に過ぎない。以て如何に獨逸人の貯蓄心が減退したかを知るに足る。

（四） 資本の國外流出。貨幣の價値が甚だしく不安定で少しも之を信賴することが出來ない爲め資本家特に大資本家は彼等の有する資金を國內の事業に投入することを好まない。又既に投入しあるものも成る可く速に之を回收して財界の安定なる國の事業に投入したり或は貯金するものが增加した。英米瑞士杯に多額の獨逸資本が流出したるのは之が爲めである。獨逸政府は百方力を盡して之を防止せんとするも其の效果は充分に現はれて居ない。

（五） 商業經營の困難。戰前麻克相場の變動極めて微々であつた時代には商業者が損得は主として商取引の掛引に依つて決つたものであるが現今では商品の取引の外に常に貨幣價値の高

低に對しても注意を拂はねばならない。彼等は二重の苦心をなさねばならぬのである。假とひ商取引に於て利益を得ても貨幣相場の變動に依つて却つて損失を被むることがある。眞面目に商取引を行ふことが困難となり遂には之を止めて廊兒の相場のみを行ふ所謂相場師が跋扈する様になつた。又外國との取引は勿論遂には自國内の取引も自から外國貨幣に依らざる可からざるに至つた。

上來吾人は主としてヴェルサイユ平和條約が獨逸の經濟界に及ぼしたる影響を幾多の項目に分つて陳述した。吾人は之に依りて其の影響の全部を述べ盡したにはあらず記述せしものの外尚種々なる方面に之が影響のありたることは勿論である。今吾人が陳述したる點のみより考察しても平和條約の爲め如何に獨逸の經濟界が現時危機に瀕しつゝあるかを充分に了解することが出來た。獨逸が此の苦境を脱却して再び其の國運を恢復するには獨逸國民の覺悟と努力如何に依るは論なしとは言へ之を以て獨り獨逸國民のみの負擔となすは疲弊の極度に達せる現今の獨逸に對しては餘りに其の荷物が重過ぎるの感がある。列國の共同的援助に俟つにあらざれば如何なる運命に到達するや計り知り難い。

翻て惟ふに貨幣價値の下落の爲めに物價が昂騰し一般財界が攪亂せられたるが如き事實は歴史上決して稀有でない。幾多の實例を認めることが出來る。佛蘭西革命前に佛國は巨額の Assignat を發行したるが爲め遂に恰も今日の獨逸の如く經濟界の基礎が動搖して一大恐慌を來たしたことがある。米國に於ても亦之と類似の前例がある、即ち南北戰爭の際の Greenback の濫發は夫れである。而かも佛國と云ひ米國と謂ひ共に〱施設其の宜を得て能く其の困難に打勝ち國勢を復興し遂に今日の隆盛を來すに至つた。貨幣價値の墜落は財界に於ける重大なる一の病氣である。而かも治療法其の宜しきを得るときは之を全治し得る望あるとは前述せし如き先例が證明して居る。現在獨逸は四ヶ年有半の長きに亘れる大戰爭と其の結末たるヴェルサイユ平和條約の爲めに瀕死の重病に犯されて居るのである。之が治療方法は極めて細心の注意を要する。今後獨逸を復興せしむるには此際斷乎たる外科的手術を施さなければならない。然しながら獨逸の復興如何んに最も利害關係の深き英佛兩國が兎角對獨方針に就き互に意見を異にして居るのは眞に遺憾の次第である。佛蘭西は他日若し獨逸が復興するの曉に於ては必ずや今日の復讐をなす可しとの杞憂を抱き自衛上よりして此の際獨逸を出來る丈け困窮の域に陷れ能ふ可くんば再び立つこと能はさらしめんとし其の結果遂にルール地方占領の擧にも出でた如

く考へらるる。ルール地方の占領に關しては表面上幾多の理由が陳述せらるゝも畢竟是れ佛國自衛の策である。之に反して英國の立場より見れば獨逸は英國に取つて最も大切なる市場であつて其の恢復如何は英國貿易に對し直接重大なる關係を有するし又英國に於ける百有餘萬の失業者の救濟如何にも此の問題の解決と相關聯するのである。佛蘭西が本年一月ルール地方を占領したるが爲め石炭の採掘に不足を告ぐるや英國は新たに毎月二百萬噸内外の石炭を獨逸に輸出し且つ外國市場に於ても強敵なる獨逸品の競爭が減退したるが爲め英國品の輸出增加したるが如き幾多の利益を得たるも是れ畢竟一時的の利益であつて英國百年の利益でないことを認め獨逸に對する英國の方策は佛蘭西の夫れと異なる所あるは海外電報を見ても能く之を知ることが出來る。若し佛蘭西にして飽くまでも頑冥にして軍國主義を貫徹せんとして一歩を讓ることなく英米其の他の强國も斷乎として之に反對の行動を取らず依然として傍觀的の態度を持續するならば獨逸の前途は眞に暗澹たるものである。若し獨逸にして復興すること能はずとせば是れ世界的の一大問題である。世界列國は獨逸の政治的の滅亡若くは經濟的の破綻よりして生じ來る苦痛を永久に嘗めねばならないこととなる。試みに大戰爭八年前に於ける世界の貿易狀況を見るに輸入貿易の總額中各國が外國より輸入せし割合は左の通りである。

英國	二三、三%	獨國	一六、四%
佛國	一一、一%	米國	一〇、〇%
蘭國	八、二%	比國	七、八%
露國	三、三%		

即ち獨逸は全世界の輸入貿易總額の一割六分四厘を輸入し英國に次ぎて第二位を占めて居つた。世界列國に對する第二の得意先であつた。若し斯國の經濟が破綻したとしたなれば獨逸に對して輸出をなす此等の國々は直接悪影響を受くるは當然の歸結である。現に獨逸の貨幣價値が下落し購買力が減退したるが爲のみにして從來斯國を得意とせる國々が非常なる困難に陷つて居るは吾人の親しく目擊した所である。實際獨逸の復興如何は一般世界經濟の盛衰に大なる影響を及ぼす殊に英國の經濟界の復興如何と密接なる關係がある。英國の財界の復興如何は直ちに米國の經濟的實力の發展と相關聯し、米國の經濟的實力の發展は延て我が帝國の經濟力の增進と離る可からざる關係に立つて居るのであるから獨逸の復興問題は又我が帝國に取りても極めて重大なる問題であつて決して之を輕々に看過することは出來ない。

獨逸は果して復興するや否なやは今日は最早問題ではない。

問題とする所は如何にして獨逸を復興せしむべきやにあるのである。獨逸の破滅が世界の政治上及び經濟上に及ぼす由々敷影響を考ふるときは假とひ利害關係の相反する諸國と雖も遂き將來を慮つて互に一致共力の途に出づべきである。即ち佛國は獨逸に對する積年の恨を棄て其の軍國主義を放擲して隣邦の友情を以て獨逸の復興を援助し列國又相共同して獨逸財界の恢復を促進せしめ得べき策を講ずるのである。蓋し獨逸の復興にして一月遲くれんか世界の平和も亦一月遲くれん。古來獨逸民族は非常に困難なる運命に際會し屢々試金石の下に置かれた。三十年戰爭と云ひ七年戰爭と云ひ奈翁戰爭と云ひ何れも皆な然らさるはなし。而かも堅忍不拔なる獨逸魂は能く此等の困難に耐へ來り一難を經る毎に國民の元氣は更に一倍し國運は却つて益發展したのである。吾人は斯る歷史を有する獨逸が成る可く速に今回の困難より復興して光榮ある獨逸の文化が新裝の下に益發展し世界の經濟界は安定に復し地上に人類の平和が一日も早く確立せんことを希望する次第である。(大正一二、一一、三〇)

現代民衆の宗教的信條としての社會主義

井上忻治

一

世界に於ける凡ての出來事の進行を司る全能の神が、人間の生活過程の凡てを指導し、戰爭の結末や、帝國の運命をまで豫言してくれた時代は、まだあまり遠くはない。人間は、どうしてその命令を豫見し得るか?、それは不可思惟的であつた。どうしてその規定を爭ひ得るか?、それは全能であつた。この時代の人々は、自己の運命を開拓するためには、たゞ神の前に摺伏するのほかはなかつた。そして、彼の怒りを和らげ、彼の氣まぐれを宥めるためには、たゞ彼に向つて、謙讓なる祈りを捧げるよりほかに、彼等は何事をも知らなかつた。

しかるに、科學の進歩が、宇宙の秩序と、現象の正則なる因

果性とを明らかにして以來、人間が事物に對して與へる一般觀念は變革された。科學の發見によりて招來された世界の新觀念は、嘗て人間の夢によりて創り出された神の力から、人間を解放してくれた。固より、それは人間をより自由にしたのではない。しかし、それは、宇宙を支配する必然性の儼嚴な、無頓着な商事仕掛の進展を、たゞ祈りによりて影響せしめようとする人間の努力の無益であることを、尠くとも人間に敎へてくれた。そして、必然性の階級組織（ランダオルドヌング）を豫見した後に、科學は、世界をトランスフオームする一般的過程と、地學的原始時代から現在の狀態に至るまでの長い時を通じて、人間を導いて來た進化の機制とを、わたし共に理解せしめたのである。

社會學が科學として、若しくば科學の一分科として、果して成立ち得るか否かの問題は別として、兎も角も、個々の人間のために明らかにされたこの進化の法則を、人間の共同生活に適用することによりて、近代の社會學は生れたのである。そして社會學は、道德的世界もまた、物理的世界と等しく、若干の不變的法則に支配されるものであることを、わたし共に敎へる。

しかし、進化の機制中に發展する諸現象に於て、これを制約する原因の無限なる錯綜は、固より、凡ての正確なる豫見を不能ならしめる。相互に働き合ふ諸要素があまりに多數なる場合には、その確實的結果を發見することに於て、現代の科學は、全く無力である。科學的豫見の限界は極めて狹い。最も精密なる科學に於てゞすら、わたし共の貧弱なる認識の達し得る唯一の結果は、單に事實のアツプロキシメーションでしかない。若しも一度、運命の秘め文がわたし共の眼前に展げられたとしたならば、人間は深い恐怖のおのゝきと共に、忽ちにその活動の彈力を失つてましつたでもあらう。表見の後ろに匿された實在を索さうとする瞬間に、倏ち踰ゆべからざる障壁に遭遇せざるを得ない人間の精神が、將來に向て、果して何事を言ひ得よう？　わたし共が事物の本體を摑まうとあせればあせるほど、わたし共は益々神秘の境に彷徨するばかりである。人間は知られざる事物の大海の中を、たゞ盲目的に泳いで居るものにすぎない。人間は一體どこから來たものであるか、どこに行くものであるか？。これに對して、わたし共は何事を答へ得るか。從つて、幸福や、正義や、眞理に就て、わたし共の與へる觀念は、單にわたし共の腦の充血狀態の產み出したたわ言にすぎないものかも知れない。そして生存競爭の役人的法則と明らかに矛盾した無意味なイリユージョンにすぎないものかも知れない。しかし、これ等の問題に答へるべく、科學は、わたし共に、一つとして有効なる手段を提供してくれるものではない。これ等の

問題に對しては、わたし共は、たゞ叻くも懷疑の中に止まるのほかはなかつた。何故なれば、懷疑——それは即ち希望の半面だからである。何時まで經つても、人間の生活を指導するものは、矢張り望のほかに、何物もないであらう。それ故にこそ、人間性を暖めるためには、常に空想を必要としたのである。そして、これを導くがために、人間の生活には、常に錯覺を必要としたのである。政治的錯覺、宗教的錯覺、社會的錯覺が、何時の時代に於ても、常に人間の上に最高の支配を行つたのは、即ちこの故である。それは、正しく人間に運命づけられた生活の軌道であつた。科學は、固よりこの人間の運命を本質的に變改すべき力を有つて居るものではない。從つて現代人と雖、また等しくこの生活の軌道から脱し得ようはずがない。空想の欺瞞的妖精が人間の生活から、その指導の特權を拋棄する日は、恐らく永遠に期待されぬであらう。

しかし、それにも拘らず、必然性の齒車は、假令人間の要請や願望かどうあらうとも、それに頓着なく回轉する。そして、悠久なる時を通じて、暗冥から暗冥へと、たゞ同一の軌道の上を、一刻の休みもなく進展する。どんな幽玄なる哲學的論策も、どんな崇高なる感情的要請も、それの嚴正なる法則に反して、何物をも期待することは出來ない。人間には手段の選擇が許されて居ない。たゞそれの法則に服從するのほかはない。そして、それのからくり仕掛から、一歩たりとも脱出することの出來るものでもない。一體に、必然性の法則に反動するといふことは、元來、人間には及びもつかないことなのである。若しも、人間が、無知またはその他の理由から、この法則を無視するような場合には、彼の努力は必ず無效に歸する、そして、結局、彼が贏ち得るものは、屡彼自身の損害のみである。それ故に、人間に許された仕事としては、たゞこれ等の法則の原理を探求して、克くこれに順應して行くことに努めるのほかはないのである。

宇宙が、假令生命なき機械體の發現であらうと、若しくば叡智的な目的體の發現であらうと、兎も角も、形態や、機制や、力や、運動やを殊別化し、差別化しながら、絶えず發展しつゝある世界の秩序には、その交錯する無限の律動の間に、自づから全體の階調が支配して居る。そして、人類社會をも含めての階調を支持する必然性の法則は、それぞれ一定の志向の下に働いて居るのである。たゞ、この志向が餘りに悠遠なる反射であるがために、これ等の法則の存在理由は、しばしば人間の認識から逸脫する。單なるこの理由のために、人間はまた、しばしば、無意識的に、これ等の法則に反動して、自づから自然の調和を破らうと企てる。そして、あらゆる人生の諧調と、社會

の葛藤とは、主として、この暗愚な、しかし避けがたき人間の過失に原因するものである。

科學の保障する社會的豫見の限界が、假令極めて限られたものであらうとも、また、科學の與へ得る判斷が、假令一つのアツプロキシメーションにすぎないものであらうとも、しかし、近代科學の凡ての發見が益々確立しようとする必然性の概念はわたし共に取つて、決して實證のない空虚な學說ではない。それは、尠くも、わたし共に寛容の精神を敎へる。そして、それは、社會現象の研究にも、また等しく、試驗管の前に立つ化學者の冷靜を、常に必要とするものであることを、わたし共に理解せしめる。學者は、一つの經驗の豫見されざる結果に當面して、決して狼狽するものではない。わたし共の思想にショックを與へる出來事の前に、わたし共はまた、徒らに狼狽してはならない。哲學者に取つては、不可避的法則の下に服する現象に對して、憤怒といふものはあり得ない。必然的現象の發生は、何物もこれを妨げ能はなかつたであらうとの確信に於て、たゞわたし共は現象を確認することに止めねばならぬ。

これだけの思想的前提の下に、わたしは、現代の最も大きな感情的要請としての社會主義の敎理と、その將來とに就いて、一つの考察を試みて見たいと考へる。

二

宗敎、道德、政治、その他どんな社會現象に於ても、理論の研究は、通常人々が信ずるほど、さまで大きな重要さを有つて居るものではない。わたし共が若しこれ等の現象の意義を正しく理解して、その歸趨を洞察しようとするならば、何よりも先づそれが發展する環境、それが支持される感情、それが受け入れられる人々の性質、そして更らに一般的には、それを反射する文明の時代的特性を明確に認識することが、特に重要とされねばならぬ。例へば、人類の文明に根本的轉機を作つた基督敎なり佛敎なりが、世界の人心に勝利の刻印を附した時代に於て、その敎理に對する哲學的論策が、時勢の轉化に果してどれだけの影響を與へたか。それよりも寧ろ、かのユダヤ人が最大の理想としたイスラエル民族の世界的榮光を以て自己の榮光とするエホヴア神の利己的な民族的精神に反して、弘誓の大願を人心の解脫救濟に置き、慈悲又は博愛を以て最大の理想とするかの一視同仁の敎理が、何故に、印度人やヨーロッパ人の間に發達することを許されたかの原由を識ることが、何よりも肝要でもあれば、また意義あることでもあつたのである。蓋し理智の眼には、假令それが如何程不合理に見えようとも、或る一

一つの教理が時代の人心に反響して、或る心的變革を誘導することに成功したならば、その教理は常に實現されるからである。その心的變革に對しても、教理そのものは、しばしば二次的役割をしか演じて居ない。その教理に人心征服の榮冠が與へられるとすれば、それは、それが現はれた時代の氣運、若しくばミリユーの働きによつてゞある。それを生れしめた時代の情調によつてゞある。そして、就中、民衆にそれを宣傳して、信仰を鼓吹するに堪能な說教者その人の人格的勢力によつてゞある。これ等の說教者が大民衆運動を初めれば、新しい神性は、倏ちにして、その雰圍氣の中から夢のように出現して來る。しかし、わたし共は、この民衆運動の促進が理智の力に依るものだと思つてはならない。それは、常に民衆の感情に愬へることによりてのみ、成功し得るものなのである。

社會主義は世界の人心に大きな反響を見出した。そして、民衆運動として、實際、社會主義は、現代各國民を通じて、最も普遍化された世界的傾向の一つである。しかるに、マルクス以來、社會主義は、往時の所謂空想的のそれから、科學的のそれに化成されたと言はれて居る今日ですら、まだ一個の科學的體系を構成するまでに至らないばかりではなく、その個々の理論ですらも、まだ一向に科學として必要なスタビリテイーを有つて居るとは思はれない、寧ろ、それ等の理論は殆ど總ての討論を無用ならしめるほどの動性を帶び、異相を有つて居るといつても可い位である。それにも拘らず、社會主義運動が、世界何れの國に於ても、殆ど燎原の火の勢をもつて益々進展しつゝあるのは、何故であるか？　蓋し、社會主義は、それが一つの哲學であるよりも、寧ろより多く一つの宗教なのである。それ故に社會主義の現實的勢力を理解せむがためには、就中、一つの宗教的信仰として、その教理を檢討せねばならぬ。その時に、わたし共は、社會主義が極めて根强い心理的基礎の上に立つて居るものであることを容易に理解することが出來るであらう。その教理が、假令何程理性に背反するものであらうとも、それは決して、社會主義の直接の成功を妨げるのではない。凡ての信仰、就中、宗教的信仰の成功不成功は、それが含み得る眞僞の部分とは、極めて無關係であつたことは、明かに歷史の證明する通りだからである。

三

社會主義の理論は可かり煩瑣なものである。しかし、その各種の觀念に獨特なニユアンスを離れて、單にその根本原理に從つてこれを要約するならば、社會主義の哲學的見地は、極めて簡

單なるものになるであらう。即ちそれは個體性に對する集團性の反動なのである。從つてそれは過去への復歸なのである。社會組織に關する近代的理論は、結局、インディヴィヂュアリズムとコレクティヴィズムとの二大原理の對立に歸する。個體主義にありては、人間は常に彼自身を主人とする。彼の意思及び行動が最大限度に、國家若しくは集團のそれは最小限度に制限される。これに反して、集團主義にありては、彼の最小行爲と雖、尙ほ國家若しくは、集團によりて指導される。個人は如何なるイニシアティブをも有たない。彼れの生活行動の凡ての樣式は規定されて居る。この二原理は常に多少とも爭つて居た。各時代の思想史は寧ろこの二原理の葛藤及び消長の歷史にほかならないのであるが、しかし、近代文明の發展は、この鬪爭を嘗てあつたよりも、より烈しくしたのである。固よりこの二原理は、何れもそれ自體に於て絕對的價値を有つものではない、時代に從つて、そして就中、それが關係する民族若しくば種族に從つて判斷されねばならないものである。

しかのみならず、個人主義と集團主義とは、その一般的精神に於ては、互に排擠し破壞することなく、むしろ互に併行することに嚮ふべき二勢力の對立であると私は考へる。そして社會主義の眞の哲學問題は、個人の利害と集團の利害との間に於けることの鬪爭の中に宿つて居るのである。個人の價値と强みとは、社會の進步に貢獻すべきそのイニシアティブと、そのインテリゼンスとに存する。これに反して、イニシアティブとインテリゼンスとに於て薄弱な集團は、その數に於て、權利の唯一の支持と、その力とを見出すのである。從つて、對立せる二つの原理の利害は常に矛盾的であるかに見える。問題は相互的讓步若しくば階調によりて、互に破壞されることなく、この二原理が同時に支持され得るか否かを知ることである。そして心理的及び經濟的必然性が、如何なる制限內に於て、この矛盾せる二原理の間に可能なる調和を與へるかは、社會連帶の進化に關する最も重要なる研究に屬するのであるが、それは別論として、今日までのところ、個人的利益を同胞の利益のために犧牲にすべく、集團的功利主義を以て個人的功利主義に代らしめることによりて、有効に個人を說服することに成功したものは宗教のみであつた。しかるに、古い宗教は旣に滅亡せむとして居る。舊信仰は正に崩壞した。そして、他の機會に於て論じたがように（本誌十二年九月號所載拙論第五節六節）現代は明かに信仰喪失の時代であつて、現今のわたし共は、正しくこの無信仰の末期に生活しつゝあるのである。集團生活に於ける宗教の指導的機能は、現代に於てこれを覓めることは出來ない。

しかし、人間は固より過去の勢力、殊に傳統の遺傳的繫縛から、全然解放され得るものではない。それにも拘らず、幸福な上にも更に幸福なる生活に活きようとする本能を有つて居る人間は、新しい要求と價値とを限りなく生活過程の中に織り込んで行くが爲に、絶えず過去の勢力と鬪つて行かねばならない。こゝに進化の惱みがあると共に、また文化人の惱みがあるのである。

一度啓蒙の洗禮を受けて復活された現代人の明哲なる理智は、絶えず痛ましき現實の解きがたき矛盾と、生活の永遠なる不調和とを直視して居る。わたし共の精神の奥ふかく潜んで居る過去の無意識的意思の壓力によりて縛られて居ながらも、現代人の小さかしき理智は、絶えずこの繫縛から遁れようとあせつて居る。現代人の意識に共通な陰鬱と、焦燥と、興奮との時代情調は、悉くこゝにその原因を有つて居るのである。社會的不安も、生存の惱みも、皆そこから生れて來る。この重い不安と、深い惱みと、限りなき哀愁とに絶へず脅かされつゝ、絶へず呵まれつゝ、その胸ふかく巣喰ふたこの魑魅の跳梁を、わたし共はどうすることも出來ずに居る。かようにして、自から萬能な理智によりて、あらゆる奇蹟を克服し得ると考へて來た現代人の信仰破壞の生活に於ても、尙ほ理智の獨裁によりて投げつけられる幻滅の悲哀を味はされずには濟まなかつた。かうした關係から、矢張り神の神秘に救ひを求めようとする隱れたる要求が現代人の心の中のどこかに、力強く無意識的に動いて居ることは否定しがたい。現在に於ける思想の無政府は、即ちそれを立證するものであつて、その根本の原因は過去の無意識的精神と、現在の意識的理性との間に於ける葛藤に存するのである。そして、それは少しの不思議もない避けがたい心理過程なのである。近代人は無雜作に神を葬り去つた。神性の奇蹟を次ぎから次ぎへと克服して來た。かくて神は屢その王座から滅落したが、しかし、この王座は決して長なへに空位のまゝに殘され得るものではなかつた。新しい妖精は、直きにその死んだ神の灰の中から現はれて來たのである。

併しながら、近代的特性をなせる理智の獨裁から、どうしても遁れることの出來ない現代人が、新たな固定的な基本的信仰を待ちつゝも、その求むるところのものは、單に經過的、暫有的の信仰にほかならない。しかるに、社會主義は舊い神ですらも人間に與へることの出來なかつた現世安樂の最大幸福を何人にも一樣に、平等に投げようと約束する。舊い神性の力が著しく衰へて、人々が新しい神を求めつゝあるこの歷史の稀有なる時期に際會して、社會主義の教理が、どうして現代人の信仰の對象となり得ないはずがあらう？人間再生の約束の下に、その

空しき生の前に點火された夢のような希望の魅力によりて、社會主義は理論としてゞはなく、立派な宗教的信仰として確立されるに至つたのである。

四

社會主義が其の勢力の秘密を構成するこの宗教的形態を、かくも速かに獲得するに至つたことのためには、更に、その環境に、完全なる心理的沃土が準備されて居た。

文化の進歩は人間の感受性を益々敏活ならしめた。現代人は害惡に對して、殊に敏感である。しかし、わたし共が、往時に比して、より鋭くわたし共の害惡を感ずるとしても、それはこれ等の害惡が、何時の代に於ても、必ずしもより輕微であつたといふ譯ではない。蓋し、人間が洞窟の奥ふかく隠れて、野獸とその生活資料を營々として爭つて居た時代に遡るまでもなくわたし共の父祖達は、また、饑饉、流行病、虐殺、異端糺問、奴隷制度、恐怖政治、侵略、凡ての戰爭を初めとして、尚ほ多くの惨事を經驗して來たのである。しかのみならず、現代人の生活條件は往時に比して著しく改善されて居る。あらゆる種類の近代的發明の恩惠によりて、今日では、最も卑賤な水呑百姓でさへも、甞て豪奢と歡樂との限りを盡したといはれるルイ十四世や秦の始皇ですらも、尚ほ知らなかつたような多くの便益や安樂に實際浴して居るのである。それにも拘らず、わたし共は益々現狀に不滿を感ずる。蓋し舊時代の信仰は最早わたし共に少しの慰藉をも與へない。わたし共の父祖達を陶醉せしめた美しいイリユージョンは何時の間にか消え去つて居る。順々に崩壊の運命を辿りつゝある家族制度、財産制度、その他の社會制度の不安に脅やかされつゝ、現代人の摑んで居る唯一の實在は「現在」なのである。そして、厳しい義務と鈍い連帶とよりほかに如何なるパースペクテイブをも有たない現代人は、最早彼自身を措いて何物にも興味を有ち得ない。「現在」は彼に取つての總てゞある。彼は何物を賭しても、彼が左様に短かく感ずるこの「現在」を樂まふとする。それ故に、現代人は失はれたるイリユージョンの代りに、安易を、從つて富を必要とする。こゝに所謂文化生活の要求が現はれる。この要求の普遍化に伴つて、現代人の需要は、從つて富の必要は益々增大する。文化生活の名に於て、生活の安易が、未だ甞て今日より以上に發達したことがないと等しく、また各種の需要が未だ甞て今日ほど命令的であつたこともない。需要はこれを充足せしむる手段よりも遥かに進歩して居るのである。

しかるに、需要とこれを充足せしむる手段との間の關係は常

福の方程式を構成する。二つの項が等しい時には、假令それが小さなものであらうとも、人間は滿足して居る。充足の手段が不充分なるがために、二つの項が不等であつても、需要を低減することによつて、その等しさが回復されゝば、人間は尙ほ滿足される。かような解決は、久しき以來我々東洋人の間に廣く採用されて居た。知足安分の思想が即ちそれである。佛教の敎ゆる處世法もまたそれであつた。しかし、近代文明の進步は西洋思想の影響と相待つて、この解決を益々困難ならしめる。充足の手段が等しき加速度を以て增加することとなしに、近代生活に於ける需要は、獨り無限に擴大された。方程式の二つの項は著しく不等になつた。今日文化人の大多數がその運命を呪つて居るのは、即ちこの結果にほかならない。不滿は凡ての階級に漲つて居る。何故なれば上下の別なく需要は比例的に過度になつて居るからである。各人はたゞ驀地に幸運の影を追ひ廻はして居る。そして幸運から彼を疎隔する凡ゆる障碍を破らうと努める。かくて、一般利益に無頓着な個人的利己主義は際限なく增長した。固よりかような傾向は歷史に於て決して新しいものではないが、しかし、如何なる時代に於ても、それが今日ほど一般的であり、絕對的であつたことはない。トックヴィルは言ふ――「十八世紀の人々は、恰かもサービチュードの母のようなものである。この安樂―bien-être―の欲情を決して有つては居なかつた。上流社會の人々は、生活を便利にするよりも、寧ろそれを飾ることに、生活を豐富にするよりも、寧ろそれを華やかにすることに專念して居たのである」と。

現代生活に於けるこの富の普遍的欲求は、その避くべからざる必然的歸結として、道德の一般的低下を招來した。ブールジョワ階級の威信の著しき低減は、劣等なる社會層の眼には最も顯著な事實であつた。ブールジョワ社會は僅か一世紀間にして既にアリストクラシーの十世紀間に比すべき老境に達して居る。彼等の蓄積する富は、その精神的向上若しくは階級的品位を助成するためにではなく、却てそれ自身を墮落せしめ、社會を蠹毒するためにのみ役立つて居るのである。しかのみならず、彼等の子弟も亦、民衆階級に對して、如何なる建設的將來を期待せしむるものではない。彼等青年は社會に安定性を與ふる唯一の保障としての凡ての道德的傳統を、何等の反省もなく、段々に振り捨てゝ行く。義務、連帶、愛國心のごとき思想は、彼等には、餘りに滑稽な偏見と見え、無益な桎梏とさへ感ぜられる。成功の極端なる崇拜の下に育成された彼等は、常に最も猛烈なる慾望の奴隸となる。そして、投機や、奸智や、黃金結婚や、乃至は相續によりて、豐かなる財產が一度彼等の手に置か

れた場合には、彼等は最も野卑なる享樂のために、これを濫費する以外には何事をも知らない。

大學の青年達にしても、また社會の將來に向て、より慰安的のスペクタクルを與へるものではない。彼等は早く典型的概念教育の悲しむべき産物にすぎない。傳統的主知主義の犠牲となつて、單に理論的な詰め込み主義な教育をしか受けない彼等は、生活の實在乃至は社會の存立を維持すべき必然性を理解する能力を有たない。如何なる國民もこれなしには決して存續し能はぬであらう祖國の觀念ですら、或る思想家の云つたがように「全く哲學を缺いだ馬鹿氣た盲目的愛國者の觀念」のようにしか、彼等の多數には見えないかも知れない。

これ等の事柄は、生活の現實の脅威に惱みつゝある無産階級の眼に、一つとして絶望的光景として映ぜないものはない。殊に現在の資本階級によりて濫用されつゝある巨大なる富が、貧窮なる幾千萬人の資源に對して企てられた大仕掛な、組織的な掠奪を基礎とするものであることを證明するのは、社會主義者に取つては、餘りに容易な論理であらう。極めて少數者の不當なる欲望を充さしめむがために、社會に於ける大多數の生活に破滅の運命を命令し得るがごとき制度は、固より叛逆なしに久しく忍從されようはずがない。「人間は實際他人の幸福を見て惱むものである。貧乏人の不幸はこゝにある」とファゲーが言つたのは正しい。社會主義者は富に於ける平等が恐らく實現されるものでないことを知つて居るであらう。しかし、彼等は尠くも貧乏に於ける平等が實現されることを望むで居るものであらう。

最も教養ある人達も、固より性質は違ふが、しかしこれに劣らない一つの不安に惱むで居る。この不安は、必ずしも彼等をして直ちに新理論の味方に改宗せしめるものではないが、しかし、それは社會の現狀を辯護するために多くの興味を有つことから、彼等を妨げるものである。凡ての傳統的信仰と、これに基いた制度の逐次的分解、わたし共を取まいて居る幾多の奇蹟、そしてその正體を詮索しようとすればするほど、益々その色彩を濃くするに過ぎない奇蹟に對して、これを照破する一道の光を投ずべく、現在の科學が一體に無力であること、現在の凡ての哲學體系が、生活の現實に對して、單に空虚なるガリマーシヤスを表現するものに過ぎないことの餘りに明瞭なる心證、殘忍なる力の一般的勝利、そしてこれによりて惹き起される失望——これ等の凡ては、インテリゼンスに於て選ばれたる人達の上に、恐らくは一脈の暗い悲觀主義の陰影を投ぜずには濟まないであらう。現代の一大哲人であるルヌビエが人間苦惱の表の中に舉げて居る民族戰、階級戰、軍國主義の一般的普

及、極端なる貧困の展開、大なる富と享樂生活との發達の平行、悪性的犯罪と自殺との遞增、家庭道德の弛緩、超世的信仰の拋棄——これ等野蠻時代への文明の著しき逆轉を特質づける凡ての現代的傾向は、世界の功績に對する悲觀的判斷の前に人心を呼び醒ますべく、かのショーペンハウエルによりて、時ならぬ警鐘が打ち鳴らされた時代に於ては、まだ現はれては居なかつた。これ等の事相は現代の人心を衝擊するに充分である。彼の警鐘は、恐らく今日人心の隅々にまで、その反響を見出しつゝあるであらう。

上記の現代的諸傾向は、一つとして社會の解體を準備する原因でないものはない。一つの社會は何時までもかゝる解體原因に抵抗し得るものではないであらう。局面の展開は、萬人の希求するところである。花のごとき再生社會の實現を約束する社會主義が、こゝに根强い信仰の沃土を見出したことに、何の不思議もないであらう。

五

社會主義理論はまだ少しも確定的ではない。從つて宗教的信仰としての社會主義にも、また固よりその教理の不定性は免かれない。社會主義理論は漸時變革される。常に動搖的である。それの建設者によりて典型化された原理を、若しもわたし共が、今日これと全然矛盾する新らしい事實と一致せしめようと企てるならば、それは恰も、聖書と理性とを一致せしめようと試みる神學者等の事業にも比すべき徒勞事であるかも知れない。長い間この新宗教の最大傳道師であつたマルクスが、社會主義を基礎づけた原理の中には、その後、彼の最も忠實なる信徒によりて、拋棄さるゝの止むなきに至つたものがある位、その理論は事實によりて裏切られて來たのである。例へば、資本及び土地は常に少數者の手に集中されるとなす數十年來の社會主義の根本的學說は、今日各國の統計によりて立派に覆されて居る。統計は寧ろ、資本及び土地が集中されると反對に、非常なる速度をもつて、それが無數の個人の間に分散されて居ることを立證する。しかのみならず、集産主義の理論のごときですら、英、佛等に於ける社會黨の頭目と言はれる人達の間に於て、今日尙ほ多くの悲觀的論議を經つゝあるのである。

しかし、社會主義普及の見地から言へば、理論家のこれ等の論議は一向に重要なものではない。民衆は敢てそれを聽かうとはしない。群衆は單に理論を大摑みにしか受け容れない。そして、群衆の確信は常に宗教的形態を帶有するに至るものである。群衆は懷疑論をも批判的精神をも有たない。彼等によりて

一度受け容れられた政治的、宗教的、若しくは社會的信條は、常に討論なしに、そして、感激をもつて信奉される。理性によりて指導される理論家は、研鑽によりて進化し得るが、群衆は決して進化しない。彼等の信仰は、常に極めて簡素な形態を取る。それが一度彼等の原始的な脳漿の中に植え付けられたかぎり、その信仰は殆ど永久に不動に止まる。社會主義の約束する事業の最大、個人的犠牲の最小——この信條の芽生へを培かふ可く、彼等の脳漿は最もふさはしき沃土であらねばならぬ。彼等が來るべき再生社會のために期待する幸福は、これ以外の何物でもあり得ない。彼等に取つては、これに優るより尊き信條が、他に一つとしてあらうとは想像されない。彼等をして社會主義の不思議な殿堂の前に、隨喜の涙をもつて熱誠なる禮拜を捧げしめて居るのは、全くこの幸福なる期待の故である。そしてこの期待を實現せむがためには、單に革命的に科せられたる善良なる命令をもつて足りるとする根本的觀念よりほかに、彼等は何物をも必要としない。その信條の基づく理論が何であらうと、それは少しも彼等の關するところではない。イズムの如何は、彼等の問ふところではない。彼等の全精神を指導するものは、單に與へられたる信條そのものである。

しかのみならず、宗教的信條を基礎づける理論的方面に存する動性は、むしろ、凡ての新しい信仰の生誕を導くに必要なる一般的法則の一つにほかならない。眞實の教理は、實際ハそれが確實なる勝利を得た後でなければ、決して構成されるものではない。この時期に至るまでは、凡ての教理は常に不定的であり、穏見的である。そして伸縮自在なるこの曖昧と不定とが、その實、これ等の教理をして、人間の多様なる要求に順應せしむる所以であつて、また、歴史の一定の時期に於ける多數不滿家の限りなき雜多の願望に、滿足を與へしめる所以なのである。それ故に、この教理の不定性は、却てその成功の一條件とされねばならぬ。蓋し、人間は、事物を自分の望みに任かせて變革し、思想と感情との魔法的三稜鏡（プリズム）を通じてのみ、事物を認識する不思議な能力を有つて居るものである。そして、このプリズムは、わたし共の欲するがような世界を、わたし共に、恰かも如實の姿として見せてくれる。かようにして、各人が手んでに、自分の想像や、野心や、願望やに任かせて、この新しい信仰の創設者が嘗て夢想だもしなかつたようなものを、その教理の中に見出そうとするのである。賃銀法則の辛い桎梏の下に沈吟しつゝある勞働者は、彼等のために解放された幸福の榮光に漾ふ樂園を、たゞ譯もなく、その中に瞥見する。僧侶は慈善の一般的普及をその中に見出すことによりて、その尊い教理の

勤行をも打ち忘れて、只管にその教理の實現を夢みる。凡ての方面に於ける不平家の大群は、この教理の勝利が直ちに彼等の運命の改善であることを期待する。この新しい信仰に拒否すべからざる絶大の力を與へるものは、實に、これ等の凡ての夢想、凡ての不平、凡ての願望の總和なのである。かようにして、社會主義の信仰は益々普及する。

六

信仰の成功は、それが含み得る眞僞の部分とは毫も關するものでないかぎり、宗教的信仰としての社會主義の將來には、成功の爭ふべからざる多くの素因を存するものと言はねばならぬ。そして、その中、特に重要なるものは、次の四點である。

第一、社會主義は舊信仰と鬪ふべく、多くの困難を有たない。何故なれば舊信仰は既に崩壞の途にあるからである。

第二、社會主義の教理は舊信仰とその基調を一つにする。それ故に社會主義は舊信仰と容易に結び付けられると共に、多くの努力を須ゐることなしに、これに代ることが出來る。

第三、社會主義の信條は現代の願望を代表する。從つて、それは、直ちに、大多數の人心に反響し得る。

第四、社會主義の信條は極めて簡單な形態の下に表現される。從つて、それは、凡ての人々から容易に受け容れられる。

前揭拙論に於て詳說したがように、舊信仰は既に崩壞の運命を辿つて居る。宗教的及び社會的信仰が正に壞滅せむとするこの正確なる時期に於て、社會主義は勃興した。そして、社會主義の基礎は、また舊信仰のそれと等しく、人類の平等觀である。社會主義によれば、現今の社會を支配する現實的不平等は、正しく資本主義制度の罪である。この制度を覆すことによつて、人間は初めてその本來の平等性を回復することが出來るであらう——この信念に於て、社會主義は舊信仰と接觸する。從つて、その信仰の基調は舊來の自由主義と選ぶところはない。社會主義はヒューマニズムの再生である。その運動は舊來の一視同仁教に對する一つの宗教改革にほかならない。

新教理は、現在の願望と期待とに順應して、舊信仰が遂に果さなかつた約束を、極めて有效に更新しようと準備する。その名は、さながらに舊時代の樂園のそれのように、わたし共の夢想と願望とを綜合する魔力の表現である。その價値が如何に微細であらうとも、そして、その實現が如何に不確實であらうとも、彼は、尠くも古い神が最早人間に授けることの出來ない願望と、科學が人間から奪ひ去つたイリュージョンとを、再び人間に與へるだけの功績を有つべき一つの新理想を構成する。神

を創り出して、これを信奉することの不思議な能力の中に、今後尚ほ、人間の幸福が宿らねばならないことが、人間に免かれがたい運命であるとするならば、わたし共は、この新教理の重要さを誤認するわけには行かないであらう

新教理は、日毎に太つて行く。それは、恰かも惑はしの魅魍のように、人心の奥深く喰い入つて行く。その勢力は益々増大する。舊い教理は既に蒼ざめた。古い神の祭壇は荒廢した。家族は解體する。制度は崩壞する。社會的階級は消散する。凡ての部分を集積する一望千里の廢墟の上に、新らしい巨大なる社會的蜃氣樓は、獨りその威容を誇らうとする。新教理は、一人として眞剣なる誹謗者に會することもなく、恰かも無人の境を走るがごとくに擴がつて行く。その信奉者等は、かの往時に於ける耶蘇の信徒達のように、世界を再建すべく運命づけられた新理想の持主として、深い信念を有する熱烈なる使徒であるのに反して、舊社會の臆病なる擁護者達は、彼等が支持する主義の價値に就て、殆ど透徹するところがない。凡ての彼等の防禦は既に久しき以來使ひ古るされて、最早凡ての價値を失つてしまつた神學的、經濟學的の古いフオーミユラを楯に、營々として、みぢめな飾ひ直しをやつて居るものに過ぎない。かのガリレイの科學の森から現はれた一新神が、ぐらつき出した古い神様達の遺産を拾ひ集めて、彼等に最後の一撃を與へた時ほど、偶像教の擁護者達が哀はれにも無力に見えたことはないであらう。歴史の小車は小休みなく廻轉する。そして、古い場面は、たゞ背景の塗り直しによつて、更らに何度となく繰返される。近代的悲劇のカタストロフは刻々に迫つて來た。

社會主義がその信仰の基礎として、確實なる論理を有つて居ないことは言ふまでもない。しかし、世界初まつて以來、論理の上に置かれた信仰といふものが、どこにあつたらうか。非理性は、それが永續することによりて、漸時理性的となる。そして、人間の生活は不思議にこの非理性に順應して行くものである。社會は、希望、信仰、必要、即ち感情の上に、その基礎を置くものであつて、それは、決して理性に基くものではない。そして眞事らしさに基くものですらもない。進んだ心理學は、社會の外的變化は凡てわたし共の精神に內在する或る無意識狀態の結果にほかならないものであることを理解せしめる。そしてわたし共の精神に無意識的意思を作り出す力は、常に不可抗的である。理性はこれを認識しない。そして假令認識しても、それに反抗して何事をも爲し得るものではない。しかし、この力を構成する感情は、固より、祕密の論理によりて進化して行く。感情は理屈では判らない理屈を有つて居る。しかし、

どんな思想家でも、この秘密の論理から一定の法則を引き出すことは出來なかつた。何故なれば、この論理は、正しく歴史的豫見の限界を超越した世界を支配すべき法則の一つだからである。

非理性はむしろ凡ての信仰に共通的な性質といつても、差支ない。人間の上に司配した大なる信仰は、何れも理性の子ではなかつた。固より如何なる信仰と雖、遂に一度は、かの神、帝國、若しくば民族の衰滅を餘儀なくする共通の法則の支配から脫することは出來なかつたとしても、彼等の最後を誘導したものは、決して理性ではなかつた。

信仰は克く、何の紐帶をも有たない事物を一所に結び付けて最も明白なる誤謬をも、極めて燦爛たる眞理にまで變形してしまふ不思議な魔力を有つて居る。信仰は、人心を魅了することによりて、精神を奴隸となし、民族の運命を決定し、そして最後に、文明と帝國とをトランスフォームしてしまふ偉大なる力を有つて居る。これは理性に於て決して見出すことの出來ないそして信仰にのみ獨特の性質である。重ねて言ふ、信仰は論理の子ではないが、しかし、彼は歷史の產むだ女王であると。それ故に、社會主義學說の大部分が、假令、どれだけ不合理性を含んで居ようとも、それは決して宗教的信仰としてのこの新教理の勝利を妨げるものではない。況して、この新教理は、長い間各民族を支配して來た宗教的信仰の何れに比しても、更らに大きな非眞實的空想を含んで居るものでは、斷じてないからである。

あらゆる意味に於ける階級的反對の除去、凡ての利益の調和、幸福の普遍化、理性の主權、人類及び國民の絕對的自由及び平等――これが即ち再生社會のために、新教理の約束するパースペクテイブの凡てゞあらう。そして、それは、正しく現代社會の一般的願望を表白するものであらねばならぬ。社會主義は、集團の全能による富と勞働との新分配によりて、この要請を保障する。そして、この保障を實現するがために、それの要求する手段は、一つに、富と權力とに於ける現在の少數支配階級に對する一般民衆の現實的なる階級的抗戰、若しくば單一なる革命意思である。この一般的願望の表現と、その信條の極端なる簡素性とは、新教理の最も大きな誘惑的要素をなすものであつて、そこには、恐らくこの新宗教の普及を阻害すべき何物をも存せぬであらう。

七

社會主義が、その原理に於ては、多くの科學的判斷を有する

にも拘らず、尙ほ現在遍く世界の人心を支配する一大勢力を構成するに至つた唯一の理由は、全く社會主義の特有するこの宗教的形態に存するのである。それ故に、現在の社會主義は、最早論爭すべき學說ではない。服從を要求される敎理なのであるそして、それは、人心に對する勢力の絕對なる敎理なのである。わたし共が、若しも社會主義によりて行はれた深い影響を理解しようとするならば、その理論を檢討する必要はない。社會主義の成功は、その理論とは全く緣のないものなのである。段々とその地步を占めて行くあらゆる宗教に於けると等しく、社會主義は、理性に依つてとは全く異つた過程に從つて普及する。社會主義は、それが討論を試み、若しくば經濟的論證に依憑しようと企てる場合には、極めて弱々しいものではあるが、それが一度、主張と、夢想と、架空的約束との領域に及ぶ場合には、これと反對に、極めて力强い。そして、それが全くこの範圍を出でない場合には、更らに恐るべき威力を示すであらう。

しかし、こゝに注意すべきことは、社會主義には、人間のために未來世を創造する魔力の欠けて居ることである。これは、宗教として、明らかに一つの大きな弱點とされねばならぬ。今日まで、世界を征服して、久しく人心を支配した大宗教の主要なる力は、全くこの魔力に存したのである。未來教は凡て死後の幸福を約する。この幸福の空想的方面は、何人もこれを確實に立證することは出來ない。しかのみならず、未來世に約束される幸福のパースペクテイブは、苟くも人間の想像力の許すかぎり、その最大限度に及ぶであらう。これに反して、現世教としての社會主義の約束するものは、人間の經驗を超越した天國の幸福ではなくて、人間の經驗內に存する現世の幸福である。從つて、その幸福は極めて限られたる範圍に止まるだけではなしに、またその約束する凡ての幸福は、悉くこの下界に於て實現されねばならないものである。しかるに、かような約束の實現は、人間の力でどうすることも出來ない心理的若しくば經濟的必然性と、必ず宿命的に衝突するに決まつて居る。この幸福の非現實性は、何人にも容易に證驗されるであらう。經驗は、この社會的イリユージョンの信者達に、それの幻滅を速かに敎へることが出來るであらう。かようにして、彼等は、彼等が崇拜した偶像の正體を確かめる前に、早くも絕望の憤怒をもつて無慘にもそれを破壞し去るであらう。しかし、不幸にして、かような經驗は、先づ社會を破壞した後でなければ得られない。

凡て、宗教の生命は希望の創造である。その僅かなる希望によりてのみ宗教は存續する。社會主義の與へる如何なるパースペクテイブが、ヤソやマホメツトや、釋迦の創造した悠久の樂

闘に匹敵するであらう？ 今日社會主義の使徒達が、わたし共に約束する地上の幸福が、これに比して、如何に慘じめなものであらうぞ！

私は惧れる、社會主義が世に君臨した時は、また恐らくは、同時にその崩壞を準備するものではあるまいかと。固より、社會主義は一時勝利を得るに違いなからう。近代革命の人道的思想が勝利を得たやうに。しかし、それは、やがて再び、血なまぐさき大破綻の中に、恐らく滅亡すべき運命を免かれないものではあるまいか。蓋し、近代の世界は、社會主義者の夢想以外に、そして屢々その夢想とは明白なる不一致に於て、急速な、深刻な進化を迪つて居る。この進化は、六七十年來漸時完成された科學的、産業的發見によりて、生存條件や、必要や、事物の觀念の中に起つた變化の結果である。社會の進化が順應して行くのは、この變革である。必然性の歯車仕掛を見ることなしに彼等の氣まぐれに、社會組織を改造し得ると信ずる理論家の空想にではない。わたし共は、現在世界の變革によりて惹き起されたる問題は、社會主義者が沒頭するそれ等とは異つた重大なるものであることを理解せねばならぬ。それ故に、わたしは信ずる。社會主義は、恐らく同一世紀に生れて、また同時に亡び行く一時的宗教を構成するものにすぎないであらう。そして、それは、人類の生物的本能と、社會がその法則に服從すべく運命づけられて居る凡ての種類の必然性とに、より善く順應した他のものを準備し、若しくばそれを誘導する役割を勤めるに過ぎないものであらうと。わたし共が社會主義の將來を絶對に不祥なものと判斷しないのは、一つにこの見地に於てゞある。

八

社會主義の宣傳家は、凡てこの新しい信仰の多幸なる將來に就いて、少しも疑ふところはなかつた。ロシア革命は成功した。新教理の信者達は、近く、この信仰の一般的勝利を期待する。しかし、その勝利は、現在社會の破壞と、新たな基礎の上に於けるそれの建設とを、必然的に豫定せねばならぬ。固より、破壞力は人間の支點内に存する。人々が暴力によりて、速かに一つの社會を解體し得べきは、言ふまでもない。恰かも、放火によりて、如何なる大廈高樓をも、一夜にして灰燼に歸せしめ得るがやうに。しかるに、創造の力は時の上に依存する。そして、それは、人間の意思の直接の働き以外に屬する。再建は常に極めて徐々である。人類が一日にして破壞し去つたものを再建するがために、克く數世紀間の刻苦精勵を必要としたことは、敢て歴史に稀れなる事實ではない。

近代生活の黎明期に於けるヒューマニスト達には、水平や、調和や、正義に關する彼等の理想の前に、人間を支配する必然性は、恰かも一掃され得るものであるかのごとくに妄想されて居た。從つて、世界を再建するがためには、一定の概念に基いた哲學的構成と、理性に基いた法律制度とを想定する以外に、彼等は敢て何物をも必要としなかつた。社會の建設は、單に主權者の善意に一任して置けば、それで充分であつたのである。かような學説は、蓋し、今日では維持されない。しかし、この種の學説を、わたし共は單に一笑に附し去る譯には行かない。これ等の學説こそ、最も大きな、最も怖るべき破壞力を有する行動の動機を構成するものであつて、今日尚ほ、新教理の使徒達が夢みて居るものは、またこの革命的英雄時代のイリユージヨンにほかならない。彼等に取つては、恐らく破壞後の建設ほどもつと容易に見える何物もないであらう。しかし、事物の進化に關して、わたし共の有する知識は、人々が自から破壞し去つた社會組織を、彼等の氣まゝに再建することの可能を、果して正認せしめるであらうか？

社會の機構は、常にその制度、その信仰、その美術と共に、遺傳と傳統とによりて確立されたる思想、感情、習慣の一組成體を表現する。一つの社會は、これ等の道德的遺産が、一般意識の中に堅固に確立された時にのみ凝聚力を有する。そして、社會の進化を支配する根本的條件は、第一には、それの固定性、第二には、それの變化性である。一文明は、それが一つの傳統を創り出した時でなければ、構成されない。そして、各ゼネレーションが、若干この傳統をモディファイすることに成功した時でなければ、社會は進歩しない。若しも一つの社會が何時までもその傳統をモディファイしないならば——例へば近代の支那に於てその例を見るがごとくに。——その社會は停滯する。そして如何なる進歩も望まれない。これに反して、若しもそれが、あまり急激にこれをモディファイしようと欲すれば、社會は凡ての固定性を失つて、遂に分解する、そして、結局、崩壞の運命を免かれない。「アングロサクソンの實力は、彼等があらゆる過去の影響を受けながら、必要なる限度に於て、その桎梏から脱し得たことに、主として歸せられる。これに反して、ラテン人の弱點は、過去の勢力を全然覆して、絶へず根本的に、その制度、その信仰、その法律を改造しようと欲することに存する。單なるこの理由のために、彼等は一世紀以來、革命と絶へざる動亂との中に生活した」とルボンの言つたのは正しい。

わたし共は、遺傳と傳統とによりて支持される舊思想と、近世の科學的、産業的進化に伴ふ新しいミリユーの産むだ新思想

との間の絶へざる爭ひの中に生活する。人間の生活は、固より他の凡ての生物のそれに於けると等しく、またそのミリユーに順應することによりてならでは維持されない。このために、わたし共は絶へず傳統に反抗する。しかし、それは徐々の進化によつてゞあつて、革命によつてゞはない。蓋し、より善き生活の目的は、一歩一歩徐ろに傳統の桎梏から脱却することによりてのみ到達されるからである。

わたし共は、人類若しくば社會の運命を改善すべきあまたの新傾向の正當性を拒むものではない。そして社會主義がまた、明かにこれ等の新傾向の一つを代表するものであることを誤認するものでもない。しかし、これ等の新傾向に順應して、生活の改整を企圖するに當りて、わたし共の先づ第一に考へねばならない最も大切なる點は、これ等の新傾向の代表する要請と、人間の生活を支配する必然性との關係である。その要請の實現が人間の生活に取つて如何に望ましきものであらうとも、若しもそれが自然の必然性と調和しがたいものであるならば、人間の運命の改善に、毫も實際的影響を齎し得るものではないであらう、何故なれば、必然性は、人間の意思が産み出し得る制度とは、全く無關係に進展するものだからである。

社會主義には、その歴史を傳へるためのアポロジストや、その理論を辯證するための經濟學者や、その信仰を宣傳するための布教者に欠げるところはない。しかし、社會主義が、人間の運命を如何なる點に於て、若しくば、如何なる點まで、實際改善し得べきであるかの根本問題に關する研究は、今日まで全く等閑に附せられて居た。この問題の解決は、人間精神の暗冥なる部分に、用捨なく加へられる鋭い解剖のメスによりてのみ明待される。それ故に、新理論の成立ちと、それの價値と、それの與へる影響とに就きて、正しい説明を與へ得るものは、恐らく注意ぶかい心理學者のみであらう。

九

近代科學の教ふるところに從へば、それが人間の生活に關するかぎり、能力に於ける個人的差異、支配欲、所有欲を初めとして凡ての本能の發動、及び個人間の生存競爭は、正しく人間を支配する心理的、生物的、若しくば社會的必然性にほかならない。

社會主義は、個人の間に見出されるあらゆる社會的不平等を撤廢し去ることをもつて、その根本的要請とするのであるが、しかし、ここでわたし共の考へねばならないことは、この要請そのものゝ當否ではない。問題は、如何にして、この要請を、これ等の必然性と調和せしめ得るかである。若しも、個人の社

命的不平等が、單に個人又は社會の意思に原因する事情に由來するものであるならば、この要請の實現が、人間の運命の改善に、極めて幸福なる結果を齎し得べきは、固より明白である。しかるに、この不平等は、單にかくのごとき表面的、經過的のものではなく、むしろ、自然の宿命的法則、事變の偶然、並びに、個人の體質及び人格の一部を構成する生物的、心理的條件の本質的差異に由來するものであるとするならば、この要請の實現によりて滿足なる結果を期待することは、恐らく不可能であらう。結局、教育も、訓練も、意思も、人間の短かい生涯に於て、白痴と聰明者と、生來性犯罪人と善良なる市民と、文明人と野蠻人との間に存する深い溝渠を、到底除き去ることの出來るものでないかぎり、社會的不平等の人爲的撤廢が、人間の運命の繼續的改善に、果して何程の貢獻をなし得るかは、極めて大きな疑問とされねばならぬ。何故なればそれが人爲的の平等であるかぎり、人間の本質に內在するあらゆる必然性は、直ちにこれに對して叛逆を企つるに決まつて居るからである。かの佛蘭西革命の勇敢なる鬪士達は、貴族及び僧侶のあらゆる階級的優越性を剝奪して、その所謂社會的平等の理想を實現すると等しく、彼等はまた直ちに所有權の神聖不可侵を宣言することを忘れなかつた。今日の社會主義者が等しく革命の方法によりて一度ブルジョワ階級からその富を侵奪するに至つたならば、かようにして形成された所有者の新階級が、また直ちに、將來に向つて所有權の神聖不可侵を宣言せんとする熱心なる保守主義者に改宗しないであらうことを、果して何人が保證し得ようぞ。

わたし共は、固より、社會の現狀に毫も滿足するものではない。しかし、事態の現狀に對するわたし共の不滿や要求が假令何であらうとも、社會的不平等は、結局、不可避的だと認めるのほかはない。全能の神が人間性そのものを創り替へないかぎり、社會的不平等は、地球が終局の冷却に達する日まで、疑ひもなく永久に存續すべき人間の宿命的歸結なのである。そして、わたし共としては、老衰や死に對しては、その桎梏を忍ばねばならぬがように、社會的不平等と自然的不平等との對立は、結局人間に免かれがたい運命として、一應素直にこれを正認した上で、冷靜にその順應策を研究すべき寛容の精神を必要とするのであらう。レオン、ブルジョワが正しく言つたがように、「わたし共は自然の法則に反して何事をも企て得るものではない。しかし、この法則を絕へず研究して、不平等と不正義との機會を人間の間に減するために、それを利用することが必要なのである。」社會主義の要請はこゝにその限界を見出すべきであらう。

社會生活に於ける連帶の唯一の實際的形式としての類同利益の聯合― l'association des intérêts semblables―と生存競爭の近代的形式としての經濟的競爭とは、また等しく、現代生活の必然性である。社會主義は前者を殆ど寛容しない。そして、後者を嚴禁しようとする。社會主義の尊重する一般的權力は、一つに人民會議のそれであつて、單獨の個人は、社會主義に取つては、それ自體に於て、何物でもない。ただ、彼は群集の一部をなすといふ事實によりてのみ、凡ての能力と、凡ての權利とを享有するのである。しかし、心理學は、これに反して、個人は群集の一部をなすかぎり、彼の力を構成する心的特性の大部分を喪失するものであることを教へる。こゝに於ても、社會主義の要請は、人間を支配する心理的必然性と調和しがたき障礙の一つに遭遇する。

社會主義の豫定するがような經濟的競爭の壓抑は、恐らく、近代生活の槓杆を麻痺せしむるものであらう。問題は、競爭が有益なるか、有害なるかを知らむとすることではない。それが不可避的であるか否かを研究して、若しも、それが不可避的であるならば、むしろ、各人をして、これにより善く順應せしむべく、最も有効なる組織を工夫することに、その努力を制限すべきである。

一方に於て勞働者の聯合、他方に於て雇主の聯合は、單獨の個人が實行し得ない對等の武器に於いて、競爭を可能ならしめる。しかし、それは、固より集團的獨裁を以て、個人的獨裁に代らしめむとするものであつてはならない。何故なれば、集團的獨裁は、個人的のそれに比して、より少なく壓迫的であると信ずべき理由がないばかりではなく、むしろ、それは、よりたやすく暴虐性を帶有すべき傾きを有するものだからである。例へば、最も獰猛なる暴君ですから、かの革命集團が想像的若しくば現實的の集合利益の名の下に、しばしば公然行つたがような血なまぐさい專制的行爲を、敢てするものではなかつたであらう。わたしは、むしろ、類同利益の聯合に於て、無節制なる經濟的競爭に對して、何等の理論なしに、自發的に形成された一個の自然的對重を見出さうとするものであるが、しかし、これ等の點に關する詳細なる論議は別の、機會に讓らねばならぬ。

十

社會主義の教理が世に現はれたのは、固より今日のことではない。古代歷史家の貴重なる文獻によれば、恐らく、その起原は、無窮なる時の夜の中に消え去るべきものであらう。凡ての社會が發足した低級なる進化の形式としての原始的共産主義に遡るまでもなく、今日提案されつゝある社會主義の各種の形態

は、既に古代に於て悉く經驗されて居るのである。その最近の試みとしての新ロシア共産社會の將來は別として、尠くもそれ以前に實行に置かれた各種の社會主義は、一つとして時の試錬に堪へ得たものはなかつた。固より彼等はしばしば成功したが、しかし、それは常に一時的であつた。例へば一八四八年の革命に於て、その勇敢なる鬪士であつた當時の熱心なる社會主義者の願望は充された。新時代は生れた。そして彼等のお蔭で世界は變革された。しかしまた、彼等のお蔭で、彼等の社會は專制主義の夜に亡びてしまつた。そして若干年の後には、不幸なる戰爭と侵略との苦い試錬を經ねばならなかつた。歴史は、かようにして、數千年間常に同一の過程を繰返して來たのである。そして、この事實は、時の流れが尚ほ人間性の暗黒なる部分を變更し得なかつたことゝ、必然性に對する人間の無理解なる抗爭が常に無益であつたことゝの事實を、最も雄辯に立證するものにほかならない。人性は既に老いた。しかし、彼は何時までも同一の夢を追及し、同一の經驗を繰返す。そしてこれは、恐らく、人間に運命づけられた永遠の課題なのであらう。

　制度としての社會主義が、何れも結局は失敗に終つたにも拘らず、社會主義思想が永續的成功を收め得たたゞ一つの場合がある。即ちそれは、基督教社會主義に於てのそれであつた。蓋し、眞の無政府主義者とも言ふべき古代ユダヤの豫言者等の呪詛は、就中富に對する呪ひであつた。そしてその第一人者たるキリストの要求したものは、特に貧困者の權利であつた。彼等の呪ひと脅迫との向けらるるものは、常に富者にほかならなかつた。神の王國は、たゞ貧しき者のためにのみ留保されてあつたので、「富める者が天國に入ることは、駱駝が針の穴を通つて行くよりも、むしろ困難」とされたのである。かくて紀元後二三世紀間のキリスト教は、常に貧困者と不滿家との社會主義であつた。そしてそれは、また近世社會主義に於けると等しく、固より現存制度との絶へざる鬪爭の過程に於て發達した。そして、それは明かに成功した。然らば、基督教社會主義がかくも永續的成功を收め得た理由は何であつたか。言ふまでもなく、それは、その宗教的形態の故であつた。しかのみならず、基督教社會主義が特に貧困者のために約束する幸福は、未來世に對するそれであつた。從つて、その約束は、尠くも現世に於て、決して裏切られる氣遣ひはなかつた。この無限なる長所の故に基督教社會主義は久しく人心を支配することが出來たのである。

　しかるに、彼もまた、その成功の後には、直ちにその原理を抛棄するのほかはなかつた。蓋し、基督教がその地位を維持せむがためには、彼は矢張り富者と權力者とに倚賴して、彼が初

め呪詛した富と權力との擁護者にまで豹變することを餘儀なくされたのである。凡ての革命征服者のやうに、彼もまた等しく熱心なる保守主義者になつた。かくて、カトリック羅馬は、帝王羅馬と異つた社會理想を、一つとして有つて居るものではなかつた。そこでは、天國への切手を渡されるものは、單に屈從の美德を學び得る貧しき者のみであつて、不從順なる貧者は、常に地獄と惡魔との脅威を受けたであらう。かやうにして、貧しき者は、新たに、諦らめと、苦き勞働と、屈從とに甘んずるほかはなかつた。そして、この夢は二千年間續いた。それの單なる宗教的形態の故に。何といふ不思議な歷史であらう。わたし共は、社會主義の眞の意義を理解するがために、そこに多くの貴い暗示を見出すべきである。

若しも、わたし共の子孫が、人間の思想を壓迫する遺傳の力から完全に解放されて、純粹な心理學的見地に於て、これを研究し得るでもあらうならば、彼等は、わたし共の文明が今日尙ほ支持されて居るこの空想の偉大なる勢力を、恐らく驚嘆してやまないであらう、理想の見地に於ては極めて幼稚な、それにも拘らず極めて有力なるこの信仰の發生と發達とに面して、最も莊嚴なる哲學體系が、如何に慘じめに見えたであらう。その持久的勢力は、世界を支配するものが、どこまで現實的のものでなくて、非現實的のものであるかを理解せしむるに充分ではないか。

人間は希望に生きる。社會主義は人間の願望の中に巣喰ふた一つの大きな力である。

これを要するに、原始的野蠻時代から經過した何千年以來、人間はイリユージョンを崇拜した。そして、イリユージョンの上に彼等の文明を建設すべく、更らにイリユージョンを創造することに孜々として倦まなかつた。そのイリユージョンは若干の時の間人間を魅惑する。それが人間を魅惑する力を失へば、それは即ちイリユージョンの幻滅の時である。その時から、人間は、彼等がそれを創るために費したと同一の努力をもつて、やがてその破壞に沒頭する。そして、これに代るべき新たなイリユージョンを創り出すべく、人間は、更らにもう一度この永遠の仕事、そして恐らくは、彼をして運命の痛ましさを忘れしめ得る唯一の仕事に復歸する。重ねて言ふ。社會主義の理論家は、舊時代の信仰に代るべく運命づけられた一つの新しい信仰を建設すべき困難な、しかし希望に滿ちた仕事に取りかゝつて居るものにほかならない。事物の不可避的進化が、やがてまたその上に幻滅の宣告を與へる日の來るのを待ちながら！。

財政的信用の所謂三等國に墮ちたる日本

法學博士　堀江歸一

（一）財政的信用の等級別——英國財政的信用の消長——ナポレオン戰爭、南阿戰爭幷に歐洲戰爭時代——利率の引上と擔保物の提供——信用程度落下の原因、（二）外國債發行を必要とする事情——利率の低廉を利用すること——對外債務決濟の必要に基くこと——後者に伴ふ危險——財政的信用を維持する五條件（三）我國の財政的信用は何等なりしか——軍事上の一等國と財政上の劣等國——日本の畸形的發達——日本を財政的一等國とするは幻想なり（四）戰時の繁昌は戰後に消滅す——我國財政窮迫の事情——財政的一等國たる資格の絶無——震災火難の打擊大なり（五）圓價値の低落——外國債募集の條件如何——其不利の免かれ難き所以——日本と西班牙との比較——外國債の條件に關する風聞（六）如何にして財政的信用を恢復する——之を恢復する五政策——政策實行者に實力を要す

（一）

一國財政に對する外國の信用が第一等の程度に居るか、第二等以下の程度に居るか、同じ二等以下と云つても、第二等であるか、第三等であるかを決定するのは、極めて困難なる問題である。又或る國の信用が以前よりも其程度に於て落下したとしても、其落下は一時的に止るか、其れとも永久に亙るかといふ問題をも生ずる。例へば英國の如き其財政的信用に於ては餘程以前から第一等の地位を占めてゐるものと云へるであらう。今之を歴史的に云へば、ナポレオン戰爭の當時に於ては、國步多難を極め、財政上の信用も亦失墜することを免れなかつた。現に内國に於て逐次公債が著しき程度の割引を以て、發行されたことの如き明に財政的信用の失墜した證據とするを得るが、他の諸國も英吉利と同様、或は英吉利以上に財政困難の狀に居つたし、ナポレオンの大陸制度の下に、英吉利に對しては、通商上の關係すら、遮斷して居つたのであるから、金融上の取引を結んで、英國に資金を供給するようなことはなく、斯くて英國の財政的信用が果して二等國にまで、引下げられたものであるか、

三等國にまで落下したものであるかの事實は遂に外國との比較に依つて、之を明瞭にするを得なかつた。唯內國に於ける公債募集の條件なり、其狀況なりから判斷して、英國財政の信用の低下したことだけは、世人の理解に上つたのである。

ナポレオン戰爭後英國の財政は整理の緒に就くと共に、產業革命の效果に依つて、經濟社會の發展したことは、英國の財政をして自ら第一等の信用程度を維持するに至らしめ、クライミヤ戰爭も、南阿戰爭も此點に於て何等の影響を及ぼさなかつた。殊に後者の場合には前者と違つて、政府が軍事費の財源を調達する爲めに、連年巨額の公債を發行し、且つ戰爭の繼續する期間が豫想よりも永きに亘つたことゝ、公債の標準利率の二分五厘であつたのに對して、戰時發行された公債の三分五厘利付であつたことゝは、聊か英國財政の信用に褪色を來さしめるの憂を免かれなかつたが、固より之を以つて信用程度の低下を云々する者はなかつた。然るに過般の歐洲戰爭は流石の英國に對しても、其財政を壓迫する所以と爲り、軍事公債の內國市場に發行されるものゝ多きに至ると共に、政府は常に應募を盛にする爲めに、利率の引上げ、發行價格の引下げ、租稅免除の如き特典賦與、今後發行される高利率の公債に對する乘換應募の自由等種に有利なる條件を應募者に認めざるを得ざるに至つた。然も斯の如きは彼の大戰爭に處する財政策として、已むを得ざるものと考へられたが、最も切實に英國の財政的信用に疑惑を懷かしめるに至つたのは、英國が北米合衆國に就て、公債を發行せざる可からざることゝ爲つた一方に、其起債條件の英國に取つて、極めて不利なるものであつた事實に外ならない。即ち千九百十五年十月英佛兩國の聯合債務として、五億弗の公債の發行された際には、利率は五分であり、兩國の租稅を免除すると云ふことの以外に、何等の條件も付せられなかつたのであるから、戰時に於て、依然として、英佛兩國の信用の高いことの示されたものと考へられたが、次いで千九百十六年英吉利が更に三億弗の公債を發行するや、利率は五分五厘であり、其一半は三年を、他の一半は五年を期限とする一方に、發行價格を前者を九十九、二五に、後者を九十八、五に置き、加ふるに兩者に對する擔保として、英國は當時所謂有價證券動員計畫の下に、一般資本家の手から、政府に回收し、將來の必要に應じて賣却する爲めに、紐育に持つて居る合衆國並に加奈太の弗證券を應募財團に提供することゝ爲つた。土耳古、支那、埃及の如き未開國が先進國に就て、外債を募集する場合に、其公債の完全を保障する爲めに、擔保物の提供されることは、常に見る所の事實であつて、此事は自ら未開國の財政に對する信用程度の如何に

低いものであるかの證據に充てられるのである。從來外債を募集することの絕無であつた英國が戰時遂に外債を募集した其上に擔保物を提供するの已むを得ざるに至つたことは、明に英國財政の信用程度の低下を示すものであつて、外債を全然募集せずして、財政を處理するを得る國若しくは外債を募集しても、低利無擔保の下に、之を爲すを得る國を以つて、第一等の信用程度に居るものとすれば、擔保物を提供して、利廻り六分以上の條件を以つて、漸く外債を募集するを得る國は第二等以下の信用程度を有するものとしなければならない。英國が戰時斯る窮境に陷つたのは、要するに開戰以來諸外國殊に合衆國に就て購入する軍需品が意外の巨額に上り、輸入超過の勢、甚だ急であつて、外債募集に依るの外に、決濟の道を得なかつたからである。然も右の外債は期限の來ると共に、償還される一方に戰後の英國は輸入超過を決濟するに、對外債權の收入を以つてする平常の狀態に復した爲め、今日に於ては財政上第一等の信用程度を有すること勿論であるが、兎に角戰時に於ける高利擔保付外債の發行が一時なりとも、英國財政の信用を傷けたことは、掩ふ可からざる事實である。英國が戰時非常の際であつたとは云ひながら、金の輸出を制限して、自由金市場たる誇りを失つたことも、外國に對する資本の放下を政府の許可制度に據らしめ、政府をして民間資本家の自由に任せて、資本を外國に輸出することを制限せしめ、斯くて資本の自由供給國たる地位を擲つたことも、英國としては甚だ遺憾とする所であつたに相違ないが、之と同時に假令ひ短かい期間とは云ひながら、高利の擔保付外國債を紐育に發行したことも、英國人の自尊心を傷けること少なしとしなかつたのである。

（二）

斯の如く考を進めると、一國財政的信用の失墜は內國債に於ても之を見るを得るが、殊に其著しく現はれるのは、外國市場に公債を發行する場合である。然らば一國は如何なる必要に基いて、外國債を發行するかと云ふに、大體に於て、左の二ツに分たれる。

第一、外國債を募集する方が內國債に比較して、利率低廉であつて、財政上の負擔を輕からしめるを得ること。

第二、國際貸借の自國に逆戾である際に、內國に對する正貨の取付を緩和する爲めに、外國債を募集し、其收入を以つて、對外支拂の安全を謀ること。

第一、外國債の利率の內國債に比較して、低廉であることは、外國債の發行される外國に資本の充實する事實に基くもの

と見る可きであるが、同時に一國に於て財政策の不始末から年々連續して、內國債を發行する必要に迫られ、相次いで利率を引上げざる可からざるに至り、外國債の利率に對して、大なる鞘開きを生ずるに至つた一事も亦其原因であると見られる。斯る場合に外國債の條件が債務國に取つて、不利であることは、免かれ難き所である。蓋し內國に於て信用限度を超越する金額の公債を發行して、殊更に利率を高からしめ、之を避ける爲めに、外國債を募集せざる可からざるが如き、狀態に陷つた國が第一等の信用程度を保持する能はざるは、當然の數であると見られるからである。

第二、或る國の貿易に輸入超過の伴ふことは、必ずしも憂ふるに足らない。其國にして輸入超過を決濟して、尙ほ餘りある位の貿易關係以外に於ける受取勘定があつたならば、輸入超過は寧ろ其國に於て、外國から安易なる條件の下に、物資を受入れる方便であるとして、之を歡迎しなければならない。然るに之に反して、一國に或る經濟上の變動が起り、其結果として輸出貿易の減少する一方に、內國に於ける物資生產高の減少を塡補する爲めに、外國の物資輸入され來り、斯くして巨額の輸入超過を釀成したとし、而して本來其國に於ては、對外債權の收入に乏しく、到底斯る輸入超過を決濟するに足らないとしたならば、之を決濟する財源を調達する爲めに、外國債を募集することは、焦眉の急と爲るであらう。然も外國債の募集されたと云ふことは、一時對外支拂の安全を維持する效果はあるとしても、唯其れだけでは此以上に貿易の逆勢を匡正して、之を其順調に就かしめるが如き、働きを奏するに至ることを望まれない。隨つて外國債の募集は單に一回に止まらず、又二回に限られず、相連續して其必要を生じ、或は外國債の利子を支拂ふ爲めに、新なる外國債の募集を必要とするに至ることとなしとしないであらう。斯る場合に外國債の募集が債務國の財政的信用を低下する所以と爲り、其財政に危險を及ぼすことなしとしないのである。

茲に於てか私は一國が內外に於て財政的信用を維持するには、種々の條件の具備されなければならないことを考へる。即ち

第一、國家財政の整理宜しきを得、內國に於ける公債發行高が國家の財政的信用の限度とする所を超越して居らないこと。

第二、隨つて公債の利率も比較的低廉であり、然も此低廉なる利子を以つて、國民の貯蓄金を公債に吸收するを得るまでに、國民的餘財の豐富であること。

第三、國際貸借の狀態は常に一國に有利であつて、對外債權の收入を以つて、優に輸入超過を決濟するを得るは勿論、更に若干の剩餘あつて、之を自由に內國に回收したり、又は外國に於ける新放資に供したりするを得ること。

第四、隨つて若しも其國に現に發行された外國債があるとしても、又今後或る事變に基いて、新に外國債を發行するとしても、對外債權の收入を持つて、外國債の元利金を支拂ひ了る望みの確實であること。

第五、一國歲計の基礎とも云ふ可き租稅制度が最も確實である上に、彈力性を有し、時に些細なる事件に依つて、收支の均衡を失するようなことがあつても、租稅の自然的增收なり、稅率に於ける多少の引上げに依る增收なりに依つて、收支の均衡を復興するを得、其度每に一々國家信用を利用するの必要に累されず、而して一朝公債の增發の已むを得ざるに至つた場合には、租稅の增收入に依つて、元利金支拂の道を確保するを得ること。

の諸點は一國をして外國に財政的信用を維持せしめる所以であつて、若しも一國が第一から第三の條件を備へた上に、第四に揭げた外國債募集の必要に接しないとすれば、其財政的信用の發揚されるのは勿論であり、更に斯る國が稀に外國債を發行するとすれば、財政的信用を傷けずして、之を爲すを得ることは、自明の道理であると考へられる。

（三）

近頃我國の財政的信用に帝都に於ける震災火難の打擊を受けて、外國に於て第三等國の列に墮落したと云ふ說がある。其所に墮落したと云ふからには、震災前に於ける財政上の信用程度は必ず二等國以上に居つた道理であるが、果して我國の財政的信用は斯くまでに高いものであつたらうか。元來我國はヴェルサイユ講和會議に於ては、英米佛伊の諸國と共に、世界五大强國の列に入り、華盛頓會議に於ては、英米兩國と共に、世界三大强國の一に居るような形勢と爲り、國民の自尊心を煽揚するもの少なしとしなかつたが、其斯の如く日本が第一等國たり得たのは、如何なる意味合から來つたものであるかと云へば、ヴエルサイユ講和會議當時に於ては、歐洲諸强國の國力に非常の疲弊を來した際に、日本は海陸軍に於て、何等傷けられざる勢力を極東に擁して居り、又其海軍を以つて、聯合諸國の共同作戰に參加し、相當の威力を示した結果であり、更に華盛頓會議當時に於ては會議の議題と爲つて、正に削減せらる可き運命に居つた海軍力を最も多く備へた國は英米兩國に次いで日本であ

つた爲めに外ならない。斯る意味合ひから卒然日本が英米兩國と比肩するに至り、時に佛蘭西伊太利兩國を凌駕する地位に置かれたからと云つて、之を以つて直に總ての點に於て、一等國と爲つたと考へたならば、大なる誤解であるのみならず、軍事上に於ける一等國たらしめるまでに、多年國力の大半を傾倒して、日本を軍事的國家たらしめたことは、同時に軍事以外に於ける我國諸多の事物をして其自然に發展す可き勢から遠ざからしめた結果を齎して居る。即ち日本は軍事上に於ては、一等國であるを得たとしても、單に畸形的に斯る發達を爲したに止まり、他の方面に於ては、到底一等國を以つて許すを得なかつたのである。

隨つて昨今、我國の財政的信用が三等國に低下したとか、二等國の地位すら保ち得ざるに至つたとか云ふような聲を耳にしても、私は本來日本の財政的信用が今日まで一等國の地位に居つたとも、或は二等國の列に在つたとも考へて居らなかつたのであるから、別に右の如き議論に接して、感情に動搖を來さない、日本の財政的信用は或る時代に一等國に爲つたものと認めるを得ないのであるから、今日震災火難に依つて、帝都の經濟諸機關が壞敗した故を以つて、遂に二等國以下の列に陷つたものとして、悲觀することも亦大なる間違ひであるとするの外ないのである。唯一部の人士をして我國を以つて、財政的信用に於て一等國の列に入つたもの丶如くに、誤解せしめたのは、歐洲戰時我國に齎された種々の經濟的利益を過大視して、一種の幻想を畫いた結果であると思はれる。即ち歐洲戰爭中の數年間、我國が國際經濟上の關係に於て、有利なる地位を占めたことは、著しいものであつて、商品の販路の諸外國市場に擴張された結果として、年々多額の輸出超過を貿易上に收め得た其上に、傭船料、海運業の運賃、手數料、保險料等對外債權收入の諸項目に於ける金額に增加を告げて、受取勘定に屬する金額に大なる超過を來さしめ之を處分することの必要から、或は其一部分を以つて從來外國に負ふ債務を決濟し、或は他の一部分を以つて、新に支那に向つて、債權を設定し、時に英佛兩國に對して、多少の貸付を爲したこともあつた。若しも斯る勢が何年か繼續して、日本が外國に有する債務を決濟すると共に、外國に債權を持ち然も其持つ債權は對支借款に依つて得たような不確實なものでなく、又對英佛債權の如き、短期のものでなく、何れも長期確實の性質を有し、日本をして年々利子の回收を望み得せしめ、又海運業も近年の如き世界的悲況の時代に入らず、我國に年々傭船料や運賃の收入を與へるもの、巨大であつたならば、是等の事實は相重なつて、我國の財政的信用を第一等のものた

らしめたかも知れないのである。

（四）

然るに實際の事實は如何であるか。我國が歐洲戰爭に際して、獲得した經濟的繁昌の如きは、誠に槿花一朝の榮にも比す可きものであつて、戰爭の終熄と共に、漸次凋落の已むを得ざるに至つた一方に、寺內內閣の對支借款政策に於ける失敗は折角我國の支那に收め得た債權をして、殆ど有名無實のものたらしめ、更に寺內內閣の後を承けた原內閣の經濟的失政は結局大正年九年の恐慌を誘致し、爾來今日に至るまで、經濟社會をして大なる傷痍の下に苦痛を嘆ぜしめつゝあるのである。斯の如く既往の經過に徵すれば、歐洲戰爭中の國際經濟的變動は偶然にも我國をして經濟上の意味に於て、一等國に類するものたらしめた。然も其れは單に外見上の話であつて、一等國たる素質に於て、缺けるもの〻多かつた結果、一旦戰爭終熄して、偶幽的利益の消失すると共に、所謂一等國を以つて擬せられた我國の經濟的立脚地は次第に危險なるものと爲つたのである。即ち其危險であると認められる點並に其影響を個條書にすれば、

第一、輸入超過を決濟するに足りるまでに、國際貸借に於ける受取勘定の金額の達しない爲め、其差額は在外正貨に依つて、決濟しなければならず、隨つて我國が、戰時增殖するを得た在外正貨は近年著しく減少したこと、

第二、我國從來の經濟財政策は毫も內國に於ける物價を調節するに資するものなく、物價騰貴の勢の連續して已まない結果、輸入超過は益々增大し、遂に之を決濟する正貨に凋渴を來す可き狀勢の明瞭と爲つたこと、

第三、財政計畫に於て、連年公債發行に依る財源の調達を必要とする結果、公債の發行は常に金融市場を壓迫し、公債の市價を低落せしめると共に、新に發行される公債の條件をして國庫に取つて不利益のものたらしめ、又斯る條件の公債の發行される爲めに、益々金融市場を壓迫する弊を生ずるに至つたこと、

第四、斯る諸種の狀況は外國に於ける我國の財政的信用を失墜せしめ、倫敦に於ける四分利公債の如き、額面に比較して、著しく低き時價を示すに至つたのは勿論、民間諸會社が內國に於ける金融逼迫の影響を免かれる爲めに、外資の輸入を計畫しても、政府の信用程度の低いことに制されて、自然高利を負擔しなければならない窮境に陷つたこと。

の諸項に歸着するのである。

然らば震災前に於て、日本の經濟なり、財政なりの如何なる

方面に果して一等國たるの面目が備へられて居つたであらうか。外國に資金を融通する餘裕は全く之を持たない、寧ろ如何なる高利を負擔しても、外國から資金の融通を受けることを辭さない、貿易の逆調を決濟する唯一の資源たる在外正貨は次第に減少して、新に外債を募集する以外に之を補充する道を見出すを得ない、內國の金融は常に逼迫するに拘はらず、國家は始終公債を發行して、之を壓迫し、斯くて金融緊縮、資金調達難の爲めに、民間事業の進行を妨げ、國際貸借をして何時までも不利の狀態に居らしめる。斯る諸多の事實の具備した國の財政的信用が第一等の標準に居らないのは勿論、第二等の標準を維持することも亦困難であると考へられる。斯る際に彼の如き震災火難が帝都に起り、其經濟機關を破壞し、經濟組織を攪亂したものとすれば、其影響が直に我國の財政的信用に不利益と爲る可きは論を俟たない。即ち內國に於ける生産力の減退は輸出貿易を困難ならしめる其上に、內地生産の減少を補ひ、進んで復興復舊兩種の事業に必要なる物質を得るには、其供給を外國物質の輸入に仰がなければならないとすれば、今後數年間を通じて、外國貿易に於て、輸入超過に接するは、勢の免かれ難き所であつて、現に昨年中の入超が五億三千萬圓の巨額に上つたことの如き、正に其一端を示したものであると云へる。既に輸出が減少して、輸入が増加し、入超額の夥しき數字に上ることとの明瞭である一方に、對外債權の收入甚だ乏しく、在外正貨も亦減少し、然も其內の三億數千萬圓は大正十四年に入つて、償還期限の到來する二口の英貨公債償還の財源として、豫め用意して置かなければならないものである以上は、我國の對外支拂は今や相當金額の外國債募集の行はれない限り、殆ど行詰りの狀態に居ることは、明白の事實である。

（五）

顧みれば大正六年政府は偶々歐洲戰爭の半途に於て、英米兩國が金輸出禁止を敢行したことに倣ひ、我國にも金禁輸入制を布き、爾來今日に至るまで、此禁命を持續して、渝る所を見ない。而して斯る禁止の行はれた結果、外國爲替相場は殆ど自由に政府の方寸に依つて、左右されるを得ることを利用し、常に輸出の奬勵、輸入抑制に便するように、相場を決定して居つた。加藤內閣の時代に、金輸出解禁の議論、世間に起り、識者の間に相當の贊成を博したのであるが、同內閣の大藏大臣は未だ解禁の時期に至らざるものと解し、在外正貨の拂下を寬大にすることを以つて、金輸出解禁に代らしめた。而して山本內閣に至つては、一方に震災後の經濟狀態を救濟する爲めに、生活

必要品に對する輸入税を免除して、其輸入を奬勵しながら他の一方に在外正貨の減少する勢の急なるを示すや、之に恐怖心を懷いた爲めか遽に正貨拂下に制限を加へ、結局我國の圓價値をして空前の程度に底落するに至らしめた。圓價値の低落は必ずしも我國財政的信用の低落と同一視す可きものではない。前者は今後外國債の募集されると共に、騰貴するであらうが、後者に至つては、一外國債の募集を以つてしては、到底其恢復を期するを得ないからである。然も其孰れを以つてしても、我國の財政に取つて、不利の事實であることに就ては、何人も疑を挾まないであらう。

斯る場合に當つて、我國が紐育なり、倫敦なりに於て、外國債を募集することは、最も端的に、我國財政的信用の如何なる標準に居るかを示す資料と爲るのである。或は本文發表の際には、外國債募集の件も亦世上に公表され、随つて之を通じて示される、我國財政の信用に對する批判に就て、吾人をして議論を挾むの餘地なからしめるかも知れないが、前後の事情から觀察して、外國債の條件が決して我國に有利なるものでなく、却つて我國財政的信用の低きことを示す所以と爲る一事に就ては、何人と雖も、覺悟しなければならない所である。如何なる事情の爲めに、斯る結果を生ずるであらうか。第一震火後の我國財政に於ては、何としても外國債を募集しなければ、一時の急を凌ぐを得ない事情があり、外國の資本家亦斯る事情を洞察して居ること、第二震火災に依つて、我國の蒙つた損害が百億圓の多きに上ると云ふような誇大なる報道が外國に傳はり、外國人は我國の經濟的實力に疑を懷き、又震火災の打撃を免かれるに就て、餘程困難であると見て居ること、第三、震災以前から我國の國情に兎角安定を缺くものがあり、震災後に於ては、更に意外の政變が起つたり、新に成立した内閣も基礎の鞏固を得ず、直に倒壞運動の惹起されるに至るが如きは、我國の政界に對して、外國人をして自ら不安の念を有するに至らしめたこと、第四、我國の現に倫敦なり、紐育なりに發行されて居る外債の市價の頗る低廉であることは何れも外國に於て我國財政の信用を低下する所以と爲るのである。第一の事情は必ずしも意外の天災の突發した爲めのみではなく、我國年來の財政策に誤まりのあつた結果であり、第二は震災當時に於ける財政當局者の不用意の齎した失策であり、第三は國民全體の責任として考へ可き所である。而して第四の事情は我國財政の信用を卜する標準とも爲るものであるが、何故に今日斯る事情に接するのであらうか。蓋し我國の在外公債は震災前から市價不振の趨きを免かれなかつたが震災後に於ては、其勢更に甚だしく、倫敦に

於て、四分利公債の市價は六十九磅であつて、恰も西班牙の同利率公債の市價六十二、三磅であるのと、略ぼ同等であり、紐育に於ては、四分利公債の市價は倫敦より聊か高くして、七十八九弗の間に居るが、一方に同國四分五厘利付の自由公債が殆ど額面と同等の價格に居ることを考へたならば、我國財政的信用の低下した事實は明に之を看取するを得るであらう。而して數年前に於ては、如何に歐洲戰爭が我國に經濟的利益を與へた爲とは云いながら、在外正貨も對外債權も共に豐富であつて、外國に資金を融通する餘裕を備へた國が斯くまでの窮境に陷るに至つたことを考へると、其一部の原因である天災に對して、恐怖の念を催ほすと共に、他の一部の原因である經濟政策上の失敗に對して、之を遺憾とするの嘆を禁ずるを得ないのである。

右に擧げた如く、我國公債の市價は西班牙の同利率公債に比較して、聊か低い、而して西班牙は歐洲諸國を通じて、財政の整理を缺いて居る國であつて、連年經費は收入に超過し、公債借入金の調達に依つて、辛うじて收支の均衡を維持しつゝあるの狀態であり、斯くて公債は年と共に增加し、其現在高の如き千九百十四年一月と千九百二十二年四月とを比較して、九十七億九千三百四十八萬ペセタから、百十九億六千三百八萬ペセタに上つた次第である。日本の財政的信用が斯る國と同等以下に爲つたとすれば、即ち日本を以つて、財政上の意味に於て、三等國に低下したと云ふ評論の現はれるのも亦必ずしも不思議とす可き次第でなく、又斯る批評に接しても、我國近年の財政策が濫妄なるものであつて、公債政策を濫用して、一時を彌縫することと、恰も西班牙と異ならざるものであつたとしたならば、西班牙同等の財政的信用に爲つたからと云つて、今更ら悔むに當らないであらう。而して世人は其原因を以つて、震災火難に歸するであらうが、私の考ふる所を以つてすれば、我國財政の紛雜は震災以前から早く存して居つた。即ち原內閣や、高橋內閣に依つて、濫行された積極主義に基く經濟財政策こそ、今日の財政的信用低下を惹起す有力なる原因であつて、震災火難の如きは、聊か大勢を促進し、又は大勢の赴く所を深くしたものに過ぎないのである。而して現在我國の有する財政的信用の程度にして、上記の如くであるとしたならば、當面の問題と爲つて居る外國債募集の條件が我國に有利のものでないことも、亦敢て異とするに足らない。即ち過日來外國電報の報道する所に據れば、紐育に於て新に發行される公債の利子は六分であつて、而して擔保として專賣事業の純益が提供されるであらうとあつた。固より確定の條件を得るには、彼我の間に交渉の行はれる

餘地の存するのは勿論であつて、交渉の結果、或は我國に取つて有利なる條件が成立するに至るかも知れないが、豫備交渉の間に於ても、六分利付であるとか、擔保物の提供であるとか云ふような第三等國以下の募債に於て、特徴とす可き事實の傳へられることは、私の我國の爲めに遺憾とせざるを得ざる所である

（六）

斯く我國の財政的信用が低下して、所謂第三等國の列に入つた場合に之を放任して置くことは、體面實利の双方から考へて共に之を不可なりとしなければならない。復舊復興兩事業に必要なる財源を調達するに當り、外國債の募集に不利の條件を忍ぶことを強いられるが如き、損害の寧ろ小なるものである。財政的信用の低下にして單に天災突發に基くものでなく、我國積年の財政策に於ける誤謬の然らしめた結果であり、財政不始末の反映であるとしたならば、吾人は事の根本に遡り、震災善後の財政と云はず、平時の財政と云はず、我國財政の全般に亘る整理革新を果し、所謂三等國に墮ちたと稱される我國財政の信用程度を高めて、以前二等國の列に居つたとしたならば、其所まで地位を復せしめ、更に進んで一等國の班に就かしめなければならない。而して此目的を達するに就て、如何なる政策を必要とするであらうか。是れは範圍の廣汎なる問題であつて、一論文の能くする所でないが、試に左に其要目を擧げて、以つて本論を終りたいと思ふ。

第一、財政の規模を縮小し、經費を節約すること。此の一條は震災前から、私の夙に主張した所であつて、單に國民の負擔を輕減緩和するのみならず、物價を調節し、經濟社會に浮華輕佻の風なからしめるの點から考へて、特に之を必要とするのである。然も多年馴致された經費濫増の風は容易に今日に至つて、改まらず、現に大正十三年度豫算の如き、震災の後を承けて、經費節約に勉めたと稱されるに拘はらず、經費は十二億九千八百八十三萬圓の多きに上り、前年度に比較して、僅に七千七百三十二萬圓の減額を告げたに止まる。而して一方に歳入の減少額一億四千百六十四萬圓に上る計算であつては、經費の節約に依つて、收入の剩餘を收め、斯くて復興復舊の財源を調達し、公債募集の所要額を削減するが如き、望む可からざる所であり公債募集の今後數年間に亘つて連續し、其內國に發行されるものは金融市場を壓迫し、其外國に發行されるものは、我國の對外支拂を加重するとしたならば、我國財政的信用の發揚される日の近きに在ることは、到底之を想像するを得ない。即ち私が

財政の緊縮、經費の節約を主張して、已まざる所以である。

第二民間に於ても、共事業に關すると、共私人生活に關するとを問はず、節約を旨とすること。震災直後に於ては、人心自ら緊張して、所謂生活の改善も多少實現されるに至るやの徵候に接したが、喉元過ぐれば、熱さを忘れる比喩の如く、昨今に至つては、人心亦弛緩して、殆ど舊時と異ならざるやに見受けられる。斯の如くして冗費は到る所に支出され、時間は空しく消費され、勞働力は人の奢侈享樂の慾を充す爲めに、使用され、斯くて生産事業に投入せらる可き資本や、勞力が不生産事業に空費される弊著しきに至つたとしたならば、何時に爲つて我國の社會的病弊を絕つに至るであらうか。人心緊張、勤儉力行の事たる、震災後政府當局者の第一に爲す可き所であるのに、今日に至るまで實行に缺ける嫌あるのは、私の遺憾とする所であつて、是れ亦財政的信用の振作を妨げるものとしなければならない。

第三、民間經濟の復興を促進すること。震災以來今日に至るまで、政府が日本興業並に日本勸業の兩銀行を通じて、商工業者に些細の貸付金を爲したことを除いては、民間經濟復興の爲めに、行はれたものあるを知らない。而して市場に於ては、金融の梗塞甚だしく、然も市中諸銀行は自己の安全を謀るに急であつて、此狀態を一新することに勉めない。斯くて復興復舊所事業の進捗と共に、外國物資の輸入の增加することは、勢の顯著なるものである一方に、物資の輸出は經濟復興の遲々たる爲めに、兎角沮害され勝ちであるとすれば、結局輸入超過の莫大なる金額に上ることは、今日より明に之を想像するを得るのである。斯くて常に經濟社會を脅威し、金融市場を壓迫して置きながら、一方に財政的信用の振作を望むが如き、難中の難事としなければならない。今日に爲つては、私は震災火難其ものよりも、震災火難に處して、何等之を救治する經濟政策の確立されざることを虞れるのである。

思ふに以上三策の如き、說き來れば、頗る平凡のものであつて、何等奇とす可き所はないであらう。然も是等を實行するに就ては、内閣其ものに相當の威力あり、信望あることを必要とする。殊に財政の規模を縮小し、經費を節約する點に於て、其然るを見るのである。淸浦内閣の如き、議會解散の後には、實行豫算を編成し、之を規準として大正十三年度の歲計を施行しなければならない地位に居るものであつて、内閣諸員の決心如何に依つては、經費の節約亦難からざる譯であり、續いて目前に現はれ來る財政行政の整理問題に就ても、經綸を施すを得る道理であるが、内閣組織以來世間の反感を招くと共に、威重の極め

て凄き諸員を以つてして、果して能く當面の諸問題を解決し、財政的信用の上進を示すを得るかどうか、私は此點に就いて、深き疑惑を挾まざるを得ない。清浦内閣たるもの果して能く此點に努力して、世間の輿望を繋ぐや如何、姑く他日の問題として、留保しようと思ふ。

附記

二月十二日大藏省は新に成立した外債の條件を發表したが、之に據ると、倫敦發行の分は利率六分、發行價格八十七磅であり、紐育發行の分は利率六分五厘、發行價格九十二弗半であり、利率は何れも七分を上下する勘定に當る。私は曩に本論に於て、我國財政の信用が第三等標準に墮ち、西班牙と同列に爲つたことを指摘して、之を悲んだが、今や事實は正確に私の所言に裏書を與へ、我國の財政的第三等國であることを外債條件に依つて、示すこと、爲つた。或は外債發行高の豫想よりも多かつたことを舉げて、辯護する者があるかも知れないが、發行高の多いのは明年二月乃至七月に至り償還期限の到來する外債の借換に供へるものであつて、殊更に一年乃至一年半以前の今日から、外債を發行して、利子の二重拂を爲す政府の處置は何としても非難す可きものである。若し夫れ無擔保で外債の成立したことは、如何に我國財政の信用衰へた今日と雖も、當然過ぎる程當然の事であつて、何等の誇りとするに足らないのである。

又しても政府の宗教商利用

——笑ふべき思想善導運動——

高島米峰

帝國政府の役人が、佛を賣り神を鬻ぐ職業的宗教家を招致して、これをその政策に利用せむと試みたること、實に、床次竹二

氏が內務次官たりし時に始まる。而して、歷代の政府、その比較部的長命なりしもの、皆これを行はざりしはなかりきと雖も、その功果の擧がらざりしこと、正に判で押したやうなり。それにも懲りずして、比較的短命なるべしと豫想せらるゝ淸浦內閣が、又しても此等宗教商の徒輩を招いて、事もあらうに、思想善導に關して、智慧を借らむとすといふ、その馬鹿々々しさ、呆れてものが言へざるなり。

宗教本來の面目よりこれを言へば、全然政治上の保護干涉の外に超然たるべく、斷じて、何々の國家に隸屬し、何々の政府に頤使せらるゝことを許さゞるなり。たゞ、爲政家が、自己の信ずる教法を以て政治の根本基調となし、國民の精神生活を、その教法に依つて統一せむとすること、聖德太子の佛教に於けるが如きは、流石に、哲人政治家の態度として、最も理想的なるを見る。しかも、現代の如く、國憲既に國民に信教の自由を與へたる以上、爲政家の信ずる教法を、直に國民に信ぜしめむとすることの、不可能なるの勿論なるが如く、宗教を政策の犧性とすることの不合理も、亦勿論なり。宗教の天地は廣し、そは人類をその對象とするが故なり。政治の世界は狹し、そは國民をその對象とするが故なり。されど、國民とは、特殊の約束によりて結合せる或る人類にして、人類とは、各種の國民を網羅せる總名なり。從つて、國民的なる政治は、總べての人類に共通なるを得ざれども人類的なる宗教は、總べての國民に共通なるべき可能性を有す。これを以て、政治は、宗教の上に立脚することを得べきも、宗教は、特に或る國家に隸屬し、或る政府に頤使せられ、或る政策の犧牲となるべきものにあらざるなり。然るに、歷代の政府、兎もすれば、宗教を自己の政策に利用せむとするは、全く、宗教の根本義に盲目なるがためならずむばあらざるなり。

思想の善導は、思想の惡導に勝る萬々なりと雖も、善導にせよ、惡導にせよ、人心の根柢に發する思想を、孰れかに導かむとすること、饑えて飯を食ふが如く、渴して水を飮むが如く、しかく簡單に目的を達し、容易に功果を奏し得べきにあらざること、もとより論なし。極論すれば、導くなどゝいふ、微溫的なる態度を以て思想に對すること、既に甚だしく誤れり。思想は造るべきものなり、養ふべきものなり。これを造るは教育に依り、これを養ふは宗教に依る。國家は、教育上の施設に於て寸毫の遺憾なきを期し、健全なる思想の創造に努むべく、宗教は、造られたる思想に生命を附與して、その生長發達に盡すべし。教育は國家の事業にして、宗教は宗教自體の天職なり。國家が、宗教に命令して、その職務を遂行せしめむとするは僭越

にして、宗教が、國家の命令あるにあらざれば、その職に忠ならずといふが如きは墮落なり。

假りに、思想善導といふことを、無條件にて承認するとして政府が、依然として、教育上の施設に全力を傾倒せず、小學校に於ては、二部教授を餘儀なくせしめ、中等教育に於ては、男女共に入學難に泣かしめ、高等學校の如き、實に、志望者の十分の一をも收容し得ざる狀態に放置し、大學さへ、理工科の如き年々入學し得ざるものゝ數を增しつゝありといふ。變態思想の多くは、實にこの間に發生する。これをこれ思はず、職業的宗教家を招致して、飯の一度も食べさせさへすれば、以て思想の善導、期して待つべしとなすが如きは、餘りに自ら省みざるの甚しきものならずや。又、謂はゆる宗教家と稱する連中も政府のお役人に御馳走になるまでは、當然の天職をさへ、倘、擲つてこれを顧みずといふが如きは、自ら卑しむる亦甚しからずや。又、假りに宗教家を招致することを是なりとして、さて如何なる人物を集めむとするか、これを佛教界のみにて言へば、お役人のすることとなるが故に、必ず、お役所と多少の關係連絡ある、各宗管長といふが如きものを集むることゝなるべし。昔の高僧智識は、兎も角も、その時代の思想界に於ける、最高權威を以て、自らも任じ人も許すに吝ならざるものなりき。今の各宗管長は、全然、現代の思想界と沒交涉なるが多く、これを稱して高僧智識と言はむよりは、寧ろ低僧無識と呼ぶの相應しきを見るなり。思想界と沒交涉なる人々をして、思想を善導せしめむとし、若しは、思想善導の方策を建てしめむとす、蓋し、難中の至難なるものにして、これ予が、馬鹿々々しいと言ひ、呆れて物が言へずと言ふ所以なり。

各宗聯合會といふものあり、或は、この會の幹部をも招かむとするにや。こゝに面白きは、政府のお役人が、坊さん達を集めて、思想善導を爲さしめむとする、時も時、坊さん達の代表機關たる、この各宗聯合會の幹部の坊さん達が、お役人や貴族や軍人など、謂はゆる俗人階級の人々を御招待申上げて、教化宣揚の事を哀訴歎願に及びし結果、近く、教化宣揚會といふものがそれ等俗人の手に依つて誕生すべしといふことなり。彼と此と、相對比來つて、何等の皮肉ぞや。僧は俗より出でゝ俗よりも俗なりといふ、しかも、その生命は教化ならざるべからず。今、その教化事業を、純俗人の手によりて宣揚せしめむとするは、正にこれ、僧侶の生命を、俗人に附與せむとするものなりと言はざるべからず。由來、僧侶階級の俗權崇拜は、教主崇拜よりも甚しく、何かと言へば、官僚の前に膝を屈し、權勢の前に頭を叩く。これを以て、度すべきものを度し得ず、救ふべき

ものを教へ得ざるのみならず、遂に却つて、度すべきものに度せられ、教ふべきものに教へられざるを得ざるに至り、而して今や、正に、その唯一生命なりと稱しつゝある、教化の事をさへ投げ出して、擧げてこれを俗人の手に委ねざるを得ざるに至れるなり。惟ふに、聖德太子を教主とする日本の佛教は、當然俗人佛教ならざるべからず、然るに、過去千有餘年の間、誤つて山林の徒の拈弄に委ねたりしがために、恰も、支那佛教、朝鮮佛教の出店の如き觀を爲して今日に至れるなり。然るに、今や、彼等僧侶及び既成教團の行詰りは、早晩、本然の立場に還歸すべく、餘儀なくせしめられつゝあるなり。自己の生命たる教化事業をさへ、俗人の力に委ねんとする佛教僧侶に、何の思想善導ぞや、寧ろ、これを求むるものゝ愚を笑ふべきのみ。

歷代の政府が招致したるは、佛教神道の各派管長、及び基督教會の代表者にとゞまりしが、淸浦內閣は、更に、教化團體の代表者をも加へたり。そこに、思想善導の効果を、一層確實に收めむとするの、用意を見るべきが如しと雖も、この教化團體と稱するものも、その有力なるものを除けば、俗權の崇拜か補助金の下附か、要は、名と利とに饑えて、嗟來の食にも尾を振りかねまじき官僚の走狗、御用說教を、光榮と勤め來る特式の教化階級、思想善導どころか、却つて、國民の反感を招くなきやを顧慮せざるべからざる底のものにして、彼等こそ、まづ思想の善導を受けむことを要するなり。淸浦內閣が、此くの如きものに依つて、自己の政策を擁護せしめむと欲するも、その餘りに微力なるを如何せむ。縱令、又、名を思想の善導に借りて、本年の總選擧に、直接間接、御用を勤めしめむとするにありとするも、その餘りに、活ける社會と沒交涉なるを如何せむ。宗教界に於ける既成教團の硬化せるが如く、此種教化團體も、亦甚だしく硬化し、幾度これと會同し、幾度これと協商するも、眞理を欺く因襲的な說教、若くは、國民の近代思想を大勢せむとする御都合主義の論理以外、そこに新しき、何ものをも生じ來らざるべきなり。

政友會內閣時代の床次內相の民力涵養、加藤內閣時代の水野內相の消費節約山本內閣時代の後藤內相の帝都復興而して淸浦內閣に至りて、內務は精神作興、文部は思想善導、各々その標語を異にすと雖も、その目的の達成方法は帝都復興の大風呂敷なりしを除外し、他は殆どその型を同じうせり。たゞ、床次氏の民力涵養は、床次氏自ら陣頭に立ちて、各國に號令し、數人の宣傳者を驅使して、極力この普及徹底を計りしがため、若干その功果を擧げ得たりと見るべきも、その他に在つては、徒にその標語を發表せりといふにとゞまり內閣の交迭が後の切れ目にして、後

任者に繼承の義務なく、さりとて、前任者の足跡を歩むも妙ならずとして、何か新しきことを計畫し、計畫熟して發表し、いよ〳〵實行に移る頃には内閣交迭し如何なる名案も、大抵は、營養不良にして夭折するを免れざりしなり。民力涵養と言ひ、消費節約と言ひ、精神作興と言ひ、思想善導と言ひ、凡そ此の如き、悪いことにあらざることは、内閣の交迭と共に消滅せしむるといふが如き、短命なるものたらしめず、相當の成績を擧ぐるまで、これを持續せしめざるべからず。昨は民力涵養、今は消費節約、明は精神作興と、種々なる思想が、恰も走馬燈の如く、眼まぐるしく去來すること、それ自身が既に、國民の思想を動搖せしめて、安住の他を見出すこと能はざらしむ。從つて、何事を宣傳するも、神經既に痲痺して、毫も感激なく、感激なきが故に功果なし。功果なきことに、人と時と金とを費す、愚これより大なるはなけむ。然らば、如何せば功果を擧げ得べきか、予亦、多少の見るところなきにあらざれども、本誌の四月號は、その方法に關して、廣く大方識者の高見を輯むべしといふ。斯して、これに待たむかな。

これを要するに、お役人が宗教を利用して、自己の政策の犧性に供せむとすること、抑も誤りなり。殊に、自ら宗教を信ぜざるのみならず、時に或は、宗教無用論などを、平氣で唱へ兼ねまじき連中が、何か宣傳の必要ある時にのみ、宗教の力を借らむとするは、恰も、不攝生漢が、病を得たる時にのみ、醫藥の前に叩頭するが如く、甚だ醜態なりとす。又、沒分曉なる彼等お役人は、各宗管長や、これに准ずる既成教團の人々を集めて、以て、宗教家を籠絡し得たりと思はゞ、笑ふべき錯誤なり。彼等は、眞の宗教家にあらずして、坊主家と稱すべきものなり。まづ、坊主家と宗教家とを峻別せよ。坊主家は、大臣の招致を光榮とし一食の饗應に感激するを知れども、人を教ふる力もなく、人を導く徳もなし。これに反して、宗教家は既成教團の外に在りて、自己の所信に向つて、最も自由に最も忠實に精進し、來り求むるものあれば、これを教へ、これを導くに吝ならざれども、お役人に利用せらるべく　實は餘りに聰明達識なり。(大正十三年紀元節の夜)

世界戰爭の產んだ二大人物の死

リェーニンの死

片上伸

一

リェーニンは死んだ。しかし、一リェーニンの死は、リェーニンその人にとつては勿論、ロシヤ革命にとつても、深く憂ふべきことではあるまい。

リェーニンは生前いろいろの人々に向つて、よくかういふ意味のことを言つてゐる——吾々は倒れるかも知れない、ロシヤ國民の無智のために、或ひは外國の勢力のために。しかし、ロシヤ革命の思想は決して滅びない、そして世界を征服するであらう。吾々の革命の精神思想は、必ず世界の未來を支配する。たとひロシヤが海底に沒してしまふやうなことがあつても、たとひロシヤが全く存在しなくなるやうなことがあつても、ロシヤ革命の精神は、自餘の世界にひろがつて行く、たとひロシヤ革命が失敗するやうなことがあつても、その失敗はたゞ一時的のものに過ぎない。ロシヤ革命の思想は、二三の人の力で左右し得る以上の力に發してゐるからである。ロシヤ革命は經濟上のコントロールである。生產者の革命である。このロシヤ革命の精神は、二三の人の力でこれを作つたり抑へたりすることの出來るものではない……。

この信念によれば、ロシヤ革命の表面上の成敗の如きは、大した重要な問題ではなくなる。隨つて、一リェーニンの生死の如きは尙更問題ではなくなる。一リェーニンの生死を超え、ロシヤ

革命の成敗を越えて、尙且つ生きのびて行くべき力がある。それはロシヤ革命の思想である。リェーニンを殺すことによつて、リェーニンの指導する革命を――或ひは革命の精神を殺し得るものの如くに考へたものは、一面から言へば、リェーニンをハルシネイシヨンの中に見たのである。また別の一面から言へば、革命を一英雄の覇業と見たのである。

リェーニンの力は、少なくとも革命の指導者としてのリェーニンの力は、ロシヤ革命の成敗を越え、一リェーニンの生死を越えて、尙且つ生きのびて行くべき力としての、ロシヤ革命の思想に對する信念の中に在る。

この信念は、未來の人類の幸福を創造すべき原理の實現のために、己れを犧牲にするといふ心持ちではない。自分自身些かもこれに參與することの出來ないやうな未來の人類の幸福――それを遠くの彼方に置いて、そこに達し得ざるものの犧牲に甘んずるといふやうな心持ちではない。ロシヤに於ける千九百五六年の革命の失敗を中心として起つて來た反革命的な心持ち、少なくとも革命に對して冷淡無頓着な心持ち、――それ等はつまり遠くの理想のために一身を犧牲にすることの無意味の感じから來てゐたのである。自分自身些かもこれに參與することの出來ないやうな未來の人類の幸福、――それを遠くの彼方に置いて、そこに達し得ざるものの犧牲に甘んずることを無意味と感ずるところから、あの革命に對する無頓着の心持ちは生じたのである。しかし、リェーニンの信念は、さういふ客觀的な理想への犧牲に根據を置く心持ちとは全く別である。リェーニンの信念は、自己の一身の生死を越え、ロシヤ革命の成敗をさへも越えて、尙且つ生きのびて行くべき思想によつて、自から現に生き、自から現に行ひつゝあるといふ事實のうちに在る。自己の現在の生活の一切が、その生きる力の强く逞ましき思想に信順しそれとともに呼吸してゐるといふ事實――その思想が自己の主觀として內在し、その主觀の力が自己の生活を現に動かしつゝあるといふ事實、――そこに彼の信念が在る。彼に於いては、一切を越えて生きのびるべき力ある思想が、主觀內容を充たしてゐたのである。而してまた、その充實せる主觀が、彼の生活を現實的に支配してゐたのである。

充實せる主觀の力による現實生活の創造、これがリェーニンの生涯であつた。而して、彼の主觀內容としてのロシヤ革命の思想は、彼の信念によれば、ロシヤが海底に沒するとがあつても不滅である。この不滅の思想にとつて、一リェーニンの生死の如きは、もとより深く憂ふべきところではあり得ないわけである。

2

リューニンの顔には、多分の純ロシヤ的なもの、從つてまた東方的なものが見える。リューニンをかつて知つてゐたロシヤ人の傳へるところによると、いかにもふてぶてしい程に落ちついてゆつくりしてゐて、危險が眼の前に迫つてゐても平氣でゐるやうな底の知れない程のやりツぱなしなところと、敏慧で滿鋭で、一旦ねらつた獲物は決して外さないやうな直覺的なすばしこさとが、不思議にあの一人格のうちに摂り入れられてゐて、その二面のどちらから見ても、ロシヤの生へぬきの農民らしい力が感ぜられたといふ。

およそロシヤで、西ヨーロッパ的なものに對して、ロシヤ的東方的といはれる場合には、それは大抵どこかに百姓くさいところのあることを意味する。またそれは、大抵の場合に於いて、相對的關係的に程よく布置せられてゐないことを意味する。ものに然るべき限度がなく、程のよい境界樣式がなく、一定共通の尺度を用ひることを知らぬかに見えることを意味する。それは一と口に言へばマクシマリストであることとである

ロシヤに於けるマクシマリスト風な思想の著しい表現は、たとへば、十九世紀半ば前後からのスラヰャノフェーリストヲ（スラヴを愛する主義）の思想である。西ヨーロッパの文明は、理智の支配強制の支配の間から生れたものであつて、生活の分裂爭鬪に終局すべき運命を有する。これに代つて、世界の文明に愛の結合の原理による精神的統一を持ち來たすものは、即ちスラヴの代表者としてのロシヤである——これがスラヰャノフェーリストヲの思想の最も重要な中心點である。スラヴの代表者としてのロシヤが、世界の新文明の創造者であり、世界の人類の救ひ主であるといふやうな考へかたは、その根底にメシヤの神秘的な思想が横はつてゐる。しかしながら、農民を社會生活の基本とすること、農民とインテェリゲンツィヤとの分裂を非とすること、これ等の點に於いては、その解釋こそは相違してゐるが、この思想傾向の據りどころは、全く見當ちがひとは言へないところがある。とにかく、この思想は、その抱負の雄大な點で、いかにもロシヤくさい。「ありふれた尺度では計られない」やうな、「たゞ信ずるほかはない」やうなところを有つてゐる。

リューニンの思想と、スラヰャノフェーリストヲの思想とは、全く別である。しかし、その抱負の雄大なところ、自己の主觀内容の力が世界を動かし得るとする信念の強さ、世間並みの「ありふれた尺度では計られない」ところ、これ等の形の上に於いては、いづれもロシヤ的である。たゞスラヰャノフェーリストヲ

のマクシマリズムの如きは、それだけの範圍では、さまで有害だとも考へられないで、ロシヤ人の國粹主義の表現として見られるに過ぎないかも知れないが、リェーニンのマクシマリズムに至つては、過去は勿論、現在及び近き未來に程よく生きようとする人々にとつて、あまりに「ありふれた尺度では計られない」ものである。あまりに相對的關係的に程よく布置せられてゐないものの考へかたである。あまりにものに然るべき限度がなく、程のよい境界樣式がなく、一定共通の尺度を用ひることを知らぬかに見えるものである。現在及び近い未來に程よく生きようとする人々にとつて、あまりにマクシマリストであり過ぎる。

ロシヤ的東方的といふことが、方圖を知らない、圖拔けな、マクシマリズムといふこととして考へられるなら、それはリェーニンの思想に於いてばかりでなく、トルストイにもそれがある。現在及び未來に、程を守つて、然るべき限度の中で、程のよい境界樣式の中で生きようとする人々にとつて、トルストイもリェーニンも、たしかに一つの脅威であり得た。ある人は、トルストイを、花園を無雜作に無殘に踏みあらす巨象にたとへたことがある。しかしながら、トルストイは、自からの惱みの中から叫ぶ豫言者であつた。リェーニンは、ふてぶてしいほどに落ちついてゐて、危險が眼の前に迫つてゐても平氣でゐるやうな底の知れない程の大膽と、一旦ねらつた獲物は決してはづさないやうな直覺的な敏捷とを兼ね有する實行家であつた。どちらも花園を踏みあらした巨象ではあるが、トルストイは自から苦惱を以て花園の中を荒れ狂ひ、リェーニンは平然として自己の往かざるべからざるところへ進んで往つたやうな形がある。

3

マクシマリズムは、心の眞實が要求する當然の形である。およそ心の眞實を實現せうとするかぎり、マクシマリズムに往かずして、中途半端に踏み止まることは、いかなる場合でも不可能である。そこにはたゞ最上最高の眞實の實現に對する熱情があるばかりである。そこには成功を求める心理は働かない。それだから、布置整然たる花壇を巨象の踏みあらすに任せるのである。しかし、一とたびは、少なくとも一たびは、最上最高の眞實の實現に對する熱情の求めるに任せて、徒らに絶頂の一點を志すことなくして、果たして内なる眞實が生き得ようか。内なる眞實の生きようとする力が、強ければ強いほど、人は最上最高の眞實の實現に對する熱情を抑塞することが出來なくなる。一切の障碍に拘らず生き拔けようとするとき、内なる眞實は、現實の批評に於いて、論理を白熱させる。智力的熱情が身

內に橫溢する。トルストイも論理的であつたといはれ、リェーニンも「論理の人」であるといはれる。それはどちらも、身內に充實する智力的熱情の火花が觸發したからである。

トルストイは、そのマクシマリズムのために、甚だ多く惱み苦しんだ。彼の內なる眞實の、生き拔けようとする力は强烈であつた。彼は最上最高の眞實の實現に對する熱情を、抑塞することが人並外れて出來にくかつた。而かも、彼の周圍には、彼をして、眞實實現の熱情の求めるに任せて、驀らに絶頂の一點に赴かしめることを阻止する障碍が人並外れて多かつた。トルストイの苦惱は、この多くの障碍を、鋭敏に感受するとともに內なる要求を更に痛切に感じたところに生じた。藝術家としてのトルストイの感覺、その精神的傾向、乃至その境遇、これ等は相俟つて、トルストイを社會的革命に往かしめず、內心の完成の方へと導き去つた所以のものである。

リェーニンのマクシマリズムは、はるかにはるかにはるかに實際的である。リェーニンは、トルストイに比べて、はるかに多く待つことを知つてゐた。或ひは寧ろ、いかなる障碍にも拘らず、現在の刻々に、即ち自己の一身の生活に於いても而してまた、遠き未來への連續の中に、即ち自己の一身と共存し連接して行くであらうところの無數の人間の心の中に於いても、自己の主觀內容を成すところの思想が充實してをり、また充實して行くといふことを、堅く信じてゐたのである。

彼はしばしばその道を迂回した。或ひは後戻りさへした。彼は花園に踏み入るためには驀進した。しかし一旦その花園へ踏み入つて後は、いかなる障碍にも拘らず盲目的に踏みあらさうとはしなかつた。彼はおのおのの現實を明確に受け入れて、それに從つて自己の步むべき道を見出さうとした。結局、現在の迂回や後戻りは、自己の主觀を實現するための自然の曲折に過ぎないことを信じて疑はなかつたからである。あらゆる殺那に於いて自己の主觀の充實を信じ得たから、現實の曲折を包容して伸び行く力を內に感じつゝ生きてゐたから、——つまり自己の主觀內容はロシヤが海底に沒しても滅びるものではないと信じてゐたから、彼は落ちついて現實を見ることが出來た。現實の曲折を跳び越えて行かうとあせらなかつた。彼は十分な意味で確實なリヤリストであつた。

彼は充實せる主觀の力で、彼の信念の力で、一切の現實を明らかに觀ることが出來たし、またその現實の曲折がどれほど大きくても、自己の主觀の內容は滅びてしまはないと信じてゐたから、一切の非難や攻擊に對しても平氣でゐることが出來た。彼に對する非難や攻擊は、彼の敵から加へられたばかりでなく、彼

の周圍の僚友からも、しばしば加へられた。彼の周圍の僚友との間に、彼はしばしば現實に對する解釋の一致せざる場合を見出した。しかし、彼の充實せる主觀に映じた現實は明確であつた。彼の白熱せる論理は透徹してゐた。少なくとも彼はおのおのの現實のうちに、論理を見出だすだけのゆとりを持つてゐた。そのゆとりは充實せる主觀の力から自然に生じたものである。方圖のないマクシマリズムの氣魄と、正確精密なリヤリズムの精神とが、一致渾融するときに、最もよき型のロシヤの農民が生れる。神の如くに愚かで、蛇の如くにさかしいロシヤの農民が生れる。人は必がリェーニンにこのロシヤ農民の面影を見出だすであらう。

4

キリストの教へが、精神生活の解放を意味するかぎりに於いて第一の革命であつたとして、ロシヤの革命は、第二の世界的革命であるとする說がある。物質生活の解放が行はれるに至つて、革命がはじめて全くなる。精神生活の解放だけがあつて、物質生活の解放のないところでは、折角解放せられた精神生活もまた、やがて解放せられざると同樣の狀態に陷る。

十二人の赤衞兵は、步武堂々として行く。そのうしろからは餓えた犬がついて行く、その前には、血にまみれた旗をかゝげて、白薔薇の花冠を着け、吹雪の粉をきら／＼と身に浴びて、嵐の中を、しづかな足どりで、姿こそは吹雪のために見えないながらに、銃彈にも身を傷けられることなく、キリストが往く。イエス・キリストが往く。――これはブローックの詩『十二』の最後の一節である。ロシヤは海底に沒することがあつても、ロシヤの革命は倒れることがあつても、ロシヤ革命の思想は滅びない。いつかは世界を救ふ。而して今の自分はこの思想を主觀の內容として、刻々に生きつゝある。――これがリェーニンの信念であつた。リェーニン自からの信念によれば、ロシヤが海底に沈むとも滅びないものがある。而してそれはリェーニンの內に生きつゝある。また萬人の心の內に生きつゝある。ロシヤが海底に沈むとも滅びないものは、もとより一リェーニンの死によつて滅ぶやうなことはあるまい。

『この人の地上に生きてゐるかぎり、自分はこの地上に於いてみなし兒ではない。』――これはトルストイの生前、ゴーリキーのトルストイに就いて言つた言葉である。しかし、死せるリェーニンに就いては、リェーニン自からの信念に從へば、『この人の地上に生きてゐたといふことのあるかぎり、自分はこの地上に於いてみなし兒ではあり得ない。』と言はれなければならない。

ウイルソンの死

内ヶ崎作三郎

世界大戦亂は三人の世界的政治家を産み出した。ロイド・ジョーヂ、クレマンソー及びウイルソンである。戦争の正に終らんとする頃、更に一人の卓越せる政治家を出現せしめた。レニンその人である。レニンは一月の廿一日に最後の息を引取り、程なくウイルソンが長き病の爲めに此世を去るに至つた。世界的の大波動を起したる二大人物が前後して此活舞臺より退場したことは、甚だ興味ある對照である。レニンは何處までもロシヤ流の本色を發揮し、ウイルソンは飽くまで米國流で押し切つたのである。二人の比較研究は極めて興味ある問題でなければならない。私は取急いで數冊の參考書を集め、それによつて得たる材料を土臺として、新大陸の大政治家の在りし面影を描き出して見たいと思ふ。

何時(いつ)ぞや、亞米利加の或る中學(ハイスクール)の生徒に對して「若しカーライルが米國の人物に就いて英雄崇拜論を書いたとしたならば、彼は誰々を材料として選拔したであらうか。」といふ問が提出せられた。此問に對して或る青年は「これはベンヂャミン・フランクリン、ジョーヂ・ワシントン、トーマス・ヂェファーソン、アブラハム・リンコルン、ユーリスュス・グラント、グローワー・クレーブランド、セオドル・ルーズベルト及びウッドロー・ウイルソンである。」といふたさうである。この中學生の選擇は大體に於て正しい。これ等の政治家は何れも米國に於て長く記憶せらるべき英雄豪傑であるが、ウイルソンは特別なる事情の下に最も顯著なる事業に成功した大政治家である。

彼は一八五六年ヴァーヂニア州に生れた。先祖は蘇格蘭人で、愛蘭のアルスターに移住して、更に米國に渡來したる熱心なる長老(プレスビテリヤン)教會に屬する人々であつた。彼の父は熱心にして人望ある牧師であつた。彼の母は淑夫人であつた。彼は平和

なる家庭に人となり、ヴァージニア大學を卒業して最初法律事務に從事した。併し辯護士の事業は餘りに職業的であることが氣に入らないので、遂に學者として立つことになつた。最初彼はブリンモール大學の助教授となり、後ウエスレアン大學の經濟學の教授となつた。一八九〇年彼はプリンストン大學の法理學及び政治學の教授となり、一九〇二年より十一年まで同大學の總長を勤めた。

學生としてのウイルソンは勤勉にして頭腦明晰、沈着にして深く物事を考察するの特色を以て認められた。併し彼は普通の學生と同じく、運動にも熱心で、殊にベースボールが好きであつた。彼は二十三歳の年に「議會政治（コングレッショナル・ガヴァーメント）」といふ論文を書いた。之は米國憲法史の一大發見であると稱せらる。プリンストン大學の總長として、彼は多大なる功績を殘した。彼は英國のオックスフォードやケンブリッヂ大學の制度に倣つて一種の訓育的制度を定めた。この爲めに彼は六十五人の助教授を増員して、各教授、助教授、講師等は、各二名若くは五名の學生と親密なる友情的關係を持たしめた。斯くして學生と教授が接近して、人格的知識的の感化が加はることが出來るやうになつた。教室の講義以外に、この人格的接觸は學生の知的慾望や人格向上心を著しく刺戟するに至つた。爾來今日に至るまでこの制度はプリンストン大學の一特色となつて居る。

又彼は寄宿舍の制度を改善して、學生生活に一種の清新味を導き入れた。プリンストン大學の大學院は米國諸大學中の一異彩である。この建物を建設する時、ウイルソンは出來るだけ質素にして而も經濟的に且つ能率を發揮し得るものを希望したのである。されども理事會は極めて贅澤なるものを計畫したのである。ウイルソンは民主主義の權化であつた。大學の總長としては往々にして寡頭政治の壓迫を感じた。彼は長く大學總長の椅子に留るには、餘りに民主的精神が旺盛であつた。一九一〇年の十一月、彼は民主黨（デモクラッツ）ニユージヤーシー州の知事に選ばれた。行くとして可ならざるなきウイルソンは、此所に於ても成功した。彼は幾多の改革を試みて遽かに名知事の評判を博した。而して一九一二年に於て彼は大統領の候補者に指名され、分裂したる共和黨と戰つて奇勝を博し、翌年三月白堊館の主人となつた。

著名なる米國大統領の前身を調ぶると甚だ興味がある。ワシントンは大地主であつた。リンコルンは辯護士であつた。グラントは軍人であつた。然るにウイルソンは法律及び政治の專門學

者である。又第一流の政治史家であつた。彼の最も得意とする所は法理論及び政治學である。又米國民の歴史については深き造詣を有した。彼は政治學者として大統領に關する一種の理想と確信を抱いてゐた。大統領は一政黨の首領であつてはならない。勿論一政黨の首領が大統領に選ばれるのであるが、併し一度び選ばるれば大統領は黨派の利害を超越して國民の指導者を以て任じなければならない。ウイルソンの意見に從へば、過去の米國大統領中この理想に近きものはクレーブランドのみである。併し彼はクレーブランドよりも一歩進んで、彼の理想を實現する大統領が現はれなければならないと考へてゐた。然るに不思議なる運命の手は、彼を導いて大統領の椅子に腰かけさしたのである。理想として研究したる學究が、これを實現する位置に据えられたことは甚だ面白い。かゝることは世界の政治史にも甚だ稀れである。クレマンソーは學校の教員をしたことがあつたが學者といふ柄ではない。ロイド・ヂョーヂは小學校の教育を受けたのみで殆んど獨學自修の人である。レニンも學者の一面があつたかも知れないが、ウイルソンの如く嚴重なる意味に於ける學者とはいはれまい。此事自身が甚だ興味ある問題である。大體に於て米國民の大統領選擧の判斷は正當であるやうに思はれる。南北戰爭の前後にアブラハム・リンコルンが現はれ、世界戰亂の前後にウツドロー・ウイルソンが米國最高の權威と仰がれたることは單に不思議なる運命といふべきであらうか。或は宗教的にこれを解釋して、人類を指導する不思議なる見えざる力が働いてゐて、諸民族の危急存亡の場合に相當なる人物が出現するものとも解釋されない譯でもない。この學者的政治家が最も紛糾したる世界の政局の中に捲込るゝに至つたことも不思議なる又神秘なる命數といはなければならない。ウイルソンは世界戰亂の爲めに非常に有名となつたのであるが、彼は大統領として内政の刷新には着々として貢獻してゐた。彼は年來主張したる民主黨の政策を實行することに熱中した。關稅の定限、中央政府の財源たるべき所得稅の制定、貨幣の改鑄等その主なるものであつた。殊にメキシコ内に投資せられたる米國の資本が、莫大なりといふ理由を以て全國の内政に干渉して一種の帝國主義を行はんとする輿論に反對して、超然主義をとりたるが如き、流行に理想政治家としての彼の新面目を發揮した所であつた。

一九一四年遂に世界的大戰亂の突發となつた。當時米國民の態度は極めて不統一のものであつた。併乍ら之を四種類に分類することが出來た。第一は英語國民として又母國として、又國

一なる風俗習慣や制度文物を有する爲めに自ら英國最負の人々である。從つてこれらの人々は親英主義者であつた。第二に屬する人々は、少年時代より間違つた歴史を注ぎ込まれて英國を誤解し、侵略的なる非人道的王國であると輕蔑したり、敬遠したがる排英主義を抱いてゐた。第三に屬する人々は、商賣繁昌第一主義の連中で、排英も親英もあつたものでない、儲かりさへすればよろしいといふのである。第四に屬する人々は、即ち米化したる獨逸人である、いふまでもなく親獨主義者である。斯くして米國の輿論は統一を欠いた。併し國民の多數は自ら親英的傾向をとり、聯合軍の味方となりたがつた。殊に獨逸が白耳義の中立を侵したることは國民の大多數をして憤激せしめた。かゝる場合に際してウイルソンは極めて冷靜なる態度をとつた。米國は中立國である。中立中の最も重要なる位置を占めてゐる。歐洲の古き國々は自ら進んで非人道的の大軋轢を始めた。米國は之と沒交渉である。併し米國は一方を援けて一方を抑へてはならない。嚴正中立を確守しなければならない。白耳義政府の代表者が米國の諒解と後援を求むる爲めに渡來した時もウイルソンの態度は極めて落付いたものであつた。彼は心の中では大いに同情したかも知れないが、表面は頗る冷靜なる態度をとつて彼のいふ所に耳を傾けたに過ぎなかつた。此態度に飽足らざる米國人は多かつた。併し幸にルーズベルトがウイルソンと同一意見を抱いた。彼はウイルソンの政敵であつた。而かも破られたる政敵であつた。さりながらルーズベルトに信望を繋ぐ人々は少くはなかつた。これが輿論に對する甚だ有力なる抑へとなつた。又一面から見れば、米國は中立國なるが故に物資を聯合側にも同盟側にも供給することが出來た。黄金の波が大西洋を越えて米國の岸を洗つた。ウイルソンは人類の平和を希望するが故に、道徳的見地より中立論を唱へたのである。彼は傳道師の如き熱心を以て國民に向つてその主義を宣傳した。然るに國民の中には商賣上の政策より彼の道徳的中立論を利用するものもあつたかも知れない。かゝる中に一九一六年の改選期が來て、彼は大統領として再選された。之より先き一九一五年のことであつたが、英國の汽船ルスタニア號が獨逸の潜航艇の爲めに沈められた。輿論は沸騰した。獨逸膺懲論が猛然として起つた。それにも拘らず、ウイルソンは之を牽制し、出來得るだけ忍耐せしめたのである。此際ウイルソンが主戰論に贊成しかねたことは、恰も南北戰爭の時に於けるリンコルンの立場とその事情を同じうするものであつた。然るに一九一七年に入つて獨逸の態度は益々惡辣を極め、その潜航艇は米國の近海に出沒して中立帶を侵すこととなつた。流石のウイルソンも遂に

掛忍役の緒を切つた。此所に於てウイルソンは敢然獨逸に對して宣戰を布告した。彼は二大標語を掲げた。即ち軍國主義に對する平和主義、專制主義に對する民主主義の對立である。彼は獨逸の態度を以て全人類に對して戰を宣するもので、獨り米國船が撃沈せられ、米國民が殺害されたのみでなく、他の中立國の人民及び船舶に對しても同樣なる事が行はれた。これ即ち全人類に對する獨逸の挑戰である。米國も國家として存在する以上は國家の方針を確立しなければならない。併し米國の眞の意志は復讐ではない、權利を保護し、人權を擁護するにある。彼は一九一七年の四月二日臨時議會兩院協議會に降したる教書の中に、この精神を披瀝した。

聯合國は痺れを切らして米國の蹶起を期待してゐたのである。遂に米國はその態度を明かにしたのだ。次第に疲れ氣味を感じてゐた聯合國側は、著しく元氣を回復して前途に光明を認むるに至つた。

臨時議會は四月二日に開かれ、十月六日を以て終つた。この臨時議會は米國を一變して一大軍國たらしめたのである。先づ財政の方面に於ては、自由公債、戰時貯蓄券、戰時税等によつて莫大なる軍費を準備した。又傭兵主義の無軍備の狀態より、義務徴兵令、軍隊招集令等によつて大陸軍が成立した。海軍も大擴張せられた。陸海軍の生命保險法、その家族並びに遺族扶助法が制定された。招集せられたる外人に對しては市民權が附與せられ、又戰場よりの歸休兵に對しては職業授與の恩典があつた。又行政機關が改造せられて、國防會議、管船局、戰時通商局、食糧監督局、鐵道管理局、燃料管理局等が各の方面に活動した。食糧品取締り法が勵行せられ、遂に全國禁酒法が制定せられた。一方には獨探の陰謀があつて、それを檢擧し取締らなければならない。過激主義に對する撲滅法も斷行せられた。同時にヨーロッパよりの移民に對する米化運動が行はれた。

米國は參戰より休戰に至るまで二十ケ月を經過したるに過ぎない。その間に四百五十六億圓の戰時費を費した。陸軍費二百億圓、海軍費四十億圓、造船費二十億圓、内政費二十億圓、聯合國貸付金百七十六億圓。又歐洲派遣軍の總數は將校七萬八千三百九十一人、兵卒百八十八萬千三百七十六人、合計百九十五萬九千七百六十七人。之は一九一八年十一月十一日の調査である。同月一日現在の佛軍は二百五十五萬九千人、イギリス及びポルトガル軍合計百七十一萬八千人、白耳義、伊太利軍合計二十萬人。されば米軍は佛軍に次ぐの大兵を有した。尙米國出征軍の損害は總數二十八萬六千四百四十四人、内戰死者四萬八千九百

九人。病死負傷其他の原因によるもの二十三萬七千百三十五人。其外米國より聯合國民に供給したる食料品、豆、麥粉、牛乳、バター代用品、砂糖、肉類、コーヒー、米類、烟草類等の量は莫大なるものである。

かゝる國民的大活動大飛躍の中心人物として絕對的命令權を揮つたものはウイルソンである。溫厚にして冷靜なるウイルソンが一躍して專制君主の如き勢力を揮つたのである。軍國に於ける已むを得ざる運命として、ウイルソンはこの任務に服したのであらう。併し彼は南部亞米利加の出身にして、長く奴隷制度を維持したる鄉土に生れたるが故に、遺傳的にも專制的の血が彼の血管に流れてゐたかも知れない。此潜在意識が大戰爭を機會に、猛然として現はれ出でたのかも知れない。彼は人道と正義の爲め、世界各國民の爲め、國力を消盡しても戰はなければならないといふ大決心を抱いてこの間に處したのである。ウイルソンは飽くまでも獨逸を膺懲することを主張した。けれども同時に一日も早くその目的を達して平和の回復を希望した。一九一八年に入りて米國の講和に對する理想を聲明する必要があつて、一月八日議會兩院協議會に於て講和條件十四ケ條を聲明したのである。

その年の秋に至りてさしもの獨逸も遂に屈服して、十一月十一日に休戰條約が成立し、次いでパリイの講和會議が開かれた。ウイルソンがパリイに於て如何なる活動をなしたるかは最も興味ある題目である。

ウイルソンは學者として、大學總長として、又知事として成功した。而して最後に大統領として相應の成績を舉げて再選せらるゝの光榮を得た。米國の有名なる大統領は不思議にも戰爭に緣がある。ジョルヂ・ワシントンは獨立戰爭を始めて之に成功し、アブラハム・リンコルンは南北戰爭の中心人物と仰がれた。而してこの光榮ある傳統を繼承して先輩の名聲を恥しめざるウイルソンは世界大戰の渦中に投ずるに至つた。最初彼は平和論を主張したれども、獨逸の無鐵砲なる態度は遂にウイルソンの堪忍袋を破らしめて、遂に之に對して宣戰を布告せしめたのである。平和と人道の鬪士たるリンコルンが遂に流血の慘害を目擊しなければならなかつた如く、リンコルンに劣らず、否彼に一層立勝りて同じ理想に憧れたるウイルソンが南北戰爭の戰禍に幾百倍したる大戰亂の世界空前の流血の汎濫の眞只中に沒頭しなければならなかつたことは一種の悲劇といはなければならない不思議なるパラドックスである。ウイルソンは戰の王として米國民を督勵すると共に、此戰を以て世界最後の大戰爭

たらしめんとして、世界永久の平和の條件について思を凝した。それが即ち一九一八年の一月八日米國の上院に於て提案せられたる十四ケ條の平和條件となつた。彼はこの提案に於て民族自決主義や國際聯盟に關する理想までも披瀝したのであつた。

されば平和會議が愈々パリイに於て開催せらるゝこととなりて、彼自ら米國代表者の頭目となりてパリイに乘込んだ時の勢はすさまじいものであつた。彼は世界人類永遠の平和の鍵を握る所の大恩人として歡迎せられたのである。クリストの再臨の如く多大なる期待を以て世界諸國民の視聽を聳かしたのであつた。彼は自ら平和會議の中心人物の位置に立つた。彼の一擧手一投足、一顰一笑は新聞記者の注目する所となつた。恐らくは世界の歴史に於てパリイに於けるウイルソンの如く重大なる役割を演じた政治家は少ないであらう。新しき共和國の創設者としてのワシントンの功績は素晴しくあつた。内亂の傷を癒やす爲めのリンコルンの犧牲は壯烈であつた。されどもウイルソンの世界列國の代表者を集めて滿目注視の檜舞臺に於て、空前の反目、嫉視、殺戮の後始末をすべく、高き望みと清き理想を抱いて、思ひを潜め、心を傷め、千辛萬苦して此大會議を兎に角大團圓にまで導きたるウイルソンの顯著なる手柄に較ぶる時は、旭日の前の殘月の如く影が薄いやうな感じがする。

ウイルソンが初めて大統領として白堊館の主人となつた時は、既に健康を害してゐた。彼の消化力は弱く、その一方の肩には猛烈なる神經痛さへわづらつてゐた。されば幾多の名醫はウイルソンの健康を氣遣つて滿足に四年間の任務を果すことは出來ないだらうと思つた。然るにウイルソンは鐵の如き意志を以て自己の生活を善導して健康を持續することが出來た。殊に侍醫のグレーソン博士が日夜水も洩らさぬばかりの用心深き監督をしたる爲めに、不思議にもウイルソンは次第に健康を回復してパリイの平和會議に於ては如何なる人をも後方に瞠若せしめた程大車輪の活動をしたのであつた。ウイルソンはパリイの交際社會に於ては超然主義を採つた。彼に會見を申込みたる多くの人を斷り、その爲めに幾分か人氣を損じたのである。併し健康持續の爲めには已むを得ない手段であつた。彼の活動振りはすさまじい程であつて、時には同時に開會されてある二つの重要なる會議に出席したことがある。例へば四大强國の協議會が階下の彼の書齋に於て開かれてゐるかと思へば、二三十人の財政經濟の專門家の會合が階上の應接室に開かれて居るやうな時に、彼は階段を上り下りして兩方の會合に出席した。彼はパリイに於ては講和會議の發言者指導者の如き態度をとつた。彼

は講和會議に列席したる如何なる人々よりもより長く働いた。より多くの約束を有し、より少く娯樂休養の時を有した。

實をいへば講和會議の幹部會といふべき四大國の協議會は合衆國街の彼の書齋に於て開かれた。一切の重要なる會議は此所に於て議せられたのである。平和會議に關係してパリイに足を踏み入れた者は先づ第一にウイルソンと會見するを目的とした。殊にヨーロッパ、アジア及びアフリカの幾多の世に知られざる小弱國の代表者は否でも應でもウイルソン大統領に謁見して、彼等の悲しむべき國狀、傷しき野心等を打明け話をせなければ滿足しなかつたのである。玆に面白い挿話がある。

或朝のこと、異樣の扮裝をしたる二人連がウイルソンの宿所の事務所に現れた。誰れあらう。これ等の者共はポーランドの百姓で、赤色の刺繡をしたる手織の維紗の粗衣を纏うて黑いザラ〳〵毛のコサック流の帽を手にしてゐた。彼等の外に、もう一人ポーランド生れの天主教の僧侶がついてゐて、佛蘭西語で二人の希望を通譯した。此二人の百姓は北部墺太利の山中のポーランド人の殖民地より出かけて來たのであつた。平和會議の決定に基けば、その地方はチエッコ・スロバックに屬させられたのであつた。然るにその地方のポーランド人はそれには大不贊成である。恰度一人の百姓が米國の大統領がパリイに出張して民族自決主義を唱へてゐるといふことを聞いた。彼はチエッコ・スロバックに屬するよりもポーランドに屬したいといふ希望を抱いて、大統領に申述べたい爲めに大決心をして山の中から脱け出た。彼はゆくりなくも同國人の羊飼に逢つた。彼は星の光をたよりて道を辿る術を心得てゐた。百姓は羊飼に遠くはる〳〵パリイに出かくる目的を話した。羊飼はこの話に大いに感動してパリイに同行して、ウイルソンに面會したいといふ氣になつた。それから二人は星の光を目當てとして山中より數百哩を步いてワルサオに到着した。此奇態なる事件が此都に於けるあるポーランド人の愛國的團體の注目を惹いてその援をかりて彼等はパリイまで送られた。彼等はパリイの停車場に着くや否や驀地に大統領の旅館クレヨン・ホテルに來てウイルソンに會見することが出來た。彼等は中歐の山中の原始的の扮裝をしてウイルソンを驚した次第であつた。

世界の虐げられた氣の毒なる境遇にある人種や民族や團體は何れもウイルソンに多大なる期待を寄せた時であつた。されば勞働者實業家新聞記者婦人の團體の代表者からウイルソンは會見を申込まれた。ユデア人、アイルランド人、アルメニア人、ポーランド人の代表者も彼に接近した。ロイド・ヂョーヂも忙しくあつた、クレマンソーも忙しかつた、オルランドーも忙し

かつた、然るにウイルソンは國際聯盟委員會の委員長として夜間の會議に出席したが、それが折々眞夜中に達したのである。ウイルソンが如何に多忙であつたかを知る爲めに一九一九年五月十六日の接客順序書を一瞥することが甚だ興味がある。

午前十一時、シヤムの代表者。同十一時三十分カルパシヤ、ロシヤの委員。同十一時四十五分、フランス鐵道從業員國民同盟總裁オリビイ。十二時、在パリイ、セルト人協會總裁がその國民的詩人選集を捧呈する。十二時十五分、ウルクエーの代表者。十二時三十分、アルバニア大統領。十二時四十五分ローマ駐剳のチリー公使。（此間晝食）。午後二時十五分、ドクトル・エドワード・ベエンス及モツシユー・クラマールがシレシアの問題について會見。同二時三十分、フランスの代議士モツシユー・ダムールが米軍上陸記念の爲めにギヨロンド河の河口に一つの銅像を設立の計畫説明。同二時四十五分、北部コーカサスのクーバンの議會の代表者。同三時、トレビゾンの大僧正。同三時十五分、南カロリナ洲の知事マンニング來訪。同三時三十分、パリイのフイガロー紙記者モツシユー・ジヨーセフレンナハ訪問。

この外に彼は公の資格を以て出席して演説をしなければならぬ會合もあつた。彼は隣國を訪問しなければならなかつた。戰爭の爲めに荒廢した地方を訪問しないといつて攻撃もされた。或は觀兵式に出席しないとか、或は折角の招待を謝絶したとかいつて陰口もたゝかれた。この過勞の爲めにウイルソンは毎晩見るも氣の毒な程疲れて床中の人となるのであつた。併し侍醫グレーソンの手當ての利目があつて、翌る朝はなか〳〵の元氣で目覺めるのである。彼が斯くの如く種々雜多な人々に會見して何れも深き印象を與へた。相當に名のあるオランダの新聞記者がウイルソンとの會見の後にその感想を述べて、「私はこれまで米國の大統領のやうな威嚴を有する人に會つたことはない。彼は外見の力と内面の柔しさとを兼備してゐる」といつた。

ウイルソンは斯くの如くに努力し奮鬪した。それにも拘らず米國民は充分彼の成績を認めない。これにはウイルソンの欠點もない譯ではない。何といつてもウイルソンは學者流の政治家である。その思想や理想や議論を發表するにウイルソンを凌ぐ得る人は少ない。されども彼は民衆の耳目を聳動するやうに事件を芝居化することの力を有して居らない。彼の演説は「私は信ずる」「私は思ふ」「私は望む」といふ小句が多くて「私は何をした」「私は何所へ行つた」「私はこの問題の爲めに爭ふた」といふやうなことは餘りいはない。彼の演説には山はない。あまりに平明で單調であつたと傳へられる。ウイルソンの好敵手であ

るロイド・ジョーヂはウイルソンの失敗したる所に於て著しく成功してゐる。彼が一九一九年二月國際聯盟規約の草案を齎して一寸米國に歸つた時は彼の生涯にとつて最も注目すべき劇的瞬間であつた。米國の大統領が外國からの初歸りである。而も世界永遠の平和の基礎條件たるべき國際聯盟の草案をポツケツトに收めてゐるのである。若しウイルソンにしてロイド・ジョーヂの如く臨機應變屈伸自在の所作事を逞うする能力を有して居つたとしたならば、彼自らの爲めにも、國際聯盟そのものゝ爲めにも、多大なる效果を收むることが出來得たであらう。彼はニューヨルクとボストンとに於て聯盟に關する講演を試みた。彼は單に聯盟の理論を述べた。民衆は彼よりパリイの平和會議の生々したる消息が傳へられたかつたのである。國際聯盟の議案を物にする爲めの樂屋の骨折は容易ではなかつた。それに關する面白い逸事もあつたに違ひない、國と國との利害の衝突、代表的政治家の意見の衝突、間隔、何れも面白い演説の材料である。而してその或るものは何等の痛痒を關係者に感ぜしむる事なく、公にして差支がなかつたのである。而かもウイルソンは之を敢てなさなかつたのである。又なす能力がなかつたのである。而して國際聯盟の規約そのものは右傾派をしてその大膽なるに驚かしめた、又左傾派をして餘りに穩健着實なるを以て失望せしめた。初め脫兎の如くであつたウイルソンが、遂には處女の如くなつたんである。一時はパリイに於て世界人類の救ひ主とまで祭り上げられても本國に歸れば遂に議會の批准さへも得ることが出來なかつたんである。之はウイルソンに對する黨派的のかけ引きや、愚劣なる嫉妬心などもあつたことであるが、かゝる場合に成功すべき政治家としての大切なる資格をウイルソンが欠いてゐたといふことも閑却してはならない。

パリイの平和會議は五大問題を解決した。第一、委任統治の制度を採用して新殖民政策を樹立したること。第二、國際聯盟規約を平和條約より不可分的要素とする說と、之を後廻しにして條約だけを討議したいとの說との戰ひ。第三、一九一九年の四月平和條約の雲行き頗る險悪となり、ウイルソンが軍艦ジョージ・ワシントン號に命令して平和會議より撤退すべきかを考へたこと。第四、フエーメ問題について伊太利國民に與へたるウイルソンの意見が伊太利の代表者をして會議より撤退せしむるに至つたこと。第五、山東問題の解決である。

ウイルソンが、パリイに乘込むに先んじて、世界に對して聲明したる政策は、次の理由に基いて歡迎された。先づ第一に彼の十四ケ條は、世界大多數の人類に對して、永久平和の如何にも

信實なる、合理的なる、正直なる基礎であると思はれた。殊にその條件はヨーロッパ各國に於ける急進黨の戰爭の繼續に對する反對熱を緩和するに大いなる効能があるやうに思はれた。第二には亞米利加が世界稀れなる豐富にして無盡藏なる資力を傾倒して、國際的紛糾を解決せんとするその義俠心に感激して、その指導を待つといふ熱心な希望が多くの國民の心に宿つてゐた。第三にはウイルソンの政策は獨逸側の勢力を弱はむる力があるやうに見えたのである。

ウイルソンが如何にヨーロッパ大陸に於て、殊に聯合國側に於て好評を博したかといふことは、一九一八年の秋の頃には彼の肖像は羅馬のあらゆる店に飾られて、敬虔なる百姓達は彼の肖像の前に蠟燭までも捧げたと傳へられたのである。彼の演説の一言一句があらゆる新聞の爲めに競ふて傳へられたのである。然れども戰爭の終結すると共に、各國民の利己心が又芽を吹いて來た。ウイルソンが英國に於て國際聯盟の必要を述べてゐた時に、クレマンソーは國際的關係は從前通りに同盟の力によつて維持せられるより外はあるまいといふことを述べてゐた。間もなく英國の總選擧は、獨逸に對して過重なる負擔を敢へてせしむることを政策に掲げてある聯立內閣を大多數を以て選擧したのである。伊太利に於ては領土擴張論者が勢力を得て來た。一九一八年十一月の米本國に於ける上院議員の選擧は、ウイルソンの反對黨たる共和黨をして勝利を得せしめた。かゝる背景の下に獨逸の舊領土の處分法が討議せられたのである。濠州もニユー・ゼーランドもそのあるものを所有せんと欲した。日本も分前には預りたかつたのである。南阿聯邦も阿弗利加に於ける獨逸の舊領土に垂涎して居つたんである。佛蘭西も又英本國もそれぞれの野心を抱いてゐた。而かも英佛の政治家は非常に綿密なる研究をして、その處分法を講じて行けたのである。然るにウイルソンは一九一九年の一月末に獨逸の舊領土の合併に對する反對を公にした。彼の意見によれば、各殖民地の發達はそれを支配する國民の利益の爲めに非ずして、その住民の利益になるを目的にしなければならぬと揚言した。土地の所有權よりも寧ろその住民の安寧幸福を計らなければならない。その貧弱にして文化の低き人民が、眞の希望を明白に表し得るまでに、世界は彼等の管理者たるの務めを果さなければならない。即ち殖民地は國際聯盟の監督の下に、關係の諸國に委任統治せらる可きものであると主張した。濠州のヒユース君が之に反對した。英國殖民地の總理大臣は何れもヒユース君の説に贊成した。佛蘭西の殖民大臣シモン君もウイルソンの説に反對した。クレマンソーは國際聯盟にも委任統治にも反對した。ロイ

ド・ヂョーヂ氏は委任統治の原則は贊成であるが、英國殖民地の要求も充たさなければならないといつた。佛蘭西の新聞紙はウイルソンに對して攻撃の矢を向けて來た。或は婉曲に短評を試みるものもあつた。而かもウイルソンは斷じてその説を棄てなかつた。故にロイド・ヂョーヂ氏の斡旋によつて國際聯盟規約二十二ケ條の條文が成立するに至つたのである。ウイルソンが非常なる勇氣と決心を以て頑張り通すに非らざれば或はウヤムヤに葬り去られたかも知れなかつた。

　國際聯盟の規約を平和條約の不可分的要素とすることは、一九一九年一月廿五日の會議によつて決定されたんである。然るにウイルソンが一旦歸國して三月の中旬に又パリイに立戻つて來ると、形勢は一變して、國際聯盟規約を後廻しにして、獨逸との講和の成立をいそがふとする形勢になつてゐた。ウイルソンは大いに驚いて、パリイに到着後漸く廿四時間を經過した三月十五日に、平和會議の新聞局をして、大統領は一九一九年一月廿五日の決議を重んじて一歩も讓らず、斷然それを振り翳して進むべき聲明をしたと公にせしめた。この強硬なるウイルソンの態度に對しては幾多の反對があつたが、遂に彼は成功した。私は限られたる時と、限られたる紙の上に、ウイルソンに關する平和會議の重要なる諸問題を述べ盡すことは出來ない。併し山東問題に對するウイルソンの態度は、我日本に對する重要なる事項なるが故に、此所に省略することを得ない。

　山東問題を中心として日支間の危機が迫つたのは正しく四月廿九日の出來事であつた。不思議なる廻り合せとして、獨逸の講和委員が未だ完成せざる條約を目當としてヴイルサイユに向つて來た。三國會議は長引いていろいろ紛糾した。伊太利のオルランドは數日前に講和會議を撤退してゐたのである。六日前の四月廿三日には伊太利問題の爲めに非常な難しい狀境を呈したのであつた。而して彼等のパリイ引上げとなつたんである。又一方には白耳義の代表者は賠償金問題が決定しないので痺れを切らして騷ぎ始めた。白耳義は最高會議には加入することが出來ない。而して英吉利と佛蘭西が白耳義を除け者にして甘い汁を吸はふとするのではあるまいかと氣苦勞した。其他の小國の代表者もさはついて來た。かゝる場面に於て山東問題は解決をしなければならなかつたのである。日本は支那に於る獨逸の權利をそのまゝ讓り受けたいといふ決心であつた。若しそれが成功しなければ、伊太利の二の舞をも遣りかねまじき勢であつた。若しそれに白耳義も參加するならば、平和會議の前途は至つて心細いものであつた。此間に處したるウイルソンの苦心はかつてやらなければならない。彼は非常なる疲勞を覺えた。頗

色憔悴と見えたさうである。彼は精力を維持し得たことは人間業とは思へなかつたんである。四月の下旬には彼に接近する人は會議の主要なる人物のみであつた。彼は一切の社交を斷り、散歩する時もない位であつた。彼は夕方も一人書齋に居つて想ひに耽けることがある。窓の下の庭には亞米利加の番兵が徘徊してゐた。彼は偶には夫人と共にボア公園のあたりを自働車で一周することもある。又偶には大急ぎでドクトル・グレーソンと散歩することもあつた。斯くして彼は精力の維持を計つたのである。

ウイルソンは山東問題に對しては出來るだけ公平の態度をとつた。十國會議に於て彼は支那の代表の顧維鈞をして充分にその意見を盡さしめた。顧維鈞の流暢なる英語演説は會議に於て少なからざる注目を引いた。同時にウイルソンは日本代表者にも思ふ存分意見を述ぶることを期待してゐたのであらう。併し私が今參考書として用ゐてゐるベーカーの「パリイに於けるウイルソンの事蹟」といふ本には日本代表者を指して「平和會議の沈默なる相手方」と呼んでゐる。日本は人種平等案と山東問題の解決を以て戰つた。我珍田子爵は、「若し此の案が採用されないならば、日本はよろしく平和會議より撤退すべしと主張する者も國內にある程だ」と力說した。兎に角支那の代表者は大陸流に堂々と出かけたのに、日本の代表者は餘りに遠慮深く之に對した。日本は第一案に於て失敗した。故に山東問題に對しては非常なる決心を以て奮鬪した。支那の代表者の顧維鈞君にせよ、王廷世君にせよ、その英語演説は鮮かなものである、ほんにお手に入つたものである。併し何といつても彼等は外交の掛引に餘り熟してゐない人々である。之に反して所謂「沈默なる日本の代表者は經驗のある底力のある代表者である。而して日本代表者は山東問題に於て成功せざれば旗を卷いて引上げる位の態度を示した。而して平和會議の狀勢は頗る困難なるものである。先づ第一に何でも彼でも早く平和を回復しなければならない。破壞の後には建設をしなければならない。消耗の後には生産が行はれなければならない。平和を回復して働けといふことは輿論である。第二には大戰後無政府的の思想が大分勢力を得て來た故に、聯合國を結束せしむることは焦眉の急である。第三には國際聯盟を永久に成立せしむることである。若し伊太利が離れ、日本も參加を見合せるとすれば、國際聯盟は成立することは出來ない。之に反して聯合國が握手してその友誼的關係を持續すれば之等の困難なる問題を解決することは不可能ではない。ウイルソンも遂に山東問題の解決に贊成せざるを得なかつたんである。青島に於ける獨逸の權利は殆んと全部

日本の手に委ねられたんである。同時に日本は青島に於ける獨逸の殘したる經濟的權利を獲得することを以て滿足し、支那の權利を侵かすまじきことを聲明した。又出來るだけ早く山東から駐屯軍を引上ぐべきことも聲明した。ウイルソンの支那に對する同情は單に日本の勢力を山東省より引ッ込ませしむるを以て滿足せず、あらゆる外國の勢力を支那全體より引ッ込ませしめたいといふ希望であつたらう。支那の代表は之を滿足しなかつた。又米國に於けるウイルソンの政敵はこの問題を利用することを怠らなかつた。山東問題は結局ワシントン會議に於てウイルソンの政敵ハーデングの手によつて解決せらるゝに至つたんである。

ウイルソンのパリイ講和會議に於ける態度は、自由主義者のそれであつた。若し彼が急進黨であつたとしたら、力づくでその理想を世界に强いたであつたに違ひない。若し保守主義者であつたとしたら、舊式の議論の要求に降服したかも知れない。然りしならんには或は更に新しい戰爭が起つたかも知れない。無政府が勃興したかも知れない。パリイの會議は不滿足にもせよ。爭點は組織對無政府の問題である。ウイルソンは一方には高遠の理想を揭げたと同時に彼の現實の世界を忘れなかつた。故に或る點に於ては、彼は他の人々と妥協することも出來たんである。同時に彼は人類愛を信じた。若しこの信念がなかつたら、國際聯盟主義を徹底せしむることは不可能であつたらう。今日の立場より批判すれば、パリイの講和會議には幾多の欠點がある。併乍らその當時の事情及び背景に基いて批判すれば幾多の欠點は之を寬容しなければならない。而してその成功したる方面を重視しなければならない。パリイに於けるウイルソンは失敗したる分子よりも遙かに大いなる成功したる分子を有したのである。

ウイルソンは戰の王の如く振舞つたといふので、或る方面より批難の聲が上つた。併し一面には米國市民の特色を極端に發揮した逸話も少くない。ウイルソン夫妻が伊太利に赴いた時大歡迎を受けた。彼等は國賓として或る宮殿に於て歡待された。一體歐洲各國の帝王が、外國に行つて國賓の待遇を受くる時は隨分思ひ切つた心付けを、接待員一同に對して與へるのが普通なさうである。然るにウイルソンはそのような先例を少しも顧慮することなく、米國人が普通のホテルに泊つた時に、ボーイや何かに心付けをやるやうに、宮中の其所此所に立番をしたり案內をしたり、其他の面倒を見て吳れる人々に對して、ポッケツトから出して遣つたに過ぎないといふことである。その爲めに

餘り評判がよくなかつた。もう少し心付けを奮發したらどうかと忠告したものもあつた。併しウイルソンは斷じて應じなかつたさうである。又種々の慈善團體が押掛けて寄附をねだつた。之にも大した寄附はしなかつたさうである。ウイルソンは大統領なれども市民より選ばれたるその身分を忘れなかつたのである。彼は帝王のなすが如き贅澤及び浪費は決してやらなかつた。此所に彼の眞骨頭を見るべきである。

西洋の人は十三といふ數と金曜日を嫌ふ。此迷信の起源を述ぶれば脫線の氣味があるから省略するが、倫敦で私は十二二分の一といふ番地の札を見たことがある。又金曜日に旅立をすることを嫌ふ。殊に十三日に出帆することを非常に嫌ふ。ウイルソンがヨーロッパへの往復には金曜日や十三日などに發程したことがあつたさうである。之は自然にさうなつたのかも知れないが、態と民衆の迷信を破る爲めに手本を示したのではないかといふ見方もある。その實力に於ては世界の帝王の心膽を寒からしめたるウイルソンが、其日々々の生活に於ては、米國中流の市民の範圍に止つたといふことは、誠に奥ゆかしい事ではないか。私の知人の或る青年が米國留學中ワシントンの白堊館に行つて、秘書官を通じてウイルソンに會見をねだつて、握手をして貰ひ、手帳を出して署名までもして貰つたといふ話もある。ウイルソンは一面に於ては學者らしい氣どりやの如く想像されるが、極めて平民的なる方面もあつたらしく思はれる。

私が最初米國へ行つたのは一九一一年（明治四十四年）の七月四日の獨立祭を過ぐる數日の後であつた。私は英國留學よりの歸途であつた。その當時ウイルソンは尙未だプリンストン大學の總長であつたかと思ふ。私はプリンストンの學府を訪ねてこの名總長の謦咳に接したいといふ希望もあつた。併し私は日程の都合上ニューヨルクより南下することは出來なくて直ぐにボストンに赴いた。三年前米國に再遊した時もプリンストン大學に立寄る時のなかつたことは甚だ遺憾に思ふ。其時私はサンフランシスコよりローサンゼルスに行き、グランドキヤアニオンの大自然を賞し、キヤンサスミゾリー等を經てシカゴに到着した。丁度大統領選擧の一月程前であつた。從つて汽車中の談話は選擧で持切つてゐた。南部諸州を汽車が通過してゐる時には民主黨のお客が多く、ウイルソンを褒め千切つてゐた人もあつた。然るにシカゴに近づくに從つて次第に共和黨のお客が多くなつて、隨分ウイルソンに酷評を加へる人が多かつた。之は我輩も非常に意外としたことである。シカゴよりボストン、ボストンよりニューヨルクへと行つたが、何れも共和黨の本據地で

あるからして、ウイルソンに對する反動熱がなか〳〵盛であつた。ウイルソンの政治がよくないから汽車賃が高いとか、物價が騰貴したとか、到る所不平だら〳〵であつた。私は何も米國の政黨のどの政黨にも贔負はないけれども、餘りにウイルソンの評判が惡いので、飛んだ所で義俠心を發揮して、ウイルソンの辯護を試み、國際聯盟論などを持ち出して、米國の友人と議論をしたこともあつた。十月の下旬であつた。私はニューヨルクよりワシントンに赴いた。若し出來得べんば、日本大使館の紹介によつて、ウイルソンに謁見したい希望を有してゐたのである。然るにウイルソンは廢人同樣の病人となつて、白堊館に呻吟してゐたのである。一切の訪問客は謝絶してゐたのである。そこで折角の希望は畫餅となつた。私はヴアヂニア州のヂョーヂ・ワシントンの舊邸を訪れ、その墓に詣で、その廣い邸宅の前を流るゝポトマツク河を眺めて旅情を慰めた。其夜であつたらう。私は議會附近の旅館を立出で、夕闇に紛れて白堊館の前に立つた。闇夜であつたが電燈の光りで質素な白堊館の輪廓が廣い庭の眞中に明瞭りと浮んで見えた。私は病める偉人に對して深き同情を抱き、その回復の速かならんことを祈り乍ら、二三十分間もその周りを幾度となく行きつ戻りつした。されば私の心に浮ぶウイルソンは實感を離れたる人物である。書物や新聞や噂を通して想像する所の面影に過ぎない。

ウイルソンの末路は甚だ氣の毒の如く思はれる。併乍ら緊張したる二期八年の米國大統領としての活動は最も緊張した充實したる生活である。彼は此間に大英雄大將軍の事業を完成した。さなきだに蒲柳の質であつた彼はこの激局に當つたのであるから、彼が健康を失つたのは當然である。リンコルンが刺客の手に仆れたると餘り異らざる、只間接の方法で彼の温い血潮は一滴宛なくなつて行つたのである。彼の病軀は世界大戰後の進行及び終結の爲めに一切を捧げ盡したる英雄の藻拔けの殼に過ぎなかつた。その藻拔けの殼すらも長く地上に存在するには餘りに彼の努力は多大であつた。彼の魂は二月三日午前十一時遂に見えざる永遠の國に移つたのである。彼の訃報がパリイに達するやクレマンソーはウイルソン未亡人に弔電を送り「前大統領は米國民衆中の最高人格者として長く記憶せらるべく、佛蘭西は長く彼を忘れない」といつた。ロイド・ヂョーヂは、「ウイルソンが自身にて講和會議に出席したことは失敗であつた、宜しく反對黨の共和黨員中より代表者を選んで彼は米國に止るべきであつた」と批評してゐる。實際的政治家たるロイド・ヂョーヂの批評は率直にして面白い。ウイルソンが米國代表者を悉く民主黨よりのみ選んだことは千慮の一失である。ランシングの如

き最も適當なる人物をも採用しなかつたことは、弘法にも筆の誤りがあるといふやうなものである。英國の勞働黨內閣の首相マクドナルド氏は、「故人は歐洲を平和と安定とに導く、理性と知惠との宏遠なる理想を有したが、その實現を見ずして逝けるは實に惜しい。併乍ら故人は世界の最大なる先驅者の一人として永久に記憶せらるゝであらう」といふ弔電をウイルソン未亡人に送つたさうである。大政治家を知る者は大政治家である。ウイルソンの一生一代の事業に對する批評は之等の政治家の言葉が最も適切にいひ表はしてゐると思ふ。

　我々はウイソンに於て理想の政治家の新しくして誠なる典型を示されたのである。第四十八議會は解散せられ、五月上旬には總選擧が行はれんとしてゐる。今や政治的季節である。政治運動の最も劇烈なる時である。護憲三派も新政黨も、出來得べくんばウイルソンの如き大政治家を以て理想として欲しいのである。我國の政爭が單に利欲や感情に基くものに非ずして、主義政策に基くやうに之を合理化せしめなければならない。ウイルソンの此場合に於ける死は、何等かの刺戟を我國の政界に與へなければならない、又與へしむるやうに我々は仕向けなければならないのである。



紛々擾々たる政界の歸趨如何

短命聯立内閣を造れ

水野廣德

首相級の人材を網羅したと唱へられたる山本内閣は不慮の事件の爲めに脆くも倒潰した。最初多大の期待を以て迎へられたる同内閣は、大震災の應急策に忙殺されたりとは云へ、在任僅に四ケ月の短期間なりしとは云へ、組閣の當時政友憲政二大政黨々首を水交社に呼び付けて訓令的挨拶を爲したる豪勢に引き換へ、臨時議會に於ては復興問題、火保問題等の爲め政友會に弄殺され、悶殺され、其の揚句末路蕭條幽靈の如く消へ去つた。初め脫兎の如く終は處女の如しとは山本内閣の謂である。最初の期待大なりし丈け夫れ丈け國民の失望は大であつた。臨時議會に於ける屈服は通常議會に於て大に仰びんとする彈力蓄積の爲めと善意に解するとしても、山本内閣成立の眞意義とさへ認められたる普選問題に對してすら、權兵衞伯の態度は頗る曖昧模稜を極め、行ふが如く、行はさるが如く、國民をして疑惑の裡に彷徨せしめた。是れ同内閣が國民の信望を失ひ、其の倒潰に際して一人の之を惜しむ者なかりし所以である。

シイメンス事件に失脚して以來、權兵衞伯野に雌伏すること十年。鳴かず、蜚はず、世間は彼を以て政界のスフインクスと爲し、國民は今一度彼をして大に鳴かしめ、大に蜚ばしめんと欲した。而かも彼や終に阜の鳥にあらずして、矢張り薩の薯であつた。十年孫の守りせる間に、彼の彼たる蠻勇の氣さへ銷磨し、唯不得要領の演說ばかりは愈堂に入り、「豈夫れ政府に於ても抑も亦」式の新日本語を速記錄に殘したるに過ぎなかつた。思へば無理もない、彼は七十二の老人であつた。吾人は最早や老人には懲り〳〵した。

七十二歳の權兵衞伯に代つて總理大臣を相勤めまするが、代り合つて代り榮へのせぬ七十五歳の淸浦老人である。淸浦內閣組織の經緯に就きては宮內大官や特權階級などの種々なる陰謀密計が世上に傳へられて居る。若し之を事實とすれば政治上容易ならざる罪惡にして、其の國家に對する不誠意無責任憲政に對する不法非違、誠に驚くの外はない。之に關し淸浦老人はヌラり、クラりと鰻の如く不得要領の言ひ抜けをして居る。老人も首相になつて以來餘程人が惡くなつた。彼と彼の家の子とが如何に詭辯を弄するも、此の內閣が立憲の精神を蹂躪せることは十目の見る處である。貴族の二三子と御用黨とが如何に强辯を逞しうするも、此の內閣が特權專制內閣なることは十指の指す處である。淸浦老人は、民意を尊重して善政さへ布けば內閣の性質など問ふを要せずと言つて居る。元來政治の善惡と憲政とは全然別問題である。縱令堯舜の善政良治あるも專制は常に憲政の敵である。況して凡庸特權內閣に於ておやである。彼は憲政の何物たるかをすら解せざる老耄翁である。嘉永元年生れの專制官僚の遺物が大正十三年の立憲政治の舞臺に立つことが既に間違ひである。立憲政治は「唯一片耿々の至誠」や、「誠心誠意」ばかりでは運用が出來ない。世には一片耿々の心を以て人殺しをやる軍人もあれば、誠心誠意を以て利權を漁る政治家もある。如何に彼が「七十五歲を一期として」などゝ義太夫もどきに力んだとて、國民は老人の冷水と笑殺するであらう。「大學」に從へば、「國を治めんと欲すれば先づ其の家を齊ふ」とある 彼は大政燮理に任ずるの資格ありや否や孔子に問ふて見たい。

燎原の火の如く全國に燃へ熾かる憲政擁護、特權內閣撲滅の叫に恐れを爲したか、淸浦首相は衆議院を通じて國民の前に施政の方針も述べず、反對黨よりの不信任案提出も待たず、自ら進んで逆襲的に衆議院を解散した。無謀か、棄鉢か、彼は僅に一千に滿たぬ特權階級を後援とし、六千萬國民に向つて階級戰を挑んだのである。國民は悅んで此の傲慢なる特權內閣の挑戰に應ずるであらう。凡そ歷代の內閣中、此の內閣ほど組閣の當初より國民に不人氣不評判なるものはない。衆議院に於ては政友、憲政、革新三派の連合反對は素より、全國の新聞と云ふ新聞は殆んど悉く筆を揃へて攻擊し、平素政府の擁護の下に在る實業家も、學府の講壇に立つ學者も口を合して非難し、特權階級の膝下に於てすら反旗を飜へせる者もある。唯之を擁護する者は特權內閣製造元たる貴族院の研究會と、政友會を脫走したる僞造りの政友本黨とばかりである。而かも是等とても流石に良心に疚しと見へ、裏面の消息はイザ知らず、表面に於ては「嚴正中立」とか「穩健着實」とかの名の下に不即不離の態度を裝ふて

居る。斯くの如く四面楚歌裡に在る孤立無援の内閣が議會を解散して信任を國民に問ふなどゝは、如何に言葉に税が懸からぬとは云へ厚顔にも程がある。

清浦老が「七十五歳を一期として」頑張る以上、衆議院の解散はどうせ免れ難き運命に在つた。特權內閣が解散不能の貴族院の城廓に據つて、民意の府たる衆議院に解散の爆彈を投ずることの是非善惡に就きては世間既に定論がある。しかも今回解散の理由なるものは甚だ不徹底不合理にして、其の手段は頗る陰險陋劣であつた。政府の發表したる解散理由書なるものは、社會主義者の演説會に無法なる解散を命ずる低級警察官の口吻以上に一歩を出て居ない。殊に其の手段に至つては議場に於て堂々解散を宣するの公明と勇氣となく、休憩中を撰んで恰かも下女が人目を避けて艷文を渡すが如く、こつそり議長に紫フクサを手渡したと云ふことである。凡そ議會の重大なる公事は議場に於て國民の面前に行はるべきである。開院式には車駕の親臨さへあるに拘はらず、議會の解散をば議長が評判ブレの如く院內を布令廻はるなどは、詔勅の神聖を瀆し、議會の權威を損ずるの憾がある。あの場合議長として他に執るべき途は無かつたのであらうか。縱令法的手續に過誤なかりしとするも、我等は我等の代議府を侮辱せられたる不快を感ずる。素より一部の責は議場を混亂に陷らしめたる議員側にも存することを拒むことは出來ない。

要するに清浦特權內閣は衆議院に於ける反對黨の猛攻擊を恐れて、定九郎式に衆議院を暗打したるものとしか思へない。清浦老は議會を解放して總選擧に向へば、政府黨が多數を占めぬとは斷言出來ないと嘯いて居る。成る程之は本當である。何人も未來に對して斷言することは出來ない。清浦內閣が明白にも突發事件の爲め沒落することを斷言し得ざると同じ意味に於て斷言が出來ない。併し彼には新聞を讀む目は無いのか、國民の聲を聞く耳を持たぬのか。彼が御用黨の多數を夢みる如きは、肺病患者が大隈侯の向ふを張つて百二十五歳說を唱ふると同一の愚である。彼には政治の常識眼さへ無い。此際政府黨が多數を得る唯一の法は、憲政擁護とか、特權內閣打破とか、苟くも貴族政治專制政治を非難攻擊する如き不逞の言辭を弄する反對黨候補者を片つ端よりフン縛ることである。斯くて全國無競爭で御用黨を選出すれば、是れ政府の標榜せる「選擧の公平」の理想的なるものである。

是非の論は兎に角、衆議院の解散は既に行はれた。惡侍は遂に刀を拔いた。次で來るものは總選擧である。血の滴る切合である。併し此の勝敗は戰はずして既に明かである。護憲三派は

憲政擁護と云ふ大義名分の天の時を保つて居る。特權階級を敵とし民衆を味方とする地の利を占めて居る。共同の敵に對する人の和を得て居る。從令政府が何百萬圓とかの軍資金を抛り出すとも、水野内相が得意の手腕を振ふとも、僕の前記の獻策を容れざる限り御用黨は敗北である。「選擧の公平」に依り或は御用黨が第一多數黨となることありとするも、到底三派聯合軍を凌ぐことは出來ない。萬一凌ぐことありとすれば是れ日本憲政の破滅である。今の日本國民の政治意識が如何に低劣なりとは云へ特權階級專制を許す程には無知卑屈でないと信ずる。外國人より受くる政府黨常勝、官營議會の侮蔑を免るゝには、今回の總選擧こそ絶好の機會である。

來る總選擧に於ける既成政黨、新生政黨の消長隆替は爰に豫言するを得ざるも、各政黨の分野に一大波動を生ずべきは疑ふの餘地が無い。而して憲政會第一黨となるか、政友會第一黨となるか、將た又政友本黨が第一黨となるかは第一義の問題でない。特權擁護黨勝つか、憲政擁護黨勝つかゞ第一問題である。而して特權黨敗れて護憲軍の勝つは常識上既定の事實である。護憲軍勝ちたる場合、清浦内閣の執るべき道は總辭職か再解散かである。如何に清浦老が頑瞑なるも再度の解散を斷行するの蠻勇は振ふまい。若し振へば是れ革命に急ぐの途である。然らば總辭職を爲したる時政局の推移如何？。是れ國民と政治家との共に等しく考ふべき問題である。

從來の慣例に從へば先づ元老に御下問となり、勅使が興津あたりに飛ぶのが常である。併し元老にして、清浦老推擧に依り政局を紛糾せしめ、宸襟を惱まし奉りたる自己不明の責を感ずるならば、恐らく御下問に對する奉答を拜辭し、内閣製造業を前回限り廢業するのであらう。是れ元老が上皇室の殊寵を辱かしめず、下國民の尊敬を維ぐの道である。是に於てか憲政の本家たる英國流に從ひ、清浦首相の後任推薦とならざるを得ない。若し清浦首相にして憲政のいろはをだに解するならば、反對三派中の最大黨黨首を推薦するであらう。假りに政府の與黨たる政友本黨が第一黨の地位を占むることありとするも、之に内閣を讓るが如きことあらば、是れ明かに第二の解散を意味するものにして國家亂階の端を開くものである。

斯くて護憲三派中第一黨々首の下に三派聯立内閣の組織せらるゝことは政局當然の歸決である。併しながら三派必ずしも主義政策を同じくするものでない。又必ずしも利害感情の一致せるものでない。唯憲政擁護、特權内閣打破と云ふ大同の旗色の下に共同の敵に對して連衡したるに過ぎない。急流を渡らんが爲めに呉越同舟の類にして、一面に於ては自己擁護、自己發

展の爲めである。既に共同の敵亡ぶれば分裂は必然の勢である。十年連れ添ふ夫婦と雖とも離れることもある。況して表面に於ては主義政策、裏面に於ては利害感情を異にせる政黨政派が、風のまに／＼、流れのまに／＼、離合集散するに何の不思議はない。寧ろ政黨の離合集散に依つて政界の沈滞腐敗が防がれるのである。

聯立内閣は必ず短命である。短命で結構である。長命内閣必ずしも國民の幸福ではない。吾人は此の短命聯立内閣に向つて震災復興問題の外、二つの重大なる要求がある。乃ち其の一は徹底的普選の即行である。普通選擧が憲政の純理上正當なるは論ずる迄もなく、憲政運用上に於ても亦衆議院を以て眞の國民代表機關と爲し、其の權威を强大ならしむることが出來る。普選にして實施せらるれば衆議院に對する貴族院の挑戰の如きは自ら消滅する。從來種々の行懸り上普選尚早を唱へたる政友會も、憲政擁護の旗を飜へす以上、普選即行を宣明すべきである。否らざれば高橋總裁の平民編入も其の意義の大部分を沒却する。其の二は軍部大臣官制改革である。軍人が軍閥の牙城に立籠り此の官制を振り廻はして歷代の政府を脅威したることは過去の歷史に明らかである。特に清浦首相が大臣選任の大權を他人に委讓したる現内閣に於て實に其の極に達した。軍閥の横暴を抑へ憲政の濟美を期する爲めには、陸海軍大臣軍人專任の官制を撤廢して之を文官に迄及ぼすの途を開かねばならぬ。由來特權階級と官僚と軍閥とは、民權の伸張擴大が自己の專横を逞しうするに不便なる點に於て共に利害を等しうして居る。之が爲め彼等は有意識に或は無意識に常に三角同盟を形作り、以て民權の增進を阻止せんとして居る。彼等が普選に反對するのも之が爲めである。故に議會本位の政治に依りて憲政の運用を圓滑ならしめん爲めには、先づ徹底的普選を即行して衆議院の威力を强大ならしめ、軍部大臣官制を改革して軍閥の牙城を拔かねばならぬ。否らざれば政權慾の强き節操なき政黨は、或は元老に走り、或は官僚と結び、或は軍閥と私通し、或は特權階級と野合し、幾たび護憲運動を繰り返へすも憲政有終の美を濟すことは出來ない。

世間の一部に於ては護憲三派聯立内閣の成立を不可能とし、三派の逐次交迭内閣を説く者がある。總選擧の結果政界の分野が如何に展開するやは疑問なるも、三派の逐次交迭に依り革新倶樂部が單獨に内閣を組織する如きは、御用黨が過半數を夢むと同じ程度の妄想である。故に逐次交迭の如きは言ふべくして到底行はれざる處なるのみならず、一黨單獨の微弱なる内閣に向つて力強き政治を望むことは出來ない。三派聯立内閣にして

不可能とすれば護憲運動の成果は半ば消失するものである。吾人は短期を覺悟して三派聯立内閣に依り、前記の二大政策を斷行せんことを切望するものである。

護憲三派聯合内閣瓦解後に於ける我が政界の波瀾こそ興味ある問題である。何れの政黨も單獨に内閣を組織するの力を有しない。必ずや新たなる二黨或は三黨の聯合内閣となることは疑を容れない。其の果して何黨と何黨とが提携するやは今より豫斷を許さゞるも、唯各政黨過去の歴史と行懸りとより察すれば政友會と政友本黨とは當分融和の見込みはない。又憲政會と革新倶樂部とは今の黨首の存在する限り聯合は困難である。此等四黨中の二派が夫々提携して商工黨及中立派が決定權を握るのではないかと朧氣ながら感ぜられる。素より當るも八卦當らぬも八卦である。何れにしても今後若干年間、我が政界は起伏重疊、内閣は短命に終はり、政黨は離合常なく、議會の解散も屢行はれるであらう。殊に普選實施後は商工黨と竝んで農民黨、勞働黨なども産出すべく、自由、保守の思想的色彩と貧富の階級的意識は漸次濃厚となり、初等政治學教科書の如き抽象的政策を羅列したる既成政黨は次第に分解作用を遂げて、左右兩黨の旗色が鮮明となるであらう。是れ今回の不合理なる特權内閣の出現と、無理由なる衆議院解散とに依りて一層適に激成せらるべき産物である。此の期間政界は斷へず紛糾し、社會は幾分動搖するも、是れ憲政の彼岸に達する爲に、渡らねばならぬ流である。越へねばならぬ坂である。英國は過去百年間に徐々として而かも確實に此の流と坂とを渡越して來た。日本は比較的短期間に之を渡越せねばならぬ丈け、流は急に、坂は險である。

今回の總選擧は特權軍と民衆軍との政權爭奪戰である。特權軍勝つか、民衆軍勝つか、憲政の興廢此一戰に在る。一方には權力の塹壕に據つて金力の爆彈を投ずる特權軍がある。他方には護憲の旗を飜して突撃する民衆軍がある。而かも其間には政友、憲政、革新、政友本黨、商工黨、中立派などの四派五派が入り亂れ、亂れ纏れての大混亂である。競爭は極めて激烈に、極めて眞劍に行はれるであらう。政府の干渉壓迫は或は避け得ずとするも、唯此際憂ふべく警しむべきは各種暴力團體の擡頭である。勝たんが爲めには武器と戰法を擇ばざるが戰の常である。歐洲戰爭には殘忍なる毒瓦斯も使用せられた。無防禦都市の爆撃も行はれた。今回の政戰に際しても或る黨派は早くも暴力團の雇入を交渉したとか、せぬとかの噂もある。思想團體として暴力團の存在せることすら、既に大なる社會の不安である。主義政見の言論戰に依るべき選擧場裡にまで暴力團の跋扈を許す

が如きことあらば、是れ憲政の根本的破壞である。尋で來るものは暴力革命の外にない。官憲も、政黨も、此の點に對して特に留意と戒心とを要する。我が國に「マクドナルド」の出づるは前途尙ほ遼遠である。せめて和製「ムツソリニ」の出現だけなりと防止せねばならぬ。

清浦內閣は衆議院を無視し、國民を蔑視し、立憲の精神を蹂躙したる貴族特權內閣である。併しながら清浦內閣の出現は我が憲政發達の爲めに決して無意義ではなかつた。多年衆議院に絕對多數を擁して橫暴專恣を極めたる舊政友會は、此の內閣の出現に依り外力を用ゐずして小氣味よくも眞つ二つに分裂し、政會革新の實は半ば達せられた。特權內閣の出現は政黨の覺醒を促し、護憲三派は元老に對して政治的絕緣狀を叩き付け、元老なるもの丶勢力は今や全く地に墮ちた。特權內閣の傲慢なる挑戰に對し、國民の憤激は今や火の如く、內閣打破の餘勢を以て貴族院の改革を斷行せしめねば已まぬものがある。政友會の分裂、元老の沒落、貴族院の改革、此の三つのものは清浦內閣の產みたる豫期せざる大副產物である。泥棒が巡査に職業を與ふる恩人であると同樣の意味に於て、清浦老は我が國憲政の發達を促進したる殊勳者である。之をしも禍轉じて福となると云ふのであらう。(一三、二、五)

混沌たる現政局觀

文學博士　三宅雪嶺

勢が到るべき處に到つたのは言ふ迄もないが、やはり然ら云はずに置けぬ。政界のみでなけれど、日本の政界は割合に整つたと云ひ得ると同時に、割合に整はぬ所がいろいろある。廢藩置縣後五十幾年で一通り憲法政治の形を成した事、他の國に較べて手際が好いと賞められぬでない、何處にそれだけの期間でそれ程に爲し得たのがある乎。併し何と云ふても急に間に合せた跡があり、鍛鍊が足らず、直ぐと缺けて崩れようとする。世間に粗製濫造と云ひ、政界の事は濫造でなくとも粗製たるを免かれず、中に粗製濫造と云ふべきものもある。粗製品として出來の好いといふ位の所であり、精製品とするに尙ほ隨分手を掛

けねばならぬ。バラック建てとしては念入りであらうが、何處となくガサ付いて居るを許さねばならぬ。政府も議會も政黨も、外觀だけは不思議な程整つて居り、英國と比べ難くとも、歐大陸に持ち出して遜色なく、寧ろ優つて居ると云へぬでない。英國で吾が元老制を賞め、之に倣はうと云ふ者があつたなど、強ち怪しむべきでない。

恰かも日本が國家として纏り、世界に打ち出すと共に維新の大改革を遂げ、内に憲政を施し、外に戰役を決行し、強國とし大國として立つに至つた如く、種々の機關が整つたけれど、何を見てもいくらか間に合せがあり、それを本物にするに多少の力を費さねばならぬ。形が出來上つて居つて、事實の整はないのがある。伊藤公が明治天皇の御思召で憲法取調べに從事した時、政黨について疑を懷き、短日月で後に見るが如きを豫期せず、獨逸に則つて謬りなからうとした。所で衆議院は種々に派別しながら、大體に於いて政府黨及び反對黨に別れ、動もすれば二大政黨の對立するに及ぶかに見える。伊藤も政黨に希望を屬し、吾輩ならば立派に造つて見せるとも思うた。事が志と違つたけれど、絶對多數黨の首領が大命を拜し、内閣を組織するやうになり、剩へ平民宰相と稱するのが出で、英國そつち退けと云ふの有樣であつて、他日反對黨が取つて代り、天晴れ政黨政治の實を擧げようと外人の目に映じた。前に自由黨と改進黨とが對立し、後に政友會と憲政會が對立し、選擧毎に兩政黨の競爭を見るところ、政黨の發達を示して居るらしい。只その何を以て爭ふかと云へば、主張に於いて聽くべき事少く、對立するが爲めに對立する事、源平の爭ひ、山名細川の爭ひ、徳川非徳川の爭ひに似て居る。地方である豪家の若旦那が政友會に屬すれば、之と肩を較べる豪家の若旦那が、憲政會に屬し、何かにつけて爭つて居る。何處でも政黨は幾分かその傾向ないでなけれど、主義政綱の違ひが今少し判明して居る。英國の王黨・民黨、保守黨・自由黨と豫め政綱政策に於いて分れた。日本の政黨が政綱政策で區別し難いのは、自由黨に對して改進黨が出で、リベラルもプログレツシイヴも英國で同意義になり、立憲政友會も立憲同志會もコンスチチューショナル、ポリチカル、アツソシエーションと云ふに於いて變りがない。標榜する主義に於いて何程の差異なく、政權を占めて官吏更迭と共に我心を異にする所が差異と云へば云へる。二大政黨の對立を理想とする者が遺憾とするのは、一方が餘りに多數、一方が餘りに少數、相互に内閣を組織し難いといふのであつて、政綱政策を問ふ所甚だ少い。それではならぬといふ氣分の昂まり、革新倶樂部で政黨改造を企てたが、何處から手を着ければ宜いかに惑

ふ。政黨として存立するのは政權を得よう、内閣を組織しようといふのであつて、蘇我氏が起り、藤原氏が起り、或る勢力家が力を得ようとするのと趣を同じくして居る。如何に政權を得、之に伴つて利益を得ようかと云ふのが、黨員根性の根柢を形造つて居る。現はれた所は二大政黨の對立に近く、歐大陸の多くの國が小黨分立するのと違つて居るけれど、利權爭奪を除いて、見るべきものの少いのを如何にすべき乎。利權爭奪は昔よりの事、經驗も積んで居り、以心傳心、頗る巧みなのがある。政友會と研究會と妥協したのは、其の點に於いて巧みと云へる。歷史上に此の類が幾つも見出される。

然し憲法政治はさういふ事で宜いものか何う乎。源平又は山名細川は政黨と云へる乎。黨員自らそれで宜いとし、少くとも自ら怪しむ所ないが、明治維新を起した氣運は、永く其の儘に續くを許さぬ。各方面に變化があり、片田舍の女中まで手紙を書き得るに至つては、舊幕時代と同樣に見做すべきでなく、固より源平と同樣に看做すべきでない。原氏が政友會を絕對多數黨にし、研究會と提携したのは、政權を獲得し、之を維持するの策としても、何處ぞで破綻の起るに定まつて居り、大正年間に幕府を維持しようとするのに類似する。一時絕對多數黨の勢を張つても、利權を以つて集まる者は、利權を以つて分れるを免かれぬ。從來利權の外に多數を拘束する所なく、豐臣德川といふ所でこそ利權分配を自由にし得れ、時代の甚だしく異ふ大正年間に其の眞似する譯に行かぬ。原ならばと云ふが、原が存命しても如何であつた乎。高橋氏が後繼者となると共に、內閣が改造非改造の軋轢で瓦解した。後に高橋氏が首相とたれば、或る一派が勢力を得、他の一派が勢力を得なくなる。絕對多數黨の首領が必ず大命を拜すべきものとし、それが組閣すると共に、或る一派に於いて政治的致命傷を受けるを免かれぬ。其の一派から見れば高橋が大命を受けないに如くはない。其の消息は元老にも準元老にも研究會にも略ぼ知れてゐる。加藤內閣の後に山本內閣が成り、更に清浦內閣が成るが如き、奇異な現象を呈したのも、絕對多數黨としての政友會で組閣するのが紛擾を惹き起す所以と氣付かれたのが因を成して居る。其の隙に乘じて、野心家が細工を運らしたのであつて、政友會の絕對多數が頗る疑はしいと云ふに根ざして居る。疑はしいにせよ、既に幾年も位置を占め、利權を得、何とかして前の如くし得るを望ますに居れなくなつて居る。其處に根本的矛盾がある。

自由黨が始めて起つた時、明治維新運動の中堅、薩長土肥中の士が政權より離れて自由を唱へたのであり、其の中心人物と見做さるる板垣伯は、政權の欲望と自由の精神との板挾みにな

つて居り、一時自由の爲めに活躍したけれど、漸くして政權に傾いた。當時自由に共鳴したものに二た通りあり、一は利權の爲めにするのであり、一は自由の爲めにするのである。多少利權に因緣あるものは、何とかして之を得るに努め、機會さへあれば之を握らうとし、早く政府に近づき、遂に元老の隨一伊藤公を總裁に仰ぐに至たり、總裁專制を是認するを辭しない。黨員中に自由民權で入獄したのを語り合つて誇るのがあるけれど、自由の如何を考へること甚だ薄く、殆ど之を感じもせず、自由は附燒刄の著しいもので、彼も一時、此も一時として居る。

然し國勢の發展は一日として熄まず、雲助連まで悉く義務敎育を受け、いくらか國家社會を考へるやうになつて居り、各自爲すべきを爲さうとし、知らず識らず自由の空氣が擴り來つた。普通選擧と云へば輕佻者流の妄想にすぎぬとなつて居つたのが、眞面目で認められ、實現の避くべからざるに至つた程であつて、政界を以て單に利權を爭ふべき所のみとせず、各自固有の判斷を以つて、是非せねばならぬとするやうになつて居る。普及といふ程でなくても、其の勢が相應に盛んである。絕對多數黨なる政友會員は、此の二つの流れに挾まれ、或る部分は專ら政權を獲ようとし、或る部分は自由の爲めに戰つて見ようかと考へたりする。眞に自由の精神を體得したものは、あるかなしかであり、憲政擁護など上の空にいふやうでも、何處かに反抗の骨を備へて居るのがある。柄にない事をするものとばかり云ふ譯に行かぬ。一月十五日高橋總裁邸で幹部が寄合つた時、實に政友會の興廢を決しようとするのであつて、總裁自ら貴族院を去り衆議院に打つて出ようと明言したは、一大覺悟と稱すべきであり、恐らくそれで全黨を引き締め得ると考へたらうが、既に舊自由黨の精神を失ひ、政府黨としての味を嘗めるに慣れ、穩健着實とか、協調和階とか稱して、清浦內閣を擁護しようとする者が多くなつた。自ら稱して政友會の傳統とするのは、多少の事實がある。政友會の膨張したのは、政府黨としてである。然し去る者百四十八名、殘る者百二十何名となつたのは、二つの潮流の比例を示す處がある。掛け引きの巧拙もあるとし、略ぼ切半したのが面白い。幾年か政府黨が必ず多數と定つて居つたのが、此處で一先づ少數といふを明かにされた。前に反對黨が連合しても、少數を免かれなんだのに、政憲革三派で多數になつて居る事、近來の變革と云はねばならぬ。

內閣側では總選擧で與黨多數と見て居らうが、前に必勝を期する事が出來、今さら行かず、隨分懸念して居る。結果は豫め知り難く、要するに力を注ぐの如何にある。政・憲・革三派に於て能ふ限りの力を盡くしたならば、勝利を得べく、力の注ぎ方

が足らねば、失敗するかも知れぬ。勝つても敗けても來年を以つて政界が變革する事になつて居る。絶對多數黨として政府を形造つて居つたのが、多數を制し得るか何うかが疑はれ、假りに制したとして、辛じての事であらう。政・憲・革三派の將來は分らず、種々の出來事があり、味方が敵になつたりしもしようか、何時でも政府黨が多數を制するを打ち消し、反對黨が多數を制するの可能性あるを證明した。幹部連は融通の利きにくい連中なれど、一つ奮發して新に大政黨を組織し得ないであらう乎。人の選り好みすれば際限なく、あの男がと毛嫌ひするのは、大抵に止め、世界に面して、國家社會を如何にすべき乎、必要な處置を取らうとすれば、自由黨とも改進黨とも進歩黨とも稱し得べきものを形造り得るでない乎。政友本黨は自ら保守黨を以つて居るらしく、さうでなくてもさうなるに決まつて居り、之に對して進歩黨が成立してこそ政黨の意義を明かにし得るであらう。英國では新に勞働黨が發達し、內閣を組織し、大國を以つて露國承認を敢てする勢になつて居る。世界は少しの油斷を許さぬ。日本の政界に生活する者は、いくらか眼を開き、之ではならぬと思ふべきでない乎。

當分小黨分立を希望す

安部磯雄

從來我國の政治は二大政黨主義で押し進んで來た。之れは日本に於ける政黨政治の必然がさういう形を執つたのではなく、我國の政治的過程に於ける偶然が斯くの如き形式を生んだまでに過ぎない。然るに此度の政變とは極めて密接ではないが、多少の關係のあるのは政友會の分裂である。之れは我國の立憲政治の上に於て重大なる意味を持つものであつて、殊に將來の日本の政治史を書く者が振り返つて見たならば甚だ意味深き出來事でなければならぬ。我國に於ては二大政黨主義の存在は其國民性の上から云つても未だ適當であつたとは云へない。今日まで此旗幟で押して來たのが不思議な位であつて、寧ろ他の國民性の一面から考へると、小黨分裂になつた方が好いやうに思はれる。此度の政友會の分裂を機會に、將來日本の政黨は幾つに

も分裂するやうになるに相違ない。今日では政友會の分裂の結果、政黨の數は四になつたが、未だ此趨勢はそれに止まらないで、更に其數は増加するに至るであらう。其理由は、國民性といふことも主なる原因となるが、他の一の原因としては、今後起る政黨は或る階級の利益を代表するものであつて、換言すれば或る主義、主張を標準とするものだからである。政黨に關する人は屢々主義、主張といふことを云ふが、嚴密に云へば從來の政黨は決して其主義、主張に依つて立つ標準といふものがあつた譯ではなく、政友會と憲政會の爭ふ理由は必しも其主義、主張のためではなかつたのである、寧ろ此二つの政黨の主義、綱領といふものは、常に極り文句の、極めて漠然とした、概括的な性質のものであつて、或る一定の政策上の爭ひといふものは見ることが出來なかつた。近來普選問題が稍々明かに二つの政黨を對立せしめる形となつたが、之れは寧ろ最近の事であつて例外と見るべきものである。將來多數の政黨が各々主義、主張に依つて立つことになり、勢ひ夫れ等の主義、主張が細かく分れるために政黨は必然に分裂作用を取るに至る。私は二大政黨で行くことゝ、小黨分裂で行くことゝの孰れが進歩であるかに就いては茲では論じない。寧ろ理想としては二大政黨主義が本當であるかも知れないが、我國の現狀から云へば未だ二大政黨の時代に達して居ないといふのが事實である。英國や獨逸を例にとるならば、日本は孰れかといへば獨逸の後を追ふといふ風になつて居る。獨逸に於いては七つ、八つの小さな政黨が存在して居て、政黨は極端に分裂して居る。日本に於ても將來政黨の分裂作用が始まれば、新らしく興る政黨は獨逸のそれのやうに幾つにも分裂するに至るであらう。今度の總選擧に於て初めて現るゝ武藤山治氏の商工黨は果して如何なる程度迄大を爲すかは疑問であるが、大政黨たる政友會が從來農民黨と云はれて來たのに對して、商工業者の利益を代表する商工黨が現れるのは當然であるやうにも思はれる。此商工黨を加へれば將來政黨は五つになる譯である。更に普選が實施された曉に於ては猶新らしい政黨が生ずるに違ひない。すぐにも考へられることとは新らしき農民黨、それは從來政友會が農民黨と云はれたのとは別の意味に於ける農民黨であつて、即ち小作人の利益を代表する政黨や、勞働黨が起るであらうといふことや、猶それに關聯して、少數ではあるが社會黨も立つやうになることが豫想される。又最近水平社の大會に於て普選のために努力するといふことを決議したから、若し水平社が勞働黨に加入しないとすれば、水平黨といふものも現れるかも知れないのであつて、それは丁度英國に於て愛蘭黨があるやうに水平黨の生れることも想

像されるのである。

斯くの如き小黨分裂の趨勢は、我々批判者の立場から見て、果して喜ぶべき現象であるかどうか。將來黨派の數が增えるといふことが、それが代表する主義なり思想なりが區々に分れ、輿論の歸着する所が明かでないために爲政者にとつて不便な點が多いといふ懸念や、小黨分裂の結果前よりも黨派的競爭が激成されて、反つて政治の腐敗を甚しからしめはしないかといふ悲觀論にも固より相當の理由がある。併し私は小黨分裂は我國の政界が一度はどうしても經過しなければならない順序であつて、それに依つて政治思想や政治道德が發達せしめられることを信ずる。其理由は第一に、小黨分裂の結果は政治の腐敗を少からしめるといふことである。二大政黨主義は英國のやうな國に於てこそ好い結果を收めることが出來るが、我國に於ては未だ弊害の生ずるを免かれない。政黨が二つ存在するといふことは、其孰れかゞ多數を占めてゐるといふことを意味する。而も一政黨が絕對過半數を擁する場合には、其狀態が比較的永く續く。それは長い物には捲かれる事大主義の國民性も手傳つて其政黨を益々大きくする爲めにも依るが、猶政權を握らなければ利權を得ることの出來ない政治を食ひ物にする政黨者流が勢力のある所に附く理由にも依る。危險は其處に生ずるのであつて、屢々聞くやうに多數黨の橫暴で、權力を押して、平氣で利權を漁るといふことにもなるのである。如何に在野黨が之れを監視しやうとしても、一方が政權を握つてゐる間はどうすることも出來ないのである。然るに小黨分裂になると勢力が一方に偏することは困難になる。議會で多數を占める爲には幾つかの政黨が聯合しなければならないので、一政黨が獨立して內閣を組織することが出來なくなり、其結果聯立內閣で行くことになる。寄り合ひ世帶であれば其內閣は或る一角から崩れる可能性を大分に持つ。其處に固定した何物もなく、離合常ならざる所に、前に云つたやうな弊害を見ないで濟むのである。離合は單に感情からばかりではなく、政治上の重大問題が起るたびに、政黨の聯合が其時々に依つて變化するのであつて、それは獨逸などの政治に於ても見ることが出來る。政治は一政黨が永久に政權を握るのでなく、それが常に離合する處に變化あり、進步があるのである。第二に、小黨分裂の時代になれば、政黨は其政策に依つて新らしい聯合體を組織するやうになる。政黨が七つにも、八つにも分れるやうになつても、結局實際の仕事をする際には二つにならなければならないので、結果に於ては、形は二大政黨となるが、其聯合體は或る政策、或る問題を標準として出來上つたものであるから、其性質は一時的であつて、永久的

ではない。其處には感情や利害關係の勢力は狹められ、主義と政策が聯合を成立せしめるやうになる。此點から云ふと現在の政黨は分かれて居る必要を見出さないのであつて、其政策を異にせず、特種の階級の利益を代表して居ない點に於て、元を糺せば同じ性質の政黨である。然るに今後に於ては、殊に普選の實施後に於ては、各階級が自己の利益を代表する代表者を選出することになり、分裂した政黨の一つ、一つが、各々それに依つて主義、政策を持つことになる。此事は又國民の政治教育に關聯して重大な意味を持つものであつて、小黨分裂の趨勢は、それに伴つて國民の政治教育を助長せしめ、國民の政治思想を發達せしめる。第三に、現在の政黨は餘りに排他的であつて譯もなく互に相排斥しあつて居るが、之れは一國の政治のためにも悲しむべき現象であるのみならず、斯くの如き惡風は社會の各方面に大きな影響を及ぼすものである。政黨と政黨の間にはもう少し度量があつて、互に包容的に行けさうに思はれる。政黨の間に包容的精神が發達すれば、議會に於てもあゝいふ亂暴な擧動をしなくても濟むであらうし、日本の議會も、もう少し上品になるに違ひない。憲政會でも、政友會でも平常俱に天を戴かずといふ勢で互に罵詈讒謗しあつてゐるが、今度の憲政擁護運動が始まると双方が非常に親密になつたやうに見える。之れを見ると政黨間の爭ひは丁度子供の喧嘩のやうであるが、それは平常政黨が感情のために支配されて居る證據であつて、護憲運動が起つて三派が提携するやうになつても、其根柢の薄弱なことが懸念される。今日こそ提携して居るが、又時日が過ぎれば元のやうに分かれて了ふだらうと想はれる。之れは政黨に訓練がなく、即ち政黨が互に大きな度量を以て反對黨を見るやうな訓練が缺けて居るからでもあるが、畢竟二大政黨が兩立對峙して居るといふことが、丁度可愛がられて育つて來た二人の兄弟が屢々兄弟喧嘩をするやうに、二つの政黨を仲の惡いものにするが、兄弟が七八人もあればいつも兄弟喧嘩ばかりして居られない如く、小黨分裂の時代になつて、絕えず形の變つた聯合が行はれるやうになれば、そこに初めて政黨も種々の苦勞を經驗して、度量も大きくなり、態度も包容的になることが出來る。私は以上三つの理由に依つて、政黨の分裂を少しも悲觀しないのみならず、寧ろ政治的に好い結果を生ずるものと思ふ。乍併斯う云ふのは二大政黨主義が決して惡いといふ意味ではなく、窮極に於て二大政黨主義は政治的理想であるかも知れないが、我國に於ては未だ其時機に達する前に、政黨が猶幾多の訓練を必要とするのであつて、其點から一度小黨分裂の時代を經過することが利益があると見るのである。要するに國民が自己

の思想を明かに言ひ表し得る時機が來たならば、大問題に就いては思想が二つに分れ、一國の全體の政治をやる上に方針が二つに落着くやうになるであらう。それまでには國民が自己の意志を投票に表現し得るまでに教養される必要があるのである。具體的に云へば英國の政黨は保守黨、自由黨の二大政黨に基で進んで來たが、此保守と自由の旗印しの下に一國の大體の政治的方針が定められて居た。然るに英國に於ても遂に舊い旗印が變らなければならない時が來て、今日勞働階級の意識が明かになり、其利益が考へられるやうに至つて、勞働と資本の新旗幟が對立するやうになり、英國の政治が其處に落着くやうになつた。英國の政黨の現狀は三すくみの形であるが、結局自由、保守對立の時代から、資本、勞働對立の時代に移る形勢が明かであつて、自由黨と保守黨の孰れかゞ勞働黨か資本黨の孰れかに屬することになり、英國の政治の看板は其一面は勞働黨、他の一面は資本黨に依つて代表されるやうにならうとして居る。然るに日本の政黨は未だ自由、保守對立の時代にも達して居ない。今後小黨分裂の結果、我國にも其政黨に依つて、英國に於ける自由、保守のやうな二大政黨が生れるやうになるかも知れぬが、小黨分裂の趨勢が結局二個の政黨に纏つて、或は一足飛びに資本、勞働の兩政黨の對立時代が來るかも分らない。

私は次に此度の憲政、革新、政友三派の護憲運動の批評に移つて見たい。政友會が分裂した後に、政友本黨の首領株の演説の中に、政友會でも、憲政會でも、今迄に加藤、山本兩内閣を默つて看過して置きながら、清浦内閣に至つて護憲運動をやるのは論理に合はないと云つて批難して居る、一應尤もな批難であつて、本當ならば政友會にしても、憲政會にしても、加藤内閣の時に既に護憲運動をやるべきであつたが、護憲派の立場から云へば、それは程度の問題であつて、加藤内閣や、山本内閣を看過したから清浦内閣も許すといふ論理は成立たないので、寧ろ三度目だから護憲運動を起したのだとも考へられる。要するにさういふ議論は詰まらない議論であつて、過去を責めるならば、政友會にしても、憲政會にしても共に恥かしいものである。で、私は此際政黨が互に非常な寛大な心を持つて、他を責めて、過去を洗ひ立てるやうなことはなるべく愼んで之れを避けるやうにしたいと思ふ。例へば今度三派が護憲運動をやるに就いても、政友本黨が清浦内閣を援助するから、三派が聯合して、之れを責めるといふのは、單にそれ丈けが護憲運動の目的ではない。それよりも此際最も望ましいのは、政友會あたりが普選即行の旗印を掲げて貰ひたいことである。政友會内にもさういふ議論があるやうであるが、若し斯かゝる場合に政友會が

從來の行掛り上、看板を即時に塗りかへることは黨の面目に關するといふやうな考を持つことがあれば、それは下らない偏面論であつて、普選尙早論に固執して居るよりも、普選即行論を唱へた方が遙かに進歩的であつて、有意義なのであるから、此場合に全然態度を變へることは歡迎すべきである。假りに政友會が普選即行の旗印で總選擧に臨むならば、それは必ず政友本黨の弱味とする所であるに相違ない。今日それに反對する政黨は如何に政府の干渉があつても總選擧に勝利を得ることは困難であらう。此事は睹易き道理であつて、特に茲にそれを云ふ意味は、護憲運動に當つて、反對黨が徒に過去の事柄にばかり拘泥しないで、自己の信ずる所に從つて、前途に邁進することの有意義であることを悟らしめたいために外ならない。次ぎに、政友本黨が淸浦内閣に對して好意的態度を示して居るやうに見えるが、正面から超然内閣に同情を寄せたり、公然と名乘りを上げて淸浦内閣に援助を與へることを明言し得ることが、今日如何なる政黨と雖も本心から出來得ることかどうか。假りに今政友本黨が一時淸浦内閣に好意を持つたとしても、若し總選擧の後に於て、政黨政治の原則に立ち返へつて、他の政黨と提携し得るやうに態度を改めて來たならば、其時は他の政黨も、洗ひ立てれば同じ疵持つ過去を責めないで、政友本黨が政黨政治の伴間入りをするのを歡迎する丈けの寛容を持たなければならぬ。

茲に於て、護憲運動派に更にこれ丈けの約束をして貰ひたい。それは今後如何なる政變が起つても、後繼内閣は必ず次の比較的大なる政黨を登薦するといふことである。護憲運動派は單に淸浦内閣を倒潰するだけが目的ではなく、更に進んで國民の前に、政權は決して政黨以外に渡さぬことを約束しなければならぬ。即ち政權は常に政友會から憲政會に、憲政會から政友會といふ風に傳へられなければならないが、小黨分裂の時代になると獨力で内閣を組織することが出來なくなるから、其場合には政見の一致に依つて聯合した政黨が内閣を組織する。而も政變があれば前の内閣の組織者は必ず後繼者として別の政黨に政權を讓るやうにすることと丁度政友會が憲政會に政權を傳へることが理想であるやうにしなければならない。然らざれば又思ひがけない者に横合から政權を奪はれる結果となる。今政黨から證文を取つたところで失敗するだらうといふ懸念もあるが、それは一概に云へない。國際間の約束は危險な場合もあるが、之れは内輪の問題である。而も國際聯盟といふものがあるがために兎に角國際道德の發達して居る今日、それに依つて國際間の問題も解決されるやうにならうとして居るのであるから、國内の政黨が政黨以外に政權を渡さぬことを約束する證文は必しも無

効であるとは云へぬ。然らば元老の勢力も最早問題ではなく、貴族や藩閥も其時には影を潜めるに至るであらう。更にも一つ護憲派に約束して貰ひたいことがある。それは此一事を約束して貰はなければ前に云つた約束も自ら實行出來なくなる種類のものであつて、それには總選擧を行ふ時には言論以外のものは決して用ひないといふことが守はれなければならぬ。金錢も勿論其第一のものであるが、現在の事情から云つてそれの使用を禁ずることは實行が至難である。然し茲にやらうと思へば出來ることは、選擧の場合に政府黨が警察力や其他の力を以て反對黨に干涉しないことである。從來我國に於て選擧が公平に行はれなかつたのは、一面に於て政黨が狹量であつたことを示す證據である。即ち政友會内閣が辭職した場合に後繼内閣に憲政會を奏薦しなかつたのは單に憲政會を平常憎惡するがためではない。憲政會内閣が政權を握れば、假りに議會に於て政友會と意見の相違から解散をした場合には、政府が官憲の力を以て選擧に干涉する惧れがあるために、それがために政友會が敗れることを恐れたからである。選擧が常に公平に行はれるものに定つて居れば、假りに政權が反對黨に移つても、在野黨は再びそれを恢復することが出來るが、然らざる場合にはそれが政黨をして狹量ならしめる原因となる。政友本黨が清浦内閣を援助するといふのも、其本旨は、百四十何人の脱黨者を引き入れることが出來ても、未だ何となく分離後の頼りない心持から、總選擧に於て政府の助力を仰ぎたいのにあるのかも知れない。それはさもしい考であるが、政友本黨に限つたことではなく、從來總ての政黨がさういふ考を持つて來たのであるから、單に其中の一黨だけを責めることは出來ない、元來政府黨が總選擧に於て常に有利の地位を占めるといふことは甚だ不合理であつて、選擧が公平に行はれないといふことは我國の政治の幼稚を語るものでなければならない。茲に運動競技を例に引くのは不適當であるかも知れないが、今私はそれに就いて感じたことを語つて見たい。我國の運動競技に於ても種々の弊害が伴つたが、今や漸く過去の事實にならんとして居る。運動競技は飽く迄も技術本位のものであつて、勝敗は常にそれに依る爭に依つて定められなければならないが、我國の國民性も手傳つて、競技に組織のない野次馬が現れて味方を勝たせるために相手に妨害を加へるやうなことが多かつた。試合などではベースボールや、テニスや、ボートレースなどの競技が行はれる時に野次馬が竹竿などを持つて行くことは珍らしくなかつた。また神聖であるべき審判官が、自分の學校に有利なやうに宣告を下すことも行はれてそれで有名になつた不公平な審判官もあつた。國技館の相撲は

實力の爭であるべき筈であるが、東京、大阪の合併相撲を興行した時に、東京方が大阪方を頻りに負かす所から、大阪の相撲贔屓の博徒が東京相撲を脅迫したといふやうな事實もあつた。我國の運動競技の過去の歴史には斯ういふ事實もあつたが、我我が十年間位の苦心に依つて、兎に角運動競技に所謂フエアープレーが行はれるやうになつた。政界に於ける總選擧は一種の競技である。それの勝敗は飽く迄も言論の力に依り、政治上の意見に依つて定められなければならないが、それ以外の官憲の力や、金の力が働く場合には政治を腐敗せしめる原因となる。

總選擧が公平に行はれゝば反對黨に政權を讓ることも亦恐るゝに足らない。其他の弊害も又期して一掃さるべきである。護憲運動に携はる三派の人々は、今後政黨以外に政權を讓らぬことを國民の前に誓ふと同時に、彼等が政府黨となつた場合に選擧を公平に行ふことを固く約束しなければならぬ。繰り返して云ふ如く、護憲運動は清浦内閣を倒す丈けでは元の木阿彌である。それを倒し得たことだけで安心して居れば又何時か超然内閣の飛び出すことを期し難い。

妥協政治は尙續く

林　癸未夫

我國の過去の政局は恐く妥協によつて維持されてゐたといふことができる。妥協の當事者は言ふ迄もなく特權階級と政黨とであつた。特權階級を代表するものは、時としては官僚であり、時としては貴族であり、時としては軍閥であつたが、其相手方は常に必ず政黨であつた。政黨が朝に在る間は、妥協が政權運用の第一要件であり、政黨が野に在る間は、妥協が政黨擴張の第一要件であつた。言ひかへれば、日本の政黨は他の勢力と結び付くことなしには、存立を完し得なかつたし、特權階級も何れかの政黨と結合することなしには、自由に權力を用ゆることができなかつた。尤も稀には妥協の破れたこともあつた。併しそれは妥協の一方が他方に要求する代價が餘りに不廉である場合に起つたのであつて、決して彼等が主義として妥協を排

斥したからではなかつた。否寧ろ一層有利な條件で妥協を賣付ける手段として、一時心にもない非妥協顔を見せるに過ぎなかつた。畢竟妥協は政黨に取つても特權階級に取つても隻脚者の杖のやうなものであつた。それなしに彼等は到底立つて歩くことができないのであつた。強ゐて歩かうと欲しても遠からず顚倒するにきまつてゐたのであつた。

かくの如く妥協が我政局を支配する第一原理であることは誰も承知してゐたが、これを實行する手腕にかけては、誰も原敬に及ぶものはなかつた。妥協の名人と謂はれた桂太郎も、實は其秘訣を原に學んだようなものであつた。原は妥協の賣手としては、如何にすれば買手をして最も高い代價を支拂はしむることができるかを良く心得てゐたし、又妥協の買手としては、如何にすれば其代金を最も有効に使ひ得るかを良く心得てゐた。彼は必ずしも價の不廉を厭はなかつた。唯品物の眼利きに於て、又賣買の驅引に於て何人の追隨をも許さなかつた。要するに彼は最も商賣上手な妥協取引人であつたのである。彼は曾て大新聞の社長であり、大會社の副社長だつたから、彼の商才は或は其經驗から得來つたものであつたかも知れぬ。何れにしても政治上の取引に於て、彼は無比の練達者であり、又成功者でもあつた。

原敬の行つた政治取引中最も重要なものは研究會との妥協であつた。由來研究會は政黨政治家に取つて最大の苦手であつた。伊藤も增稅案でこれに惱まされた。西園寺も郡制廢止案で其反噬を買つた。大隈も減債基金問題で痛手を負はされた。凡そ衆議院の多數黨を基礎とする歷代の內閣に取つて、研究會ほど厄介な相手はないと言つて可かつた。從つて若し衆議院に多數を擁する政治家にして、研究會をも確實に籠絡中に納めることができたなら其者は忽ち政界の覇者たるを得べき筈であつた。併しそれはかなりの難事業であつた。伊藤も大隈も西園寺も此難事業には手を觸れず、若しくは觸れても失敗した。それが最後に原によつて首尾よく成功したのであつた。彼が之に向つて拂つた代價の幾何であつたかは知らないが、恐らく彼としては畢生の大取引であつたに相違ない。彼の商才は恐らく之に傾注し盡されたのであらう。併し彼が得た報酬も亦大きかつた。彼は一躍して天下無敵の地位に上つた。天若し彼に尙十年の生命を許したならば、恐らく後世に原執政時代として記憶される一種の獨裁政治を現出したであらう。彼は實に權政の絕頂に達した其第一步に於て斃れた。或意味に於ては彼の爲に痛惜すべく、或意味に於ては彼の爲に慶賀すべきであつたかも知れない。

原の行つた妥協政治の政友會と研究會とに與へた効果が、二

つながらに餘りに目覺ましかつたがために、兩會の會員等はそれを謳歌する以外には何も知らなかつた。が併し元來兩會の會員等は、原といふ千手觀音を中心として各々其左右に操縱されてゐたのであるから、突然原觀音が去つて、高橋達磨が其跡に据つたことは、彼等に取つて甚だ興醒める業に相違なかつた。殊に高橋は政友會と研究會とを今まで通り兩腋に抱へ込んで置くだけの靈驗を缺いてゐたので、勢ひ研究會が政友會から離れ去るか、さなくば政友會が高橋を追ひ退けて別の本尊を据ゑるかしなければ、兩會の妥協は到底永續する見込はなかつた。そこへ持つて來て意外な淸浦內閣が出現したので、政友會は否でも應でも此問題に決着を付けなければならない場合となつた。そして其結果が幹部派と改革派、言ひかへれば特權內閣攻擊派と擁護派、對研究會非妥協派と妥協派との分裂となつたのである。

政界に事ある每に、擅に新聞によつて製造される輿論なるものは、政友會の殘黨を以て政治的正義の士とし、政友本黨を以て政治的不義の徒とし、褒貶の向ふ所悉く一致して居るやうなことを言つてはゐるが、果してさう輕率に斷定し得るであらうか。原を援けて妥協政策に最も力を致した者は、却つて野田、岡崎横田等政友會幹部派の棟梁連ではなかつたか。彼等は徹頭徹尾舊式の政黨員氣質で滿されてゐる筈である。彼等の正義論や護憲論を迂濶に眞に受ける者は早晚馬鹿を見ないとも限らない。私の見る所を以てすれば、今時の政友會の分裂は、政治の根本主義としての妥協非妥協の爭ひでは決してない。又特權階級の跳梁を是非するの爭ひでも決してない。要するに唯、妥協の報酬を獲得する時機の遲速に關する爭ひなのである。所謂幹部派は妥協の爲めに過去に支拂つて置いた前金に對し、速に品物の引渡を要求して、聽かれなかつたが故に、最早これ以上は待てぬ、破談して喧嘩しても品物を奪い取る外はないと力み出したのである。之に對し所謂改革派は、品物が手に入らぬのは、先方が惡いよりも寧ろ此方の番頭の面付や應對振りがまづいからである。だから先づ番頭を取りかへることが肝要であるが、併しそれができぬならば、今少し待つが可い。此際破談して喧嘩腰に出るのは却つて此方の損になるばかりだといふのである。そこで彼等は議終に會はずして分裂したのである。若し彼等が品物をさへ受取つてゐたら——政權にありついてゐたなら、決して彼等は分裂するきづかひはなかつたのである。。若し幹部派が眞に主義として妥協政治を排し、特權階級の政權掌握を非とするならば、彼等は寺內內閣を支持し、加藤內閣を擁護する道理はなかつたのである。しかのみならず我國の政治上の習慣並に政情の實際から見て、衆議院の多數黨が常に政權を握り、貴

族院は唯それを監督さへすれば可いといふやうな理論の、到底直に實現し得べからざることは、誰よりも政友會員が一番よく知つてゐる筈なのである。何となれば山縣、桂以來歷代の貴族院内閣は大抵政友會の援助によつて維持されたものであつたからである。若し貴族院の勢力過大なるを咎めたならば、其罪は半ば政友會の負ふべきものである。若し又研究會の政權掌握を攻撃するならば、研究會をかくの如く增長せしめた原因は、大部分政友會の妥協政策であつたと言はなければならぬのである。今や彼等は眞にそれを悔ゐたであらうか。私は假にそれを信ずる能はざるを遺憾とする。彼等眞にそれを悔ゆるなくして、唯一の便宜のために、政權爭奪の一手段として非妥協を高唱してゐるのならば、私は寧ろ公然妥協を標榜する政友本黨の正直を嘉せなければならぬ。

憲政會に對しても亦同じ事が言へる。憲政會の過去の政治的罪惡を政友會に比較すれば勿論輕少であるに違ひない。併しそれは憲政會の素質が善かつた爲ではなくして、只機會が與へられなかつた爲である。衆議院に與黨を有たぬ者が政黨に妥協を求める場合には、政黨中の最有力なるものを選ぶのが當然である。從つてこれまで政友會は慢性的御用黨であり、憲政會は慢性的反對黨であるかの如き観を呈してゐた。併しそれは憲政會に取つては痛切な悲哀であり、羨望であつたのである。若し機會だにあらば特權階級の一角と妥協して、政友會の行ひつゝある所を自分も行はんとするのが、憲政會の衷心の秘策であつたに違ひない。而して其待望した機會は山本内閣の出現によつて纔かに充され得るかに見えたのであつたが、意外の事件は之を空望に歸した。而して次に出現したものは傳統的に政友會の味方であり、憲政會の敵である研究會内閣であつたから、憲政會は悲しくも妥協の望を絶つて、自ら其正面の敵たることを名乘るべく餘儀なくされたのであつた。思ふに當時憲政會は、政友會が擧つて現内閣を擁護すべきを豫想したであらう。清浦首相も他の閣僚も、政友會は當然其御用黨たるに甘んずべきを豫想したであらう。そして國民は其報酬として普選實施の延期と、次期總選擧の絶對多數と、次の内閣組織とが政友會に惠まれるであらうことを豫想したであらう。そして此豫想の下に、内心最も意氣の沮喪を感じ、生色の頓に失せる思ひのあつたのは憲政會に違ひなかつたのである。

所が凡ての人の豫想を半ば裏切り、半ば實現したものが政友會の分裂であつた。そして意外にも多年の政敵たる政憲革の三派聯合の護憲運動となり、議會の解散となつたと同時に、原以來の傳統的妥協政治を擁護せんとする政友本黨が新に生れて、

早くも衆議院の第一黨となつたのである。そして之が次の總選擧に於て益々黨員を增加し、適當なる時期に衆議院の最大政黨として清浦內閣から圓滿に政權の讓渡を受け、研究會との妥協によつて政機の運用に當るであらうことが今から略確實に期待されるのである。若しそれに護憲三派が聯合して反對するならば、議會は再び解散されるであらう。而して終に政友本黨が絕對過半數を占めるに至るであらう。而して彼等のモットーたる穩健着實は妥協政治の金看板となるであらう。これが近い將來に於ける我政局の歸趨であると私は見てゐるのである。

之を要するに憲法實施以來の我國の政治は、幾度か短期間の斷絕はあつたにせよ、大體に於て特權階級と政黨者流との妥協の連續によつて行はれたのであつた。政局の安定、政務の進行は唯此兩者の妥協によつてのみ可能であつた。從つて妥協に最も巧妙なる者が常に政局の事實上の支配者であつたのである。過去に於て然り、將來に於ても亦必ず然るであらう。今度の護憲運動や政友會の分裂で妥協政治が終熄すると思ふのは早計である。政友本黨は勿論、政友會や憲政會だつて何時寢返りをうつか知れたものではないのである。國民は特權階級と政黨との妥協政治は尙續くものと覺悟しなければならぬ。權勢と利慾とが政局を動かす最も强力の槓杆である限りは——

紛々擾々たる政界の歸趨如何

法學博士 堀江歸一

英吉利では、勞働黨の首領に大命が下つてから、殆ど一瞬の間に、勞働黨內閣が組織された。然も勞働黨が斯る地位に立つであらうと云ふことも先頃の總選擧以來、常に世人に依つて、期待されて居つた所であつて、政界の歸趨は其歸す可き所に歸し、趣く可き所に趣いたと云へる。之に反して我國の政界は何とした紛々擾々たる事であらうか。近時政界の重大案件として、世人の注目を惹起して居るのは、清浦內閣の組織、此內閣の倒壞を目的とする政友憲政革新三派の憲政擁護運動、政友會の分裂、脫會派の新黨組織等であつて、一方に近く行はれる議會の解散、之に次ぐ總選擧を控へて、政界は將來如何に動くで

あらうか、政權は何人の手に歸して、如何なる政治が行はれるであらうか、殆ど推測の下しようのないのは、我々立憲國民の持つ一ツの惱みであるとしなければならない。

單に私は右の點に就て、惱みを持つばかりでない。我國に存在する政黨即ち政友會共れから分離した政友本黨、憲政會、革新俱樂部等の何れのものに對しても、事を共にしようとか、共にしないまでも、共鳴同情しようとか云ふような感情の起らないことを以つて、他の惱みとするのである。政友會は黨與の半分以上を失つたと云ふ大打撃を蒙つた爲めか、共總裁高橋子が隱居して無爵と爲つた爲めか、共れとも憲政擁護運動に從う爲めか、頓に新聞紙上の評判を恢復し、好評嘖々たるようであるが、私は此點に於て、我國新聞界の政黨に對する批判の輕卒なることを感じる。元來、政友會が今日まで絶對多數の黨與を衆議院に擁し、殊に研究會との提携濃密と爲つて以來、多數黨に特有なる横暴の手段を逞うすること甚だしきに過ぎ、普通選擧の實行を妨害するのは勿論、無産者階級の利益を伸張し、共權利を增進する施設に對しては事毎に反對し來つて、以つて共實現を妨げるを常とした。而して如何に政黨の威力を發揚するに必要であつたとは云ひながら、自家の黨與には種々様々なる地方的利益を與へ、又之を與へる爲めに、漫に積極政策を標榜し、我國財政に大なる禍亂を招くに至つた。斯る遣口は天人の共に怒る所であつて、何時か嚴しき制裁を受けること、思はれたが、人盛にして、天に勝つものか、高橋内閣の瓦解以來政權を離れても、兎に角多數を擁して、政界の一大勢力であつた。然も今回遠くは高橋内閣時代に於ける改造非改造の爭や、近くは改革非改革の鬪ひに累されて、多數の脫會者を生じ、衆議院に於て、第二黨の地位に落下したのは、全く因果應報の然らしめる所と云はなければならない。

若し共れ政友會の憲政擁護運動に至つては、私をして破戒僧の空念佛を聽くの感あらしめる。往年桂公の第三次内閣組織に際し、共宮中府中の別を紊ること、内閣首相として、權勢を擁しながら、一方に政黨組織に着手するの不合理であることを理由として、憲政擁護運動の起つた際、政友會も共始めに於ては在野黨の一として之に加擔しながら、愈々桂内閣倒れて、山本伯に大命降下するや、忽にして同志を賣り、山本伯を助けて、組閣を行はしめ、原敬以下三四の黨員は山本内閣に閣員たる地位を占め、曩日の憲政擁護運動の如きは、全然之を閑却して、顧みなかつたのである。十年後の今日、清浦内閣が貴族院を根據として、組織された故を以つて、再び憲政擁護運動を試み、自家の權勢を維持する爲めには、超然内閣である加藤内閣を援

助した事實は恰も忘れたるが如くに裝ひ、清浦内閣に依つて、之を否認し去らうとするに至つては、政友會の自家撞着驚くの外はない。斯る運動に依つて、近く來る可き總選擧に有利なる立場を展開しようとするものであるかも知れないが、國民は果して斯る淺墓なる政友會の所爲に乘せられ、政友會積年の罪惡を寛恕するであらうか、私の信ずる能はざる所である。若し其れ高橋の隱居に依る爵位の喪失、別家に依る平民籍の取得を以つて、何か天下の一大事であるが如くに吹聽する政友會末社連の態度に至つては、滑稽とも何とも云ふの外はない。原が無爵を以つて、終始した爲めに、政友會では無理矢理に原を擔ぎ上げて、平民政治家であるとした。思ふに今度は高橋を第二世の平民政治家に祭り上げようとする魂膽であらうが、高橋の政策なり、其所爲なり、其既往に於ける業績なりを見て、何處に平民政治家の理想や風格が備へられて居るであらうか。原が終生金權政治を事とした如くに、高橋も亦極端なる金權政治の鼓吹者であつたことは、世人熟知の事實に屬する。政治家が貴族富豪の友であるか、其れとも民衆の伴侶であるかは、決して爵位の有無に依つて、定まるものではない。我國に於ては此點に於て、示す可き實例を見るを得ないが、英國に於てアツシュレー伯即ち後日シャフツバリー卿と爲つた人の如き、本來貴族の出であるに拘はらず、勞働者に對して多大の同情を持ち、十九世紀の前半世間に工場法反對の聲の高かつた際に保守的議論や、金錢的利害に對抗し、惡戰苦鬪を重ねて、工場法の規定をして能く時勢に伴ふを得せしめた事例がある。爵位があつたからと云つて、民衆の利害を念とする政治家の人格は何としても傷けられないが如くに、爵位を辭したからと云つて、本來權勢を欲したり、利慾を愛したりする俗政治家に民衆を友とする風格の伴はないことは、私の斷言するに吝しまざる所である。高橋の如き無益の所業をした人騷がせの男と申す外はない。

次に問題と爲るは、解散後の總選擧に於て、各黨派の議員數に如何なる消長を見るであらうか、又所謂憲政擁護を標榜しつゝある政憲革の三派が何時までも堅固に聯合の步調を取るであらうかの二點である。政友本黨は貴族政治の擁護者であると云ふので、新聞紙上の評判は甚だ香しくない。然しながら人物の高下、政治家としての清濁から云つたならば、政友會の居殘り組と脫會派の政友本黨員との間に幾何の差別があるであらうか、前者が政權慾の爲めに、憲政擁護論を唱へたからと云つて、遂に後者に勝る聲望を選擧場裡に博して、能く分裂以前の政友會時代を再現する程の多數黨與を收め得るとは考へられない。寧ろ清浦内閣が[illegible]を極めて、政友本黨を援助したならば、是れま

で屢々我國に於ける總選擧に於て見た如く、政府の與黨たる政友本黨をして意外に多數の議員を有せしめ、政權に阿附する實業家議員をも糾合して、政府援助の一勢力を形ち作るに至らしめはしないであらうか。而して豫定の筋書通り清浦內閣が此團體に或る時機を選んで、政權を讓ることが明瞭と爲つたならば存外政友本黨をして名を成さしめることとなしとしない。

尤も憲政擁護派が政、憲、革聯合して、頻に清浦內閣倒壞に努力しつゝあることは、掩ふ可からざる事實であつて、犬養齋ならざる三黨首が民衆を刺戟する演說などを試みて居るようであり、又從來の一幕物狂言でなく、何時まで掛つても憲政の敵と目指した者を倒すと云ふ徹底的運動を繼續する申合もあるやに傳へられる。果して然らば是等三派が總選擧に多數を制したならば、直に現內閣を倒し、三派の首領に內閣組織の大命の下ると共に、三派の聯立內閣を見る譯であるが、果して斯る想像が現實の事實と爲るであらうか。由來我國政治家の間に結ばれた約束位ひ、信賴す可からざるものゝないと共に、彼等の國民に對して爲した公約位、容易に蹂躪されるものもない。由來主義政見を異にし、加ふるに多年相敵視した政友會と憲政會、革新俱樂部と憲政會とが憲政擁護と云ふ空漠なる旗幟の下に、握手することと自身が不思議の沙汰である。其不思議の事をするのが政治家の常であつて、漠然たる主張であるから、共同の動作を爲すを得るとも思はれるが、更に一步を進めて、假に聯合の上で、政局に當つたとして、能く實際の施政に於て、協調を保つを得るであらうか。如何に政治家が政權に渴し、之を得る爲めには手段方法を擇ばないとしても、黨議として年來主張した所を一瞬の內に放擲することは出來まい。清浦內閣の倒壞するまで、三派は能く聯合するとしても、其後に於ては、政權を獲得するまでに、聯合が保たれるかどうかは、一個の疑問に屬するのみならず、總選擧に於ける地盤爭ひなどから、三派の關係は選擧後に餘程冷淡なるものとなり、清浦內閣なり、政友本黨なりをして乘ぜしめるの際を與へはしないであらうか。是れが私の局外から下した政界觀である。

若しも私をして今日英國人であらしめたならば、私は何等留保する所なく、勞働黨に共鳴し、勞働黨をして其勢力を伸張して、充分に所思を實現せしめたいと思ふ。蓋し勞働黨の主義政見を以つて、最も能く時勢に適すると信ずるからである。然も我國の政黨に對しては、其何れに向つても、何等の同情も寄せず、又何等の共鳴を感ぜず、寧ろ政友會の如きに對しては、其局に當つた時代に行つた批政に關する記憶の胸裡に新なる爲め之を憎惡するの念すらなしとしない。何故に然りやと云へば、

我國の政黨には國民的生活の興廢に關するが如き具體的問題に就て、何等の政見が示されない。唯彼等の力を致す所は政權の爭奪に過ぎないのであるから、若しも吾人にして或る政黨に援助したならば、偶々其政黨をして政權を奪取せしめる提灯持ちを勤めるだけに止まり、而して政權が多く政黨の私慾を充す爲めに、運用されるに過ぎないからである。一時天下の耳目を聳動し、今日尚ほ未解決の儘である普選問題に對してすら、意見の一致しない三派が憲政擁護を標榜して、聯合しつゝありと云ふが如き、何たる滑稽の出來事であらうか。政友會にして憲政を擁護する誠意があるならば、普選の實行を沮止して、今日に至らしめた從來の態度に就て、國民の前に陳謝するのが當然であり、他の二派亦斯る民權伸張に對する前科者と伍を共にし憲政擁護の進行を茶番化せしめることは、政界に有勝ちの事かは知らないが、私の認めて奇怪事とする所である。

政變の機會價

杉森孝次郎

日本の現代の衆議院議員のやうなものが不斷にあつたところで、日本のためにどれほどの利益にもならないことは知れ切つてゐる。かれらは、國民にとつて、勿論國民の政治的眞必要にとつて、米でもなく、味噌、醬油、燃料でもなく、缺くべからさるなにものでもない。そんなら酒やタバコ位の役はつとめるかといふに、さうでもない。かれらは、日本のために、大體に於いては、どれほどの利益にもならないばかりでなしに、かなり大きな不利益にはなつてゐる。經濟問題でも、社會問題でも、外交問題でも、思想問題でも、政治組織そのものゝ問題でも、およそこれらに關して、もしもかれらに、眞の政治的能力及び意志があるならば、かれらが國民にとつてなくてかなはぬ、またありがたいものでありうる途は百方にも千方にも開けてゐる。しかし、かれらは、それらの切實な政治問題をば、てんで意識もせず、たまにいくらか意識しても、そのしかたが淺く、方角ちがひであつて話にならない。

しかしながら、なほなほ、かれらは、國民の—ために—、直接

の歳計を決定する最有力、最肝要の一位置に身を置いてゐる。勿論、かやうな議員を在らせたもの、在らせるものは、かれら自身であるよりも早く、深く、有力に、國民そのものであるのだから、かれらに對する以上の如き總括的批評は、すなはち、かれらの存在理由そのものを概ね、一掃的に、否定するやうな批評は、數も知れた議員の頭にむけられたわけでは決してなく、第一に、そして主として、國民そのものにむけられたのだ。

しかし、それはそれとして、現代のわが衆議院議員に相當の存在理由ありとする立ち場を假定して一考するに、すなはち、わが現代の政黨者流及びそれらに興味を持ち、價値をみとめるかなり多數らしい人々に同情して一考するに、百個日にも及ぶ長期間、「民意代表」をなしにして、一人の衆議院議員もない狀態にして平氣でをられるといふことは、どこかに缺陷がある證據であることは先づ明きらかではあるまいか。

かういふ事は、外國の例や、自國の過去を參考にする必要など毫頭あるべき筈でない性質の問題だ。前例や外例はどうあらうと、政治の存在理由を全然反省しないともいへるほどの粃末な政治意識を、いはゆる政治家と國民とが持つてゐることをそれは意味する。

政治は事務だ。實業だ。それは一とつのビズネスだ。そこに政治の必要も特質も成り立つのだ。政治は、實に、社會民にとつて、米にも、味噌、醤油、燃料にも類比されべき位置を、それが本當の政治ならば、政治といふ名を正直にあたひする政治ならば、いやでも應でも占める性質の事がらだ。ものがらだ。政治は、眞の政治は、實に、一種の御用聞きにほかならない。現代ならば、先づもつて國民の經濟生活といふ深どころの隅々を、したがつて農村及び都市の各階級者を、なかんづく實質的または本質的に社會にむかつて能力がゆるす限り勤勉に、善きなにものかを生産しつゝある人、生産する實意ある人のすべてを、まめに、手落ちなくたづねまはること、勿論不時の災難にかゝつて困窮してゐる人々をもさがし盡くすやうにしてたづねまはり、なにが入り用か、なにか入り用なものはないかと入念に問ひたしかめること、それから教育の急所をも、殊にも小學校教育、なかんづく「貧町村」のそれを、また交通のそれを、衛生のそれを、外交のそれを、廣くいはゆる思想問題のそれを、政治組織のそれをといふやうに、偏頗なく、依怙なく、公僕の一念に燃えて、政治的國民庖厨を各戸訪問すること、そして、そのおの〳〵の必要品、入用品を敏速に、精確に、善い品を安くとゝのへてくばり届けること、これが、これこそが、これのみが政治だ。眞の政治は、決して、これ以外のものでは

ない。しかるに、このかたちの政治は、現代のわが日本に、不幸にしてほとんど全然缺けてゐる。

政治をまじめな一とつのビズネスとして理解してゐなければこそ、そして、それを、たゞ、儲け仕事、遊び仕事、しかも、頭腦的にも、筋肉的にも、なんらの本質的社會價ある勤勞をも意味しない儲け仕事、またなんらの本質的個人價ある、したがつて間接に本質的社會價ある休養をも、教養をも意味しない社會的及び個人的不良性の儲け仕事、遊び仕事とばかり、本能的及び習性的に考へ信じてゐればこそ、百日の失業をもまじめな國民的、社會的、すなはち政治的問題として意識せずにをれるのだ。

五月の十日には、また一世一代の競馬を賭けねばならんといふかたちに於いて、政治家は目下、青くなつて、あるひは赤くなつて、腹をば勿論淺いながらに黑くして、緊張してゐ、選擧區內、國內の、かなりの數に達する多少有閑にして、あるひは無閑ながらに、不良な、粗惡な品性と常識の持ちぬしらが、選擧といふ「公」騷のなかへ逸早く飛び込んで、候補者の御用をつとめるかたちに於いて、無職放浪を「有意義」にし、「有食」にし、あるひは多少有收入にしやう位の考へでこれまたはづみ、それから、「醇朴なる良民」となれば、只で這入る錢なら幾らでもといふ考へで滿更ら餘所ごととのみ冷觀し去らない程度にはづむものもあるといふ現情ではないか。それらに加へては、原始的郡衆意識の發動によつて、選擧騷ぎ、政治もめは、たんしろ面白いといふ低級藝術趣味、見物興味のものが、都鄙、諸階級を通じて、どつさりといつていいほどある。

政變の一側面の內容は、右の通りだと概察される。

脫黨組の心事はいはずもがなの事として、護憲三派と呼ばれる民軍にしてもが、心事のほどは知れてゐる。かれらの原則意識にはなんらの變化もない。かれらの環境と機會に、かれらから見て大きな變化が突發しただけのことだ。芝居もいいが、藝術になつてゐない芝居は、最初から觀る氣にもなれず、一度や二度は觀ても、その內に、大事な用を措いてまで觀る時間など、とても見つからなくなるのが、先づ現代人の水準といふ名を、ややお負けにしてあたひする、國民中の或る部分だ。

政治家及び政治家志望者にむかつては、國民の眞の聲としては、小さいながらに、この國のなかに出來るだけの善政をしき、眞の意味に於ての國力を充實させ、それから、どの途、こんな小いさな島や半島だけを、いつまでも唯一の天地として守り切れる管はないのだから、なんとでもして、一日も早く、もつと大きな社會の持ちぬし、住民となれるやうに、邁進、邁進、邁進

の諸大陸に、友として伸びうる方法に腐心することが、まことに現代の日本の政治意識らしいとして、忠告するほかない。

政變は、それがいかなる性質のものであつても、目下の日本にとつては、ないよりはある方が善いと考へられる理由がある。政變ごとに、僞政治家の僞が自然に剝落する。かれらの信用も、勢力も、一ともめごとに、一と騷ぎごとに、失墜の步をはやめる。

ただ、最も心細い事は、僞政治家が社會の高臺から失脚して、さて、新たに登場する眞政治家があるか、あるとするならぶ、質に於いて、また量に於いて、どの位たのもしいものであるか、その眞さ加減、その眞なるもの同志の數如何といふ問ひが、かならずしも樂答をゆるさない事だ。

わたくしは、現代の日本に於ても、普通に考へられ、想像され、あるひは斷定されてゐるよりは、質に於いて、また量に於いて、眞政治家が遙かに有望的に潛在してゐると考へる。ただ、かれらの機會が、かならずしもかれらの力のみによつては招致されない。環境があまりに粗惡であるあひだ、善質の社會的實現は、時あつてか、絕望的に困難だ。ちようど、どんなに達者な舵手でも、解纜、進水を見合はせねばならない海のおもてがあるやうにだ。

政變よ來たれ、來たり續けてしばらくはやむなかれ。社會民一般の眞の政治意識と、社會民中の優秀なる眞政治家とは、そのうちに、望むらくは、次第にあたまをもたげてくるだらう。

マツダ瓦斯入電球藝術寫眞懸賞募集

題　　　　マツダ瓦斯入電球を主題とせるもの
寫眞大さ　キヤビネ型以上（密着、引伸し何れにても可）
締　　切　三月末日
審　　査　本社寫眞部
當選發表　四月又は五月の本誌上に於て發表す
其の他の事項
○送先は神奈川縣川崎町東京電氣株式會社販賣部規劃課商戰係宛の事
○應募寫眞は封筒に懸賞寫眞と朱書し且つ雜誌名及住所氏名を明記せられたし
○當選者は原板提出懸義務あるものとす

賞
一等百圓（商品券）一人
　副賞マツダ瓦斯入電球一〇〇、六〇、四〇、ワツト各一個宛
二　等五十圓（商品券）一人
　副賞マツダ瓦斯入電球六〇、四〇、ワツト各一個宛
三　等參十圓（商品券）一人
　副賞マツダ瓦斯入電球六〇、四〇、ワツト各一個宛
選外佳作　五圓（商品券）四人
　副賞マツダ瓦斯入電球六〇、四〇、ワツト各一個宛



塔の上から大紐育を見渡して

佐々木指月

兎も角も世の中は金だ。

と、いふ結論に達したのは、まことに餘儀ない次第である。いや、それは間違つてゐるといふことは、わかりぬいてゐるけれども、かうして、スカイスクレーパーの五十五階の絶頂にのぼりつめて、この大きな都會を一と目に見渡すと、間違つてゐる結論が、どう考へても正當らしく見えてくるのでいまいましい。

眞下を見ると人間は、生きても死んでもどうでもよい蟲けらの類ひとしか思へない。下にゐてこそ、かなりに早い電車や自動車も、かう目の下に一時に大都の全景がひらけわるたと、とても遲くつて、走つてゐるのだか這つてゐるのだかわからない。

ブロードウエイは一直線に北に向つて走つてゐる。左に見える川岸に、櫛の齒を並べたやうな棧橋には、下で見れば見上げるやうな大船も、まるで玩具をつないだやうに浮いてゐる。川の向ふはジヤージイシテイ、後ろは海、右の方にはブルツクリンブリツヂと、マンハツタンブリツヂが、蛇の籠でも吊したやうに、灰色の水の上にかゝつてゐる。

遠いところは靄にかくれ、近いところは棚引く煙の末に朧にかくれてゐるそのなかゝら、ぬけ出して立つてゐるのが、四十階のエクイテーブルビルデング、四十七階のシンガアビルデング、三十階のシテイインヴエステイングビルデング、パークロウビルデングの三十一階、ハドソンタアミナルビルデングの

二十二階、二十一階、二十階のビルデングは、このウールヲオスビルデングから見おろすと、高いとは思はれない。

私は夕日のどんより射す、展望臺の背側の手欄にもたれて、ぼんやりとしてゐたが、讀むともなしに讀んでゐたのは、その手欄に刻みつけられてゐる色々な人の名である。どこの誰それ、何のなにがしと、彫りつけられた名の下には、その人の年齢、生れ故郷の町村の名まで、ちやんと記してあるのもある。

ケンタツキイ、グリンビルの住人、フランク、ブウ。三十一歳、なぞといふのがある。このブウ君なる人が、どこの馬の骨だか、私にはさつぱりわからないが、ケンタツキイ、グリンビルの住人とあるからには、お百姓さんに違ひない。三十一歳になつて、はじめて都に上り、子供の時から繪で見てゐた、このウールヲオスビルデングの頂上を足に踏んで、さて自分の名をこの手欄に彫りつけたところを見ると、あんまりえらい人間とは思へない。しかしながら、世界に名たゝる塔に登つて、その名を末代にまで傳へんとした、ブウ君の心がけは、全く感心なものである。

私の腦のなかでは、歴代のえらい人の名が二三度驅けまはつた。ナポレオン、ボンナパアルト。加藤清正。アブラハム、リンコロン。ロイド、ジョオチ。それからこのフランク、ブウ君と、考へて見れば豪い人もなかなかあるものだ。丁度その人たちは、この五十五階のスカイスクレーパーが、他の建物の數を壓したその上に超然として聳えてゐるやうに、活きても死んでもどうでもよい、蛙の卵のやうな、われ〱の群からはるかに抽んでゝ、その名を萬代に輝かしてゐる。

その人たちから、われ〱の生涯を見おろすと、われ〱は生活をしてゐるものとは見えないに違ひない。それは丁度、このビルデングの絶頂から、あそこに歩いてゐる人を見ると、向ふは汗だく〱で歩いてゐるのであらうけれども、こちらからでは、一ところで蠢いてゐるとしか見えない、やうなものである。

本分の草料と云ふ言葉がある。その言葉を私はひよいと思ひ出した。あまり聞き馴れない言葉ではあるが、しかし西洋の諺の翻譯ではない。立派な東洋語で　これは支那から渡つた言葉だ。

餘程以前、私の友達に多田君と云ふのがあつた。なんでも禪を深く研究した人だといふが、その人が或る日のことに、私の家へ遊びに來て、何かの話の序に、君、本分の草料といふことを知つてゐるかといふ。いや、知らないね。草料といふからには、牛か馬に喰はせるものだらうと私が云ふと、何かたまず

えてやらうかと多田君が、いきなり私の横ツ面を、ぴしやりと平手でひつぱたいた。痛かつた。しかしそれ以來、私はこの本分の草料といふ言葉を忘れない。

謂れをいへば長くなるが、その一語だ。それが目の前に暮れてゆく塔の都の光燈を眺めながら、世界のあらゆる英雄の名を思ひめぐらしてゐる私の腦のなかへ、ひよつこりと浮いて出た。ふふん！と、私は感心した。して見ると、やつぱり金かなと思つた。多田君によつては、對手として取り出された本分の草料も、このニユウヨルクへ來ては金として取り出される。立ち並ぶ摩天閣の林も、川に吊つた大きな橋の數々も、見はるかす大都會の何から何まで、金の力でないものは一つもない。私がこのウールヲオスへ登りつめての第一の感想は、金で横ツ面をはられたと云ふ感じである。御無理ながら御尤と、この金で出來た文明をうけがはないわけにはゆかない。

考へて見れば、この都では、金で買へないものは何んにもない。日に三度の食物は愚なこと、ほんとの情のこもつてゐる處女の操も金で買へる。金がなくては處女どころか、海山千年のオールドミスも相手にしてはくれない。その他、金では開けないと思はれてゐた、有り難い神の敎へも金づくだし、靈魂の安樂も金がなければ贏ち得ない。地獄の沙汰はさて置いて極樂の沙汰すらも金次第とはこの事だ。貧中樂に無一物の[illegible]癪にさはつてしまつた。

で、私は、このスカイスクレーパーの上から、金の力でないものを探し出さうとした。だがそれは生憎と、地面の上では見つからなかつた。

私は空のなかを見た。海には暗く雲がかゝつて、船にはもう灯がともつてゐた。ハドソン川の對岸の南によつた森の向ふに丁度一抹の白い姫を浮べたやうな、下絃の月がかゝつてゐた。あるわい！やつぱりあるなア、あれだけは金には何の緣もないと、私はすつかり喜んだ。

然しこれも見方による。上絃の月をながめては、月給日のまだ程遠い事をなげき、下絃の月をながめては、借金のいひわけの名文句を考へるやうなことではしかたがない。月はどこ迄も詩的に見なければならない。この詩的と云ふところへ來ると東洋人は、欲目ぢやないが、遙に西洋人にまさつてゐる。私はいつでもさう思ふ。なる程それは、シエーキスピーアは豪いかも知れない。いや、實は私はまだシエーキスピーアの書いたものなぞ、一度もお目にかゝつたこともないが、こちらの人に云はせると、それは素的なものださうな。然し目を一とたび東洋の詩に走すると、東洋の詩といつても梵語のは私にはわからな

い、日本の歌や俳句のことはしばらく措いて、支那の詩、殊に唐人の詩を讀んで行くと、びつくり仰天してしまう。先づ唐詩選を開いて見ると、月を詠じたそのなかにも、

崑崙山南月斜めならんとして、胡人月に向つて胡笳を吹く、と云ふのがある。私はこの詩が大好きで、何ぞといふとこれを吟ずるが、君聞かずや胡笳の聲最も悲し、と、先づ最初の第一句から、ずばぬけてゐる。紫髯緑眼の胡人吹く、とくるから如何にもたまらない。

支那の詩も、たゞ在來のやうに味はつてゐたのでは、さう大したものとも思へないが、これを試みに、こちらの語に譯して見ると、それは貧しい私の語學の力で、やつても、その味はひが何だか別なものになつて來る。スウインバーンも、プローニングも、敢て驚くには當らない。ホイツトマンも、ポオの詩もさう吃驚したものぢやない。噂に聞いたヴエルレイヌも譯したものでその意味だけは覗いて見たが、傑作といふ、雨の詩も、それから、空と屋根の詩も、むしろ東洋の畑のもので、漢詩の絕句あたりには、ごろ〱してゐさうに思へた。

私はある日ある處で萬里の長城を守つてゐるその頃の征戍の兒が、胡笳の聲を聞いて斷腸の思ひをなすといふ詩を、こちらの人にしたところが、支那人に近い、私の音樂を是非に聞いて

心をいためるなぞといふのは、全くのコスモポリタンで、敵のすることであれば、咳拂ひ一つきいても憎いと思ふ、この國の人なぞの遠く及ばないところであると、そこにゐた一人は莫迦に唐紀の支那人を褒めたものだ。

そこへ私はつけ入つて、それは勿論のこと、東洋人は昔から眞に敵を憎いと思つたことなぞは一度もない。昔漢の衛の話を私はそこへはさんで、西洋人は何ぞと云ふと、東洋の物質文明の、まだ幼稚なことを見て笑ふけれども、東洋人から、こちらの人のセンチメントを眺めて見ると、まるでなつてはゐやしない。人間としてよくあんなことを、痛さ痒さの感じもなくやつてゐられるものだと思ふやうなことを、こちらの人は平氣で、やつてゐる。私ははじめのうちは、これは精神鍛錬の結果かしらと思つて驚いて見てゐたが、だんだんそれを見てゐると、何、實は、こちらの人の情操がまだ東洋人ほどに純化されてゐないので、道理こそ、こゝにあるものは、宗教から藝術から何から何まで、皆、物質の重荷を負はせられてゐる。繪畫ひとつ、詩ひとつにしたところで、まだ本當に物の形の世界を離れて、心の自在に到達してゐるものとは思へない、と、いつてやつた。

さあ大變なことになつた。大分、皆、不服らしい顏をしてゐる。すると、なかに一人負けない氣の女があつて、なかなか、意

洋人は月を眺めて詩を作ることは上手かも知れない。けれども詩にしろ繪にしろ、すべてさうした情緒的な仕事はたとへばケーキの上を飾つた、ホイツプ、クリームのやうなもので、美しく且つ甘いには違ひあるまいが、お腹をふさげるサブスタンスにはならない。たとへば、お金のない好男子をスウイトハートに持つたやうなもので、いざといふときに、何の役にも立つてはくれない。ホイツプクリームと、スウイトハートだけではわれ〳〵は活きられない。身になる食べ物、お金のあるパパがなくてはどうにもならないし、なか〳〵うまいことを云ふ。

私はその時考へた。なる程な！いざと云ふときに詩や繪では追ひつかないことはわかりきつてゐる。いざ戰爭といふときに李白や杜甫を何千人つれて來たつて、全く何の足しにもなつたものではない。戰爭のときには百の詩集より一本の劍が入用だ。如何なる大言壯語と雖も、大砲を一發御見舞ひ申されては、沈默するよりしかたがない。だが、待つてくれ。われ〳〵の祖先も、さう考へてゐたかしら、どうも少し違ふやうに思はれる。遠からんものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ、われこそは宇多天皇九代の後胤、近江の國の住人何の某と、馬上に於て名乘りを揚げてゐるときに、遠矢にかけて射て落とすは、戰場の法になかつたものだ。一人一人の果し合ひにも、飛び道具を用ふるのは武士の恥辱としたものだ。た[illegible]明しやうとしなかつた。それは冗談として兎にかく、われ〳〵の祖先は、命のやりとりをする場合にも武器は二の次ぎ、腕に覺えた術によつて勝負したものである。人間以外の物質の力を借りるといふことよりは、自己の心の働きに徹さうとした。如何なる場合にも。それがわれ〳〵祖先の生活の信條であつたことは、疑ふまでもないことだ。

して見ると、あなたのいふサブスタンスとは、食べ物はもとより、凡ての物質を意味してゐるのですかと、私はその女に疑いた。

まあさうですね。哲學的の意味ではどう云ふことになるか知りませんがと、女は逃げた。

では、哲學的の意味だと、どういふことになるのですと、私はどつこい逃がさなかつた。

東洋の哲學ではどう云ふことになりますねと、女は質鉾を轉じて來た。

私はこまつたね。默つてゐては埒が明かないし、と云つて多田村の型に習つて、この女の横案つ頬をはり倒すわけにも行かないし。折惡しく、丁度そこへ當て嵌る英語なんかは知つてゐないし、えゝ、かまうことはない、出鱈目にやつつけろと、から私

は度胸を据えて、東洋では、サブスタンスそのものを、絶對空と見た。サムシングに對するナッシングではなくして、ナッシングと見た。ナッシングだ、と、私はそこへ力を入れた。

　女は目を丸くした。亂暴な哲學があつたものだと思つたに違ひない。論理もへちまもあつたものではない。そこで私は云ひ足した。東洋の先哲は、この結論に達するのに十八の違つた見方を考へ出した。これを梵語では、アスタダサ、シユンニヤタ十八空といふのである、と、おどかしちやつたね。

　西洋のレーデーたるべきものが、サンスクリツトを知らないとあつては、赤い顔をしなければならないとでも思つたか、女はその十八空に辟易して默つてしまつた。

　するとそこにゐた一人の男が、君は先程、ここの人のセンチメントは、まだ東洋人ほどに純化されてゐないと云つたが、聞くところによると、日本人は嘘つきで、そのうちでも商人なぞは、てんで信用が出來ないといふことであるが、それを君は何と說明するかねといやなところへからんで來た。

　さうだ、ここの人たちは、現はれた形にばかり重きを置いて内面の機略に通じないから、日本の小商人なぞに一ぱい食はされるのだ。つまり、センチメントが發達してゐないせいだねと私は苦もなくつやつけた。

では、嘘をつくことは、センチメントのレファインドされた證據かねと、男は言葉を鋭くした。

　デリケートなセンチメントを持つてゐなければ軍略なぞは出來ないからね。若しもこの國が、近代の精鋭を盡した武器をもつて、私の國を攻めたとしたならば、われ〱はたゞ緻密な戰術によるより外は仕方がない。

　と、ここまで私は語つて來たが、ひそかに深い溜息をもらした。東洋人の悲みはここにあると思つた。われ〱は、物よりも心を尊べと教へられ、力よりは氣をもつて勝れやうとして來た。人生意氣に感ず功名誰んぞ復た論ぜん、と云ふのが、少くともわれ〱の生活の目標だつた。凡て心外のことよりも、心内のことを先にした結果は、日本心のやうに、全く情緒的生活をする人種を産み出したかはりに、蒸氣や電氣の發明なぞは夢にも考へられなかつた。われ〱の物質文明は、人間の體の力をもつてして、動かし得る範圍を越えてはゐなかつた。馬の力か牛の力、風の力を用ふるところがせいぜいだつた。燒けるのに三月の餘もかゝつたと云ふ、阿房宮の昔は知らず、建物のうちで一番高いところでも、お城の天守、お寺ならば五重の塔、淺草に十二階の出來た時には、凌雲閣と名をつけて、われ〱は吃驚仰天、腰をぬかしたものである。

ひと度、西洋の物質文明が入り込んでから、東洋人は度を失した。自分たちだけできめてゐた、生活上の約束は、滅茶苦茶になつた。三千年來の傳統をもつてゐた哲學も宗教も、一文の價値もないかの如くに見られた。さうしてたゞもう西洋のことだと聞けば、矢鱈無性に有り難がつた。これは全く醜い狼狽をしたのである。

サブスタンスが實驗室のテーブルの上から捜し出さうとしてゐる人たちと、またそれを樹下石上の冥想から尋ね當てやうとして來た人々とは、その文明を異にするのはきまりきつたことである。それを東洋の人たちが、向ふの文明の樣子も深くは見究めずに、脇づいてしまつたのは、あまりに氣が早過ぎた。

私はまた語り續けた。われ／＼はなるたけならば、お金なぞは用ひずに、幸福を得る方法を考へてゐた。東洋人は怠け者だからではない。物質の外に超然とした精神の生活を貴んでゐたからである。社會の階級を定める上でも、お金なんか一文もない軍人さんが先づ首席だつた。その次は泥田のなかで、仕事をするお百姓。その次はとん／＼かち／＼の番匠さん。一番お金の澤山あつた商人なんか賤しいものときめられてゐた。また人間同志の交渉の上から見ても、義理人情に重きを置いて、お金の力なぞは殆んど顧みられなかつた。お金の力を振りまはして他人の安樂をさまたげるものを、われ／＼は人間の數には入れて置かなかつた。

一種の赤化主義者だなアと、評した男がそこにゐた。

いや、東洋人は、本當のクリステアンだと云つたものもそこにゐた。

クリステアンどころか、彼等は虛無黨の元祖だ。佛教そのものがナヒリズムなんだからと云つたものもあつた。

そこで私は言葉を次いだ。お金を分銅として、人間の生活を量るやうな、この國の文明は、われ／＼には誠に自由な文明である。人間の生活は、どうしても人間の痛さ痒さ切なさを、物差しとして測つて貰はなければならない。お金と人間と置きどころを間違へられてはかなはない。要するに西洋近代のあらゆる危險思想はこのお金を本位にした生活を、われわれ東洋人のやつて來た、人間を本位としての生活に建て直さうとする、その序幕に過ぎないやうに私には、見えるが？

と、云ふと、その通りだ！と、一人がそれを肯つた。人間の汗が機械の油だと思はれては、たまつたものではないからねと彼は云ひ足す。

油ならまだいゝが、西洋の人たちは機械そのものになつてゐるが如くわれ／＼からは見える。あのラッシアワアに、ダウンタ

ウンへ行つて見給へ、人間性を失つて、すつかり機械になつてしまつた人たちのうよ〳〵してゐることよと、私は云つてやつた。

その機械はここにもゐると誰かがいふ。

さうしたことを云ふからあなたは、探偵にあとをつけられるのです。またいつかのやうにボストンへ逃げやうか、などと云はないで下さいと、一人の女が注意した。

何、探偵につけられた。誰が？と、皆は驚いた。

この人が、と、女は私を指さして、この五月頃どこへ行つても、シクレツトサーヴイスが、あとをつけて歩いてゐたことよと云つた。

なんだ日探と間違へられたか？と、一人の男は聞いた。

いや、主義者と思はれたらしいと私は返事した。

さうだらう、東洋の思想は西洋に取つては危際だからな。ことに君のやうに髪の毛なぞを長くして、十八通りの虚無主義を唱へて歩かれては、たまつたものではないからなアと、彼は眞面目で云つてゐる。

私は思つた。日本では、西洋から來る思想は、大方は危險なものにあつかはれて、而もその本を正して見れば、それは日本人の方が元祖だつたり何かするやうなことがある。日本人は西洋の何から何迄皆眞似て、今度は西洋を一と廻りした、自分たちの昔の思想が歸つて來ると、それは西洋で危險がられた思想だから、自分たちも危險がらなければ義理が悪いとでも思つてゐるらしい。西洋人が恐れたのは、それは東洋の思想だつたからである。日本人がそれを恐れるのは殆ん理屈に嵌まらない。足もとを忘れるのもこゝまで來れば澤山だ。

とは云ふものゝ、ロシヤあたりに近頃はびこる赤化思想が、はたしてタアター人の奉じてゐた佛教から萌したかどうか、それともまたモンゴリアから傳はつた老子孟子の教によつて、それが早くも、あの土地で培はれたか、そこの處は私は知らないチベツト語に譯された佛教經典が、ペトログラアドの圖書館に古くから藏されてゐたなぞと云ふことは、誰れでも知つてゐることである。

今に武士道が西洋を一と廻りして、日本へ再び歸つて來ると日本人は危險よばはりするかも知れない。だが、そこに今から氣がついてゐると、この變らうとしてゐる、世界の大きな思潮のうちにあつて、日本人なぞは隨分未來の華々しい、大きな芝居が打てるはずだが、さあ、どうだかなア。かうしてお金の力でないと、夜も日も明けない都會にゐると、この文明はどう變つて行かなければならないかといふことが、私のやうなものにさへ見當が立つのである。

何かい、何か主義者とでも間違へられるやうなことを喋つてども歩いたのかへ、と、他の一人は訊き直した。

どうも私の書いたものが障つたらしい。世間には密告狂といふやつがあつて、あれはこの國へ危險思想の宣傳に來たものであるなぞと、その筋に向つて密告をしたらしい。あの頃は何だか淡ツ氣味が悪かつたよと、私はそのあらましを話した。

ある日ある時ある處で、見知り越しの一人の男が、君、この世界はこりやア、今に何んとか一大革命が起るものだらうねえと私に尋ねた。

この男は不思議なことを訊くものだ、何んだつて、私に突然こんな事を尋ねるのだらうと思つたが、さうだねエ、既に起つてゐるではないか、と私は答へた。

すると何だね、君もお金は平等に皆に分け與へらるべきものと考へてゐるのだね、と、その男が押して云ふ。

こいつ莫迦だなアと私は思つたが、兎も角も一人で占有すべきものではないらしいねエと、いゝ加減にあしらつた。

さうかい、して見ると、女も萬人に屬してゐるものだね、とそいつが妙に力を入れる。

いや、女は一人に屬すべきものだと、私はきつぱり答へた

なぜ、と、そいつが訊く。

なぜつて君は女に燒餅を燒かされたことはないと見えるねと私は云つてやつた。

君は燒餅を燒くかへ、それは君がセルヒツシだらだと、そいつがいふ。

セルヒツシ？私も一寸癪にさはつた。君、世の中は金と女とそれから墓場だ。金は食べ物の象徴で、女は産むことの象徴だ。金を得るのには智慧を用ひ、女と共に暮すには情でなければ叶はない。食物は萬人に分ち與へ、子供は二人ツきりで産むべきものだ。燒餅を智慧一片で批判されては人間は助からないと、私は云つた。

すると、墓場は何の象徴だね、と、そいつが冷かすやうに訊く。

墓場の意味が分つたら、現代の人間の生活が、間違つてゐるかゐないかゞ、わからなければならない筈だと私は答へた。

今になつて考へるとその時に、女も萬人に屬してゐると、うつかり向ふの口車に乘らなくつていゝ事をしたと思つてゐる。外國にゐては餘程言葉をつゝしまないと、どんな誤解を招くかわからない。一人の男に話してゐると思つてゐたら、いつの間にかそこに二三人立つてゐて、私のいふことを聞き耳たてゝ聞いてゐるではないか。

それから、ひよいと外へ出ると、そのうちの一人が私の跡をついて來る様子だ。高架鐵道へ乘る、とそいつも乘る。目をきらりと光らして向ふ側に腰かけてゐたが、このジヤツプの降りたステーションを覺えて置けと、立ちながら車掌に耳打ちしてゐたのを、どうしたわけか私はちらりときゝつけた。

それが最初の出來事で、それからと云ふものは、どこへ行つても目の光る奴が、かならず私の後ろにゐる。レストランへ行けば、そいつがテーブルの前へ來て、珈琲なぞを吞んでゐる。活動寫眞を見に行けば、そいつがオゲストラの一番前の椅子へ來て、スクリンの方は見ずに、暗いなかゝら私の方ばかりを見てゐる。しまひには氣のせいも手傳つて、内にゐても外へ出ても街中の人たちが私を睨んでゐるやうに見えた。

すると或る日の午後、以前から知り合ひの、星占ひをやる女がしばらく音沙汰も斷えてゐたが、電話をかけてよこして、用があるから直ぐ來てくれろと云ふではないか。出掛けて見ると、スナツプシヤツトで、私の寫眞を取らうとする。私は體よく斷つた。こいつ怪いなと氣がついたからである。女も悟られたなと思つたらしい。てれ隱しだか何だか知らないけれども、その時女が云ふのには、九月になれば私の身に凶がある。多分は宇輪にちがひない。うつかりした事は日本文でも書いてはならぬ。それは皆英文に譯されて、あるところで調べられてゐるとのことだ。

世間には閑人があるものだと私は思つた。私の書いた日本文を、一々英譯してくれるとは願つてもない有難いことだが、容易な仕事ぢやあるまいて。尤もこの女のいふことは、星占ひだから當にはならないが、前には私を白娼法の罪人に陥し入れて日本へ送還しやうとたくらんだ奴がある。今またこゝに、私を主義者の嫌疑でもつて、この國から追放しやうとしてゐるものがあると云ふことは、まるで狐を豚に乘せたやうな話だが、かうなつてくると、外國にゐて文章を書くのも、一種のアドヴェンチユアだ。

だが、その女の口うらで、なぜかうして目の光る奴が私につき纏つてゐるかゞわかつた。それからと云ふものは、私のかける電話はみなレコードを取られてゐるやうな氣がした。郵便は出すのも來るのも皆開封されて、なかを讀まれてゐるやうな氣がした。五月の豐の街路樹の青葉の下を歩きながら、私は氣でもふれたのではないだらうかと、自分で自分を怪しんだ。

私はもう面倒臭くなつたから、ボストンへでも行からと考へて、泊つてゐた家の主婦にその事を話すと、いつの幾日の何時何分にこゝを出るか、はつきりと知らしてくれろと云ふ。こし

てその晩から、目の光る男がその家に住み込んで、隣りの部屋にゐる男は、夜通し寝ずに、私が夜中にでも逃げ出しはしないかと番をしてゐる様子である。

　私は一切かまはずに、ある夕方、タキシに旅の仕度をのせてグランドセントラルステーションへ馳けつけて、切符賣場の前に立つと、いつの間にか目の光る男の一人が、そこにゐて私を見て首を振つてゐる。

　何か私に用でもあるのかと聞くと、その男が小聲で、あぶないから旅はよせと、いふではないか。

　私は直ぐタキシに戻つて、それを、ノースリヴァー、四十七號のピーアへと驅けさした。いつそのこと船で行かうと、急に考へ直したからである。丁度その出發の時間も切迫してはゐたが、何となく追はれるやうな氣持になつて、建物のなかへ飛び込むと、吃驚した。今し方、ステーションで見た男が、もうそこに立つてゐて、きつと君が此處へ向つて來ると思つた。船旅はなほあぶないと、うすら笑ひをしながら云ふ。

　どこを向いても、たよりになる友達がゐるではなし、誰も彼も皆私に裏切つてゐるかのやうに見えて來て、あんなに心細ひ思ひをしたことは、この國にかれこれ廿年近くもゐるが、あれがはじめてだつた。

と、こゝ迄、私が話して來ると、ここに出し[illegible]が、何んだか君の云ふことは、本當なんだか嘘なんだか、馬が自分の夢に驚いて馳け出したといふ工合だが、君は確かねといつた。

　さあ、そこのところはよく分らないが、かうして無事でゐるところを見ると、確なのだらうねと私は答へた。

　一體、何を書いて、そんなことになつたのだへと、もう一人の男が訊く。

　それはね、多分私の書いた、空氣の貨幣といふエッセイが、禍ひをなしたものらしいといふと、ははア、空氣の貨幣！面白さうな表題だが、どんなことを書いたのだへと、その男が知りたがる。

　そこで私は、一と通りそれを話すことにした。

　誰が英譯したのだか知らないが、大分間違ひだらけな英譯のコッピイが、妙なところから私の手に入つたから、それは後で見せるとして、間違ひのないところを、御本人の私が話さう。

　このエッセイは最初は、ホノルルで發行してゐる、ある日本字新聞の、日曜附錄に書いたものであるが、それをハヴアナにゐる友人が、スペイン語に譯して同地の雜誌に轉載した。全文は長くなるから、かいつまんだところを話さう。

えゝと、東洋に、萬口同一舌四海同一家と云ふ言の草がある、と、これがこのエッセイの書き出しだ。

それはどうかと云ふと、誰の口も誰の舌も同じ事だ。食は萬人のものにして一人のものに非ずと云ふことに考へたい。

人間は、どうして活きてゐるかと云ふと、物を食つて活きてゐる。食はないと、お氣の毒だが死んでしまう。まことに厄介な條件をもつて生れたものだ。ところでその食物たるや、いくら死なゝい用心でも、食ひ過ぎると、これまた死を持ち來すから不思議だ。そこで食ふには度と云ふものがある。

この度を守れば善い、度を越せば惡いと善惡の標準も腹の加減できめる事が出來る。尤も大抵の人間は食ひ過ぎてゐるやうだが、それにしても死ぬ迄食はうとはしない。大抵のところでベルトの孔の二つ三つも緩りはづして、あゝもうとても食べられないと降參する。

いくら人間が慾が深くつても、一度に千萬年間の食物を貯へて置くと云ふことは出來ない。大抵の食物は三日も置けば腐つてしまう。腐らないうちに我慢して食つてしまう奴もゐるし、なかには捨てゝしまふ人もゐるし、また腐つても後生大事に保存してゐる不思議な人間もないとは限らない。だが然し、大抵の人間は餘れば人に分けると云ふのが、人情にかなつてゐるこ

考へてゐる。

ところでだ。待つてくれ。その食物を得んがために働いた、その働きを、人間は數にして數へることを、いつの世にか覺えた。困つたことを發明した奴があつたものだ。

元來、數なぞと云ふものは、人間が假りにきめたもので、本來は數なぞと云ふものは、一でも百でも千でも萬でもどうでもいゝのだ。一を百にすることも出來るし、百を一にすることも出來る。空氣を硝子壜に入れたと同じことなのだ。空氣で惡ければ、エーテルにでも、エレクトロンにでも何んにでも喩へるがいゝ。

だがだ、さうと理屈は分つても、この數の多少に執着することを覺えた人間は、各々が働いたその力を、今、云つた通りに硝子壜のなかに入れる事を考へ出した。益々もつて面倒になつて來た。

それでは、その働いた力を入れる硝子壜と云ふのは何だと云ふと、支那では初めは、手をたゝいたものださうだ。

俺はこれだけ働いたから、これだけ手がたゝける。いゝか、一つ、二つ、三つ、おつと、もう一つたゝいては少し多過ぎるやうだと、各々の持つてゐる腹の加減に照らして見て、後にこれを良心と名づけてゐるが、その良心の鏡に照らして、手

を打つて、自分の欲しいだけを人から分けて貰つた。

もう一つ打てるが、今度の時まで貸して置かう。いや、もう一つは打てないが、今度の時まで借りて置かうと、數と云ふものをきめたものだから、そこに貸し借りと云ふものがはじまつた。人間世界は記憶の必要を感じた。莫迦な奴があつたものだ。貸、借などをしないで、入用なだけ持つて行けばいゝものを、餘計ならば忘れてしまつたらいゝではないか。

そこで、その貸借の心覺えに支那人は貝殻を用ひた。貝殻に穴をあけて繩を通して持つて歩いた。その頃の人間様の心を今の世から考へると有り難くつて涙がこぼれる。

ところが、貝殻にして持つて見ると、これは自分のものと云ふ感念が起つた。さあ大變だ。元來天地の間のものを食つて、その食ひ物から得た力を、自分のものと考へたのが、人間のそもそもの大きな誤謬だつた。

持つてゐれば自分のものだ。海や山へ行つて、貝殻を拾つて來て、これは自分の働いた力だと云ひ出した横着ものが出來た。これではならぬと云ふので、皆して集まつて、印のある瓦を作つて、これを手をたゝく代りに用ひた。數と云ふ觀念は、とうとう、マネーといふ物質に形を變へてしまつた。

それも初めは鐵だつたのが、銅になり、銀になり、金になつて、とう〳〵人間はその金の奴隷となつてしまつた。食ひ物では三日と持たないが、金だと百億萬年も持つと考へた人間は、慾にその度を失つてしまつた。恐ろしい世の中、淺ましい世の中になつて來た。いやはやとても助からない。

それは當代の事。まだこれ程に世の中がならない時代から、人間は盗むことを覺えた。嘘をつくこと、殺すこと、人の女房を失敬すること、人を醉はして承諾させることゝ色々な策略や商略が發明された。

だがそれはまだ〳〵よかつた。ところがそれより悪い事を人間は覺えた。それは何かと云ふとかうである。いゝかね、元來天地の間のものは、人間のうちの誰にも屬してゐるものではない。屬してゐると云つたとて、それはただ、人間同志の約束で本當に屬してゐるのではない。人間同志の約束を無視すれば、いや、反古にすれば、天地の間のものは誰にだつて屬してはゐはしない。人の物は我の物、我の物は人の物だ。

これは我の物だと云ふ奴があれば、いやさうではない、いやさうだと云ふやうな愚にもつかない爭ひから、人間同志は戰かつた。さうしてお互ひの約束を蹂躙して、勝つた方が取つてしまう。負けた方は取られてしまう。取り返す。取られまいとする。まことにはや氣苦勞な話だな、人間同志の約束などと云ふも

のをこしらへれば、さうなつてくるのは當然のことだ。

だが、その爭ひ戰つてゐる間はまだよかつた。ところがだ。人の物は人の物、我の物は我の物、人の厄介にならないやうに自分さへ活きて行けばそれでいゝと、かう云ふ考へを人間のうちのある横着物は考へ出した。

一人がそれを考へ出すと、なる程それはいゝ。人の物は我の物でなくつて、我のものは人の物ではない。お互ひに別々になつて爭はない。爭はないから怪我もしない、怪我もしないから命を落とす危險もない。これは發明だ、これに限ると云ふので臆病な人間たちは、自分の事ばかりで、自分以外の事はもう考へない。廣い天地、廣大無邊な自然のなかへ、金錢と云ふ硝子壜をこしらへて、そのなかへ入り込んで、小さくなつて、本來の泥棒根性も失なつてしまつた。泥棒根性といふと物騷だが、本來の豁達の氣性を失つてしまつた。一人がさう云ふ心を持つと、人間全體の生活を危くすると云ふので、硝子壜のなかの人間は、さう云ふ豁達な氣性を持つてゐる人間に、惡人と云ふ名をつけた。さうして自分だけを後生大事に守つてゐる人間を、善人と呼ぶに至つた。元來大宇宙の間に善惡なぞと、そんなきまつた見本はないのに、人間がこれは善の見本、これは惡の見本と、つまらない見本をこしらへて、自分勝手に身贔負した。

さあさうなつてくると、人間は、人様の世話にならないやうに、人に迷惑をかけないやうに、人に妨害をあたへないやうにしなければならない。それには貯蓄と云ふことをしなければならなかつた。人間はお互ひに貯蓄しだした。食ひ物や、着類や酒や、女を貯蓄するのならまだしも、金錢を貯蓄しだした。それも自分のものだけならばまだしも、子々孫々の分までも貯蓄しだした。村は村で貯蓄し、國は國で貯蓄した。さうして、その貯蓄したものを盜まれないやうに、奪はれないやうに、今度は人のものを掠奪するための爭ひではなしに、自己を守る爭ひをはじめた。稱して武裝の平和と云つてゐる。

これでは行きづまつてしまふのだが、人間のうちにもそんな莫迦ばかりはゐなかつたと見えて、この貯蓄と云ふことを智識によつて取扱ふ利口者が現はれた。人の爲に丈夫な鋼鐵の火にも燒けない金庫と云ふものをこしらへて、さあこゝへ預けろ、椽の下や、倉の隅や、臺所の棚の上よりも、こゝへ預ける方が安全だし、それに金と云ふものは、かう云ふ處へ預けて置けば利子と云ふ子を產むから不思議だと云ひ出したものだから、人間たちは皆その鋼鐵の倉のなかへ、自分たちの金を預けて、その證文として紙幣と云ふものを貰つて喜んだ。

だが豁達な人間は、それは金の證文で、[illegible]

思つたが、それを預かつた方の人間は、これは、力の容れ物であると云ふことを知つてゐたと見えて、それを融通する事を考へ出した。銀行と云ふものがそれである。さうして各人の慾の孔を通つて來た力その物を、もとの空氣にしてしまつた。まだその空氣は世界に屬してゐるものとまではなつてゐないらしいが、兎も角も一國に屬してゐるものとはなつてゐるらしい。だが何んだか國王に屬したり、少數な富豪に屬したりしてゐるやうに見える國もないではないがそれはさうした莫迦者の存在を許してゐる國民が無智なのである。

大宇宙に屬してゐる力は、手をたゝいても使へたものだ。紙に數字を書いて用ひる迄になつたことは、人間が幾分賢くなつたことを意味してゐるが、然し悲しいことには。人間はまだその、人の物は人の物、我の物は我のものと云ふ、狹い觀念を離れることが出來ない。

元來が天下共通のものを私してゐる奴が間違つてゐるのだ。理屈がわからないのだ。頑迷なんだ。硝子壜の口が開いてゐないのだ。そこで、さう云ふ奴は子供と同じことなのだから、そのつもりで扱はなければいけない。出せと云つても出さないから、無理に取つたり、おどかしたり、すかしたり、いじめたり泣かしたりして出させる。だまかして出させる。××んでもいゝし××してもいゝと云ふことになるかも知れないが、そこは私にはわからない。さうしてこれは自分のものと、後生大事に貯蓄してゐるその力を奪ひ取つて、奪ひ取ると云ふと云ひ方が悪いが天下共通のものにしなければならない。

まことに御尤千萬な云ひ方である。なる程、善い事のやうだと、こゝに同意したのが、當節流行のプロレテリエトの云ひ草だ。

だが、あいつらに金を持たして置いたところで、天下共通の爲に使ふことは出來やしないから、金を持つたら卷き上げろ。持つてゐなかつたらもうやるな。何、奴等、死にさへしなかつたらいゝのだらう。度を越して産むからと、これが、所謂ブルヂョワア方の申し分だ。

と、あらましを述べたつもりだが、話が大分長くなつた。なる程ねエ、と、それでもまだ、返事をした男がゐた。

しかし、まアよくそんな事を考へてゐる隙があつたものだねと、彼が云ふ。

考へたのではない。今度この都會へ歸つてくるや否や、一文無しになつてしまつて、五六日といふものは水ばかり呑んでゐたが、その折に腦のなかへ、自然とかういふ結論が産れたのだと私は答へた。

さうだらう、大分腹の減つた結論だが、そのエッセイを、東はキューバ、西はハワイで發表して、いくらかになつたかいと彼は訊く。

ノップ！これで、原稿料をとつた覺えはまだないがと、つまらなさうな顔を私はして見せた

文士もつらいね、と、彼は笑つた。

弦月はいつの間にやら、海の向ふに眞つ黑に凝りかたまつた雲のなかへ落ちてゐた。暮れ入る空を驅けまはつて、それからそれへと續いて來た、今迄の追憶は、はるか向ふの、トリニテイ、チヤーチの塔から鳴りわたる、日本で云へば、入相の鐘のひびきに破られた。

もう、塔をしめる刻限ですからと、番人の女が云ふ。目のとゞく限り都會は一面に、人間の燈した灯でうまつてゐた。ことに、眞下の街々は、丁度、輝く色々な、寶石の指輪を嵌めた、その指をひらいたやうに見えてゐた。

手だ、手の平だ。大きな手の平だ。多田君が見せてくれたその手を、何萬何億倍して、西はホボケン、東はブルツクリン迄一ぱいにひろげた手だ。ロダンの彫つた手の意味も、たしかにこれに違ひない。日本のそれ、何んとか云つたなア、おゝ白隱和尚よ　あれが人の顏を見さへすれば、默つて片手を出して見せたと云ふのも、きつとこの消息を傳へやうとしたのだらうと思ひながら五十五階をまたゝくひまに、下までおりるエレヴエタアに、私は乘つた。

輕裝した女のオペレーターが、轉換器のハンドルを執りながら、ニューヨークへ見物に來たかと訊く。

さうだなア、塔をクロースする時刻までも、ぽつねんと、たつた一人で物珍らしげに頂上に殘つてゐたところを見ると、赤毛布が見物に來たとしか見えないだらう。

ヨツプ、と、私はたつた一と言、返事した。少なくとも當時流行の言葉をつかふからには、これは田舍者ではなかつたと向ふが悟るだらうと思つたところが、どつこいさうは行かなかつた。

いつ、チヤイナから來たか？と女がいふ。支那人と私は間違へられちやつた

つい、この間、來たばかりだと、私が返事をしてゐるひまにエレヴエタアは止つて、そこが四十七階目、今度は別なエレヴエタアに乘り換えておりるのだつた。

ニューヨーク案内記はいらないかと女が、ちよいとスマイルする。しかたがないから、メトロポリス、スタンダアドガイドといふのを一冊買つた。それで五十仙とられたり、チヤイナマ

ンと思はれたり、高いものについてしまつた。

第二番目のエレヴエタアは、音もなくおりはじめた。私の身は宙にかゝつて、ふらふらしてゐるやうに感じた。丁度、このビルデングのなかにある、各事務所の退ける時間だつたので、エレヴエタアが止るごとに、嬋娟たるステノ連が三人四人とふえて來る。脂粉の薫りが下から煽る風にまかれて立ち迷ふと、私の胸がどきんとした。あツ、これは金の臭ひだな、と思つた。

メインフロアへ出て見ると、そこは人で一ぱいだつた。幾筋もあるエレヴエタアから一度に運び卸された人たちは、出口の方へなだれを打つて、そこから外へ吐き出される。全くこれは人間の漏斗だ。誰も彼れも、我れも人も、あつたものではない。私もそのなかにつツくるまれて往來へと押し出された。これがニユーヨルクのダウンタウンの、恐ろしいラツシアワアだ。

日の短かくなりはじめた折だから、見る限りの窓には既に灯が燈つて、あらん限りの自働車は、サアチライトをつらねて、ホーンを鳴らしてゐた。それがまた續くは續くは、形容していふならば、ストリートには、タイアの海嘯が、押し寄せてゐるとでも云へやうか、所謂ブルヂヨワアの群が、オフイスから引き上げて、ブロードウエイをお歸りになるところである。われわれ賤しき連中は、辻の角に脂下つて、巡公が、全車止れ！の合圖をする迄、待つてゐなければならない。奴等は金に乘つてゐるのだな、と私は思つた。

ぴりぴりツと呼子が鳴る。巡公の手の平が高く揚がる。いよいよわれ／＼の順番が回つてきたなと思ふと、まことに好い氣持だ。何だか日本のゲイシヤガールが、赤い扇子をかざしたのを見てゐるときのやうな氣がする。金の力の乘り物は、ぴつたりと止つた。それとばかりに、所謂プロレテリエトの群がりがぞろぞろと往來を、向ふ側へ押し渡る。私も後れじと續いた。さうしてまたそこから今度は左によぎる。往來の角で私は立ちどまつた。十字の街をはじめは竪につぎには横に通すタイアの流れに、私は二度とも、ひつかゝつたわけである。かうなつてはいつになつたら思ふところへ行けるのだか分らない。

あちらの角で、最初に見かけた自働車に、乘つてゐたお旦那は、とつくの昔にお宅へ着いて、今頃は燒けふくらんだビーフステーキに、フオークでも、つツ通してゐるだらう。それだのにわれ／＼はこれ、往來をやつと一つ横切つただけである。金の力に乘つてゐるものと、脛の力で歩くものとは、一事が萬事でこれだけの差が、あるのだからたまらない。

ぴりぴりツと呼び子がまた鳴る。巡公の擧げた手は、あれはブルとプロとの間に立てた絶隔の禁札だ。ね、でも、人間同志

のこれが約束と云ふもので、ブル連がステイラアを操りながら、日を光らしてゐる前を、のんこの洒アと歩いても、撲き殺されないところが不思議だ。

だが油断はならない。ブルの劫臘を經たのには、ミリオニアと云ふ奴があるからね。マルテミリオニア、ビリオニアなぞと云ふのになると、金の力のナポレオン、金の力の加藤清正、金の力のアドミラル、トーゴーだ。彼れ等がその恐ろしい金の力を振りまはす段になると、われ〳〵は嵐のなかの木の葉のやうに、一たまりもなく、持つてゐる最後の五仙の白銅貨を拱手放してしまう。

どうだ、あの通りだ、あそこの角で夕刊を買つてゐる男を見ると、ペンニイを、一つ二つ、三つ四つ、五つ六つ、七つ、八つと數へて釣りをうけ取つてゐる。おや、また數へ直してゐる。幾度數へたつてペンニイ八つは八仙だ。その八仙を數へるのに八分間も費せば、あの男の一分間の生活は、一仙にしか當らない。一時間が六十仙。一日八時間働いて、六八、四弗と八十仙。一週間の働きを五日半とすると、土曜日に貰ふ給料が、廿六弗四十仙。あの男が若し、マンハッタンのウエストに住んでゐるとすれば、ウイク、十弗の部屋代はどうしてもいる。電車代が六十仙、洗濯代が一弗と五十仙、煙草代が一番安いスウイトキヤツプを二日に一と箱吸つて、それが一弗と〇五仙。シツキスアヴエニウあたりの安レストランで食べるとすれば、朝が廿五仙、晝のランチが五十仙、晩は七十五仙のデンナアで、五仙のテツプも出せないから、十仙はやらねばならず、締めて、え丶と廿四弗と廿五仙。日曜にガールを連れて、ボアレスクでも見て歸りにチヤプスーイで、ヤコメンでも喰ふと、殘るところはたつた五仙のニツケル一つ、安全剃刀の刄も買えず、新らしい靴下一つ買へはしない。これより安い生活は、今のところこの都會では先づ出來ない。

ちりちりちりちりん！ハロー、只今、三百萬弗の手形を正に御受け取り致しました。はい。なぞと云ふのとは大分わけが違ふ。だ百萬弗でも千萬弗でも、電信で、とんとん、つう、と打てばもう済む。大分速力が違ふやうだな。われ〳〵が一日活きてゐるうちに、向ふは、百年も千年も活きたことになる。これではいくらブロ連が鯱鉾立して騒いだところで、追ひつかないのは當然だ。

そらツ、石炭があがる砂糖があがる。靴があがつて家賃があがる。さがるのは給金だけと來た日には、立つところも住むところもありはしない。ポケツトのなかで、力一ぱい握りしめてゐた白銅も、落さないわけにはいかない。いやこれが白銅だけ

ならまだいゝが、この都會の人を見ると、萬物の靈長と自らきめた人間として、持つてゐなければならないものをすら、大抵は手放してゐるやうだ。

街角に立つてゐる女の唇を見給へ。ぬりくつた眞ツ赤な紅脂は異性のキツスを御招待申してゐるわけではなくて、お金がそこへ落ち込むやうな工合に仕掛けたからくりだ。丁度自働電話のスリツトのやうなものだ。たゞそれが、横に切れてゐるだけの違ひだ。

マネー、エンド、セツキス、セツキス、エンド、マネー、頭から讀んでも、尻から讀でも意味は同じだ。人性はたゞそれだけでよからうか？なぞといつて見たところで、この都會では追ひつかない。マネーにました力はなく、セツキスにましたアツトラクシヨンは、先づ見當らない。

なぞと考へてゐるうちに、大分、腹ぺこになつてきた。ハラペコ、エンド、ノーマネーと來たね。ここで私が女だつたら何と考へるだらう。なる程、人道の準繩といふものは、お寺へ行くと敎へてくれる。だがそれは理想を敎へてくれるので、理想ではお腹はふくらまない。必ずしも準繩通りに行かなくとも、先づそれになる可く近く行くやうにしてゐたらいゝだらう。こゝらで一寸、あすこへ行く丞ちアんを失敬するかねと、人道は二の次にして、金道の方へ近まはりをするに違ひない。さうだこゝは金道の都だ。

私はそこのオウトマト、自働食堂なるものへ這入つた。スリツトに銀貨を入れると、どんな御馳走でも出て來る。硝子棚の上には、あらゆる御馳走が並んでゐて、甘さうな色合をしてゐる。ウエータアもゐなければ、ウエートレスもゐない。テーブはいらないが、そのかはり、自分でお皿を持ち運んで、赤の他人のなかに混つて、だんまりで ぱくつくと、味もそつけもありはしない。腹はどうやら膨らむが、食べ物を食べたといふ氣がしない。冷たい石のテーブルに肘をついて、正味は金の直段だけで、あとはお世辭もおまけもない。サブスタンスを食べるとは、全くこれのことだ。

して見ると人間味は乏いなア。日本の留守宅へ殘して來た、古女房の煎じて出す、番茶の煮汁の方がどんなによかつたか知れやしないと、いさゝか愚痴になりながら、殘りの珈琲を嚥みおろして、私は往來へまた出た。

うしろを振り向いて見ると、先刻迄、自分が登つてゐた塔の絕頂には、アークが燈つてそれがとつぽり暮れ沈んだ青闇の空に懸つて輝いてゐた。一街區四方に亘るその建物の石の壁に、街の明りをなかばうけて、青白く聳えてゐた。

金の力のモンスタアが脊伸びして、丈の高さを競ふ都。人間はその餌だ、その心は賣り物だ。私は最後のニックルを出してレキシントンアヴェニウ行きの電車にのつた。

隣の男の讀んでゐる夕刊をのぞき込む。何だつて？ヨコハマが火事だつて？

何？大地震だ。サンフランシスコに達したこれが最後の通信だつて？

猛火（コンフラグレーション）はヨコハマの全市をスウイピングオヴアーしてゐるツて？

これは冗談ぢやないぞ。これはてツきり東京もやられたなア！今日は一體何日だ？九月一日！九月になれば私の身に因があるつて、あの星占ひの女が云つたつけ！ことによると、留守宅はぴしやんこだな！

大きな手の平！金の力のモンスタアなんか、飴ちよこのやうに、ひねりつぶす大きな手の平！ブルもプロも萬人一塚に埋め盡す死の手の平！

何とか云ふ名句があつたなア。草荒れて人色を變す、貧富兩つながら倶に忘す、か！

墓場だ、墓場だ！墓場の灰から築き上げた、人間の汗と涙の文明の外は皆嘘だ。

一寸その新聞を拜見したいものですがと、私は隣りの男にたのんだ。

――了――

炬燵政談

生方敏郎

福太郎
幸兵衛

福太郎　今日は。御隱居さん。お寒うございます。

幸兵衛　いよう。誰かと思へば福さんかい。さあ／＼、こつちへおはいり。オイ、婆さん、座布團を持つて來なさい。

富士子　オヤ、いらつしやいまし、さあ此所がよろしいでせう。まあ／＼、御挨拶なんかは抜きにして、ずつと炬燵へおはいりなさいよ。

福太郎　奥さん、先日は何うも御馳走になりました。何だか大へん酔ばらつちまつてあれから二三軒年始廻りをしたところがその先き〳〵で又酒を強ひられまして、つひ飲みすごしましたので、家へ俥で送り込まれた時は全く正體も何もなくなつてゐました。

富士子　オヤ、そうでしたか。そんなにまあ酔はされては、却つてひどい目に會はせたやうなものでしたのね。

幸兵衛　だが、福さん、そいつは大出來だつたよ。

福太郎　へえ、何がですね。

幸兵衛　そんなに酒によつぱらつた事さ。今年は世間の奴等何う考へたか門松さへ立てず、若い者までがカルタも取らずにコソ〳〵してやがる。かかる正月に天下晴れて酒を飲み堂々と醉つぱらつた事は感心だよ。

富士子　福さん、内のお爺さんの云ふ事は、いつでも脱線してるんですからね、讃められてもあんまり本氣にしないで聞いてゐて下さいよ。

福太郎　へえ、私も後から考へて見ましてね、人がみんな遠慮して年始にも廻らず年賀狀さへ出さない位にしてゐるのに、自分ばかり好い氣持に醉つたりして惡い事をしたとつく〴〵後悔したんです。

幸兵衛　何の、例もと變つた事もない正月に、遠慮も何も要るものかよ。今年は復興の第一年といふんだから、平年よりなほ一層景氣の好い正月を迎へて宜さ相なものだのに、遠慮とか何とか言つてケチ〳〵してゐる。あゝいふ事は何うも俺は氣に食はんよ。天災に會つて泣く者は泣くがよし、天災を免かれて悦ぶ者は祝ふがいいや。

福太郎　しかし年賀狀のやり取り無しだけは、多忙の年末、大に助かりましたよ。郵便局へ端書を買ひに行つても端書は無し活版屋は活版屋で混雑してゐる、といふのですから、漸くのことで私製葉書が出來たと思ふと、あの厄介な新製切手でせう。

幸兵衛　ほう、あの富士の山の切手かい。

福太郎　ええ、あれをお使ひになつた事はないんですか。あれを百枚買つて來ましても、一々鋏で切らないことには、從來の切手の樣に引張つて切るといふわけには行かないのです。それから裏には糊がついてないからそれを一枚々々糊をつけてはらねばならず、そりや兎ても厄介で百枚も貼つたら半日仕事ですつかり疲れちまひますよ。

富士子　そりや、全く大變な切手ですこと。お忙しい時には使ひきれませんわねえ。

幸兵衛　成程、それで此頃葉書の來るのが減つたんだな。いや

何が幸福に成るか知れないものだ。私は實際此頃つまらん葉書が來ないので無駄な返事を書せられないですむ、と思つて悦んでゐたら、全くその新切手のおかげだつたんだな。面白い。面白い。

福太郎　面白いどころぢやない。實に閉口頓首です。葉書でもあればまだしもですが、それは先刻品切れと來てるんでせう。

幸兵衛　ふうむ。犬養は豪い。犬養を來年の正月まで遞信大臣にして置きたかつたな。あいつは人氣取りの外に全く能の無い政治屋とばかり思つてゐたが、彼が遞信大臣に成ると早速さういふ新切手を發明した爲めに、年賀狀が減りつまらん郵便が減つたところを見ると、全く鋏と小僧も使ひ樣だな。これから每年正月前には犬養を遞信大臣にお賴みするがいい。

福太郎　けれどそりや犬養さんばかりのせいでもありますまい。何だか人の話では、犬養さんが前内閣に入つたのは普選の爲めだと云つてますよ。

幸兵衛　さうかい。成程それは犬養にとつては普選で手柄を立てたかつたも無理はないが、普選なんてこないだも云つた通りルーブル紙幣だ。國民はそんな物を今更勿體らしく摑まされるよりも、あの新切手賣出しの方がはるかに有難いな。それに振替も震災以來今以て復舊せず、大に人助けだよ。

福太郎　へえ、そりや又何らいふわけですかね。

幸兵衛　振替が役に立たなく成つてゐれば拂込まないですむから、あんな物がシヤン／＼と整理されてゐると、いやでも拂ひ込まなければならないぢやないかよ。やれ地震の義捐だ　やれ母校の煉瓦塀倒れたから卒業生諸君から寄附金を募る。盜らない。道を歩いてゐて幹事に會つて訊かれても、振替を受附けてくれないもんだからね、盜りたいにも盜れないのさ、とすましてゐられる。うむ、それからもう一つ、之は前内閣のみの獨創的功業とは云はれないけれど、近年電報の甚だしくおくれる事さ。その上べらぼうに違うことさ。照校電報でも何でもカラ出鱈目だ、上から讀んでも下から讀んでも同じい樣な文句の電報を近來時々受取るよ。

福太郎　それぢやあ、私共もずゐぶん迷惑をしますよ。

幸兵衛　いや、さうばかりでもあるまい。君も子供たちがもつと大きく成ると分るが、まづ東京の一高が受からないので京都の三高へ入つたとするな。

福太郎　へえ、内のがきには一高は受かりませんかね。

幸兵衛　受からんとも極らないが、そこは話だ、まあ後を聞きなさい。京都へ行つてゐたのではさう遊んで面白いところもないが　矢張本を買ふやらカフヱーへ入るやら理髪にころやら樣

々な事で金が要る。何か出鱈目の口實を設けては學費を請求してくる、それも度々と成れば如何に子供に二本坊の稲さんでもさう／＼好い顔をして送金しなくなる、そこで考へらあね。

稲太郎　へえ、あいつもまだやつと小學三年の子供だと思つて氣をゆるしてゐましたが、將來父に對して何かたくらみやがるかな。ふてい奴だ。家へ歸つたら一つぶんなぐつてやらう。

幸兵衛　まあ／＼そんなに慌てなさんな、まだ三高へ入つたわけではない。後の話だ、未來記だわな。金を何とかうまく引き出さうとするに就いては學生はそれ／＼智慧をしぼつてらあな。何しろ學生の方は暇があり親父の方は多忙と來てゐるから、智慧くらべぢや學生には叶ひつこない。そこで今の電報だ。キウビヨウカネオクレと來らあ、之が少しも間違ひなく來れば、息子さんは病氣だから金を送れ、といふことなんだ。あんまり度々だと又計略かとは疑つても、萬一にも本當に病氣で苦しんでゐるものを、現在の親たるものが少しばかりの金を惜んで子の言葉を疑つて送金せず、そのため倅が死んだら何んなものだ。京都の人は行き屆いてゐて深切だけれども、金の無い者に對してはハナも引つかけないといふ話だから、送金せずば誰も看病してくれるものはあるまい。今の醫者ン坊が前金でも取らないで見てくれる筈もなし、ああ可愛相なものだと思つて送金すると、やつぱり息子は「之はありがたし、流石は親父話せるわい」などと稲さんを讃めるはいいが、瀬々裏あたりで友達と一晩にひつ使つてしまふ。然るに、尻から讀んでも頭から讀んでも同なじ様な電報が京都から來たとする。何うも意味が分らないんだ仕方がない、捨て置く。すると息子の方では「ははん、倅は禿め、悟りやがつたかな、油断がならねえ、オイ、君、この男の親父つてものは仲々狡猾に成つたねえ、我輩の病氣の電報を見ても更に驚かず、泰然自若として一文も送つて來やがらない、ちつと親爺を教育する必要があるねえ、と云つたくらゐのところで、匙を投げてしまふ。これ誤文電報の有り難たささ。

稲太郎　如何にも、併し、あんまりおくれる方には閉口させられますよ。先達つてもね、國元から親父が危篤だから直ぐ來いといふ電報でせう。

幸兵衛　ふん、こいつは三高の息子さんと違ひ本物だ。親爺の電報に嘘はない。天下の親爺こと／＼く僞電を打つ様に迄進歩すると、學校で修身課を置く必要はなくなるのだがなあ。うんそれから何うしたい。

稲太郎　一生懸命驅け付けましたよ。上野の一番汽車に乘らうと思つて眞暗な中から家を出たのに、車夫が灯燈を忘れて出たために行く先き／＼の交番で呼び止められて叱られて、そうや

くの事汽車に間に合ひ、汽車を下りてからまだ十里、あやしげな電車に乘せられましてね、その電車がまた畑の中で胡座をかいたきり停電だか何だか二時間餘りも動かばこそ、十里の道を半日かかつて日暮に向ふに着いたものです。

幸兵衛　してその電車賃は幾らだい。

福太郎　そんなボロ電車でも彼是一圓ばかりも取られましたよ。それでも到頭親父の死に目に合へなかつたんだから、あんなバカ／＼しい事はなかつた。

幸兵衛　ふん、親の死に目に合はれないのは殘念だが、電車は決して高くない。日本一安い。半日乘つて一圓とは、こんな安い乘物が何處の世界にあるものか。私の家がこんなケチな家でも一夜明けると二圓三十三錢三厘づつ家賃を取られる。之はぢつとしてゐるんだよ。君の乘つた電車はそれでも少しは動くだらう。動いて半日位つて一圓は安いぢやないか。

福太郎　地震でもなくて、家が無暗と動いてたまるものですか。

幸兵衛　そうして結局親の死に目に合はなかつたのは、餘り安い電車に乘つた罰だよ。

福太郎　いや、ところが其れは電車や汽車の責任ではないんでそれは電報が二日おくれて來た爲めでした。私が行つた時は葬式も何も皆すんだ後で、きまりが惡いくらゐでした。

幸兵衛　それ見ろ、そこが電報の效能だ。葬式の後へ行つたら何の世話もいらないぢやないか。早く間に合ふ樣に行つてみろ實に大變な騷ぎだ。見舞に來る村人にも一々挨拶しなければなるまいが村人が假りに百人と見ても一人前に付き叩頭を五つ宛、村人は叩頭が叮寧だからな、それを三つ宛に節約しても百人では三百いる。坊主のお經が五十分と見て三百の叩頭と退屈な五十分とが節約された。その他何の位多くの煩ひから逃れたか知れやしないが、それといふのも近頃の牛報の御利益よ。

福太郎　へえ、その牛報てえなあ一體何です。

幸兵衛　なあに牛の歩みのやうに遲いからさ。電報といへば電の樣に早く來る筈だが、遲いから牛報だ。牛報で惡ければ緩報か蝸報だ。カホウは寢て待て、といふのはこれから初まつた言葉だらう。

福太郎　御冗談はおいて電報や電話も今のままでは困りますよ。追々恢復する相ですが、震災前でも電話を新設するには大變な騷ぎで、遞信省に傳手を求めて運動するやら何やら一通りの骨折りではなかつたし、又持つてる電話もいざ使はうと思ふ段に成ると、交換手が出なかつたり混線したり途中で切れたり、あんな焦つたいものはありませんねえ。今度藤村遞相の代になつたら、氣うい ふ物が皆何とか工合よく行くやう成つてせうか。

幸兵衛　さあ、藤村男は何に對しても一家の見識を持つ人と聞いてゐるから、將來何んな方針を取るか私には豫言出來ないが、併し、君は御存知か何うか知らんが、元來電話なんて物は、日本では電話賣買業者を利益せんが爲めに架設せられてゐるのであつて、早く引けるとか遲く來るとかいふ事は少しも問題ではないのさ。小川の平ちやんだつたか、電話賣買業者から有がたく頂戴した金はあれは賄賂ではござらぬ、辯護士としての報酬で御座るてな事を云つて平チヤンで圖々しくすましてゐたとかゐぬとかいふ臭い話の有つたのが、恰も去年の今頃さ、私は繰り返して云ふ。電話は電話賣買業者と政黨政治家とのために作られたり、とさ。恰も米は米屋と相場師とのために作られる様なものださ。

福太郎　私どもこそ毎日白米を頂いてゐるから、之もお百姓さんのおかげ様と思つてましたが。

幸兵衛　さうでない。百姓は骨を折つて米を作つて貧乏し我々共は米を食べて糞子(うんこ)にする。双方とも儲けてはゐない。中に入つて儲けるのは相場師と米屋だ。まあそんな物だ。だからさ、電話も君なんかがあの器械を利用しようと思ふのが抑々の間違ひさ。電話なんてものは混線しやうとお話中に切れやうとそんな事は大事の前の小事で、問題には成らん。あれを急設する事に依つて係りの官吏が賄賂を取り電話局が思ふ存分儲けさへすれば、東京に於ける電話の使命は達せられたのさ。鐵道の使命は何だ。政友會の黨勢を擴張するに在り、さ。乘客は有つても無くつても、汽車は轉覆しても脱線しても乘客は怪我をして死んでも助かつても、そんな事は問題の外だ。日本に於ける鐵道の使命はたゞ〳〵政友會の私腹を肥やせば足る。といふわけさ。まあそんなあんばいで、物は何でもそれ〳〵使命を持つてゐる。人間でもさうだが、たとへば福さんなんかは……

福太郎　へえ、私にも使命が有りますかね。こいつは初耳だ。

幸兵衛　おゝ、有るとも〳〵。君の使命は多産だね。子供を多勢作ることだね。肉彈製作所長といふ格だね。何しろ新婚以來十年の間に半ダアスといふ赤ちやんをヒョイ〳〵産み出させやうといふ豪傑だ。だが、さういふ人が今日の日本ぢや尤も必要なんだ相だよ。君のやうな肉彈係が有るからこそ、歐洲の大戰だ、シベリヤの空巣狙ひだ、といつて、用も無いところへ繰り出してはその度毎に兵隊を惜しげもなく殺す。誠に氣前のいい話さ。この勢で肉彈を世界中にお振舞ひしてゐたら、將校の胸に勳章の數の殖えるのに比例して人種子は減つて行く勘定だから、福さんみたいな人間製造業者も必要なわけさ。たゞ少し私の腑に落ちん事は、人間屠殺業者の方は常にその勳功を賞せら

れ富貴榮達にてし一生を終るのに、福さんみたいな人間製造業者の方はいつでも貧乏してピイ〱風車で暮すといふ筋合さ。

福太郎　こつちは骨を折つて育てて唯苦しむだけではつまらない役廻りです。人の子を殺して功を認められるとは、あんまりうますぎる商賣もあるものですね。

幸兵衛　なあに、その代り人間を可愛がることにかけては屠殺業者は到底君等と比較に成らない。源義經は一兵卒の膿のうみを吸つたといふが、君たちはいくら子煩惱でもその眞似は出來まい。西洋の歷史あつて以來ナポレオンほど手擴く屠殺業を經營したものはあるまいが、又彼ほど兵卒を愛した者も無い。昔から傾城に可愛がられて運の盡きといふが、大將に可愛がられても運のつきさ。

福太郎　怖ろしい話ですね。それでこそこの頃公娼廢止の聲を聞くのも尤だと思ひますが、何故大將廢止の叫びが起らぬでせう。人間屠殺業者なんて、聞くも怖ろしい。

幸兵衛　大將といはず、戰爭を全廢して一切の軍人を止め世界を絕對平和にしようといふのがトルストイ伯の理想だつたが、こんな理想が實現されると日本は大迷惑だ。

福太郎　その理由は？

幸兵衛　頭の惡い奴の捨て場所に困る。今の戰爭は全く武器の戰爭で、武器は益々之を良くするやうに勗めなければならいが軍人は成可く頭の惡い奴ほど適任であるらしく見える。若し今軍人をことごとく失職させると食ふに困る人間がいくら出來るか知れず、流行の職業紹介所も失職軍人ばかりには手古摺つてゐる。體操の教員も一校一人あれば間に合ふからなあ。これを思ふと國家の財政の何割をさいて軍人たちを養ふのは、決して無意味ではないよ。

福太郎　あなたは頭の惡い奴が軍人に成ると仰言るが、日本は何の國と戰をしても立派に勝つてますぞ。

幸兵衛　そりや、對手の國の軍人がよく〱頭が惡いからさ。大バカと中バカと戰爭をすれば中バカが勝つに決つてる。然り而してさ、人間の中にはバカが多いのだから、之を救濟する方法として頭を使はないでも生きて行ける職業を國家として保證する必要がある。この點からして、私は軍備撤廢には甚だ贊成出來かねる。子供は自分で躓いて轉んで泣いても、親はその過失を咎めずに好い兒〱、さあ泣かないでねと云つてお菓子をやる。泣けば泣くほど轉べば轉ぶほどお菓子が貰へる。軍人も戰死せば誰も之を過失とは云はず天職として同情しほめこそやす。パルチザンに殺されれば又た之れ名譽の十だ。好い兒〱

だ。
福太郎　さう〳〵忘れてゐましたよ。先年尼港事件のあつた時はこないだの大地震くらゐには驚きましたね。
幸兵衛　忘れてゐたか、それ「九月一日を忘るな」といふわけだつたぢやないか。そんなに忘れぽくつては困るのう。
福太郎　忘れやしませんよ。忘れるものですか。御隱居さんこそ何です、九月一日だなんて、あれは五月四日ですよ。パルチザンにやられたのは。だが御隱居さん、一たいパルチザンてえのは何の事ですね。
幸兵衛　あれは日本語に譯すと自警團といふのだ相だ。あの時分新聞では過激派と譯したが、本當は自警團といふ意味のフランス語だ相だよ。面白いぢやないか。露助の奴め、今夜十時日本人が二千名拔刀で斬り込んで來るから、皆さん自警して下さい。彼等の中には何でも恁んな流言蜚語が飛んだと見えるよ。そこであの勇悍にして狂暴なる自警團が蜂起して日本人を殘殺したものだな。やれ〳〵恐ろしいことだ。九月一日を忘るな、かい。
福太郎　御隱居さん、又忘れたね。九月一日ぢやありませんよ五月四日ですぜ。ロシヤの自警團が日本人を殘殺して我々の血を湧かせたのは。
幸兵衛　うん、さうか〳〵、五月四日か、九月一日の方は東京の大地震の日だな。あんな日のあんな忌はしい事件は忘れた方がいい。九月一日を忘れよ、だ。少しこりや手前勝手だが。
福太郎　あれ以來わづか四ヶ月に過ぎないけれど、ずゐぶんいろんな事件が有りましたね。そしてたうとう内閣も變つてしまつた。全く夢のやうです。
幸兵衛　突發事故ばかりつづいて新聞屋さんを多忙にし且つ悦ばせたよ。あの大地震に初まつて空前絶後の虎の門事件に終りを告げたのだから、山本内閣もずゐぶん多事多端だつたわけさ、寢るから起きるまで殆んど地震の後始末ばかりして、その餘震さへまだ續いてゐるのに山本の方はへこたれてしまつた。この前、彼が内閣を組織した際にも、彼の故郷の鹿兒島で櫻島が噴火して大騷ぎをし、そして最後にリヒテル事件が突發して寂滅したんだ。よく〳〵因果な話で、之も權兵衛どの前世の宿業と見える。といふ者もあるが、私はさうは思はない。
福太郎　さうですとも、二度までも總理の榮冠を受ける人が因果な生れとは誰だつて考へやしませんよ。世が世なら茄子で餓を凌ぐ薩摩武士ぢやありませんかね。
幸兵衛　そんな惡口はよしにして、私の考へるには彼は大臣に成つていつも引込みが早いのが幸運だといふのさ。福さん、この床の懸物を御覽。何とあるね。

稲太郎　怕ろしいむづかしい字が行列作つてますね。初めの字は何です、大權ぢやありませんか。大權何です。サツパリ分らないな。矢張唐人の寢言ですかね。

幸兵衛　困つたものだな。之は寢言ではない。語錄だ。

稲太郎　へえ、今日のは五六ですかね。先達てのはたしか四でしたなあ。

幸兵衛　うん、あれは詩だ。杜少陵の飲中八仙だ。田舍の宿屋の屏風になぞよく書いてある奴だが、併し意は面白いな。何れも當路の政治家だが、政治家にしてあの風流があるんだからな、日比谷の案愚院の有象無象にも酒つ食らひは澤山あるが少しでもあの飄逸味を持つた男はない。

稲太郎　そのまた以前に拜見したのは三とか云ひましたね。

幸兵衛　あれは門舍畫かきの漫畫に田舍詩人が贊をしたのさ。

稲太郎　ははあ三ですか。唐人の寢言は三から初まつて四五六と有りますね。

幸兵衛　うん、ところが七は人が七に入れてあつたのを勿體ないから私が受け出したものさ。

稲太郎　かけ物を七に入れるやうに成ると八をかいて九ろしんで、しまひは十賊にでも成るのでせうね。

幸兵衛　ははハハハ、之は妙だ。ただ、まあそれよりあの文字を讀みなさい。大權久不レ可レ執。大功久不レ可レ住・大威久不レ可レ居。大名久不レ可レ保。だ。何と面白い文句だらう。總理大臣の椅子にしびれのきれる迄腰かけてゐる奴はバカだといふ事だ。よしか、分つたか。原敬なんかもあの一日前に辭職してゐたら殺されるのではなかつたのだ。ただ一日大權を捨てるのをおくれた爲めに殺された。山本や後藤はうまいところで引込んで幸福な奴等だ。

稲太郎　いいにも惡いにも、何うも空前絶後の虎之門事件ぢや仕方が有りませんよ。絶體絶命ですね。

幸兵衛　昔の支那の宰相といふものは、陰陽の氣を調節するのが職責だとか云つて、霜が早く來ても花が歸り咲きしても責を負ふたものだ。空の星一つ軌道を外れても宰相の責任だといふんだから面白いやね。道を行く牛があえいだといふので陰陽の氣に變調を來たしたのではないかと心配した宰相も有る。まあそれどころぢやないからな。ただああいふ事件が政變の因と成るといふ例を作るとその民心に及ぼす結果は何んなものかのう。だが、あの問題に就いて語る事は御遠慮申さう。

稲太郎　今度の清浦さんの上院內閣の壽命は何うでせう。矢張新聞のいふ通り短いでせうか。

幸兵衛　ここだて。長かれと祈る壽命は長からで、直にうつる

頸の長さよ。とでもいふところかな。うまく〳〵と長くつづけばお目出度いけれども、ああ初から彌次馬に騒ぎ立てられては、いつ跳ねおとされんとも限らない。何だつてまた新聞社の人たちはあんなに厄鬼と成て上院内閣に反對するかね。

稲太郎　憲政擁護の爲めだ相です。超然内閣なるが故に反對するのです。

幸兵衛　憲政擁護は結構だが、それはまさか今の政盗諸君を擁護する意味ではあるまいな。内閣も成程超然にちがひないが、政盗諸君だつて矢張超然たることは同様だよ。人民とは何の關係もない超然政盗だ。政友會が大政盗憲政會は小政盗なら、何とか倶樂部は火事場政盗と各々その役廻りはちがふかも知れぬが何れも人民とはあかの他人さまたる點に於いては同一だね。滿天下の記者さんたちは超然内閣の方ばかりいつも氣にしてゐるが、超然政盗の方にはお氣がつかれぬと見える。超然内閣と超然政盗との爭ひなら、我々地下の民草にとつては源平二氏の合戰も同様、又は鳶烏の喧嘩も同様、雲の上の出來事だわい。そんな物を阿呆な顔をして力瘤を入れて眺めてゐても、裝子をひつかけられる位が落ちだ。新聞も雲井の上の記事をのせる事も最ういい加減にして、少しは地面の上の生活に本氣に成つて注意出來ないものかしら。記者諸君は歐洲大戰後の眼を以てフランス革命前の貴族とブルジョアの爭鬪なんか眞面目に見てゐるのだから堪らない。おれつたさに神經衰弱に陷つてしまう。いやヒステリーかも知れない。出て來る内閣何いつも此いつもいやだ、叩き倒してやれ、といふ氣に成つてゐる。讀者もその氣に成る。呪ひの釘がきいて忽ち倒れる。

稲太郎　こんどの内閣もおき倒れませうかね。御慶事と選擧がすむとお陀佛ですかね。

幸兵衛　さあ、その位のところかな、あれでも殘燭さんの内閣は一年はつづいたか知ら。とてもあれほどには續き相もないな。何れが出ても永つづきはしないよ。

稲太郎　それは淸浦さんがお可愛相といふよりも、この國事多難の時にしつかりした政府が無くては困つたものですなあ。

幸兵衛　さう悲觀すればきりもはても無いが、要するに今は水野越前守が出ても松平越中守が出ても、何うか低うか治まつて行く時代なんだよ。國は治まりさへすればいいのさ。

稲太郎　そしてこの先き治まつて行くでせうか。

幸兵衛　その時はその時さ。今から取越し苦勞をしても始まらない。上に賢相なく否憲政常道の首相のないのを人々は物足らなく思つてるらしいが、今のやうに愚相でも世が治まつて行くと思へば、一層有り難い話ぢやないか。超然でも何でも治まる

やうなら先づ可とするさ。明治以來、昇平茲に七十年さ。

福太郎　さうしてゐる中に又黒船ですか。

幸兵衛　福さん、こりやうまい事を云つた。さうしてゐる中に本當に黒船がまた來んとも限らない。その時皆な眼が覺める。何だか來さうな氣がするな。

福太郎　矢張對手はアメリカですかね。

幸兵衛　さあ、それは何處から來るかのう。天から降つたか地から湧いたか、兎に角大きな黒船が着いて、今度の大地震以上に皆をびつくりさせるだらうよ。でもなければ、人々は無明の闇から覺めやしない。虎之門事件にあつてもまだ目が覺めず、あれを其日の護衛の巡査や憲兵の責任だと思つてゐる位だから。而して國民の全體は他人ごとの樣に心得て平氣で洒蛙々々してゐる次第だからね。あれでこそ天から降つたのでも地から湧いたのでもない、今の社會狀態と今の社會の雰圍氣の中から生産せられたものなんだ。皆なの連帶責任だ、偶然に起るといふものは滅多に無い。ねえ、子供だつてさうだらう。偶然に生れるわけではない、多少身に覺えが有らうがな。

福太郎　ここでそんな子供のことなんか云はないでもいいでせう。私はマヂメで聞いてゐますよ。すると何ですね、超然内閣や超然政黨が出て來たのも矢張社會の連帶責任ですね。

幸兵衛　それから今の新聞屋さんが頻りに其出現を悲觀してゐる超然政黨内閣もさうだ。超然内閣と超然議會と貴族院とは我國三大特産物として、すでに世界に知られてゐる。ところで茲に面白いことは、いつも超然政黨と超然内閣とはいがみ合つてゐるもので、若し一つの政黨が超然内閣と私通すると殘りの政黨どもは眞黑になつて嫉妬たてるので、一見内閣と政黨とは同じ超然のキヤーテゴリーに入るにしても前世は犬と猿の生れ變りかと思ふと、實はさうでない。この兩者は御親類筋だ。名は内閣と云ひ政黨と云つて別々のやうだが、苗字は共に超然だ。初め超然内閣あつて超然政黨を生んだものだが、後には超然政黨あるが爲めに超然内閣が生れるやうに成つた。この二者は互に因を成し果を成してゐて、恰度鶏から卵が生れ反對に又卵から鶏が生れるのと同樣だ。政友會へ大命が降らんとしても、政友會は民意を代表した政黨でない。憲政會へ降らんとしても之また同樣に民意を代表してゐない。共に一部ブルジョア階級の傀儡にすぎぬ。大命を降下す可き政黨がない。といふ口實の下に、殘蠍内閣だの馬面内閣だのいふ珍内閣が持ち上るんさ。それであるのに天下の新聞屋さんが超然政黨氏に味方して超然内閣郷を退治しやうと騷ぎ立てるのは、一寸私にはてこへんに聞こえるね。貴族はいけないがブルジョアはいいといふのか、次

冠束帶は尊ぶに足らぬが金貨と紙幣は有難しといふのか、一寸おかしいね。

稲太郎　ぢやあ、何うすればいいんです。

幸兵衛　勿論　高見の見物さ。虎が勝つても島が勝つてもこちや知らぬだよ。何地か一方が負けて落ちたら埋葬くらゐはしてやらうよ。

稲太郎　けれど若し虎と島と妥協して權兵衛の畑を荒すなら。

幸兵衛　その時こそ三度に一度は追はすばなるまい。さういふ場合は絶えず有ることとさ。

稲太郎　いつ迄しても世の中は斯ういふ風にいざこざが絶え無いものでせうか。左傾だとか反動團體とかストライキとか小作人爭議とか家主と店子の論爭とか、こんな事がつづく物でせうか。

幸兵衛　なにさ、之も兄弟喧嘩だ。兄弟喧嘩の味は忘れられないものなんで、いつに成つても止めないのさ。他家の人と喧嘩するやうな事は滅多に無いが、家の者同士ちや毎日喧嘩があるやうなもので國際戰爭に比べりや國内のいさくさの方がいくら多いか分らない。

稲太郎　ですが此頃殊に世の中が騒がしい様です。何處から虎之門事件みたいな惡風潮が生れたものでせう。

幸兵衛　それはまだ差し止めてあるから分らない。こんな批評は御婚儀の後までは御遠慮申す可きものかも知れない。蓋をあけたら何も彼も分るだらう。あの事件は別として、總て近頃起る忌しい事件は或るところから生れて來てゐる。

稲太郎　へえ、それが分つてますか。惡教育の結果でせうね。

幸兵衛　今の教育家は餘り教育する事を好んでゐない。小學校の教師はただ自分の生徒が中學や女學校へ入ればいいといふ事だけを考へてゐるし、中學の先生は自分の生徒が高等學校へ入學し得ればいいと唯それのみを目的としてゐる。いはば學校桂庵だ。彼等の本業は口入業だ。併しその片手間で一日に五時間くらゐづつ景物として生徒に學問を教へる。

稲太郎　その學問がよくないのでせう。智育にばかり重きを置いて德育がかけてゐるのでせう。そんな場合だから、この際かん〳〵がく〳〵の江木老人を文部大臣に据えたいは至極妙ちやありませんかね。あの人は政治家でゐながら一度も待合へ泊らないほどの聖人だ相です。

幸兵衛　待合へ泊らないのは聖人の爲めちやなくつて老人の爲めさ。人間は八十から上に成ると大抵品行方正に成るものだよ。だから本當に學生に品行方正たらん事を望むなら、若い生徒をみんな放逐してしまつて、新規に八十以上の年齢を持つ學

生のみを入れる事にすればいいさ。それはさうと先刻の話の近頃の悪風潮は教育家たちが片手間仕事に餘り良い教育を施したからだと、私には考へられるの。その反對にもつと悪教育を授けてみたら何んなものだらう。子のたまはく盗人をしろ。子のたまはく妾狂ひをしろ、子のたまはく亂暴を働け、といふやうにだな。

福太郎　それが教育なら、今の政治家や會社の重役は大抵大學教授の資格有りですね。あの人たちの子供さんは家庭教育だけで十分でせう。だが、そんなベラボウな話がありますか。

幸兵衛　ベラボウでも何でも、どうもさうしか致し方有るまい。政治家とか紳士縉商とか云はれる連中が年が年中亂暴と泥棒と妾狂ひの見本を出してゐるのだから。そうして置き乍ら學校の中でばかり所謂徳育とやらを奬勵しても結局ムダな手間だらうよ。學校では從來とてもおくびの出るほど徳育を承つてゐるのだが、その徳育の具體した忠君愛國のインカーネーションの集團であるところの紳士閥帝國議會のあの有様を見せつけられてはね。菓子屋が餡粉を型へ押し込んで菓子を製造する如く、子供は學校へやりさへすれば人物陶冶が出來ると心得・一にも學校教育二にも學校教育と仰言るのがどだい無理な注文さ。學校柱礎にそこまでの責任が負へるものか。文部省とても然だ。何事か有る度に、世間ではすぐやれ文部省が悪い、文部大臣の責任問題だと騒ぐ。だからこそ文部省がつけ上るんだ。文部大臣の鼻息が荒くなるんだ。福さん、一つ謎をかけやう。解いてみてくれまいか。

福太郎　へえ、何んな謎です。

幸兵衛　文部省とかけて何と解く。といふのだ。

福太郎　へえ、文部省とかけて、ですか。こりやちとむづかしいなあ。

幸兵衛　たあに雑作もないんだ。中學校の入學試験の問題として提供しやうぢやないか。だが、むづかしければ、私が解いてお目にかけやうかね。

福太郎　ええ、何うぞ、一つ願ひます。

幸兵衛　文部省とかけて神様と解く。

福太郎　へえ。さすがに豪いお役所ですなあ。私達の學生時代に學校の幹事でも事務員でも生徒には仲々横柄でしたけれども、文部省のお役人が見えると縮み上つてゐましたよ。矢張文部省は御隠居さんの目から見ても神さまかなあ。

幸兵衛　これ〳〵、皆まで聞かずにそんなに感心するなよ。文部省を神様と解いた其心はだ。よいか。容易に其存在が認められぬ。といふことだわい。

福太郎　こりやよかつた。あはは八八八。それから文部大臣は。

幸兵衛　學校の戸籍帳でも擴げてゐればいいのさ。任期わづかに一二年で屬僚より先に馘になる身空で、何の落着いた仕事が出來るものか。況んや一國の風教又は思想の如き根柢の深く由つて來るところの遠いものを一人一省の力を以て廓淸しようの善導しようのとは、誇大妄想もまた甚だしい。日本は昔しから厳密な意味では一度だつて超然内閣でない時は無かつたのだが、そのくせ又日本國民くらゐ政府を當てにし政府を賴り政府の袖にすがる國民はまたと他に例があるまいよ。何事も政府だ。火災保險も政府にお願ひする始末だ。風教道德の責任も政府へ押し付ける、といつたわけだ。眞に意久地の無い話さ。

福太郎　さうすると、思想問題といふものは誰も何うもしやらはないものでせうかね

幸兵衛　と云ふと、福さんも何かい、政府に見放されれば、思想問題も風教問題も何うにも成らないとお考へかね。何うも困つた人だなな。皆なの顔がそれ〳〵ちがふ樣に皆の考へもそれ〳〵ちがふのだから、それをこと〳〵く二三の考へ型に押し込まうといふのは初から出來ない相談だよ。秦の始皇は六國を併合して一天四海を掌中に握つたほどの英雄だけあつて、思想統一のためには書を焚き儒を穴にし、ずゐぶん過辣な手段をとつたが、甚だしく失敗し、却つて其爲めに亡びたぢやないか。思想統一なんてことを思ひ付くのがすでに頭の調子が狂つてるんだ。この始皇の狂妄を笑ひ乍ら、矢張今でも政府は之を眞似たがる。人民も政府萬能と妄信してゐる。今も火災保險の話をしたが、何でもかんでも政府に持ち込み、政府ならでは夜が明けない。いまに政府に米も作つてくれ、家も建ててくれ、媒人もしてくれ埋葬もしてくれ、といふやうに成るだらう。

福太郎　いや、家だけは誰も政府にお賴みしますまいよ。今度のバラツクの手際で皆な大抵こり〳〵でせう。テントであれバラツクであれ、勝手な時に追ひ立てられますからね。又ほかの事でも、それは、賴めば政府はいろ〳〵やつてくれますが、ただ怖ろしく手數料の高いのには驚かされますね。烟草や鹽であくどく儲けられてるのは誰も御承知でせうが、横濱の税關で荷物を一つしらべて貰ふにも大變な税金でさ。日でもくれると一時間に三十兩の百兩のと割增金までとりますからね。

幸兵衛　いや、併し、そこらは仲々超然政府の智慧の有るところさ。どんな貧乏人でも買はずにはゐない鹽や、なほ貧乏ほど意地きたなく飲むところの酒や烟草に目玉の飛び出す樣な税金をかけてるところの超然主義ぶりは、流石に拔目がないよ。家へ來る豆腐屋の爺いなぞは一年中赤い顔をしてゐる位だか

ら、ただ酒から納める税金だけでも二百圓やそこらぢやおちまいと思ふが、表面は税金を拂つてゐないやうな形で納税資格なんてむづかしい位は付かない。無官の太夫へベれけ爺いだ。裏から二百圓以上も納税してゐるのを御當人御存知なしだから天下太平さよ。

福太郎　何故酒にはそんな重税がかかるのでせう。

幸兵衛　金拂ひのいい奴が多く酒飲みだからだらう。それとも藥さへ重税がつくんだから、酒は百藥の長といふところで重いか。

福太郎　御隱居さんの前ですが、或人の話に、酒や烟草は人間に有害だから、重税をかけて飲む量を制限するためだとも聞きました。本當でせうか。

幸兵衛　御親切なことだな。では藥に重税をかけるのは何うしたわけかい。之も飲みすぎると毒になるといふ御心配からかのあははハハハ……笑ひ序でに最う一つ滑稽なのは賣笑婦の拂ふ重税だよ。こいつは一寸思ひけがない税金だらう。税金といへば、納税が代議士選擧の第一の資格に數へられる位だから、いかにも嚴粛なものに考へられるだらう。村會議員さんとか町長さん郡長さん學校の先生、さういふ人たちが税金を拂ふといふなら當り前だ。けれども藝者娼妓、一語にしていへば淫賣が伴々バカに出來ない多額納税者と聞いたら一寸意外だらう。

福太郎　何故、罰金といはなかつたでせう。税金よりも罰金のつもりぢやないでせうか。

幸兵衛　そこだて。私も何うもさう思ふのさ。斷りなしにやれば風俗を亂すといふので捉へられて二十九日の拘留だらう。屆け出れば官許淫賣婦として堂々と神樂坂や何かで風俗を亂すことが出來るだらう。その代り納税の義務が伴ふ。前金で拂へば税金で、捉へられて後金で拂ふと罰金だ。この調子で行くと泥棒も一つ前金で税をかけて官許御免としたら何んなものだらう、とも考へられる。一寸政府のいい財源に成りはすまいかのう。

福太郎　泥棒の税金ですか。

幸兵衛　うむ、さうよ。娼妓から受け取る金は綺麗だが、泥棒から納める金は汚れてる、といふほど税務署は潔癖でもあるまい。私に云はせりや、泥棒の金の方がまだしも高利貸や悪家主の持つてる金よりや綺麗だぜ。

福太郎　金の綺麗やきたないは、税務署では問題にはしますまい。十圓に通用する十圓紙幣だつたら、誰からのだつて構ひますまいよ。併し泥棒から營業税を取るだけの英斷を今の政府は持たないでせうよ。

幸兵衛　いや、そんな事はない。既に博奕の方からは取つてゐ

るからな。博奕と云つて悪ければ哀彦道だ。

福太郎　八八のことですか。

幸兵衛　此男は世間のことに迂いなあ。八八ばかりが博奕かい。今のバクチは八十種類の上もあらあ。といつて私がしたわけではないがな。

福太郎　へえ、それは分つてますが、それから皆税金を取つてるのですか。

幸兵衛　追々さう成るかも知れんが、今はさうは行かない。賭博を人間の悪徳として嚴禁した手前、まさか卒かに税金惜しさに官許もなるまいが、矢張税もほしいしその他にも慾が有つて、慾でわるけりや目的があつて、一二の博奕は許してゐる。曰く勸業債券さ。曰く馬券さ。

福太郎　はあ、馬券ですかい。あんな勇ましい景氣のいいものはありませんなあ。あれが若し博奕としても、そりやよつぽどいい博奕だ。同じ病氣にしても戀の病は景氣がいいやうなもんだ。

幸兵衛　これ〱、勇ましいのは競馬だ。博奕はそれから後のことさ。

福太郎　併し五圓ほうり出して一つ當りや二百圓も掻つ込むところは目覺ましいほど活氣が有るぢやありませんか。私は勸業債券の方は何だかしみたれのやうでいやですがね。

幸兵衛　さうさ、債券は少し婆あくさいな。そりや馬券の方がたしかにイキがいい。そうして此イキのいいところがまたバクチの生命だ。從つてバクチを打つてると任俠肌に成るわけだ。鼻水を垂らして利子を計算しながら博奕が打てるものではない。眞に乾坤一擲だ。だから大きくかけて迅く勝負のつくほどが面白い。

福太郎　それほど面白いものを、何で國家は禁じたものでせう。まさに人生の幸福を奪ふものではあませりんか。

幸兵衛　恐らく面白いからさ。生命の木の實が禁制されたのは全くの話美味いからさ。アナトール、フランスといふ人の云つてる言に、或る船が航海中に暴風雨をくらひ、とうたう轉覆してしまつた。乘客は皆海に陷つた。中に二人の水夫が丁度そこへ泳いで來た鯨の背中へ這ひ上つた。彼等は命拾ひして自分たちの幸運を祝するよりも早く、早速ポケットから賽ころを取り出し、博奕を始めた。それほど人間といふ奴は博奕が好きだといふのだ。

福太郎　へえ、西洋人でも博奕をやりますかね。

幸兵衛　やるとも、バクチぢや西洋の方が本家かも知れない。モナコといふ國の王室費は悉くバクチの税金だ。其所では野暮

に咎めないで税金で如才なく許す制度に成つてると見える。一たい西洋人はあんまりバクチ好きで寄るとさはるとやつてるから、さう一々縛り切れない爲めからかも知れない。日本でも一時西洋かぶれかも知れないが、賭博金刑論なんどいふものが稱道せられ、世間の注目を引いたことがあるよ。そのはづさ。それは私がまだ若い時分の事で、今から丁度二十三年前の春のことだが、その頃堅い新聞で名の通つてゐた時事新報の社說に揭げられたんだからの。賭博は合意づくでやる事なのだから、深く咎めるに及ばず、罰金刑にて十分だといふ趣意だつたと記憶する。大分古いことでうろ覺えの話だがな。

福太郎　それから何うなりました。

幸兵衛　なあに　それつきりの話さ。その後の方が取締りは却つてきびしく成つたらう。表面の理由は射倖心を煽り懶け者を作るからいけないといふんだ。それは實際懶け者を作るよ。日本人見たいに煙草をすふ片手間に仕事をしてゐるやうな怠け者ぞろひの國民にとつては、之は多少の眞理無きに非ずさ。しかし、射倖心でも無いと、之からの貧乏人は迚も希望を持つて此世に生きてゆくわけに行かなくなるだらう、と私はそれを憂つてゐるんだ。ねえ、福さん、さうぢやないか。一日働いてわづかに二圓や三圓の賃銀を受ける職人や、一ケ月の月給二百圓以下のサラリーマンが、射倖心でも働かせないで、何うしてブルジョアと同じ人間といふ心持に成れるかい。陳勝だつたかな、秦の始皇の輦を見て「王侯相將種あらんや」と人間平等感を催したといふ話はあるけれども、今日のサラリーマンやレーボアラアがブルジョア諸君の生活ぶりを見て、「ブル、アリ、プチブル種有らんや」なんてメートルを揚げ得る者が一人でもあるかい。ブルジョアとプロとは全く種が別々の感があるよ。富豪の家の飼犬ほどの生活だとて、プロは到底夢みるに難い。印度で金を殘した伯父さんが死んで、百萬ポンドの遺産がにはかに轉がり込んで來たといふやうな棚ボタ的の小說はイギリスの通俗物によく有る筋だが、日本では小說の筋にだつてそんな棚ボタ話は有りやしない。蛙の子は蛙といふのが昔から身分の相違を語つた言葉さ。尋常に地みちに働いてゐた分には、貧乏人は一生は愚か楠正成式に七度生れ替つて働いて見ても、金持には成られぬ。貧乏人には常に恁うした絕望的心理がある。たまには道を步いてゐて、金貨でも落ちてゐないか、と考へる時もあらあ。しかし、それが實際落ちてゐたら、もうそれは自分の物ぢやない、警察へ屆け出なければならないんだ。そこまで來て夢は忽ち覺めてしまう。

福太郎　ところがこつちは落すばかりで、拾ふことなんかメッ

タにありはしない。

幸兵衛　まあ、後を聞きなさい。博奕の味はそんなものぢやない。大きく張れば一躍萬金をかち得られるんだ。ブラジル政府では仲々大袈裟なロツテリーを興行してゐる。そいつを一つ引き當れば忽ちに五十萬百萬といふ富豪に成れる。だから首府の公園には其所にも此所にも勞働者が陽に照らされつゝごろりごろり寢てゐるが、彼等は病氣でもなければ此世に望を失つたものでもない。否々彼等は明日にも百萬長者に成り得るだらうと夢みつつ、心よき博奕の陶醉にひたりつつうつとりとしてゐるのだ。懐にはロツテリーの札を一枚づつ忍ばせてゐる。何うだかうなると博奕は天と地とをつなぐ梯子だ。地下の人草いつでも運次第で雲上の客となり得るのだ。然うなればプロレタリヤの胸にも希望は湧く。ふところに百萬圓の當りくじの見込みある馬券か何かを忍ばせ乍ら仕事に出懸けるのだと、電車の車掌さんに何の不平が有らう。わづかの賃銀の値上げくらゐのために血道を上げて騒ぎ廻る勞働組合の連中を鼻の先きで笑つてゐるにちがひない。曰く、へん、ストライキする手間がありや賭博をするわい。といふ事に成る。さうなれば無駄な高等係の刑事なんか不用に成る。警官と勞働者とつまらない喧嘩なんなかしないで、双方一緒に馬券を買ひに行く事に成る。から來りや一國の內、和氣あい〳〵たり矣だ。何うだい。福さん。

福太郎　成程、お話の通りだとこの世乍らの天國の様な氣がいたしますが、勞働者が百萬長者の夢ばかり見てゐても、ただ仕事が手に付かないばかりで、結局當りくじを引く者がその中何人有りますか。はづれて損ばかりしてゐたら一層みじめぢやないでせうか。

幸兵衛　夢だけでも見られたらいいぢやないか。今の社會狀態では貧乏人は金持に成る夢さへ禁じられてゐるんだ。今の世の中はあんまり窮屈すぎる。道德や法律で固めすぎてゐる。そのため却つて大道すたれ犯罪人も殖えるのだ。もつと人間を自由にしてやりらくにしてやる事が差し當り必要なんだ。文學や美術にさへ干渉するといふ段になれば活動や芝居の取締りが嚴重に成るのは知れたものだ。やれ　芝居の連中見物を禁じる、芝居の時間に干渉する、とまで來りや、これは惡い事ではないが五月蠅いや。國を治むるは小鮮を煮るが如し、と老子の本文にある通り、小魚を煮るのに餘り攪き廻しちやダメだよ。皆な形が崩れてしまうからな。

福太郎　しかし芝居の切上げは實際早くして頂きたいな。

幸兵衛　それは私も賛成ぢや、政府は政府だけあつていゝ政府のなさることは大抵いい。ただ捨てて置いてもいい事をやりすぎ

る。何も警視廳から芝居の時間を早くしろといはないでも、日比谷に出る强盗を少々大目に見てやりやいいんだ。

福太郎　御隱居さん、それは又何うしたわけで……

幸兵衛　帝劇でいい氣持に成つて遲くまで見物して、はねてからすぐ電車で歸らうとしたがあいにく電車が込んでゐる。すこしそこらをぶらつかうか、といふんで公園近くをうろついてゐると、「やい、君は紳士か。紳士ならそのオーバーを脫いでいけ」てなことをいふ奴に出會つたとする。もう此先生芝居はあつても詰の幕まで見やしない。二幕くらゐ見のこして早く歸る。引續き度々日比谷に强盗が出沒するのを警視廳で目こぼしにしてゐれば、命令しなくも帝劇の方から興行時間を短縮する。

福太郎　はてね、序に其强盗を婦人矯風會で拜借して、三谷から日本堤邊へ潜伏させたら何うでせう。そうして吉原へ遊びに行く嫖客を片つぱしから引はいでしまう。之れには誰も怕れをなして公娼自然消滅と成りませう。

幸兵衛　いかにも、〳〵、それはいい智慧だ。早速婦人矯風會に敎へてやりなさい。公娼廢止では私もまた他に一策が有る。私を參謀官にすればすぐに公娼を自滅させて見せるんだが……

福太郎　へえ、それは何んな作戰で行きます。

幸兵衛　美人を澤山大門口に出張させて、盛んにただで施すんだ。施餓鬼をやるのさ。さうすれば何を苦しんで誰が賣笑婦なんどを對手にするものか。自然消滅だ。あの廢娼演說會なんかでは如何に辯士が雄辯を振つてみても、聽いてる連中が少しも公娼に緣の無い人間だから効果が無い。聽衆は婆さんに非されば女學生、女學生に非れば貧乏書生、貧乏書生に非れば爺さん最初から公娼に見放されてる人物だ。公娼の方でも「あんたが嫌なら私も嫌ひ、之はお互ひさまだわよ」と來らあ。

福太郎　すると、御隱居さんは、公娼廢止反對論者ですか。

幸兵衛　何の私が反對するものか。私が反對する理由が無い。私は家內と二人で公娼廢止の請願書に署名捺印してやりましたよ。

福太郎　御隱居さんなんかは、自分の若い時はさんざいい思ひをして、働かなく成つた時分に成つて公娼廢止に贊成なさるのなんかは、餘り思ひやりが無さすぎますよ。それでは今の若い者が可愛相です。

幸兵衛　なあに今の若い者はうまくやり過ぎてるよ。公娼くらゐ取上げて丁度いいんだ。私の若い時分には、女給も無ければ女優もなし女事務員も無し、たまに女學生に何かあれば新聞で大袈裟に筆誅されたもんだ。男女七歲にして席を同うせずとあつて異性との交際は丸きり無かつた。それを思ふと今の學生は幸

福すぎるよ。

福太郎　藝者は公娼の中へ入りませんかね。

幸兵衛　私はその事はよく知らんが、丸抱へなどと成つたら矢張公娼の中かも知れんな。凡そ公娼と私娼の別は、公娼は税金を拂つて營業するもの、私娼は罰金を拂つて營業するもの、公娼は抱え主の奴隷、私娼は自分の慾望又は虚榮心の奴隷などが多い。だから一體なら、公娼廢止は經濟問題から出發する社會政策家の仕事で、私娼廢止は貞操問題から出發する矯風會の仕事なんだが、誰も公娼に構ひ手がないから據ろなくあんな運動を起したものだらう。だから福さん、氣を付けて見なさい。公娼廢止は政府の財源の一つを失ふことに成るから、政府は成る可くとぼけ樣としてゐるし、ブルジョアの機關新聞は惡意を以て眞向から冷かしてかかつてるから。さあさう成ると幸兵衛なんかは何うでも廢娼論者の肩を持たずにやゐられない。

福太郎　しかし、何といつてもお年のせいですよ。御隱居さんも、もう二十年若ければ、請願書に匿名はなさるまいに。

幸兵衛　これ〳〵、福さん、何をいふのだ。私はこれでも飲む打つ買ふといふ此三つの行爲をば、よく〳〵研究した上で立論してゐるのだよ。この三つの物の味を知りもせんで、人間の救濟とか社會政策とか云つてもそれは空論だ。飲む打つ買ふの味を知らぬものは、結局人生を知らんものだ。政事家や教育家は此所をよく心得て置くのでなければ其職責を果すことは出來ん。教育家が酒を飲まない。文部大臣が待合へ行かない。それが何の名譽だ。何の信用だ。

福太郎　でも文部大臣が待合へ入りびたりも困りませう。

幸兵衛　之は文部大臣だけの事ぢやない。誰でもさうだ。飲む打つ買ふの三つの味を知らん奴は話せないよ。そりや三つとも惡德だ。しかしだな。惡の味を知らん者に人間の社會は分らない。この三つは有産階級にとつては惡德だらうが、無産階級にとつては靈魂の救濟だ。働かずに食べて行ける人々と働いても食ふや食はずの人々とを同じ道德同じ法律で律しようとするのは間違ひではないか。私は貧乏人に向つて禁欲主義をすすめる心持に成れない。私は彼等に腹いつぱい飲食させ思ふ存分遊ばせて罪に成らぬ樣に博奕も打たせ度い。と思ふよ。

福太郎　それこそ出來ない相談ですさ。一日や二日彼等を滿腹させとく事は出來ませうが、永くその狀態をつづける事が出來ないなら、却つて彼等を悲しませませう。

幸兵衛　いつも滿腹せしめる事が出來なければ、歡樂の香ひ位でも貧乏人にかがせてやつても宜らうぢあないか。人と生れて借金した經驗の無い奴が道德的に片輪であるやうに、享樂の味

を知らん人間も一人前とは言はれない。今度の殿様内閣が世間の嘲りの標的となる所以のものは、彼等に借金の經驗さへ無からうといふ貧乏人の抱く侮蔑反感から來てゐるんた。芋のにえたも御存知ないくせに、國政を料理するとは笑はせる、てな嘲笑が國民の誰の顔にも書いてある。だが殿様といふものは皆なが想像するほどお殿様氣質のものではない。いつも黒羽二重の紋付を着て、脇息によつかゝり、人が來れば「苦しうない近う／＼」なんてえなあ、あれは芝居の殿様の事で、現實の殿様は決してあんなに綺麗でもなければ鷹揚でもない。もつと如才ない代りには仲々勘定高いものだ。勘定高いといへばそれは平民よりも遙に勘定高いかも知れん。如才なくデモクラティツクだけれども決して打とけて隔意なしにとは行かない。階級感は仲々強い。又今の貴族は仲々悧巧だ。時々は狡猾でさへもある。芋の煮方は知らないかも知れぬが、芋の煮えたはよく御存知だ。バカだと思つてバカにしてかかると何うして／＼仲々悧巧だが、悧巧だと思つてぶつかつて行くとお話に成らぬバカ者が多い。不自然な孤立した彼等の生活が、摩訶不思議の怪物を造り出してしまつたのだ。成上り者の政盗屋内閣に國庫の鍵を預けるのも心配だが、さりとて恁ういふ特權階級に治國平天下を依托するのも亦大に氣が揉める、と人々が騒ぐには一理ある。

然だ。借金の味借家の味馘首された味を知らぬお殿様もお氣の毒だが、さりとて貧乏華族の摺れつからしと來たらそれこそ全く手が付けられない。いや／＼、華族ばかりのことぢやない平民でも餘り永く貧乏して貧乏人根性が骨肓に入つたのは、之も亦浅間しい。此お殿さまを解放するの道、此貧乏人から貧乏人根性を拔き去るの道は、共に一つであつて、それは飲む事打つ事買ふ事だ。呪はれたシシファスが毎日同じ様に力に餘る大石を嶺へと轉がし上げる様に、同じ仕事に倦み疲れた智識階級勞働階級ブルジョア階級貴族階級、それを解放するものは、酒と女と博奕ではないかな。

福太郎　しかし、御隱居、その人達を滅ぼすものも酒と女とバクチてせう。

幸兵衛　それは救はれ過ぎたんだ。羽化して登仙しちまつたんだ。だが其處が惡徳の妙諦だ。善行はただ皆を引き上げるばかりで墮落させる事がない。だから善行ばかり人にすすめると終に世の中は行詰る。例へば勤儉貯蓄だ勤儉貯蓄は福さんなどには良薬だ。勤儉貯蓄の人格化されて假に此世に示現した安田善次郎翁の爪の垢でも煎じて飲ませ度い、勤儉貯蓄は福さんを向上させる。それはいいが、億萬長者の安田翁が勤儉貯蓄してあの上更に向上した日には、一たい何んな結果に成る。化物に成

るか破滅するかの二つに一つだ。果然彼は破滅した。安田翁ばかりぢやない。日本には勤儉貯蓄の不必要な人間が餘りに多く勤儉貯蓄してゐる。さればこそ下々に怨みを殘すんだ。階級戰爭は上流階級の惡德から種播かれずして、却つてその美德から醞釀される。寡慾もよし寬大もいい、しかし本來寡慾な人間が寡慾の美德に惑溺したら遂には乞食と成るより他はない。臆病者にとつてこそ勇敢は美德だが、向ふ見ずの命知らずが氣を負ふて大道狹しと步いたら、血を流さずには止まなからう。惡德は決してそんな融通のきかぬものではない。酒飲んで女買つて貧乏人は拔苦與樂の法悅に入れば、金持は酒飲んで女買つて丁度いい位金を減らした爲めに朝日平吾の兇刄を免かれる。天下は廻り持ち、と昔から云ふ。天下が果して廻り持ちならば誰にも不平はない筈だ。今日は運轉手でも明日は自動車のお客樣に成り、今日は下足番でも明夜は特等席に藝者を連れて芝居見物が出來、今日は寒空の上野山王臺で鼻水垂らし乍ら憲政擁護を絕叫しても、明日は廟閣に連なつて私腹を肥やすことが出來ると思へば不平はない。然るに善行は決して天下を廻り持ちにせぬ。親が總理大臣で子が又格勤精勵で總理大臣、孫も亦たと來ては動きが取れぬ。父は勤王家で身を興し執政第一の權威赫々でも子は呑だくれのバカ侯爵で藝者を引かせて妾にしてカフエーを出させて色男と逃げられる、と來れば世の怨みを估ふことはない。さま／＼の危險思想が起るのは、政治家が此惡德の利用法を知らずに、只管善行美德のみを世人に强ひるからだ。貧乏人の子には勤勞儉素を敎へるがいい。金持の子には金錢浪費の放蕩術を授けるがいい。だから文部省も何うせ學校の心配をする位なら、勤儉學務局長と放蕩學務局長と二人置いて、一般平民の學校を前者に司らせると同時に、今の學習院なんかでは遊蕩學概論でも敎授させ。遊蕩特業士など產出するのが國家のためだ。ここで天下廻り持ちと行く。民に不平が根絕する。

福太郎　成ほど。しかし、御隱居さんのお話は少し眉毛に唾をつけて聞かないと、私らまで其宗旨に卷き込まれ相だ。では、伺ひますが、仙臺侯を遊里に案內した神並三左右衛門なんかは却つて忠臣のわけですかな。

幸兵衛　如何にも／＼三左衛門は忠臣でそれを諫める伊達外記なぞは君へは不忠ではない迄も、大局から考へると社會のためにならん男だ。三井岩崎古川などにも現代の神並三左衛門が必要だ。然るに番頭と成ると皆な陳平張良といつたやうな面をして御家大事と發展策を建てる不心得者ばかりだ。私がつく／＼この頃總理大臣に成る者どもを見ると、何れも智慧の無い人間ばかりで、困るよ。皆私の惡德妙用の法を知らん奴ばかりだ。

ビリケンさんが格勤精勵かなあ、すると蠟燭さんは無休暇勤勞と來たらう。そして最後に馬面閣下の振れ込みは綱紀肅正だ。こりや何れも結構だが結構すぎて薄給者の間には不平が起らう。何しろ歴代馬車馬みたいに鞭打たれつづけだ。文句は違つても結局「精勤」精勤々々だ。不平はなくとも體がつづかぬ。正直な奴は疲れ、疲れた奴は不正直にするより他に致方なくなる。たまには怠惰早退け遲刻欠勤主義を標榜する總理大臣が出て來ねば、下級官吏は神經衰弱で死ぬか、不平を起して退くか、不正直にして精勤の假面を被るより他はない。

福太郎　御隱居さん。そこは皆なが宜しくやつてますから、御心配には及びますまいよ。綱紀肅振といつたところで、馬面さんもそこは如才なく表招牌だけの話でせう。代々鞭うつたおかげで、今の官吏は鞭うたれてやつと一人前に通用する人間ばかりに成つてますあ。

幸兵衛　そこだ〳〵。格勤で鞭つてもやつと一人前だけの仕事しか出來ん人間に人をしてしまうより、懶怠を宣傳しても優に一人前の仕事の出來る方が、世の中がらく〳〵してゐるぢやないかい。たとへば泥棒だ。泥棒をむやみと監獄へやるが、あの赤煉瓦の監獄や警察や裁判所にかける莫大な費用を惡人ばらに全部提供してやつたら、その上泥棒をする必用もあるまい。捕るばかりが能ぢやない。飲ませてやれ、買はせてやれ、これでも盗人は失くなるんだ。監獄に養ふのもバアで飲ませるのも、結局同じ費用なんだ。うん、その泥棒で思ひ出したが、泥棒についてここに面白い話がある。それを聞いてくれ。

福太郎　へえ、伺ひませう。御隱居さんが泥棒に入つた經驗談ですかね。

幸兵衛　いや、さうぢやない。或小說家の話だ。郊外に住む小說家の家へ或晩泥棒が入つたと思へ。

福太郎　思ひませう。だが氣の利かない奴ですなあ。

幸兵衛　さうよ。金持と思つたんだ。泥棒の方にも目がねちがひといふ事があらあ。折角入つたけれども何も目ぼしい物がない。下女部屋へ行くと下女が大口開いて寢てゐたと思へ。

福太郎　何處のお女中さんも同じ樣ですな。

幸兵衛　机の下をさがすとがま口があつた。先達受取つた十五圓の給金をそのまま入れてあつたんだ。泥君思へらく、實に素敵な家もあるものだ。俺がここまで入るには非常な格勤精勵の上なのであるのに、何も盗む可き物を準備してない。まあ、しかし之でもいい、無いよりはましだらう。てえんで盗つて出た。小說家はさつきから目を覺ましてゐたが自分の物をとられるのでもないのに、下手に騷いで怪我をしてもつまらんと思ひ、默つ

てしまいまで觀察してゐた。さて泥棒が逃げた後で「泥棒」と追つたから無事だ。

福太郎　まるでこの頃の巡査のやうだ。その人は小說を書く前に巡査した事もありますかね。何うも逃がしぷりが要領を得てゐる。

幸兵衛　さあ、そこまでは私は知らないが、兎に角下女の金十五圓を盜まれた。ところが小說家はそれを種にして小說を書いて、原稿料を金五百圓と取つたものだ。何うだ。物も使ひやうぢやあないか。

福太郎　もう一つの話は何です。

幸兵衛　それはちと尾籠だが屁の話だ。屁といふと下卑るが腸に發生するメトン瓦斯と思へばいい。

福太郎　へえ。そのメトン瓦斯が何うしました。

幸兵衛　まあ、聞け、殿樣が此度大臣に成られた。大臣に成つた以上は、勿論省內の綱紀肅正だ。ところが何うしたものやら、此メトン瓦斯が或腰辨の腹中に發生した。堪えきれなく成つて放した瓦斯が飄々乎として輕く飛んで人も有らうに大臣の鼻下を掠めた。しかしそこは殿樣だ。御自分のお手では捕はれない。「誰か有る、この無禮者を捕縛せい」と命令したと思へ。いいかい、福さん、しかし、誰の眼にもメトン瓦斯の姿は見えないので、とうたう捕り逃した、といふ話さ。

福太郎　へええ、それでおしまひですか。

幸兵衛　さうさ、之でおしまひさ。小說家は逃がした樣でも捕へてるし、殿樣は追跡したが取り逃がした、といふだけの話さ。故に曰く民を治むるは瓦斯を捕縛するが如し、といふ事さ。民を治むるはで分らなければ、危險思想の取り締りは、と云ひ直してもいい。

福太郎　ところでお殿さまの外交手腕は何んなものでせう。

幸兵衛　霞ケ關の坊ちやんの方の消息かい。外交ばかりは、そりや何といつても坊ちやん方に御一任するに限るんだ。坊ちやんと云つても、三輪車に乘つて遊んで來た御褒美にお母さんからチョコレートを預くお坊ちやんと思つたら違うよ。外國語にや堪能だし舞蹈も大方うまいだらう、國際法は暗記してゐる事勿論だ。

福太郎　さうでせうか。私何だか外交が一ばん心配のやうな氣がしてなりませんがなあ。

幸兵衛　なあに心配する事はない。誰が大臣に成つても霞ケ關の外交は讓步主義と昔から極つてる。アメリカが一足前へ出ればこつちは一足後へ退がるのさ。支那が一足前へ進めばこちらは一足後へ引く分の事さ。

福太郎　それでは將來困るぢやありませんか。

幸兵衞　なあに、そこは坊ちやんたちだつて心得たものさ。之れは先方の國々にわざと甘く見られて油斷させる爲めなのさ。如何にも日本の外交官は大人しい。從順だ。と恁ふアメリカでも支那でも讃めてゐるよ。日本人の事だから大方日本語も知つてるだらうに、日本語を使はずに英語を使つたりフランス語を使つたり、さうして成る可く自分の思ふやうな口を利くのに不便にする。實に日本の外交官を對手にして談判するのは赤子の手をねぢるやうなものだ。とね。外國に恁う思はせるのさ。

福太郎　さう思はせて置いて後から何かするのですか。

幸兵衞　そりや、一度や二度ぢやいけない。何の公使もこの公使も何の大臣も、この大臣も皆な舞踏と外國語の外交道をふんで、日本人に魂なし、としみ／＼思ひ込ませるのさ。但しあんまりバカに見えてもきまりが惡いから時々は小細工をやつて時に成功したり時に味噌をつけたりするのさ。

福太郎　そんな事をいつ迄つゞける積りでせう。

幸兵衞　なあに、列國が日本はよく／＼バカだ、よく／＼腰拔けだ、そしてよく／＼小刀細工が好きだ、支那に向つてもシベリアに向つてもアメリカに對つても定見も何もない、と十分安心して油斷する日迄だよ。

福太郎　いよ／＼列國が油斷したら、その時は坊ちやんがたの方にも何か覺悟が有るのでせうか。

幸兵衞　さあ、そこまでは私も知らない。

福太郎　ただ徒に列國からバカにされ見くびられ侮られてるだけで、その奥に何も無いんぢや困りましたね。先方に油斷させるまではいいけれど、ただ油斷させたきりで、その後に何も無いんでは。それぢや、霞ケ關の外交官は本當にバカで本當に腰拔けで本當に誠意が無い、といふ事に成るぢやありませんか。

幸兵衞　さあ、さうかも知れない。併しそれなら一層便宜だらう。にせのバカより本當のバカの方か一層バカとしてよく通用するだらうし、にせの腰拔けより本當の腰拔けの方が更に一層間ちがひ無く腰拔けとして通りがいいだらうから。

福太郎　しかし外交官がそれぢや困りますなあ、外國語がしやべれて、舞踏がうまくつて、といふだけで、諸外國から侮られてゐるのでは。

幸兵衞　なあにさうではない。私はマジメで云ふが、外交は共程度でいいんだ。ナポレオンやビスマルクの外交をいい外交だと思ふと大間違ひだぞ。それなればこそナポレオンは亡び、それなればこそプロシヤは亡びたんだ。イタリーが無理のある三國同盟を脫して聯合軍に味方したのは、何は何だが未だ危まれ

る。日本の歴代の政府のやる事に一つも取り柄はないと思ふが、外交だけは私も感心してゐる。外交官は傑物を用ゆ可きところではなく、のつぺりしたお平の長芋が尤も適してゐる事を知つて、魂の拔けた人形みたいな男ばかり霞ケ關に集める考へは、ありや誰がきめた事か知らんが感心する。

福太郎　誰がきめた方針でもなく、外交官試驗とかいふものがある相ぢやありませんか。私もよくは知らないけれど、ずゐぶんの秀才でなければパスしない相ですよ。

幸兵衛　さうかい。それはいよ／＼以て妙々ぢや。日本人の中でもこんなところが選りすぐつた秀才だといふ事が若し外人に知れたなら、彼等は益々安心するだらう。安心を與へる事が外交の肝腎かなめだ。

福太郎　それは、霞ケ關の坊ちやんたちが日本人の中の大秀才だといふ事は、いふ迄もなくあの人たちから宣傳されませうから、その點は御念には及びますまい。外國人に對しても又内地人に對しても。

幸兵衛　いや、さう聞いていよ／＼私も安堵した。少々は侮られてもそれなれば外國から憎まれも妬まれもすまい。外交といふものはそこらで大出來なんだ。一體日本人は巧い外交を昔から一度もやつた經驗が無いせいか、巧い外交に憧憬れすぎる。が、それは不心得だぞ。外交は下手ほど結構だ。

福太郎　成程さうしたら外國から戰爭を持ち込まれる心配はないでせうが、アメリカからも支那からも追ひ出され、南阿でも濠州でも對手にしてくれずとあつては、うぢよ／＼殖える日本の人口を、御隱居さんは何うなさらうとお思ひです。

幸兵衛　うん、人口問題か。それなら都合のいい事には、時々地震と火事と流行病が見舞て、丁度よい樣にしてくれるわ。それでもまだ人口が超過すれば、それ、參謀本部でよろしく何とかしてくれるわい。福さんも子供は多いが、まあ心配せずと酒でも飲め。おい、婆さん、酒を持つて來てくれ。やれ／＼、今までここにゐたつもりだつたが、又そつちの部屋で婆さんは晝寢かい。（おはり）

蔦溫泉籠城記

大町桂月

一　二人の呑んだくれ

小笠原臥雲に迎へられて、兒玉花外は十和田湖を歌ふべく、余は杉浦重剛先生を傳すべく、蔦溫泉に籠城することゝなりけるが、臥雲笑つて、大正の寒山拾得なりといふ。斯くいふ臥雲も、圓顱童顔、些の俗氣なく、軀幹偉大、堂々たる大和尚の相好を有す。花外桂月が寒山拾得ならば、臥雲は國淸寺の豐干なるべし。若しも三人揃ひて、山下の通天橋に撮影すれば、大正の虎溪三笑ともならむか。

臥雲は豪農の家に生れて、數十萬圓の財産を有するが、敝衣破帽、毫も邊幅を飾らず。酒を飲まず。煙草も呑まず。女色を近づけず。家業の暇には、好んで書を讀み、又好んで山に登る。熱血漢にして常識に富み、何事にも相當の知識を有して、文章を善くす。その健脚は天下の珍也。シャツを着ず、ヅボン下を穿かず、脚半も用ゐず、傘も持たず、唯破帽にゴム鞋、平生の散歩と同じ打扮にて、雨を冒し、雪を衝き、絶壁を攀ぢ、荊棘を排き、飄々乎として獨り深山に入り、日暮るれば、岩を枕にして眠る。晴天なれば、冬にても裸體となりて日光浴を爲す。日に二十里の路を歩きても、毫も疲るゝことなき也。花外は呑んだくれ也。余も呑んだくれ也。この二人を一所にしておきたらば、朝から晩まで酒びたしになつて、一向筆を執らざるべしとは、世間一般に想像する所也。江見水蔭手紙の端に書して曰く、

桂月が見える
　花外が見える
二人は醉つては笑つてる
　又時として泣いてゐる
泣いた涙は蔦溫泉
　それには酒の香がする
手紙を讀んだ其時に

水蔭が感じたのは然うだった

臥雲も大に心配し、宿に命じて、花外を樓上に、余を樓下に陣取らしめ、二人をして、成るべく、相接せしめざるやうにと、小刀細工をさへ用ゐたり。その爲めに、花外の倒したる瓶子の酒ぽたり／＼と余の頭上に落ち來る滑稽をも演じたりき。然るに、花外も余も同じく呑んだくれなれども、呑み方異なれり。花外は平日は酒を口にせざるが、余は毎日飲む。酒は余の戀人也。一日相見されば三秋の如き也。酒量を云へば、花外大にして、余小也。花外は二本にて微醉し、余は一本にて微醉す。この一本は四合瓶にて、正味三合三勺也。余弱くして、とても花外の相棒には成れざる也。花外は飲み出せば、泥醉せずんば止めず、且つ梯子酒にて、多々益辯ずるが、余は感興に乘ずれば、泥醉すれども、平生は感興起らざるを以て、醉へば直に眠を催す。時あつて、怒り上戸となり、笑ひ上戸となり、泣き上戸となるも、余の本體は三上戸以外の眠り上戸也。余は山水を好むこと酒にも劣らずして、閑を竊みては遊行するが、花外は山水の趣味なくして、一向外出せず。或時二三人にて姫森山に登らむとして、花外を誘ひしに、應ぜず。登山袋に酒ありと云へば、喜んで應じたりき。翌日又二三人にて谷地溫泉に赴かむとして、花外を誘ひしに、應ぜず。酒ありと云へど、なほ應ぜざりき。

数月間も山中の孤屋に同棲しながら、花外と會飲したるは、前後十數回に過ぎず。それも余の室に於てせず、花外の室に於てせずして、臺所の爐邊に於てせり。花外がまだ一本を飲み終らざる間に、余は一本を平げ、さつさと引上げて眠る。花外も二本にて止めて置けば無難なるが、三本目には管を卷き出し、三本飲み盡せば、ぐでん／＼になりて、足もたゝず。女中に手を引かれて、漸く寢に就く。余往々一睡して覺め、便所に行く途中にて、ぐでん／＼の花外に逢ふ。花外は是より華胥の國に遊ばむとし、余は巨燵を擁して、筆を呵する也。

東京にてバーの梯子酒に慣れたる事とて、花外は山中の淘酌に堪へず。折り／＼山下に遠征し、一宿して歸ることあり、二宿することもあり。三四宿することもあり。往く處は、山下四里の結量なるが、なほ三里進んで三本木に及ぶこともあり。三本木には藝者も居るが、花外には用なし。三本木より蔦山までの間に酒を賣る家十數軒、軒毎に往復とも立寄りて飲む。『酒の先生』とて、蔦山に一の名物男出來たる也。余、久しぶりに新體詩を作つて曰く、

花外は酒を飲まむとて
人里さして下りゆく

桂月は酒を飲まむとて
　尾上をさして登りゆく
花外は好む梯子酒
　痛飲淋漓千鳥足
世のあはれなる物語
　花外は泣いて聞くならむ
峯のさかなは木の子なり
　鳥の音紫雲の舞
名斉利走の塵の世を
　桂月は足の下に見る
明日は戻りて一つ宿
　共に語らむ風呂の中
さらばと渡る丸木橋
　二人を隔つ谷の水

雪に封ぜらるゝに及びでは、流石の花外も、また下界に下ること能はず、無聊に堪へざるやうなりしが、元日に山下の小學校にて新年宴會を催し、花外を招き、余をも招く。余應ぜす。花外小躍して風雪を衝けり。四宿して歸れり。太田吉司氏は鈴木校長、和田訓導と共に、花外を送り來れり。鈴木校長は酒豪にて、花外の好き相棒也。夜共に飲み、余は一瓶を倒すと共に、さつさと蒲團の中にもぐり込む。校長と花外とは大に飲みて、臺所に梯子酒を催し、湯船にまで、更に梯子酒を催し、裸體のまゝにて校長睡り、花外も睡りしが、和田訓導氣付きて、二人を扶け戻れりと聞く。翌日も又飲み、余早く引上ぐ。校長と花外とは、臺所に例の梯子酒を催したるやう也。

二宿して校長去れり。太田氏も和田訓導も共にせり。流石の花外も宿醉して起くる能はず。よく／＼苦しかりしものと見えて、蒲團の中にてサイダーを呼びしが、その晩、さきに山下にて土産に貰ひたる一升瓶のまだ四分の三ばかり殘れるを臺所に持ち來り、舊の正月までは酒を飲まず、この酒は誰れでも飲み給へとて、主婦に渡し、樓上に臥すること數日、湯槽にてふと相逢ふ。顔色大に惡し。三夜も睡むる能はず、且つ便通もなしといふ。酒を飲み給へと云へば、花外喜びて、樓上に獨り酒を呼び、終に臺所の梯子酒となりたるが、翌朝余の室に來り、昨夜は快く眠りたり。便通もありたり。今朝は心神爽快なり。なるほど酒は藥なりとて笑へり。

二　蝿といふ一友

花外は谷地温泉へ行かで好かりき。登山袋に四合瓶を入れるには入れたるが、袋の中にて倒れたり。而して食物の袋に陥間

ありて、酒洩れたり。それを氣付し時には、惜しや、瓶中に一滴の酒もなく、谷地温泉の午食は、寂莫且つ不快に堪へざりき。再び酒を全うして行きて飲まばやと思ひしに、大谷勇といふ人、一米國人を伴ひて來れり。大谷氏は秋田縣の毛馬内まで汽車にて來り、それより大湯を經て十和田湖を見物し、奥入瀬川を下り、燒山より轉じて蔦温泉に來れる也。多くの人は、これより引返し、燒山を經て、三本木方面に出づるが、大谷氏はなほこれより谷地温泉を經て酸ケ湯温泉に至り、八甲田山の頂を窮めて、青森に出でむとす。これ十和田湖遊覽に徹底せるもの也。谷地温泉までは案内かた〴〵とて、共に行く。

赤沼への岐路に至り、赤沼へ立寄られずやと云へば、幾分かかると問ふ。十分なりと云へば、さらばとて應ず。岐路を少し行き過ぎ居りたれば、後戻りせずに、二三十間は草生ひたる處を突つ切る。米人早や辟易して、引返さむとす。余は既に路に達し居りたり。こゝまで來れば路ありとて、手にて招けば、米人來り、路を見て喜ぶ。赤沼に達して、余時計を取出し、丁度十分かゝりたりと云へば、米人余の肩を叩き、君は正確なりとて、喜ぶこと甚し。赤沼は山上の小湖也。横は三四十間乃至六七十間に過ぎざるが、奥行は五六町もあり。奥に行くに從つて、横幅も廣く、眞正面に赤倉嶽屹立して湖を壓す。倉とは絶壁を指す。この嶽、赤沼方面に絶壁を成し、而して巖色赤味を帶ぶるを以て、赤倉嶽と稱す。こゝより見たる赤倉嶽は金字形を成し、絶壁高く天を衝く。少し前の右手には北条手嶽、左手には南方手嶽、ほゞ同じ高さにて、赤倉嶽より低く相對して屹つ。恰も鳥の兩翼を張りたるが如し。湖面波なく、赤倉嶽影を倒にし、その倒影の中に鴨群靜に眠る。迂回したる甲斐ありとて、米人ます〳〵喜べり。

蔦温泉より凡そ二里、谷地温泉の手前よりわかれて、大谷氏と米人とは、酸ケ湯さしてゆく。ほんの三四町、而かも後戻りを要せざる捷路あり、谷地温泉へ廻られずやと云ひたれど、應ぜざりき。余ひとり温泉に至る。浴客絶えて、空室のみ存し、溪流寂し氣に我れにさゝやく。谷地とは濕地をさす。温泉場の前は一面の濕地にて、水芭蕉簇生し、後は高田大嶽富士形を成して孤立す。近村の人の夜具、食器、食料一切を持參して湯治する處にて、旅館としての設備なく、温泉を守る人もなし、湯槽は別に屋を設く。硫黄泉なるが、温度低くして、冬は浴するに堪へず。小屋二つ、幾房にも分ちてそれ〳〵爐を備ふ。一爐に就き、火を焚いて先づ身を温め、杯を傾けて腹を温む。一杯また一杯、魂は塵の世を離れて、神の國に逍遙す。酒は余に於て戀人なると共に、親友也。酒と共にあれば、山上の孤居、些も

寂莫を感ぜずして、詩興自ら湧く。ふと蠅を見出す。雪さへ降りて、空屋の寒さに、なほ死せざるか。一匹かと思へば、又一匹、又々一匹、四五匹の蠅、瓶邊を這ひまはる。我れ生れて五十五年、蠅を唯うるさきものとのみ思ひしに、今日始めて蠅の可愛らしきを知れり。『やれ打つな蠅が手をする足をする』と云ひたる一茶の句も思ひ出されて、余は酒の外に、蠅といふ一友を得たる也。

浴場無レ客屋空存
爐畔傾レ杯身忽溫
憐汝蒼蠅冬不レ死
還來還去吸二殘樽一

といふ詩を作つて、杉浦先生に呈せしに左の次韻を贈られたり。

豈有二山中曆日存一
蒼蠅來借小春溫
幽人逸興亦堪レ想
讀倦陶然獨對レ樽

三　十和田湖と八甲田山

大谷氏の行程を評して、十和田湖遊覧に徹底せるものと云ひたるが、請ふ、少しく其所以を陳べむ。

秋田縣よりすれば、毛馬内まで汽車の便あり。毛馬内より見返峠まで六里半の間、自動車を通ず。途中に大湯温泉ありて浴すべく、銚子瀧ありて見るべし。見返峠より半里下りて十和田湖畔の發荷に達す。十和田湖にて見るべきは中山御倉山の兩半島の斷崖奇巖也。湖は三里四方、周圍十五里、ほゞ圓形を成せるが、唯南方より兩半島突出し、高さ數百尺にして、長さ一里に達す。日本の西部には幾んど山湖なく、東部殊に富士以北に山湖あるが、兩半島の斷崖奇巖は、十和田湖のみの有する所にして、十和田湖ひとり山湖の美を擅にす。この兩半島の斷崖奇巖を觀るには、舟を雇はざるべからず、陸上よりは見えざる也。その斷崖奇巖には、常綠木の赤松、姫小松、落葉樹の桂、楓、山櫻など、或は直立し、或は横臥し、或は倒生して趣を添ふ。樹林直に水際に及ぶ。なほ樹を戴ける巖島も大小數十ありて、清く澄める波上に浮べり。唯是れ神の庭園かと思はるゝばかり也。されど、この兩半島のみを見て直に引返しては、これ未だ十和田湖を見たるものと云ふべからざる也。

十和田湖の水、子ノ口より一決して奥入瀬川となる。激して山上の川は、傾斜急にして、流水奔馬するものなるが、奥入瀬川や然らず、川身瀧を成す口あり、一[illegible]

は平々坦々として流る。溪畔より溪中へかけて、散布せる大小の巖石幾萬といふことを知らず、溪中のみにても數百千に達す。而して溪中溪外すべて巖石といふ巖石は、苔を帶び、兼ねて樹を帶ぶ。天下に溪流多けれども、溪中數百千の巖石が悉く樹を帶ぶるの奇觀は、唯奥入瀨川にあるのみ也。而かも兩岸は絶壁にして、老樹天を蔽ひ、右にも瀑布、左にも瀑布、瀑布多くして、應接に遑あらず、十和田湖を見るもの、豈にこの天下無類の奇溪を閑却すべけむや。奇溪は燒山に至りて盡く。子ノ口より三里半也。この間自動車の便あれども、心あるものは歩け。歩かずんば奇溪を味ふこと能はざる也。十和田湖の神髄は燒山までも延長して、兩半島と奥入瀨川とは、十和田湖の二大絶景也。燒山より三本木驛まで六里、時間を有せざるものは、こゝより自動車に乘りて歸らざるを得ざるべけれど、歸りては唯溪と湖とを見ざるだけにて、山頂の鳥瞰を得ざる也。山水を解する者は、請ふ、燒山より轉じて、半里の間蔦川を溯り、通天橋を渡りて、凡そ半里、だら／＼の山路を上り、蔦溫泉に浴して、旅の垢を洗へ。溫泉の附近には、蔦沼、長沼、菅沼、瓢箪沼、月沼、鏡沼の六小湖散在し、一里離れて赤沼あり。大さを云へば、十和田湖の足元にも寄り付けざれども、小湖は又小湖としての幽致あり、殊に數でこなして、蔦溫泉は優に一覽の價値ある也。されど山水を解する者は、なほ蔦溫泉より引返すべからざる也。

蔦溫泉より一里にして赤沼、赤沼より一里にして谷地溫泉、谷地溫泉より二里にして笠松峠、笠松峠より一里にして酸ケ湯溫泉、酸ケ湯溫泉より七里にして青森に達す、縣道全通して迷ふことなし、蔦溫泉より谷地溫泉へかけては、山と云へば山、裾野と云へば裾野、傾斜極めて緩也。山毛欅の根據地にして、林相の美を極む。赤沼と谷地溫泉との間を、蔦川流れ、山毛欅の深林裂けて、淸溪平らかに音なくして流る。姥澤と稱す。奇拔なる景致にはあらねど、この道中の單調を破るに足れり、蔦川を渡り、數町にして、淵澤よりの路と合して、だら／＼登れば、林開けて數町四方芝生を成せる處、四つ五つあり。山上の芝生、亦珍ならずとせむや。背景に高田大嶽ありて、景致も凡ならざる也。谷地溫泉を過ぐれば、注意して樹木を見よ。上るに從つて、山毛欅は小くなりて、なほ林を成せるが、その中に一種の見慣れざる常綠木混入す。之を青森椴松と稱す、北海道の椴松とは同じからず。日本中此處を除きては、唯日光と臺灣とにあるのみなりと聞く。益上れば、青森椴松の林となりて、其中に山毛欅の混入せるを見る。蔦溫泉より酸ケ湯溫泉までの途中は、唯是れ山毛欅軍と青森椴松軍との戰場也。山毛欅軍は

山腹を本陣として上り進み、青森椴松軍は山上を本陣として下り進む。山毛欅の勇者は先登して青森椴松の軍中に枯死し、青森椴松の勇者も先登して山毛欅の軍中に枯死し、いづれも名譽の屍を山上風雪の中に曝せり。なほついでに青森椴松に就いて言はむに、この青森椴松軍は、下は山毛欅軍と戰ひ、上は偃松軍と戰ふ。上下共に敵ある也。偃松軍は下は青森椴松軍と苦戰するが、上は何の苦もなく頂上の御花畑の娘子軍を蹂躙する也。人間の力を假すにあらずんば、あはれや、御花畑の娘子軍の孤壘は、終に陷落すべき也。

青森椴松軍上るに上られず、偃松軍下るに下られざる處、谷地となりて、五つ六つの小沼あり。可憐なる睡蓮自然に生ひたり。沼畔に珍奇短小の高山植物も少なからず。青森椴松の勇者極めて小さくなりて、進んで沼畔に立つて、偃松軍に戰を挑むもあり。天妃時に來りて逍遙すらむと思はるゝばかりの佳景也。眺望も開けらり。右は八甲田一帶の群峯、左は乘鞍一帶の群峯南北に對陣して、山嶽も亦鬪はむとす。笠松峠に至れば、十數町四方一面の平地、否、濕地にて天下無類の峠也。稀に青森椴松軍の勇者來り居れど、その幹、人に握らるゝまでに小也。石倉嶽、八甲田軍の先鋒となりて突出す。名にし負ふ石倉を攀づれば、東に太平洋を望み、西に日本海を望む。遊者こゝに始めて鳥瞰の壯觀を得べし。酸ケ湯溫泉は八甲田最高の大嶽、一名酸ケ湯嶽の中腹にあり。海拔三千尺、岩木山麓の嶽溫泉、恐山半島の海岸の下風呂溫泉と共に、青森縣に於ける硫黄泉の三幅對と稱せらるゝが、就中酸ケ湯最も强烈にして、且つ豐富也。溫泉宿は唯一軒なるも、設備大にして、數百人を容るゝに足る。附近に熱湯の沼あり。地獄沼と稱す。嫦娥倉の溪流奇なる處に三階瀧かかりて、一日の遊覽に値す。大嶽の頂へは、一里に過ぎず。それに登りて、始めて青森椴松軍と偃松軍との戰を見るを得べく、又偃松軍が御花畑の娘子軍を蹂躙するをも見るを得べし。御花畑とは、高山植物の草花の群落也。八甲田山には、高山植物の數一千に達せりと聞く。大嶽の頂上よりは、陸奧全體を鳥瞰するを得べし。東は太平洋西は日本海、北は青森灣より津輕海峽に及び、北海道の青黛をも望む。峯傳ひに井戸嶽に至り、更に津輕赤倉嶽に至れば、偃松軍我が脚下に屈し、御花畑の娘子軍嫣然として、我れに哀を請ふ。この天上の高原を領して、十和田湖の遊覽も、始めて徹底すべき也。

四　遊覽と探勝

十和田湖と八甲田山とは、二にして一、一にして二、相離るべからざるもの也。余は毛馬内より十和田湖に入り、奧入瀬川

の上流を經て八甲田山に登ることを目して、十和田湖遊覽に徹底せるものと云ひたるが、十和田八甲田の山水、これに盡きたりとの意には非ず。遠來の遊覽者は先づこれにて滿足して可也。再遊の時は小坂銅山より鉛山峠を越ゆるも妙也。大鰐温泉より白地山を越ゆるも妙也。黑石より瀧澤峠を越ゆるも妙也。その途中には温泉多し。燒山より奥入瀬川に沿ふて下り、善正寺の跡に大銀杏を仰ぎ、石合戸の奇巖深淵を賞し、三本木に出で、太素塚に三本木開拓の新渡戸傳翁を偲び、法蓮寺に法身國師俗名眞壁平四郎の木像を拜するも妙也。谷地温泉より田代温泉に出で、駒込川に沿ひて青森に出づるも妙也。されど、いづれもなほ遊覽の域を脱せず。余は天下一般の男女老幼に向つて遊覽はを説き、人間中の勇者、殊に一般の青年の士に向つては探勝を説く。遊覽は山水の門に入る也。未だ堂に上らず。探勝にして始めて山水の堂に上る也。遊覽には危險なし。探勝となれば危險伴ふ。危を踏まざるべからず。險を冒さゞるべからず。野宿せざるべからず。難苦缺乏を忍ばざるべからず。迅雷風烈と鬪はざるべからず。眞劍にならざるべからず。言はゞ、命掛け也。その代り、遊覽にては想像も及ばざる山水の眞秘に接し、山嶽の靈氣を體得する也。所謂虎穴に入つて、虎兒を得る也。山水を味はふ以上は、遊覽より進んで、探勝に至らざるべけむや。

毛馬内より蔦温泉を經て、八甲田山に登るの行程は、遊覽也探勝に非ず。十和田湖の探勝に徹底せむには、十和田湖と八甲田山との間に乘鞍群峯あるを知らざるべからず。赤倉嶽、牛ケ峯、駒ケ峯、十和田湖北岸の花部山など之に屬す。最高峯は駒ケ峯なれども、乘鞍嶽中央に位して盟主の觀あり。殊に山腹に太田沼を有し、東に奥入瀬川の支流なる黄瀬川を出し、北に蔦川の支流なる矢淵川を出す。黄瀬川の上流は瀑布の連續にて、本流に十五六瀑あり。形似によりて、白龍峽と稱す。左右の絕壁より直下する瀑布は、それからも猶多く絕壁高きにつれて、銀河九天より落つるの觀あること、到底奥入瀬川の諸瀑などの比すべきにあらず。なほ支溪にも瀑布多く、黄瀬一川の有する瀑布、八十に餘れり。數町の間溪水一大磐石の上を斜にすべりて、瀑にあらず、湍にあらざる奇景を呈し、三つ四つの巨巖溪底の磐石より起ちて天を衝くの壯觀を添ふる處もありて、こは白龍峽中の神苑也。終に下りて松見の瀧となる直下三十丈、十和田山中第一の大瀑也。このあたり一體に落葉樹のみなるが、唯この瀑布の巖頭にのみ姬小松簇生す。故に松見の瀧と稱する也。矢淵川の上流も瀑布少なからず。鬼門峽と稱す。これも形似也。怪巖高く左右より溪を夾んで鬼の國の門かとも思はるゝ也。左右の怪巖數町も續きて、三瀑かゝれり。

怪奇の域を越して、物凄く、又恐しく、結局冒險の趣味を解する男兒に取りては痛快也。太田沼は乘鞍嶽を背景にして、山上の湖とのみ云ひては物足らず。實に天上の湖也。乘鞍の側面にも、青森椴松軍と偃松軍との戰鬪を見る。而してこゝにては青森椴松軍勝ちて、頂上に凱歌を奏す。娘子軍は全滅に頻して纔に嶮陰に餘喘を保てり。蔦溫泉より松見の瀧に至り、白龍峽を溯り、太田沼を經て、乘鞍嶽に登り、鬼門峽を下りて、蔦溫泉に戾る行程、六七里に過ぎざれども、全三日を費して、二回も野宿せざるべからず。斯ばかりに天下の至險也。三日の間。全く命掛け也。

余は一昨年の夏、小笠原臥雲と共に、太田吉司氏に導かれ、二人の人夫を從へて、此勝を探れり。天地開闢以來、この勝を探りたるは、唯この五人のみ也。人夫は恐怖し、たとひ何十百圓貰つても、白龍鬼門二峽の御伴は御免を被ると云へり。太田氏は靑年の頃、單身數月の糧を齎らして、十和田八甲田の間を跋涉し、數里四方の山中足跡を印せざる限もなし。白龍鬼門の至險も余等四人の始めて見るまでは、太田氏の獨占なりき。余は十六年前、太田氏に導かれて、松見の瀧を遊覽、否、探勝せり。今は蔦溫泉より松見の瀧まで林道通じ居れど、當時は林道なく、黃瀨川を徒涉すること四十回に及べり。而かも雨ふる日なりき。當時太田氏自ら作れる十和田八甲田間の地圖を余に與れたり。見るべき景は一つも洩さず、一瀑も洩さず、奇巖も洩さず、極微の水源も洩さず。その精密なること、參謀本部の五萬分一の地圖などの比に非ず。余今に至るまで、之を珍藏す。太田氏は如何なれば、斯く十和田八甲田間を跋涉したるぞと云ふに、鑛山を發見せむとせし也。終に目的を達して、銅鑛を發見せり。今や鑛山は不景氣なるが、太田氏の勞苦は、必ずや他日の國益となるべき也。太田氏は余より若きこと十餘歲、臥雲は太田氏よりも若きこと十餘歲、臥雲を旭日とすれば、太田氏は天に冲せる太陽、余は七つ下りの夕日なるべし。太田氏は五十歲に近くして肥りたれど、脚力衰へず。快濶にして善く談ず天性の美音、室內に歌へば、梁塵動き、山中に吟ずれば猛獸大蛇も躍り出すかと思はるゝばかり也。

太田氏も臥雲も共に、登山にかけては、天下の雄也。十和田山下の法奧澤村の人なるが、この村には、今一人逸すべからざる人物あり。小笠原耕一氏これ也。三十年來法奧澤村の村長となりて、模範村長と稱せられ、久しく縣會議員となりて、縣會の長老也。夙に政治に身を投じて、家産の傾くを顧みず。殊に意を十和田湖開發に注げり。奧入瀨川の奇勝の世に現はれたるは、實に氏の力也。十和田湖の開發も氏の力與つて多きに居る。咲體力弱くして、臥雲や太田二氏の如く探勝する能はず。臥雲

も太田氏も飲を解せざるが、小笠原村長は酒家也。而して醉ひて亂れざる也。

なほ序でに前青森縣知事の武田千代三郎氏を記せざるべからず。氏は明治四十一年より大正二年まで、青森縣知事となりけるが、一たび十和田湖に遊びて、その絶景に感服し、十和田湖保勝論を公にせり。明治四十五年には、始めて起れる十和田保勝會の會長となりて、實地に十和田湖を開發せり。大正二年知事を罷めて後に『十和田湖案內略記』を公にし、更に大正十一年に至り、『十和田湖』を公にして記事精細を極む。十和田湖の一恩人也。氏は青年時代は運動家なりき。且つ役人中稀に見るの文章家也。山梨縣に知事たりし時は、富士山の開發に力めたりき。余は曾て、『山は富士山、湖水は十和田、廣い世界に一つ宛』といふ都々一を作りたるが、氏は富士山を支配し、十和田湖をも支配したりき。何等の淸福ぞや。玆に一奇とすべきは、富士山も山梨、靜岡の二縣に跨り、十和田湖も、青森秋田の二縣に跨りて、日本の世界的名勝は、いづれも二縣競爭して開發を闘り居ること也。

武田氏今や大阪高等商業學校の校長たり。面識なかりしが、十和田湖緣を爲して、相互に未見の知人なる筈なればとて、書を寄せけるに、喜べる返事を寄せ、他日奧入瀨の關門なる馬門岩に、我れ武田團子を賣らむ。君は桂月蕎麥を賣らずやと云ひ添へければ、拜諾す。但し桂月蕎麥のみにては物足らず。桂月酒をも併せて賣り申さむと答へたりき。後、大阪にて相逢ひ、高潔にして情誼に厚く、當代に珍らしき高士なるを知れり。

秋田縣にては、秋田顯勝會を設けて、雄鹿半島、田澤湖をと共に、十和田湖の開發に力む。和井內貞行氏は始め銀山に、後は生出に、姬鱒の孵化場を設け、旅館をも設け、爲めに十和田湖始めて溪魚を產するに至れり。姬鱒の原名を『カバチエツポ』といふ。アイヌ語也。原產地は、北海道の阿寒湖也。海より上り來りし鱒、阿寒嶽噴火の爲めに路を塞がれ、下る能はずして、普通の鱒よりは、ずつと小なる一種の鱒となりける也。それを北海道の支笏湖にて孵化しけるが、和井內は更に十和田に移せり。亦十和田湖の一恩人也。今や貞行氏死して、その子の貞時氏遺業を繼げり。

余の始めて十和田湖に遊びし時には、旅館は休屋と銀山とに、一つ宛しか無かりしが、今や、子ノ口に一軒、宇樽部に一軒、休屋に三軒、發荷に一軒、生出に一軒、銀山に一軒、瀧澤に一軒あり。奧入瀨の細徑は自動車の通ずる大道となり、毛馬內より見返峠までも自動車通ずるやうになり、湖上には大小の發動船飛ぶやうになれり。隔世の感なくんばあらず。唯一つ宇

櫓邊に、刳木舟依然として存す。天下の珍也。

余は初め鳥谷部春汀に導かれて、十和田湖を見たるが、春汀は余を十和田湖に導きて、半年も經たぬ程に病死せり。臥雲其志を嗣ぎ、余をして十和田湖に徹底せしめける也。臥雲は余を導きて花部山に登れり。十和田山一名御子嶽にも登れり。御倉山にも登れり。中山半島をも縱走せり。いづれも、所謂遊覽者の未だ及ばざる處、白龍峽、鬼門峽の如くに危險ならざれども、今の處、十和田湖の探勝に屬す。臥雲は御子嶽の俯瞰を湖畔第一と稱し、ゆく／＼は路を開かむと云へり。中山半島の縱走は天下の快遊也。巨巖の馬の脊より左右に澄波を見下す。偉大なる姫小松多く、數百年來の松釵地に滿ちて、足、土を踏まず。大和の大峯連山を摔小したる如きが、左右の澄波は大峯連山に無き所、峯上の清淨なるは、大峯連山に無きのみならず、何處の山にも無くして、嗚呼これ神仙の山也。

五　小笠原圓吉氏の家

余の蔦溫泉に籠城したるは、十月の半ば也。これ下界に對して籠城したる也。紅葉の眞盛りにして、山は正に錦繡を纒ふ。余豈にこの山水の盛粧に對して、俄に籠城すべけむや。先づ臥雲に導かれて、御子嶽、御倉山、中山を探勝し、且つ紅葉を味へり。蔦溫泉に戻りて、小笠原圓吉氏に逢ふ。氏は小笠原村長と共に、蔦溫泉を所有し、その弟四郎氏をして直接經營に當らしむ。十六年ぶりにて相逢ひたることとて、懷しとも懷し。去るに臨んで、余を其家に延き、懷しさに徹底せむとす。余はなほ未だ籠城するを得ざる也。

午前に圓吉氏下り、午後になりて、余臥雲と共に下る。燒山に至り、路を奧入瀨川の右岸に取る。燒山橋より間もなく、巖壁川に接して數町に連る。橋立と稱す。石合戶に至り、巖上に立ちて深淵を見下す。十六年前には、左岸より見たり。今や右岸より見る。これにて石合戶の全景を盡したるが、石合戶は左岸より見るべきものにして、右岸より見るべきものにあらざるを知れり。燒山橋より法量橋まで三里、縣道左岸に通ず。上半は左岸の景致よく、下半は高田大嶽見え、乘鞍群峯も見えて、右岸の景致よきことをも知れり。夜に入りて圓吉氏の家に至り、小笠原愼吾氏も加はりて、共に飲む。氏は村長の子也。青森出張中の父を代表して來れり。此人に逢ふも、十六年ぶり也。當時は東北學院の一學生なりしが、今や三兒の父也。

翌朝起き出でゝ散歩しけるに、圓吉氏の母君、頭巾を被り、霜を踏んで菊花を採る。菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見たる陶淵明を聯想せさるを得す。朝日の時、その菊花、露

に上れり。花瓣のみならず、莖もその儘に存す。余これ迄菊花を食ひたること少なからざれども、花瓣のみなりしが、今始めて莖を併せ食ひ、菊花を味はふには莖をも併せ食はざるべからざることを知れり。淵明の採菊の食用なることは、支那の風俗より推して知らるゝが、古來料理の發達せる國柄とて、淵明も必ずや莖を併せ食ひしならむかと思はるゝ也。淵明は『悠然』として南山を見たるが、我國には『悠然』を飜譯すべき言語なし。香川景樹は、『埋火の外に心は無けれども向へば見ゆる高圓の山』と歌ひ、淵明の詩を換骨奪胎して『悠然』の解釋を試みたるが、古來日本國民は『悠然』を解せざる也。轉じて支那に飜譯の出來ざる邦語の一例を擧ぐれば『深切』の如きこれ也。日本國民が『悠然』を解せざると同じく、支那人は『深切』を解せざる也。支那人はなほ『孝』を解す。歐米人に至つては、全く『孝』を解せざる也。越後に『親不知』の險あり。歐米の社會も險にして『親不知』となるにや。

六　未醒畫伯苦心の藥師如來

十六年前、鳥谷部春汀に導かれし際には、平福百穗畫伯も共にしたりき。一昨年、小笠原臥雲に導かるゝに當りては、小杉未醒畫伯も共にしたるが、蔦温泉に藥師堂ありて、本尊なし。畫伯は宿より賴まれて、藥師如來を作ることを承諾せり。蔦の大家の事なれば、畫像かと思ひの外、來つて籠城すれば、銅の藥師既に在つて、余を迎ふ。藥師堂までの間雪ふかくして、朝夕の參拜に不便なればとて、余の室と廊下を隔てたる一室に安置す。余は藥師と共に、雪の山の一軒屋に冬籠する也。

藥師如來の尊像を拜するに、座像なるが、素朴渾厚にして、月並の佛像と趣を異にす。右腕少しく進み、左腕少しく退く。右掌は膝頭に立ち、指を集めて、掌の中心凹めり。左掌は膝頭に仰向きて、壺を載す。靈藥その壺の中に在るべし。鼻大にして高からず。法令口を圍む。目小さく長くして末は上向く。左眼少し不明にして、病めるに似たり。背には圓味ある舟形後光を負ひたるが、その左右と上とに、三佛ありて、同じく舟形後光を負ふ。尊くして、親しみあり、深智を藏し、慈悲を含む。眞にこれ日本人の信ずる藥師の眞髓也。畫伯は一たび作りて、氣に入らず、二たび作りて氣に入らず、幾度作りても氣に入らず、支那に遊びて大に悟る所ありて、終にこの尊像を作れりと聞く。其苦心想ふべし。畫伯が佛像を作りたりといふことは、畫壇の珍にして、蔦温泉に取りては、千古の名寶也。

七　山中の一軒家

余が蔦山に入りたる第一の目的は、杉浦先生の傳を草することゝ也。第二の目的は、傳を草し終へたる後、なほ引續きて籠城して諸文債を果すこと也。第三の目的は、北國の雪景を味はふこと也。かくて四五月の交に至れば、滿山の雪は所謂堅雪となる。その堅雪を踏んで、北國の山嶽を跋渉せむとす。これ第四の目的也。

堅雪の山嶽の跋渉といふ事は、北國に生長したる登山家の外は、天下に知るもの稀れ也。堅雪といへども、夏日に於ける白馬嶽なのど雪溪の如くには堅からず。辷りもせざるが、足は陷りもせず。鐵カンジキを要せざる也。その堅雪の高さ四五尺乃至一二丈、偃松を埋め、根曲り竹の林を埋め、荊棘を埋め、灌木を埋め、溪を埋め、壑を埋め、路なき山を上下するに自由自在也。殊に山を下るには一瀉千里の概ある也。落葉樹は未だ葉を着けずして見透しが利く也。四五月の交の北國の山上は、氣霽れ、雲烟なくして、展望が利く也。紫外線直射して、寒からず、又暑からざる也。余は天下の登山家に、堅雪の山の快味を知らせたく思うて止まざる也。

以上の目的を果す爲めに、特に蔦溫泉を擇びたるは、山中の一軒屋なるを以て也。弘法大師は、深山の平地は禪を修するに適すと云へり。而して高野山を開けり。余は自はむとす、山中の一軒屋は著述に適すと。如何に山中とても、溫泉宿が四五軒も並び居りては、競爭もあり、掛引もあり、嫉妬もあり、怨望もあり、人間の臭氣漂ひて、なほ俗界たるを免れざる也。よしや又山中の一軒屋なりとも、盜難を恐れて、夜間雨戶を鎖すやうなる處にては、なほ人寰たるを免れず。蔦溫泉は山中の一軒屋也。雨戶はあれども、雨の爲めに鎖す也。若しくは雪の爲めに鎖す也。盜難の爲めに鎖さざる也。下ること一里にして、燒山の部落あるが、ほんの數戶也。二里にして、淵澤の部落あるが、なほ十數戶也。四里にして法量の部落あるが、數十戶に過ぎず。七里にして始めて三本木の小都會あり。人口五六千、旅館もありて、百貨集まれり。蔦山よりこゝまで出づるに非ずんば、絃歌の聲も聞えざる也。

八　蔦溫泉の道筋

山中の一軒屋とばかりにては、未だ盡さず。余は先づ蔦溫泉の地勢を語らむ。

三本木は十和田湖第一の關門也。一帶の平原、東西十里、南北三十里、南部馬の本場にして、高馬こゝに躍る。今の新渡戶博士の祖父なる傳翁、奧入瀨川の水を引きて、始めて茲に田を開けり。三本木の市街爲めに成りたり。同町の人家、軒を接く

差出して、雪中の歩行に便にす。之を小店と稱す。雪國の特有也。寒中往來するもの、獸類の毛皮を脊に負ふ。犬の毛皮を並等とし、羚羊の毛皮を上等とす。獸かと見れば、人也。同じ青森縣にても、舊南部よりは、舊津輕に毛皮を用ゐるもの多し。これも雪國の特有也。

淵澤は十和田第二の關門也。こゝにて人家を離れて、路始めて溪に接する也。部落を出でゝ行くこと二町、路の左側に鳥居ありて、その鳥居に木柵を横たふ。これ人を防ぐに非ず、放牧の牛馬を防ぐ也。鳥居を入りて行くこと二町、巖より成れる孤丘に達す。丘の絶頂に熊野神社ありて、眺望開けたり。見下せば淵深くして且つ長し。彼方にも巖丘ありて相對す。巖の屛風長淵を夾める也。こゝを石合戸と稱す。鳥居より縣道を行くこと二三町、右に一町ばかり入れば、千年の大銀杏あり。周圍四丈五尺、二十間四方を蔽ひて、銀杏特有の乳房いくつとなく、垂れて地に達せむとす。こゝは善正寺の跡にて、十和田湖開祖の南祖坊は、この寺に生れたるなりと云ひ傳ふ。

燒山は十和田湖第三の關門也。こゝに始めて山中に入る也。燒山橋を夾んで、數戶散在す。橋を渡りて行くこと三里半にして十和田湖に達す。武田氏が蕎麥を賣らむと云ひたる馬門岩は橋より一里半の奥にある也。橋を渡らず行くこと一里にして蔦溫泉に達す。蔦溫泉より云へば、燒山が第一の關門也。橋を左に見て二町ばかり行けば、巨巖右に屛立して、楓樹巖頭に林を成し、巖腹に躑躅點綴す。紅葉巖と稱す。巖としても見るに足るが、紅葉の頃は、この巖盛粧す。天下に斯る盛粧の巖ありとも覺えざる也。一端林樹缺けて、瀑布懸る。錦瀧と稱す。高さ三丈ばかり、灑々として巖を傳ふ。平生は白糸なるが、秋は紅葉映じて錦となる也。

いつしか路は溪に沿ふ。路と溪とを除して、兩山壁立す。この溪は蔦川也。燒山橋にて見たる川の急に小さくなれるも宜べや。こは奥入瀨の上流にあらずして支流也。蔦川の奥入瀨川に合する處は、路より隔たり居りて、蔦路を取りても見えず、十和田路を取りても見えざる也。右崖に巖窟あり。風穴と稱す。冷風窟内より生ず。十六年前に何か一句と乞はれて、直に『この穴に神代の冬の籠りけり』と、俳句とも付かぬ駄句を吐きけるに、それが人面大の石に刻まれて、今もなほ窟口に轉がり居るやう也。

小橋を渡れば、右崖退く。左に中橋を渡りて、大橋に達す。六七間ばかりもあらむ。通天橋と稱す。燒山より半里、平坦の路、人家より續ける也。橋上に立つて見上げ見下せば、奔湍雪と噴いて、數町の間白浪踴る。この通天橋が蔦溫泉の第二の關

門也。『燒山を過ぐれば人の里ならず蔦を渡りて神閑に入る』と歌ひたるが、橋を渡れば、東西一町、南北四五町、ほゞ平らかにして、老樹天を蔽ひ、地に散布せる巖石悉く苔を帶びて、風氣人に逼る。だら〳〵坂を三折して少し行けば、一本の山毛欅路の右側に立ち、曲りて、路の上に横はり、それに八本の支幹生ひて天を刺す。猿の空橋と稱す。天然の丸木橋也、

岐路あれども、首を傾くるを要せず。どの路を取りても蔦溫泉に達する也。路平らかになりて、少し下りたる處に、一本の大山毛欅あり。周圍一丈五尺、杉、楠、銀杏などの老木には比すべからざるも、山毛欅としては偉大也。赤倉嶽の尖峯樹梢に見ゆ。數十歩行けば、高田大嶽の頂尖も見ゆ。同時に溫泉宿も見ゆ。柵門あれども、これ例の放馬放牛を防ぐにて、人を防ぐにはあらざる也。通天橋より始めて山を登るが、蔦溫泉まで僅に半里に過ぎざる也。

九　奇拔なる浴槽

蔦溫泉のある處は赤倉嶽の中腹にして、西と南と北とに林丘を帶び、東は開けたり。南北二町東西四五町、ほゞ平らかにして、溪水迂曲して流る。三池ありて余鱗躍る。前に記したる六小湖は、宿より一町乃至五六町、西より南へかけて散在す。一巡すれば手頃の運動にて、俗腸を一洗するに足れり。蔦沼最も大にして三町四方もあり。舟を浮ぶべく、魚を釣るべし。赤沼は蔦沼よりもなほ少し大きくして、最も幽邃也。

三町北すれば、芝生開けて、赤倉嶽の上半見ゆ。なほ數町北すれば、蔦川に達す。魚止の瀧かゝれり。西三里にして、松見の瀧に達するが、途中に裏見、鍋倉の二奇瀑もあり。月沼より西すること一里にして姫森山に達す。一堆の巖丘、すべて樹の純林也。中央に大中小の三樹相並ぶ。枝傳ひに小より中、中より大へ登りて、大樹の樹梢に達すれば、展望開けて、赤倉嶽の全壁を仰ぎ、三本木平原に俯す。亦蔦溫泉の一觀也。

蔦溫泉は斯かばり自然の勝景に富めるが、宿に近く、三名木あり。その一は通天橋の途上に見る大山毛欅也。その二は樓前の柞也。本幹中折して、支幹横に繁り、本幹には蔦蘿繁る。平生見ても一奇なるが、紅葉の頃、殊に奇觀也。その三は藥師堂前の鉾杉也。大さ二抱、杉としては大ならざれども、一二里四方絶えて常綠木なき中にあることゝて、人の目を惹く。萬木黄落して後、更に人の目を惹く。雪中に青々たるに至つて、この杉の眞價始めて現はるゝ也。なほ猿の空橋を加へて、蔦の四名木と稱するも可也。

冬の蔦といふことも、蔦溫泉の名物なるべし。[illegible]氷に鎖

じて、溪水暖く、雪中にも蛙の鳴くを聞く也。なほ特筆せざるを得ざるは、浴槽の奇拔なること也。溫泉宿は本館と別館とありて、本館には普通の客を迎へ、別館には自炊の客を迎ふ。別館にも浴室附き居りて、その浴槽は幅一間、長さ四間、三つに仕切りて、熱、溫、微溫の三槽に分る。深くして、立てば、乳を沒す。小ならずと云へども、稱するには足らず。本館と別館との中央に湯瀧の一浴室あり、熱、溫、微溫の三瀑かゝれるがこれもなほ稱するに足らず。稱すべきは本館の浴槽也。三間四方の廣さにて、浴槽としては大なる部に屬す。天下如何なる處の浴槽にても、溫泉は流れ込むものなるが、こゝの浴槽は底より湧き出づ。奇拔ならずや。底は板を少しすかして敷き並べたり。天下多くの浴槽は家の內に封せられて、一方の眺望だに無きものなるが、こゝの浴槽は、三方とも明き居りて、三方に硝子窓を設けたり。三方の眺望が得らるゝなり。淺くして立てば腰を沒するに至らざるが、坐れば肩を沒するだけにて、顏を沒するに至らず。これ別館の浴槽の深きに對して、變化の妙あるのみに非ず。坐る日本國民に適する也。殊に浴槽の中に坐りながら、月を眺むるを得る也。亦奇拔ならずや。余は坐ると云ひたるが、坐らずとも、趺坐して可也。趺坐せずとも、腰を卸し脚を延ばして可也。本館の湯に飽けば、湯瀧に飽けば、別館の湯に移るべく、蔦溫泉は天下湯好きの人士の垂涎三尺も啻ならざるべき處也。泉質は鹽類泉にして、湧出量極めて豐富也。本館の湯の如きは、直に一溪を成すにたるだけの量が常に流れ出づる也。

一〇　丸山の眺望

蔦山に籠城しても、雪ふるまでは、毎日必ず散步したりき。花外は運動を好まざるを以て誘はず。單身林中に入つて、鳥の音樂を聞きたりき。湖水に臨んで、魚の游ぐを看たりき。芝生の上に腰を卸して、雲の動くを眺めたりき。通天橋まで下つても見たりき。通天橋を渡り、なほ中橋を渡つて、右すれば燒山に至るべきが、左して山を登るに、炭竈の烟、幾條となく立上りて、山一面に禿げたり。崖下の一枚岩を走る中橋の上流を後にして、右に傾斜面を登り盡せば、さても廣い哉。一面の芝生十萬の兵を練るに足れり。その中央の最高點を丸山と稱す。三角點立てり。淵澤法量間の谿谷を見下し、その末の三本木平原をも見下す。心ものびやか也。轉じて、八甲田群峯を仰ぎ、乘鞍群峯を仰ぎ、少し離れて、戶來群峯を望む。八甲田群峯と乘鞍群峯とは、仰ぐには仰ぐが、直に見上ぐるには非ず。いづれも裾野的中腹を有して、その奧に屹立する也。戶來群峯はず

つと小さく且つ低きが、乘鞍群峯と八甲田群峯とは、ずつと大きく且つ高く、且つ複雜にて、大さに於いては乘鞍少し勝り、高さに於ては八甲田少し勝れり。元來八甲田は陸奧の中央に磅礴する山なるが、青森方面より見ても山姿好からず。弘前方面より見ても好からず。三本木方面より見て始めて好し。惜むらくは、遠きに失す。丸山より見るが、丁度見頃也。その上になほ乘鞍をも併せ見る也。更に戶來をも併せ見る也。而して乘鞍も戶來も丸山が見頃也。八甲田群峯中の高田大嶽、完全なる富士形を成して、最も傑出す。その他の山もそれ／＼特色ありて山といふ山の形は、悉く一眸の中に在り。聖人、君子、英雄、豪傑、偉人、仁人、高士、志士、俠士、才人、壯士、美人を一堂に集めたる如し。丸山の眺望は實に天下の壯觀也。殊に三群峯とも曾て踏破したることゝて、一層親しさを覺え、欣喜措能はず。それにつれて、余の戀人を思ひ出さゞるを得ず。『酒なくて何の己れが櫻かな』とは、酒徒の本音を吐きたるもの哉。一里東の濕澤に下つて、一瓶の酒と鑵詰とを得たり。戾つて丸山の上に踞し、群峯を見上げ、谿谷を見下し、平原を見渡して喇叭飲みを試む。何處より來りけむ。數十羽の鴉、地におりて四方より遠卷に余を卷きて、頻りに啼く。十間とまでは近づかず。鴉の聲にては音樂にもならず。五月蠅くて堪へられず。石を投ぜむとするに石なし。杖を振りまはせば、一旦退却して、また押寄す。如何なれば、鴉は我を攻擊するぞや。曾て北海道の濱邊にて握飯を食ひ居りしに、群鴉襲來して握飯を奪ひ去れりといふ人の話を聞きたるが、丸山の鴉も我が鑵詰を奪はむとするにや。哀を乞へば喜んで與ふべけれども、人間が鴉に屈して堪るものかと、食ひつくして空鑵を鴉に投げつけ、空瓶をも投げ付けて、立ち去りたるに、二三町の程はなほ我を追蹤したりき。

一一　登山式室內運動

雪ふりても、まだ一尺內外の頃は、晴間を見て、池の周圍を廻りたりき。一廻すれば一町、三十六回すれば一里になる也。二尺となり、三尺となり、四尺となりては、いよ／＼籠城の身也。何か運動もがなとて、木の棒をふつても見たり。木の棒を浴室の柱と柱との間に掛け、鐵棒のつもりにて、ぶらさがつても見たり。靜坐法を試みても見たり。自彊術の眞似をして見たり。その他いろ／＼試みて見たるが、ふと一種の運動を思ひ付けり。そは極めて簡單也。立ちたるまゝにて、足を代る／＼後に擧ぐるだけの事也。その擧ぐる足に力を入るれば、入るゝほどよき也。踵にて尻を叩くやうにし、趾にて強く蹈む也。手も

遊ばして置かずに、拳を握りて、成るべく強く前後に振る也。なほ下腹に力を入るゝが好く、折り〳〵頭を前後左右に振るが好き也。つまり、體操の足踏に念を入るれば好き也。肥りたる人は、下脚を曲げずとも可也。

玆に此運動の効果を陳べむ。靜坐法にしても、自彊術にしても、その他の運動にしても、皆足といふものを閑却せり。然るに『頭寒足熱』は人間第一の健康法にして、兼ねて長壽法也。この運動によれば、先づ足熱を得る也。其他身體中何處もみな運動することになる也。而して啻に足熱を得るのみならず、脚力が強くなる也。腰力も強くなる也。腕力も強くなる也。膝關節の屈伸が自在になる也。不眠症の人は眠れるやうになる也。眞に力を入れて、一時間も此運動を行へば、山路を三時間登るに相當し、平地を五時間歩くに相當す。室内にありながら千里を踏破する也。山獄を跋渉する也。名づけて登山式室内運動と稱するも可ならずや。日本の知識階級には、脚力弱くして、山に登れざるもの多きが、これ日本國民の一大缺點也。故に余は大聲疾呼して登山を說く也。室内運動としては、この運動を推奬せざるを得ず。平生運動せざる人、俄に登山して、非常に疲れ、非常に苦しみ、終に途中にくたばるもの少なかざるが、これ餘りに淺慮也。平生この運動を行ふを要す。さすれば登山も容易にして且つ愉快なる也。

この運動を行ふに、夏は裸體になりて、日光浴を兼ぬるが好し。冬は衣服を拔ぎて、シャツとツボン下とになるが好し。疊の上よりも板の間が好し。土間が猶更好し。土間ならば、終りに十數回幅飛を爲すが好し。足は代る〳〵動かす。手は左右同時に動かしても可也。左手は左足、右手は右足と同時に動かしても可なるが、人間の意志を加へざれば、必らず左手は右足、右手は左足と共に動くもの也。これ人間のみならず、動物全體の自然也。然るに動物の畫を見ても、置物を見ても、銅像を見ても、概して右前脚は右後脚、左前脚は左後脚と共に動くやうになり居れるが、これ飛べる鶴の尼を黑くすると共に、所謂繪空事也。

一二　雪の富士山

大正十二年の春は、蔦山の雪量多くして、七尺五寸に達したりと聞く。その冬は例年より後れて、十一月十四五日に初雪を見たり。それより後は、雪天又雪天晴天は稀れ也。されど雪は雨のやうには陰鬱ならず、何となく嚴粛の氣を帶び、身も心も引き締まりて、淸らかになるを覺える也。

雪とてもさま〳〵也。急下することとあり。ふはり〳〵と落つ

ることあり。風があれば、巴となり、まん字となる。大片なるあり。小片なるあり。極微の粉雪あり。大片小片混下することあり。日は照りながら、ちら／＼と降ることあり。天より降らざるが、奥山に積れる雪の風に吹かれて、一天に瀰蔓することあり。樹の雪や地の雪の風に捲まれて、空に舞ふことあり。蔦山にては、風常に西より吹く。萬木怒號して、飈車の襲來したるかと思はるゝことあり。千峯悲鳴して、天地もこゝに亡ぶるかと思はるゝことあり。山の一帶の地は、西に乘鞍群峯を帶ぶるを以て、西風强くは當らず。殊に温泉宿は西方直に林丘を帶ぶることとなれば、西風の當らぬ筈也。然るに空には西風吹きても、地に接しては東風吹き、それが屋を繞る。東西南北何處の硝子窓も雪に封ぜられて、全く外面の見えぬことあり。一日吹雪に送られて、一羽の四十雀、家の中に舞ひ込めり。

　あさる餌や雪に埋れし山中の宿に飛び込む四十雀かな

一日烈風雪を叩き付けて、一屋悲鳴し、動揺す。蔦山に棲むこと十四年なるが、このやうな强き風に逢ひたることなしと、主人云へり。一日主婦余の室に來り、出てゝ見られよ。十四年の間、僅かに四五回見たるなりといふ。出でゝ見れば、なるほど見事也。見ゆる限りの樹木、枝毎に花を付けたり。空は純碧也。地は純白也。その空と地との間が、雪華の領分也。東京の所謂吉野櫻とてもこれほどの盛粧は無し。本家の吉野の一日千本とても、足下にも寄つけず。美と云ふても盡さず。清と云ひても盡さず。潔と云ひても盡さず。神の國ならでは見るべからざる光景かと思はるゝ也。この夜、十日の月が出でゝ、更に天地を美化したり。余は屋外に出でゝ、左視右顧せざるを得ざりき。花を着けざる筈の樹木が花を着けたるを以て、花の木に見られざる奇態もありし也。この日は少しも風なく、而して雪片極めて大也。凡そ梅花ぐらゐ也。故に樹木に雪の花咲ける也。主人夫婦が十四年間に數回しか見ざる珍景を、唯一回籠城して見たる我身の清福を感謝せざるを得ず。雪片大なりしにつけて、ふと李白の『燕山雪華大如席。片々吹落軒轅臺』の句を思ひ出しけるが、大片の雪は恐るゝに足らず。粉雪が恐ろし。袖口となく後襟となく、前襟となく、何處となく、衣服の中に入りて肌に侵む。雪中に倒死するは、必ず粉雪の時なりと、主人云へり。室内にても、普通の雪は入り込まざるが、粉雪は如何に窓を密蔽しても、何處となく入り込む也。

　雪の深さ四五尺となりては、歩くには歩かるれど、腰までも雪に沒して、一町の程を行くに、十分もかゝる。一時間を費しても、ほんの五六町しか行けざる也。[illegible]

く、身體の疲勞すること甚し。それには木のカンジキとて便利なるものある也。小さき丸木を小判形にし、中央に二つの小木片を横へたる也。それを足の底にくゝりつけて、雪を踏めば、雪如何に深くとも、足の陷ること、ほんの五六寸に過ぎず。足に穿くに、草鞋にては冷たし。靴にても冷たし。それには又ツマゴとて、草鞋に蓋を設けたるが如き、一種の藁靴ある也。これを穿きさへすれば、足は暖か也。その上にカンジキを用ゐて一丈の雪を踏むとも、二丈の雪を踏むとも、東京の雨天の泥濘を草鞋にて歩くよりは、ずつと骨折れずして、足も暖かにして、且つ氣持よき也。唯吹雪の時は、寒氣甚しく、方角も判からざれば、如何にツマゴとカンジキとを用ゐても、うつかりと山は歩かれざる也。

屋根の雪三四尺も積めば、軒支へられざるを以て、宿の若者屋根に上りて、雪を拂ひ落す也。その落したる雪、屋前に長城を成し、高さ軒に達せむとす。少しも外が見えずして、室內陰欝なれば、主人宿の少年に命じて、雪の長城をこぼたしむ。少年スコツプを手にして出づ。一天雲なく、日輝きて暖か也。雪に屈して、止むを得ず、登山式室內運動を爲したるが、今日は一つ久しぶりに屋外に運動して、雪を征服せむとて、余もスコツプを手にして出づ。徒に雪を投げては興なし。雪達磨が頭に浮びたるが、これ東京あたりの少量の雪に於てする兒戲なりと思ひ返し、一つ富士山を作らずやと、少年と打合せたり。汗出づるまゝに、袖無し羽織を拔きたり。丹前を拔きたり。綿入れの胴着を拔きたり。兎の毛皮を裏にしたるチョツキを拔きたり。終にシャツ一枚、ヅボン下一つになりたり。一は紅顏の少年、一は白髮の老人、對照が面白かるべく、主人見て微笑し、主婦も微笑し、女中どもゝ微笑す。少年は本氣になりて、せつせと働く。余はをり〳〵縁側に腰かけて、敷島を吸へり。始めは投げ上げしが、終に届かざるやうになりて、一歩々々上りて、雪を盛り上げたり。日暮るゝに及びたれば、スコツプを投じて、戲れに宿の人々に謂つて曰く、この富士山は高さ三萬厘、一萬二千尺の眞の富士山よりも數字は倍以上也。但し厘と尺と桁が大に違へり。眞の富士山は萬古不朽なるが、この富士山は命短かし。されど、半年の命はある也。

雪達磨大きくなりていつしかに富士の山とはなりにける哉

雪の富士如何に大きくなれりとて半年だけの命なりけり

思ふに世の中には、桁を間違へて、自ら英雄と思ひ、哲人と思ひ、文豪と思ひ、畫聖と思ひ、神人と思ふ人少なからざれども、概して本人だけの一代限り也。一代續けば、まだしも、僅僅數年しか續かざる也。概して、今の世の人才は、桁が大に下

りしやう也。

一三 爐火

雪の宿に懐しきは爐火也。余は火鉢の火を知る。炬燵の火を知る。ストーブを知る。スチームを知る。朝鮮のヲンドルを知る。支那のヲンドルを知る。露國のペチカを知る。されど最も爐火を好む也。殊に自在鍵の鐵瓶より松籟の起る詩趣を愛する也。

蔦温泉にては、自家にて炭を製するを以て、火鉢の炭に惜氣なし。山中の事なれば、爐の燃料も十分也。多くの處の爐火は往々えぶりて目を苦しむるものなるが、蔦温泉の爐火は少しもえぶらず。如何なる故にやと問へば、主人答へて曰く、二年前の薪を順ぐりに用ゐる也。

五間に七間の大臺所の中央にある爐は、余の朝夕の出張所也。そこにて宿の人々と共に語り、共に食す。主人側と客分は座蒲團を用ゐるが、下男下女は板の上に坐る也。下男二人、下女三人、その下女中にて梅といふ女、年は明けて漸く十二歳、短小の雛也。家にあらば、母の膝下に甘ゆべきを、殊勝にも下女となりて、愉快げに立働く。主人夫婦は欲氣の無き好人物にて、下男下女を視ること我子の如く、下男下女と同じものを食ふ。

この温情と美食とによりて、梅は自家にあるよりも面白しと自から云ふ。小學校は三年まで通ひて、少し字を知る。七戸の産也。その母より宿の主婦に宛てゝ、この頃、夢見惡し。梅に異變なきやと問ひ來りけるに、梅自ら返事を書けり。主婦より傳聞するに、先づ健全にして面白く働き居る由を云へり。これは好し。次に蜜柑と喫切飴と南京豆とを送つて貰ひたき由を云へり。これも好し。次に舊正月にも家に歸りたくなき由を云へり。これも好し。最後に母にも逢ひたくなき由を云へり。母なる人は如何にか思ふらむ。いつの世とても、親が子を思ふ程には、子は親を思はぬものなるが、この頃の若き男女は西洋化して、殆んど孝を解せざるやうになれり。嗚呼梅女は今の一般の人の子の心中を道破しける也。

梅女はまだ幼少なれば、客の膳は運ばしめずして、佛前への膳を運ばしむ。炭を運ばしむ。鐵瓶の水を運ばしむ。廊下をふかしむ。茶の間の炬燵に坐はれば、雜巾をさゝしむ。さばかりの務はなけれど、自ら出しやばりて、ちよこ〳〵動く。客室に出入して、よくしやべる。床の間を指して、東京の家にも、こんな大きな柱があるかと、云ふかと思へば、余の三椀にして止むるを見て、もつとおあがりなされといふ。これも二の答、梅女は幼女ながら、六椀を平ぐる健啖家也。能く食ふだけに、働きまた

也、口もまめ也、元氣潑剌たり。茶目式を發揮して、惡所爲に賑へり。

或夜、戯れに筆と紙とを爐邊に取寄せて、

ワタクシハチヤウブデゲンキニハタライテオリマスオキヤクサマヲダイジニイタシマスネコニヤサシクイタシマスメシハロツパイタベマス

これが讀めるかと、梅子に示しけるに、喜んで讀む。猫の一句に至りて微笑す。實際はあべこべに、蹴たり、投げたり、ひどい目にあはせ居る也。飯はと讀みて、少し考へしが、急に讀むことを止め、紙にて顔を掩ひて後向く。『飯は六杯食べます』と書いてあると云へば、一同大に笑へり。

紅葉散りてより本館の客は殆んど絶えたり。雪深くなりて、別館の客も絶えたる頃、二人の獵夫、別館に來れり。その夜二匹の『ばんどり』を獲たり。『ばんどり』は『むさゝび』也。恰も猫の羽織着たるが如し。翌晩は五匹の『ばんどり』を獲たり。數泊する程に、二十匹ばかり取りたり。その毛皮は五圓に賣れるといふ。その肉を食ひしに、頗る美味也。これが最も美味かと問へば、まだ一つ上に『まみ』ありて、最も美味なりと云ひける處へ、臥雲その肉を送り來れり。なるほど美味也。その脂の美味なること牛豚の及ぶ所に非ず。他の諸肉は熱く煮立つれば、口を燒くものなるが、この肉のみは口を燒かざる也。『まみ』は余其肉を見て、未だ其形を見ざるが、小犬位の大さにて、丸く肥れりと聞けり。

宿の若者燒山より、生れて二十日經ちたりといふ子猫を貰ひ來れり。黒毛に白毛まじれり。半月ばかりにして、又一匹の子猫を貰ひ來れり。その毛純黒也。前のは牡にして、後のは牝也。二猫常に相戯る。人の子供のなすが如く、猫兒も隱れんぼを爲す。而していつも隱るゝは牝猫にして、探すは牡猫也。夜間二猫騒ぎて安眠を妨ぐるを以て、牝猫を返したり。下男も下女も虐待するが、余ひとり優待して、肉を分つを以て、余爐邊に就けば、猫來りて余の膝に上り、余の顔を仰ぎて、にやあと啼く。飽けば脚を伸ばして眠る。起たむとして袂の重きに何かと見れば、猫の入り居ることも少なからず。日毎に大さを增したり。五六十日も經ちしほどに、余の袂に入る能はざるやうになれり。而して早や鼠を取り來りて食へり。

渓頭孤居不ㇾ堪ㇾ閑
白雪埋ㇾ徑絶ㇾ往還
醉後爐邊抱ㇾ猫睡
夢迷六十六州山

一四　杉浦先生の傳記

杉浦先生は大正十三年に、古來稀なりといふ七十歳に達せらるゝを以て友人を代表して一瀬勇三郎翁、門下を代表して、島弘尾、猪狩史山、池田良榮、松宮春一郎、畑勇吉諸氏及び余等相議し、先生の傳記を作つて、先生に呈すると共に、世に公にし、以て祝意を表することに定め、十二年一月より杉浦先生傳記編纂會事務所を日本中學校の一室に設け、毎月二日には相會して打合せを爲し、十月に至りて、材料の蒐集を終へたり。その材料は余一人にては持切れず、手荷物として汽車に托するも不安心なればとて、島弘尾氏共にして分ち擔ひて、箱山に入り、一泊して下れり。これにて島氏は一と先づ安心したるが、なほ未だ全く安心する能はざるものあり。桂月は呑んだくれ也。ずぼら也。いつも原稿の期を愆りて、先年後藤伯の傳記を手古ずらし、諸人に迷惑をかけたる例もあること也。十二月中に脱稿することを約したるが、果して其約を實行するや否やとは、島氏のみならず、關係諸氏の齊しく心配せし所なるべし。

然るに傳記も傳記によりけり也。後藤伯の傳記は必ずしも期限を定むるを要せざりしが、杉浦先生の傳記は十三年の先生の誕生日までに上梓せずんば、折角の祝意が通らざる也。後藤伯の傳記の材料は不十分なりしが、杉浦先生の傳記の材料は十分也。後藤伯は政治界の英雄にして、杉浦先生は教育界の偉人也。余は後藤伯とは型を異にするも、杉浦先生とは大小高下こそ別にして、型を同じうす。余は後藤伯と郷貫を同じうすれども、明治以後に生れたり。後藤伯は明治以前、土佐を代表して土佐に活動するのみならず、天下に活動せり。後藤伯を傳ふるには先づ土佐の維新史を研究せざるべからず。猶進んで日本全體の維新史を研究せざるべからざりしが、杉浦先生を傳するには、先生の事蹟だけ知れば好き也。旁搜の必要ありとも、研究の必要は無き也。この外、いろ／＼の事情もあれど、大要は斯の如し。要するに、余に取りて、後藤伯の傳は草し難かりしも、杉浦先生の傳は草し易き也。殊に後藤伯は同郷の先輩とは云ひながら、一面識も無かりしが、杉浦先生に對しては門下生也。余豈に先生の友人並に門下の諸氏に負かむや。

さは云へ、如何にすれば、杉浦先生の眞を傳ふるに足るかは、余の苦心を要する所也。大震後の帝都を去りて、山中の溫泉に浴しながら著述する身は、唯見れは何の苦もなき水鳥なれども、心は足に暇なき水鳥ならざるを得ず。帝都は復興に苦心慘憺たり。杉浦先生詩を寄せられて曰く、

復興事業太分明

兩樣溝渠期レ大成一
善後只須レ仍レ舊慣一
何要三改作負レ民情一

余文頌して曰く

全絶レ俗縁一心自明
銜レ盃一氣幾篇成
山中好托仙人跡
遮莫荒都傷二我情一

余は手前味噌を避けて、有りの儘に事實を傳へむことに力めたり。先生に對して、型を同じうするも、賢愚の差、雲泥も啻ならず。妄りに私見を加ふべきにあらざる也。唯茲に余が先生の人となりに對する感想を云はむに、先生は極めて聰明也。又極めて猛氣ある也。又極めて情に厚き也。この三者を少しづつ兼ねる人は稀にあれども、先生はいづれも極度に達せられたり。殊に私利私慾私嗜私娯は絶えて無くして、全く公的也。君國を憂へ、君國に盡すことも、極度に達せられたり。極めて寛大にして、能く人を容れ、他に對して悪口を言はれたることなく、毫も敵意を挾まれざる也。記憶力非凡也。持久力殊に非凡也。詩を吟ぜらるれば、清く、高く、且つ豪にして、先生の人格流露し、詩文を作らるれば、一氣忽ち成り、高潔にして俊爽、豪宕の表に出づ。前に先生の一絶を錄したるが、更に先生を代表すべき三絶を錄せむ。その一に曰く、

鐵骨氷心長養レ眞
一枝斜處更無レ塵
寒香僅々兩三點
先占東風萬里春

高潔を極めて、豪爽の氣迸る。これ先生の一眞也。その二に曰く、

共賞二今宵月色清一
坐談三豪傑一到二深更一
擧レ杯一笑互相約
男子前途在二遠征一

雄渾にして熱情人に逼る。これも先生の一眞也。彼の廣瀬淡窓の「君汲二泉流一我拾レ薪」の詩と、門下に似す詩として、一溫一豪、古今の好對照也。その三に曰く、

古琴一曲報二秋寒一
姉妹異時同調彈
老父不レ堪今昔感
斷腸花上雨闌干

姉娘は嫁して既に死しける也。親の眞情流露して、人をして

泣かしむ。これも先生の一眞也。先生富士山を咏じて曰く、

富峯千古雪
日照白皚々
君子而豪傑
其容王者哉

これ所謂夫子自ら道へる者に非ずや。先生を山に譬ふれば、白雪皚々の富士山也。

余や愚鈍の身、先生を傳するに堪へざるが、筆を執るほどに、紅葉は散りたり。滿山寒林となりたり。白雪霏々として降れり。山中の孤屋雪に封ぜられたり。米の汁は吸ふも、山の木の子を食ひ、朝夕靈泉に身を清めて、精進潔齋の概なくんばあらず。境や高潔、傳する人も高潔、雪の山の高潔に對し、彷彿として高潔なる先生を仰ぐ。少なくとも、余の居る冬の蔦山が先生を傳するに適す。先生の家塾を稱好塾といふは、司馬徽の好し〱と稱して、臥龍を世に出したるに基づく。臥龍とは、諸葛孔明の事也。劉備は臥龍を雪中に訪ひて、天下を三分することを得たりき。養氣廬とて、稱好塾の年中行事に、『雪中訪臥龍』の事あり。江東の臥龍梅の枯るるまでは、先生必ず門下と共に、雪の日を卜して、臥龍梅を訪はれたり。雪は先生と緣故深く、又稱好塾とも緣故深き也。

十一月の下旬、池田良榮氏が傳記の材料の一部を齎らして來りし時は、既に雪ありき。池田氏は陸軍教授にして、先生の日本中學校の詩吟の教師也。馬の屁の如きオルガンに合せて、蛙鳴の如き唱歌をうなりたりとて、何ぞ日本男兒の志氣を養ふに足らむや。日本中學校に詩吟の課あるは、先生の熱血の迸れる也。その詩吟の師たる池田氏は、一代の快男子也。音吐洪朗、吟調雄渾にして沈痛・高山屹ち・大河流る。雪月の夜、蔦の山上に、その吟聲を發せしに、宿を擧つて・驚喜して聽けり。山鬼木妖も來つて、屋外に聽きたりけむ。池田氏は二泊して去れり。

十二月下旬に至りて、猪狩史山來れり。傳記を受取らむとする也。且ついろ〱の打合せを爲さむとする也。史山は日本中學校に附屬したりし、而して今は無き東京文學院の出身にして日本中學校の教師たること三十年、その間、常に先生に接せり。史山の一面は教育家にして、一面は文豪也。先生の傳記は、史山との合著なれば、打合せの必要ある也。史山は花外とも舊交あり。余の酒癖を知ると共に、花外の酒癖をも知れり。例の二人の呑んだれの心配ありしならむも、思ひの外に、原稿は捗り居りたり。史山滯在すること十日、大正十三年の元旦を迎ふると共に、傳記成れり。史山喜躍して、傳記を手にして、

雪の山を下る。余送る。曳山余を顧みて、一生の好記念なりといふ。余歌を以て答へけらく、

師の傳を鳴らし下る蔦山の五尺の雪に朝日かゞやく

通天橋に至りても別れず、燒山に至りて別れたり。後姿の見えずなるまで見送りて、歌つて曰く、

奥入瀬の水も咽びて別れゆく友の姿の吹雪に消ゆる

（終）

短命内閣沒落秘史

高須芳次郎

（一）

大正十三年一月三十一日は、國民が永く記憶しなければならぬ日である。この日、清浦内閣は、突如として議會を解散した。そして未だ曾て例を見ないところの暴漢が不意に議會に闖入して、神聖な場所を騷がした。フラスコ飛び、鐵拳舞ひ、足踏みならす音、烈しく卓を打叩く音、怒罵、嘲笑の聲一時に潮のやうに起つて、大きな風が議會を見舞つた。心あるものは、愁然としてこの光景に對し、慨然として將來を慮らざるを得ない。

元來、清浦内閣は、その成立の動機に於て既に不純なところがあつた。聰明、練達を以て知られた清浦子が、一度賢哲、身を潔くする心を尊重して、大命を拜辭したのは、その當を得たものであつたが、平田、牧野らの人々に動かされて、急に心を翻し、遮二無二、内閣を組織して、一部の貴族階級と通謀した形跡が明かに見えたのは、平生、清浦子の練達を信じたものに取つて、頗る不可解の謎であらねばならぬ。

それさへあるに、清浦子が内相水野錬太郎氏らの獻策を用ゐて、クウデタアにひとしい態度を執つて議會解散の不合理を敢行したのは抑も何の心か。その解散理由書を讀むと、唯抽象的な文辭を漫然臚列したに留つて、政界の新局面を打開し、刻下

の急要に應ずべき政策、企劃の發表は一も見ることが出來ない。若し眞に徹底的に國家を憂慮するなら、單に抽象的な美辭の遊戲に甘んずることが出來ない筈である。何故もつと具體的な意見を述べぬかと問ふことを敢てする勇氣は、素より私らにない。が、若し眞に濶大の眼を睜つて、今日の形勢を見たら、全く根本的に出直さねばならぬわけだ。思想的にも、經世的にも、新しい出發點から進まねばなるまい。清浦内閣の人々は何と考へるか。

時代は今正に切迫して居る。わが日本が舊生命から新生命へ、特權階級の政治、腐敗政黨の政治から眞の國民政治へ推し移らうとして、生みの惱みにもがきつゝある。この際、清浦内閣が右のやうな行動に出たのは、何と云ふ皮肉であらう。時代錯誤の山本内閣が短命に終つたところへ、より多く時代錯誤的な清浦内閣がより多く盲目的な解散を行はうとは矛盾も茲に至つて極まれるではないか。恐らく一般の人々が豫斷して居るやうに、この内閣の運命は長くあるまい。

短命内閣の續出は、決して喜ぶべきことではない。けれども國民の上に基礎を置かぬものや憲政の意義を没却したものは短命に終つた方が宜い。國民の利福を[illegible]な内閣の存在は、國の禍となるからである。殊に現時の國勢は積水を千仭の谷に決するやうに、一つ事を誤ると、時代の潮流を急激に危殆ならしめる憂ひが必ず伴ふ、政治の局に當るものは、深く慮るところがなければならぬ。それには、一應過去に於ける現代政治史を回顧して、そこに暗示と教訓とを見出すべき必要がある。

現代日本の政治史は、どんなに寛大に見ても、健かな歩みを續けたものと云ふことが出來ない。大正の今日に至るまでも、閥族專恣のあとを絕たぬ。明治、大正六十年間の政治史は、或る點に於て、確かに閥族政治の記錄である。それは、平安時代に於ける藤原政治と何等異るところがない。そしてその閥族の中樞を形造つたのは薩長二派である。若くは薩長の分流である。明治十八年、第一次伊藤内閣が出來て、それが二十一年に至つて倒れると、薩派の黒田内閣が生れた。それが辭職すると、長派の山縣内閣が飛び出した。次ぎが伊藤、それから松方と云ふ風で明治三十一年頃まで押して來た。途中、憲政黨内閣が現はれたほかは、すべて薩長系統によつてわが國の政治が左右せられた。彼等の多くは、必ずしも、政治に對して冷淡ではなかつたであらうが、國民の利福を計る上に於ては、概して不熱心であつた。少數特權階級や富者階級のためにはよく力めたが、國民のためには、殆ど力めた跡がなかつた。畢竟、彼等の多くは、正當に民意を理解しないで、政治を行つたのである。

彼等の目的は權勢の獲得そのものにあつて、國民の利福の上に置かれたのではなかつた。

それで明治三十三年、政友會內閣が出現して以來、憲政黨內閣のあとを踏んで、政黨政治を行つたが、いつも政友會は桂と妥協して、權勢のために政治的遊戲を繰返した。黨利や黨略や閥族の利益、特權などを擁護することに傾いて、不安、憂愁、失意に沈んだ國民生活を救はうとしなかつた。かうした遊戲政治の連續は、わが國民の大きい禍であつた。

勿論、わが國民が立憲思想に乏しく、政治に冷淡であつたことも亦政治上の腐敗を醸し出す上に與つて力があつた。自治制の實現に於ても、議員の選擧に於ても、政治の成行に於ても、愼重、冷靜な考慮を加へることをしないで國民としての義務、市民としての權利を正當に自覺しないものが多いために、當然、政治の腐敗から來る惡結果を自分の身に引き受けねばならなかつた。この點について、國民の積極的覺醒が自發的に生じない限り、永く國民は救はれない。現に世界を擧げて、政治上、思想上大きい不安、動搖のうちにあつて、少壯無名の英雄や實力ある新人が大臣となり、內閣首相となつて、明治維新當時のやうに、この重大時機に適合した政治を行はねばならぬ秋に山本內閣、淸浦內閣を迎へ入れねばならぬとは何事か。結局、國民が政治に冷淡なために自ら蒔いた種を刈らねばならない仕儀となつたのではないか。それにしても、この弱味に付け込んだ閥族の分流や少數貴族の橫暴、專恣は一段罪が深くはなからうか彼等は、自らその短命內閣の運命を意識して迄も、一時、權勢の幻影を追はんとするのであらうか。

短命も宜い、それが憲政上、意義ある內閣で、その所信を實現するために短命に終つたとすれば、短命のうちにも、一つの意義がある、價値がある。そこには山櫻の花がぱつと春風に散るやうな潔さがある。けれども憲政上、何等意義を爲さぬ特權內閣、無能、無爲の內閣が短命に終つたとしても、それを惜んで、そこに意義を認めようとするものは一人もあるまい。私は今、過去の短命內閣について、考案を加へて、政治上に於ける自他反省の糧としようと思ふのである。

(二)

わが國に於ける短命內閣の最初は、明治三十一年一月に成立した第三次伊藤內閣である。それは僅に六ケ月の壽命しかなかつた。それ以前、猪勇內閣の惡名を受けて、國民の呪咀のうちに倒れた第一次松方內閣さへも約一年半の生命を持續したことを考へると、これはまた餘りに短い運命だつた。短命內閣の實例を、

自ら內閣制を作つた伊藤が始めたのは偶然であるが、そこに何等かの意味もあらう。その伊藤の後を受けた憲政黨內閣に至つては、更に短命で、約五ケ月の壽命しか保たなかつた。それは空前の短命で實際は四ケ月餘の運命を保つたに過ぎぬ。次に第四次伊藤內閣は七ケ月で倒れ、內閣持續に於て最も成功した桂公が、その第三次の內閣を作つた際は、三ケ月の最短命でのたれ死んだ。その短命の點に於て、大正十二年の山本內閣と酷似して居る。その他 原內閣の後を受けた高橋內閣も亦壽命が短かつた。

それらのうちに於て、第三次伊藤內閣の短命には、いくらか意義があつた。憲政黨內閣の夭死にも亦痛惜せらるべき意義を見た。が、第三次桂內閣の急激な倒壞に至つては、何等惜むべきところもなければ、同情すべき點も少かつた。それは寧ろ醜い短命であつた。山本內閣、高橋內閣の短命とても、決して見宜いとは云へぬ。內閣が短命に終るならば、成るべく、無意義の短命に陷ることを避けるべきであるが、成立當初から憲政上意義を爲さぬ內閣は、一日も早く自ら辭り去つた方が、未だしも、意義を爲すであらう。

さて第三次伊藤內閣が短命に終つたのは、何故か。先づそれから語らう。それは、政界に於ける新しい氣流と古い氣流とが交錯して、動搖、暗鬪の傾向を强めた時代であつた。多年不法な抑壓と迫害との下に幾度か苦杯を飲ませられた政黨の勢力が次第に伸びて來て、超然主義の閥族政治が殆ど行詰つた時代であつた。伊藤は、この重大な瀨戶際に起つたのである。

屈したものは伸び、抑へられたものは反撥する。明治政黨史の前半は主として、自由、改進の兩黨が、薩長閥のために抑へ付けられ、離間され、迫害された歷史である。薩長政府は、政黨を國賊のやうに只管憎んだ。故なく、政黨に向つて言論、集會、結社、出版の自由を奪つた。時には利を以て政黨を誘ひ、時には自由、改進兩黨を咬み合はさせ、時にはまた虛構の讒陷を以て政黨の壞滅を策したりした。それがために早くから政黨に籍を置いたものは、あらゆる苦痛を嘗めた、堪え難い貧寒に惱んだ、幽囚や放逐の罰をも度々受けた。甚しいものは、冤罪のために空しく命を捨てた。或は不法の抑壓を憤つて、暴擧を企て、悲壯劇中の人となつたものもあつた。そこには、生々しい血涙のあとを歷々として見ることが出來る。

けれども政黨の人々も、無策、無氣力ではないので、官憲の跳梁が極度に達した時は、强ゐて自ら抑へて我慢したけれども明治二十三年十一月、帝國議會が召集せらるゝに及んで、今迄の不平、不滿を一時に言論の上に爆發させた。政黨は茲に始めて、言論、集會、結社、出版などの自由を半ば以上取返して、「

旺んに薩長政府に向つて、言論戰を挑んだ。その勢は一時に長江、大河を決するやうで、積極的、攻勢的、自動的であつた。そして自由、改進の兩黨は在來の私的情實や黨爭的感情を一排して握手すると共に、經費節減、民力休養の大旆を飜して豫算査定を行ひ、經常、臨時兩部の歳出に於て、約八百萬圓餘を削減しようとした。かうして多年、屈服の狀態を忍んで來た民黨の勢は、烈しく薩長政府を脅かした。

若しこの勢で進んだならば、民黨の力は急激に增加して、薩長政府の勢を手強く控制し得たかも知れなかつた。少くとも、政界の分野にもつと變化と分解と複合作用とが實現されたことだらうと思はれる。けれども自由黨中に於ける土佐派の人々が利權のために前途の長計を忘れて山縣内閣と握手するに及んで、思はぬ一頓挫を生じた。結局政府は危い瀬戸際で、土佐派を操縱して、漸く八百萬圓の豫算削減を六百五十萬に留めしめて、議會の難關を切り拔けた。

かうして一度、土佐派によつて始められた妥協の歴史は、爾後幾度も、自由黨の手で繰返された。薩長政府はこの弱味に附け込んで、また我儘を始めた。而もその遣り口が巧妙になつて、利用の必要がある時は、頻りに自由黨を種々の利益、甘言を以て操り、一旦利用すべき要がなくなると、冷淡に彼等を土俵際で打捨てた。さう云ふことから、自由黨も稀れに怒つて改進黨と提携して、一時、政府を苦しめたことがあつた。けれども大體に於て、自由黨はいつも利權に眩目して政府の利用するところとなつた。改進黨は、この經驗を甞めたことが比較的に少かつた。が、政黨が始終志を得ないことや多年逆境にあることと薩長政府の我儘が長く續くのを見て、兩黨中の有識者は、何措いても薩長の根據を覆すために合同して新黨を組織し、藩閥無二、政府に向つて突き進もうと考へて來た。かうしたところへ第三次伊藤內閣が第二次松方內閣瓦解のあとを受けて成立したのである。それでその前途、容易に樂觀を許し難い事情があつた。のみならず、それが成立するまでに、もういろいろの躓きがあつた。

當時伊藤公(博文)は、戰後經營の重大時機を眼前に控へてゝあることを顧慮して、伊東伯(巳代治)の獻策を入れ、先づ擧國一致內閣を形作らうとした。その主要な筋書は、在野黨の首領たる大隈侯(重信)板垣伯(退助)の二人を新たに內閣に迎へて、伊隈板聯立內閣を實現しようとするにあつた。そして伊藤公は一應、この方針で伊東伯を奔走せしめた。が、公は聖上の御召命に接した時、唯五日間の猶豫を奏願した丈であつたから、大隈、板垣の二人を內閣に招致するには、時日が切迫し過

きて居て、事を成就し難かつた。勿論、伊東伯は松田正久、林有造　大石正巳、犬養毅諸氏に逢つて、筋書通りの衝を續けたが、大體の見込が附いた丈で、肝心の大隈侯や板垣伯らの心事は、未だ海のものとも、山のものとも、わからなかつた。

伊藤公は、時日切迫の關係から、氣をいらいらさせて先づ公が心中最も重きを置いて居た大隈侯に直接當つて見ることになつて、突然、大磯で侯に逢つた。その時、大隈侯は伊藤の心事を諒としたが、松隈内閣の時に苦い經驗を嘗めて居るので、容易く動かなかつた。「若し公が眞に提携を望むならば、進歩黨中から二三の閣僚を出すことを承知してほしい。」と云ふ意嚮をそれとなく洩らした。この事は、公に取つて難題であつたので、公は癇癪を起して大隈侯のことを思ひ切つた。そして新たに自由黨の板垣伯と提携の交渉を始めた。それには、同黨の黨師を以て任じて居た伊東伯が、中間に立つて手の屆く限り斡旋した。この方は漸く話が順調に進んだ。結局政府が「總選擧後に板垣を内務大臣にしよう。」と云ふ條件の下に、自由黨は伊藤公に身方することになつた。

(三)

伊藤公は自由黨と握手するやうになつたので、漸く安堵して愈よその第三次内閣を組織した。その際、所謂元勳の人々は、政黨關係の面倒を恐れて入閣することを避けた。それで公は井上侯(馨)を副總理に迎へて、その門下らを拔擢して、内閣を作りあげた。それは、伊藤首相の下に井上(藏相)芳川(内相)桂(陸相)曾根(法相)西園寺(文相)伊東(農相)末松(遞相)西鄕(海相)西(外相)らが顔を列べたのである。

伊藤首相は、力めて自由黨に向つて好意を示した。彼れは特に自由黨員を官邸に招待して盛宴を張つた。その席上、彼れは伊藤一流の美辭で演說して「立憲政治の完成を期せんには、野にあつては、自由黨諸君の力に頼り、朝にあつては、博文自らこれに任ずるであらう」と云つたので、黨員は至極滿足した。それから總選擧が濟むと、自由黨では、當然その首領板垣伯が内相として、伊藤内閣に迎へられるであらうことを確信して居た。元來、自由黨では伊藤公と提携の約成ると同時に、板垣の入閣を望んだのであるが、その際伊藤は「御尤もではあるが、總選擧を眼の前に控へながら、直ぐに政黨の首領を内相に迎へるのは、政府の公平を示す所以ではない。それで總選擧が濟んでからゆつくり御相談することにしよう。」と云つて板垣伯の入閣を後日に期する意を示したのであつた。

ところが、愈よその時期になると、伊藤公に約束を踐むことに

頗る行惱んだ。それは井上侯が自由黨と接近することを心から好まないで、板垣伯の入閣を斷乎として固く拒んだによるのである。井上侯は元來政黨嫌ひである上に板垣と性格、傾向などの上でどうも相容れないところがあつた。それに侯は芳川內相に何の過失も罪もないのに就任後、僅か三ケ月ばかりで罷めさせて、板垣を迎へるのは不合理だと信じた。かうして彼れは伊藤公に向つて、板垣入閣のことは破約すべきであると迫つた。

それには伊藤公も困つた。けれども井上侯との因緣が非常に深いので、侯の云ふところを一概に輕視しかねた。また財政上、侯に充分の手腕を揮はせたいと云ふ希望が伊藤公の胸にあつたので、結局板垣に背き、自由黨に背くとも、多年、公の女房役を勤めた侯と離れるわけにゆかぬと思つたので、自由黨の怒りに觸れることを知りながら、板垣伯を內相に迎へようとしなかつた。自由黨は背約を怒つて、漸く不穩の色をほのめかした。この時一番困惑したのは伊東伯であつた。板垣入閣のことが實現せられないと、彼れは自由黨を欺いて一時伊藤公に賣つたやうになるので、非常にその立場に窮した。彼れは男らしく辭職して、自由黨に謝した。そして尚ほ伊藤內閣への好意を失はないように希望した。が、松田正久、林有造らは、伊東伯の心事には同感したけれども、伊藤內閣に向つては大分冷淡になつた。當時、內閣は伊東のあとへ金子堅太郎子を迎へて、一時を糊塗したが、既に自由黨との提携が自然破れた以上、その前途は危かつた。內閣の前途は不安の空氣で包まれ始めた。

そのうち、第十二議會が目睫の間に迫ると、自由黨は、代議士會を開いて「我黨は現內閣を以て、政黨を基礎とせず、憲政の完美を期する望みなきものと認む。故にこれに反對する」と決議して政府へ反抗してかゝる態度を示した。けれども幹部のうちには、いくらか政府に同情したものがあつた。進步黨が政府の對支政策の無能を憤つて、議會に彈劾上奏案を提出した時、自由黨では、伊藤公の顏を立てゝそれを否決した。政府側はそれがために稍氣をゆるめた。

が、地租增徵案は、自由、進步兩黨を通じて共に政府に反對しなければならぬ立場にあつた。この一重要點に於て、兩黨は互ひに進んで握手し、積極的に政府攻擊同盟を形造つた。それで政府が、自由黨の形勢を誤算して三十一年六月十日、地租增徵案を議會に提出すると、兩黨は勢銳く步調を揃へて一氣にそれを否決し去つた。當時政府案に賛成した投票は僅かに二十七、反對した投票は二百四十七の多數に上つた。政府は行詰つて解散を斷行した。

かうした政界の形勢は、茲に自由、進步兩派の接近を自然に

促さないではやまなかつた。自由黨は曾て伊藤公と提携して打捨てられ、進歩黨は松方公と握手して苦い經驗を嘗めさせられたのでその新生面を開くには、全く薩長政府と離れて、兩黨が合同、結束をした以上、手強く薩長攻擊に向つて最期の一戰を試みるよりほかに適當な手段がなかつた。彼等は、この目的の前に新しく生きてゆくため、在來の行懸りや感情の衝突などを悉く打捨てゝ、否應なく合同するとの必要を痛感した。この事の實現に就て岡崎邦輔が特に力を入れた。茲に平岡浩太郎と云ふ有志家があつた。彼れは、進歩黨の總務となつて、黨事に力を盡したが、偶まこの自由進歩兩黨の合同については憲政進歩のために何人よりも眞先にその實現を熱望した。彼れはそれがために、その富を散じて、合同機運を促進することに力めた。それで彼れの斡旋で、議會が解散せられた翌日、その宅へ自由、進歩兩黨の代表者が集合した。席上の相談は、新たに憲政黨を組織することに決した。それには、自由進歩兩黨を中心として尙ほ山下倶樂部に屬する議員四十八名や無所屬の人々を悉く網羅するとにした。唯國民協會の一派（二十一名）だけは除外すると云ふわけで、合同の機運は大に熟した。それについて平岡氏の奔走は特に目ざましかつた「平浩」の名が新聞を賑はしたのは、この頃のことであつた。

かうして憲政黨の成立が愈よ實現せらるゝことになつたので、大隈伯、板垣伯も幹部の懇情を容れて、快く入黨した。やがてその結黨式は、六月二十二日、新富座で行はれた。合同から結黨に至るまで僅か十日間を要したに過ぎなかつたとは、如何に政界の新氣運が烈しく動いて居たかを察することが出來よう。それに薩長閥のために翻弄せられたことを憤つた民黨が、何如に決戰の覺悟を以て凄じく、政府に肉迫しようとしたかをも推測することが出來よう。「閥族を葬れ！超然主義を葬れ！」そして政黨內閣を打建てて、閣臣の責任を嚴明にしなければならぬ。と云ふのが彼等の標語であつた。當時憲政黨の總務委員となつて、樞機に參與したのは、尾崎行雄、大東義徹、林有造、松田正久の諸氏であつた。

伊藤公の眼にそれらの光景が何と映つたか。彼れは進歩主義の政治家であつただけに、時代錯誤の迷想に囚はれて、意地汚くその內閣の壽命を壇の浦まで持ち續けてゆかうとはしなかつた。またこの上、非合理的な無用の解散を行はうともしなかつた。彼れは時の流れを明かに看取した。最早、山縣公らの金科玉條とする超然主義の斷末魔が來たことを直感した。同時に政黨內閣の時代が容赦なく眼前に迫りつつあることを見た。少くとも、彼れは左樣した心持ちを起した。彼れは、時代に逆行する

どを好まぬし、また逆行するやうな舊式政治家ではなかつた。大正十三年の今日、尙ほ且つ時代に逆行したり、無法の解散を行つたり、警察力を濫用したり、少數特權政治に固執したりする舊式政治家があることを地下の彼れが、若し靈あつて知つたら、何と云ふであらうか。また西園寺公が、時代錯誤の山本內閣、淸浦內閣を是認し傍觀しつゝあるのを知つたら、伊藤公は何と云ふであらうか。

（四）

當時、伊藤公は憲政黨出現の新形勢に對して深く決心するところがあつた。彼れは新氣運に鞭つ勢で元氣よく起ちあがつた。彼れの心は豫ねての希望であるところの政黨組織に向つて大に動いた。その時、彼れは早くも昵近の實業家らにその意を洩らして、自ら三策を樹てた。第一策は、彼れが首相の地位に座つた儘、政黨組織を始めて國策の遂行に力むることである。第二策は斷然野に下つて、政黨組織の後、政府を援助しようとする方法である。第三策は、第一、第二の策を行ふことが出來ない場合に憲政黨の指導者たる大隈、板垣二人を推薦して後繼內閣を組織せしむるにあつた。以上のうちで、伊藤公自ら希望したのは、第一策の實現であつた。即ち政黨首領を兼ねて國務の進行を計ることにあつた。さて六月二十四日の御前會議に於て、彼れがその說を述べると、第一に山縣公が「これらは何れも輕擧に過ぎたことだ。もつと自重してほしい。」と云つて、第一策、第二策を排した。黑田、大山、井上、西鄕らの人々も亦山縣公に同じた。それで伊藤公は、第三策を主張して、憲政黨に內閣を讓るべき希望を述べた。ところが、山縣公は、矢張それにも反對した。山縣の意は、それを突飛、不自然のことだと解したのである。政黨嫌ひの山縣として當然のことであらう。が、伊藤は三策共に反對せられるとなると行詰らざるを得なかつた。彼れは山縣に向つて內閣組織のことを囑望した。けれども山縣は、逡巡して決しなかつた。そこに山縣、伊藤の間に烈しい論爭を生じた。その日の御前會議はかうして要領を得ずに終つた。

伊藤公の決心は、素より山縣らの言によつて左右さるゝほどに弱くはなかつた。公はその翌朝、森槐南に起草せしめた上奏文を闕下に捧げて、その決心の尋常でないことを明かに示した。それに於て、公は首相の地位を辭すると共に爵位、勳爵をも辭して、赤裸の人とならうとする誠意を披瀝した。伊藤の意に從うて他の閣僚も亦一齊に辭表を差出した。其日御前會議が再び開かれて、後繼內閣について御諮詢があつた。此時、伊藤公は其決意通り、後繼內閣組織について、大隈板垣の二人を薦めた。山縣

公は頗る不満の色を現はしたが、到底難局を處理する自信が彼にないので、切歯しながらぢづと成行を傍觀する態度を執つた。かうして伊藤公は、その第三策を實現すべき機會を逸しないで済んだ。そして伊藤公は御前會議から歸ると、急轉直下の勢で大隈板垣の二人に後繼内閣組織に關する相談を持ちかけた。それは二十五日午後八時頃のことで、當夜大隈、板垣の二人は降りしきる梅雨を冒して、首相官邸に伊藤公を訪ふたのである。

當時、大隈侯も板垣伯も、伊藤公がかくまで勇斷的態度に出ようとは夢にも思はなかつた。彼等が直下に目指したところは伊藤内閣を打壊することの上にあつた。ところが形勢急轉して伊藤から急使を派して、大隈、板垣らに會見を求める場面を現出したのである。意外と云つて、この位、意外なことは在來曾てなかつた。そしてその夜伊藤公の云ふところは、理義に合つて、その態度も亦公明、正大であつた。蓋し伊藤公はわが國勢の上に顧みて、内には戰後經營の事業が未だその緒に就かぬ憂ひがあるし、外に於ては、支那を中心として、ヨオロツパの諸强國がその野心を逞うして、東洋の禍亂を醸し出さうとする虞れがあるのを見て痛心した。それで再應、衆議院と衝突することの無用な内爭であることを痛感して断乎たる大決心をしたわけである。

公は以上の如き心事を述べて「目下、政府が最も憂慮するところは衆議院との關係である。この重大時機に幾度も衝突を繰返して居ては、國勢の澁滯を生じて、國家の大きな損失となる。幸ひ貴下らは今度その率ゐる政黨を合同して、憲政黨を組織され下院に大多數を占められたから、この際國勢が圓滿に進行するよう、私は今日後繼内閣組織のことについて貴下らを推薦いたした。それは一に國家を思ふためで少しも他意がない。政友のうちには私の態度を攻撃したり或は私に向つて切に留任を勸めるものもあるが、私が留任したところで前途に何等見込みが立たぬ。結局再び解散を繰返すほかに道がない。それでは上は陛下に對し、下は國民に對して誠に相濟まぬ何卒貴下らは私の衷情と諒として、この際非常の決意を以て國家のために奮起せられたい。」と懇望した。

それに對して、大隈侯は「突然の御話で誠に驚いたが、兎も角、前後策について考慮致さう。」と答へた。次ぎに板垣伯は「憲政黨は只今出來たばかりの際で未だ結束が固くなつて居らぬ。私には奮起すべき自信がない。が大隈さんが引受けらるゝつもりなら、自由黨をその儘そつくり捧げよう。」と云つた。それにしても、薩長の根が政府にはびこつて居る以上、そこに不安がないとは云へなかつた。この點は大隈、板垣の二人が、非常に氣遣つた點であつた。それらについて伊藤に質すと、無造

作に「閣臣など今や名ばかりで、その實がない。到底政黨の勢力には及ばない」と事もなげに答へた。

それで大隈侯は伊藤公の意を諒として「貴下の御說は道理至極である。では、板垣伯とも篤と相談して、前後策を講じましよう。尚ほその上、陛下の御思召をも伺ひ、若し大命が降下したら、微力爲すなき身であるが、誠心誠意、御奉公いたそう」と盟つた。それで用談は一段落を告げた。そして雜談に移ると大隈侯は、陛下の御思召について氣遣ひ、また官僚が、どんな風に憲政黨內閣が出來た曉に行動するかを懸念して、それとなく伊藤公に問うて見た。

伊藤公は、それに對して「私は御承知の如く、今回位勳を辭して、赤裸の人とならうと決心したほどだから、胸中何等の術數もない。只管貴下らの成功を祈る次第である。また今度の事は突然で何故、辭表捧呈前に自分らに相談しなかつたかと思はれるであらう。が自己の進退は私一個の決心によるのほかはないからである。但し後繼內閣のことは、私らが私議するとを許されぬ事柄である。何れ私の辭職が許され、私の希望する通り貴下らが大命を拜せられて、內閣を組織さるゝならば、大に國家のため盡して戴きたい、それから官僚の思惑などは介意するに足らぬ。唯彼等の地位を安定せしめ置けばそれで宜しからう」と答へた。それから外交、內政について、伊藤公の所感を披瀝して、漸く會見を終つた、時は午後十一時半頃で、雨の音が淋しく、夜の靜寂のうちに聞えた。官邸を出てゆく大隈、板垣は、しめつぽい夜風に吹かれ乍ら歸路を急いだ。

思ふに、この時ほど伊藤公に取つても、また大隈侯に取つても、感慨深いことはなかつたであらう。伊藤公及び大隈侯は多年の親友である。公侯の交際が始つたのは明治元年の頃からであつた。當時侯は中央政府に居て既に相當の威權を揮つた。そしてその頃侯は兵庫縣知事をして居た公の令名を耳にして「さう云ふ人物を空しく、田舍に埋めて置くのは惜しい。」と思つたので、公が中央政府に出られるやう斡旋した。公の立身飛躍の第一步は、實に茲に始つた。その運命の糸を最初に操つたのが大隈侯であつた。

ところが、明治十四年の大政變で公侯が明治の始めから十幾年も共に手を携へて參政した關係が急に破れて、公は依然朝に起ち、侯は野に下つて、爲めに政治上の敵となつた。公が廟堂の上に權勢を發揮すると、侯は政黨の指導者として反抗の氣勢を旺んに示すと云ふ風であつた。そして公侯に隨ふ末流の徒は更に感情の上で烈しく爭ひ合つた。そこに公侯の間に思ひがけぬほどの大きな溝が出來た。

それか十七年後に至つて、公侯の政治的の握手を見ようとは誰れが豫想し得たであらう。勿論それは時勢の推移が示した局面轉換の作用によるのだが、一つは政黨の勢力伸張につくした大隈侯らの力により、一つは、伊藤公が虚心坦懐に内閣を國家の爲めに大隈、坂垣の二人に渡した公明の態度、精神による。當時の官僚は、政黨を國賊視して、是非の別なく壓迫しようとして居たから、伊藤公が内閣を憲政黨に明け渡すについて、「伊藤は實に弱い。敵勢に驚いて、未だ戰はないうちに逃げ出した。恰度、平家の公達が水鳥の羽音に驚いて戰はずに敗れたのと同様である。」と非難の聲が官僚側に潮のやうに起つた。が、公はそれらの非難に少しも動かされなかつた。

公は後にその當時を回顧して「あの時じやて、俺もよくその事は知つて居た、馴染のものからも、隨分手痛い攻撃を受けた。俺か全くの意氣地なしで、伊藤は實に腰抜けだといふ非難を度々聞いた。しかし俺には、確信があつた。國家の政治はさうはいかん、政治は何處迄も、世の中を治めてゆくことが必要ぢや。國家に禍をかけて濟むのぢやない。世の中を亂して上、陛下に相濟むものぢやない。伊藤を捉へて薄志弱行と云ふもよからう。腰抜と云ふもえい。伊藤は天下を騒亂の巷に陥れることは出來ぬ。天下に有能者があれば任せて宜いぢやないか。大隈がやつて見ると云ふつもりたら、やつて見るがよいじやないか。又やらせて見るものも宜からう。それを卑怯だの、未練だのと云ふことは、國家の政治を解せないものだ。公私の區別さへわからない。さう云ふものがあるから困る。」と述懐した。この話によつて、公の當時に於ける心事か、はつきりわかる。そして公が主として大隈侯の手腕識見、力量に重きを置いて、坂垣伯を左程に重く見て居なかつたことも亦わかる。それだけに大隈侯の感慨も亦深からざるを得なかつたであらう。

かうして政黨の苦戰、惡鬪を重ぬること十幾年の後に至つて、今漸く平生夢寐の間も忘れ得なかつた政黨内閣實現の日が眼前に迫つた。進んでその機會を摑むべきか、退いて結束を固くして、他日、第二の機會が來るのを待つべきか。その何れを撰ぶかは大隈、坂垣二人の胸のうちにあつた。ところが、大隈侯は進んでその機會を摑んで、その新生面を展開しようとした。それと反對に坂垣伯は、退いて結束を固くして後日に伸びようとした。その何れにも相應の理由があつた。結局、大隈侯の進取說が勝つて、兩人か内閣組織を引受けるべき旨を二十六日、伊藤公に通告した。それで二十七日、兩人は宮中に召されて大命を拜受した。そして内閣の顔觸が定ると、三十日に親任式が行はれた。かうして伊藤内閣が約半歳の短命で倒れて、憲政黨内

閣が生れた。それは政界に於ける空前の一大變革であつた。この一大變革を促がした伊藤內閣は、短命に終つても、そこに憲政上の意義を有した。それは醜い短命でなかつた。

(五)

憲政黨內閣の出現は、わが憲政史上、重要な意義を有した。それは政黨內閣の先蹤を爲した點に於て、著しく民衆的色彩を帶びた點に於て、政黨の勢力を增進した點に於て、新鋭、潑溂の趣を示した點に於て相應の意義を含んで居た。單に世人が藩長の妥協政治、特權政治に倦んだ重苦しい氣分を一時拂ひのけた點に於てさへも、多少の意義があつた。それは政界に於ける新紀元の到來を告げたものである。

それにしても、この內閣は最も短命であつた。その壽命は僅かに四ケ月餘に過ぎなかつた。かうした短命の原因は、內部の結束が固くなかつたのと外部からこの內閣を一日も早く倒さうと力めた山縣一派の策戰に禍せられたとなどにあつた。まづその閣僚の顔觸からして定めることが困難であつた。海陸兩相は勅命によつて、桂(陸相)西鄉(海相)の二人が留任に決したが、あとに殘つた閣僚の椅子を自由、進步兩派で均分することになつた。そのうち、首相の地位は當然大隈侯でなければならぬので、侯が先づ占めた。そして內相の椅子は、副總理格の板垣伯が占めた。それから別に無任所大臣として近衛篤麿公を迎へようとしたが、公が固辭したので、これは沙汰やみとなつた。その他、自由黨は大藏、外務、遞信の三相を占め、また進步派は司法、農商務、文部などの椅子に據ることになつた。ところが、自由派のうちには、外相となるべき適材がないので、最初、それを伊東伯に押付けようとしたが、伯は固辭した。折柄、ロシヤのキリル・ウラジミロウヰチ太公が來朝されるので、接伴のため、それ迄一時、大隈侯が外相を兼任することに話が纒つた。結局、大隈(首相兼外相)板垣(內相)尾崎(文相)松田(藏相)大石(農相)大東(法相)林(遞相)及び西鄉(海相)桂(陸相)と云ふ顔觸で內閣が成立つた。

けれども元來自由、進步の兩派は長い間、感情的に相爭つて來た歷史がある上に、その肌合が合はぬところがあつた。進步派は改進黨時代からイギリスの政黨に範を採つて、穩健着實で概して漸進主義を執つた。ところが、自由派は、フランスの政黨に則つて、自由平等の純理論を振廻はすと云ふ風で、過激、粗矯で、概して急進主義を執つた。それが時勢の推移につれて漸次變化したが、その肌合には昔の傾向を離れ得ぬところがあつた。そして憲政黨成立時代には、自由派は意氣を以て押して

ゆかうとしたが、進歩派は智巧を以て進んでゆかうとする風が見えた。そこに兩派の間に一つの大きな溝が作られて居た。この溝が兩派の結合を妨げる一原因となつた。

が、最初兩派は、宿昔の理想を一朝にして實現し得たと云ふので、互ひに交讒の風を以て調和を保つた。けれどもそれは僅かの間で黨員の烈しい獵官運動や勢力爭ひや意見の相違などが異常の内紛を濃厚に釀し出して、手が付けられぬ始末となつた。

進歩派は、大隈首相が卓越した力量、材能によつて、身方を指揮したので、その勢力はいつも自由派を凌いだ。大隈侯には大きい包容力があつて、自由派のものでも、能くこれを同化して了ふ作用を以て居た。岡崎邦輔氏は自由派の策士として、憲政黨組成に力を盡した智者であるが、氏はある時、大隈侯を訪うて、その包容、同化の力が優れて居るのを看取して、内心自派のために憂惧した位である。氏はその事について、付である新聞記者に左の如き意味の興味多い話をした。

恰度、板隈内閣が出來た八月の某日であつた。大隈さんが一度是非來いと云ふから、兎に角、一度逢つて見て思ふ存分、愛想づかしを云つてやらうと思つて、總理大臣官邸へ出かけて面會を求めると、大隈さんは非常な元氣で行きなり「やあ暫くであつた」と聲をかけるから、私は最初から愛想づかしを云ふ積りで行つたのだから「否私はまだあなたにお逢ひしたことはありません。」と答へて、初めての挨拶を述べると「やあ何處かで逢つたよ。」と滿面に笑を湛へるから「私は成るべく、あなたと逢ふやうなところに行きませんから、面會したことがありません」と重ねて厭味を云ふと、大隈さんは嫌な顔もしないで「さうかなあ。」と輕く受け流して盛にいろいろな話を交はす。恰度正午になつて、午餐を馳走になつて、一時近くになるが、中々話を打切りさうにもない。その日は午後一時から閣議があるとかで、閣僚がそろそろ集つてくるが、大隈さんは、そんな事に更に頓着せずに、熱心に話を進め、人をして更に飽かしめない様子であつたが、私は散々愛想づかしを云つて、その儘、辭去しようとすると、少しも嫌な顔をせずににこにこ顔で玄關まで送つて出られたが、その時に私はつくづくかう思つた。今、自由黨は日に日に淪落して、改進黨の勢が日に增し盛になるやうな兆があるのは、全くこれがためだ。自分のやうに初めから大隈嫌ひの人間でも、この分で三四度も逢つたら、乾分になつてしまふかも知れぬ。兎に角大隈と云ふ人は一種云ふべからざる人を引付ける力を持つて居るわいと、その後二三度人を以て呼びに來たから行つて見たが、いつもなかなか愛想がよくて、親みのある人であつ

た。大抵の氣持の惡い時でも、一度あの人を訪ねて歸る時には、必ず宜い氣持になつて歸るにちがひない。大隈さんが餘り好かぬ私でも、さうなんだから、若し反對に大隈崇拜の人でもあつたら、全部を捨てゝ、大隈宗になるにちがひない。

以上によつて、大隈公の同化力の優れて居ることが眼に見えるやうにわかる。ところが、板垣伯は武人肌で單純で、政治家に最も必要な同化力に乏しかつた。また內閣に於ても、大隈侯の勢力が板垣伯に立優つて、閣議の決定は、勢ひ進步派の左右するところとなつたので、自由派は非常にそれを不快に感じた。かうした事から、均勢論が持ち出されて、最初は外相の椅子について、後には文相の後任について、自由派が極力爭ふ始末になつた。

ロシヤ太公の接待が終ると、自由派は大隈侯に向つて、その外相兼任を辭せんことを迫つた。けれども侯はどうしても、外相を辭しなかつた。蓋しそれを以て、侯が野心のために外相の椅子を離れなかつたと解するのは、誤りである。當時、進步派で、ある重要な地位を占めた某氏の秘話によると、侯の外相兼任は陛下の御思召に出たものだと拜聞する。それは「政黨出身で、外交に堪能でないものが俄かに外相の職に就くのは、どうも危なかしくて、信任を置けぬ。大隈は再三、外務の椅子を占めたのだから、大隈が兼任するが宜い。」との思召であつたやうに拜察せらるゝ。それに自由黨中には、外相たるべき適材が一人も居なかつた。この事も、一應、首相として愼重に考慮せねばならぬ問題であつた。大隈侯が外相兼任を辭しなかつた心事は、以上のやうにその野心に支配せられた爲めではなかつた。自由派の人々は、さうした點に想到しないで、唯均勢論一點張で活動した。私情の上に於て察すべき點はあるが、公情に於ては同感を寄せ難い。

かうして自由派中の關東組は、折柄、アメリカから歸朝した星亨を外相に舁ぎあげようとして熱心に奔走した。また進步派の鳩山和夫氏が、それを煽揚したと云ふ噂が一方にあつた。蓋し鳩山氏は最初、自分が當然外相に推されるであらうと豫期したのが、次官に任せられたので不平を起し、均勢論を以て、自由派を動かした云ふのである。この事について、箕浦勝人氏は、「したことはなかつたやうに記憶する。」と私に話された。が、犬養毅氏は「鳩山君は確かに次官の地位に滿足しなかつて不平であつた。」と云はれた。私は何れとも斷定しないが、外相問題が意外に內爭を大きくしたことだけを知るに留めよう。

外相問題が紛糾のうちに解決せられないところへ、また一波瀾を生じたのは、尾崎行雄氏の所謂共和演説であつた。今日ならば恐らく尾崎氏の演説は、非難の的なることもなく、また氏の辭職を見るに及ばなかつたであらう。が、未だ思想界が今日ほどに進んで居なかつた上に、山縣一派の人々や川上操六など云ふ有力者が、憲政黨内閣を呪咀しつゝあつた時代であつたから、清浦子などによつて到頭問題化せられたのである。

て尾崎氏が八月二十二日、帝國教育會で爲した演説のうちで「日本に假りに共和政治が行はれるとしたら、恐らく三井、三菱はその大統領となるであらう、」と云つた意味は、マンモニズム跋扈を憤つた爲めであつて、共和政治を夢想した爲めでなかつた。ところが、その筆記が新聞紙上に出ると、官僚系の身方である『東京日々』が先づ非難の矢を尾崎氏に放つて「これ實に不祥不敬の甚しきものである。かうした言を爲すものは、たとひ一日と雖も、輔弼の重任に置いてはならぬ。」と極論した。それに和して、貴族院では、清浦、平田の人々が木曜會の千家尊福らと力を合せて反對の叫びを烈しく揚げた。また自由派の板垣伯も清浦子と同一步調を執つて、尾崎氏に反對した。昨年夏尾崎氏を輕井澤の莫哀山莊に訪うて、當年の事を聞いた時、氏は板垣伯のことについて一挿話を私に聞かせた。

當時、尾崎氏は比較的に板垣伯と親密な方であつた。閑話の後、二人相伴うて時々歸ることがあつた。ところが、ある日、偶然、氏が伯と二人きり殘ると、いつも、「御一緒に歸りませう。」と云ふ伯が、どうしても左樣云はないで落着かぬ樣子をして居た。伯は尾崎氏を一歩先きへ返してひとり後に殘つた。尾崎氏はそれを不思議に感したが、格別氣にも留めなかつた。後になつて始めてその日の板垣伯の魂膽がわかつた。それは當日、伯が尾崎文相彈劾の決心で、宮中に伺候して「私は共和を口にするやうな文相と一緒に内閣に列してゐることが出來ませぬ。」と云ふことを奏上したのである。——「板垣さんは正直な人であつた。」と云つて、尾崎氏は私に笑顏を見せた。

當時、尾崎氏は、帝國教育會に於ける演説筆記の原本を嚴封して所持し、その共和云々のことが、少しも不祥、不敬の意から出て居ないことを自ら固く信じた。たとひ、どんな非難を一身に浴びやうとも、氏はそれがために辭表を差出すことを欲しなかつた。が、問題は次第に擴大せられ、喧傳せられた。斯くも、その事が聖聽に達すると、十月二十二日、聖上は、侍從職幹事岩倉具定を大隈邸に派して聖旨を傳へしめられた。大隈侯は非常に恐懼して、尾崎氏に辭表を差出さしめることにした。この時、憲政黨内閣は、實に危機に瀕したのであろ。これ一夾

養毅氏が尾崎氏を訪うて當面の形勢を話し「理窟はまあ後で聞くから、辭表を出して貰ひたい。」と率直に云つたので、尾崎氏も終に辭表を差出した。

共和事件は、それで一段落を告げた。ところが文相後任問題が新たに起つて、それが外相專任の話ともつれ合つて、內爭の渦卷を大きくした。その時分、關東組は、星亨を外相に爲すべきことを要求し、容れられねば、豫算問題に於て、政府に反對するか、場合によれば脫黨をも辭せぬ氣勢を示した。それで板垣伯は十月十六日、大隈侯を訪うて、星亨を外相に任用せんことを嚴重に要請した。が、外相問題は前述のやうな理由で、大隈侯も、今更辭任するわけにゆかなかつた。

ところが、十月二十五日、大隈侯が閣議で尾崎氏の辭表執奏のことを報告すると、今度は板垣伯から、江原素六氏を文相に任用せんことを要望した。この時、進步派では、もう內閣改造の筋書が出來て居て、板垣伯の提議を輕視した。大隈侯の態度は飽迄強硬であつた。それで二十六日、閣議の席上で　板垣伯は狼狽の餘、文相の後任を陸海兩相の指名に委ねんことを提議したが、西鄕も桂もそれには應じなかつた。桂公の如きは、このもつれ出した形勢を內心冷かに見て居た。そして公は山縣公に內閣の秘密を內報して、憲政黨內閣を一日も早く倒さねばならぬことを唱へまた星氏を煽動してやまなかつた。

かうして文相後任についての閣議が纏らぬので、大隈侯は、決然として起ち上つた。それは侯が豫ねて文相の後任に推すべきことを主張した犬養毅氏を奏薦せんがためであつた。その時、侯は「この上は致方がない。私は首相の職權を以て、文相の後任を選び、それを陛下に申上げるばかりだ。」と云つて室外に出た。その時、桂公が侯の袖を捫えて「貴下はどうしても、參內して、奏薦の手續をなさるか。」と念を押した。「勿論のことである。」と侯は強く云ひ放つて直ぐに參內した。そして侯は犬養氏を奏薦に及んだ。陛下は直ぐに裁可あらせられて、二十七日に文相親任式が行はるゝことになつた。

後でその事を聞いた板垣伯は、親任式の定刻に先立つて參內して大隈侯の所爲を彈劾した。その際、伯は「若し犬養を文相に親任あらせらるゝならば、臣は松田、林の二人と共に、斷然辭職をいたすほかに道が御座いませぬ。」と奏陳した。けれども文相親任式は豫定のやうに行はれて、犬養氏が文相となつた。

かう云ふ風に事毎に進步派が勝つて、自由派が破れると、隱れて桂公と提携して破壞運動を企てつゝあつた星亨氏が表面に躍り出して、自由派を指揮した。彼れの破壞力は頗る猛烈であつた。彼れは自由派の人々のみを集めて、十月二十九日、憲政

黨大會を開かせ、先づ恣まに解黨を決議した。次ぎに改めて憲政黨を組織することを可決し、それらを迅速に警視廳へ屆け出た。その勢で星氏は更に芝山内の憲政黨本部を占領して、進歩派の出入を禁じた。この點は進歩派の人々が、油斷のために機先を制せられたわけであつた。そして進歩派は後に憲政本黨と云ふ新しい看板を掲げることにした。

事茲に至ると、大隈侯の内閣改造計畫も、實現の仕樣がなかつた。犬養氏が大隈内閣の内相たらんとしたことも、空しく立消えとならねばならなかつた。かうして憲政黨内閣は、内紛を以て始まり、内紛を以て、十一月の始めに倒れた。聞くところによると、進歩派では、改造内閣の可能を信じたらしく、その閣僚に擬した人々も略ぼ内定して居たさうである。恐らく、大命降下して、改造を聽許せらるゝならば、進歩派では、敏速に新内閣を作ることが出來るやうになつて居たのであらう。

かうした短命は、大隈侯も豫め期したかどうか。また憲政黨内閣を引受けた侯の心事はどうか。私は矢張、侯が伊藤公同樣國家のためと云ふことの上に大きい力點を置いて、結束の固くない憲政黨の弱味を自覺しながら、政黨内閣の新紀元を作るために躍進したことと考へる。そしても一つは、侯の豪邁不屈、天下を呑んでかゝる大きな氣宇によつて、最[illegible]物事の打算に重きを置かれぬところがあつた爲めでなかつたかと思ふ。かうした侯の氣象はその圍碁の上によく現はれて居た。

尾崎行雄氏の話によると「侯の性質を理解せんとするには、その碁を打つところを見ると、よくわかる。侯の碁は素人然としては、先づ一流の仲間に入るべきものである。一流の下であるか、上であるかは別問題として、兎に角一流に入るべき仲間で、侯は中の下ぐらゐである。侯の石を下すのを見ると、その初めに於て、大局の形勢を決すべき大切の場合に全局を呑んで居る。殆ど思慮を費さないで、どしどし石を下す。そのうち何處か一局部が非常に困難に陷るか、若しくは大局に敗勢が現はれると、初めて手を止めて考へ出す。その考へた結果は隨分面白い手を出して、どうか、かうか頽勢を或程度まで彌縫して左迄甚しき失敗をせずに難局を切拔ける。かう云ふ段に至つては先づ素人碁のうちでは大分えらい方ではあらうけれども、既に大勢に於て非なる状況が現はれて、後に初めて思慮を費すやうであるから、餘程巧みに切拔けても、根底から大勢の挽回は出來ない。若しあれだけの思慮と手腕とをその初めに當つて費したならば、大局の形勢を進めてゆく上に餘程の利益があらうと思ふけれども、何時碁を打つ時を見ても、最初は一向思慮を運らさず、[illegible]に於て初めて考慮を費す[illegible]があつて[illegible]侯の

多くの仕事が、さう云ふ形を持つて居るやうに思ふ。」と云つて居る。晩年は別としても、憲政黨內閣組織の頃には、侯の傾向にさうしたところがあつたらしい。

要するに、憲政黨內閣は、如何にも短命であつた。けれどもその存在は、無意義でなかつた。大隈侯は鋭意して、短日月の間に官制改革案を取纏めた。また松隈內閣の時代に突發したハワイの移民事件の後始末を能くして、日本の面目を保つた。その他政務官と事務官とを區別して、政務官には政黨出身の人材を用ゐて、その驥足を伸ばさせた。それに豫算の上で財源を地租增徵に求むることを避けて、他の方法に據つたとも、平生の主張と一致して居た。かうした仕事の上に於ても、大隈侯は最善を盡したのであつた。當時、星亨氏と破壞運動に熱中したものが、遙か後に至つてその事を後悔したのは、畢竟、憲政黨內閣の有意義に想到したからのことである。

(七)

憲政黨內閣の後には、第二次山縣內閣が成立した。この內閣は財政上、地租增徵案を通過させなければならぬ運命にあつた。山縣公は、それがために自由黨を操縦するについてその手段を擇ばなかつた。公は星亨氏らと接衝して、イギリスの宰相ワルポオル流に利を以て、自由黨を誘ふ上に成功した。横濱海岸埋立事件の醜聞が起つたのは、この時である。また公と星氏との間に三十萬圓の取引があつたと噂せられたのも矢張この時のことである。かうして公は星氏の鐵腕を通じて、自由黨を操り、巧みに下院に於て、地租增徵案を通過させた。そして自分の求る事だけを豫期通りに濟ますと、內閣を投げ出してしまつた。公は軍人出身であるだけに、その保守的なところ、進むべき時は全力を擧げて進み、退くべき時がくると、忽ち引きあげる具合が、イギリスのウエルリントン侯に能く似て居た。

山縣公のあとを引受けたのは伊藤公であつた。公は夙に政黨組織の必要を感じて、彼れの前に捧げられた自由黨一派のものを踏臺にして、政友會を作りあげた。そして三十三年十月、略ぼ彼れが希望した通りの政黨內閣を組織した。それを第四次伊藤內閣とも、政友會內閣とも云ふのである。その顏觸は伊藤首相の下に加藤高明(外相)末松謙澄(內相)渡邊國武(藏相)桂太郎(陸相)山本權兵衛(海相)金子堅太郎(法相)林有造(農相)松田正久(文相)星亨(遞相)らを網羅した。後に桂公が陸相をやめた時、兒玉源太郎伯が陸相となつた。また星氏が遞相をやめると、原敬氏がその後を繼いだ。西園寺公が臨時首相や臨時藏相となつたのはこの時のことである。

この内閣の短命な理由は、伊藤對山縣の爭ひが激烈を極めた爲めである。政黨好きの伊藤と政黨嫌ひの山縣とは素より政治的一致を見出すことが出來なかつた。山縣の眼には、政黨が不逞の徒の如く、謀反人の卵子の如く見えたのであるから、伊藤の政友會組織に對しては、素より大なる惡感を抱いた。それで山縣公は、官僚の徒を率ゐて、主としてその牙城を貴族院に置き必死の勢を以て、衆議院に牙城を置いて居る伊藤公に挑戰しようとするに至つた。それは保守と進歩との爭ひである、超然主義と政黨主義の戰ひである、非立憲主義と立憲主義の抗爭である。この點に於て山縣公は舊時代の代表者、伊藤公は新時代の代表者であつた。

山縣派の策士は、第一に星亨氏の醜聞を問題として、伊藤公に肉迫した。第二に增税反對を以て、また伊藤公を苦めようと力めた。星の問題は、星の辭職によつて解決せられたが、增税問題は、頗る困難を極めた。この增税は、山縣內閣の時に北清事件のために出兵した引續きから來て居ることとで、山縣派が反對し得べき筋のものではなかつた。ところが、さうした事件を顧みないで、猛然に反對した。それについて、伊藤公は非常に激憤して、三十四年二月、力を込めた演說をした。それに於て、公は今回の增税は全く從來のものと異つて、北清事件のため客年六月出兵を爲し、九ケ月を經て北京陷落となり、尙ほ數萬の軍隊を駐頓せしめて居る。この經費は何によつて支辨すべきであらうか。それは實に軍事上の費用で、何れの國を問はず、協同の軍隊を出したものは、皆既に增税を決したではないか。若しわが議會がこれを否決したりとせんか、他に何かその良法がなければなるまい。願くばそれを與り聞きたい。委員會に於ては增税によらなくても、賠償金の剩餘金あらうと云ひ或るは公債を賣却するが宜いと述べ、或は新なる公債を起すべきであるとの說があるが、一として實行し得べきことでない。ところが、北京軍隊の給養は、現在は云ふに及ばず、猶將來も支給しなければならぬ。かうした必要に對して、支出すべき道を求め得ないで、漫然としてこれを否決しようとするのは抑も何の心か。」と沈痛な語調を帶びて述べた。そして公は當時京都に居た山縣公に電文を發して、山縣が理由なくしてその門下をして增税に反對せしむるの非を難じた。

それから松方、西鄕、山縣の協議となり、元老會議となり、結局大詔煥發となつて、增税問題は、通過することになつた。が伊藤公は最早、その前途を新たに開展してゆく自信も、成算もなかつた。彼れは全く行き詰つた。これに[illegible]な政黨の立て方をして、官僚の間に擴く一黨を作るやうなことが

あつたので、公は三十四年五月、内閣不統一の責を荷うて辭意を決した。そして元老會議の開催となつて、公は一時、内閣改造の計畫を立てゝ見たが、井上侯の同意を得なかつたので、これも亦行詰つた。かうして彼れの内閣は七ケ月で倒れた。

この内閣の短命については、いろいろの事が考へられる。山縣派の勝利、伊藤派の敗北と云ふことについては、早計な斷定を下してそれを保守主義、超然主義の勝利と妄斷することが出來ぬが、時代の傾向が著しく現實的になつて、それが伊藤公の理想本位政治と一致しない趣を見せたことである。時代は意義ある敗北よりも意義なき成功を喜び、明日主義、未來主義よりも、今日主義、眼前主義に傾き、理想よりもタクチツクを重んずるものを多く生じた。伊藤公の理想的傾向は政治上に於て當面の處置に成功せしめないやうになつた。タクチツクを排して、理想を追ふた公は、現實の前に敗れなければならなかつた。要するに時代の新傾向は、伊藤、山縣、松方以外の新しいタイプの首相を求めた。この要求に一致したのは、桂、西園寺の兩人であつた。桂、西園寺らの上には、確かに新しい時代の光と影とを見ることが出來た。政界の傾向は彼等と共に一廻轉をした。

（八）

桂公が政友會内閣の後を受けて、第一次の内閣を組織した時、緞帳芝居の嘲笑を浴びせられたに關らず、困難を切拔け、第二次、第三次の内閣をも組織し得たのは、兎も角も一つの成功にちがひなかつた。それは、彼れの政治上に於ける現實主義が時代の現實的傾向と一致して、彼れを順潮へ導いたからである。

桂公は、伊藤公のやうに詩を愛せず、また理想を語らなかつた。公はまた大隈侯のやうに開放的によく談じ、よく論ずるともしなかつた。概して公には、ロマンチツクなところがなかつた。英雄らしいところ、豪傑らしい點もなかつた。一言すれば、大なる凡俗であつた。その代りに公は「現實」をしつかり握つて居た、物事を打算して見ることに長じて居た。そこから公獨自のタクチツクを生んで、茲に妥協政治の幕を開いた。妥協は現實上の打算とタクチツクとから生れる。桂公はそれによつて幾度も政治上の難關を通り越すことが出來た。かうした新傾向は、桂公の時代に主として始められたのである。そしてそれは、時代の現實主義とぴたりと合致したものであつた。但しそれが宜いか、わるいかは自ら別問題であらねばならぬ。

第一次桂内閣の成功は、外相に小村、藏相に曾禰と云ふやうな人物を網羅したことや日露戰爭のために擧國一致を要したことや桂公自身の智能、努力、手腕に負ふところなどがあつたによるであらう。けれども最も成功を助けたのは、公一流の妥協政略であつた。最初、公は伊隈聯合の鋒先を巧みに避けて伊藤公と妥協した、次ぎに公は西園寺公と妥協して、その内閣の後繼者に奏薦した。そして第二次桂内閣を組織し得たのも亦西園寺公と妥協した爲めであつた。妥協と云ふことにかけて、桂公は非凡の手腕を持つた。所謂「にこぽん」主義の始祖たる所以もそこにあつた。が、公の第三次の内閣に至つては、妥協政略も役に立たなかつた。憲政擁護の大運動のために一溜りもなく倒れて、僅かに三ケ月の壽命に終つた。それは公が政治的野心にのみ驅られて、宮中、府中の別を亂し、非立憲的に内閣を組織した當然の應報にほかならなかた。

元來、桂公は、明治天皇崩御の後、今上陛下に仕へて、内大臣兼侍從長の重職に任ぜられたのであるから、常侍補弼の大任を全うするために、潔く政界に望みを絶たねばならなかつた。ところが、公がその職にあること、僅かに四ケ月ばかりで、宮中を出て、三度目の内閣を組織したのは、一體如何なる心事に依るのか。更に公が内閣組織に臨んで優詔を奏請し、海相留任のことについても亦詔勅を請ひ奉つたのは畏くも、陛下を責任の的となしまゐらせた點に於て公自ら罪がないと感じたのであらうか。時人が、桂公を以て巧智、陰險の人と見做したのは、實にその理がないとは云へない。公は餘りに野心に驅られ過ぎて、その進退を誤つた。また餘りに智術を弄び過ぎて、世上の反感を挑撥した。それがために、憲政擁護の大運動が勃然として起つたのである。

當時、桂公の行動について、『新日本』の人物評論記者が「その西園寺を倒すに陸軍を煽動し、首相その人を苛むるに山縣公を利用したるが如き、將た公が遂にも屢々行ひし慣用手段として多く驚くに足らず。その内閣顚覆の後に於て、或は心にもなき松方侯に交渉し、或は迚も見込なき山本伯に諮り、その他平田子の奮發、西園寺侯の再起等、到底物にたらざる邊を持ち廻して、天下の耳目を僞り、最後に止むを得ずして現はれたるの形式を偷むに至りては、その陰險さ狡猾さ唾棄せざらんとするも得ざるなり。」と云つたのは、どの點までが、眞の事實か分明らぬが、世上に於ては、多くさう思つたものがあつた。蓋し桂公の巧智の禍である。

第三次桂内閣は、かうして始めから不人氣であつたのみならず、組閣に當つて、海相問題に行惱みを生じて、既にその[illegible]

輕重を問はれた。それは優詔によつて、齋藤海相の留任となつたが、何れにもせよ、海軍部内には反桂内閣の傾向が明かにあつた。そして一月二十一日、桂内閣の親任式が行はれた。それは桂首相の下に大浦(内相)若槻(藏相)木越(陸相)松室(法相)柴田(文相)仲小路(農相)後藤(遞相)齋藤(海相)と云ふ顏觸で、外相にはイギリスから歸朝した加藤高明子を迎へた。

天下の人心は、桂公の態度について頗る不滿であつた。忽ち宮中に入つて忽ち宮中を出たこと、再度詔勅を奏請した事、元老と苟合して政局を壟斷した事などは、天下を擧げて非難した點であつた。それで眞先に憲政擁護會が起つて、閥族政治の根絶を叫び、續いて大正二年一月十七日、築地精養軒に開かれた全國新聞同志記者大會は、憲政擁護のことを盟つて桂内閣の非立憲、專恣を難じた。それに政友、國民の兩黨も亦步調を揃へて、政府に肉迫したので、人心は悉くこの運動に共鳴した。桂内閣呪咀の聲は到所に起つた。

それで第三十議會が大正二年一月二十一日に開かれると、早くも政府と在野政黨との衝突が起つた。桂公は休會の期限について下院と爭つて、十五日間の停會をした。そして二月五日、停會の期間が滿ちて、議會が開かれると、政友會の元田肇氏が二百十二名の贊成を得て、桂公に彈劾の意を含んだ質問の矢を烈しく放つた。次ぎに尾崎行雄氏は二百三十四名の贊成を得て内閣彈劾の決議案を桂公に突き付けた。その文辭は左の如く頗る峻烈嚴正を極めて居た。

内閣總理大臣公爵桂太郎は大命を拜するに當り、屢々聖勅を煩し、宮中、府中の別を紊り、官權を私して黨與を簇り、又帝國議會の開會に際し、濫に停會を行ひ、又大正二年一月二十一日、本院に提出したる質問に對し、至誠其責を重ずるの意を昭にせず。是皆立憲の大義に背き、累を大政の進路に及ぼすものにして、上 皇室の尊嚴を保ち、下國民の福利を進むる所以に非ず。本院は此の如き内閣を信認するを得ず。仍て茲に之を決議す。

かうして尾崎氏はその鋭い辯舌を揮つて、縱横に桂内閣を痛罵した。次ぎに新政黨の島田三郎氏が決議案反對の演説をしようとする時、議會は再び停會となつた。蓋し桂公は當時、議會解散の決意を抱いて、その理由書を懐ろにして居たのであるが、廟議の變更によつて解散を斷行せずに終つたのである。

が、解散するにもせよ、しないにもせよ、その内閣の存在は長きを許されなかつた。當時桂公は時局收拾のために、先づ山縣公に縋り付いたが、山縣は巧みにその手を振拂つた。それで

更に西園寺公に會見して、得意の「にこぽん」主義によつて、一條の活路を切り開かうとした。西園寺も亦最初會見を欲しなかつたが、桂の懇望によつて、到頭會見するに至つた。

（九）

桂、西園寺の會見について、特に注意すべきことが一つあつた。それは、イギリスから歸朝した加藤高明子が西園寺、桂の間に起つて斡旋に力めたこと及び桂と西園寺の二人が他人を交へないで話し合つたことである。當時の形勢は最早決裂に近くて、妥協も何もその餘地を存して居なかつた。平たく云へば、何をしても手遅れの有様であつた。ところが、加藤子は、歸朝匆々のことで、政界の疾風急雨を多少輕く見て斡旋の餘地があると考へた。ついては、イギリスの先帝崩御の時、新帝ジョオジ五世陛下が、朝野政界の首領を招いて圓卓會議を開き、意見を交換せしめられた例に倣つて、桂、西園寺兩公の圓卓會議を實現しようとした。加藤子がこの旨を桂公に諮ると、公はその策を採用した。それで加藤子は西園寺公を訪問して桂公が至急會見を希望する意を傳へた。ところが、西園寺公は單獨で會見することを避けて、成るべく、原敬、松田正久氏らを伴うて會見すべきとを以てした。が、桂公から「是非他人を交へぬことにいたしたい。」と切望したので、首相官邸で政界の二首領が膝をつき合せて談合するに至つた。

この會見は、最初から桂公の豫期通りにゆかぬであらうことは分明りきつて居た。西園寺公が政友會の熾烈な憲政擁護運動を默認して居るだけでも、その意向を察するに難くなかつた。桂公は西園寺公を口說き落せるだけ口說き落して見ようと試みたのである。けれども西園寺公には別に見るところ、信ずるところがあるので、義理一遍の談話をした丈に留つて居た。それでも桂公は頻りに西園寺公に議會に於ける不信認案撤回についての盡力を依賴した。ところが、西園寺公は「どうもさう申しては濟まぬが、私の一存で直ぐに二百何十名の黨員が自由自在に動くと云ふわけに行かぬ。が私も成るべく無用の紛爭を避けたいから、適當の道が開けたら、何んとかいたさう。」と云ふ意味を述べた。それを桂公は獨自の解釋を下して、西園寺公に依つて若し勅命が降つたら、公も和協について盡力を惜まないであらうと云ふ意味に取つた。西園寺の意志がそこにあつたかどうか不明である。要するにそれは桂の主觀的解釋であつたのだ。

それで桂公は二月九日朝、日曜であつたに關らず、參內して御前に伺候し、時局の紛糾について西園寺に御下問を賜るやう奏請した。恰度、その日、西園寺公は加藤子を引見して不信認

案撤回についての困難な事情を告げたのであつた。時に加藤子は推し返して「昨日桂公との會談中に於けるやうに、陛下から勅命を賜つて、國家の重臣としての卿一個の資格で和協に力を致せと仰せ出されたら、どうなさるか。」と問ふた。「さあそのことについては今何とも云ひたくない。」と後をぼかした。かうしたところへ、陛下の召命によつて、西園寺公は御前に出た。その時、和協について力を盡くすべきことを命ぜられたのである公は「陛下御聖旨のあるところは誠に拜察に餘りあることで御座います　謹んで拜受いたします。」と奉答して御前を下つた。そして偶然宮内大臣の官房で桂公と逢ふと「陛下の御心配の御趣旨は拜察に餘りある。」と云つて、和協のことについては、出來るだけの力を盡すべきことを桂公に告げた。

ところが政友會の形勢は桂内閣に向つて依然險惡であつた。西園寺公が宮中から歸つて九日夜、自邸に松田、原、元田、尾崎諸氏及び國民黨の首領犬養毅氏を招いて聖諭を賜つたことを告げ、不信認案撤回のことを依頼した時、犬養氏は眞先に反對した。その理由は「西園寺は西園寺で、政友會は政友會である。それは別々だ。從つて西園寺公はひとり聖諭を遵奉して、不信認案の撤回に力められるが宜しい。政友會は所信を一貫して、憲政擁護のために眞直に突進すべきである。兩者各その志すところを爲すに於て、何の不可があらう。」と云ふのであつた。來會者のうちには、犬養氏說に反對して、飽迄聖諭を遵奉してゆかうと主張したものもあつた。が、いろいろ議論の末、矢張、犬養氏の說に一致することになつた。當時、尾崎氏は犬養說を强硬に支持した一人であつた。そして尙ほ一應、この事について講究することになつて居た。

西園寺公は、引續いて聖諭遵奉のことに力めた。政友會幹部中にも、公の心事に同情して、公を違勅の人たらしめるに忍びないと云ふので、十日朝、代議士會を開いた。席上、幹部は、西園寺の意を體して、聖諭遵奉のことを說いたが、多數の代議士は反桂内閣の意氣に熱して、どうも幹部の意向が徹しなかつた。結局、依然として强硬の態度で、不信認案上議を以て政府を攻擊することに決した。國民黨も亦矢張、同一態度を執ることに定つた。

事茲に至ると、桂公の志は悉く空しくなつた。すべてが豫期から外れた。公は政友會の情報を略ぼ知つて、愈よ解散か、辭職かを選ばねばならぬ破目に陷つた。そして斷乎として公は辭職の決意をした。それは未だしも國家に取つて、都合が宜かつた。若し公が解散を斷行したら、國民の公憤は、まだどの位、大きくなつたか知れないのである。それでなくてさへ、十日には、「

數萬の民衆が昂奮の體で議會を包圍し、民衆と警官との間に大衝突を生じ、その餘勢は、警察署や交番燒打となり、或は桂派に身方した新聞社への襲撃となつたのである。たとひ、桂公に相當の云分があるとしても、この大きい騷擾を醸した責任の大半は、自ら荷はねばならぬ。要するに、第三次桂内閣の短命は、桂公自らが招いた應報であつた。當時、山本權兵衞伯がを桂を訪うて、聲色烈しく「世間では君が新帝を挾んで、威福を恣まにして居ると非難して居るよ。君は宜しく高踏勇退しなくてはいけない。」と辭職を勸告したなども、桂公が山本伯にまで、よく思はれて居なかつたとを示して居る。

桂公のやうに聰明で多智で、タクチツクに長じ、時代に適合してゆける政治家でさへ、非立憲的の行動を執ると、國民は斷じてそれを看過しない。それに桂公にくらべて、遙かに及ばない政界の老人連が、時代錯誤の違憲的行爲に出たとすると、第三次桂内閣以上に國民の指彈を受けて、非立憲内閣は一溜りもなく倒れるであらう。清浦内閣の人々は、自ら何と考へて居るであらうか。時代は正に切迫して居る大きく眼を睜いて時勢の急潮を見よ!



貴族氣質の研究

日本の貴族の春雨心理

白柳秀湖

「一」ロンドン名物の騎兵

ロンドンのホワイト・ホールといへば、ちやうど東京の大手町と云つたやうな所であるが、その大通りをウエストミンスターの大寺院に向つて進むと右側に近衛騎兵の營舍がある。古い營舍のアーチを挾んで、左右に哨兵の屯所が設けられ、その前に一人づゝ馬首を往來に向けた近衛騎兵が立つて居る。白い總のついたヘルメット帽に赤色の制服、白のズボンに黑革の臑當を穿き、眞白な籠手を著けた手に長い劍を捧げたまゝ直立不動の姿勢で、ビクとも動かない。宛然騎兵の人形が立つて居るやうだ。馬もよくならしたものであるが、それよりも人のならし方がえらい。此騎兵のことをロンドンで"Most stared-at men in England"といつて居るが、イギリスは愚か、世界中尋ねても、これほど辛抱をして前方を凝視て居る人はあるまい。近頃日本の軍隊のことを彼是と批評する人もあるが、ロンドンの近衛騎兵にくらべて見ると、東京の要所々々に立哨して居る兵隊さんなどは氣樂なものである。

さて此馬をならすことと云ひ、馬と同じに人をならすことといひ、イギリスの貴族の奉公人を躾ける仕方のどれほど嚴しいものであるかをよく物語つて居る。イギリスは氣候も大體日本によく似て居る。面積も大抵同じである。海岸線の長いこと、殊に細長い河口灣の多いこと、これはイギリスの特長で、日本は遠く及ばぬが、それでも日本は面積に比して海岸線の短い方ではない。モウ一つ、大陸に對する島國としての地位も日本が

イギリスによく似て居る。但だイギリスは大陸から幾度か強い民族の侵入をうけ、その征服する所となつた。日本も常に大陸文化の影響はうけて居たが、イギリスのやうに幾度も強い民族の征服する所となり、國を擧げて奴隷の境遇に陷るといふやうな憂目を見たことはない。イギリスでは貴族が平民と共に恐ろしい苦勞をして來て居る。奉公人だからと云つて無暗に蹈んだり、蹴たりするやうなことはせぬ。ヂツと辛抱して怒を殺しては居るが、さてそれなら奉公人にやさしい口の一つもきくのかといへば、腹の底は恐ろしく冷めたいもので、奉公人などテンデ人間として取扱つて居ぬ。奉公人は生きた機械位に心得て、用事はさせるが、用事をさせる以外に世間話をするの、朝夕の挨拶を受けるのといふことはない。日本の貴族はナカ／＼色氣が多く、奉公人からは情深い御主人と賞められたく、世間からは平民的な殿様と立てられたく、茶屋や宿屋の女中からはよく氣のつく御前として敬はれたい。此野心を滿たす爲には自働車を丸花の前に止めて見たり、文士や役者の集まりに顏を出して見たり、骨の折れること一通りでないが、イギリスの貴族となるとそんな下らぬ氣苦勞はせぬ。貴族は貴族で、平民どもとはテンデ人間の種が異ふものと信じ、誰が何と云つても平民どもは對手にせぬ。其處で一旦平民どもの力が強くなりいよ／＼勝利あらずとなれば、妥協の餘地がなく、サラリと投出して退却しなければならぬことは初めからよく分つて居る。其點で奉公人の躾け方は平常から極端に嚴しい。迚も日本のやうなものでない。ホワイトホールの大通りに立つて居る騎兵の姿勢といふものは、やがてイギリス全體の奉公人の姿勢である。日本の貴族が何うの、日本の資本家が何うのといふけれども、イギリスの貴族の奉公人を躾ける仕方から見るとまだ／＼手緩いものである。

『二』辛抱强いイギリス人

ロンドンに行つてもろ／＼の社會層から多數の人の貧乏といふことを思ふと、イギリス人がよく此ドン詰りまで辛抱して來たものであるといふ感に打たれる。過剩の婦人の街頭に溢れて居ること、其婦人の大部分が獨身であること、さうして獨身婦人の多くが晝の職業と共に、夜の職業を持つて居ることなど思ふと、此ドン詰りまで、ヂツト辛抱して來たイギリス人の行儀のよさに驚かさるを得ない。若し資本主義社會の行詰つた國がありとすれば、イギリスはまさにその最も甚しきものの一つである。若し革命が現行社會組織の行詰つた所に起るものでありとすれば、イギリスは革命の可能性の最も多い國である。然るにイギリス人は昔から代々の貴族に嚴しい躾けをうけて來た。

ちやうどホワイトホールの大通りに立つて居る騎兵が貧乏揺ぎの一つもしないやうに、チツとこらへて最後まで作法を守るとを教へられて來た。

ロンドンに行つてロード達の定宿となつて居る一流のホテルに泊り、第一にさみしく感ずることはすべての奉公人が客に對して用事の外は一切無駄口をきかぬやうに躾けられて居ることである。日本の殿樣が旅に出て宿屋の女中に戯言をいひ、粋な殿樣、氣輕な御前で人氣を取り、飛んだ罪を作つてかへるのとは大分に譯が違ふ。主人は征服者である。奉公人は被征服者である。主人と奉公人との間に隔ての墻の取除かれる時は革命である。戰爭である。それまでは奉公人も分を守つて主人の領域へは一步も踏込まぬ。同時に主人も奉公人に對しては戯言一つ云はぬ。戯言は愚か、人間としての受答へもせぬ。

主人と奉公人との關係が斯くある時、奉公人は被征服者として、いつまでも夕日の野邊に默禱する羊の如く、たゞ頭垂れてのみあるべきか。諦めようとして諦めがつかず、辛抱しようとして辛抱のしきれなくなつた時に何とかして其境遇を轉換しようとする。其處に奉公人の進步があり、向上がある。貴族が思切つて貴族らしくし、平民を人間扱ひしてくれぬのは、平民の者には何ほどかよい亢奮劑である。

日本にも大昔から氏族に大小の別があり、人民にも良賤の差があて、血統上の尊卑は儼乎として存在した。何によつて血統上の尊卑が分れたかといふに、いふまでもなく戰爭の結果である。詳しくいへば同種異族間の存立競爭である。併しその戰爭は何時何處で戰はれたか、それは明かでない。日本民族が此聯島に徙遷して歷史の幕を開いた時には、既に血統の尊卑を秩序とする一つの國家が成立して居つた。さうしてその血族國家は此聯島に徙遷して後、一の競爭に値する先住民族に遭遇することなく、又、此聯島の主人公となつて後も大陸から侵入する優秀な民族の爲に、血統上の秩序を亂されることなくして今日に及んだ。此點がイギリスとは全然違つて居る。貴族の氣質も其處に相違がある。

『三』 血統上の貴族と經濟上の貴族

一概に貴族といふ中に公家と武家とがあり、時代の變遷につれて地位、境遇を異にし、從つてその氣質も一樣でない。大化新制以前は公家と武家との間に區別がなく、平群、大伴、物部、蘇我など後世の公家といふには荒つぽく、その皇室に直屬した關係に於て、所謂大小名とは六分趣きを異にした。尤も蘇我氏は皇室の大藏を管理し、多年出納の事に掌つて居たので、

武事には縁が遠いやうであるが、其領土の廣大であつたこと、謀奴の數の多かつたことなど思ふと、決して後世の所謂貴公家ではなかつた。之を要するに大化新制以前の貴族は公家の資格と武家の實力とを兼ね備へたものであつた。

此貴族から領土を沒收し、人民を解放させようとした大化新制は、頗る不徹底のもので、改革の畫策者であつた藤原鎌足の子孫が、蘇我、物部以上の大地主となり、禁闕守護の武人を爪牙として驕情のかぎりをつくしたなどは何といふ皮肉であるか。それにしても藤原氏はその莊園を擴長することと、皇室との姻戚關係を固めることとに全力を傾注し、兵權を確實にその手裡に掌握することを忘れたために、後三條天皇の親政から俄にその勢力を失墜し、保元、平治の變亂に乘じて、平氏が擡頭した。

平清盛となつては、兵力は御手のものであり、それに加へて莊園も擴張するし、藤原氏の故智を學んで外戚の權を固めることにも拔目がなかつたのであるから、此上手の家からは承ち返るまいと思はれた。處が清盛の唯一つ忘れたことがある。それは、一門一家の榮達を計ることにのみ急で、諸大名の爲に其利害を考へてやることを忘れた。さうしてその政策が、常に一門の根據地（莊園の所在地）である西國に偏し、東國を忘れる觀があつた。果然、叛亂が東國から起つた。

源賴朝の政治の新しい點は從來の貴族の獨族であつた血統といふものに對する野心を全然拋棄して顧みなかつたことである。藤原氏にしても、平氏にしても、領土慾の旺盛なことは人後に瞠れず、而もその一門一家の血を尊いものにするといふことにはそれ以上に熱心であつた。彼等の野心は畢竟するに一門一家の榮達で、莊園の擴張は寧ろその手段に過ぎなかつた。

然るに源賴朝は、藤原氏や、平氏が自家の血統上の地位を高める爲にした中宮政策といつたやうなものを全く眼中に置かなかつた。それぱかりではない。彼は鎌倉幕府の憲法である全國の諸大名はすべて賴朝の家人であり、賴朝を通じて朝廷の命を聽くべきであるといふ一條を立てる爲には、義經を殺し、範賴を殺し、自家の血統の絕えなんとするのをさへ意に介したかつた。賴朝の政治は全然諸大名が本位であつた。諸大名の限りなき領土慾を如何にして制すべきか、同時に諸大名の限りなき領土慾を如何にして滿足せしむべきか、之が賴朝の政治の大眼目であつた。彼は之が爲に幕府を東國の邊鄙に置いた。彼は之が爲に一生武家の總頭梁、征夷大將軍で滿足した。

賴朝の時から初めて公家と武家とが二つに分れた。昔は血統上の誇りと併せて、政治上の實力を握つて居た公家が、全く政

標から離れて血統上の貴族としてのみ殘されることとなつた。さうして一方には源氏の家人たることを唯一無上の光榮とする經濟上の新貴族が現はれた。此新貴族、即ち全國の諸大名に取つては、有らゆる姓、有らゆる氏の中で『源』の姓が最も難有いものに見えた。建武中興の時でも、全國の諸大名が『御家人』の稱號を失つて、凡民の列に加はつたといふことが大問題となつて居る。足利尊氏は『源氏の嫡流』といふので、全國の諸大名が吸付けられるやうに此人の下に集まつた。戰國となつて諸大名の領土慾が極度に達し『下剋上』即ち個人主義の風潮が一世を風靡するやうになつた時でも、室町將軍の命令といへば尙ほ多大の權威があつた。諸大名の中で天下に志のあるものが、一刻も早く上洛をしようとして努めたのは、京都に入つて天子を擁する爲ではなく、將軍を挾む爲であつた。

「四」金に汚い公家華族

斯くなつては京都の公家が最後の誇りとして抱いた家門の系圖も役には立たず、されぱと云つて系圖の洗立てをし、古い秩序に對する國民の記憶を呼戻さうとすれば武家の眼が光るといふので、先づは乾からびた故事有職の切賣をしたり、型のやうな歌や文章を小手先の技術として露命をつなぐより外に途はなかつた。併し、貧乏は何人もすべきものだ。公家は此貧乏の辛さから誰よりも早く金といふものの難有味を知つて居た。金は可なり古くから鑄造され一部に通用はして居たが、一般に流通するやうになつたのは近世のことである。土地に離れた公家達は、金によるより外に途はなかつた。金による爲には、その門地に關するすべての誇りを捨てて、町人に接近しなければならなかつた。かくして公家は早くから下情に通じて居た。さうして世の中の移り變りにも可成り敏感であつた。

慶應三年十二月九日小御所會議の時、土佐侯山内豐信は、其慶喜に勸めて大政を奉還させた立場から、岩倉具視に肉薄して彼等が昨日來禁闕の守護に德川氏及び會津の兵を擯斥したこと、及び當日の會議に慶喜を除外したこととの不公平を難じ大にその不信を論詰した。其時岩倉具視は徐に答へて、幕府の罪を論じ、慶喜にして若し眞に其罪を悔ゆるの意あらば、當に官位を辭し、土地、人民をあげて之を朝廷に奉還すべきである。今彼大政を奉還したりといふも、そは虛名にして政治の實力は尙ほ依然彼の手中に在る。其心術は未だ遽に信ずべきものでないと主張して列席の藩主を驚かした。

西鄕隆盛は人物として偉大であつたには相違ないが、明治維新の根本精神といふものが何處まで分つて居たか。藩主の上に

坐するに忍びずとして朝廷の賞典を辭したなど、心情は稱すべきも、理として如何なものであるか。明治十年兵を率ゐて、鹿兒島を進發する時でも、大山縣令がその不穩を諫告したのに對し、我は陸軍大將である。假令全國の兵を率ゆるとも、それは陛下の特に許し給へる所であると答へた如き、此人の知的方面は甚だ疑はしい。西鄕擧兵の時東京に居た岩倉は京都、なる三條、木戶、大久保の三人に宛てて長文の電報を發し、征討に關する意見を述べた。其中に『今や天下の大勢を以て論ずれば、我には金力あり、兵力あり、之に加ふるに大義名分といへる利器あり、毫釐も顧慮する所なし』といふ一節がある。金力を第一とし、兵力を第二とし、大義名分を利器として取扱つて居る所に此公家の面目が躍如として居る。

かくて岩倉は金力といふものを餘りに重視し過ぎた結果、一面に幾分きたないと思はれるやうな所もあつた。併し之は岩倉ばかりではない、公家の一般の傾向である。慶應四年三月淺草の藏宿靑地四郎左衞門が江戶燒打の噂に驚いて、本鄕の加賀邸に預けた樽詰の黃金を、其後前田家では飽くまでも知らずと云ひ張り、當時市中で專らの噂であつたのを岩倉が耳にして、宮中で加賀侯の油を絞り、その幾樽かを自分の邸に運ばせたといふのは虛か實か。何れにしても幕末以來の人傑と稱せられる此公家にも黃金のことに關しては暗い半面があつたらしい。維新の初め西園寺公に對して諄々と黃金の力を說き、將來は一にも二にも金の世の中である。金がなくては何も出來ぬ。今の中に濱町の土佐屋敷を買つて置くがいゝ、五百圓ばかりで手に入るやうにしてやると勸めたのも此人であつた。その濱町の土佐屋敷は今から二十年ほど前に三十幾萬圓で賣れたさうである。

『五』政黨といふ人民貴族

日本ではかくして血統上の最高貴族が、長い間政治に無關係でやつて來た。さうして賴朝の時からハッキリと分離した經濟上の新貴族、卽ち諸大名が直接人民に接觸して來た。併し此諸大名もイギリスの貴族などと違ひ、人民を警戒するといふ必要は全くなく、たゞ同族間に新しい競爭者の起ることを警戒すればそれでよかつた。前にも述べた通り、イギリスで貴族といへば必ず征服者であり、人民といへば必ず被征服者であり、その關係がマザ〳〵と歷史の上に殘つて居るので、貴族の人民に對する躾けといふものは却々容易なものでない。ケルト人に對するアングロ・サンクソン人、アングロ・サンクソン人に對するノルマン人、それがいろ〳〵な政治問題、社會問題となつて今日に殘つて居る、日本には幸か不幸かさういふものはない。貴族

は歴史以前からの貴族である。人民は歴史以前からの人民である。さうして嚴密な意味でいふ人民は今日まで未だ一度も歴史の舞臺に現はれなかつた。古い貴族（公家）も、新しい貴族（大名）も、人民を飢えしめず又足らしめざる程度の境遇に安んじさせることの手心はよく知つて居た。思切つた殘虐もせぬ。人民は自分の寶である。財産である。極度の壓制をして人民を苦しめるのは、我と我財産を破毀するやうなものである。それかと云つて人民にカツ〳〵生きて行く以上のものを與へるのは尚ほ惡い。虐政もせぬ。同時に滿腹もさせぬ。之が日本の貴族の人民を躾ける仕方であつた。

併し、此貴族も、同族間の新しい勢力に對しては流石に警戒を怠らなかつた。殊に一旦打破られた者が、身を以て逃れ、再擧を企てることが可能であつた時代には、其の追窮が最も嚴酷苛酷を極めた。蘇我氏が物部氏を滅ぼした時でも、又同じ蘇我氏が聖徳太子の遺族を滅ぼした時でも其方法は慘酷を極めた。その代り蘇我氏も滅ぼされる時には根ほり葉ほりやられてしまつた。保元平治の兵亂でも、源平二氏の戰爭でも、負けた方は根こそぎやられた。一人でも殘して置くとそれが重代の家の子、郎等を驅り集め、險阻に立籠つて再擧を企てる恐れがある。昔は百騎、二百騎で立派に中央の勢力に反抗することが出來たのであるから敵の餘類は根こそぎ滅ぼしてしまふ必要があつた。

處が近世に入つて武器が進み、兵法が變り、五十人や百人の部下を集めても、それでは何うすることも出來なくなつた。其處で負けた方の餘類を追窮する方法が源平時代にくらべて大きに緩やかになつた。寺にでも逃入つて坊主になるとか、民間に下つて土百姓の仲間入りをするとかすれば、それまで尋ね出して殺さうとはせぬ。處が當時は資本主義の今日と違ひ、まだ〳〵血統の關係が重んぜられて居た爲に、之等の落人は木こり、山かつの群に入つても、ヤハリ土民から尊敬を受け、時の經過するにつれて或は鄕士となり、或は名主となり、町に出たものは大きい商人となつて茲に日本の中産階級といふものが生れた。イギリスの中産階級は一旦ノルマン人の爲に征服されて奴隷の境遇に陷つたアングロ・サクソンの都市生活から生れ、或時は貴族を利用して國會に地歩を占め、或時は國王を利用してフランスと大陸の商權を爭ひ、或時は宗教改革の後押をして、スペインの海上權を覆へし、或時は清教徒の兵糧方に立廻つて國王の專濫を懲らし、遂にノルマンの貴族から自由を恢復し、イギリスを商工主義の基礎の上に置くことに成功したのであるが、日本の中産階級は、同族も同階、同じ武士の階級から起つた。此點は日本とイギリスと全く其の事情を異にして居る。

「六」身分と官職との區別

かく日本とイギリスと中産階級の素質に相異はあるが、イギリスの名譽革命も、日本の明治維新も、中産階級の仕事であることに變りはない。イギリスの中産階級が初め舞臺の正面に立たず、或時は貴族僧侶を利用し、或時は國王を利用し、又或時は新教徒を利用して一歩一歩其自由を恢宏したやうに、日本の中産階級も初めから正面の舞臺には立たず、或は薩長の兵糧方となり、或は勤王黨の後押となり、鎖國主義の幕府を倒して商工主義の日本を建設するまでは、寧ろその當面の敵であるべき大名の力や、公家の門地を利用したのであるが、明治十年の戰役を一期として封建制度の破壊が完了し、新制度の基礎が成つたと見るや、忽其黒頭巾をかなぐり捨て、自ら之に取つて代らうとするに至つた。全國各地に於ける郷士、豪農の勢力を代表する自由黨、三菱のやうな富豪の財力を代表する改進黨の運動がそれである。此時から曾ては中産階級の爪牙であり、幕府を倒すに與つて力のあつた封建貴族の一派が『藩閥』と罵られるやうになつた。

維新の初め公家と大名とを華族に列し、之に維新の功勞者を加へて爵位を授け、秩祿を定めた。今日貴族といへば先づ此華族のことである。併し根を洗つて見れば、政黨といふものも嚴密な意味でいふ平民ではない。平民の階級から見ればヤハリ一種の貴族である。公家を門地の貴族とし、大名を土地の貴族とすれば、政黨は金の貴族である。政黨と稱する金の貴族によつて貴族の特權を奪ひ、平民の地歩を進めようとすることは初めから間違つて居る。

貴族が身分の故を以て政治上に特殊の地位を占めるのは世界最惡の制度である。若し此制度を改革するものがなければ國の進歩は止まる。其處で貴族の中に偉大な人物が現はれるか、人民の權利が伸張するかすれば、必ず此制度を打破して、國運の進展を圖る。古來、東西を通じて行はれた幾多の大改革は、要するに身分と官職とを區別することが其大眼目であつた。日本では大化の新制がそれであつた。各貴族の血統上の地位と、官職上の地位とを區別し、何んでも身分に關係なく國家の要職に就くことが出來るやうにした。之が大化新制の大眼目である。尤も之は各貴族の私有財産である奴隷や一般人民の上には及ぼされなかつた。若し之が奴隷や、一般人民にまで及ぼされたとしたら、それこそ正眞正銘、人民の解放である。處が之は貴族の階級に限つて行はれた。併しそれだけでも當時としては思切つた改革であつたに相違ない。從來は身分と官職とは必ず一致し

なければならなかつた。身分即ち血統の少しでも高いものは、必ず官職も上でなければならなかつた。處が大化新制により、苟も奴隷でなく、一般人民でない限り身分は高くても、低くてもその人の才智力量によつて如何なる重要の職にも就くことが出來るやうになつた。

『七』明治維新の大精神

大化新制は土地の公有制度にも、地方官の任命にも、有らゆる點に舊來の制度と妥協點を殘して居たに拘らず、此一點に於いて貴族の心理を捕促すべき何ものをも殘さなかつた。是までは官職が直に身分の表徴であつた。處が大化新制によつて官職は必ずしも身分を表徴しなくなつた。身分の誇り、家門の榮は何によつて之を他に示すべきか。

天智天皇が崩御になると貴族どもの鬱積した不平は爆發して壬申の大亂となつた。大海人皇子は大化新制に不平の貴族どもから推されて弘文天皇を瀬田に破り、飛鳥の淨見原に即位されたが、其天武天皇として實施された政策の跡を見ると、大化新制の根本精神には一指も觸れて居ない。天智天皇の遺業を殆ど其まゝに繼承して、郡縣制度の基礎を鞏固にすべき法令を完成し、大化新制の一大弱點であつた朝廷の兵備を充實することに努めて居る。たゞ天皇は貴族の名譽心を滿足させる爲に八色の姓といふものを立てゝ居る。之は今日の爵位に似たもので、多くの貴族の血統を八階級に分けて其身分を表徴し、併せて壬申戰役の功を賞したものである。明治政府が支那の古制を參酌して五爵の制を定め、併せて維新の賞典を行つたのと同じ筆法である。天武天皇はかくして貴族の心を喜ばせたけれども、彼等に土地を賞賜することは絶對にしなかつた。而も多くの貴族どもはそれで滿足した。

明治維新を大化新制に較べると流石に拔目がない。大化新制には蘇我氏を亡ぼしたといふだけで、朝廷に全國の貴族を制するだけの兵力がなかつた。其處で土地の國有とか、人民の解放とか、理想は高かつたがいよ〳〵實行となると、一令を發する毎に貴族の顏色を覗ひ、一法を布く毎に地方の動靜を察するといふ有樣で、肝要な點に妥協が多かつた。明治維新の際には朝廷に薩長土肥四藩の兵力があり、大小名に對して土地の奉還でも、領民の解放でも徹底的に之を行はせることが出來た。尤も大化新制の時、舊來の國造に新しい國司を監督させるといつたやうな甚しい妥協があつたやうに明治維新の際にも一時舊藩主を知藩事に任じ舊藩の重役を參事に任ずるといつたやうな著しい應急の措置はあつたが、廢藩置縣と共に、間もなく其必要が

なくなり、人民は全く各藩主の手から解放せられ、國法の前に平等となつた。さうして何人も身分に關係なく其材能によつて如何なる國家の重職にも就くことが出來るやうになつた。

『八』兩手に花の危險

故に明治維新の大精神から云へば、血統上の地位と、官職上の地位とは全く別物でなければならぬ。若し身分だけの理由を以て、閥族の中から政治上に特殊の地位を占める貴族がありとすれば、それは明治維新の大精神に悖るものであり、立憲政治の精神を根本から破壞するものである。

處が日本の貴族院令を見ると公侯爵にして滿二十五歲に達したものは、貴族院議員の資格を有することとなつて居り、之は全然身分の故を以て政治上に特殊の地位を與へられて居る。伯爵以下の同族互選制度とて、その身分による特權たるには相違ない。若し之で貴族院に衆議院を通過した法律案を否決、若しくは修正する權利がありとすれば、明治維新の大精神は根柢から覆へる道理である。貴族院令が容易に動かすべからざるものとすれば、貴族院の存在權は餘程愼重に考へてよい問題である。昔から外國の貴族がしたやうに人民を極度にきびしく躾けることをせず、程よく操り程よく愛撫することを知つて居る貴族が自分の身の程を知らぬといふ位困つたものである。明治維新の大精神を無視して貴族に此特權を賦與した藩閥の罪、一時の權略から此特權に絕對の裏書を與へた『平民宰相』の罪は今更問ふまでもない。貴族が身の程を知つて居ればそれで容易に事は解決する。春雨は花を散らさぬほどと何處かの殿樣が云つた。此殿樣はよく政黨と稱する人民貴族の心理を穿つて居る。八百長角力の骨を心得て居る。それで居て、貴族が身分の故を以て政治上に特殊の地位を占め、それによつて政權を壟斷するといふことの如何に身の程を知らぬ僭上の沙汰であるかといふことを知らぬ。

春雨はいつまで花を散らさぬほど降りつゞけて居るか。身分と政權と兩手に花を咲かせてそれを永く持たせようとする時は貴族が自滅の斷崖に立つ時である。三派の護憲運動には今の政府が見くびつて居るやうに、春雨らしい生ぬるさがある。犬養君も加藤君も未だ高橋一派から普選の詫證文を取つたことをきかぬ。殿樣內閣と罵り、特權階級と攻擊はするが、何が特權であるか、特權を如何にすべきかに關しては未だ說をきかぬ。其處に降りみ降らずみ、花を散らさぬ春雨の生ぬるさがある。併しその春雨も何時まで續くか。今は歷史の上に一度も經驗した ことのない、嶄新な意味でいふ大多數の平民が、貧乏といふ逆

ろしい鞭に打たれて一齊に頭を擡げて來た。春雨がこじれて風となり、冴え返つた寒さに大吹雪となつて咲き誇つた花を散らすやうなことはないか。

貴族氣質の四分類

文學博士　三宅雪嶺

貴族氣質は大約四通りに分られる。大名、小名、公卿、新華族とする。今は舊幕時代程の差別なく、八百萬石と稱する將軍の生活を送つた者のないのは勿論、百萬石を經驗したのもなく、大名といふたとて廢藩置縣頃に年若く、寧ろ其の後に生れたのが多い。下に居らうと叫んだ行列を記憶するのが幾人あるか。大抵東京の屋敷で育ち、綿綸の殿様と趣を異にして居る。一應普通の人と區別がない。

然し十萬石といふよりも以上になれば、現在の財産が幾何にならうと、何處となく鷹揚な所があり、惡く云へばボンヤリして居る。隨分小慧かしく、皮肉を云つたり、細い勘定したりするけれど、人を陥れたりするやうな事に焦せらない。土地を賣買し、株に手出しするにせよ、口實を設けて政府又は會社から金を取出さうとせぬ。儲け話しに顔を突込んで、自ら儲けようとせぬ。有り來りの儘で身代が殖えて行けば宜いとするやうになつて居り、或る寶物を高價に賣り拂はうとする位の處である。

十萬石以上は公侯から伯爵に至るが、それ以下が城主として子爵になり、一萬石どころか相應にある。一萬石では城も名ばかりであり、生活に餘裕少く、可なり横着な事を覺えた。舊幕時代は分を守つて居り、大名の眞似しようともしなかつたが、明治に入つて大名に負けたくなく、さりとて財産多からず、何とかして増さうとし、いろいろ潜つて歩くのがある。大名は儲ける事に氣が付いても、家來を働かせ、己れ自ら手を下すのはよくよくの場合に限つて居る。小名は自ら手を下し、目も利

けば弁も利き、なかなか擦れて居る。別に徳義心が強いのでなく、利に掛けて悟りが早い。所によつて議論するものの、議論して損と見れば、默して過ぎ、密かに相結托するを憚らぬ。人を見れば利益と見當つける。皆が皆といふでないけれど、子爵階級には平民の擦れつ枯らしも舌を捲いたりする。

公卿は前から貧乏と定まり、位倒れを賄賂で償ふ所がある。京都で大名が痛められたが、略ぼ額が定つて居り、聊か愛嬌にも感じられた。二位とか大納言とかの通り過ぎるのを、低い位階の大名がウッカリ知らず、小言を言はれて幾何かの金を供の袖に入れるのが定りであつた。公卿は貧して育ち、人一倍世間の事に通じ、殿様と大違ひである。明治に入つて優遇されたとし、東京に住居するに堪へぬのが幾人もある。小名は何程か大名かぶれするけれど、公卿はそれがなく、剝き出しになり、露骨になる。小名の子爵と公卿の爵持ちとか、貴族院に入るに熱中し、よく勢力を張るに至る。政友會裁總原氏が貴族院を懐柔したのは、その邊よりして居る。特殊銀行會社の何物かを分ければそれで片が着く。

新華族は一樣に云ふべくもなく、五爵悉く備り、大金持ちもあれば貧乏もある。特別の氣風を作らぬやうであつて、父祖の勢力を覺え、エラがらうとする傾向がある。何かにつけて親爺がとか祖父がとか云ひ出し、自分も只者でないやうに心得て居ると見える。本物よりも氣障と思はれる。貴族として如何な特色を帶ぶるかは、今少しく年數を經るを要する。今の所、貴族院で小名と公卿とか切り廻はし、中にも前者が甚だしい。一個人としての力は、他の階級にあり、大名も案外見識があつたりするけれど、餘り焦せる氣にならず、若干の伯爵か小名子爵に加つて居る。貴族院を動かすのが研究會、その研究會を動かすのが小名連といふ事、妙な現象を呈したものである。之れで貴族院がいつまで續くか、次に如何に變るべきか、興味ないとせぬ。

大名の御役騷ぎ

鳶魚

大名の數は幕末には二百六十六人になつたと覺へて居るが、世間では概算して三百諸侯といふ、けれども江戸時代に大名が三百人あつたことはないのである。此の大名を三別して御家門、御譜代、外樣といつた、御家門といふのは德川氏の親類支族で尾張紀伊水戸の三家を始めとして越前などのやうな大名、御譜代といふのは三河以來恩顧の面々、即ち井伊本多酒井榊原等の連中、外樣といふのは家來筋でない大名、加賀とか長州とか薩州とかであつた。此の三種の大名の中で政權に關與し得られる家柄は、御譜代大名に限られて居た、外樣大名は勿論、御家門の大名でも、老中若年寄となつて幕閣に列することは決して無かつた。

老中になるのは御譜代大名といつても、祖先以來德川氏に忠勤した家柄といふだけでなく、必ず十萬石以下の大名であつた、酒井とか井伊とか、御譜代大名の中でも十萬石以上の者が、幕閣に立つ時には、大老になるので老中にはならぬ、大老は何時でもあるものでなく、無い時の方が多いのである。是は幕府が權勢を一處に集めない用心からの慣例であつた、故に要路に立つ御譜代大名は、何時も小大名の實力の乏しい者で、或必要から御譜代大名の有力者を、幕閣へ立てることがあつても、大老職といふものを全く臨時のものにしてあつた

江戸時代の大名で政權を仰望し得られるのは御譜代の面々に限つた話だが、其の御譜代大名も老中になりたがつて運動するなどゝいふことは、寶暦以後のことのやうに思はれる、其の最も甚しくなつたのは寛政以後であらう。

昇平夜話を見ると、『治平の今日、諸侯方の御奉勤御謝恩と云は、强に今日の勤役を以て云べからず、今日の勤役を以て恩を謝するは衣食の爲に仕へる微祿の士の事也、昔も高祿を汚す者は、今日の勤役を以て謝恩とするに足らず　況や諸侯に於てお

や、但し勤役の事、己より求めずして、おのづから其撰に當らば幸也、謝恩の一事なれば喜んで進み勤め、大恩の萬一を謝すべきは勿論の事也、己より求むるは謂はれあらざるなり」とあつて、政權の餓鬼になつた大名が、御奉公御恩返しといふは實で、怪しからぬ非望を持つことを叱つて居る、此の昇平夜話の著者は知れないが、寛政八年の著述であるから、百二十九年前のものなのだ、我等は此の百二十九年前の著述から更に面白い辯論を得やうとは思ひ儲けぬことであつた、それは大正の御代にも心得違ひの貴族があるからである、今も昔も相變らないお正月式の人間が絶へないからである、幕府の時にすら斯う論じた、

今の諸侯方甚敷御役人を望み、頻に權家へ取り入玉ふなり、其事にいふ代々の御高恩、今世何を以て萬分一をも報じ奉るべき樣なし、何役なりとも命ぜられば、責めて御謝恩の一事ともなしたく寸志也と、似たる事は似たれども其心を察するに、事を忠に起して實は官に時めきて羽振がよきを羨ての事也、前に云へる如く諸侯は治國安民の勤め不足なければ忠孝共に不足なし、當時の勤役を以て御謝恩とするは微祿の人の事也、其上自分御役勤て御恩を報じ度といふは才器不足なく、能く其國を治めて御政事を補佐すべしといふが如し、御選みに當つて招かざるに命ぜらるゝ共、不才器にていかゞとはいふべし、自ら何役にても勤むべきといふは己才器ありと許すに非ずや、謙讓なきの至なり、此の如くなる人、能く其職に堪へて治を輸さんこと受けられさる事なり、尤仕官の者は退く計りをよしとするにも非ず、進み勤むる心あるはよけれども其道にあらず、其義に非ずして、進むをよしとするに非ず、自ら足れりと許す人のいかで治道を補佐するに足らんや、我榮達を求むるのみ、何の忠かあらんや、役義を望むに筋合善惡の兩端あり、一概に惡しき事とも云はれず、能き筋合を云はゞ忠孝を本とし、名聞に拘らず、學問を勵み、道を明にし、才智を達し、徳を治め、仰で能く父母につかへ、俯して強く妻子を育ひ、恩を推して封内に及し、士民各任ずべき職業の本務當務に怠りなく、産業なき者は産業を與へて遊民なからしめ、且孝悌の義を敎へ、凶年飢歳といへども凍餓の憂なく各其所を得て安んじ樂しみ、若し一夫も其所を得さる者あれば、おのれ推して溝中に入れたるが如く思ひ、且武家の本業安けれども、危きを忘れず、治まれども亂を忘されさる設け不足なきは是諸侯の本體なり、忠孝其中にあり、若し斯の如くの侯あれば玉を抱き光を包み玉ふとも、内に實あれば其外に顯るゝは必然の道理にて必ず名譽を天下に得玉ふなるべし、

然る時は誰か是を薦引せざらん、求めずして天下の政にも預り玉はん事疑なし、斯の如くの侯ならんには天下の政を任すとも不足有まじ、孝經に惟孝友于兄弟、施於有政、是又爲政、奚其爲政の意にて、縱へ天下の政には預らずとも、官に居り政をするに異らざらん、若し又其撰に當つて、求めずして命ぜられば、是伊尹の幡然として起て、湯の聘幣に就くの意なり、是を不求の求と云、又求め方の悪しきを云はゞ、忠孝の名をかりて實は私の榮達を求め、名聞を事として時の羽振りを好み、學問未だ熟せず、其智未だ開けず、其才未だ達せず、其德未だ修らされども、自ら既に滿足なりとし、其身未だ修まらざれば、仰ぎて父母につかふるに足らず、俯して妻子を育む事能はず、況や封內を治まるに於てをや、凍餓に及ぶをも恤ず、國を得ざるをも恥ず、怨み背くをも顧ず、佞者進み、賢者退くにも心付かず、武備廢欠すれども泰然と枕を高くして安んじ、進で職任に當ても其職任に勝へず、才德なきをも顧ず、頻に不義の賄賂等、金銀を費し、財用の盡るをも厭はず、士民それが爲に貧窮すれども知らざる如く、耳聞ざる眞似して、利病盛んに成て風俗衰ふるとも構はず、唯私好を逵せんとするは筋合の悪しき求めなり、

昔の諷諫論も事理明白なもので、指摘した情弊は今日にも痛切に感ぜられる、彼等は御奉公ぶつたことをいふが、大名は大名として幕閣に立たずとも十分御奉公の道はある、今日にしても貴族員議員は貴族員議員としても同じ事で、此少も違ひない、貴族のみならず政權の欲求などゝいふことを爲し得らべき筋合決して無いのである、それを昔の大名も御奉公を云ひ立てにしては敢行した、彼等の云ひ立ては虛々しい如何にも適當なお笑草であるのを立證する好個の資料がある、白隱禪師が或大名を誡めた手紙に、嗣子がない內に死ぬと其の家が斷絶する、これは第一先祖へ不幸、家來共も不愍だといつて、子供を拵へるのが何よりの孝行だと、精々多數の美女を集めて側に置き、頻に孝行をなさる中に、子供の誕生より先へ、御自身が腎虛內損されるから、大名の孝行は程よくなされたがよいとある、彼等は柄にもなく飛んだ親孝行に耽り、人聞きの好い口實を負つて、何か自分の生命を失ふことをすら知らない、しかし十分親孝行を働いて幾人死んでも、火事は一軒燒けだ、殿樣の孝行よりも恐しいのは、殿樣の御奉公で、若し勉强されたら、一軒燒けや十軒燒けでは濟まぬ、直に世間一體の大迷惑になる。

殿樣のやうだといふのは馬鹿だといふことなので見れば、愚なのを通例とする、その殿樣なるが故に世間の迷惑や天下國家の利害などを考へる譯はない、馬鹿でも畜生の智慧を絞つて御

奉公を云ひ立てに老中になりたかつた理由如何、大名といへば物に不自由のないもの、我儘氣儘を大威張りで遣つて除ける資力は無論にあると、誰も思つて居るだらう、それが大間違ひなのだ、大名の收入も支出も共に既定のもので殆ど動せないから何の藩の歳計も餘裕はなかつた、それ故に臨時費と云へば何時も四苦八苦の有樣でないのはない、賢君とか明君とか云はれる諸侯は、誰でも儉約しないのがない、其の儉約も必ず殿樣の身邊に勵行する、畢竟儉約したくても既定支出であつて手を下すべき場所が他にないことが其の主要なる理由である、殿樣自身の經費を省略することに依つて、一藩の財政が遣り繰られるといふことが、大名の財嚢の狀況を覿面に考へさせるものだと思ふ、それも十萬石以下の諸侯、別けても小大名と云はれる五萬石以下と來たらお話にもならぬ、けれども老中になれる大名は此の苦しがりの中にのみあつたのだ、我等は何かの機會に江戸の大名を算盤上から說明し、現在の華族が比較にならぬ程に富裕であることゝ、さうして其の境遇が地獄から極樂へ引移したやうであることを云ひたいと思つて居る、今日の華族は榮耀から政權を求めもするが、昔の大名は夢のやうな希望から、嫁入前の娘らしい氣分で幕閣に立たうとしたのは尠く、貧乏除けに老中になりたがつたのが多い、又た其の外に自惚れから己が手腕を奮つてと意氣込んだのもある、孰にしても江戸時代の大名が幕閣に立つて儲けたのはないと云つてよからう、概して貧乏除けにならなかつた、のみならず往々にして就任以前の祿高を削減された、柳澤（老中待遇）や田沼などは新大名だけに、減祿されても結局損は往かない、何としても大名になつただけが德である、是等が希有な例として利益勘定を見せたに過ぎぬ。

老中には小諸侯がなる定めであつた爲めに、貧乏除けの他にも彼等の政權欲求を增長させもした、三萬石や五萬石の大名は登城した處が肩身の廣いものでもない、日頃認められない小諸侯が、老中になると實に威權堂々たる者で、百萬石五十萬石の尾張樣とか大守樣とか云はれる大諸侯を、其の方がと云へるだけでも、何程嬉しくなれるか知れぬ、だが老中になる資格は只だ小諸侯といふだけでなく、三河以來譜代恩顧の大名でなければならない、是は其の家に生れるより外に仕方がないのだが、人間の欲望は仕方がないで斷念されもせぬ、其處で願ひ御譜代といふのが出現した、家齊將軍時に寺社奉行で鳴らした脇坂淡路守安董や、家慶將軍の時に御側御用人で働いた堀大和守親寳などは、共に豐公取立の家柄で、德川氏には外樣大名であるのに、願に依つて御譜代に准せられ、外樣大名から補任されない官職を以て、老中に進るべき階段を踏ないでもあつた、頗

ひ御譜代は貞享三年九月、松浦肥前守鎭信（肥前平戸六萬千七百石）が譜代並みになつたのを最初とすると聞いたが、脇坂堀兩家の外に相馬（奧州中村六萬石）、戸澤（出羽新庄六萬八千二百石）、秋田（奧州三春五萬石）の諸家がある。

譜代大名が老中になる經路やら、各家の格式等の話は略して江戸時代の通弊であつた大名の老中病について二三の例話を擧げて、あとは讀者の考察に任せることにいたさう。

天保十二年（七月）松代の城主（眞田信濃守幸貫）帝鑑の間より京坂の御役（京都所司代、大坂城代をいふ、此の二役の中の一つを勤めて老中に進むのが例であつた）を經ずして、直に御用部屋に入り（老中に列すること）たる樣子を聞くに、世上にては白川侯の子（松平越中守定信の庶子で、眞田彈正大弼幸專の聟になる）にて學文もあり賢明の聞へをもつて、水戸の景山公（齊昭）の吹擧といへども、左にあらず豫て多くの賄金を中野石翁（家齊將軍の寵姬おみよの方の父）に賄りて望まれし事也、石翁も心安く領承し、頻に賂を取込たる上にて、先例なければ氣の毒ながら周旋は成り難しと辭退せしとぞ、彼家臣なる樋口翁輔は太皷拍ちの役者にて、舞臺上にて懇意にせしゆへ、予が家へも來りて父に語りけるは主人豫てより御役を望まるる所より一體不如意なる身上、賄賂など多きため彌々借財を進め、當今などは藩士へ渡し物の手當も漸くにて、窮する事甚し、しかし御役に在り付かば、忽ちに賄賂に使用せし散財をも恢復すべしとて居られども、必死となつて家中の扶持米給金までも渡し兼ねるやうに成て、一統の大困苦となりしは全く旦那が御役を望まるるゆへ也、それに付ても石翁は不埒千萬なる人なり、始より其の成らざるを知りながら、たやすく領承して取るものをしたゝかに取て突き放せり、旦那も此の人にはうまくだまされ候と云々（大谷木醇堂の隨筆燈前一睡夢）

松代侯は一度失敗したが遂に目的を達した、支出した賄賂も回復したらう、長く在職すれば今度は賄賂が取れる譯にもなるが、隨分苦しい思ひをして政權欲求をしたことが、此の文の上だけでも窺はれる。

渠の渡邊華山も主人の三宅土佐守康直（三河田原一萬二千石）が、御役騷ぎを始めるのを遮つた、貧乏な田原藩で大分な賄賂などを費はれては、家來が餓死するといつて獵官運動をさせなかつたのが、君公から睨められる根本になつたのだ、有馬遠江守允純（越前丸岡五萬石）は老中になつたが、何分にも失費に堪へない、家老共が御役御免を御願ひなさるやうにと諫めなければならなくなつた。けれども殿樣は三度の食事を二度に

しても宜しいから、御役を勤續したいと、泣き出しさうな言明で辭職勸告を斥けたが、本人は飲食抜ぎで辛抱もするだらうが、俸給の半額拂ひなどで家來共が生きて居られる筈もない、此の殿様は丸岡藩の財政難と御役が思ひ切れないとの間に挿まつて、元治元年の何月であつたか、遂に自殺して了つた。

天保改革で有名な水野越前守も、立身の初めには非常な運動をした、眞田信濃守から澤山卷き上げた中野石翁は、水野からも隨分絞つた、中野のみならず寶曆以來老中製造業者が幾人もあつて、賄賂取りも盛な商賣になつたのである、水野越前守は賄賂で仕上げたからといふ譯でもあるまいが、勢力を得てからは相應に取つても居る、町奉行の矢部駿河守から摘發されて狼狽した話もある、此の水野が失脚した後に、鍛冶橋内の屋敷へ瓦礫の雨が降つた、江戸三百年の間の老中を勤めた大名の邸宅を民衆から毀されたのは、水野の外には一人もない、其の水野は政權欲求の最も猛烈な人であつたことも面白い。

水野の片腕と云はれた堀大和守（信州飯田二萬石）は牧野備前守忠雅、青山下野守忠良等の閣老から彈劾されて、減封の處分を受けたが、堀が御奏者番となり、寺社奉行となり、若年寄となり、御老中格御側御用人に累進する間の費用の大部分を、金座の後藤庄三郎に仰いだ、後藤と結託したために資金は得られたが、利益の形跡を隱し切れなかつたので、遂に彈劾されることにもなつたのである、後藤は斬罪になつた男だが、彼は堀のみでなく大勢の幕吏とも怪しからぬ關係があつた、江戸時代の御用商人を驕らせたのは、大名旗本の政權欲求の結果に他ならぬ、大名旗本の御奉公ぶる程、弊害の多いものはない、幕政を腐敗させた第一は御用商人であつた、イヤ御用商人の提供する資金であつた、しかし御用商人は只だ資金を提供するのではない、必ず其の報償を求めて居る、御用商人に報償するために何程政治が腐るであらうか、それも畢竟老中になりたがる大名があるからである、堀大和守も「一身上にこれから堀大和、いつの世にかは梅の紋所」と落首にされた、五萬石の飯田藩が文化の末から二十餘年間御役人騷ぎ續け、取るのも取つたが出るのも出る、漸く抱屋敷の一つも出來たかと思ふと失脚させられたのである、其の上に藩中が二派になつて、御役を罷めさせたい者と、勤續させたい者との紛爭は非常な混雜であつた、阿部伊勢守正弘（備後福山十萬石）が、御當の奥向の緣故を求めて、御役運動を始めようとした時に、家老の關半治右衛門が切に諫止したのを美談として居るのは、何で美談なのか、阿部は遂に時運を待つて老中になつた、老中になるのが必ず悪いのではないが、御役運動か宜しくない、其の爲めに無理算段の資金を消費

するのが惡い、無理算段の內には家來共の俸祿を減じ、領民に御用金を課し、報償條件の附いた御用商人の資金融通等の怪しからぬものが含まれて居る、此等の怪しからぬ事柄を除けるために、福山の家老關平治右衛門の諫言に依つて、阿部正弘が思ひ切つたことが美談なのである。

それが幕末には一層手緊しくなつて、柄の惡い小諸侯が爭つて老中になつた、モウ舊例故格を云つて居られないとあつて、萬事が亂調を來した處へ、幕閣に列した連中は取り德だといふ心持ちにもなつた、其の一例として、老中ではないが酒井修理太夫忠義（若州小濱十萬三千五百五十八石）は京都所司代勤役中、和宮（十四代家茂將軍御臺所）御降嫁について功勞があるといふので、幕府から青磁の大香爐を賞賜された、此の香爐は禁中にあつたもので、かねて酒井忠義が欲しくてならなかつた、其處で老中へ吹き込んで置いて、御降嫁の御喜びに大香爐を幕府へ御下賜になるやうに、酒井が運動して其の捗びを濟ませ、幕府から酒井が貰ふ段取を附け、豫定の通り運んだのである、此の事は酒井忠義の用人であつた和田應介が主として香爐轉賜運動をしたのだ、應介の長子維四郎氏が曾て我等に話されたのであるが、隨分怪しからぬ話だと思ふ、儲かる筈のが儲からないので、苦し紛れの掻き込み主義、如何なる事でも資金供給次第で幕府の老中は承知しなければならないやうになつた、恰も其の時は德川氏衰亡の時でもあつた、斯う老中がさもしくなつたのも、貧乏大名の無理な政權欲求から、段々行き詰つたのに他ならぬ。

貴族院あつて以來、白馬を乘り廻した子爵內藤信任君を筆頭に、政治騷ぎで破格した人も澤山あらうと思ふ、華族の政權欲求が榮耀榮華の餘剩とばかりは見られぬ、其處から江戶と東京との比較が興味多くなるだらう、何時だつて眞に天下國家を心配する者が、徒に政權欲求などをする筈はない。

今の華族は富める平民

前田蓮山

一

日本に華族の稱が始まつたのは明治二年六月で、即ち同月十七日行政官達に

官武一途上下協力ノ思召ヲ以テ自今公卿諸侯之稱被廢改テ華族ト可稱旨被仰出候事

但官位ハ可爲是迄之通候事

とある。そして同月二十五日『一門以下平士ニ至ル迄總テ士族ト可稱事』と布達せられ、士族の稱が始まつた。

華族と云ふ言葉は何處から出たかと云ふと、公卿の中に攝家（五家）清華（九家）と云ふ家門があつて、其の清華を華族とも稱したので、其の華族を取つたのであらうと思はれる。明治十七年に五爵の制度が設けられる以前には、華族は公卿諸侯に限られたが、明治十一年大久保利通の薨去に際し、其の嗣子利和を華族に列せられた。門地に拘らず華族に列せられたのは是れが始めてである。

次に明治十七年爵制が發布せられて、有爵者を華族とすと定められ、從來の華族及び神官僧侶の由緒ある者、維新の功勞者に爵を授けられた。

公卿では攝家は公爵を清華は侯爵を授けられたが、三條實美は清華であるけれども維新に功勞があつたので特に公爵を授けられ、また岩倉家と中山家は平公家に拘はらず、是も維新の功勞で具視の嗣子具定は公爵に、中山忠能は侯爵に列した。其の他門地の高下に應じてそれぞれ伯爵、子爵、男爵を割當てられた。

武家は二十萬石以上が侯爵、十萬石以上が伯爵、一萬石以上が子爵を授けられたが、島津久光、毛利元德、島津忠義の三人は維新の勳功によりて、德川家達は將軍家の嗣子と云ふわけで、特に公爵を授けられ、また一萬石以上の大名で男爵を授けられた者も二三あり、大名の分家又は家老は男爵に列せられた

そして伊達家は六十二萬五千六百石、南部家は二十萬石、井伊家は二十五萬石、藤堂家は三十二萬三千九百五十石、有馬家は二十一萬石、越前の松平家は三十二萬石だけだけれども、伯爵に貶された。

維新の功勞者としては、木戸孝允の嗣子正次郎、大久保利通の嗣子利和が侯爵に列し、伯爵以下多數の華族が出來た。此の第一回の授爵者は凡て五百〇四人であつたが、大正十年の現在數は公爵十八人、侯爵三十八人、伯爵百〇一人、子爵三百八十三人、男爵四百十人、合計九百五十人である。今日では九百八十餘人になつて居るようだ。

二

憲法發布以前には、華族に附隨する階級的特權はなかつた。要するに華族と云ふ稱號は、公卿諸侯から特權を奪つた代りに、彼等の社會的名譽を維持するために設けられたものである。明治二年には輔相、議定以下三等官まで、即ち今の總理大臣以下勅任官以上位の官吏を、現任三等官以上の總員が、公選入札の法により選定した位で、攝家も國守大名もあつたものでなかつた。

所が憲法が制定せられて『帝國議會は貴族院、衆議院の兩議院を以て成立す。貴族院は貴族院令の定むる所に依り、皇族、華族、及び勅任せられたる議員を以て組織す』と定められ、華族は憲法によりて政治上に重大な特權を獲得したのである。

此の特權が正當であるか不當であるか、色々議論はあるとしても、元來宇宙人生は永遠への流續であつて、過去は現在に浸入し、現在は未來に浸入しつゝ一全體をなすのである。されば過去から切り放した孤立の現在を考ふることは出來ず、現在と全然交涉なき未來を想像することも出來ぬわけで、華族の特權とても、歷史を離れて論ずるわけには行かぬのだ。

公卿諸公の特權を奪ひ、大臣以下政府の官吏を公選入札にしたる如きは、過去と現在の間に何等の聯絡なき別々のものと誤り、歷史を無視したやり方であつて、實際に行はれ得べき筈なく、土佐藩主山內容堂の如きは『國家の大臣は天皇の御目鏡によりて仰せ付けらるべきもの、其れを互に投票するなどは以の外だ。容堂は然ような兒戲に等しい儀は御免を蒙る』と言つて投票の仲間に入らなかつた。

果然官吏公選政治は忽ちに失敗したが、地方行政の方は、諸侯が藩籍を奉還すると同時に、彼等を其のまゝ藩知事に任じ、急激の變改を愼んだので、是れは先づ以て何等の故障紛擾を生ぜず、明治四年廢藩置縣も圓滿に行はれ、藩から縣へと斜面をす

べるように政務が進行したのである。

即ち木偶坊でも舊來の諸侯を藩知事に任ずることが、其の當時に於ては一番よかつたのである。即ち是れは時の流れの間に自然に生長した事實だつたのだ。ヘーゲルは『凡て現實は理性的である』と言つた。理性的であるから現實に存在することが出來るのであつて、理性的でなければ存在し得ないのであると見るのも、自然に生長した事實と見るのも、つまり同じようなことである。

憲法に華族の特權を設けたのも、其の當時に於ては殆んど問題とする者はなかつた。初め不平に思つた者も、出來上つた以上は致方がないとして看過した位に輕い問題だつた。

私の生れた土地は、某大藩の家老の領地で一萬石の祿高だつたが、明治十七八年、私の幼年時代に、城下のお祭り見物などに行つて、お城を拜見する時など、此の奥に住んでござる殿様と云ふのは、何んな風にして生活して居るだらうかと想像したが、遂に想像に及ばなかつた。

近頃の士族が曾てタツタ一度殿様の御前で御酒を頂戴したことがあると言つて、其れを一代の名譽と心得て居るかの如く、私の父に誇るのを私は度々聞いたが、私は其の度毎に、先生から話に聞いた源義經や豐臣秀吉に比べて殿様を想像した。現實の人として考へることは出來なかつたのだ。

明治二十四年頃だつたらうか、此の家老の殿様が男爵を授けられ、其のお祝ひとして領内の重立つた者は園遊會に招待され、紀念の木杯一個を頂戴したが、當時私の父の感激したことゝ言つたら實に並一通りのことではなかつた。

城下の市民は勿論、領内村々の百姓達は、一ケ月も前から準備して、餘興を仕組んでは城内に操り込み、其の感激の態度たるや、攝政宮殿下の御結婚式に對する東京市民の其れのようだつた。

私は此の日初めて殿様の顏を拜むことが出來た。鳥の毛のビラ／＼した例のヤゲン帽、今見ると貧弱なものだが、金色燦爛に見へた男爵の式服、私は目がくらむ許りに覺へて思はず頭を下げ、よく顏を見ることが出來なかつた。

其の頃、東京の本屋から出版する書物には、伯爵東久世通禧閣下の題辭とか、子爵某閣下の題辭とか、大概は石版刷りの華族の筆跡が附けてあつて、其れが書物の信用を増し、價値を高める方法となつて居たもので、私などは其の石版刷りをひねくつて、何とも言へす高貴なものに感じたものであつた。斯んな調子で、大人の人達も華族の特權などに疑問を挿むなどは夢にも思はなかつたのである。

三

私は明治三十年に上京して東京の學校に入つたが、先輩友人の例に倣つて、先づ第一に殿樣のお邸に伺候して殿樣に拜謁した。次の間にかしこまつて、自身でもわからぬ口上をムニヤ〳〵申上げて疊に頭をすり付けると、紋付の羽織で大火鉢を前に欣然と坐つた殿樣は、私が頭を上げるを待つて『お前は誰れの子供かい』と御言葉をかけられた。我々のおやぢなど名前を申上げても御記憶には殘つて居まいと思つたけれども、これ〳〵と申上げたら『ウーム然うか……折角勉強するが可い。日曜には國の書生共が大勢集まるから遊びにおいで』と懇切に仰せられた。私は青年ヅラ下げて、感激やら禮儀作法に慣れぬやらで、背中一杯に汗を流して引き下つたものである。

殆んど毎日曜日に、私は本鄉から麻布まで徒歩してお邸に遊びに行つた。そして他の大勢の學生と共に晝飯を頂戴した。其の頃、同鄉の學生には大學生も四五人居り、既に卒業して文學士や法學士となつて、ハイカラな背廣など着込んでお邸に遊びに來る者もあつたが、殿樣は彼等に對して悉く呼び捨てゞあつた。十二三歲の若樣も髯を蓄へた學士を捉へて呼び捨てに姓を、時としては名を呼んだ。また時としては例へば權助ならば『權ドン』などゝも呼んだ。

其れから四五年を經過する間に、殿樣と私共との間柄が頗る變化した。殿樣は學生に對して段々冷淡となり、學生は何時となく餘りお邸に寄付かなくなつた。日露戰爭後は其の變化が著るしく、殿樣の言葉扱ひも大層丁寧になつて『誰君』と君付けにして私共に對するようになつた代りに、鄉里の學生の世話などしようと云ふ親しみは殆んど見出せなくなつた。

そして鄉里に歸つて樣子を見ると、殿樣の土地は都會の成金の手に渡つて、曾ては殿樣の小作人として、何の不平もなく樂しんで働いて居た者が、今は地主と小作人との間に何等の親しみもないどころか、寧ろ睨み合ひの姿で、殺風景な村と化し、以前は殿樣の噂をするのに『殿樣が殿樣』と言つた百姓達が、今は『何さん』と名を呼び、殿樣の家に如何なる慶事があらうと不幸があらうと、殿樣の方からも何等の挨拶があるでもなく、舊領民は全く無關心で、唯だ表面だけでも喜憂を分つような風でもするのは特別關係の深い藩士の一少部分になつて居た。私は曾て授爵祝ひに舊藩內擧つて大騷ぎしたことを回想して、其の變化の甚だしきに感慨を禁じ得なかつた。

侯爵級以上の大名は別として、伯爵級以下は大概此の通りでもあらうと思ふ。私は或時某伯爵に向つて『大名華族が舊藩地に歸

つて自治の世話をして吳れたら可いが』と言つたら、舊藩の奴等は吾輩を何んとも思つて居らぬ。偶々昔を忘れず忠義顏して寄り付く奴は、吾輩から何物かを取らうためだ。舊藩の世話などするのは馬鹿〳〵しいと言つた。

彼等は貴族的のおうような、優佳な生活を營むべく、餘りに小利巧になつた。彼等は世間から殿樣と敬慕されても一文にもならぬばかりか、却つて物入りが增すと云ふことを知つた。そして同時に平民的生活の氣樂さを味はつた。彼等の父祖は諫めに從ふことと流るゝが如きを君德としたが、今は彼等を諫むる者もなく、彼等自身却つて他を瞞着籠絡して其の智を誇ると云ふ有樣である。彼等の父祖は藩政を整へ領民を幸福ならしむべく全責任を負擔し、そして此の責任を盡すべく自ら修養し或は修養を强ひられたもので、大名の氣品は此の精神によりて高められたが、彼等は此の責任を知らぬのである。慈善事業其の他の社會事業等に對する寄附者名簿に、彼等の名を發出することは少ないではないか。是れも彼等に父祖の如き愛民的修養がない結果だ。

今や彼等は一個の富める平民と化し了しつゝある。彼等は貴族的氣品威嚴を保つことの精神的努力に堪へなくなつて居るのだ。其れを彼等は平民的だと言つて得意顏である。新人などゝ新聞記者におだてられて嬉しがつて居るのである。而かも專制君主的冷酷と倨傲と我儘の側面だけは保留して居るのだ。貴族らしい點は夫れだけである。

四

貴族が貴族的威嚴を失つて平民化し、彼等に對する平民の崇拜が無くなれば、貴族の階級的特權は存在の理由を失ふわけである。有名なる英國憲政論(The English Constitution)の著者バヂョットは『英國に於ては其の威嚴ある點に於て、貴族院否な寧ろ貴族の效用は頗る大きい。貴族なる一階級の天職は英國平民の上に、一種靈妙なる勢力を振ふことである』と言つて居る。バヂョット時代には、英國では學問才智ある平民が地方に旅行して父老の尊敬を受くることはなかつたが、老子爵が田舍に行けば衆人の尊敬を受けたそうである。子爵閣下の負債山の如く、其の破産は單に時間の問題と云ふことが判つて居ても、地方の農民は、彼の傍に同坐せる百萬長者に四五倍する尊敬を子爵閣下に捧げたそうである。此等農民は百萬長者の相當の道理ある議論よりも、子爵閣下の譫語に傾聽したそうである。

而かもバヂョット時代は即ちパーマーストーン、ラッセル、ダービー、チスレリー、グラッドストーンなどが交々首相にな

つた時代で、英國が憲政の範を世界に垂れた全盛期であつたのである。

英國の貴族は寔に賢明だつた。彼等は討論演說に於て到底内閣大臣の敵でなく、議院で爭ふことは却つて名聲と威嚴を損する所以であると悟り、衆議院に自己の代辯者を送つて、其の勢力を衆議院の上に振ふべく努力した。斯くして貴族自身が貴族院を度外して衆議院の權力を大ならしめたのである。

日本の華族も早く玆に氣が付いたならば、今日の如く平民から馬鹿殿樣呼ばりされないで、明治二十年以前の平民の尊敬をつなぐことが出來たであらうが、彼等は一個の享樂的生活にいそがしくて、衆議院議員の世話どころか、停滯すら顧みる所なく、富める平民と化し了しようとして居る。

バヂョットは『貴族は金權政治の弊を防ぐ、世襲的爵位の崇拜は黃金の崇拜の如く、劣等でない』と言つて居るが、現在の日本の華族は貴族的品位を捨てゝ黃金崇拜者となりつゝあるのだ。そして平民的などゝ言つて得意になつて居るのである。

またバヂョットは『英國人の貴族崇拜は官僚崇拜の弊害から英國を救ふ。英國に於て官尊民卑の陋風がないのは是れがためである』と言つて居る。然るに日本の華族は衆議院議員を世話する代りに、官僚にこき使はれ、官僚の護衛兵となつたのである。貴族院は官僚上りの華族、官僚上りの勅選議員に操縦されて來たのだ。

近年漸く目が醒めて、研究會が獨立獨行せんとする態度は大によい傾向である。而かも彼等が兩院を横斷して、衆議院と同等の權力を主張するならば、夫れは頓でもない心得違ひである。貴族院の權力は衆議院の下にあらねばならぬ。唯だ貴族の政治的抱負を有する者は政黨に入つて縱斷的に衆議院に勢力を扶殖すれば可いのである。英國の貴族は個人として平民の尊敬を受け政界に勢力を有するけれども、貴族院議員としては衆議院の下に甘んじて居るのだ。

此の縱斷的内閣を實現する準備或は手ならしとして、現内閣の如き貴族院議員ばかりの内閣を作るのは強ち非難すべきことではない。山本内閣の如き官僚的超然内閣こそ唾棄すべしである。

併し是れは貴族がよく其の氣品と威嚴を保ち、平民の崇拜を受ける限りに於てのみ意義あることで、今日の如く貴族が自ら平民化するならば、彼等に貴族院議員たる特權を與へて置く理由がなくなる。縱斷内閣の必要もない。貴族が貴族らしくないならば、偶然中の偶然たる血統に其の位置を求むるよりも、自家の努力に立身の道を求むる方が遙かに勝れて居ることは申す

までもないことだ。

併しながら貴族の平民化は、自然の大勢であらう。英國などに於ても、勞働黨內閣が出來たりして、貴族の氣品とか威嚴とか云ふものは、昔物語になりそうだ。果して然らば貴族院を如何に改造すべきか。其れも時の流れの間に自然に生長するであらう。突然な改造は失敗する。

（二月五日病床にて）

清浦。水野。大木。

矢田揷雲

○

清浦さんを首腦とする現內閣わ、私等の眼から見るとひどく評判がわるいように思われる。政友本黨が絕對多數黨になるであろうことを豫測する人、及びこの豫測の上に政派的去就を決しようとする人々に云わせれば、清浦內閣の成立わ、現代日本人の大部分の要求にかなつて居るようであるし、閣員の顏ぶれわどうあろうとも、良き政治をすれば論わ無いではないかといふ大向う當て込みの議論も行われて居る。併しながら政治運用の權が極く少數の特權階級に壟斷されろといふ、この成立そのものわ、選擧權さえもつて居ない多數人民に不安やひがみを起させずにすまない。この時に、それわ此の內閣に安心しないものがいけないのだ、ひがみを起すものわ、なをいけないのだといつて見たつて何の足しにもならない。成ろほど單なる批評としてそれを云つて暇つぶしをして居るのわ構わないかも知れないが、そのような不安とひがみに捉われて居る民心の實情を基礎として政治を行ふに當り、不安わいけない、ひがみわなをいけないと攻擊したからといつて、不安とひがみわ去りわしない。

かくの如き不人氣、かくの如き不安、かくの如きひがみを『お前等がいけないのだ』といふ議論で押しきつて通ろうとする政治家がありとすれば、民衆の不人氣と不安とひがみとわ益るばかりである。その一事だけでもそう云ふ政治家が貴族主

義、官僚主義だと謂われる値打わある。清浦内閣が成立以來、最近の議會解散までの間に蒙つて居る不人氣の原因わ、主として共處にあるものだと思ふ。

清浦内閣を攻撃するものわ、もうその一事だけで充分だ、外の事は聞く必要がないといふ論調である。そして此の論調わ多くの共鳴者を得て居るように私共にわ見える。すると是に對し、閣員乃至御用黨の人々わ、政策、政綱も聞かぬうちに不信任呼ばわりをするのわ、單に政權爭奪の爲めの攻撃だといふ論調で臨んで居る。これもたしかに一の論調として相當の勢力を張ることができるであろう。しかしながら此の方わ前の内閣成分論ほど今日の青年に受け納れられるかどうか怪しい。

況して第二憲政擁護會の新聞記者連が研究會を訪いて、論戰を交えし時、研究會の某氏わ『清浦内閣の成分わ法律に觸れて居ないつもりだ』といふような愚かなことをいゝ出して、貴族内閣に對する民衆の反感を一層強めて居る。

先づ今のところ清浦内閣が人心を激昂せしむるものありとせば、その政策でもなければ、思想でもない。成分そのもの—即ち閣員の顔觸れの問題であろうと思ふ。

○

清浦さん初め現在の閣員が、どれほど立憲政治の精神に脊ける思想を抱いて居るか否かわ、實わまだ多くを與かり聞かないのである。個人々々の私生活に於ても亦、どれほど貴族的であるか平民的であるか、それわ容易に決しられないことである。若し立憲政治以前の所謂殿様氣質といふ標準で觀察すれば、七十五歳の清浦さんですら、思つたより平民的で思つたより新しい老人といふことに歸着するかも知れぬ。現閣員の不人氣な理由わ、かゝる成分の内閣を自から是認し、議會解散を賭してもこれを維持せんとするその一點にあるので、これすらも敢てするなら、その人全部を貴族主義の人と見なして差支ないといふのであろうと思ふ。譬えて見れば、原敬といふ人は、私わ隨分昔から家庭に於て如何なる人であるかといふことを知る機會があつて感心して居たが、政權の受け渡しに當りてわ、自分の潔癖を犠牲にして、現時の實情に隨應して行くところが甚だ賢明であつた。その時原さんの私生活の長所をかつぎ出して來ても公生活の短所の辯護にわならないと同じように、清浦さん以下の現閣員諸公が、個人としてわどれほど新しい呼吸をして居る人たちであろうとも、公けの方面で此の頃やうな不人氣を受けるのわ、どうも一先づ當然の事であるとあきらめねばなるまい。

政策も聞きもしないで——とか。貴族内閣がいけないと憲法のどこに出て居る？——とか云えば云ふほど變なことになりわせぬかと思われるのである。

數年前私わ向島を逍遙した時、三圍神社の境内に珍しい碑文を見出した。あの境内に林立せる大小無數の碑石を記臆せる人もあるまいが、其角堂の因みで發句ようの碑や、川柳ようの碑わ見ないさきから鄙染のような氣がせらるるであらう。それ等の中に桑變湖、一勇齋國芳の碑と並んでドイツ警察大尉ヘーンの碑があることを私わ異樣に感じたばかりで無く、その碑文が明治二十七年十一月、時の司法次官清浦奎吾君によつて假名まぢりでわかり易く書かれてあることを異樣に感じた。

ヘーン大尉わ明治十八年三月山縣公が内務卿時代、清浦さんが警保局長時代にドイツから招聘し、警視廳顧問として警官の養成と警察制度の改良とに任じた人で、清浦警保局長が山縣内務卿の鋭利なる懐刀として鋭意警察を改善せし功業の半ばわヘーン大尉のおかげである。大尉わ我國に於ける五ケ年間の功績で勳五等に叙せられて歸國し、歸國後ベルリン府の警察方面監督となり、明治二十五年二月三十日ベルリンに沒したといふことが、この碑文を見れば小學生にもわかるように書いてある。小學生でわない、實は私も此の碑文によつて初めてヘーン大尉の功業を知り得たのであるが、その時もう一つ感じたことわ、日常の挨拶も漢文でするのでわないかとまで思われて居た清浦さんが、碑文と謂えば漢文にきまつて居たような時代に、その習慣を破つて平易な假名まぢりの碑文を撰したといふ點であつた。

この碑文を見て、私が非常に珍しく感じたのは、それが假名まぢりで書かれたといふ事、及びそれ以上に、それが清浦さんによりて書かれたといふ事であつた。

私の清浦觀が、此の發見によつて大いに範圍をひろげたことは云ふまでもない。

○

大森の在住十年の間に私わさま〴〵の名士と停車場で出會つたが、年齡、經歷、名望の諸點から今もなを清浦さんが大森のぬしであると思ふ。まだ山縣公が在世時代、清浦さんが樞密院副議長の頃であつた。何か式日に雨が降ると清浦さんの存在わ一層あざやかにプラットホーム仲間に印象された——といふのわ、そういふ時に此の老大官わ、金ピカの大禮服に勳章、綬章を隙間なく飾り、自宅から二丁ばかりの坂道を足袋はきのおひろいで徐々と停車場え[illegible]つて來る。[illegible]

とろ〳〵に磨き立てた靴を捧げてついて來る。そして停車場え着くと女中は清浦さんの足下にうづくまつて足駄と靴を穿きかえさせ、恭々しく一揖して

『行つて居らつしやいまし』

と挨拶する。清浦さんわ相變らず長い六ケしい顔を、にこりともせず山縣ゆづりの謹嚴な態度で人ごみの中を二等車の方へ進む。

これを見るほどの者わ、一寸風變りの光景に電車を待つ間の好奇心を滿たしたことを喜ぶものもあろが、數多き名士の中にわ、年の若い、やゝ左傾的の名士もあつて

『なんといふ生意氣な爺だ！又あの年の若い美人もなんといふ奴隷的の女中だ！そして第一なんといふけちな爺だ！その爲めいくらでも俥といふものがあるではないか！』

といふ風に考えるのである。少し皮肉な中年の名士になると

『清浦さんも出世をしたものですな、なんでも初めわ熊本在のお寺に小僧をしてた人だと云ふぢやありませんか、それが小僧が厭になつて十四五の年に寺を飛び出して、埼玉縣で月給三圓の代用教員とかになつたのが振り出しだていますから人間の運命ほどわからないものわありませんな』

と一切を運命のせいにして、一言も當人の力量を謂ふを肯しとせぬのもある。

成るほどゑらい出世にわ違いないが、私などの考ふるところでわ、その出世わ、雨の降る中を俥にも乘らず、女中に靴を持たせて、自分わ二三丁の坂道を老の足取り辿々しく徒歩で漕ぎつけるといふ、じみで手堅くて、陰氣臭くて、謙抑なやり口に基づきわせぬだろうか。清浦さんが司法省に奉職中山縣さんに認められたといふところが、所謂運命の力でわあろうけれど、大浦、平田、清浦、有松など山縣直系の人材に共通の特質を備えて居なければ、なんで運命の神が山縣と清浦とを結びつけよう。

物わ見ようによる事だが、僅か一二丁のところに俥を呼ばせることを大業らしく思つて成るべく避けようとする氣質を我々わ第一に考えて見なければならぬ。生活に困らぬ人が。少しの金を出せばからだのらくができるといふ場合に、成るべくからだを弛めないで心と共に引き緊めて從こうとする心がけわ、論語にある愼獨の心理狀態であつて、金に不自由の無い者にわなかなかできにくい事である。清浦さんわ果してどんな心持で女中に靴を提げさせたか私わまるで知らないが、少くとも自分の好しと信ずることであれば、たとえその事がどんなに周圍のやり口と不釣合でも、又どんなに見當違いの下馬評を蒙ろうとも平

氣でやり通す性格の人であることわ此の一事で明らかである。

この性格わ實行力の母であるが判斷の正しい性格が父とならなければ、その實行わ恐るべき結果を來すであろう。

○

水野内相について私わ多くを知らない。私わ新聞記者の職務上で、水野さんが後藤さんの下に次官をして居た時代であつたが夫人の方に早くお會いした。その時わ御自慢の孃さんも生きて居られた。その後その孃さんが無くなられて水野氏夫妻わ非常に落膽され、水野さんわ孃さんの追悼集を編んで知人に頒布した。床次内相が夫人の爲めに編んだ追悼集と共にこれわ双璧であつた。床次内相わ見ても情にもろいように思われるが、水野内相わ『誰が泣くもんか』といふように見えるのに、人の親の心わ闇にあらねども子を思ふ闇に迷いぬるかなで、あの時わ随分弱つたらしかつた。

水野さんが後藤さんの後を襲ふて内相になつて間も無くであつた。私わ社用を帶びて水野さんを今の帝國ホテル玄關口になつて居る當時の内相官邸に訪問した。その用件わなんであつたか覺えぬが、それわ確か平凡に近い事であつた筈だ。然るに内相わ私の質問に滿足な答辯を與えた上に、私の質問しない或事に就いてニュースを與えた。これも如何なる事柄であつたか忘れたが。水野さんわ其の時、これはまだ發表するに早いから書かないで呉れ玉えと云つた。

私わその時その事柄が何も發表されて役所に不都合なもので無いことを考えたので、

『そんなことを書いてわなぜわるいのですか』

といつて尋ねた。水野内相わそれに對して明確な理由を述べることの代りに、親しそうな微笑を見せ

『なぜといふ事わないが、一寸まあ見合わして呉れ玉え』

といふような調子であつた。私わ餘程昔であるが法學博士水野錬太郎著『他山の石』といふ本を愛讀したことがあつて、その中にわ時弊を衝くの至言が所々にあると感じて居たから、その中の一節を武器として

『差支のない限りそういう事わ一日も早く世人に知らしてやるように考えて下さらないと困るのですが』

と打とけて迫つて行つた。

すると水野内相は矢張り笑ひながら

『それでわ仕方がない。書き玉へ』

と學生風に――或は學者風にきつぱり云放つた。この承諾を得たからといふわけでわ無いが、私の性質上、こういう種の人

わすきであるから、大變好い感じを受けて

『おじやましました』

と帽子をとつた。水野さんは自分の身體よりも長大な葉卷を置いて

『失敬、又來玉へ』

といつてドアを開けて呉れた。それわ宵の口であつたが、薄暗い應接間にわ徹頭徹尾内相と私と二人ぎりであつた。

私わ歸る途々、水野さんわ兎にも角にも卒直な感じを與える人だと思つた。そしてあのような調子わ多くの人に寧ろ好まれないかも知れない。あの顔とあの物言いとわ腹でも立てて居るか、人を見くだしてでも居るかと誤解されがちでわあるまいか。背わ小さいけれど精悍の氣が眉宇に溢れて居る。敵に向つて強そうな人であると私わ考えた。

それで居ながら、一面に私わ快感に打たれてゐた。後藤さんが人の肩などを叩きながら、柔和な又睡たげな聲で娓々として語るのに比すれば、水野さんの方わ却つて男性的であり、坊ちやん式であると謂える。後藤さんの應待ぶりも一概に技巧的と見ることわできぬ。どこやらに客を喜び客を樂しむ暖かみが快感を與えるが、水野さんのボキ〳〵とした應待ぶりも、決してわるくわないと思つた。つまり世間の人がすべて水野さんのような應待をし、且又水野さんのような應待を認容するならば、萬事直截簡明になつて、さぞ氣持がよからうと思つた。

但しこれわその人の政策や思想などに關して云ふ事でわない。

○

原内閣以來入閣して原内閣、加藤内閣に歴任した大木さんわ、今度の内閣で椅子を與えられなかつたが、最近に新設鐵務大臣に擬せられて、首を振つたと傳へられて居る。入閣わせずとも、研究會の有力者として清浦内閣の支持者たることわ言ふまでも無い。元來評判の好い人であつたが、貴族内閣の御用黨に屬するが爲めに、茲暫らく不人氣である。

自由黨を出でて特殊部落の改善に晩年をさゝげし大江天也翁から、私わ大日本弘道會長大木遠吉君の人と爲りを度々聞かされた。翁は薄い唇を舌で舐めずりながら

『感心な人ですよ。ごく平民的な人でしてね、ごく義理堅いところがありますよ。友人の爲めに判子をついたもんだて、一その債務が自分の方え移轉したです。すると大木さんわ、一言もなんとも云わずに居宅を明けて自分と家族わ小さな借屋に移つて、女中まで減らして大節約をするといつたかゝりで

すな』

といふことであつた。その頃大木さんわ無職無官の身で、これといふ學歴も無く、おまけにリウマチか何かで足が不自由であつた。故大木喬任の遺兒で特種の家庭教育を受け、人物が大きいといふ評わあるが、是々の仕事をしたという話わまだ聞かなかつた。その代りに大木さんわ新橋藝妓某を愛して妾としたが家政整理の際暇を與へると、某わ柳眉を逆立て

『私わ金の爲めに御前に身をまかせたのでわありません。御都合がわるければわるいでよござんすが、おひまをいたゞくわけがありません。私わ自分のからだぐらい立てすごします。御前とお別れすることわ死んでも厭です』

と駄々を揑ねたといふ貞節美談も雜誌か何かで讀みかぢつた事がある。岩倉侯の桃千代に於ける不遇と比べて、唯しも大木さんの艶福を羨まぬわ無かつた。

そんな先入心があつた爲であるか、私が弘道會の何かの會合の席上で初めて大木さんと會つた時に、

『成るほど此の人わ藝者に惚れられそうだ』

といふ妙な方面から月旦したことを今でも覺えて居る。

併し藝者に惚れられそうだとだけでわ、どんな人だかわからない。藝者の程度に應じて惚れられる人も亦ピンカラキリまで階段があるからである。藝者も評論家も自分の理解する範圍の人にしか惚れない。私は正直に白状するが、大木さんを見ながら、此の人に惚れる藝者わ、即ちこの人に惚れられる藝者でなければならない。この人を見れば、この人に惚れた藝者もほゞどんな女だかわかるような氣がする。とつまらぬ事を考えて居た。

中年貴族のうちに荒つぽい遊びをする一團があつて、大木さんわ其中でも有數の荒武者であるといふ事だ。成る程顔附から腕白らしく出來て居て、ぐり〳〵した眼玉と卷舌の發音と、のどのゴロ〳〵する聲色のような調子とが、腕白氣分を増して居る。場所わ築地精養軒であつたと思ふが、最初休憩室で多くの來客の間をぴつこ引き〳〵泳ぎまわりつゝ、少しもわだかまりなく、應酬する工合わ、腕白そうでわあるが毒氣がなく、どこやら意氣で居て又品が好かつた。

○

大木さんわ不自由な足を人一倍勢よく踏ん張つてあるくために、双方の肩をゆすることが又非常である。それを見て居ると私わこの人わいくら貧乏しても、いくら藝者に惚れられても、又いくら足のリヨウマチに罹つても、斷じて此位ぢつとして居る

人でわないような氣がした。年の盛りに一弘道會長、一貴族院議員で納まつて居るのわ不思議なように思われた。そうわ思つたが私が別にどうしようも無いから、弘道會長としてだけ話をしてその日わ別れた。

それから間も無く、東本願寺で立憲政友幽明會と稱する追善會が開かれた時にも大木さんわ出席して例の腕白な調子で人をかきのけて出て行つて弔辭のようなものを讀んだ。樺子さんの令兄の柳原伯わ大木さんの親友であるが、大木さんの後姿を指して、如何にも腕白らしいのを笑つて居た。

それから一二年して大木さんわ一足飛びに原内閣の司法大臣に就任した。のち鐵道大臣に轉じたが兩省とも大木大臣の評判わ嘖々たるものであつた。司法大臣でも鐵道大臣でも大木さんわ出張が大すきで、殆んど役所の椅子に腰をかけて居たことが無い。不自由な足を引ずつて何處えでも威張つて出て行つた。そしてその用事がすむと、引拔いて大日本弘道會長と早替りをして土地の特殊部落を視察した。特殊部落でわ誰とでも膝を交えて話したから、此の殿様わ大抵の平民よりも能く其の方面の實情に通じて居る。

それも其の筈、此の殿様の部落熱わ親ゆづりである。明治二年頃大江天也が築地梁山泊なる大隈邸に寄食中、淺草の長吏彈内記を大隈夫妻に紹介し、大隈參議から民部卿大木喬任に說き、大木から次の民部卿井上馨に傳えて初めて貶稱廢止令の發布を見るに至つたのである。その機運の中に人となつた大木さんわ、目下の立場わ悪いけれども、元來が特殊部落に同情することのできる人である。

『千人未滿を代表するに過ぎぬ貴族内閣』といふのも事實である。その支柱者の一人たる大木さんが百萬の部落民から感謝されて居ることも事實である。階級鬪爭の漸次熟せんとする中に、一貴族と水平社とが默契の形になつて居るも一奇である。

整腸消化劑ビオフェルミン

ビオフエルミンは本邦嚆矢の糖化菌含有乳酸菌製劑にして整腸と消化の兩作用を兼有し、諸般の腸疾患の治療並豫防に對し賞用せらる。

ビオフエルミンに對する知名醫家の實驗報告二百有餘に達し殊に小兒の消化不良、綠便、下痢に應用し卓効あり。

粉末及錠劑あり、全國有名藥店に販賣す

製造元　神戸市二番町　株式會社神戸衞生實驗所

發賣元　武田長兵衞商店　大阪市東區道修町

神經衰弱 ヒステリー 不眠症 特効 カルモチン

カルモチン錠　二十錠入（金九拾錢）百錠入（金貳圓四拾錢）

安意に且つ容易に服用し得らるる鎭靜催眠劑にして神經衰弱、ヒステリー、神經性不眠症等に應用し確實に奏効す。

醫學博士山田鐵藏先生、醫學博士佐多芳久先生、醫學博士矢尾板四郎先生、醫學博士荒井恒雄先生の實驗報告集あり、郵呈す。

◇全國有名藥店に販賣す

發賣元　武田長兵衞商店　大阪市東區道修町

關東代理店　小西新兵衞商店　東京市日本橋區本町

詞華

南信州の歌（二百首）

與謝野寛
與謝野晶子

其一

與謝野寛

君と行き春の初めに目にすなり南信濃の山々の雪

旅人に若き主人（あるじ）の指させる山みな雪を被（かつ）かぬは無し

わがために西石川（にしいしかは）の湯のあるじ名を教へけり雪の峰々

ひと目見て心は飛びぬ槍ケ岳その頂の雲にひとしく

青空に穂高、乗鞍、槍ケ岳みな現れて白き朝かな

うたた寢の夢のなかにも春寒し乗鞍の雪肱に近くて

大いなる炬燵の上に親と子が打ひろげたる山の地圖かな

近き木に翼を鳴らす風のあり常念嶽の雪を蹴散らし

山深く入らであるべし遠く見る雪の姿の大いなるかな

たそがれの雪を照して明星は炬火を置く乗鞍の上

二三片雪をもてくる風ありぬ燕ヶ岳の今朝の消息

この里は市と山とに近くして泉に影す綺羅としら雪

幾重にも雪の光れる槍ヶ岳穂高の上に青き空かな

山の名は聖者の名より尊かり山を禮する今日の心に

つつましく山を拜みし古の人ごころにもなりぬべきかな

心先づ麓に寢ねて昂ぶるは既に穂高の雪に觸れけん、

蝶ヶ岳つばめが岳の名はあれど山はしらしら雪けぶりする

澄みとほる心の上の詩の如く雪をいただく常念ヶ岳

雪しろき幾重の山を西にして光る淺間の夕づく日かな

大空もにはかに垂れて岩に觸れ吹雪するなり乘鞍の山

田を越えて雪をかづける遠山の頂多く見ゆる里かな

ひるまへに蝶ヶ岳よりさらさらと粉雪の降りて日のさせる畑

寒きもの旅の心に先づありて共に泣くなり乘鞍の雪

空遠く飛彈につづける雪の峰けはしく卓し我師にも似て

十ばかり藍とセピヤの線を引き末の子が描く日本アルプス

はね返す心のありや靜かにも山に壓されて旅に眠るや

雪ふれる幾重の山を渡りきて淺間の里の戸を鳴らす風

山は皆われを抱かんとする如し險しけれども人に似ぬかな

一とところ雲を洩りくる冬の日の下に明りぬ松本の城

山々の雪をながめて返す目に靑くぬるめる女鳥羽川かな

風なくて蝶ヶ岳より蝶のごと折々ちらす峯のうす雪

雪のせて空に動かぬむら山の縛めをさへ解くよしもがな

山を見て打默したるわが姿瘦せたるのみぞかの山に似る

山に問ふ思ふところの拙きは雪に臥せども濟むべからず

人知らぬ苦しきことを負ふ身にも比べて山の雪を思ひぬ

冬の山をんなの襟に舞ふべき色は無けれどなつかしきかな

わが旅を伊那の敏弼きて訪ひぬ友の心も淋しかるらん

上伊那の春の谷より來し友と燕ヶ嶽のふもとにて逢ふ

信濃路に知る友も無し知るは唯伊那の敏弼外三人ほど

若くして我と知りける矢島の子頬髯くろぐろ年長けしかな（以上淺間温泉にて）

筑摩より急ぎて諏訪に越えつれば唯見て止みぬ伊那の片はし

冬木立ほそき流の青みけり天龍川のみなかみの山

山を見て更に上なる青空にわが目の行くは快きかな

冬がれの桑の木畑に立ちたるは甲州勢の千本の槍

桑の木は芽をつつめども冬の日の旅に歌なき身は枯れにけん

川ちかく長き丁字の柵ならび葡萄のおち葉霜に重なる

正面の雪黒くして背の光る諏訪湖のうへの曉の富士

大いなる圓き不思議の靑き紋地に一つあり諏訪の湖

雲すぎて日かげ變れば柔かに湖上の山の黄ばみたるかな

蘆枯れて細き箱舟三つ眠る角間の川の落口の砂

なつかしく古りし欅の間より路はつづきぬ諏訪の城あと

太き輪のゆるく過ぎたる跡殘りみぎはに黄なる冬の草かな

炭竈の靑きけぶりの立ちなびき夕山寒しみづうみの上

砂ぼこり廣き大手を城あとへ馬のけしきに馳せ通る風

石を置く木けらの屋根の紫を越えてふくらむ靑き湖

諏訪の水今年(とし)凍らず君きたり手を浸す日を早く知りけん

夜となれど湖水の明りしばらくは白楊の木に消えやらぬかな

たそがれの湖を見るわが影に枯れてまじりぬ一むらの蘆

聲たえて更けたる街のともし火のほのかに濡るる諏訪の湖

たそがれの水明りよく吹く風にうら枯れながら鳴れる蘆の葉

諏訪平(すはだひら)上(かみ)の社の木の間より見ればつづきぬまろき藁塚

われの髮やうやく寒しみづうみの春の緑(みどり)を借りて塗らまし

隅々に火の祭する街ありと夕は見ゆる諏訪のみづうみ

人の身を山の境にきて置けど愁は消えず雪にあらねば

諏訪の街まれには一つみづうみて向ひて開く門(かど)もあれかし

旅なれぬわが末の子が寝ねかねて母を呼ぶこそ哀れなりけれ

夕闇に隠れたれども一ところさざ波ひかる諏訪の湖

路暮れて諏訪のみぎはにつづきたり桑の立枝の冬枯の中

美くしき章を重ねて讀む如く諏訪の旅寝の二夜となりぬ

夜の更けて戸を叩く客汽車の笛廊下の音の多き宿かな

みづうみを更に高きに眺めんと曉に行く諏訪の裏山

遠山の雪のいただきその前に黄なる草山あをき湖

この朝の諏訪の山々やはらかに女となりて水を覗きぬ

心をもそれに染めつつ歌ふなり明るき諏訪のみづうみの青

獨楽となり舞ふ形しぬ日を受けし刈田の上の藁塚のむれ

前山にかくれて諏訪の街よりは見るよしも無し蓼科の山

子ら去りて親の心に上諏訪の驛にはかにもうつろなるかな

城あとの石垣に立つわが袖を諏訪の水より風きたり吹く

わがこころ牛にひとしく今朝放つ諏訪のみぎはの草山の上

風ふけば冬を惜みて畑に立つ桑も弓をば張るけしきかな

かげろふや諏訪山のうへ紫の板の石にも黄なる草にも

川端の湯の噴く井あり鍋などの打ひたされて猫柳さく

冬晴れて刈田の上の石垣に日のあたりたる諏訪の城あと

みづうみの美くしきかな冬の日も戀に幷せて共に思へば

初春の湖水につづく田の上に晴れつつ黄なる百の藁塚

水の上に岡谷の街のしら壁がひときは光る諏訪の曙
牡丹屋の昇りて降る梯子段踏めば愁のすこし變りぬ
城あとの木立に近く三味鳴りて朝より晴れし湖の街
諏訪に來て心は歌を成し難し今年凍らぬみづうみの如
立ちぎはに諏訪に別るる悲しさを遠き友にも告ぐる消息
半時間われに遲れて立つ友も悲しからましみづうみの驛
よろこびは未だ盡きねど人三人わかれを云ひぬ湖のもと
上諏訪を少しはなれて目に白し中天にある蓼科の山
初春の旅のをはりの感激を高めて白し蓼科の山
いそがしく煙を吐きぬかの汽車もわれの歴史に似たるものかな

山の風こころに霜を吹きつけぬ我をも見るや枯れし木立と

雪白し冬に枯れたる落葉松の林のうへの蓼科の山

やはらかに我の愁とまじるなり入日のなかの甲州の山

日の落ちて猶しばらくは頂にひかりを残す甲斐の峰々

雪の峰青き水をば眺めきて今日の明るき我が心かな

其二

與謝野晶子

連山の雪の一つに觸れも見で淺間の丘に寢るあぢきなさ

淺間湯は筑摩の川の發すると云ふ山續き松山に湧く

客房の板戸の鳴るに驚きてわれ溫泉の靄に隱るる

山の日は梓の川の流域の見えわたるまで全く昇りぬ

有りと見えやがて跡なくなりぬなり梓の川は遠方にして

山國の雲の美くしもろもろの天女の相に馴るる心地す

山山の雪濃く淡しあまたたび見がたき夢の夢ならんこれ

この國と飛彈の境に山百重かさなるものを日の歩み入る

見るよりは山の白雪深からん人の寒さにそれも變らじ

きらめくは雲が領したる山の顔見んと思へる明星にして

浴房へ池の氷を見て通ふ丸木の廊の悲しかりけれ

もの云はず泣きつつ夜半の雪降れる長き屋廊(やらう)の右左かな

浴泉(よくせん)のものうくなりぬ仙女をば願ふ心もまた捨てにけん

むつかしく物を思へど温泉の口傾かず止まず走らず

白雲の中にてすなる人間苦(にんげんく)生がひありてわれも作れる

山水のなまめかしかる一章とおのれの章の模かぬ辛(から)さ

雪國の温泉町の明方のうす墨色のなつかしきかな

醫王山神宮寺にて打つ鐘もないがしろなる渦卷の風

温泉の溝川となり柵(さく)のもと走る音をば明方に聞く

連山の雪にひかれてとゞまればやがて淺間も薄雪ぞ降る

薄雪を枝に置きたる松風を聞き知ることも淋しかりけり

浴泉す雪の中より通ひくるいみじき息をもてはやしつゝ

筑摩野を雪早足に過ぎしかば雪とも見えずほの赤きかな

愁をばいまだ忘れず筑摩湯に髪を洗ふとひとしからねば

狂ほしく淺間の丘の斜面より吹き立つ風をいかがすべけん

安曇野の梓の川の光ること青玉に過ぐ一月にして

山の日は宿屋の裏の菜園のえびいろを愛でよき油塗る

立ち離れ白馬の方に隠れ行く朝のうす黄の雲のふるまい

淺間橋女鳥羽河原のましろきは地の白山は天上の白

蝶が岳輕げに白し雪厚き穂高の峯のかたはらにして

な觸れそと筑摩平の隔てたる山の心の知らまほしけれ

死ぬばかり信濃の國に愛着す雪かがやし山かくも云ふ

冷たしと感ずる山も覺えぬもあらめと雪の山あはれなり

一月の信濃の旅の明るけれ天がけるとも云はんばかりに

山の名をあまた知りたる宿主人現れつれば日も歩み寄る

西北のつばくら嶽に極れる山にくらべてひろき空かな

山は山人は人ぞと山の云ひ人言ひぬべきもの足らぬ景

連山のただ横ざまに長きかな地上の力限りあるため

ひまもなく雪のかかれど肩濡れず淋しき雪の降れる國かな

信濃路をめぐれる山の半輪に雪かがやきて月に勝れり

連山の穂高と聞けるあたりよりほのかに白(しら)む朝ぼらけかな

自らの時移りぬと信濃路の淺間の湯にて知りぬほのかに

朝(あした)より隱れてありし常念(じやうねん)の峯雲を出で友遠く來ぬ

飽くとなく浴泉の地を轉ずるもかねて思はぬ淋しさにして

山風の急なるにしも追はれつつ筑摩を出でて伊那の野に入る

湖尻の南はなべてなつかしき朽葉の色の上伊那郡

天龍は三尋(みひろ)に足らぬ水なれど門川(かどがは)のごと芹の青ます

天龍の大河(たいが)の芽(め)をば見て過ぎぬ諏訪の岡谷(をかや)の町のはづれに

こと成らぬ亂れ心の相(すがた)をして諏訪の湖氷せぬ冬

身はおきて手をひたすなり温泉になじみもつかぬ旅心より

淺間より諏訪に來りて夕闇の湖畔を伊那の緻弼と行く

しべりやのかの夕風を知る如し諏訪の湖畔の白楊の枝

惑へる灯三昧にある灯もありて水は山よりあはれなりけれ

湖の聲ききつけし夕闇の諏訪のいでゆの桑畑の路

わが燃ゆる胸と觸れたり千年を待ちて氷の湖を見よ

湖へ茅野と有賀を併せたる幅ある雲の降りてこしかな

湖を掩ふばかりの灯影あり山の人皆世をたのしめり

人早く來て住みつきし湖の四里の周圍の七ところの灯

熱高き諏訪のいでゆの源を戀と言はしめ今ひと度は

睽し夜の片はしの殘りたる諏訪の宿屋の浴房の床

百合摘むと友の云ひつる上諏訪の御堂の山に小雪ちる朝

見る限り力張りたる山なれど湖水なれども明日いかならん

大神が白狐の姿したまはん悲哀もあらず春早く來て

驛亭に小雪吹き込む山風もありて我子の車を送る

旅路より弟の手をとりていぬ丁の年をこえし一の子

子の車去りて七時立ちぬれば都に入りぬ描く幻も

別後にも母はゆたかに浴泉記書かんと思ふいまだ睡れば

白楊は皆孤兒の相をして諏訪の湖畔に立てる冬かな

末弱き蓼科おろし旅人は吹けどボプラの騒かざるかな

駒が嶽乗鞍が嶽その中の遥かなるにもわれ淋しけれ

樓に見て地上とするにやや高き青よこたはる諏訪の湖

湖に添ひて石切る山ありぬ乾ける坂のあはれ續ける

諏訪山に板石を切る男より勝るとするはただ若さのみ

眺めやる心と諏訪の湖の間にあれど威なし上諏訪

紋つけし旗もおし立て湖心をば襲はんとする岡谷下諏訪

いさりをも戀に痩せよと作りけん諏訪の入江の細長き船

渚には一つの船の裂かれたる半身に似る細き船浮く

温泉が間に人の身を置かず湧きて角間の川に流るる

人の云ふ非人の湯小屋傾きて川の芥にことならぬかな

水城なる頭の石に旅人の現れぬなど雲の思ふ日

一筋の光道となり愁をば放つなりけり諏訪の湖

町行きぬ諏訪に生れしわが友の心となりて隅にわたりて

暗き影全くもたざる湖は夕を知らず夜早く伸ぶ

このさかひ雪氷など云ふものを唯ごとならず思へるも無し

湖は心安げに生れいではた消えて行く灯をあまた持つ

月夜には木曾路の山を層塔に立てし御寺も現れぬべき

山岫の褄形したる白雪とともにうつくし宵の明星

見る限り湖畔の山は美くしき燈火の縄に縛められぬ

守屋嶽亀甲形にうす雪を置きたる華奢もなつかしきかな

透し見よ守屋の嶽のうす雪は黃昏前の一刻にのみ
幽かにも湖の背の見ゆるなり月光よりもなまめかしけれ
日と雪の合ひて臙脂の燃ゆるなり諏訪の湖水をめぐりたる山
御手洗しの垂氷なれどもしら玉の燈籠に似てなまめかしけれ
氏人の聲の外なる聲きこゆ諏訪の社のあああおん柱
蓼科のいみじき雪を覗くなり諏訪明神の廻廊の窓
若くして驕る心に見んとせし水晶の瀧かかる山かな

時論

政界風雲錄

○

清浦内閣はとう／＼解散をやつた。どの道解散にならうとは誰しも豫想して居つた所だが、あゝ云ふ狀態の下に之を斷行すべしとは恐らく何人も豫期しなかつたらう。夫れ丈け這回の解散はまた世上物論の種にもなる。何れにしても議場の時ならぬ騷擾の爲め内閣諸公が過度に狼狽したといふ非難は到底免れない。

解散は議員に對する懲罰ではない。相手方の態度が氣にくはぬとて輕々に濫用されては堪つたものでない。彼我の確信がどうしても一致しないとき最後の決を民論に訴ふといふが解散の政治的根據だとすれば、自分も論辯し相手方にも十二分の發言の機會を與へた上でなければ之を斷行すべきでない。此點から觀て今度の解散は、多くの人の云ふ通り、非立憲の誹しきものである。

されぱと云つて、一部の人の云ふ樣に、清浦内閣はもと／＼議會に解散を命ずる政治的資格を缺くものだとするのは、飛んでもない間違だ。清浦内閣を貴族院内閣と云ふの正しきや否やは姑く別問題として、假りに然りとするも、其の據て以て立つ所の貴族院に解散と云ふことがないからとて、衆議院に解散を命ずるは避くべきだといふ議論は出て來ない。下院に何の根據も有たない内閣が新に選擧の勝敗を爭ふは無意義でないかと云ふ說もあるが、併し國民の多數が政府を扶けんとて現政黨の何れもに屬する候補者を選出しないといふことも有り得るから、清浦内閣の解散斷行は理論上必しも不都合でなく實際上また無意義とすべきではない。政略上の見地から解散を避けよと忠告するは可い。斷じて解散權を恃んではならぬぞと迫るのは大なる誤りだと思ふ。

故に解散に關して清浦内閣に責むべきは、其の時期の選定に

就てのみである。解散その事には何の咎むべき點もない。寧ろ堂々其の所信に倚て天下に爭ふの勇氣を多とすべきである。但し來るべき選擧を果して公平にやるか否かにつき讀者と共に大に警戒を要するは勿論である。

○

解散を見るに至つたのは議院がわるいからだと清浦首相の聲明書はいふ。議員の多數はまた反對に責を內閣に歸するは申す迄もない。政府と政黨とこゝ暫くは責任のなすり合をするとだらうが、併し國民はこの問題に付ては殆んど何等の興味をも感ぜないやうだ。何故なれば解散せざる可らざる政界の情勢は新年早々早く既に醞釀し、勃發の動機を與へた者の孰れかは深く之を問ふの必要がないからであらう。而して政府政黨の爭をこゝまで激しく導いた全經過のうち、若し甚しく吾人の心を痛ましめたことありとせば、そは正々堂々たる政見の爭をば忌むべき罵詈讒謗の醜陋に墮せしめたことでなければならない。それも單純なる馬鹿呼ばはり位ならまだいゝ。階級鬪爭を激發するの、國體の尊嚴を傷くるの、果ては上　皇室を欺き奉るのなどと、際どい所で不當に相手方を窘窮せんとするに至ては、社會の公安を紊る寧ろ之より甚しきはないと思ふ。大阪驛頭で犬養氏を擲らうとしたものも、平田內府や牧野宮相やを脅かしてあるく連中も、果ては議場に闖入して亂暴をやつたのも、恐らく皆之等の宣傳を眞に承けた正直者の所爲であらう。民間政客の國憲擁護は官憲の危險思想呼ばゝりと共に、も少し冷靜愼重な省慮を必要としないか。敵を陷るゝに急なるのあまり更でも不安なる人心の激情を不當にそゝるを厭はざる連中は、情に於て諒とすべきものありとはいへ、今日此際吾人は大に之を責むるの必要を認むるものである。

○

併し昨今の物論の中、宮中府中の別を紊るとの說だけは聊か之に傾聽するの必要がある。但し之は平田內府に向けべきもので、清浦內閣倒壞の理由に之を算ふるは當らないと思ふ。

餘り結構なことではないが在來の慣例をしばらく許すとすると、山本內閣辭職の後をうけて何人に組閣の大命を降すべきやを、御下問を蒙て元老が決するといふ慣例は、我國の今日に於てまた之を認めねばなるまい。そこで平田內府が東京と興津の間を往來して清浦奏薦に盡力したのは、もと攝政宮殿下の御下命に出づるものとせば、所謂宮中府中混同の難は起らない。首相奏薦の首動者は依然元老だといへるからである。然るに今度の場合は、少くとも新聞等に現はれた所によると、聊か樣子が違ふやうに見ゆる。元老の同意は求めたに相違ないが、後任

奏薦の積極的主動者はどうも内府と宮相とであるらしい。少くとも東京興津間の往復が殿下の命に出づるや否やは頗る疑はしい。果して然らば今度の場合は平田内府が自ら進んで政界の渦中に飛び込んだものと謂ふべきではないか。元老の奏薦する者につき、あらためて殿下の御下問あつた場合、その觀る所を進言するは、常侍輔弼の役目として當然だが、後に御下問を蒙るべき事柄をば先に廻つて纏めやうとしたのは、越權の沙汰ではなからうか。この點事態頗る重大、十分の調査を要し又十分の疏明を要することと信ずる。

平田内府が宮中府中の別を紊るの非違を犯したと云ふことは、其自身毫末も淸浦内閣の運命に必然的の關係はない。宮中府中の別を紛更することに因りて生れたのだからやめなくてはならないと云ふ者もあるが、淸浦子爵の内閣組織はどこまでも大命拜受の結果である。殿下が大命を降すまでの間に内府がどんな間違をしたにせよ、其の責任は淸浦子の負ふ所でないのみならず、若し之に口實を藉りて一旦拜受した内閣組織をやめる樣なことあらん乎そは却て大命を拒むの譏を免れまい。

故に曰ふ。宮中府中の混同に付ては宜しく平田内府を責むべし、此點に基いて淸浦内閣の辭職を迫るは全然その據りどころがないと。若し夫れ最高顧問府の長たる淸浦子が輕々しく出盧したその事を宮中府中の混同なりとするの説に至ては、其の妄固より辨疏を要せずして明白であらう。大命に基いて組閣の事に當る、それがよしんば内府其人であつたにしろ、もと之を違憲非法とすべき理由がない筈である。

○

斯くいへば淸浦内閣の成立に少しも瑕疵がない樣に聞へるならんも、實はさうではない。子が大命を辭したり受けたり頗る据らぬ醜態は固より世の非議に値するも、併し之は殿下を欺き奉つたの公器を弄したのと難ずべき性質の問題ではない。政治家としての資格を疑はしむるには十分だ。が、だから受けた大命を返上せよと迫るは些か見當違の觀があると思ふ。唯特に子に責むべきは、子が組閣の業を擧げて全然之を研究會の某々氏に一任せしことである。殿下は一淸浦を信任して大命を降し給ふたのだ。此の長き倚託を蒙り乍ら全然之を第三者に一任するは、上に對する責任は自分一身に之を負ふのだとは申せ、甚だ恐れ多い事ではないか。自分を信じての注文を受けて、之を私かに他人に作らすのでは、假令それが自分が作るより良く出來ても又假令わるく出來たら金を返すまでだと覺悟したとしても、心ある工匠の顧客に對する道ではない。況んや天下の公器を托せらるゝ場合に於てをや。或は曰ふかも知れぬ、研究會の

某々氏等に一任した方が自分が作るよりも一層よきものを作り得ると。そんなら清浦子はあらためて大命を辭しその研究會の某々氏に代りて大命を降し給はんことを奏進すべきであつた。與へられた此事の最適任者でないと識りつゝ自ら名譽ある地位を平然として取るは稍取り輩の好んで爲す所斷じて宰相の手を觸るべき所ではない。

併し之とても清浦內閣に辭職を強要すべき政治的理由とはならないことは勿論である。殿下の大命を他に托するの不可なるは言ふまでもないが、我國今日の政界に在てまさか研究會の某々氏輩を奏薦し難いと云ふ事情や、研究會幹部の驕慢なる遂に清浦子をして極度の讓歩を敢てせしめた內情やを考へ合せると、事實に於て清浦子の態度を若干諒とすべき理由ないでもない。果して然らば之に口實をかりて內閣の辭職を迫るは甚だ大人氣ないといふ感がないでない。首將清浦子の薄志弱行、貴族院若殿原の虛傲、新內閣顏觸の貧弱、一として賴もしく思はせる分子はないが、併し出來上つて見れば其の技倆はともかくも未知數だ。柄にもない奴が出て來たからとて俄に之を引き倒すに焦らなくともよからう。やがて其の云爲施設につき正面から堂々の戰陣を張つても遲くはあるまい。否斯くすることが實に立憲の常道である。此見地に立つて僕は、清浦內閣の一日も早く退かんことを切望するに拘らず、昨今の護憲運動には相當の反感を有することを自白しておく。

○

昨今火花を散らして居る護憲運動に對しては言つて見たい點も多々あるが、大體に於て論點多く肯綮を外れ、所謂政權爭奪の徒なら格別、一般識者の熱情をそゝるには餘りに調子が低過ぎると思ふ。本誌の讀者に向つては此上くだ〳〵しく之を評論する必要もあるまい。

唯之に關連してどうしても言はずに居れぬ事がある。それは外でもない。我國の政爭がつねに中世紀的型式を離れぬことである。何をか中世紀的型式といふ。敵を其の出發點に於て否其の胎生時代に於て擊殺せんとすること即是である。惟ふに敵を其の未だ芽萌えせぬ間に殺して了ふ、之れ程安全なことはない。故に賴朝が天下を取れば平家の殘黨を津々浦々に探して之を殺し、家康が豐臣家に代つて權力を握れば相手方の葉を枯らし根を絕やして後の祟りを一掃するに努むる。この筆法から云へば、淸盛が常盤御前の愛にひかれて賴朝兄弟を生かして置いたのは政治家にあるまじき大きな失策であつた。併し斯の如きは斷じて現代式の戰法ではない。さうでないといふ所に實は現代政爭の特色があるのだ。即ち今日の要求は、敵にも十二分の機

會を與へ、堂々と土俵の上にのぼせて萬人環視の下に其の力を角さうといふのである。立憲政治が社會全般の文化的向上と相伴ふ所以は卽ちこゝにある。故に吾人は常に戒心して政爭の形式が動もすれば中世紀型に墮するの弊害を避けなくてはならぬ。此點から觀て亦僕は今次の護憲運動に多大の反感を覺ゆるものである。何となればこの運動は現政府をまづ其の出發點に於て倒さんと試むるものだからである。

隣りに同じ商賣を始むるものがあると開店前にケチをつける。競技の場合には相手方をスタートに於て斥けて仕舞ふ。斯くして利便を獨占むるは楽な方法だが、社會全體としては百弊のもとだと謂はなければならぬ。淸浦內閣に何の非議すべきものとありとしても、之を倒すための手段を例に依て中世紀型に擇んだことは、憲政の發達の爲め僕の私かに慨歎するところである。

そこになると英國のボルドウインは實際偉い。遠い外國のことを論ずるは僕當面の目的とする所ではないが、心ある讀者は必ずやこの點にも思を潜めらるゝを辭せないだらう。

○

護憲運動を難じたからとて淸浦內閣に同情するものと思はれては、僕また甚だ迷惑である。考へて見れば見る程淸浦內閣の出現には癪に障ることが多い。政策上のことは之から實際やらして見た上でなければ判らぬが、第一に其の意氣地なさがどうだ。護憲運動家から突つ込まれての返事のだらしなさには、つく〴〵愛想が盡きる。運動家曰く、なぜ組閣の事を擧げて研究會に托したかと。首相答へて曰く、賴んだ覺はない、只會內の二三子に相談したまでだと。何故首相は研究會に賴んだのがどうして惡いと逆襲するの勇氣を出さなかつたのか。賴んだに相違なくんば男らしく責任を負ふがよい。而してその責任を負うことに堂々と理窟も立つではないか。騷がれゝば理も非もなく屈するといふのが由來先輩政治家の常とはいへ、餘りに見苦しき態度ではないか。

此點は研究會とても同じことだ。日本今日の政界に於て、研究會が組閣の事に卒先運動したとてナゼ惡いか。惡いと信じてゐるならやらぬがよい。やつた以上は相當の覺悟はあつた筈だ。然らば護憲運動家の詰問に對へて、研究會としては何等の關係がない、只二三子が個人として組閣の事に與つたまでだなどゝ逃げる必要は何處にあるか。研究會の此際に於ける態度は、實に淸浦老以上に醜陋を極めて居る。

それも理屈が立たぬなら仕方がない。立つ理屈を立てず、相手方と進んで力爭するの勇氣がないばかりに、現在我國では所謂

運動が流行するのだ。多少の虚勢を張つて騒げば譯もなく無理も通る。子供の喧嘩の樣なもので、此方で逃ければ何處までも追つ驅けて來る。何時までも子供に追ひ廻されて居ず、一度位は大人らしく踏み留つて見てはどうか。如何に貧弱な清浦内閣でも、今日の護憲運動位を突つ放すに譯はなかつた筈と思ふのである。

○

政府や民間政客の棚卸しは暫く措いて、政局の將來はどうなるかを考へて見やう。來るべき總選擧で、政友本黨と護憲三派との孰れが勝つかは一寸見當がつかぬ。併し之れ丈けは疑あるまい、假令政友本黨が勝つとしても、勝つに就ては可なり大袈裟な買收をせねばならず、從て自然民望を失ふから、やがては矢張り三派側に勝利の榮冠はうつるだらうと。但三派が此の榮冠をいつまでゝ戴き得るだけにうまく織つて行くかどうかゞ危まれる。其邊のこまかい經緯は他日を期して詳論して見たいと思ふが、差當り近き將來に於て三派連合が優勢を占むる見込があるとすると、政局の將來はどうなるか。玆に僕は少らぬ興味を覺ゆるものである。

三派連合の優勝の上に我々の期待し得るものは少くとも三つある。一は普選の即時斷行、二は軍部大臣の文官任用で、三は貴族院の改正である。三派の政客に之等の改革につき何れ丈の確信ありやは疑なき能はざるも、保守的立場を鮮明にせる政府及與黨と戰ふ政略上、民意に阿つて少くとも以上の三綱目は今やどうしても旗じるしとして掲げない譯には行くまい。さうすれば、所謂嘘から出た誠の諺の通り、此の三事の實現は早晩見られ得やうと思ふ。すべて政界のことは斯んな風にして發展して行くものだ。眞面目に考へれば甚だ頼りない話のやうだが、併し其の結果は驚くべき程大きいものがある。以上三綱目の實現の結果將來の政界が如何に幸ひさるゝかは深く問はずして明であらう。

只一つ遺憾なるは勞働問題及び思想問題に關する解決の急に實現さるゝ見込の少いことである。現代の政界が何を當面の急務と觀て居るかの狀況の反映としては是亦已むを得ない。併し之等の問題に付ても、之を適當に處理せらるゝに都合よき狀況を齎らすべきだけ、略ぼ豫想することは出來る。

○

最後に僕は一公民として這次の政爭に對し如何の態度をとるべきかを一言して筆を擱きたい。

前述の如く、護憲運動にも同情すべき點甚だ尠く、清浦内閣の頼み難いことを勿論だとすれば、近き政爭に對して吾人は、

然將然的態度をとるの外はないと思ふ。詳しくいへば、政黨者流の宣傳に迷うて徹頭徹尾政府側がわるいものと思ひ込んではいけない。さればといふて、政府側の或は敢て犯すことなきやと疑はるゝ不公正の對選擧策に對しては、最も深甚の警戒を加ふる必要がある。清浦內閣にして本當に選擧を公正にやる覺悟なら、其の存立の理由はある。併し本當に其の積りなら、內相法相を更迭する位の勇斷あつて然るべきだ。さうでない所を見ると、此邊に關する誠意甚だ疑ふべきものがないでない。況んや政友本黨は政府の直接間接の援助の下に既に戰備に成算ありと傳うるに於てをや。

孰れにしても我々公民の立場は、此際飽くまで超然的態度を持し、良心の命ずるがまゝに眞に信賴に値する人格に投票するといふことでなくてはならぬ。運動家の宣傳に乘つて狂奔してはならぬ。騷ぐものは騷ぐ者に委せよ。僕達は選擧の當日投票所に行く前一時間も考へれば間違なく投票の義務を完ふすることは出來ると信じて居る。それまでは一生懸命家業に出精するがいゝ。憲政有終の美は、實は斯うした國民の冷靜沈着な態度から生るべきものである。選擧に熱中するは決してほむべきことではない。(大正十三年二月四日千虎俚人)




歯牙の保健に
チューブ入
クラブ煉歯磨
歯科醫學者の推賞せる摸範的歯磨
口に爽快
歯に有効
紳士の髭剃に
クラブ石鹸
カテイ石鹸
安全剃刀
クラブ洗粉
乾きタオル
クラブゼリー
クラブタルカン
眉目清秀
お顔のアレない クラブ石鹸

或る女の生活

藤村千代

（一）

日比谷ホテルの食堂給仕であるお紺は、今日で丁度五日、斷りもなしに休んで居た。

最初の一日は公休日であつたが、その唯つた一日、誰にも氣兼ねなしに休めるのだ、といふ意識が、お紺の體中から精根を拔き取つて了ふ程がつかりさせた。彼女は終日蒲團の中から出なかつた。脂垢に汚れた蒲團の襟は絶えずひやりと首筋を撫で廻すし、古タオルを捲きつけた男枕は、中に何が詰めてあるのか石のやうに固かつたにも拘らず、彼女は起きようとはしなかつた。そしてその翌朝、彼女はほんたうに病氣であつた。

激しい熱と頭痛が同時に遣つて來た。何か、金槌かシャベルかで頭を打ち割つて了ひたかつた。卵の殼のやうに打碎かれた頭蓋骨の中から、どろどろに溶けた腦味噌が

流れ出しさうな氣がした。

彼女はその苦痛の中で幾度となく、彼女が病氣で出勤することが出來ないから、二三日休ませて貰ひたい、といふ事を、ホテルの支配人宛てに書いて遣らなければならないと思つた。と同時に、彼は勿論の事それを聽かせられた誰でもが、ほんたうにはしないだらうと言ふ事を思つた。嘘とすれば、今の場合一番下手な嘘と思はれるに違ひないと言ふ事を證據立てるために、態々書くのだ、と言ふ氣がした。――實際その社會では、嘘とほんとうとが餘りに入り亂れて居た。嘘はほんとうのやうに見え、ほんとうは嘘のやうに見えた。――彼女はじりじり、じりじり後すさりするやうな氣持で、一とき伸しに書かないで居た。

暗くなつて吉助が外から歸つて來た。

「どうしたのだ?」

と無感動な聲で訊いた。

お紺は、答へをする代りに笑顔をして見せた。彼女がどんなに苦しいかと言ふ事を、母親に話すやうな調子で話したとしても、彼はすぐに退屈するだらうと言ふ事や、彼にとつては「如何したのだ」と訊く事は、「外は寒いよ」と言ふのと同じだと言ふ事や、それだから決してお紺の答へを待つて居るのではないと言ふ事やが、お紺には解つて居た。

然し、彼女は吉助の無頓着を恨みはしなかつた。彼はお紺の病氣に對して無頓着であると同時に、その病氣のために、彼女が一錢も齎らさなくなるだらうと言ふ事に就いても無頓着であるやうに見えたのであつた。

「俺は一寸、外で何か喰べて來る。お前は喰べたくないか。」

お紺は、朝から何にも喰べなかつた事を思ひ出した。林檎、葡萄、バナナ、梨、龍眼肉のはちけた小さい實、――そ

れらの果物を盛つた洋皿がホテルの食堂の勘定臺の蔭に列べてあつた。お紺は幾度となく、それを盗み出して、誰も見て居ないところで喰べたいと言ふ欲望に驅られたが、一度も成功した事はなかつた。――などの甘美な果汁が、熱のある舌の上に、乾いた海綿のやうになつて居る舌の上に浸みて行く快さが、思ひ出された。ふと、今なら、何れでも欲しいものが喰べられさうな氣がした。然し、如何してそんなものが喰べられるのであらうか。お紺は又、答へをする代りに笑顔をして見せた。彼女は炭酸水か、いや、唯の水でも好い、思ふさま飲みたかつた。それよりも、無感覺な鑢紙のやうになつて居る舌の事を忘れて了ひたかつた。

吉助の出て行く後姿を見送り乍らお紺は、彼が今日も、會體の解らない方法で幾らか得て來たのであらう、とぼんやり考へた。

と、吉助は直ぐ引返して來た。

「おい、あの着物は何處にあるんだ。――おや、お前は疊んで置かなかつたんだね、こんなに皺くちやにして投げ出して置くなんて亂暴ぢやないか。」

彼は一寸險はしい眼をして、部屋の隅の行李の上にあつた着物を摘み上げた。その着物は、つい一昨日までお紺が着て居たものであつた。細かい矢絣の双子か何かで、地にも柄にもぼんやりと時代が附いて居て、全くそれは若い娘の着るべきものでなかつたが、お紺はそれを同じやうにこの次の部屋に間借りして居る、二人連れの看護婦から借りて居たのであつた。

「そんなに續けて休む氣だつたら、何故一應返して置かないんだ。五月蠅くつて仕方がないぢやないか、」

吉助はそれをぐる／＼と捲いて持つて出やうとした。

「あの、それを今返すの？」

「當り前さ、階下で俺にさう言つたのだ、縫ひ返したいと思ふから、今着ないやうだつたら一寸返して呉れと言つたのだ。こんな襤褸をもう借りるな。」

吉助の荒い足音を聴き乍ら、お紺は羞耻、悔恨、漠然とした憤怒等のために苦しめられた。何故借りたのだらうと思つた。何故、もつと早く返して置かなかつたのだらう、と思つた、人の着物を平氣で毎日着て居た自分が恥しかつた。何よりも催促された事が恥しかつた。

突然、お紺はその事を感じたのであつた。あれを、――それは誰にも氣附かれてはならない事であつたのに、――あの女達が氣附いて了つたのであらうと言ふ事を感じたのであつた。

――お紺はあの着物を殆んど十日以上も借りて居たのであつた。初めの二三日、その着物と彼女の肌とは如何しても馴染む事が出來なかつた。お紺は、その着物が、生前餘り好きでなかつた人の形見別けの着物であるやうな氣がした。絶えずこの着物は決して自分のではない、と言ふ氣がした。と、五六日經つ中に、その着物の變な重さがだん／＼と薄らぐやうな氣がした。お紺は褪めた藍色の矢絣を、ずつと以前から着て居たやうな氣がした。それが人のものだと思ふのが、難しいやうであつた。お紺は隣室の二人の女に階段の途中で摺れ違つたり、往來で出會つたりするのを惧れた。彼女等に着物の禮を言はなければならないであらうけれども、如何してそれが出來るであらうか。お紺は、その着物を其儘、返さずに濟ませないものかとひそかに考へて居たのであつた。――

さう言ふ危惧がお紺を驅りたてた。お紺は、あの女達がそれを氣附いたのではあるまいかと言ふ事で、漠然と腹を立てて居た。

お紺は彼女等の何れとも知り合になつては居なかつた。彼女の借りた着物が、何れの持物であるのか知らなかつた如く、二人の女の顔も聲も足音も、彼女の頭の中ではごつちやになつて居た。階下の流し許で顔を合はす事があつても、力めて挨拶を避けるやうにして居た。

然し、何時の間にか、彼女等がこの家の女主人である産婆から技術上の教へを受けるために同居して居る見習ひ看護婦である事、一人前の産婆になる爲めに、或試驗を受ける準備中である事、そして、熱心な基督教信者で救世軍の女士官である事などが、唐紙一重を隔てたお紺の部屋へ解つて居た。夜になると彼女等は、小學校の生徒が歴史を諳誦するやうな大きな聲で節を附けて、産婆學の教科書を讀んで居たから。そしてそれが濟むと、抑揚のない男のやうな聲で救世軍の歌を唱つて居たから。

或朝、吉助を介してこの女達がお紺に袷を貸して上げたいと言つた時、お紺は赧くなつたのであつた。彼女が、單衣を重ねて着て居るのを、隣室の女達にまで知られて居ると言ふ事が、お紺を極り惡がらせたのであつた。——十一月の初めと言ふ寒空に、お紺は一枚の袷も持つて居なかつたのであつた。夏からずつと着續けて居た縞のメリンス（それは黑つぽいぼんやりした、袷にも見凝ふ柄であつた。）の下にもう一枚の單衣を重ねて着る事に依つて、寒さを凌いで居た。お紺は歩き乍ら着物の裾がまくれ上るのを、まくれ上つてそれが單衣であるのが解るのを惧れて、力めて内輪に小刻みに足を運ばなければならなかつた。それから、ホテルの裏の通用門を潜つて、花崗岩の階段を地下室へ降りる時も、降りてから給仕女の集つて居る化粧部屋へ行つて、其處でホテルの制服になつて居る紫無地の元祿袖に着替へる時も、お紺はその單衣を誰にも氣附かれまいとして、どんなに慘めな思ひをした事か解らなかつた。それを氣附かれる事は彼女の破滅であつた。もうその時はホテルに出るやうになつてから、十日以上になつて居るのに、お紺は彼女の身態

を調へる事が出來なかつたのであつた。

お紺は無愛想な聲で、彼女は直き新しいのを買ふから、と言ふ事を告げて、借りる事を拒んだが、それを單なる遠慮としか思はなかつた女達は、次の部屋から大きな聲で叫んだ。

「何卒お使ひ下さいましな、私達の親切を無になさるものではありませんわ。神樣が貴女に袷をお與へなさるまで、私達のをお貸するのは私達の義務ぢやありませんか。」

お紺は神樣と言ふ言葉を聞いて爭ふ事を止めた。彼女等は充分に、彼女等自身の親切な行爲に感動して居るやうに見えたのであつた。若しくはそれを享樂して居るやうに見えたのであつた。

然し今では、お紺の投げ遣りを不滿足に思ふ心や、無意識的な女らしいもの惜しみやが、その感動や享樂やの上にあるのだと言ふ事を、お紺は感じたのであつた。

そして、彼女は直ぐにその着物の事を忘れて了つた。

三日目の朝、お紺はけろりと快くなつた。浴衣の上へ吉助の褞袍を重ねて立つたり坐つたりして居た。頭が非常に爽かであつた。こんな日に何處か、勝手なところへ遊びに行く事が出來たらどんなに好いだらうと思つた。そして、時間になつてもホテルへ出やうとはしなかつた。

彼女の休んで居た間に、ホテルの化粧部屋にも料理場にも食堂にも、彼女の這入つて行く場所がなくなつて了つたであらう、と言ふ事が感じられた。下足番の男も玄關ボーイも帳場の番頭達も、エレベーターの運轉手も支配人も皆、彼女に對して執念深い惡意を持つて居るやうな氣がした。彼女の欠勤は、彼女が彼等に取つて全く無用であつた事を證據立

てる好い機會になつたのではあるまいかと言ふ氣がした。

お紺はふとその事を思ひ出した。最後の日の夜、毎時の通り地下室から上つて來ると、料理場へ行く狹い道路の曲り角で、おせいが突立つて居るのに出會したのであつた。お紺はぎよつとした。見られたな、と思つた。然し、階段の上からは全で坑道の入口のやうに眞暗で、貯藏場の中でぼんやりともつて居る赧茶けたタングステンの光りの屆きようもない事に氣が附くと、お紺は何喰はぬ顏でおせいの側を摺り拔けて行つたのであつた。——その事を今ふと思ひ出した。何故かてつきり見られたに違ひない、と言ふ氣が頻りにした。今頃は、あの化粧部屋の片隅で仲間の女達に、それから料理場のコツク達にまですつかり話されて了つたのではあるまいかと思つた。

お紺はその地下室へ日に幾度となく降りて行つて金を胡魔化して居たのであつた。彼女は、規則通りに、客からの貰ひを全部帳場へ出して、それを一定の時機に古參新參の別に隨つて配分して貰ふ、と言ふ方法を信じる事が出來なかつた。餘り馬鹿々々しかつた。新參の彼女は自分の差出した金額の三分の一しか取分がないのであつた。で、最初の唯つた三日の間だけ言はれた通りにしたつきりで、あとは毎日胡魔化して居たのであつた。

帳場へ行く前に、用足しをするやうな振りをしてそつと地下室へ降りて行つた。貯藏場の壁になつて居る煉瓦にぴつたりと體を寄せて、しゆつと燐寸を摺つた。その灯が指先まで燃えて來ない間に、お紺は袂の中を探つて紙幣や銀貨をすかして見乍ら、大急ぎで勘定した。そして、その中の幾何かを帶の間へ捻ぢ込んでから、ゆつくり上つて行つた。

それには、少しも罪を行ふと言ふ觀念が伴はなかつた。初めの間は、無感動に殆んど機械的に遣つて居たが、次第に形容する事の出來ない魅惑に、引摺られて行つた。最後の客が紅茶を呑み終るのを、じりじりして待ち乍ら、地下室へ走つて行つたのであつた。——

この事が皆に知られたであらうと言ふ事は、少くともお紺を困惑させた。彼女は全五日休んだのちにも、押し切つて出て行く勇氣がなかつた。

（二）

そこへ、豫期しては居たが餘りに唐突過ぎる支配人からの手紙が來た。彼女はもう出勤するには及ばない、と言ふ事を簡單に記した外に、計算書が添へてあつた。

計算書には、お紺が誤つて手から辷らして割つた洋皿の數と、その代價とが記されてあつた。それに加へて、彼女が支給された紫無地の元祿袖に對する呉服屋への拂ひと、前借の六十圓とを、彼女の稼ぎ高から差引くと、それは實に、二十六錢の不足になつて居ると言ふ事が瞭然と解るやうに記されてあつた。お紺は、ぼんやりと何時までもその計算書を見詰めて居た。そして、彼女がこの一ヶ月の間働いて得たものは、何時の間にか何處かへけし飛んで行つて、手許には何も殘らなかつた事や、もう二度と、あの地下室で皺苦茶になつた紙幣を勘定する樂しみはなくなつたのだと言ふ事やを、ぼんやりと考へて居た。

ことことと隣室の女が階段を一段宛つ拭いては降りて行く音がした。それから暫くして、厠の扉が明いてその中を掃除して居るけはひがした。さあとバケツの水を流す音がした。

「上田さん。」

階下から女主人が、軍鷄の鳴くやうな嗄枯れた聲でお紺を呼んだ。

「流しを早く片附けて下さいな。狹くて仕樣がないじやありませんか。」

お紺は、又初まつたと思つた。四十過ぎるまで孀暮しを續けて居たこの女主人は、極端に頑冥で口喧しくて、同じやうに潔癖であつた。たつぷりした縮れ毛を、全で鬘を冠つたやうな具合にちつとも形の變らない、日露戰爭當時に流行つた揚卷に結ひ上げて居たが、その頭髮が彼女の凡てを代表して居た。

お紺は、この女から口小言を言はれないやうにしよう、と心掛ける代りに、好い加減ずぼらにして置けば何時でもあの女が教へて呉れる、と思つて居たので、何を言はれても苦にしなかつた。

流しの隅には、彼女の粗忽に依つてほんの一寸縁の缺けた赤い土釜が昨日の朝から放り出してあつた。飯粒が附いた儘で、磨き砂の飛ばつちりを一杯浴びて居た。それが、拭き込んだ板敷や神棚のやうにちんまりと片附いて居る食器棚や、何か塗りでもしたやうに磨きのかかつた鍋釜の中に見出されると、泥沼から上つて來た許りの野良犬のやうに汚かつた。お紺は、その土釜とこの家の中での自分とが同じやうに思はれた。誰も見て居ないところで、一寸べそでも搔きたい位の恥しさであつた。

さつさと洗つて了つて、滴を垂らし乍ら二階へ持つて上つた。

「…………だけど、私は如何して働く事が好きになれないのか知ら。」

階下で赤ん坊の泣く聲がした。それをあやして居る鈍い女の聲と、もう一段高い女主人の聲とが聽えた。

お紺は彼女の癖で、はつきり聽えないそれらの聲に、自分勝手な解釋を試みた。暫く旦那が來ないのだな、と思つた。あの薄ぼんやりの女は赤ん坊と一緒に過去になつたのかも知れない、と思つた。さうだと解ると、吝嗇な女主人は用捨なく叩き出す事だらう、と思つた。何でも好い、變つた事が起れば好い、と思つた。

それに繋がつて、お紺は彼女自身の生活に就いて考へた。然し、何にもはつきりとした考へは浮ばなかつた。又、强

いて浮ばせようともしなかつた。
今夜でも吉助に頼んで、不用になつたホテルの元祿袖を質屋へ持つて行つて貰はう。あれで、三四五十錢も借りられれば、五日位は如何にかなる、と言ふ事をぼんやり考へて居た。
お紺は彼女自身の生活を、他人から見られる程絶望的なものとは考へて居なかつた。彼女は貧乏に馴れて居た。間歇的に起つて來る彼女の虛榮心に追ひ掛けられる事さへなければ、水車小屋の番人のやうに、貧乏が苦にならないのであつた。その上に彼女は性來の怠け者であつた。そして、怠け者に賦與された或本能を持つて居た。その本能はお紺にさまぐな事を教へた。女中奉公をする代りに、ホテルの給仕女になる事を教へた。又、ホテルを止させられたにしても、彼女は決して困りはしない、と言ふ事を囁いた。

その夜、吉助の留守に彼の友達の北原が遊びに來た。
矢つ張り遣つて來たな、とお紺は思つた。子供らしい見榮から、お紺に惚れて居ると言ふ事を、決して白狀しようとはしないこの男が、わざく訪ねて來た事はお紺を愉快がらせたのであつた。
「私もつい其處まで行くところなのよ。」と、彼女は笑ひ乍ら最初の嘘を吐いた。隣室の女達や階下の女主人にけどられない爲めに、お紺は男を二階へ上げなかつた。そして、列んで步き出した。
「止したんだつてね、今日、ホテルへ電話を掛けたらさう言つた。」
「止させられたのよ。」と、一寸立留つて、「ほら、私、奴紙鳶のやうでせう?」
と、お紺は態さと振袖の兩袖を擴げて見せ乍ら、彼女のおどけた身態を笑はれる前に自分で笑ひ出した。そして、そ

の兩袖をシーソーのやうに動かして、私は仕方がなくつてこんな格好をして居るのじやあないのよ。唯ほんの物好きで遣つて居るのよ。と言ふやうなしぐさをするのであつた

「ちつとも可笑しかあないよ、」男は又、拙いお世辭を遣ひ乍ら、「如何言ふんだい？　向ふから止して呉れつて言つたのかい？」

「まあさうなの、だからもう、毎日毎日公休日許りだわ。」

お紺は片足で小石を蹴飛ばし乍ら、男の後から隨いて行つた。跳ねるたびに束髮ががくつがくつと搖れ上つた。道化た影法師が踊り乍ら隨いて來た。

お紺は殆んど習慣的に、彼女がまだ十五か六の無邪氣な娘ででもあるやうに見せかけようとする、意味の無い技巧を屢々弄するのであつた。それは、極く偶に成功した。そして、彼女は如何かすると、何の屈托もない育ちの好いお孃さんのやうに見えた。

ふとお紺は、この五六日がどんなに退屈で詰らなかつたかを思ひ出した。美しい月光のせいで、フイルムの中から脫け出したやうに見える男の顏が、毎時見馴れた北原ではないやうであつた。彼女はロマンテイツクな考へから、何時でも戀人を假想して居たが、今はこの北原が、彼女のほんたうの戀人であつたかのやうな氣がした。丈の高いために知らず識らず屈み加減になつて居るじじむさい不格好な背中までが、今はこの男の優しい心を語つて居るやうな氣がした。

「彼處へ行かうか、」

突然、北原は立留つた。

「何處？　何處へ行くの、」

「僕は先からさう思つて居たんだ。一遍、君と一緒に鎌倉へ行つて見たいと思つて居たんだ。」

と、鈍い不決斷な調子で、半分は獨り言のやうに言ふのであつた。

狹い露路の間から、製本屋の裁斷機が喧しい音を立てて、男の聲をもぎ取つて行つた。

「だけど――私、着物がないのよ。」

お紺は少しふざけたやうに、又は揶揄ふやうに言つた。そして、褞袍の袖へ兩手を入れて、紙雛が畏つたやうな眞似をして見せた。

「着物？」

彼の聲は最早や笑つては居なかつた。

「君は未だ、着物が作れなかつたのかい？」

この學生は、眞面目な勉强家であつた。彼の父親は、田舍の小さい街で警察署長をして居た。そして、自分の俸給を割いて息子に送り乍ら、父親の勤勞に對して感謝すべき事を强い、その金額と同じ程度に有用な學問をすべき事を强いて、彼の息子を小さいエゴイストに作り上げたのであつた。

北原は胸の中で、鎌倉へ泊りがけで行く費用とこの女の着物を一枚作る金高とを勘定した。さうする事に依つて、未だ樂しみもしない樂しみが半分位逃げて行くやうな氣がした。彼の顏色が暗くなつた。

「私、古いので好いのよ。先に八丁堀で見たやうな、あんな銘仙で結構だわ。着物さへあつたら、何處へ行つても好いんだけど。」

男の氣持に逆らはないやうに、優しい聲で斯う言ひ乍ら、お紺は、この男の吝嗇な事が半分可笑しく半分氣の毒であ

つた。何れにしても、この男の財布を開かせて自分の着物を買はせるのは愉快な事であつた。

然し、北原を憂欝にさせたものは、彼の勘定高い心だけではないのであつた。「君は未だ、着物が作れなかつたのかい?」と聽いた時、彼はお紺に對して輕い詰問の氣持を含ませた積りであつた。若しくは、幾らか非難した積りであつた。彼は、お紺と彼の友人の吉助とが兄妹だと言ふ事を疑つて居た。從つて、お紺が、彼女の兄よりもつと違つたものであるかも知れない吉助の爲めに、ホテルで働いた金をすつかり失くして了つて、彼女は一枚の着物も作つて居なかつたと言ふ事は、そして、その爲めに彼がお紺の着物を作つて遣らなければならないと言ふ事は、彼を不快にしたのであつた。にも拘らず、彼には、それを瞭然させる事が不可能であつた。如何して彼にそんな事が聽けるものか、と言ふ氣があつた。一寸の間、彼の心の中で吝嗇と見榮と、同じやうな强さの疑ひとが縺れ合つた。彼は非常にいら〳〵した。そして最後に、如何して鎌倉へ行かうなぞと言ひ出したんだらう、と思ひ乍ら、お紺の手に十圓紙幣を一枚握らせたが、ふと、あの厳格な父がこんな事を知つたら、どんなに情けながる事だらう、と思つたのであつた。彼はちつとも心が晴れなかつた。

「じやあ、十二日の六時にね、」

と、二三間歩き出して、又引返した。そして、全で違つた事を言ふやうに、彼はちつとも金の事などは考へて居ないと言ふ風に、

「——それから、あの着物は出來るだけ好いのを、きつかり十圓になる位のものをお買ひよ。他の事に遣はないやうにね、じやあ、さよなら、」

と足早やに行つて了つた。お紺はその十圓の遣ひ道をさま〳〵に考へ乍ら、ホテルの地下室で帶の間へ捻ぢ込んだも

の金と同じやうに、すつかり彼女のものになつて了つたのだ、と言ふ氣がした。

(三)

約束の日の夕方、お紺は北原と落合ふために支度をして出掛けた。

最寄りの停車場で電車を待つて居ると、反對の側を吉助が歩いて居るのを見た。と、一臺の貨物自動車が危ふく彼の腹を掠めて過ぎたと思ふ拍子に、ひよいとおどけた腰付をして一つ體をくねらせると、四角い袂を態ざとのやうに振つて、電車線路を横切つて走つて來た。醉つて居るな、とお紺は思つた。ふいに、不思議な喜びに似た氣持がこみ上げて來た。彼女は、吉助がいきなり、おい、何處へも行くんぢやないぞ、と言ひ乍ら彼女の手をぐい〱と曳つ張つて行くのではあるまいかと言ふ氣がしたのであつた。

然し、吉助がお紺を見出したのは、少し遲過ぎた。彼女は、自分の妄想を拂ひ落した。直ぐに吉助は側へ寄つて來て、

「何處へ行くんだ?」

と、しらふの時は決して見せた事のないにたにた笑ひを浮べ乍ら聽いた。ぽつと脹らんだ薄い眼瞼が弓なりに崩れて、お紺の心を卷き込みさうにした。お紺はくら〱とした。眼の前の赤い電柱が二本に、三本に見えた。が、彼女は直ぐ思ひ返した。吉助が彼女を愛して居たやうに見えたのは、ずつと昔の事であつたと言ふ事を。にも拘らず、むず痒い情慾が足の爪先まで走つて行くやうな惡感に襲はれた。彼女は、彼女自身にも解らない、へんにはしやいだ聲で言つた。

「あら、こないだ話したじやあないの、北原さんと……」
「だから、何處だい?」
「鎌倉。」
「へん、鎌倉――かい?」
お紺ははつとして、彼の顔を見た。顔一面に、「輕蔑」が擴がつて行つた。
「だつて、着物を…………」
お紺は一寸口ごもつた。北原から取つた金の中で、六圓三十錢の古着を一枚買つた殘りは、すつかり吉助へ手渡した事を思ひ出させたかつたのであつた。
「さうだよ。だからこんなに薄つ暗くなりかけて出掛けるのさね、――俺が、ちつとでも妬いて居ると思つちや不可ないぜ。――だが、その着物は思つたよりよく似合ふよ。」
お紺には、吉助の額だけが見えた。その額から青い火が飛び立つて居るやうに見えたのであつた。
「ほい、電車が來た、」
と、思ひも掛けず吉助が踏臺へ飛び付いた。お紺も續いて乘つたが、彼女は自分が電車へ乘つた事を知らなかつた。
彼女は、ぼんやりして、吊革につかまつて居た。袖のない襦袢の肩口から、すうつと風が忍び込んだ。お紺はふいに、田舍の家の竹籔がさわ〳〵鳴つて居る音を聽いたやうな氣がした。竹籔の蔭の茗荷の白い花が瞭然眼に見えた。彼女ははつとした。そして、吃驚して邊りを見廻した。
「おい、俺は隨いてくんじやあないよ。この電車は新橋驛の方へ行くのかも知れないが、俺の行きたい方へも行くのだ

からね、」

側で吉助が、酔どれた口を借りて毒付いて居るのが耳に這入つた。然し、お紺はその意味を悟らうとはしなかつた。

暫く、お紺は無心になつて、窓越しに波のやうに揺れて後へ飛んで行く街の人や家や荷車を見て居た。と――何時の間に降りたものか、白い襟巻をちよいと後へはね返し乍ら賑やかな十字路の人ごみの中へ消えて行く吉助の姿が、そして、その後へ寄り添ふやうにして一人の女の随いて行く姿が眼に這入つた。お紺は、その女の眞白な足袋と吾妻下駄とを見た許りであつたが、女の顔まで見たやうな氣がした。そして、吉助のこんなところを見るのは、今が初めてではなく、これまでにも幾度かあつたやうな氣がした。

然し、それらの變な淋しさは、嫉妬と言ふには餘りに淋しいものであつた。

婦人待合室を覗いて見たが、北原は未だ來て居なかつた。お紺は、産婆の家のボンボン時計が進んで居たのだな、と思つた。そして、同じ邊りを行つたり來たりして居た。ひよいと顔を擧げると、洗面所の嵌め鏡に、極彩色の牡丹の花のやうな白粉の顔と鮮かな紫の矢絣の着物とが、全で離れ離れな印象を與へ乍ら、フツトライトにまともから照らし出された舞臺姿ででもあるかのやうに映つて居るのであつた。お紺は狼狽てて眼を反らした。彼女はその顔と着物とが自分のだと信じる事が出來なかつた。誰も見て居ないところへ行つて、顔を洗ひ落して了ひたかつた。寧ろ、北原の來ない間に歸つて了ひたかつた。

お紺は、少し宛つ耳が熱くなるやうであつた。度の過ぎた化粧のために、襟巻もせず羽織も着て居ない寒さうな肩付や、新天の表を張つた薄汚れた草履や、色の褪めたモスリンの帯などが、どんなに惨めに見えたかと言ふ事か、彼女を

押潰して了ひさうであつた。構内を歩き廻つて居る赤帽や巡査や、若い男や女や、青い風呂敷の大きな包みを背負つた小僧や、凡ての人々が彼女を見て居るやうであつた。犬までが見て居るやうであつた。彼女は、それらの人や犬が、皆彼女がそんなにまで濃い化粧をしなければならなかつた譯を知つて居るに違ひない、と思つた。そして又、何にも知らない田舎者の女中か何かだと思つて見れればどんなに好いだらうと思つた。然し、お紺は「耳隠し」と言ふ頭に結んで居た。

彼女は待合室の片隅でじつと考へた。彼女が再びこんな惨めな思ひをしないために、彼女は直ぐに身態りを調へよう、さうするために、彼女は盗みをしても構はない、とさへ思つたのであつた。

最早やお紺は、吉助の事もその女の事も考へては居なかつた。擬ひ毛皮の襟巻や、ルビーの指輪や、ぼかし模様の羽織やが頭の中にこびり附いて居た。それらは一時もなくてはならないものであつた。然し、それを如何して手に入れたら好いのか、と言ふ事に至つては、彼女には何の心當りもないのであつた。

お紺は同じところを往つたり來たりした。先刻から、非常に長く待つて居たやうな氣がした。ふと、彼女は彼女を見て居る人々が、中でも改札口の傍に立つてじつと此方を見て居る巡査が、さう思つて居るのに違ひない、と思つた。――あの女は、掏摸か萬引か、さうでなければ極く下等な淫賣ではあるまいか、と――彼女は、大急ぎで賣店へ行つて、蟇口から二錢銅貨を出して夕刊を買つた。そして、待合室の一隅に腰を下して、非常に落付いた風を裝ひ乍らそれを讀み初めた。

然し、彼女はちよつとも讀んでは居なかつた。室の中へは、絶えず男や女が出たり這入つたりした。皆、誰かを待つて居るやうであつた。相手が來ると、一寸めくばせをして立つて行つた。お紺はその度びに新聞から眼を離して、貪る

やうにそれらの後姿を、殊に若い女の裝ひを凝らした後姿を見送つた。彼女には、その女達が皆、如何はしい肉體の知れないもののやうに思はれた。然し、それらの如何はしさは、非常にぼんやりして居た。お紺は、彼女の頭の中で考へて居るやうな事が、何處で、如何したなりゆきで行はれるものか想像も附かなかつた。

お紺は、もう一度自分の身態を見廻した。それから、起ち上つて寒さうに肩をすぼめた。と、硝子越しに、驛前の自動車と自動車の間を摺り拔けて此方へ這つて來る北原の姿を認めて、狼狽てて待合室から出て行つた。北原に對する不可思議な懐しさが、お紺の胸に湧いた。

「まあ、何て遲いんでせう?」

北原の眼がまじ〱とお紺の着物を見て居た。

「遲い?だつて、五時じやあないか。」

「さうよ、五時だけど、餘り早く來過ぎたから、十時間も待つてたやうな氣がするんですもの。」

お紺は晴々と笑つた。その笑ひの筋肉が撕れる表面で白粉が硬るやうな氣がしたが、最早や、お紺の心はその爲めに暗くなりはしなかつた。

二人は列んで出て行つた。もう少し遲い汽車で出掛けるのに、その一時間許りを驛前の小さいカフエで待たうと言ふのであつた。

(四)

「いらつしやい!」

美しい女が二人、同時に立つてお紺達を迎へた。お紺は殆んど反射的に體をすくめた。そして、女達に聽えないやうに低い聲で囁いた。

「彼方、ずつと彼方の隅つこへ掛けませうよ。」

女達の、如何？餘り好いお客じやあないわね、と言つて居る眼を感じたのであつた。大理石の卓子、銀の藥味入れ、羅の衝立、鉢植にした灌木、それらのものが、お紺の心に或、錯覺を感じさせた。お紺は、ちらと女達を盜み覗て心の中で獨り言つた。あの人達が給仕女で私がお客なのだわ、——

それから、女達の方へ背を向けて腰を下すと、お紺は同じやうな低い聲で囁いた。

「珈琲を二つ、ね、何にも要らないのよ、こんなとこ、早く出て了ひませうね。」

北原は沈默つて點頭いた。

お紺は珈琲を啜り乍ら、非常な速度でお饒舌になつて行つた。全で、お饒舌だけが彼女の憂欝を追ひ散らすのだ、とでも云つたやうに。北原に買つて貰つた着物が到底も古着とは思へない程、彼女にしつくり合ふと言ふ事や、もう、これからは彼女は着物のために慘めな思ひをしなくても濟むと言ふ事や、あれで少し許りお釣りが出たけれども、彼女のお小遣ひに貰ひたいと言ふ事やを、おぺつか混りに話すのであつた。

それらは殆んど凡て嘘であり乍ら、又、嘘でないとも言へた。お紺は一途に、この貧しいパトロンを喜ばせたいと思つて居たのだつたから。

二人が椅子から起たうとした時であつた。

「やあ、お紺ちやんじやあないか、」

と、お紺の眞向ひになつて居る化粧煉瓦の壁に嵌め込んだ大きな姿見に、見覺えのない四十からみの男の影が映つたと思ふと、づか／＼と近附いてお紺の肩に手を掛けた。

お紺は無意識に肩を揺すつてその手を振り解かうとしたが、さうする代りに曖昧な薄笑ひを浮べ乍ら――その表情は殆んど習慣的になつて了つた彼女の愛嬌であつた。――その笑顏が崩れない間に、その男の名を思ひ出さうと焦つた。

誰だつたか知ら、誰だつたか知ら、――

その時、半分起ち掛けて居た腰を又下した北原が、鏡の中で、お紺の不謹愼な笑顏を嫉めるやうないかつい眼をして見せたが、そのいかつさは直ぐ消えて、代りにおど／＼した不安な色が、彼の高い眉骨の邊りに現れた。

お紺は、ちらと北原の顏を見て狼狽てて鏡から眼を反らした。と、同時に、「あゝ木耳！」と心の中で叫んだ。丁度、側に立つて居た例の男の横鬢に、薄い猫毛を冠つたその横鬢に、茹でた木耳のやうに大きくふくらんだなりでこびり附いて居る異様な耳を見出した時、お紺はその男が誰であつたかを思ひ出した喜びのために、殆んど叫び出さうになつたのであつた。

お紺は思はず兩手を打つた。

「まあ！」

それは東小路男爵であつた。噂では、由緒正しい維新の元勳の長男に生れ乍ら、妾腹の故を以つて男爵に落されたと言ふのであつたが、さう言ふ噂を聽かなかつたら、誰一人としてこの男を振返るものもないであらうと思はれるやうな男で、顏には當然惠まるべき品位すらなかつた。酒肥りにむくんだ赧ら顏は、多年の淫蕩な生活に加へて、次第に墮ち込んで行く貧窮が刻み込まれて居た。にも拘らず、この男には「男爵」の鷹揚さが染み附いて居た。それを誰よりもよ

く知つて居た彼は、好んでそれを女達の間に賣りものにした。その爲めに、決して通りすがりの不粹な四十男の扱ひを受ける事はなかつた。「木耳」の異名と共に、或種の興味を持たれた事は嘘ではなかつた。

お紺でさへも「男爵」の暗示にかかつて居た。この男の經歴を、さう輕蔑すべき男ではないと言ふ事を、北原に知らせたいと思つた程であつた。

「お連れ？」

と男爵が、彼女の袖を引き乍ら疑はしい眼配ばせをして訊いた時も、お紺はすかさず、

「ええ、私の從兄、――この方、東小路男爵よ。」

が、北原の顏には、お紺の期待した感動は現れなかつた。直覺的に吉助を彼女の兄だと稱するのもこの手だな、と言ふ考へが、掠めるやうに彼の胸を過ぎた。欺かれた者の感じる憤懣が微かに頭を擡げて、直ぐ消えた。彼の受けた教育は彼に、お紺が極めて常套的な經路を踏んで、賣笑婦に墮すべきものである事を告げた。そして、彼女を男爵と稱する男に任せて、速かに椅子を起つべき事を教へた。

然し彼はさうしなかつた。彼の頰には不決斷な薄笑ひさへ浮んだ。そして、誘はれる儘に、男爵の卓子へお紺の後から隨いて行つた。

其處には、男爵の連れである何れも不良老年と言ひたいてあひが三人赭ら顏の英國人を挾んで總立ちになり乍ら彼等を迎へた。

片語混りの日本語とブロークンな英語とが皆の口を衝いて出た。酒の飛沫が飛んだ。甲高い女達の笑聲と、男達のふさけた怒號とが混り合つた。

北原は、彼のぶまな地位を感じて、憂鬱になつた。そして、この輕佻な空氣を憎んだ。最後にお紺が、彼女の前へ差し出された蝦の油揚をさり氣なくつ突かうとした時、彼は、彼女の手からフォークを引つ手繰つて了ひたかつた。

やつと、彼は言つた。

「ねえ、行かなきやあ遲くなるよ。」

男爵が聽き咎めて、今から行くところがあるのか、と訊いた。

「ええ、――いいえ、一寸行けば好いのよ、」とお紺は曖昧に笑つて、「だけど、もう直ぐ行かなくちやあ不可ないこと?」

北原はお紺の顏を鋭く見た。そして、時計を出して、

「もう十二分、」

と言つた。

男達が騷ぎ出した。何處かへ行くのなら、北原だけが行つたら好いじやあないか、と言はん許りの樣子であつた。皆がお紺を引張つてわあつ!と叫び出した。

この思ひ掛けない、醉つ拂ひ共のお世辭が、一寸の間お紺を有頂天にさせた。このまゝ留つて居たいと言ふ考へが、強く彼女を支配した。彼女がその氣になりさへしたら、どんな事でも出來るのだと言ふ考へが、彼女の虛榮心をあふり立てた。非常な速さで、今夜この男達と一緒に過したら、と言ふ漠然とした想像が、彼女を引摺り込みさうにした。

然しその時、男爵が皆をなだめるやうに言つた。今日は連れがあるから又呼ぶ事にしよう、その代り、彼女は彼女の處番地を敎へなければならない、と言つてポケットから革表紙の手帖を出した。

醉ひどれ達の眼が、鉛筆を握つたお紺の手先にじつと凝り固つた。お紺には、それらの眼が赤い線香花火の玉のやうに又は飼ひ馴らされた野兎の眼のやうに愛すべきものに見えた。

外へ出ると、北原はいら〳〵し乍ら言つた。

「あれが、ホテルの常連だつたんだね、」

「ええ、――如何して？」

「君は一生涯、あんな奴等から女給扱ひにされるんだね、」

この一言は、お紺の自尊心を突き刺した。それが北原の口から出たと言ふ事は許すべからざる事であつた。お紺は、この男の不作法な失言を懲しめるために復讐して遣りたいと言ふ念に燃えた。そして、それが彼を侮辱する一番の言葉ででもあるかのやうに、心の中で呟いた。「吝ん坊…」そして、北原の短い學生マントの下からよれよれになつた小倉袴がはみ出て居るのを見乍ら、全で雨さらしの案山子のやうじやあないの、と呟いた。が、彼女は少しも怨む事が出來なかつた。

お紺は忌々しさうに北原を見た。丁度、切符を買ふ小錢を改める爲めに、立留つて、明るい方へ蟇口の口を向け乍らじやら〳〵と銅貨の音をさせて居る彼を見ると、如何してそのお財布に長い紐を附けて、貴方(あなた)の首へ捲いて置かないのとでも言つて遣りたかつた。

鎌倉へ着くと、碌に探しもしないで、二人は驛前の小料理屋を兼ねた安宿へ上つて行つた。

二人とも、何のためにこんな處へ來て了つたのか解らなかつた。北原は、皆あの醉つ拂ひの男儕のお陰だと思つた。

お紺は、この馬鹿な否ん坊のお蔭だと思つた。彼女は、夜が明け次第さつさと歸つて了ひたいと思つた。

軈て、北原は酒を命じた。お紺は咎めるやうに大きな聲で言つた。

「貴方、お酒を飲むの？」

それは丸で、貴方がお酒を飲むなんて、何て馬鹿々々しいんでせう、と言つたやうな調子であつた。

北原は不器用な手附きで、自分で自分の盃に注いだ。そして、直き眞赤になつて、學生劍舞のやうに下手な詩吟を遣り初めた。お紺は窓を開けて庭の植込越しに停車場の灯を見て居たが、何故か急に大粒の涙がほろ〳〵と溢れた。

「階下では、僕達の事を何と思つてるか知ら、」

北原が、好い機嫌になつて訊いた。それが、お紺には堪らなく腹立たしかつた。

「何とも思つてやあしないことよ。私が、そう言つて遣るから好い、私達は夫婦でも何でもないんだからつて、」

北原は、不可思議な酒精のお蔭で、ぼんやりお紺の顔を見詰めて居ただけであつた。

翌朝、小婢に依つて持つて來られた勘定書を、北原は長い間じつと見詰めて居た。軈て、新しい一枚の紙幣を出して拂つたが、その書附から眼を離さうとはしなかつた。

「何あに、」

お紺は帶を結び掛けた手を止めて覗き込まうとした。北原は狼狽てて袂の中へ丸め込んだ。そして、

「いや、」とさり氣なく作り笑ひをし乍ら、さも、これは冗談だと言ふ風に、「昨夜の酒は高い酒だつたよ、」

と言つた。が、彼の顔の作り笑ひは直ぐ消えた。そして、生きた魚肉の切り口に現れる顫動のやうに、眼にも見えな

い速さで、ぴり〳〵と顫へて居た。

彼はすつかり變節になつたやうに見えた。そして、急に見物は止めにして歸らうと言ひ出した。

「僕はすつかり忘れて居たんだ。十一時に大島さんの告別式の打合せがある筈だつたのに、」と言ひ乍ら、氣忙しさうに便所へ下りて行つた。

お紺は殆んど反射的に、床の間に積み重ねてあつた古雜誌の上へ手を伸した。そして、銀側の懷中時計と一緒に置いてあつた北原の蟇口を取り上げた、吝ん坊！私がそうつと盜んで遣るから、——固い捻り疣がぱちんと音がして開いた中には、よれた電車の回數券と歸りの切符が二枚と、銅貨を合せて十八錢の金が這入つて居るだけであつた。お紺は狼狽てそれを元のところへ置いた。そして、坐つたなりでじり〳〵と後すさりをし乍ら、坐蒲團の上へきちんと坐り直した。

そこへ北原が歸つて來た。蒼い顏であつた。俺にはもう、何にも面白い事はないのだ、と言ふ顏附であつたにも拘らず、お紺はこの時ほど、愛すべき彼を見た事がなかつた。その瞬間、彼女は彼女自身が度し難いものである事を感じたが、それには少しの悔いも伴はなかつた。

（五）

勝手口の腰高障子にそうつと手を掛けた。ふとお紺の頭に、階下の女主人の顏と見習ひ看護婦の顏とが浮んだ。彼女は、彼女が一晩泊つて今歸つて來た事を知られては不可ないと思つた。障子が三寸位開いた。細長い棒のやうな日差しが、板の間から石油焜爐を横切つて斜めに流れて居る米櫃の上へ、飼猫のみいがうづくまつて、お紺の方へ懶い一瞥を與れただけであつた。

お紺は、泥下駄を上向きにして提げ乍ら階段を上つて行つた。と、秋の魚の燒けるあくどい臭氣が、夥しい煙と共にお紺の鼻を衝いた。吉助が居るな、と思つた。彼女は一寸立留つた。何か、吉助の揶揄に備へるために考へて置かなければ、と言ふ氣がしたのであつた。

じゆうん、と脂の滴が火の中で燃える音がした。

「誰だい?」

聲と共に吉助自身が、開きを明けた。喰ひ荒された肴の骨と燗德利とが、お紺の眼に附いた。

「如何だつたい?幾らか貰つたかね、」

お紺は吉助の眼を見ないやうにして口早やに言つた。

「駄目、あの人、ちつとも持つて居なかつたんだもの、」

お紺は、吉助の薄いひん曲つた唇が、今にも斯う言ひ出しさうな氣がした。「何あんだ。何しに鎌倉くんだりまで出掛けて行つたんだね。それぢやあ全で、商賣になりやしねえぢやあねえか。」――あの十八錢で造花の簪の一輪も買はせて置くんだつたつけ、と思つたが、それさへ吉助の嘲笑を買ふ種になりさうであつた。

それは全く不思議な事に思はれた。吉助の前では彼女の自負と反抗とが、跡方もなく消えて行くのを感じたのであつた。最早やお紺は、あの北原の前での傲岸な彼女や、さま／＼なホテルの客の前での輕佻なお饒舌を縱にした彼女だと思ふ事は出來なかつた。彼女は、何の取柄もない、そして氣の利かない江戸つ子鍍金を施した唯の馬鹿娘に過ぎない自分を見出した。

斯うして自卑の中で、吉助の嘲笑を聽く事は、彼女には堪へられない事であつた。今は唯、彼女が何處からか金を持

つて來ると言ふ事に依つてのみ、吉助の興味を繫ぐ事が出來ると言ふ事が、朧氣乍ら解つて居た。

なつた。

吉助に知らせて遣りたい、と言ふ願望に驅られた。「それに私だつて、何時までも斯うして居られやしないし、」

――ふいと眼を擧げると、直ぐ彼女の頭の上の釘に、見覺えのない褞袍が、女物を仕立直したとしか思はれないお召の褞袍が、だらりと掛つて居た。お紺は、吉助がこの二階から姿を隱す積りなのではあるまいか、と言ふ危惧に襲はれた。それは今直ぐにでも起りさうであつた。

「だけど、如何して、そして、何處から持つて來たら好いだらう。」と、彼女は思ひに沈んだ。お紺の考へは何時の間にか、ホテルの食堂へ戻つて居た。其處では、晝でも美しい蓋ひ笠の總に圍まれた電燈が數知れず灯つて居て、人々を、不可思議な夜の世界の昏迷の中へ引摺り込んで呉れた。芳醇な異邦の酒、かぐはしい煙草の匂、强烈な脂粉の香、は夢幻の帷幕を垂れて、人々を、永久に醒める事のないかのやうに見える魔醉の海へ漂はせて呉れた。お紺は、その中を泳ぐ人魚のやうに、彩色美人の誇を縱にして居れば好いのであつた。――「七番さん、七番さん、」――それは、お紺の卓子番號であつたが、さう呼んで居る男どもの聲が、ふと、彼女の耳に聽えたやうな氣がした。靑いのや、赤いのや、さまざまな液體の盛つてある洋盃を高く差し擧げた、數知れない手が、お紺の方へ差し出されて居る有樣を、彼女は目のあたり見たやうな氣がした。――

かたんと音がして、それは、彼女が子供の頃に見た覗き眼鏡の變り目のやうに音がして、繪が下りた。

「だけど、もう一度ホテルへ頼みに行く事なぞ、到底も出來やしないわ、」

彼女には、彼女の投げ遣りな心掛けの爲めにホテルを止させられたと言ふ事が、取り返しの附かない損失であつたやうに思はれた。

けれどもその時お紺は、彼女の受持の卓子に集つて來た人々の顔を思ひ出した。その人々の誰かにうまく出會しさへすれば、彼女は直ぐに金を作る事が出來るだらうと言ふ事を考へた。

然し、何處で如何して出會したら好いのであらう。――彼女は、彼等の住所を刷り込んだ名刺を、貰ふ片つ端しから無くして了つて居た。お紺の耳に囁かれたさまぐな甘言が、それは、直ぐにでも行はれる筈であつたかのやうに、彼女の胸に思ひ出されて來た。

「いや、」とお紺は呟いた。「あんな事も皆、唯のお世辭であつたのかも知れないわ。」

彼女には、それらの男達が凡て、奸智に長けて居て、油斷のならない狡猾さを持つて居るやうな氣がした。彼女のやうな唯の田舍娘に過ぎないものに、金を呉れさうな者は一人も居ないやうに思はれた。

ふと、お紺は、章天元と呼ばれた支那人の事を思ひ出した。彼は今でも、ホテルに泊つて居る筈であつた。お紺が初めて、ホテルの食堂へ出た時に三圓のチップを呉れたのがきつかけで、二度か三度か、彼女の後を隨け、いや、或は附けて來たのではなく偶然に其處いらを歩いて居たのかも知れなかつたが、つい、この二階の窓下までも來た事があつた。

一緒に支那へ行きませう、と幾度となく言つた彼の蒼白い眉の薄い柔和な顔が思ひ出された。

「お紺ちやん、そんな工合に眉を引くもんぢやありませんよ。」

と、お紺の顔を見詰め乍ら、眞面目になつて言つた事もあつた。――あの男なら決度貸して呉れるに違ひない、―

――お紺はホテルの裏口からそうつと這入つて行つて、笑ひ乍ら彼の部屋の扉を開けて遣らうと思つた。そして、彼の顔を見るといきなり、三十圓貸して下さい、と言はうと思つた。

上海の假政府の密使だと言ふのが專らの評判で、莫大な金を持つて來た筈だと言ふ事であつた。

然し、お紺は直ぐ氣が附いた。彼の部屋の隣りには何日でも、數人の私服巡査が控へ居て、彼の部屋を見張つて居た。彼女は直ぐに怪しまれるに違ひなかつた。

お紺は失望して吐息をついた。それに、何處へ行くにしても、唯つた一枚の古ぼけた着物しか持つて居なかつた。それさへ、非常に行き丈けが短くて、野暮な柄で誰の眼にも笑はれさうであつた。

彼女はちつとも眠る事が出來なかつた。この廣い東京に、彼女よりも不幸な頼りないものがあらうとは思はれなかつた。

翌朝であつた。

東小路男爵からの手紙を持つて、迎への俥が寄越された。お紺は、唯つた今まで彼の事をすつかり忘れて居たのが不思議であつた。彼女は喜びに驅られて躍り上つた。そして、この事を昨夜から歸つて來ない吉助に知らせて遣らなければならないと思つて、紙と鉛筆を探した。

「私は、今行くところです。」

と書いた。彼女は、彼女自身が素晴しい女になつたやうな氣がした。その感じを如何書いたら、と言ふ事が一寸の間彼女を躊躇させた。その時、彼女は階下で俥が待つて居る事を思ひ出した。彼女は狼狽てて又、書き出さうとした。と、

鉛筆がぽきりと折れた。

お紺は狼狽てて、庖丁を探してそれを削り初めた。然し、彼女の頭は非常に混亂して居て、如何なる文句も浮んでは來なかつた。で、

「今夜は、少し遲くなるかも知れません。」

と書いて、鉛筆を投げ出した。そして、その紙切れを、一番眼に附き易い行李の上へ置いて、風で飛ばないやうに、箸箱で押へをした。これだけの事が彼女に非常な滿足を與へた。

俥は、風のない長閑な裏町を幾つか通り拔けた。ゴム輪の輕い動搖が、夢のやうなお紺の空想を快くゆすぶつた。俥の前を、音を立てて轉がる紙屑や、車輪の間を驅け拔ける小犬や、路の兩側を歩いて居る人々やを見乍ら、お紺は形容する事の出來ない喜びに驅られた。凡てのものが、彼女が今何處へ行くところなのか知つて居るやうに思はれた。

最早や彼女は、彼女のみすぼらしい身態をちつとも恥しいとは考へなかつた。丸の內の廣い通りを行き過ぎる時、彼女の通ひ馴れた日比谷ホテルの高い屋根の尖端が、日の中に白く耀いて居るのを見た。彼女はその屋根に向つて、ホテルが男爵のやうな素晴しい知り合を拵へて吳れた事を感謝したいやうな氣さへした。

俥が留つた。

廣い停車場の石段に下り立つた時、何とも言へないうそ寒さがお紺の背中を掠めて過ぎた。と、直ぐ近くに男爵と、そして彼から少し離れて全で違つた方を見ては居たが、明らかに彼の連れだと思はれる一人の女とを見た。

微笑が浮んだ儘で、お紺の頰は凝結して了つたやうに見えた。彼女は本能的に、その女が彼女の味方でない事を感じた。一寸立竦んで居る間に、お紺の心は哀れな武裝を凝らし初めた。そして、非常な速さでその女の頭の一つぺんから

足の先まで見下した。
その時、男爵はやつとお紺を氣附いたのであつた。そこに立つて居るお紺が、あのホテルの大食堂で見たその儘の彼女でない事を氣附いたのであつた。
彼は咎めるやうに、何か報告でもするやうな口調で、これから目黒の大競馬を見に連れて行くのだ、と言つた。そして、くるりと向きを替へて、側の女とお紺には解らない話しを初め乍ら歩き出した。
お紺は、男爵の赤靴と、その女の草履とがかはる〴〵もつれるやうに叩土の上へ踏み下されて行くのを、無心に見詰め乍ら、その後を隨いて行つた。自分は、ほんのお附き女中にしか見えないであらうと言ふ事が、もの悲しくお紺の心を締めつけた。
然し、彼女は失望しては不可ないと思つた。この女が、見物の間中男爵の側を離れないと言ふ事はないであらう。それに彼女は席を〆める時に、必ず男爵を間に挾んで、彼女の話しをこの女に聽かれないやうにしさへすれば好いのだ。そして、極く自然な調子で、「金を借りたい、」と言ふ事を話し出さう。――
お紺は、唯つたこれだけの事を幾度も繰返して考へた。それは非常にうまく行きさうであつた。お紺は、男爵が馬券で莫大な金をせしめるであらう事を信じようとした。そして彼の膨んだポケットから無雜作に彼女の手に掴み出される金の事を夢見て居た。
電車を降りてから會場まで自動車で運ばれる間も、お紺は他の何事をも考へはしなかつた。彼女は眼をつぶつて周圍の空氣を感じまいとした。

與へられた場席に、お紺は唯つた一人で腰を掛けて居た。役員の一人であつた男爵は、少しの間も見物席には居なかつたし、連れの女は、彼の後から同じやうに降りて行つた。

（六）

競技は幾度も行はれた。七八頭の馬に、少しの不公平もなしにスタートを切らせる爲めに、聲を枯らして彼方へ走り此方へ走りして居る男爵の姿が、お紺の眼に附いた。お紺はそれを眼で逐つた。全で、見失ふのを惧れでもするやうに。彼女は知らず識らずの間に、男爵が走つて居るのと同じ方向に首を振つて居た。彼女の眼には何にも見えなくなつた。

ドン、と耳を劈く許りの銃聲が聽えて、馬が走り出した。場内が總立ちになつて、湧くやうな歡聲が上つた。手に手に双眼鏡が持ち出されて、柵の中が一つの大きな焔の玉になつたやうに見えた。

然し、お紺には凡ての人々が氣が狂つたのではあるまいかと言ふ氣がした。それとも、彼女ひとりが如何かしたのであらうか。――

彼女は廣い廣い柵の向ふ側を、小さい蟻のやうになつて走つて居る馬を、ぼんやり見て居た。彼女は、いつ時も早くこの勝負がお仕舞ひになつて、勝つた馬や負けた馬が、轡を取られて厩の方へ曳かれて行く時を待つて居た。馬券に勝つた人達が、金を貰ひに雪崩れ掛つて行く時でさへ、彼女はその人々の中に、男爵が居るか居ないか見ようとして一寸體を動かしたゞけであつた。

お紺は何時までも、男爵が彼女の側へ歸つて來るのを待つて居た。然し彼は、お紺をひとりぼつちで、裸の椅子に待たして置いた事を忘れて了つて居る風に見えた。乘馬服を着た外國紳士や美しい女達（その中にはきつとあの女が混つ

て居た。)が直ぐに彼を取捲いた。そして彼は、唯つた一度もお紺の方を振り返りはしなかつた。
軈て午になつた。
何時の間に現れたのか、男爵があの美しい連れと一緒にお紺を呼びに來た。そして、三人は場内に設けられたテント張りの食堂へ這入つて行つた。
お紺はうつむいて歩き乍ら、その女の裾まで垂れ下つて歩くたびに足に縺れて居る、眞白い羅のスカーフを恨めしげに見詰めた。彼女は、今日の凡ての喰ひ違ひが、そのスカーフのお蔭であつたやうな氣がした。
食事の中に、女はずつと向ふに腰掛けて居る外人に呼ばれて、その方へ立つて行つた。お紺は顏を上げた。そして男爵の方を見た。彼女は、今だと思つた。今言はなければ、もう永久に言ふ時はないだらうと思つた。
男爵は沈默つて蝦の油揚を(それは、彼の大好物であつた。)ナイフで切つて居た。――あの二切れ目をフォークで突き刺した時に、きつかり二切れ目を突き刺した時に、あれを言ひ出さう。もう、それより一秒でも躊躇しては不可ない。――お紺は、さう考へ乍ら、じつと彼の皿を見詰めて居た。と、男爵はその二切れ目を突き刺した。彼の胡麻鹽の髭の生へた口が、猫の口のやうに見えた。その口が、尻尾のところまで喰べて了つても、お紺は言ひ出す事が出來なかつた。
女が笑ひ乍ら歸つて來た。食事が終つた。お紺は又、ひとりで裸の椅子に腰を掛けなければならなかつた。到頭彼女は、こんな騷々しいところで、さうした話をし出さうとするのが間違つて居た事を氣附いた。
そして、プログラムを擴げて、指を折り曲げ乍ら數へた。あと二つ待てば、競技はお仕舞ひであつた。
「お仕舞ひになつたら……」

お紺の顔に、微かな喜びが浮んだ。あの女は別れて歸つて行くであらう。そしたら、彼女は何の躊躇もなしに言ふ事が出來るであらう。————

遂に終つた。

大勢の觀客が乘物を呼んだり、連れを求めたりして居る間に立つて、お紺は竹の柵に縋つて懸命に男爵の姿を見出さうとした。

と、人込みを分けて、彼が明らかにお紺の方を向いて遣つて來た。彼の顔は輝いて赫くなつて居るやうに見えた。お紺は形容する事の出來ない喜びのために足が慄へるやうであつた。彼女はその時初めて、男爵の胸の美しい飾章を見附けて、それを非常に似つかはしく思つた程であつた。彼女は何を言ひ出して好いか解らなかつた。そして、今日一日、彼女は彼を不快にさせたであらうと言ふ事で彼に對して濟まなく思つた。彼女はやつと言ひ出さうとした。

「あの…………」

男爵の笑顔はちつとも崩れなかつた。唯、彼の太い眉がぴくつと動いた。それから、彼はポケットを探ぐつてお紺に歸りの切符を一枚呉れた。そして、今日はこれから大變忙しいから、失禮すると言つた。

お紺は、一寸の間彼の言つた事を解する事が出來なかつた。狼狽てゝ、男爵の行つた方へ驅け出さうとした。が、彼女はじつと其處に立つて居た。————あの女は如何したらう。————

幾臺も幾臺も、自動車が彼女を通り過ぎて行つた。邊りは薄暗くなつて居たにも拘らず、お紺は、それらの自動車の中に男爵とあの女とが列んで居たのをはつきり見たやうな氣がした。

彼女は、ふと、彼女の小さい行李が置いてある二階を思ひ出した。それは遠い遠いところにあるやうであつた。彼女

は、如何して歸つて行かうか、と思つた。

この時お紺は、彼女自身がこの上もなく可哀さうで堪らなかつた。彼女は、その自分を慰めるやうに呟いた。

「だけど、男爵は知つてやあしないわ、決して、知つてやあしないわ。私が、あの人からお金を貰ひたいと思つて居るなんて、」

そして、とぼ〳〵と歩いて行つた。

(七)

お紺は彼女自身の顔を鏡に映して見たかのやうに、はつきりと感じた。彼女は一寸笑つて見度かつた。笑つて見たら彼女の心の中の味氣ない哀しさがけし飛んで行きさうな氣がした。

然し、彼女は笑ふ事が出來なかつた。こんな顔をして歩いて居たら、誰にでも氣附かれて了ふ、と思つた。競りもの市のやうに、歩いて居るのか立留つて居るのか解らない人々に依つて身動きもならない程混み合つて居る中を、道の兩側に列んで居る夜店のアセチレン瓦斯の光りが人々の頭の上に霧のやうに流れて居る中を、お紺は大急ぎで通り抜けてやつと、それらの灯影も人影も薄れたところへ出た。こゝなら、もう何を考へてもどんな顔をしても好い、そんな氣がしたのであつた。

不思議にもその時彼女は、男爵から少しの金も得る事が出來なかつたと言ふ事を、全で遠い昔の事でゞもあつたかのやうに殆んど忘れて了つて居て、而も決して平安な心になれない彼女自身を見出した。彼女の心は深く傷けられて居た。

白眼のところ全體が毛細管に蔽はれて殆んど眞赤に見える大きな眼、酒癖と淫蕩とを連想させる眼、そんな眼を持つ

た男衆が、彼女に一指を染める事なしに、沈默つて彼女の手に飾りの切符を握らせたと言ふ事が、名狀し難い屈辱感を伴つてお紺の心を突き刺した。彼女は、彼女のこの馬鹿げた考へを理解する事が出來なかつた。殆んど、意識する事すら出來なかつた。そんならお前は、あの男に強姦でもされた方がましだつたのか、と訊くものがあつたら、お紺は吃驚して相手の顏を見守つたであらうけれども。

誰にも顧みられる事なしに、こんな薄暗いところを一人で步いて居る、と言ふ思ひがお紺の心を締めつけた。そしてそれは直ぐに一つの願望、もう一度、極く自然な機會に依つて男衆に出會したいと言ふ願望になつて現れた。彼女は、彼女が資色の女であつたら、と言ふ事を、想像して居たのであつた。

突然、お紺の胸は搔き亂された。稀代の妖婦惡女の惱ましい姿態が、彼女の想像を奪ひ取つた。彼女はその時、或銘酒屋の女の事を思ひ出したのであつた。

――その女は男の手に掛つて、白晝、縊り殺されたのであつたが、その凄慘な最後と共に、生前の放逸亂倫、驕奢は聽くものゝ心を寒うした。その女の一ケ月の稼ぎ高が二千圓を下らなかつたと言ふ事を語り乍ら、抱へ主は、未だこれ程の妖婦を見た事がなかつた、と殆んど感嘆の辭を惜しまなかつたと言ふ事であつた。――お紺は、その女の白い裸の足の下にうづくまつて居る數知れない男の姿を想像した。そして、彼女もそれらの男の群に混つて、その女を禮拜したかつた。唯つた一夜、その女が明かしたと同じやうな一夜が、彼女に許されるならば、と言ふ想像が、お紺の全身を引摺り込みさうにした。

と、その時誰かゞお紺を呼ぶ聲がした。お紺の感覺は極彩色の錦繪から薄暗の中に眼を外らす事を強いられた。彼女はそつと、伏し乍ら彼女の方へ近附いて來る赤坊を抱いた女の顏を、――階下の薄暗に目馴れて居た若い[illegible]の顏を見

出した。と同時に、彼女の想像の中の高い高い石垣を飛び下りて、惨めな彼女自身をも見出したのであつた。

「おや、お出掛け？」

「いゝえ、今、皆さんにお暇して來た許りなのですよ。やつとお迎ひが來ましたので、」と、嬉しさうに一寸後を振返つて——其處には、羅紗の道行を着た背の低い男が態ざと連れだと思はせまいとするやうに、はすかひに向つて立つて居た。——「ほんたうに折角お近附きになりましたけど、じやあお大事に、少し私の方へもお出掛けなさいましな。」

と、女ははにかむやうに笑つて小走りに行き過ぎた。——呼び留めて御免なさいましよ、何だか斯う、嬉しくつて、つい行き過ぎて了へなかつたんですもの。——お紺は女の笑顔からこれだけの言葉を汲んだ。あの女と赤ん坊とが懸命に縋り附いて居る旦那と言ふ男が、——あれはきつと、ちんまりした古道具屋か經師屋かの親爺に違ひない、お紺はさう思つた。——そんなにも爺むさい小男だつたと言ふ事に對して、微かな輕蔑と愛とを同時に感じたのであつた。

が、その不可思議な感じは、ほんの一寸の間しかお紺の心に留まつて居なかつた。彼等の影が縺れ乍ら暗い中へ消えなくなつた時、喩へばうそ寒い風が足もとを掬つて通り抜けたやうな、思ひ掛けない哀愁——彼女一人が他の人の世界から取り殘されたと言ふ事を感じた。

彼女はもう、何ものも望んでは居なかつた。尾を振つて人の後から隨いて行く犬にでもなりたかつた。愛されたい！と言ふ渇望のために、殆んど肉體的な苦痛を感じた。さうだ、一時も早く吉助のところへ歸つて行かう。彼女は、すつかりみえを捨てゝ了はなければならないのだ。彼の前へ行つて、さう言はう。

——私はもう、何處へも行きたくないのよ。私は、妖婦でも何でもない、唯の詰らない娘なんですもの、如何したつてお金なぞ持つて來られやしないんですもの。だからもう、どんなに激しい仕事でもするわ、ほんたうに、あんたのと

ころに一緒に居られさへすれば、女中と同じやうに働いたつて何でもありやあしないわ。着物だつて襟袋だつて――お紺の眼の中が熱くなつた。彼女は、これと同じ言葉を男の前で泣き乍ら言つた女が、どんなに澤山あつた事だらうと思つた。

街角を曲つて、「産婆」と記した軒燈を見出した時、お紺の心は名狀し難い喜びのために微かに慄へた。彼女は急いで階段を上つて行つた。が、二階の部屋には誰も居なかつた。冷い空氣が、彼女の頬を打つた。――ふと、白い紙切れが、彼女が出る時に遺して置いたその儘で行李の上にのつかつて居るのを見た。お紺は狼狽てゝそれを揉みくちやにした。

――あの男(ひと)は歸つて來なかつた。――

お紺は、ゆつくり口の中で呟いた。然し、吉助がそれを讀まなかつたと言ふ事が、あの時の上づつた氣持で、好い加減調子づいて居るその手紙を彼に知られずに濟んだ、と言ふ事が、僅かにお紺を慰めた。彼女は、がつくりと體を行李の上へ投げた。

その時、階下から女主人の呼ぶ聲がした。

「あのお歸りですか。先刻、兄さんが、」

お紺は、どきりとして顔を擧げた。

「あの、兄さんが一寸お歸りになつたんですがね、暫く旅行して來るから、と仰言つて――あの、お解りになつて！」

「え、えゝ！如何もお世話さま、」

お紺はさう言ふ彼女自身の聲が、後ろになつた彼女の心を筒抜けて通るのを聴いた。が、彼女の眼は殆んど反射的に

後の柱を振り向いた。そして其處に、只柱だけ、あの女物を仕立直したとしか思へないお召の褞袍の引つ掛けてない柱だけを見た。

お紺は、手の中で揉みくちやにした先刻の紙切れをもう一度、丹念にくる〳〵と丸め初めた。吉助の姿を、どんなにか急いで行つたであらう彼の姿を、この上もない美しい舞臺を見て居るやうな一種の放心をもつて思ひ描き乍ら。——

それから數日の後、お紺は彼女が嫉妬して居る事を知つたのであつた。（完）

一九二四、一、三一



花子の訪れ

宮地嘉六

『お目もじいたしたのは去年のことでございました。あれから私はどん〳〵變化しました。大伴との愛の生活もぶちこはれて、それからの私は重い病氣にとりつかれて三月から七月の末まで四谷の△△病院で暮しました。そして七月二十八日に思ひがけない此の丹波の山の中に來てしまひました。これも一人ならばいやなことでしたが、思ひあつた同志でしたので……』三好孝吉は此所まで讀むと先づ聊かあてられた氣味で不興げな顏色になつた。

『……思ひ合つた同志でしたので世界の果てのやうな此の山中をいとはず來たのでした。あの不忍池畔を二人自働車で一週して美しい蓮の花を眺めて、そのまゝ東京を立ちのいたのでした。私の同伴者は大學病院の先生で○○○の囑託醫で若い醫學士なのでした。その人と丹波の山中の柏原で一週間ほど暮し、それから一ケ月ほど別居して九月六日に再會しまして、また別れて、九月二十六日にまた逢ひました。然しもうその時は二人の心は破壞されてしまひました。こはれた茶碗を見るやうな痛ましさでご

さいました。狂人が二人相寄つたのですからさうなるのがあたりまへでせう。私は遂に彼を怒らせて東京へ歸しました。私にも歸れ〳〵と云つてよこしますけれど、此の綾部の秋の氣分にしたつてゐる私は東京などはあまり戀しくございません。地震でこはれた都會を想像すると微笑さへ浮びます……』孝吉は此所まで讀んでちよつと考へた『ほんとに氣ちがひにでもなつてるのぢやなからうか、狂人が二人相寄つたのですから……とは全くその通りかも知れない……』

『……地震でこはれた都會を想像すると微笑さへ浮びます。私の目の前には四ツ尾山と云ふ山がそびえてゐます。二人が別れた夜から冷たい光を投げてゐる赤い星が輝いてゐます。冷膽症の私の心とよく似た星です。東京に今更歸りたいとは思ひませんが此の病院の院長さんがやかましやさんで、夜、外出をゆるしてくれませんので弱つてしまひます。只今もよそから俥が迎へに來ましたが、院長さんが車夫を叱り飛ばして歸してしまひました……』孝吉はまた此所で考へた『どうも少し此の手紙はへんだ……どうもへんだ……』と、そして彼女の兩親の立場やその心持をも思ひやつた『可哀想にとう〳〵精神に異狀を起したと見える……』

『……院長さんが車夫を叱り飛ばして歸してしまひました。私はさびしい氣持を抱いて院長の二十疊の廣ひお書齋で此の手紙を書いてゐるのです。病院を逃げ出したくなりますが、からだが思ふやうに動きません。月見町で今夜若い愛人が私を待つてゐるのです。私を思ひそめて悩んでゐる少年です。院長に邪魔されて、今夜外出が出來ませんので私はカーテンを捲きあげて空を仰ぎ、嘆息してゐます。ほんとに戀を邪魔されるほど口惜しいことはございません。やきもちははたから見てもあまりよいものではございません。全く今夜は腹が立つので院長と顏を合せるのもいやでございます。愛人は私を待つてゐるので心は落ちつきません。院長の邪魔する心が了解出來ません。三好さん、ほんとに私は今うらめしさに堪へられません。お察し下さい。然し院長は親切な人で外出さへしなければ、どんな我がまゝでもゆるしてく

れきす。愛人は垣の向ふで口笛を吹いてゐます。私は窓のカーテンを絞つて其の窓によつて此の手紙を書いてゐます。何か面白い御消息をお傳へ下さいませ。もうこれ以上書く勇氣はございません。腹が立つてたまりません。やつあたりはおゆるし遊ばせ。さやうなら。』

讀み終つた孝吉は小馬鹿にされたやうな氣がした。大學病院の若い醫學士と二人自働車で不忍池畔を一週してそのまゝ東京を立ちのいたとか、東京は少しも戀しくないがとか、私を思ひそめて惱んでゐる少年とか、それが病院の垣の外から口笛を吹いてゐるとか、院長が戀の邪魔をするとか、隨分見せつけがましい文字があるので孝吉は無造作にもとの封筒にその手紙を疊み込んでしまつた。一度あなたと結婚したいなどと私から云ひ出て、あなたをすつかり得意にしてしまつたこともあるから此のくらゐのことを書いてお送りしても大した失禮でもありますまいよ、と彼女は遠くでげら〱笑つてゐるやうに彼には思はれるのであつた。折も折、獨身者の哀れさには、秋の日のさし込む机の側で覺束ない針どりで彼は繻袢のほころびを縫つてゐたところであつたから、此の手紙は一層皮肉に感ぜられたのである。然しまた今もなほ浮氣な放縱な生活を續けてゐる彼女の身の上を思ふといたましいやうな氣もした。直ぐには返事を書く氣にはなれなかつたが、久しぶりの音信だつたので、それから二日ほどして孝吉は病氣見舞旁々からかひ半分の手紙を用紙に二枚ほど書いて送つた。すると間もなく今度は、はがきで、佐藤牧村の轉居先の所番地を敎へてくれと云つて來た。で孝吉は佐藤の家の番地を知らせてやるついでに『佐藤君は美しい若い妻君を持つて今はすつかり幸福に醉つてゐます……』と書きそへて他人の幸福で少しばかり自分の氣持を滿足させたのであつた――。

三ケ月は過ぎた。孝吉は彼女のことをその後思ひ出すこともなかつたが、或る日またもやぽつかり彼女から手紙が來た。

『長い間御無沙汰いたしました。私は十一月十五日に歸京して、つく〱歸京したことを後悔してゐます。京都から一

直線に山陽の叔母の家へ行けばよかつたと今更口惜しくてなりません。早速また旅仕度をして東京を去らうといたしましましたが周圍の人々がそれはあまりに亂暴だと申しますから思ひ止まりました。私は最早住むべき家さへも失つてしまひました。天から一人ぽつんと落されたやうな氣持で、方針もなく不愉快に日を暮してゐます。日光へでも行つてしばらく暮したいと思ひますが、それもやめにして、當分じつとして此所にゐることにいたしました。夏の日の情熱はさめて味氣ない冬の日をわびしく暮らしてゐます。兩親の膝元が戀しくなつても一度背いた身はそこへ歸るわけにもまゐりません。廣い東京で小島のやうにふるえてゐるのです。今私は親類の家にゐます。いつまでも此の家にゐるのは心苦しくてなりません。私は世の中を一人でよろめきながら辿り行くことが怖くなりました……』孝吉は此所まで讀むと彼女の現狀を思ひ浮べずにはゐられなかつた。

『……何もわざを知らぬ私を此の世の中に一人突き放しにしておしまひになる父上の頑固さがたまらなく悲しくてなりません。好いお考へをお教へ下さいませ。何しろ迷つてをります。どうか助けると思し召してよいお考へをお教へ下さいませ。ほんとに泣けてしまふほど悲しくさびしくてなりません。どうしてよいか分りません……』孝吉には彼女のつかふ悲しいとか、さびしいとか云ふ文字に吹き出した。愛憐の感も氣の毒さの情も起りはしたが、逢つて見たら相變らずのおきやんで、突飛なことを云つては人の感情をくすぐつて嬉しがるのんきな駄々娘だと思ふと、別段身を入れて返事を書き送る氣にもならなかつた。

『然しもう今度は兩親にもかばはれなくなつたとすれば弱つてゐるに違ひない。こまつた女だ。あれでは兩親も手こずるのは無理もない。』と孝吉は微笑しながら、出たらめな好い加減な返事を書いた。

『お手紙拜見しました。そんなに弱いことでは駄目です。然しいろ〳〵のお惱みはお察いたします。あまりよく〳〵考

へてはからだを惡くするだけですから……』とか『貴女は常に戀の勇者であられむことを私は望みます』とか『何よりもおからだを大事になさい。貴女などはまだ／＼これから花を咲かせて見せて下さらねばなりません。貴女の上に幸あれとお祈りいたします。』

とか此の好い加減の返事を彼女はどう感じたのか、それから二日目の午頃、俥でやつて來た。一年ぶりだつた。孝吉は恰度その時、九州からわざ／＼震災後の東京を視察に來た從妹の亭主を一晩泊めて彼を王子電車の停留場まで送つて行くところであつたが、思へば妙な廻り合せであると思つた。孝吉は今しも俥で訪ねて來た花子と二年前結婚をすゝめられた時、實はその緣談にあまり氣乘がしなかつた理由は、一方に歌子と云ふ從妹が未亡人になつて鄕里の實家でさびしく日を暮してゐることを聞いてゐた爲めであつた。然し歌子には先夫の從弟との緣談が早くも持ちあがつてゐて、それが進行してゐたのである。そのことが孝吉に分つた時は、町田花子は一旦きれた最初の愛人なる大伴と云ふ青年とももとのやうになつたと云ふ噂が傳へられてゐたので、孝吉は歌子を得そこなつた上に花子との問題に立ち歸るわけにも行かなかつたのだ。然し花子は再び同棲した大伴との生活も一年にして破れ、その後の第二の愛人なるその醫學士との關係もまづいことになつて、二年を過ぎた此の日、彼女は何と思つてかわざ／＼孝吉の住居を俥で訪ねて來たのである。

『素的な美人ぢやありませんか、どう云ふ意味の婦人です。』歌子の亭主はにや／＼して云つて『ぢや僕は此所でお別れしませう』

『さうですか、ぢや此所で失禮しませう。ぢやお大事に、さよなら……』孝吉は途中から歌子の亭主と別れてその場で出逢つた花子と共に家の方へ引き返した。此の日の花子は二年前とは見ちがへるほど美しく思はれたので、孝吉は極めて自然に偶然に歌子の亭主に或るものを感ぜしめ得たと云ふ喜びをひそかに覺えた――それから一週間ほどして歌子の

亭主から來た手紙の中に『あの車上の美人が氣になつてなりませんでした。羨望の感と共に多少裏切られたやうな氣もしました……』と書いてあつたのを見ても孝吉は二年前の輕い失意を慰めるに充分だつたのである。然し考へると、それも淺薄な見えを以て僞る小さな勝利感に過ぎないことは彼にも分つてゐた。多少裏切られたやうな氣もしたと歌子の亭主の手紙にあるのは、孝吉の獨身生活を氣の毒に感じて或る候補者の話しを旁々持ちかけたことの却つて失態であつたと云ふ意であつた――。

『まあ折角お客さまと御一緒にお出かけのところを……』花子はしきりにそれをすまなさうに云つた。

『いえ、構はないんです。あれは從妹の婿で電車まで送つて行くだけのことでしたから、是非送つて行かねばならぬわけでもなかつたのですから』孝吉はさう云ひながら、花子を家に導き入れた。彼女は紺地に飛び模樣の金紗の羽織を着てゐた。下も矢張り花の飛び模樣のお召しだつた。くり〳〵した小柄ではあるが藝者のやうに艶な感じがした。病後らしいところは少しも見えず、藤色の襟の間には空氣枕のやうな白いふくよかな胸が盛られてゐた。その胸の魅力が彼女の一番大切な財產であつた。彼女自身もそれを意識してゐるのは無論であつた。次にその眼であつた。きれの好いその技巧的な兩の眼は濃い三ケ月眉の下に恰度色町の灯のやうになまめかしく輝いてゐた。

『よくやつて來ましたね。お珍らしいなあ。』

『まあしばらくでございました……御機嫌よろしう……』彼女はあらたまつた調子でお辭儀をしてしまふと、もう輕い早口で何やかと話し始めるのであつた『まあお靜かで好いお家ですわ。』と畑の方を見透して云ふ。

『もうからだはすつかり好いのですか。』

『え、もうすつかり癒りましたの。』

『以前よりも若く美しくおなりですね。』

『いやでございますよ、おひやかしになつて……よくもとのからだになつたと自分でもさう思ひますのよ。』

『さうですか、そんなに重病だつたんですか――でも綾部から下すつたお手紙にはすつかりあてられましたよ。ははは、あの大學病院の先生とか云ふ若い醫學士はどうしました。』

『え、ゆつくりお聞かせしますからお待ち遊ばせ――わたくし今日はゆつくりお邪魔させていたゞきたいんですの。そのつもりでまゐりましたのよ。でも御迷惑なら直ぐおいとまいたしますわ。』

『少しも迷惑ではありません。ごゆつくりなさい。』

『では御免遊ばせ。わたくし今日は編物を持つてまゐりましたのよ。これを編みながらお話しいたしますわ。』彼女は小さな風呂敷包を開いて、その中から編みかけの肩掛と毛糸の玉をとり出し早速編み始めた。そして醫學士との關係の前後を臆面もなく語るのであつた。それはかうであつた。お產をして間もなく大作とは再び別れることになり、その時分から神經性心臟障害に罹つて四谷の△△病院に入院することになつた。二ケ月ほど病院生活をしてゐるうちに以前から心やすくしてゐた大學病院の助手である醫學士杉居が突然彼女の病床を見舞ふた。それ以來醫學士は頻繁に手紙をよこすやうになり、三回目に見舞にやつて來た時、彼女は遂にその醫學士に身を許すことになつてしまつた。『杉居と始めて逢つたのはわたくしが十七くらゐの時分でしたの。お友達の池上繁子さんのところで逢つたのが最初でしたの。それからはよくお正月などカルタを取りにわたくしの家に杉居はやつて來たりしましたけれど、わたくしは彼を馬鹿にしてゐたんですの。まだその時分杉居は大學生でした。杉居は繁子さんと關係してゐながら、わたくしをも狙つてゐたんですの。そして繁子さんが△△生命保險會社の重役のお子を産んだりしてから杉居と繁子さんの關係はきれたんですの。

そんなことで杉居が悩んでゐたところへ、わたくしが大作と再び別れたと聞いたもんですから、わたくしをどうあつても手に入れたいと云ふ氣になつたんですわ。繁子さんは日頃から杉居をわたくしに奪はれはしないかとそればかり氣づかつてゐる人でしたの。それを杉居も知つてゐて彼女に面あてに是非わたしを手に入れたがつたんですの――わたくしもう何もかもさらけ出してお話ししますわ、杉居が一番最初に見舞に來た時は久我子さんて云ふピヤニストの美人と一緒でしたの。いかにも自分にはこんな美しい愛人があると云ひたげでした。そして二度目に來た時は『僕何も花子さんにお見舞をあげない代りに貴女の脈を見ておあげします』てさう云つてわたしの手首を握つたんですの。三度目に來た時は『僕は幾年間貴女を心に思つて來たとお思ひですか。僕は繁子に裏切られても貴女を得ればそれで充分救はれるのです。僕は必らず一二年の後には學位をとつてお目にかけます。博士論文は殆ど七分通り書きあげました。貴女も大作のやうな男にさんざん傷けられたのですから、僕は貴女の名譽回復の爲めに結婚を申し込みます。承諾して下さい』と涙を流して云ふんでせう……』

『全く新派劇だ……』と孝吉は吹き出しかけた。

『病院を退院して私は下の關の叔母の方へ當分行くことになりましたの。すると杉居も鳥取の鄉里へ簡閱點呼で歸らねばならぬから途中まで送つて行つてやると云ふもんですから一緒に東京を立つことになつたんですの。立つ日に杉居はかう云ふんですのよ『繁子が本鄉の△△堂洋食部の女給頭をしてゐるから、これから僕と一緒にそこへ行つて昼飯を喰べる氣はないか。彼女に見せつけてやりたいんだ』と云ふんですの。それは行つてもようござんすわ、とわたくしも同意して自働車でそこへ行つたんですけれど繁子さんはその日ゐませんでしたの。それから二人は自働車で不忍の池を一周して東京驛へ行つて……』

『綾部からの手紙に『二人は自働車で不忍池畔を一周して……』とあつたのはそれですよね……』『まあお聞き遊ばせ――それから東京を立つて、そして京都でちよつと二人は下車いたしましたの。するとその晩旅館で急に發熱しましたのよ。でとう〳〵目的の下の關まで行けずにしまいましたの。綾部にお父さんの從兄が病院を開いてゐたもんですから、そこへ擔ぎ込まれたきりでした……』

『そして杉居と云ふ人とは何故面白くなくなつたんですか。』

『まあお聞き遊ばせ……』と彼女は息をいれて『わたくしあれがへんなことを云ふから癪にさわつて喧嘩したんですのよ。綾部のおぢさんの病院にゐる時二度ほどやつて來ましたの。鄕里で簡閱點呼をすませてその歸りにちよつと寄つて、そして東京へ行つてから一度またやつて來ました。その時ですわ――わたくし男からさきに手をひかれるのは不名譽ですから、彼の心には自分と云ふものゝ影が薄くなつてゐるなと見たから、わたくしから別れようと云ひ出したんですの。『俺はお前なんかに躓づいて結婚を要求するほど無力な意氣地のない男ぢやない。もつと立派な家からいくらでも嫁のくれ手はある』さう云つたから、わたくし、もうむつとしちやたんですの『別れると云ふなら俺もきれいに別れて見せよう。別れるについてお前は何か俺に要求はないか。あるなら今云つてくれ』と云ひましたから『わたしを見そこなつてはこまります。わたくしはそんな要求をしたりする女とは異ひます。役者を買つたと思へば何でもありません』つて云つてやりましたわ。すると『俺も藝者とちよつとの間關係したと思へば何でもない』と云ひましたの。それつきりでしたわ……』

『なるほど……』孝吉は彼女の話しも面白いと思つたがその話しの間に現はれて來る彼女の個性にいよ〳〵興味を感じ出した。

『さあ、今度はあなたさまの番よ』彼女は編みものを續けながら孝吉をちよつと見上げて『あなたさまも隨分あれからいろ〳〵のことがおありになつたさうですわ。少しは人傳に聞いたこともございますわ。さあお話し遊ばせ、わたしにばかり白狀させてはひどいわ……』

『僕は御覽の通りの有樣ですよ。あれから大してよいこともなく……。』

『いいえ、おかくしになつても駄目よ。原稿を引きさいた御婦人の方はどうなさいまして。』

『あれは、もうそれぎりです――僕があれから二年間ぐづ〳〵して獨身で暮してゐる間に貴女は……まあ結構でした』

孝吉は笑ひながらわざと愚痴らしく云つて『貴女も思ひやりがないと思つたなあ僕は……あの綾部からの手紙が來た時、僕は何をしてゐたと思ひです、久しぶりに花子さんは何か好いたよりをくれたのかと思つて開いて讀んで見るとあの通り。そして僕はその時恰度襦袢のほころびを縫つてゐた。襦袢のほころびをですよ……』

『おつほほほ、まあさう……おつほつほほ……すみませんでしたわねえ。ごめん遊ばせ、まあ、ほころびを縫つてゐらしたの……』彼女は編みものをやめて腹いつぱい笑つて、とう〳〵笑ひ崩れてしまつた『ですから今日はあなたさまの好いお話しを聞かしていたゞきますわ。』

で孝吉もすつかり愚かしい好い氣持になつて、此の面白い女を相手に終日自由な談話して暮すのも氣晴しだと考へたのである。一年前、彼女が二三度訪ねて來た時は妙に彼はかた人ぶつて笑談めいた話しもしなかつたが、近頃は時々先輩につれられて藝者などに接近することもあるので少しは女性に對する修練も積んだ。彼女に對する見方も異つてゐた。かうした女性も世の中になくてはさびしいものだと云ふ心で見た。全く彼女は恰度彼には手ごろであつた。で一月ほど前に福島の平まで行つて歸つて來た話しを彼は彼女にして聞かせた。

『そこには四年ほど前に或る人のすゝめで結婚しようとした婦人がゐたんですよ。四年前、寫眞を見たゞけでしたがその婦人のことが忘られなくて何かにつけて思ひ出して仕方がなかつたんです。そのことを誰かに僕は語つたものか、それが先方の婦人に傳はつたのです。『私のことをそれほどお心にかけてゐて下さいますのはもつたいない氣がいたします。私はあれから間もなく一人の姉を失ひ、私もそれからずつと病氣がちで、今年の八月から床に臥したきりでございます。聞けばあなたさまは一度御結婚なさつて、それが御不幸に終つたとのことですが、お察しいたします。どうか御近狀をおもらし下さいますれば嬉しく存じます』と云ふ手紙が來たのでした。で僕はその手紙を讀んで急に一目その婦人に逢ひたくなつて、わざ〳〵福島の平までのこ〳〵出かけたのでした。』

『まあ、それはおたのしみでしたわねえ、そしてその御婦人とお逢ひになりましたの。』

『え。』

『あら、もつとくはしお話して下さいましな、ねえ、おきれいな方でせう屹度。』

『決して美人と云ふ方ではありませんでしたがね……。』と孝吉は汽車で行く時の氣持や、その婦人に逢つてしまつて、歸る途中での感想やを語り出した。

彼は十二月上旬の或る日の、午後三時發の富岡行の汽車で日暮里を立つて、その夜の九時に福島縣の平に着いた。彼は四年間此の平町を心に描いて暮したのであつた。ステーションへ着いた時は胸がふるえた。此所が彼女の生ひ立つた町、彼女が現に住んでゐる町、さびしく病床で暮してゐる町、かうしたステーションを持つ町であつたか、さう思ふと一緒に自分と下車する人々にまで特別の親しみを感じた。改札口の向側には土地の女學生らしい若い娘達が五六人で誰かを出迎へに來てゐた。それらの娘達を透して明日にも逢ふことの出來る彼女の影像を目に浮べた。彼女はかうして

自分がやつて來たことを夢にも知るまい。然し病氣で床についてゐる彼女を驚かせてよいだらうか、彼女は逢ふことを承知するだらうか……、行きついてしまふと今更のやうにそのことが氣になつたが、兎も角、ひとまず町の旅館に落ちついて一泊することにした。そして氣輕な旅館の番頭にいろ〳〵土地の樣子を聞いて見たりした。

『その番頭は僕が訊ねもしないのに土地の藝者のことなど云ひ出して、一人お取りもちしませうなど云ふのです。僕は病人を見舞にわざ〳〵やつて來たんだから、それをすましてからでなければその氣になれない。と云ふと、お酌だけさせておあげなさいませ。お手酌ではおさびしうござんすよ旦那、などゝ云ふので仕方なしに呼ぶことにしたんですがね。さあ、間もなくやつて來たその藝者が、ひどく地味作りで、黑の紋羽二重の古着屋で見たてたやうな地味な羽織を着て、まるで女醫か産婆と云つた感じですなあ』

『まあ、お座敷にお羽織なんか着て……』

『ええ、仕方がないから二時間あまりその陰氣な、二十二と云ふ正直な藝者とその晩は四方山の話しをして……。』彼の話しは稍脫線しさうになつた。

聞き手の彼女は編みものをしながらくす〳〵笑ひをしては話の本筋をうながすことに努めた。彼の話しを記述的に語ると、その女醫のやうな藝者と藥劑師のやうな客とは唯四方山の話しをしたゞけで何ごともなく別れたのであつた。翌日、彼は手紙を認めて彼女の家に使ひを走らせた。『昨夜九時の列車で當地へ來ました。お見舞旁々ちよつとお訪ねしたいと思ひますが、おからだにさはるやうでしたら御遠慮いたしたいと思ひます』と彼はその手紙に書いた。三十分ほどして使ひは返事を持つて歸つて來た。なか〳〵家が分りにくかつたと使ひは云つた。

『私が二三日前に差し上げたお手紙を御覽にならずにおいでになつたと見えます。おいで下さいますなと書いてあげた

のでした。でもお遠いところを折角おいで下すつたのですから、ちよつとでもお目にかゝらないのは失禮だと存じます。むさくるしいところですがあなた樣の御都合のよい時刻においで下さいませ』と云ふ返事だつた。

『僕は考へたんですよ。然し此所まで來て逢はずに歸るのも惜しい氣がしたので朝飯をすまして、しばらく經つてから思ひきつて彼女の家へ出かけたのでした。山の手の、以前病院だつたと云ふその大きな屋敷の離れに彼女は母と幼い甥と三人で暮してゐる風でした。先方では僕が多分午後になつてやつて來るものと思つてその氣でゐたらしいのです。僕は彼女が身じまひをしてしまふまで、三十分以上玄關で待つたのでした。』

『向ふさまでも氣は氣でなかつたのですわねえ。』聞き手の彼女は編みものゝ手をやめて云つた。

『さうです。初めて逢ふ爲めに彼女は病床から起きて衣服を着替へたり、髮をなでつけたりしてゐるやうでした。やがて隔ての襖があいて、大へんお待たせいたしました。とあいそよくあいさつをして僕を椽側の方の日あたりのよいところへ迎へてくれました。それが四年間僕の心をとらへてゐた人との初對面でした。』

『まあ、それは向ふさまだつて初めてあなたと顏を見合つて氣がすんだでせうよ。』

『然し、先方が病氣をしてやつれてゐるところへ訪ねて來てすまなかつたと云ふ氣持でいつぱいになつて、とりかへしのつかない粗暴をしたやうで、落ちついてゐられませんでした。』

——彼は初對面の彼女と三十分あまり靜かに話した。こんな日あたりのよい部屋にゐられたら病氣の爲めには至極よいとか、然し土地の氣候は東京よりは寒いやうですねえとか、お熱が出ますかとか、食慾はどうですかとか、長く人と話しをなさると直ぐさはりはしませんかとか、彼はそんなことより他に適當な話しを持たなかつた。彼女の方が却つてゆとりのある話しぶりを見せた。東京から來た人はこちらが寒いとおつしやいますけれど私共が東京へまゐりますと、

こちらより寒いやうに感じますの、とか、普通の御飯がどうもお腹にいけないので東京の永藤のパンを取りよせてそれを常食にしてゐますの、とか、午後になるとまだ少し熱が出るやうですとか、醫者は大丈夫回復するとは言つてくれますけれど、とか、そんな話しをしてから、からだが丈夫な時でしたら方々御案内してあげたいんですのに、などゝも云つた。

『兎に角頭のよい氣持のしつかりした婦人で、その爲めに思ふやうな緣もなく婚期を過ごしたものらしいのです。』

『では、その方が全快なすつたら結婚なさいましては。』

『彼女が全快したらば僕は彼女の爲めにもつと幸福な結婚を望みますよ。要するに彼女と僕とはいつまでも會見しないで互に幻影を抱きあつてゐた方がよかつたのです。彼女の方ではそれを望んでゐたに違ひありません。然し僕としては自分の抱いてゐる幻影にいづれかの解決をつけずにゐることは寧ろ苦痛だつたのです。僕は四年間彼女の幻影にほだされて、その爲めに結婚した女を全心的に愛することも出來ないのでした。此の世に一番自分に適當な婦人と結婚しそこなつたと云ふ心殘りがいつもついてまはつたのです。四年間と云ふものを彼女の幻影に惑はされて暮したのですからねえ。』

――彼はその歸途汽車の窓から冬枯の林野の暮れゆく情景を眺めては彼女の運命を思ふて深い悲哀を覺えると共に、長い間自分を惑はさせた幻影をば滅ぼし得たと云ふことには一種の滿足を感じたのであつた。枯れほうけた林野のところどころには古い墓場が見えたりした。

『あの人は屹度幻滅を感じて歸つて行つたに違ひない、それを一生懸命さうでないやうに見せて歸つて行つたのだ……』

病床にあるあの敏感な彼女がさう思つてゐはしないだらうかと、彼にはそれが氣になつた。彼女には自分に思ひ慕はれ

てゐると云ふことが病中のせめてもの慰安であつたのかも知れぬ……』さう思ふと彼女の心のさびしさがそのまゝ彼の心をさびしくした。そして何とも云ひやうのない悲哀が列車の窓外の暮れゆく冬枯の景色のさびしさと結びついて彼はわつと聲をあげて泣きたいほどの氣持にまでなつた。

『皆、それほど長く生きられる生涯ではない。皆、あの荒寥とした冬野の土となるのだ。戀だの幻滅だのと云つてゐるが、彼女の心持になつて見ろ……僕はさう思ふとたまらなくまた彼女がいとほしくなつて、早く病氣が全快してくれ、そして一度でも結婚と云ふものを經驗してくれゝばよい、とやたらに祈りたくなりましてねえ――此の話しはこれでおしまひ。』彼は云つた。その歸途土浦によつたり潮來に行つたりして道草をくつた話は端折つてしまつた。

『まあ、好いお話しでしたわ。』彼女は云つて早速また負けない氣で語り出すのであつた。彼女の話しはいつも卒直で、喜劇的で定つて男に思はれたことや、男を振つて失戀させたと云ふことばかりであつた。全く此のくらゐさうした事柄を平氣に面白く語る女を孝吉は他に知らなかつた。そしてどの話しも相手は醫學士でシーンは病室であつた。

『わたくし一番可愛さうだつたと今でも時々思ひ出すのは坂野と云ふ醫學士のことですの。今印度へ行つて血精の研究をしてゐるさうですの。わたくしを一生呪つてやると云つてゐたさうですわ。その方が、花子さん、全くあの坂野さんだけは可愛相でしたわ、ほんとにあれほど貴女を戀してゐらつしたのに、隨分貴女はつれないことをなすつたんですもの』つてお友達の京子さんに今でもよく云はれますの。全く、わたくしその人をふつてふつてふりとばしたんですもの。』と彼女はそのふつて／＼ふり飛ばした人の話しを長々と語り出した。その醫學士は彼女が入院してゐた四谷の△△病院の副院長で、年はまだ三十で、まるく肥つた赤ら顔の非常に親切な男であつたと云ふのである。毎日彼女の病室に回診にやつて來るその樣子に、いつとはなく彼女は相手の氣ふりを直感してしまつたと云ふのだ。副院長は或る日大きな果

物の入つた籠と薔薇の花籠とを持つて彼女の病室に入つて來た。

『わたくし、これはいけないと思つたから、先生、果物は頂戴いたしますが花籠はお受けいたしません。こんなピンクとレッドの薔薇の花籠なんかを頂くのはいやでございます。花籠は好きでございますけれど此の花籠の意味がいやでございます。つてわたくしはねつけてやりましたの。すると副院長は唇をふるはせて『花子さん。僕はこれほど貴女に對して愛を捧げてゐるのに、何故そんなつれないことをおつしやるんです。』とさう云つて、そこの椅子にがつかりしたやうに腰をかけて、そして氣絶してしまひましたの。さあ院長が來て、カンフル注射をするやら、大騒ぎでしたのよ。』彼女のこの話しは、全く曾我廼家の喜劇のやうだつた。彼女はそれをやんちやな小娘らしい早口で肩をゆすぶるほど笑ひながら語るのであつた。そして最後をかう結んだ。

『でも男の方の氣絶つてだらしがないんですのねえ、口を開けて目を白黒させるのよ。そして、自動車……花子さん……クッション……あゝ苦しい……コバルト色の寢卷きが貴女にはよくうつります……ほんとに貴女はきれいです……てなことを夢中になつて云ふんでせう。可愛さうだと云ふよりもわたしその時腹が立つてたまらなかつたのよ。』

孝吉も思はず吹き出した。

『そんな正直な醫學士をふつたのは貴女も罪なことをしましたねえ。』

『おしまひに院長さんが氣の毒に思つて、町田さん、坂野君と結婚してくれませんか、僕が媒酌人として盡力したいと思ふがいかゞです。つて頻りにおつしやるんですの。そして家のお父さんにまでお話しなすつたんですの。でもわたくし、いやですからと斷つたんですの。』

二人はそんな話しで笑ひ過ぎた爲めにお腹をすかせてしまつた。で久しぶりにどこかへ行つて夕飯を一緒に喰べよう

と云ふことに二人は一致した。彼女は編みものもオペラバッグもそのまゝそこに置いて立ちあがつた。孝吉は羽織を着替へた。既に此の二人は喜劇中の人物のやうであつた。然し喜劇の裡にも悲劇は潜んでゐる。孝吉は家を出しなに、茶の間の押し入を開けて、そこの假佛壇の小さな位牌にお線香を上げることを忘れなかつた。

『赤さんの佛様でございますの。』

『えゝ』

彼女も彼の背後から合掌した。

『今日は命日です、去年の今日は一週忌で、佐藤君にまづい聲でお經を讀んでもらつたのでした。』

『まあ！佐藤さんにお經をですの。』

『あれでも立派な眞宗寺の次男ですからね。』と孝吉は笑つて『あなたの二人目の赤ちやんはどうしました。丈夫ですか。』

『え、丈夫ださうですの。大作の實家の方で引きとつて育てゝゐますの。』

『それは好いですな。子供が丈夫に育ちさへすれば、例へ夫婦別れしてもそれほど傷みを感じずにすむでせうね。』

『もうどうか子供のことはお話しにならないで下さいませ。わたくし、子供のことを話されると急に嘆きたくなりますの。』

二人はそれから暫く默つて歩いた。孝吉は歩きながらふと妙なことを考へて見るのであつた。

『此の人と結婚しないかと鬼怒川にすゝめられたのは一昨年の一二月頃だつた。恰度自分が離婚して二ヶ月目であつた。それから間もなく此の人は一度離れた大作と再び關係して同棲したのだ。そして一二その年の十月の末頃自分は此の人と

途中で出逢つたが、その時はもう此の人は大きなお腹を羽織のまゝ身で隠すやうにして歩いてゐた。女中を一人作れてゐた。ひどくやつれて、顔色などは淺黑かつた。自分とすれ〳〵に行きちがつても默つて行き過ぎた。あの時は知つてゐてもおのが様子を恥ぢてさうしたのだ。自分から言葉をかけられると此の人は始めて氣ついたやうに、せいいつぱいあいそよく『あらまあ、しばらくでございました……』と、とつてつけたやうな調子で云つた。妙に目をはち〳〵させてお腹を氣にした。言葉をかけなければよかつたと自分は思つたが仕方がなかつたのだ。自分は此の人と結婚をすゝめられた二月から二三四五六七八九十と指を折つて數へて見ずにゐられなかつた……』彼は彼女と歩きながらそこまで考へた。そしてから訊ねて見たくもあつた『あなたと一昨年の秋頃、駒込の通りであひましたね。あれから間もなくお産をなすつたのですかお産は何月でした。』と然し相手が子供の話しをさけたがるからそれぎり話しかけないことにした—

—彼女は出しぬけにかう云ひ出した。

『わたくし今日お宅へ來る途中いろ〳〵考へましたの。行くのはよして引き返さうかと幾度もいたしましたのよ。でも來た方がようございましたわ。いろんなお話しが伺へて久しぶりに氣が清々いたしました。』

『何故幾度も引き返さうとしたんですか。』

『そのわけを申しませうか。あなたさまを得意にしてはつまらないと思つて……』と彼女はわざと露骨に云つて笑つた。

『畜生……』と孝吉は思つた『だが引き返す勇氣が出なかつたと見えますね。』と云ひ返した。

『だから得意におなんなさいませ。』

二人の姿はよそ目には仲のよい夫婦のやうに見えた。

二人は飛鳥山の大通りへ出て、櫻山へ登つてそこからしばらく冬枯の豐島平野を眺めた。冬の日はもう低く西の方にあつた。やがて飛鳥山を下りて王子の權現下に出て、瀧野川に面した鳥屋へ入つた。此處ではもう堰を落つる水聲に二人はおしやべりを妨げられたが、それでも互に默つてしまふのは何故か氣まづかつた。此の二階の欄干から二人で飛び下りたらどうでせうとか、今二人かうしてゐてわたしだけがおつこちたらあなたさまは警察へひつぱられてお調べを受けなくてはなりませんわ、とか、川向ふの料理屋の女中がこちらを二人で見て何か云つてるぢやございませんか、とかまあどこかの溫泉場のやうねえ、などと云つて彼女は二階の欄干から向ふの權現山の崖を眺たりした。彼女は默つておとなしくしてゐる時よりも、さうした害のないおしやべりを續けて笑つてゐる方が彼女らしくて美しかつた。無造作な言動のうちに女性らしいこまかなたしなみと、上品さがあることをも孝吉は知つた。中流の家庭で何不足なく甘やかされて育つた女だとは誰にも直ぐ分つた。誰にでも直ぐに親しみを感じさせる性質だつた。やがて喰べ物を運んで來た女中にも直ぐと娘のやうな馴れ／＼しさで話しかけるので、女中はすつかりかうした男女客の場合に持つ硬い氣持を忘れて『まあ奧さまのおぐしのお立派ですこと！』と自分の櫛をぬいて彼女の束髮のうしろ鬢のおくれ毛を撫であげてやつたりした。奧さまと云はれたので彼女はまた笑ひ續けた

『わたしは今誰の所有でもないのに……わたしもう誰の所有でもないのが一等好き……わたしもう人の所有になることはいや……ひとりでゐたいんですもの、いつまでもわたくし……』彼女は女中が去つてから不平らしくさう云つた。然しさう云つてゐる彼女の目は孝吉に向つて『此の人をどうかしてわたしの胸に飛びつかせて見たい。わたしにその自信が易く持ててよ……』と孝吉の或るものを待ち受けてゐるやうであつた。さうかと思ふとまた彼女は突然、自分の兄にでも相談するやうにかう云ひ出すのだ。

『わたくし昨晩悲しくて泣いたんですの。はあちやんのやうな人は馬關の叔母さんのところへでも早く行つて藝者にでもなつたら好いわ。そしたら乾度賣れつ子になれるからさうおしなさいよ。つて余丁町の叔母さんが二人してわたしを侮辱するんですもの。出戻りの叔母なんて妙に皮肉なものね。わたし腹が立つたけれど、わざと默つてゐてやつたの。でも涙がほろ〳〵落ちましたの。』と彼女はその時の氣持をまた思ひ出したやうに目をしばたゝいて『でもわたくし來年の二月には下の關の叔母さんのところへ行くことに定めたんですの。籍も町田からあちらへ移したんですの。』

彼女の父は會社の重役で今は東京の家を引き拂つて北海道の方で家族と共に住んでゐるのであつた。彼女はその町田家の長女であるが、實は何かわけあつて町田家の養女となつて、十七八まで非常に大事に育てられて來たと云ふだけで、眞實の兩親は他にあると云ふことを孝吉は或る人から聞いてゐた。町田の家には彼女の妹と云はれる娘がまだ四五人もゐたが、それらの妹達と彼女とは全く血のつながりはないと云ふことであつた。彼女自身でさへもそれをやつと年頃の娘になつてから氣づいたくらゐに家庭では長女として愛育され、甘へ放題に甘へることをゆるされて來たのであつた。彼女の眞實の母と云ふ人はその下の關に立派な旅館兼料理屋を營んでゐる叔母さんがさうらしいのであつた。その叔母さんは博多の藝者として昔艶名を賣つたと云はれる五十近い寡婦であることは彼女の話しで分るのであつた。そして彼女の實父と云ふは彼女さへも確實に知らないらしく、他人には全くそれは不明であつた。唯日本で有數の大金持らしいと云ふことであつた。彼女は何でもその人の妾腹に出來た娘らしいのであつた。『さうですか。來年の二月には下の關の叔母さんのところへ行くんですか。まさかそこで藝者になるわけではないでせうね。』

『いやですわ、あなたさままでそんなことをおつしやつては、いや……わたくし、そこにゐて叔母さんの相談相手になつてあげさへすれば好いのよ。叔母さんはわたしを自分の膝もとに置きたくてたまらないらしいんですの。二十三にも

なるわたくしをまだ小娘ぐらゐに思つてゐるんですもの。お湯に入る時もわたくしと一緒に入つてわたしの襟からすつかり御自分で御化粧をしてやつて嬉ぶ人ですの。そしては、わたしをきれいにさせてにこ〳〵嬉しがつて眺めてゐる人ですのよ。』彼女は云つた。

外では時雨の音が水聲に加はつてゐた。

『あら雨が……』

『大丈夫直ぐやみますよ…………。』（完）

袈裟の魂

三幕

長田秀雄

登場の人々

袈裟御前
渡邊左衛門尉渡
遠藤武者盛遠
衣川の女房
法然上人
その他女の童、腰元、郎黨など。

時——平家の世の末。

場所——京都

第一幕

洛外、嵯峨の衣川の女房の家、少さく貧しげではあるが、何となく風情あるやうにしつらへてある。昔、美くしかつた四十女の獨ずみと云ふ樣子が置かれた調度などにうかがはれる。

九月十三日の日くれどきから夜まで――室内には、衣川の女房とその娘の袈裟御前とが話をしてゐる。袈裟は二十あまりの凜とした目のさめるやうな美くしい女である。衣川の女房は夜の物に面をかくして、打臥してゐる。女の童が肩のあたりを擦つてゐる。

衣川。(間を置いて)そなたが來てくれたので、胸の痞もさがつたやうぢや。(女の童に)そなたも退がつて休息したがよいぞや。

女の童。はい(退場。)

袈裟。母上!――今宵一夜は、渡どののお許をうけて參りましたゆゑ、お側にゐて、よもすがら御介抱いたしませう。

衣川。おゝ、それはうれしい事ぢや。此頃は心細い事。悲しい事が打續くので、そなたが一緒に寢んでくれたら、さぞかし心が安まるであらう

袈裟。きつと、また、何時もの氣欝の病であらうと渡どのも申されました。

衣川。そなたには久しく會はなんだが、やはり渡どのはやさしうして下さるであらうのう。

袈裟。はい――渡どのは父御のやうに慈しんで下されます。

衣川。それに何よりぢや。そなたは早う父御に別れて、孤子で育つたゆゑ、一倍、母はいとしう思ひまする。(袂に泣

く。)いとしう思へばこそ、かやうな苦しみにも會はねばならぬのぢや。

袈裟。(凝乎つと衣川をみる。)何と仰せられます。

衣川。(急に弱々しくなつて)許してたもれ、わがみはもう……(泣伏す。)

袈裟。母上、どうなされました。(肩に手をかける。)

衣川。(肩に袈裟の手を感じて身を顫はす。物狂はしく。)そのやうに柔しう云ふてたもると、空恐しい心地がして……。

袈裟。なんでそのやうな……母上、由ありげな御様子と云ひ、かやうに取亂したお姿は、――さ、何事で御座りまする。

打明けておきかせ下さりませ。

衣川。恐ろしい事ぢや。いや、いや、云はれぬ。この母の口から、どうしてあのやうな事が云はれやう。あゝ、そなたはさぞこの母を蔑しむであらう……

袈裟。(不安になる。)何時に似ぬ氣がかりなお言葉ぢや。早う打明けて下さりませ。

衣川。そなたはきつと、この母を憎むであらう。ゆるしてたもれ。たゞわがみの心が弱かつたばかりに……(また顔をおほふ。)

袈裟。(鋭どく)それはどのやうな事で御座りまする。

衣川。云はですむ事なら。わがみは、この口から出したうはないが、云はねば、この上恐ろしい事が起るのぢや。

袈裟。この上恐ろしい事が……母上、それは私ゆえで御座りまするか。

衣川。さうぢや。そなたゆえぢや。可愛や、そなたは物の怪のやうに恐ろしい男に見込まれてゐるのぢや。

袈裟。あの私が……物の怪のやうに恐ろしい男に……

衣川。(泣きながら)そなたが從へばよし、從はねば、この母はもとより、緣につながる渡どのも生けては置かぬと云ふて、わがみを責め苛なむのぢや。

袈裟。(昂然として)渡どのは、打物とつては、何人にも劣らぬ手だれの兵士で御座ります。

衣川。渡どのが器量すぐれておはせばこそ、そなたの婿にえらんだのぢや。

袈裟。母上、お心やすう思召せ。たとへ何人がさやうな無法な事を申せばとて、渡どのの御手に組つて居りますれば、決して心配は御座りませぬ。

衣川。……いかに渡どのでも、相手があの無法者では……(ため息をつく。)

袈裟。館には、主のためには笑つて死ぬる郎黨も數多く居りまする。

衣川。いや、いや、それも手よりにはならぬ。相手は人の寢首さへ搔きかねぬ男ぢや。

袈裟。(容易ならぬ顏色にて)母上、それは誰で御座ります。

衣川。(顏を手でおほふ。)わがみの甥の殿ぢや。

袈裟。何……甥の殿……盛遠どので御座りますか。

衣川。いかにも、その盛遠ぢや。(泣く。)そなたの耳には、金輪際かやうな事は入れまいと思ふたが、今宵にせまる大事が起つたのでのう……

袈裟。(不安になる。)今宵にせまる大事とは何のやうな事で御座りまする。

衣川。甥の殿が此處へみえるのぢや。

袈裟。何と仰せられます。

衣川。(顔を手でおほひ、居たゝまれぬやうに泣きながら) そなたに會ひにみえるのぢや……みんなわがみの心が弱かつたゆえぢや……

袈裟。(急きこんで) 母上、渡の妻の私に會はうとは、あまり理不盡では御座りませぬか。

衣川。いかにも理不盡のきはみぢや。わが一念をとほさむためには、道理なども顧みやうともせぬのが、盛遠の氣象ぢや。

袈裟。(烈しい不安に襲はれて) 今宵と云へば、もはや、間もない事――母上、仔細をくはしうおきかせ下されませ。

衣川。昨夜遲う盛遠が思ひもかけず訪ねてきて、褥の上に座りもあへず、「姨母御前に頼み入る。御身の娘御、袈裟どのを我らが妻に下されい。」と思切つたる顏色で云ふのぢや。「袈裟は左衞門尉どのの妻ぢやと云ふ事を御身も知つて居らるゝ筈」と云はせもはてず、血走つた眼で、きつとわがみをにらまへ、大の刀を拔きひらめかして、「もとよりそれは承知いたす。さりながら、この盛遠が命がけの戀ぢや。御不承とあらば、便なき事ながら、姨母御前も、渡どのも安穩には置くまじ。」とわめくのぢや。(泣く。) 無理無體とは思ふたれど、女の身の悲しさには、强いて、爭ふ事も出來ず……ゆるしてたもれ、そなたを今宵こゝへ招ぶ事を承知したのぢや。

袈裟。渡邊黨の内にさる者ありと云はれた左衞門尉渡の妻が、盛遠づれの慰物にならねばならぬとは……(涙をこぼす。) 母上、私には何としても忍ばれませぬ。

衣川。(物狂はしく) この母をそなたの手でたゞ一思ひに殺してたもれ――渡どのゝ思惑も耻かしい。所詮わがみは、もう生きては居られぬのぢや。

袈裟。(悲憤)憎い盛遠ぢや――かよはい女とあなどつて、無理無體の戀をしかくるとは獸にも劣つた心ばせぢや。母上

渡どのに立つる操は、私の生命にもかへられませぬ。盛遠が參りましたならば、私が會ふて、諫められるだけ、諫めてみませう。

衣川。もし、盛遠が聽かぬときは、

袈裟。（悲しげに母を見る。）致方が御座りませぬ。たゞ、無法者の刃にかゝつて死ぬるばかりで御座ります……

衣川。（物狂はしく泣倒れる）そなたを殺して、わがみ一人どうして生きては居られやうぞ……

袈裟。（深く思沈む。）私はたゞ徒らに死にませぬ。かならず盛遠に、女の心の苦さを思知らせてやります……

女の童が靜かに出てくる。灯の點いた燈臺をよい所に据える。日がくれかけて室の內が急に明るくなる。女の童退場。

やがて、盛遠が、從者を一人從へて片折戸のところへ現はれる。

盛遠。姨母御前――御約束にしたがつて、盛遠が推參いたした。（かう云つて、片折戸を押開らき、椽のところへ來る。從者に向つて）そちはもう歸つてよろしい。（椽より上る。）

從者。はつ。（退場。）

盛遠。（うれしげに）おゝ、袈裟御前ぢや。（袈裟は嚴しい顏付で輕く會釋する。盛遠はハラハラと泣く。）姨母御前、この盛遠が無體の願ひを早速御聽屆け下され有難う存じまする。

衣川。（血を吐くやうに）盛遠どの――わがみを殺して下され……

盛遠。（恐ろしき顏付になる。）。それ程の事はこの盛遠は致しかねませぬぞ。

袈裟。老いたる母をそのやうに御責めなされては、卑怯未練の誹をお受けなされませうぞ。

盛遠。（血走つた眼で袈裟を見つめる。）いや、姨母御前を責むるのでは御座らぬ——この盛遠が極惡非道の所行をば、神明佛陀の照覽にそなふるので御座る。

袈裟。（泣く）この袈裟には何としても、老いたる母の苦しみはみては居られませぬ。盛遠どの。當の相手の私に、何事もおつしやつて下さりませ。

盛遠。袈裟御前——この盛遠は、御身ゆゑに、心が狂ひ申した。寢ては夢、さめては現にみるはたゞ御身の面影ばかりで御座る。御身が左衛門尉殿の御内所と云ふ事も、承知いたしての上の事で御座る。あはれ、この念をとげぬ程ならば、盛遠が一生は、塵芥にも劣り申さう。

衣川。盛遠どの……無理ぢや。無體ぢや……

盛遠。（衣川の女房を物狂はしくにらまへて）姨母御前。無理無體は、もとより覺悟ぢや。よべも申したとほり、もし、この念がきかれずは、盛遠はどのやうな事を致すか、わが身でも分り申さぬ。

衣川。わがみは婿の殿に殺された方がましぢや。

盛遠。（異樣な眼ざしで）御身はもとより……左衛門尉殿とて、容赦はいたさぬ。袈裟御前の縁につながる人々は、一人も生けては置くまじと思ひ定め申した。

衣川の女房は苦しみはじめる。

袈裟。（驚いて）母上、何となされました。母上、母上。

衣川。……胸の痞が……苦しいのぢや……

袈裟。（肩より胸を撫でさすり、藥を呑ませなどする。）さ、母上、此處にお出なされて、案じすごしをなされうより、次

の間でゆつくりお休みなされませ。

衣川。ではそなたの云ふとほり、次の間で休ませて貰ひませう。(立上る。袈裟は衣川の女房をいたはりながら退場。)

女の童が登場して、夜の物を次の間へ運ぶ。

袈裟はやがて、また出てくる。

袈裟。失禮いたしました。

盛遠。袈裟御前。某が先刻よりの無禮のかずかず、おゆるし下されい。かよはき姨母御前をかほどまでに苦しめ奉るこの盛遠が心は鬼か蛇か、さぞかし憎く思すで御座らう。(涙をこぼす。)もとより某は無骨の生れ、風雅男(みやびを)たちの戯は、知り申さず。たゞ、たゞ、戀慕の一念に、性根までも亂れはて、日本一の痴(し)れものとなり果て申した。餘人は知らず、某にとつては、生死の境の戀で御座るゆゑ、この世の義理も情ももはや、思ひすてゝ御座るぞ。

袈裟。(次第に盛遠の心を感じる)盛遠どはのよいお方ぢや。

盛遠。(自責。)ただただ某の大惡念をお責め下されい。

袈裟。盛遠どの。私はしみじみうれしう思ひますぞ。

盛遠。何、うれしいと仰せらるゝか。

袈裟。はい、これがうれしうなければ、私は女では御座いませぬ。

盛遠。然らば某の戀をお入れ下さるので御座るか。

袈裟。あなたさまのお心ばせをいとしう思ひまする。

盛遠(涙をうかべて)袈裟御前、某は、もはやこのまゝ死すとも恨みとは存じ申さぬ——御身の旨々、たゞ、忝なう

て、出す言葉も御座らぬ。(手を取らうとする。)

袈裟。(それを振りはらふ。)およしなされませ。盛遠どの――そのやうな戯(たはむれ)をいたさうために、この袈裟はまことの心を打明けたのでは御座りませぬ。

盛遠。(振りはらはふとする袈裟を力任せに抱きすくめて痛切に)いや、某は、そのやうな事は聴き申さぬ。一生を捨てゝの戀ぢや。あくまで御身とともに樂しみたいのぢや。御身の美くしい肌を殘る隈もなく思ひのまゝに味はうてみたいのぢや。

袈裟。(抱きすくめられたまゝ、聲をふりしぼつて)私には夫が御座います……

盛遠。それを恐るゝ盛遠では御座らぬ。左衛門尉がもし手向ふて參らば、一刀の下に斬つてすつるまでぢや。

袈裟。何、わが夫(つま)を……

盛遠。老ぼれた左衛門尉が御身の夫となるのさへ腹立たしいのぢや。

袈裟。盛遠どの。おはなしなされませ。

盛遠。いや、御身がさやうに振はなさうとさるゝ内は、決してこの腕ははなし申さぬ。

袈裟。おはなしなされずば、私は舌を噛んで死にまする。(盛遠は思はず腕をゆるめる。袈裟はのがれて、やゝ離れたところに坐る。)盛遠どの。(切歯して)ようも私を、かほどまでに、お蔑すみなされましたなあ。

盛遠。いや、蔑すんだのでは御座らぬ。男の戀の强さをお眼にかけたまでぢや。

袈裟。遣瀨ない男の戀とは、女をかやうに踏みにじる事で御座りまするか。

盛遠。抱きすくめられた腕の內でもがくのが女のまことの樂しみぢやと聽き申した。

袈裟。あなたさまは、女の心を御知りなされませぬ。
盛遠。某にはいま始めて御身の心が分つたのぢや。
袈裟。何、心が分つたとは……
盛遠。御身は左衛門尉が生きてゐる內は、某の心のまゝにならうとは決してせぬのぢや。
袈裟。おゝ、ようそこに御氣が付きました。盛遠どの、人の妻は、たゞ今の様な事を腹立たしう思ふもので御座ります。
盛遠。この上は、もはや理も非も御座らぬ。左衛門尉を打取つて、御身をわが心のまゝに致さねば、この盛遠は、心が安まり申さぬ。
袈裟。(色をかへて)何、わが夫を……
盛遠。いかにも……御身が某をいとしいと云はれたは、よも僞りでは御座るまい。(袈裟の顏色は死人のやうに蒼ざめる。盛遠烈しくつめよつて。)それとも一時の氣休めで御座るか。
袈裟。いえ、僞りでは御座りませぬ。
盛遠。左衛門尉を打取るは、袋の物を探ぐるより易い事で御座る。いで、然らばこれより、直ちに館へ忍入つて、渡の首を持つて參らう(立上る。)
袈裟。盛遠どの、御待ちなされませ。
盛遠。何で御座る。
袈裟。今宵は渡は館には居りませぬ。
盛遠。まことで御座るか。

袈裟。(少時、ためらふ。やがて、顫えながら、さゝやくやうに)明日の晩になされませ。

盛遠。明日の晩にせよと云はるゝので御座るか。——明日は御身も館に戻らるゝで御座らう。

袈裟。(イライラして)早う戻りまする。

盛遠。して、渡の寢所は何處で御座る。

袈裟。館の南の角の部屋で御座りまする。

盛遠。(腹の底より)承知いたした。

袈裟。(さゝやくやうに早口に)渡には髮を洗はせて置きまする。

盛遠。うむ。濡髮を目當に打取り申さう。——袈裟御前、然らば、今宵は御別れ申す。やがて渡の首を持つて御眼にかかるで御座らう。(退場。)

袈裟。(凝乎つとその行衛を見送つてゐる。獨語)あくまでわがみを蔑すむ憎くい男ぢや。

衣川の女房が出てくる。

衣川。これ、娘、

袈裟。おゝ、母上(泣く。)

衣川。わがみは次の間で殘らずきゝました。娘、そなたはまごゝろからまさかあのやうな恐ろしい事を云ふたのではあるまいのう。

袈裟。母上、盛遠は憎くい男で御座ります。

衣川。(ため息をつく。)あのやうな恐ろしい男の事ゆゑ、そなたに欺されたと知つたら、また、どのやうな難題を持ちかけ

やうも知れぬ。

袈裟。（顔を手で覆ふて、異様な聲で）母上、私は決して誰も欺しはいたしませぬ……あのやうな憎い男を……御覧なされせ、明日の晩は、女の心の苦がさを思知らせてやりまする……

袈裟は嗚咽しながら、きれぎれにかう云つて、そこに泣倒れる。

静かに幕

第　二　幕

渡邊左衛門尉渡の館、南の角の部屋、前幕の明くる日の夜がふけてゐる。

短檠の光が鮮やかに照らすところで、袈裟御前が鏡に向つて洗つた髪を男髷に結んでゐる。

月光が、椽に這ひのぼつて、蟲の聲が悲しげに斷續してゐる。

腰元が出てくる。

腰元。殿さまの御歸りで御座ります。

袈裟。おゝ、お歸りなされたか。それでは夜ふけて御苦勞ながら酒の用意をしてたもれ。そして只今、髪を結んですぐ御迎へに參りますとさう申上げや。

腰元。はい（退場。）

渡の館。いや、髪を結んでゐるなら、出迎へには及ばぬ。身共がそれへ參らう。

左衛門尉渡、登場。

袈裟。お歸りなされませ。

渡。今宵は院の御所で、管絃の御遊が始まつたため、つひ、遲くなつた。

袈裟。それは定めし面白い事で御座りましたで御座りませう。

渡。たゞ、遠音に拜聽いたしたまでではあるが、院の遊ばされた琵琶の音は、わけても冴えて居つたやうぢや。(袈裟の髪に氣が付く。)や、そちは男髷を結ふのか。

袈裟。(悲しげに笑ふ。)はい

渡。それはまたどう云ふ仔細ぢや

袈裟。よう似合ふと腰元どもが申しましたゆゑ、たはむれに結ふてみました。

渡。ははゝゝ何時までも、そちは子供のやうぢや。

袈裟。(鋭どく)あなたさまが、そのやうにお躾なされたので御座ります。

渡。そちと身共とは、あまり年が違ひすぎるので、つひ、さうなるのぢや。

袈裟。父親の味しらぬ私には、どうしてもあなたさまが父御のやうに思はれてなりませぬ。

渡。身共もそちがわが子のやうに可愛いいのぢや。

袈裟。わが夫

渡。何ぢや

袈裟。(涙ぐむ。)何時までも、何時までも、私をそのやうに思ふて下さりまするか。

渡。云ふまでもない事ぢや。(袈裟をみつめる。)や、そちはどうした。眼に涙をためてゐるではないか。

袈裟。(悲しげに微笑む。)今宵はどうやら氣が欝いでなりませぬ。

渡。そちの母御の氣欝の病が、うつゝたのかも知れぬ。(笑ふ。)して、母御の御病氣は如何であつた。

袈裟。(打沈んで)何時ものとほり、胸の痞で御座ります……

渡。近頃、そちの母御の處へ遠藤武者が時々出入りすると云ふ噂があるが、そちは知らぬか。

袈裟。遠藤武者と申しますと……

渡。渡邊黨切つての無法者、盛遠の事ぢや。

袈裟。(顏色變る。)いえ、私は存じませぬ。

渡。(何の氣もなく)あのやうな無法者には近よらぬが得ぢや――そちよりよう母御にも云ふて置け。

袈裟。はい、かしこまりました。

腰元が酒肴を運んでくる。

渡。や、酒の馳走か――かやうに夜ふけて珍らしいではないか。

袈裟。はい、このやうな名月ゆえ、酒一つ差上げうと思ひまして・・・

渡。それは忝じけない――然らば一獻まゐるぞ(盃を取つて飲む。腰元、酌をする。渡が盃を傾ける姿を袈裟はしげしげとみてゐる。たうとう耐えきれなくなつて、手で顏を覆ひ泣出す。)どうしたのぢや。これ袈裟御前、何がそのやうに悲しいのぢや。

袈裟。(むせびながら)いえ、何も悲しい事は御座りませぬ。かうして、あなたさまと、たつた二人、酒飲んで打興じまするのが、泣きたい程うれしう御座ります・・・(狂氣のやうに笑ふ。)

渡。（袈裟の泣笑ひをみて呆れる。）これ、袈裟御前、何としたのぢや。今宵は、そちは眼の光もたゞならず、起居振舞(たちゐふるまひ)も荒けなくて、つねのそちとは人が違ふやうぢや。

袈裟。（ギクリとする。急に賑やかに笑ふ。）いえ、いえ、これが袈裟のまことの姿で御座りまする……これまではあなたさまの御前(おんまへ)でよい子になつて居つたので御座りまする。（また狂氣のやうに笑ふ。）

渡。何としても身共には腑に落ちかぬる……これ袈裟御前。

袈裟。何で御座いまする……

渡。そちの母御の御病氣が悪いのではないか。

袈裟。いいえ、母上はもう起きてお出でなされます……

渡。それでは昨日何事が母御の家であつたのではないか。

袈裟。（默つて。渡を凝乎(じい)つとみる。悲しげに。）いいえ、何事も御座りませぬ。

渡。身共はわが子のやうにそちをいとほしう思ふぞ。そちや母御の身の上に何事か起つたならば、この左衛門尉が必らずわが身にかけて守つてつかわす……

袈裟。（凝乎(じい)つとせきくる悲をこらへて）有難う存じまする。わが夫。

渡。何ぢや。

袈裟。その御盃を私に下さりませ。

渡。そちが酒(さゝ)をたべるのか。

袈裟。はい。一つたべてみたう御座います、

波。これまで、そちは酒がきらいであつたではないか。
袈裟。今宵の月の光をみて居りましたら、何うやらきらいな私も酒をたべてみたうなつて参りました。
袈裟はかう云つて、盃をうけ、腰元につがせて、ぐつと一呼吸に飲み乾す。
袈裟。これ、今一杯つぎや。
腰元。はい（酌をする。）
袈裟。（また、ぐつと飲みほす。）わが夫。
波。何ぢや。
袈裟。（悲しげに）この世の中に、このやうなよい味の物があらうとは、私は今の今まで存じませんでした。何とも云はれぬ苦がさぢや……（腰元に）これ、今一つ（盃を出す。）
腰元。（心配らしく）そのやうに御過ごしなされては・・
袈裟。そのやうな心配はせずともよい。つぎや。
腰元。はい（浪々とつぐ。）
波。これ、袈裟御前。そのやうに酒をすごして悪酔してはならぬぞ。
袈裟。大丈夫で御座ります。（ぐつと飲みほす。）おゝ、胸がすくやうぢや（沈痛な微笑。）
波。（凝乎つと袈裟の顔をみつめ。）それ、そちの顔が蒼うなつて参つたではないか。平生たべつけぬ物を、そのやうにたべては、足腰も立つまいぞ。
袈裟。わが夫。私にはどうしても酔へませぬ。（悲しげに）酔はうと思ふても何うしても酔へませぬ。

渡。いや、無理に醉はずとも、よい。そちは今宵はどうか致して居る―もう、酒はやめぢや。(腰元に)盃をひいたがよいぞ。
腰元。はい(立上らうとする。)
袈裟。待ちや……まだ盃を退いてはならぬ。わが夫――それならば、私は、もう酒をたべませぬ。あなたさまの名上るのを、かうしてみて居ります程にいま少時、御物語いたしませうでは御座りませぬか。
渡。そちがたべさへ致さぬなら、かうして語るも一興ぢや。
袈裟。(打沈んで。)かうして、あなたさまと私と仕合よう暮らすも、もはや長い間の事では御座りますまい。それを思ふと、私は、この世の中が情けなく思はれてなりませぬ。
渡。(色を作す。)袈裟――もう、よすがよい。今宵は、そちは何時に似ず愚痴な事ばかり申す、折角の酒がまづくなるわ。
袈裟。(ハラハラと涙をこぼす。)わが夫、おゆるしなされて下さりませ。今宵は何うやら心淋しくて、氣が欝いでなりませぬゆえ、つひつひ御心にさからふやうな事ばかり申しまする――どうぞおゆるし下されませ・・
渡。そちは心が疲れてゐるやうぢや。姑御の看病をいたして、よう、寢なかつたからであらう。今宵は早く寢んではどうぢや。
袈裟。(また泣く。)いえ、私はまだ、寢みたうは御座りませぬ。(間を置いて、腸をしぼるやうに)ならうことなら、このまゝ、寢間へ入らずに、あなたさまと一夜を語明したいと思ひます……
渡。(たつて)そのやうな事をいたしたら、それこそ明日は眠うて、居眠りをいたすであらう。
袈裟。(惡寒に襲はれたやうに顫ふ。)明日は……
渡。身共は明日は、また、早朝より院の御所へ參らねばならぬ……袈裟御前、もう寢まうではないか。

袈裟。(捨てばちの笑)ほほ……私はまだ寝みませぬ。わが夫。

渡。(驚いて)何ぢや。何うしたのぢや。

袈裟。私は何か舞ふてみたうなりました。

渡。何――この夜更に舞いたいと申すのか。

袈裟。はい――酒がやうやうまわつて參りました。何うやら心が浮々として、久振りに舞ふてみたくなりました。(月をかすめて通る初雁の聲が冴やかにきこえる。)お聽きなされませ。わが夫。あのやうなあはれ深かい初雁の聲が遠ほくきこえます(聲をくもらせて)あゝ、私は今宵のやうにしみじみと秋の風情を身にしめて味はうたことは御座りませぬ。(泣倒れる。)

渡。それ、云はぬ事ではない―そちは悪醉したのぢや。

腰元。(さゝやくやうに)殿さまに申上げます。奥方さまは、夕刻、お一人で、酒を召上りまして御座ります。

渡。何、夕刻一人で酒をたべたと申すか。

腰元。はい、私がお止め申しましたが、氣が鬱いでならぬと仰しやいまして、召上りましたので御座りまする。

渡。うむ。それで、醉ふて居るのぢやな。これ、袈裟。酒をたべるのを止めはせぬが、女子はあまり醉はぬがよいぞ。

袈裟(頭を上げて)わが夫。

渡。何ぢや

袈裟。どうぞ私に舞をまわせて下さりませ。心のかぎり舞ひましたら、この胸が凉しうなるかと存じまする。

渡。また、明日もある事ぢや。舞はやめて寝んだ方がよいぞ

袈裟（狂はしく）明日は明日で御座ります。どうぞ舞はせて下さりませ……このまゝ寝みましたら、酔ふて苦しうなりませう。

渡。うむ。それならば、一曲、舞ふてみるがよい。

袈裟。（狂喜）殿さまのおゆるしが出た。舞の仕度を頼むぞや。

腰元。かしこまりました。（あたりを片付ける。）

袈裟。御免なされませ。仕度をいたして参ります。（急いで退場。）

腰元もつゞいて退場。

渡。（盃を傾けた）おゝ、身共も大分酔ふたやうぢやな。

袈裟が水干を着て、飛鳥のやうに出てくる。

袈裟は吟いながら舞ふ。

月の光は輝けど
荒野の艸に花もなし
たゞ、たゞ暗らき道のべに
冷たくやどる露の玉。

慈悲の如來は何處ぞや。
みわたすかぎり、あれはてゝ
岩根こゞしき地獄路に
慈悲の如來をもとむれど……

袈裟の舞の手ぶり足取りが段々物狂はしくなつてくる。

∴　∴　∴

大千世界の影きえて
地獄の鬼の笑ふこゑ……

渡。（みかねて）これ、袈裟御前。もう、止めたがよい。そのやうな不氣味な舞は身共は見たうも思はぬ。それに、餘程醉ふたと見えて、足取りも手振りも拍子に合ふては居らぬ——はやう寢みや、

袈裟。（くたくたに疲れて、崩れるやうに坐る。）はい……（腰元に）あゝ、今宵のやうに面白う舞ふた事は、これまでつひぞおぼえぬ。舞ふて、舞ふて、前後も分らぬやうに疲れはて、寢んだら、さぞよい心地であらう……

渡。（立上る）もはや、夜も更けた。（遠く鐘の聲がきこえる。）おゝ、鐘の音がきこえる。あれは三更ぢや。

袈裟。もう三更で御座りまするか。

渡。（腰元に）そこを片付けて、寢間の用意をいたせ。

腰元。かしこまりました。

渡は立つて奥へ入る。

腰元がそのあたりを取片付ける。

袈裟は力なく立上つて、奥へ入る。

腰元は夜の物をしきつらねて、戸をことごとく閉めて退場する。

やがて、袈裟が寝衣姿になつて、静かに戸を一枚くり開けて姿を現はす。

袈裟。(凝立少時。やがて)まだ、盛遠は來ぬやうぢや。(嗚咽の聲つゞく)何でまたあのやうな男に、まことのわがみの心を打明けたのであらう。思へば口惜しいきはみぢや。(間、雁のわたる聲。異様な調子で)今宵こそ、あの盛遠奴が、女の心の苦がさを思知るであらう……

左衛門尉渡の聲がきこえる。

渡。袈裟御前。袈裟御前。

袈裟。はい。たゞ今、參ります。

渡。そちは何處にゐるのぢや。

袈裟。此處で御座ります。

渡が戸の開いた處から、顔を出す。

渡。そちはそこで何をしてゐるのぢや。

袈裟。あまり顔が熱つて苦しう御座りますから、涼んで居ります。

渡。夜露にあたつては、身體の毒にならうぞ、さ、寢みや。

袈裟。はい（急に泣く。）わが夫。（縋りつく。）

渡。そちはまだ醉ふてゐるやうぢや。さ、おぢや。

渡は袈裟を抱えるやうにして、室の内へつれ込む。戸が閉まる。

雁がまた中空をわたつて冴えた聲でないてゆく。

戸の洩間から洩れてゐた灯の光が消えてしまふ――沈默、數秒。

やがて、忍びやかに盛遠が現はれる。

盛遠は凛々しい姿で、大刀を帶び覆面をしてゐる。

閉めた戸に、平たく張付いたやうにして、内の樣子を覗がつてゐる。

月が一段と鮮やかに輝やく。

盛遠は音のせぬやうに戸を一枚くり開ける。やがて、彼の姿は家の内に消えてしまふ。

小時、

たゞならぬ物音が家の中に起こる。

人の叫ぶ聲、太刀打ちの響などが、つゞく。

一人の腰元が、寢亂れた姿で椽に飛出してくる。

その後から、大きな男の姿が現はれる。

腰元。あれ〱（倒れて、そこに蹲まる。）

腰元につゞいて出てきたのは、盛遠である。手には、抜ききらめかした太刀と、袈裟の首をも持つてゐる。

腰元は這ふやうに退場。

彼は椽に立つて、月の光で死首を一應あらためる。そして、濡髮に手をふれてゐる。

さつと、戸の開いた處に灯の影がさす、盛遠は首を小脇に抱へたまゝ、木立の闇にまぎれて去る。

人聲がさわがしくきこゑて、松火を照らしながら、渡が、數人の郎黨たちと出てくる。

渡。曲者はみえぬか。

家の裏から、まだ松火を照らした郎黨たちが出てくる。

郎黨甲、皆目、姿がみえませぬ。

渡、然らば家の外を探せ。

郎黨甲。はつ。かしこまりました。(一同をつれて、退場。)

渡。(引つれた郎黨たちに向つて)その方たちは、木立の内をあらためてみい。

郎黨。はつ。

一同去る。渡一人椽に立つてゐる。

幕

第三幕

第二幕の翌日、舞臺は第二幕と同じく渡邊左衛門尉渡の館、曇つた朝の事である。

中央に屏風を立てゝ、袈裟御前の遺骸を安置してある。香烟しめやかに、その前に立のぼる。
髻髪もみだれ、顔蒼ざめた渡が、たゞ一人坐つてゐる。

幕開くと、郎黨の一人が出てくる。

郎黨。只今、歸りまして御座りまする。(平伏)

渡。(顏を上げる)曲者は分つたか。

郎黨。(面目なげに)殿、殘念ながら、皆目行衛が知れませぬ。

渡。(イライラして)きつと曲者を探出して參れと云ふ身共の嚴命を何ときいたか。腑け者奴が。

郎黨。はゝ。

渡。この上は、もうその方たちには賴まぬ。この渡が草を分けても、必らず探出して見せるぞ。退れ、もう、その方たちの顏を見たうないわ。

郎黨。何とも面目次第も御座りませぬ。仰をうけますると、早速手分けをいたしまして、大路小路を隈なく探がしましたが、影も形も見えませぬ。

渡。何奴も不甲斐ない者どもぢや。

郎黨。殿。御館の内には、曲者の證據は何も殘つては居りませぬか。

渡。何も殘しては參らぬ。たゞ、大の男の足跡が入亂れて殘つてゐるだけぢや。

郎黨。もしや證據が殘つて居りますれば、屈强の手がゝりと思ひまして、一應戾つて參りました。

衣川の女房が案内もなく驅込んでくる。

衣川。渡どの。(泣倒れる)

渡。おゝ、母御前。(郎黨に向つて)その方は退つて休息いたせ。

郎黨。はつ。然らば、また後程……(退場。)

衣川。渡どの。思ひもかけぬ事になりました。(泣く。)

渡。(眼をおさへて)母御前。渡が男は、もはやすたり申した――添寝した妻の寢首を掻かるゝとは……あゝ何たる事で御座らう。

衣川。(屏風の内を見てむせびながら)あまりと云へば、慘たらしい仕打ちや……

渡。其の心底お察し下されい。

衣川。(屏風を押除けて、空しい袈裟の軀にかけた夜の物をまくつてみる。狂氣のやうに)淺間しや、娘、この姿は……そなたが訪ねてきて、親しう言葉を交したは、つひ一昨日の事であつたものを……、かやうなはかない姿にならうとはこの母は、夢にも知らなんだぞや……

渡。母御前。御嘆きは御察し申す。が、暫らく御待ちなされい。只今、黒谷の法然上人をお招きいたしましたゆゑ、やがて、廻向に參らるゝで御座らう。それさへすめば、この渡が洛中洛外は云ふに及ばず、あまねく天が下をたづねて必らず敵の行衞を探出して參るで御座らう。

衣川。敵の手がゝりは御座りましたか。

渡。口惜しい事で御座るが、何奴の仕業か、更に分りませぬ。

衣川。(烈しく悶える。)渡どの、おゆるし下されい。わが身が年甲斐もなく命を惜しんだのが、過で御座りました……

渡。(衣川の女房を險しい眼で見つめる。)何と云はるゝ、母御前、御身はその曲者を……

衣川。(一生懸命に)一大事を打明けまする。さ、渡どの。お聽きなされ。袈裟の敵は、わが身の聟の殿、盛遠で御座りまする。

渡。盛遠

衣川。(氣がゆるむ。泣く。)さうぢや。盛遠が娘をむごたらしう殺したのぢや。

渡。(容易ならぬ眼付で)母御前、御身の言葉はよも僞では御座るまいな。

衣川。かゝる大事に何で僞を云ひませう。

渡。(悲憤の調子になる。)おのれ、盛遠、ようも、かやうな狼藉をいたしたな。よし、その儀ならば、容赦はいたすまじ。これより直ちに彼が宿に馳せ向つて、一刀のもとにかの無法者の素首を打落いてくりやらずるぞ。

衣川。(段々心が落付いてくる。)渡どの。盛遠は御身を殺さうとたくんだのぢや。

渡。何、某を――(間。)母御前。これには何か深かい仔細が御座らう。(嚴しく)すみやかにお話し下されい。(詰めよる。)

衣川……(泣く)世に女子ほど罪の深かい者は御座りませぬ……

渡。(イライラして)はやはや、その仔細を御話し下されい。

衣川。娘は御身にそむいた申譯なさに、かの無法者の刃にかゝつて死んだのぢや。

渡。(顔蒼ざめる。)それはまことで御座るか。

衣川。(泣沈む。やがて、)わが身には娘の心はよう分りまする。

郎徒一人入り來る。

郎黨。殿、只今、盛遠殿が御出で御座りまする。

渡。何、盛遠奴が参つたか。(興奮して思はず立上る。)

衣川。(恐怖の表情)あゝ、渡どの……恐ろしい事になりさうぢや……

渡に縋りつく。

渡。(大刀を握つて、衣川の女房を後にかこふ。)母御前、御心安う思召せ。まだ筋骨も固まらぬ盛遠如きに退は取りませぬ。

突然物騒がしくなる。

盛遠が現はれる。片手に首桶を抱いてゐる。眼血走り、顔蒼ざめて容易ならぬ相貌である。

盛遠。(入口に立止る。)左衛門尉殿。

渡。(太刀を抜きそばめて油断なく眼を八方にくばる。)何ぢや。

郎黨は渡の身に引添ふて、いざと云はゞ飛びかゝらうと身構へてゐる。

盛遠。(緊張した間を置いて)案内も請はず、直々に見参に参つた無禮はおゆし下されい。(渡答へず。盛遠は衣川の女房をひたと見つめる。不自然な微笑。)ふむ、姨母御前もお座す——左衛門尉殿。袈裟御前の首をしかと御受取り下されい。(首桶を差出す。)

衣川。(沈默に耐えず)甥の殿。あまりと云へば情知らず……ようも娘をこのやうにむごたらしう……(むせび泣く。)

盛遠。(大の眼をいからして)えい、何を血迷ふて、泣かるゝのぢや。かやうになり行く事を御身はとくに承知して居られたのぢや。

衣川。（狂氣のやうに）いえ、いえ、何でわが身が知つてゐやう。わが身は、たゞ、娘の仕業を解しかねて、心苦しう思ふてゐたのぢや。

盛遠。（衣川の女房に摑みかゝらうとする。やがて思返して、聲低く）さやうな罪深かい僞は、御身の後生のさわりになりませうぞ。（衣川の女房これをきくと、聲高く泣伏す。）左衛門尉殿、さ、御受取り下されい。

渡。（郎黨に向つて）あれを………

郎黨。はつ。（進み出て、盛遠から首桶を受取り、渡の前に持歸つて捧げる。）

渡。（それをひたと見つめてゐる。やがて、身體を崩して、首桶の蓋を取る。滿身の力がさつと顏に現はれる。亂れ髮を摑んで、蒼ざめた袈裟の首を取出し凝乎つと、それを見る。涙が流れる。やがて、かすれた聲で）盛遠、和殿は神も佛も恐ろしうは思はぬか。

盛遠。（歯を咬縛つて、苦しさを耐へる。）某は和殿の寢首を掻きに參つたのぢや。

渡。（袈裟の首を首桶に入れて蓋をする。）何の恨か知らぬが、人を取違ゆるとは、よくよくうろたへたものぢやな。

盛遠。この盛遠は決してうろたへはせぬ。（ハラハラと泣をこぼす。）左衛門尉殿、某は手向ひはいたさぬ。はやはや、某の首を打落いて下されい。（そこにどつかと坐つて太刀を投げいだす。）

渡。うむ神妙な覺悟ぢや。さすが無頼の和殿も心の苛責にたへかねたと見ゆるな

盛遠。（兩眼をくわつと見開く。）何、心の苛責にたへかねたとな——左衛門尉殿。和殿が袈裟御前の夫でなくば、この盛遠は、そのまゝでは差置かぬで御座らう。

渡。（膝をふるはせて）この袈裟の死顏をみては、何と和殿を罵つても、罵り足りぬ心地ぢや。（顏を手で押へる。）

盛遠。（凝乎つとそれをみて）某は和殿を憎む、左衛門尉殿、和殿ゆゑに、袈裟御前は、某をかくまで欺かつたかと思へば、胸が煮へかへるやうぢや。早う首を打落いて下されい。

渡。（暗然として）和殿の首を打落しても、袈裟は決してこの世には戻つては來ぬ。

盛遠。（歯噛みをして）妻の敵も得打たぬとは、見かけ程もない卑怯者ぢや。

渡。和殿の首を打ち落したならば、成程、一時の腹は癒えやう。が、然し、盛遠、それは、和殿ぐらひの男のする事ぢや。

盛遠、何と云はるゝ。

渡。心の大人びた者は決して、さやうな事で、この悲しみを忘るゝ事は出來ぬ。（盛遠はすくんだやうになつて沈默してゐる。）袈裟は、もう死んでしまふた。（手で顔を押えて）呼んでも叫んでも、もう戻つては來ぬのぢや………（沈默。静かに手を顔から離して、郎黨に向つて）その首桶を、屍の上の房へ置け。

郎黨。はつ。（捧げてゐた首桶を、枕の處に安置して、下の方に跪ずく。）

渡。そちはもう退つてもよい。

郎黨。かしこまりました。（退場。）

衣川。渡どの。御願で御座ります。娘の死顔に會はせて下され。

渡。おゝ、遠慮はいらぬ。お會いなされい。

衣川の女房は枕元にすりよつて、首桶を開ける。そして低い泣聲を立てゝそこに打伏す。

盛遠。（殺氣を含んで）左衛門尉殿。

渡。(油断なく) 何ぢや。

盛遠。(詰めよる。)和殿が切らぬとあらば、是非が御座らぬ。この盛遠は、もはや このまゝでは得忍ばぬ。心苦しうは御座るが、某が最後の悪念の犠牲となつて下され。

渡。(一歩退つて、深かい眼ざしで、盛遠を凝乎つと見る。)某を打たうと云ふのぢやな。

盛遠。いかにもさうぢや。(太刀を取る。)

衣川の女房は高い恐怖の叫をあげて顫ひながら盛遠にすがる。

衣川。これ、舅の殿。そのやうな無道な事はせぬものぢや…………

盛遠。姨母御前。御退なされい。女子の出る處では御座らぬ。(渡に向つて) おぞくも袈裟御前に計られたと知つたとき、すぐ、某は和殿を打果たさうと一旦は思ふたのぢや。

渡。和殿が打つてかゝらば、某とて、逃げかくれはいたすまじいぞ。

盛遠。(太刀の柄に手をかける。)望む處ぢや。

渡。(盛遠の言葉が終りもはてぬ内に鋭どく) 盛遠。和殿が某と打果したならば、袈裟は何と思ふであらう。

盛遠。何、袈裟御前が…………

渡。さうぢや。よう考へてみられい。定めし袈裟は、和殿の心の愚かさを、黄泉の暗で憤どほるであらう。

盛遠。(自ら責める。)…………某が和殿に打たれうと思定めたもそれ故で御座つた。今朝變りはてたる首をみ守つて、心に瞋恚の炎を燃やしこの上は和殿を打果さむと思ひきはめ思案に沈み居りし時、ふと、袈裟御前のありし日の面影を、思ひ浮べ申した。

衣川。(首桶を抱きしめて泣く。)娘、あゝ娘、ありし日の面影を今一度見せてたもれ………

盛遠。(顔をおほふ)左衞門尉殿………某の心地お察し下されい。(沈默。涙にむせびつゝ)もはや、かくなる上は、和殿を打つたとて、何かせむ。たゞ、いさぎよう和殿の前に罪を謝して、打たれうと一念發起して、すぐさま出て參つたので御座る。(間、血を吐くやうに)實に、思ひもかけぬ事で御座つた――わが掻きおとせし首が、袈裟御前の首で御座らうとは…………

渡。(齒を喰ひしばつて)和殿は自から求めたものを得たまでぢや。愚かな事ぢや。

盛遠。何、自から求めたものを………

渡。さうぢや。長う連れさうた某はよう袈裟の心を知つてゐる。

盛遠。(思ひ迷ふやうに)某が袈裟御前の心を見損なうたと云はるゝので御座るか。

渡。いかにも和殿は袈裟の心を見損なうたのぢや。

盛遠。(熱して)いや、某は決して見損ないは致さぬ。(自から確めるやうに)某をいとしう思ふと云はれた言葉が、まだ、わが耳の底にきこえるやうぢや、

渡。袈裟と某とは、心も年も違ひすぎて居た――和殿をいとしいと思ふたは、まことかも知れぬ。

衣川。(涙にむせぶ。)御身が歸られてから娘は盛遠殿に女の心の苦さを思知らせて上げうと云ふて居りました。

盛遠。何、女の心の苦さを………姨母御前。それはまことで御座るか。

衣川。まことぢや。(烈して泣く。)さりとは思切つた事をしたものぢや………

渡。盛遠。袈裟の心も知らずに、一すじに思ひつめて、よしなき事を仕出かした和殿の愚かさが、今こそよう分つたで

御座らう

衣川。…………娘は幼立から、利かぬ氣で御座りました…………

盛遠。左衛門尉殿。

渡。(答へず。たゞ愁然と首桶を見つめてゐる。)

盛遠。(いらだゝしげに)左衛門尉殿。

渡。(眼を兩手で押えて)何ぢや。

盛遠、もし、この盛遠が腹切つて死んだならば、和殿は、さぞ笑はるゝで御座らうな。

渡。笑いはせぬ。たゞ、憫ぢやと思ふだけぢや。

盛遠。(血を吐やうに)然らば死にもせず、殺されもせず、たゞ、このまゝに生きて居れと云はるゝので御座るか。

渡。盛遠。某とても同じ事ぢや。袈裟を失なうては、生きて甲斐なき心地が致たすのぢや。(嗚咽する。)

郎黨が出てくる。

郎黨。申上げます。

渡。何ぢや。

郎黨、只今、黒谷の上人様が御見えになりました。

渡。おゝ見えたか。然らばこれへ。

郎黨。はつ。かしこまりました。(退場。)

渡。よい處へ見えられた。我らが處世の道しるべは、黒谷の上人へ御願いたすが一番ぢや。

法然上人が郎黨に案内されて入つてくる。

渡。（席をすべつて）上人。ようこそ御入來下されました。

　　衣川の女房と盛遠とは、低頭する。

法然。左衛門尉殿。至急の御使ゆえ、早速參上いたしたが。承はれば、袈裟御前には、不慮の事にて、御逝去の由、驚入つて御座る。

渡。たゞ、上人の御憫察を御願いたすばかりで御座る。

法然。袈裟御前は、この老ぼれをよう介抱して下されたゆえ、人事とは思いませぬ。御痛はしい事ぢや。

渡。（涙を拭ふ）上人の御回向によつて、成佛いたさば、袈裟も、さぞ艸葉の陰にて喜ばしう存じませうかと思ひまして御足勞を願ふた次第で御座る。

衣川。上人さま。私はたゞ一人になつてしまひました。（泣く。）

法然。これは衣川の母御で御座つたか。さぞかし心細う思はるるで御座らうのう。

衣川。はい、有難う存じまする……

法然。ともかくも袈裟御前に御眼にかゝらう。

渡。はい。（立つて、首桶の蓋を開き、袈裟の首を出し、首桶の蓋の上に据える。）

法然。（合掌）南無阿彌陀佛々々々々々々（沈默。やがて衣川の女房は聲をあげて泣倒れる。）左衛門尉殿。

渡。何で御座りまする。

法然。（涙を拭ふ。）我等、少時御館へ御無沙汰いたしたが、かやうな事にならうとは、夢ゆめ思ひもかけぬ事で御座つた

のう。

渡。(涙をおさへて) たゞたゞ、無常迅速の念にたへかねまする。

法然。して、何ゆゑの御逝去か。もし仔細が、御座らずは承はりたいものぢやな。

　　盛遠が席を進み出る。

盛遠。上人。某は遠藤武者盛遠と申して、上西門院の北面に仕ふる者で御座る。何卒御見知り置き下されい。

法然。これは御初にお眼にかゝる。

衣川。上人さま。盛遠は私の甥で御座りまする。

法然。ほう。それはそれは、御身の姨母御前とは愚僧は年來の入懇ぢや。

盛遠、さやうに承はつて居りまする。(間、ひたと法然をみつめて) 上人。袈裟の寢首を掻いたは、かく申す某で御座る。

法然 (深かく盛遠を見つめる) 何で寢首を掻かれたのぢや

盛遠。(乾いた眼をきらきら光らせて) やみがたき戀のためで御座る。

法然。もそつと委しう承はらうでは御座らぬか。

盛遠。承知仕る、某は左衛門尉が素首を打落いても、袈裟を家の妻に申しうけたいと思ふて、無理無體に掻口說いたので御座る。

法然。して袈裟御前は何と云はれたのぢや。

盛遠。(ハラハラと涙をこぼす。) 袈裟は某をいとしう思ふと申して御座る。

法然。御身はそれからどうなされた。

盛遠。心のはやるまゝに、袈裟を抱きすくめ無理にも思を遂げやうといたしたので御座る。袈裟は某にまことの心を打明けたが口惜しいと申して……（盛遠は渡の顏をみる。）上人許させられい。某には、もはや、つゞいてお話いたす勇氣が御座らぬ。

法然。御身は左衛門尉殿を打果さうと思定められたで御座らう。

盛遠。（きつと顏を上げる。）どうしてそれが分かりまするか。

法然。逢ふたら御許しなされ。愚僧にはたゞふつとさう思はれたのぢや。

盛遠。いかにも打果さうと決心いたした。

衣川。（法然に向つて）この盛遠は娘に渡の首を得させいと迫つたので御座りまする。

盛遠。（衣川の女房の顏をじろりとみる。）某はたゞ、袈裟の心を信じたばかりで御座る。

法然。袈裟御前の心を信じたとは!

盛遠。（眼をとぢて）この戀ゆゑなら御身が夫を打果しても苦しうは思はぬと某が申したとき、袈裟は靜かに。「それはまことか。」と訊ね申した。

法然……袈裟御前の心にも、左衛門尉殿なくばと云ふ心地がしたと御身は信じたのぢやな。

盛遠。上人。さやうに信じたが過で御座らうか。

法然。いや、愚僧は過とは思はぬ。眞實、袈裟御前も、その時は、さう思はれたのぢや。

衣川。何と仰せられます、娘が……上人さま。そのやうな事は決して御座りませぬ。

法然。ところがあるのぢや。
渡、上人。わが妻をかやうに申せば、御笑ひを招くかは存じませぬが、某は袈裟の心の美しさを、よう知つて居ります(る)。
法然。袈裟殿のお心の美しさは、愚僧と云へども疑ひは致さぬ。
渡。然らば、何で某を亡きものにせうとまで思ふたので御座らう。
法然。それこそ人の魂の深秘ぢや。いかに潔白なお人でも、ふとそのやうな心地になる事があるものぢや。
渡。某には會得は參りませぬ。
法然。我心に徴してみれば、袈裟御前のお心が、愚僧にはしみじみと分かるやうな氣がいたすのぢや。
盛遠。上人、然らば承はる。さやうな悪念に悩まさるゝ人間も、佛の引接に會ひ奉る事が出來まするか。
法然。如來の御心には、そのやうな差別は御座らぬ。
盛遠。左衞門尉殿。
渡。何ぢや。
盛遠。和殿は、某を憎いと思ふて居らるゝで御座らうのう。
渡。いや、今は、もはや和殿を憎む心も消えうせ申した。
盛遠。それはまことで御座るか。
渡。いかにも僞りでは御座らぬ。(眼を抑えて)上人まことは袈裟は、某の身になり代つて、盛遠の刃にかゝつたので御座る。
法然。それはまたどう云ふ仔細で御座るな。

盛遠。(苦しげに)左衛門尉には、髪と洗はせて置く程に、濡髪を目あてに打果してたもれと、堅たく言ひかはした御前が、わが髪を洗つて寝んだので御座る。

渡。昨夜の事で御座つた――何時になく心を亂して、袈裟が某に酒をすゝめ、おのれもたべ酔ふて、男髷に結ひ、今様を舞ひましたが――あれが今生の別れの心で御座つた。

法然。(間を置いて)心の底で何と思ふて居られたかは分らぬが、今度の事をわが身を以つて裁かれた袈裟御前の心根は天晴なものと思はれるまする。

衣川。娘は渡どのが父御のやうに慈しんで下されますと申しくらして居りました。

渡。(決然として)女に曳かされて迷ふと思さば思せ。某は、いま、この浮世を思切り申した。上人、御願で御座りまする。何卒御弟子の内にお加へ下され。

法然。出家の御決心で御座るか。

渡。いかにも出家いたす。(髻をふるはせる)わが一生は、もはや暮らしつくした心地がいたす。

法然。御心根、御もつともと存ずる。

渡。未練とお笑ひ下されい。袈裟の亡きあとを弔らうが、某の向後の仕事と思定め申したので御座る。(涙を拭く。)富も名も、何事も、もはや欲しいとは思ひませぬ。たゞ、たゞ、心靜かに、上人のお側にお仕へいたし、老後の心を養ひたいと存じ申す。

渡はかう云切ると、小刀を抜いて髪を切る。

衣川。(聲を上げて泣く。)……渡どの。わが身の罪深さが空恐ろしくなつてきました。

渡。母御前。これからはお身を眞實の母と思いまするぞ。

衣川。上人さま。私もお弟子にお加へ下されませ。

法然。おいたはしい事で御座る。然しながら袈裟御前の心の光りは、今になつて、しみじみと感ぜられまする。(合掌。)

南無阿彌陀佛、〱〱……

盛遠。(ハラハラと涙をこぼす。)左衛門尉殿。某もやうやう心が開けて參つた。有難や、もう、死なうとは思ひませぬぞ。

渡。それは何よりぢや。和殿の行末に幸多き日の來るやう祈り申さう。のう、母上。

衣川。わが身もともに念じまする。

盛遠。(小刀を拔いて、同じく髮を切る。)左衛門尉殿。死なれぬ上は、某とて、かやうに致すより他に途は御座らぬ。上人、この上は某も、御身の御導きによつて、佛門の修業に精進いたす――何卒、教へを垂れ玉ふやう御願いたす。

渡。(驚喜して)おゝ、ようこそ覺悟せられた。某も嬉しう御座る。上人、さやうでは御座らぬか。

法然。(間を置いて)それも一つの御思案ぢや。

渡。この上は三人ともに彌陀の悲願にすがつて、念佛修業いたさう。袈裟も定めし喜ぶで御座らう。

盛遠。某はこれより紀伊の熊野に趣くつもりで御座る。

渡。それはまた何故ぢや。

盛遠。まづ、發心第一の願として、那智の大瀧にかゝり、三七日の間、打たれやうずる決心で御座る。

法然。御身は自力の修業を望まるゝのぢやな。

盛遠。いかにも仰の通りで御座る。わが心にやどる袈裟御前の魂は、苦がい垢となつて、皮肉をかきむしり申す。いで

これより心をはげまして、あらゆる苦行を修業し、心の垢を洗ひ落さうするぞ。

渡。彌陀の悲願は和殿に有難うは御座らぬか。

盛遠。某がこの生涯の大苦痛をのがれむためには、あくまでこの身を苦しめねばならぬ。上人の思召は如何で御座る。

法然。御身の心は御身が一番よう知つて居らるゝ。愚僧もそれが一番ぢやと思ふのぢや。

盛遠。(合掌。)忝なう存じ申す。願はくは神明佛陀、慈悲のまなじりを垂れて、この盛遠の荒行を守らせ玉へ。

渡。衣川。(合掌)南無阿彌陀佛々々々……

法然。まづ、袈裟御前の廻向をいたさう。左衛門尉殿。御仕度を願ひまする。

渡。かしこまりました。

渡と衣川の女房と小机を持出す、袈裟の首を首桶から出して、その上に据え、香爐を前に置く。

法然上人は靜かに、机の前に坐はる。渡、盛遠、衣川の女房の三人はその後に坐つて、合掌する。

法然。袈裟御前。御身の心の光は、すべてをあますところなく裁いて、人の世の秩序がまた正しうなりましたぞ。御安心なされい。(合掌する。)

靜かに幕

卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區通神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　新町通七條南入	大盛社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◎定價 金八拾錢郵税金貳錢五厘（海外郵税貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢	以上郵税共
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號増刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

廣告取次所

博報堂　萬年社　告天社　正路喜社
帝國通信社　弘盛社　三誠社
金蘭社　信頼社　一星社

本號に限り　特價金壹圓

送金注意

一誌代郵税　は一切前金とす前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金　口座番號は**東京三四番　長野三二〇五番**なり
一郵券代用　は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割増にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雑誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正十三年二月廿一日印刷納本
大正十三年三月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ內ビルチング七階七百七十六區
中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二六（當分不通）
　　　牛込五〇八九
電信略號コリロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

郵税金二錢五厘

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co, Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可